THE CENTRAL REVIEW

中央公論

『現實世界の把握』號

六月號

第四十四年第六號　第四百九十七號



皮膚病退治 テーム水

誇るべき三大作用

◎殺菌作用
◎消毒作用
◎收斂作用

皮膚病の菌虫を殺滅し痒い痛いの悩みを去る
患部の毒素を分解消滅し内攻しないで毒が消える
患部をだん〳〵小さくして不思議な程早くヨクなる

特長

◎しまず◎いたまず◎内攻せず◎つけて汚れず◎目に立たず◎用法簡便で早くヨクなる

テーム水藥價

三十錢、五十錢
一圓、二圓、
送料 内地 六錢
全國到る處の藥店にて販賣す萬一品切の節は左記發賣元へ御注文下さい

迷信打破

皮膚病を治し切ると却つて良くないなどと舊時代の傳說に迷つて居る人が往々あるが殺菌解毒作用の特にすぐれた「テーム水」を塗けると皮膚病がヨクなる許りか健康を全うし精神まで爽快になる。

【主治效能】

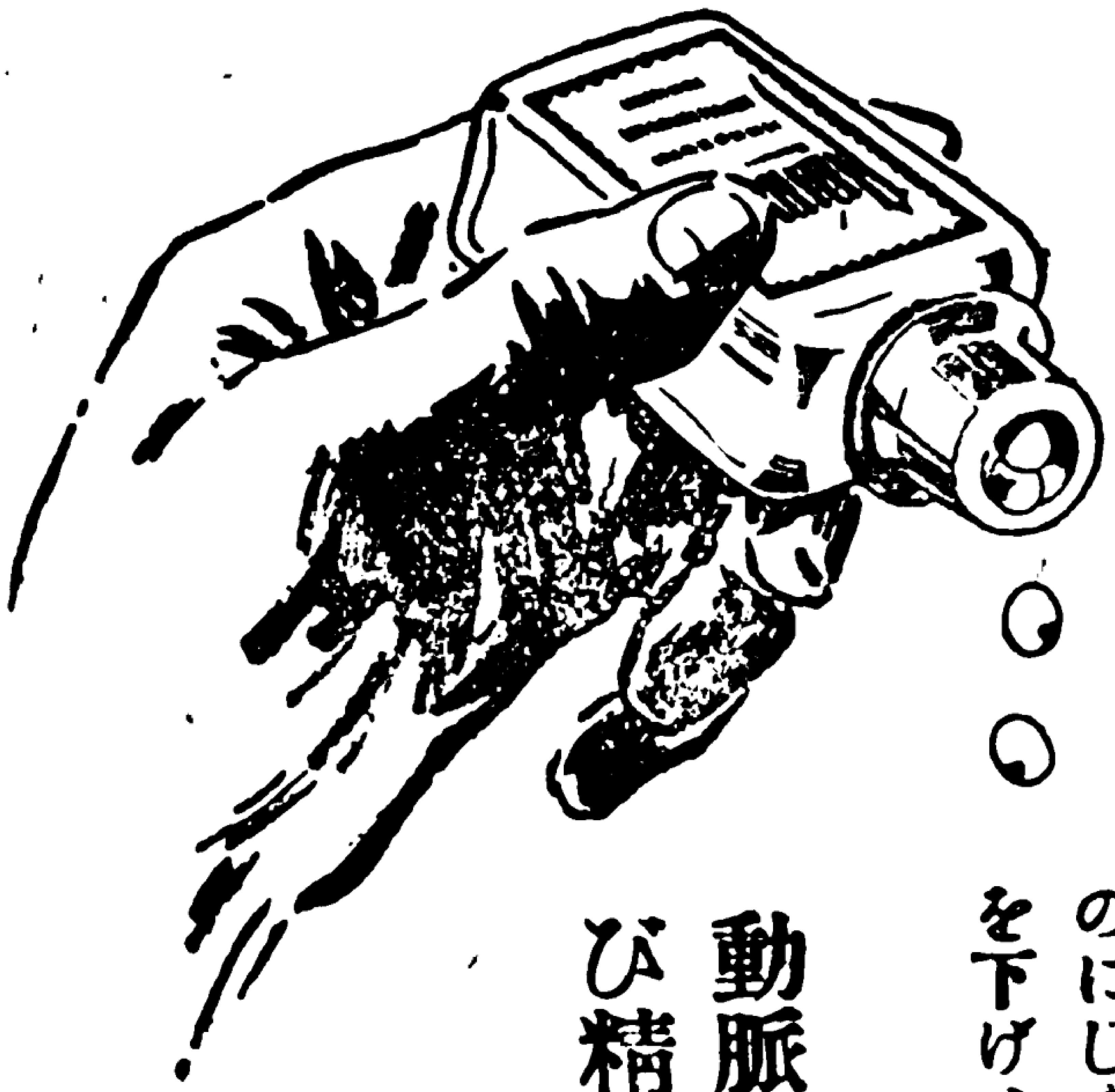
●たむし●いんきん●水虫●ひぜん●くさ●おでき●ただれ●かゆがり●吹出物●しらくも●はたけ●なまず●うろこ●にきび●そばかす●とびひ●脣肛門のただれ●藥漆のカブレ●濕疹●蚤蚊ぶと南京虫毒虫の刺傷●皮脂漏等皮膚病一切

發賣元

東京藥院

本店 東京市芝區田村町十八番地
電話芝二、八五番 振替東京六〇一〇〇番

支店 大阪市天王寺區石ヶ辻町廿四
電話南一、四六番 振替大阪三〇八一八番



高血壓にアニマザ

血壓を低位に保ち
早老及血管硬化を防止す

本劑は幼若動物の血管内膜及び中膜に存するホルモンを抽出せるものにして、その應用により血管緊張を除きて若返り現象を與へ、血壓を下げ、頭重、倦怠、眩暈、肩張り、不眠、耳鳴等の自覺症狀を恢復す。

動脈硬化症、高血壓症、初老期に於ける體力及び精力減退、腦溢血の豫防等に頗る貴重なり。

三〇錠……二圓四十錢　一〇〇錠……六圓八十錢　各地藥店にあり

獨逸オスナブルク臟器治療藥會社

總代理店　東京日本橋區本町　株式會社　田邊元三郎商店

A 208

岩波講座（第一次）

世界思潮

編輯者　三木清　林達夫　羽仁五郎

會員募集

〆切五月三十一日

内容見本進呈

（全國各書店に有り）

思想界の混亂と危機との絶叫される秋にあたつて、東西古今を貫通せる諸思想の流の關聯と統一とを懇切明快に解説せる本講座はまさに最も要望せらるゝところのものである。我等は玆に第一回の内容を整理修正して新たに會員を募る。更に第一回にも增す讀者の友情を心から期待する。

全十二巻内容

現代美術思潮	兒島喜久雄
現代科學思潮	阿部良夫

思想家

ダヴィデ	藤井武
釋迦	宇井伯壽
老子	武内義雄
孔子	藤原正
ソクラテス	出隆
墨子	幸田露伴
荀子	本田成之
孟子	武内義雄
莊子	武内義雄
プラトン	河野與一
アリストテレス	三木清
イエス	山谷省吾
パウロ	波多野精一
龍樹・世親	宇井伯壽
プロチノス	久松眞一
ベエコン	朝永三十郎
シェクスピア	土居光知
グロチウス	田中耕太郎
ホブス	金子鷹之助
デカルト	河野與一
中江藤樹・熊澤蕃山	西晋一郎
スピノザ	安倍能成
芭蕉	小宮豐隆
新井白石	羽仁五郎
荻生徂徠	川上多助
ニュートン	桑木嚴翼
モンテスキュー	宮澤俊義
ルソオ	平林初之輔
スミス	舞出長五郎

主潮

- 世界思潮　阿部次郎
- 西洋思潮　大類伸
- 希臘思潮　出隆
- 基督教思潮　石原謙
- 中世思潮　岩下壯一
- 文藝復興　林達夫
- 啓蒙思潮　矢崎美盛
- 浪漫主義　谷川徹三
- 東洋思潮　矢吹慶輝
- 印度思潮　宇井伯壽
- 支那思潮　津田左右吉
- 日本思潮　村岡典嗣
- 佛教思潮　椎尾辨匡
- 印度佛教思潮　木村泰賢
- 支那佛教思潮　境野黄洋
- 日本佛教思潮　境野黄洋
- 儒教思潮　武内義雄
- 支那文藝思潮　青木正兒
- 支那社會思潮　松井等
- 神道思潮　宮地直一
- 日本文藝思潮　岡崎義惠
- 日本社會思潮　西田直二郎
- 現代思潮　三木清
- 現代經濟思潮　小泉信三
- 現代政治思潮　吉野作造
- 現代法律思潮　田中耕太郎
- 現代社會思潮　長谷川如是閑
- 現代教育思潮　長田新
- 現代道德思潮　高橋穰
- 現代文藝思潮　茅野蕭々

- 現代哲學思潮　編輯部
- 現代宗教思潮　野々村直太郎

傾向と運動

- 舊約豫言者の宗教運動　高倉德太郎
- ギリシャ啓蒙運動　野上豐一郎
- 希臘哲學に於ける「有るもの」　西田幾多郎
- 波斯教思想　松本重彦
- 回教思想　赤松智城
- 羅馬精神　木村龜二
- ルクレチウスと科學　寺田寅彥
- アウグスチヌスの自覺　西田幾多郎
- 獨逸神秘主義　石原謙
- ポール・ロワイヤル運動　落合太郎
- ルネサンス美術思想　兒島喜久雄
- 西洋美術に於ける東洋的要素　矢代幸雄
- 「ところ」によつて異る藝術の特殊性　和辻哲郎
- 基督教經濟思想　高橋誠一郎
- ユートピア思想　羽仁五郎
- 佛蘭西哲學思想の一節　山內得立
- 佛蘭西に於ける經濟社會思潮　森順治郎
- 近世進化思想　小泉丹
- 社會學に於ける平等思想　高田保馬
- 無政府主義思想　森戶辰男
- マルキシズム　小泉信三
- 日本宗教運動　松本彥次郎
- 日本キリシタンの運動　太田正雄
- 日本人道主義　竹岡勝也
- 日本精神　紀平正美
- 現代印度思想運動　大川周明
- イギリス現代の政治運動　大內兵衞
- 現代露西亞法律思想　末川博

- アウグスチヌス　河野與一
- 聖德太子　辻善之助
- 智顗・法藏　佐藤泰舜
- 最澄・空海　花山信勝
- 法然　矢吹慶輝
- 親鸞　金子大榮
- 榮西・道元　衞藤卽應
- 日蓮　姉崎正治
- ダンテ　阿部次郎
- レオナルド　兒島喜久雄
- マキャヴェリ　羽仁五郎
- ルテル　藤井武
- カルヴィン　高倉德太郎
- 朱子　本田成之
- 王陽明　三宅雪嶺
- ブルノ　安倍能成
- ガリレー・ケプレル　石原純

- カント　小山鞆繪
- フィヒテ　桑木嚴翼
- ペスタロッチ　長田新
- ゲエテ　阿部次郎
- シュライエルマッヘル　石原謙
- ヘーゲル　小山鞆繪
- 賀茂眞淵・本居宣長　村岡典嗣
- コント　松本潤一郎
- ダーウィン及びウォレース　小泉丹
- イェーリング　末川博
- ニイチェ　三木清
- ドストエフスキイ　米川正夫
- トルストイ　米川正夫
- マルクス　岸本誠二郎
- レニン　大森義太郎
- 安藤昌益　狩野亨吉
- 福澤諭吉　田中王堂

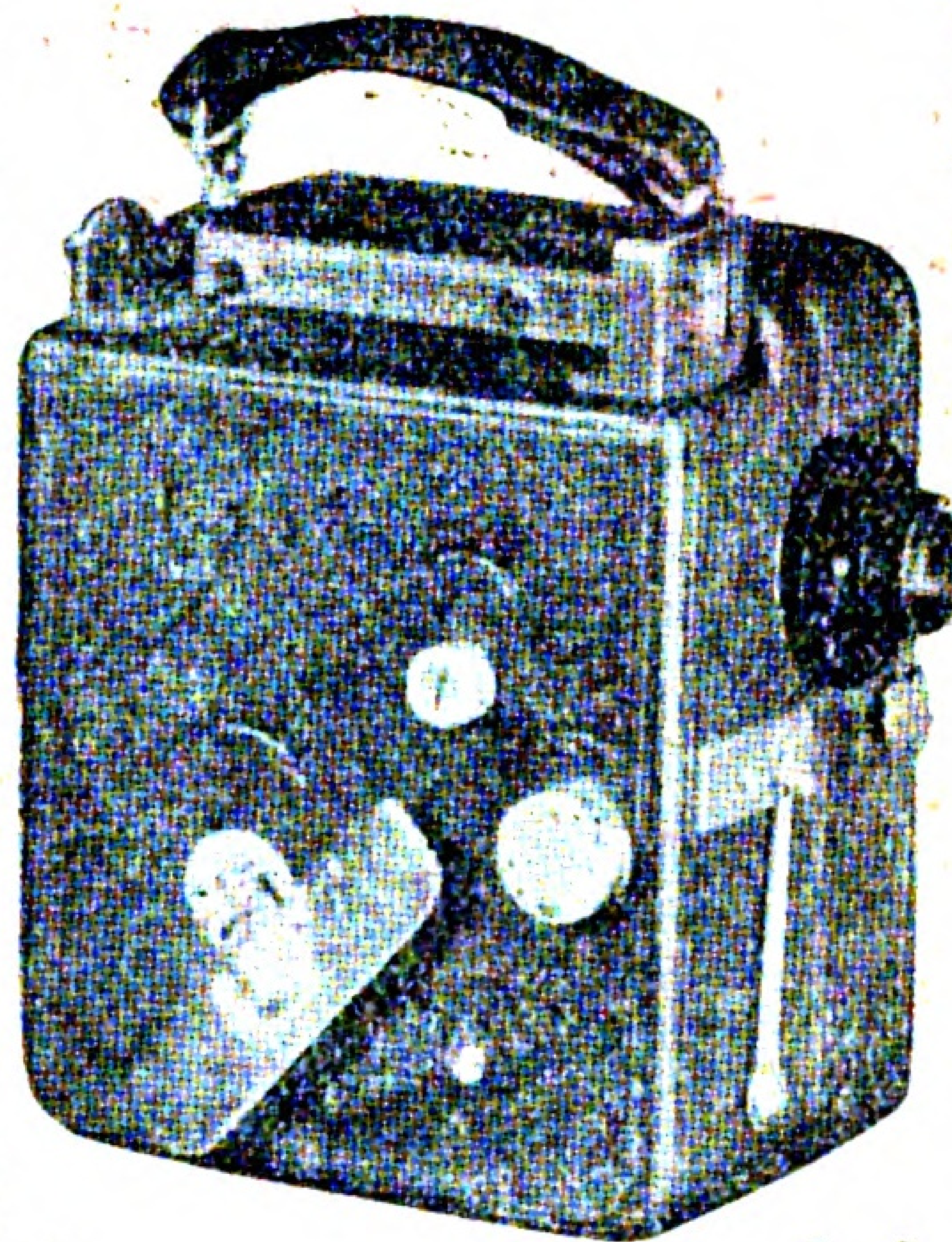
◇全十二册。會員にのみに頒ちます。
◇配本。昭和四年六月より昭和五年五月迄。
◇申込期限。昭和四年五月三十一日。
◇申込方法。右期限迄に豫約申込金壹圓五拾錢を添へて御申込下さい。申込金は最終の會費に充當します。
◇體裁。菊判。紙裝。九ポイント。毎册平均四三〇頁。
◇會費、送料。第一回會費は五月末日迄に
　毎月拂　一册　壹圓五拾錢
　一時拂　十二册　拾六圓五拾錢
　送料毎册　市內六錢　地方十二錢　臺樺滿鮮十六錢

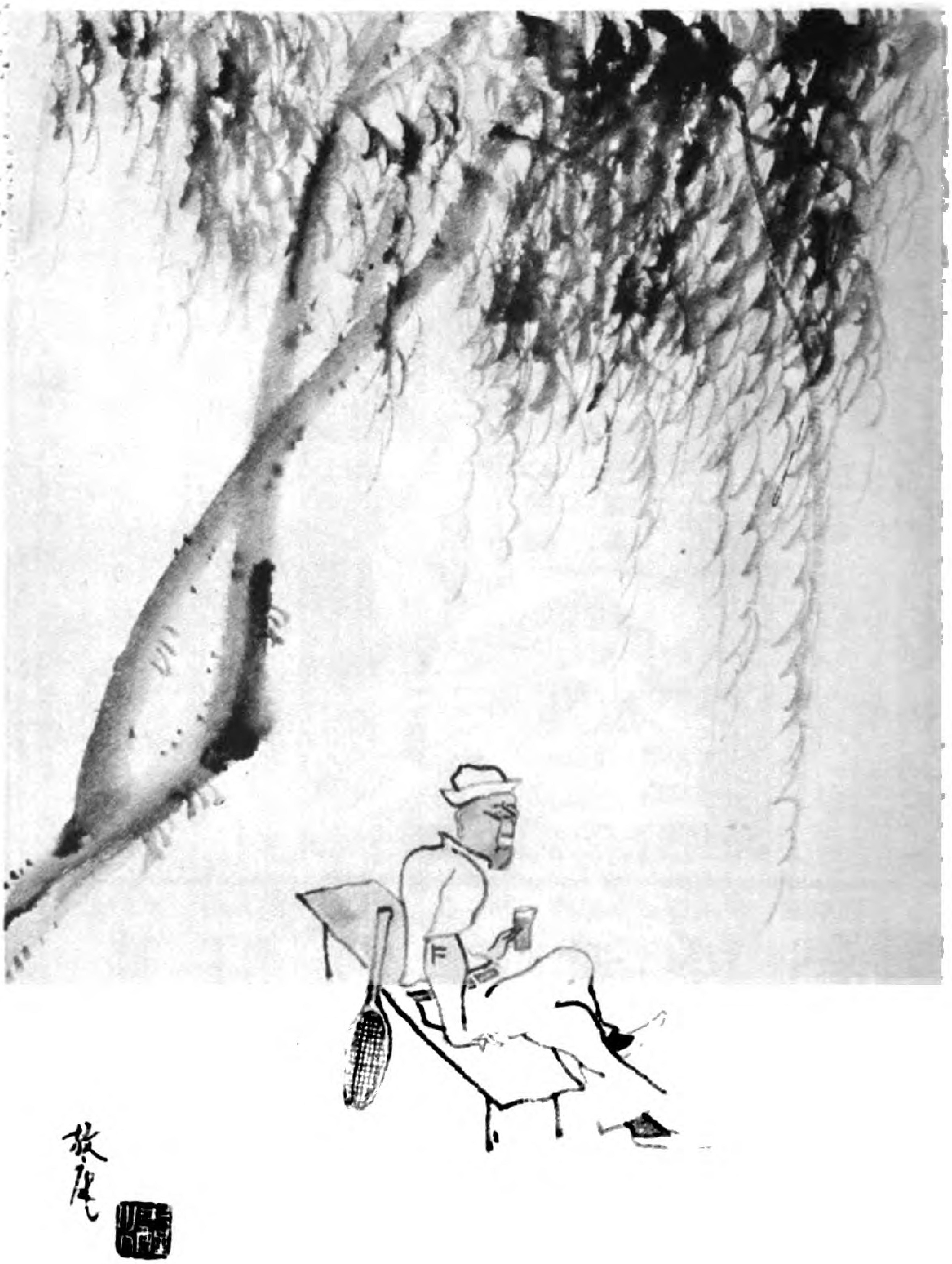
岩波書店

東京神田南神保町
振替東京一九五四八
電話九段　二一〇八　二一〇九　一〇二三　一二八一　二六二六


寫眞材料界の權威
Agfa
アグファを お薦めします……
ロール・フイルム
フイルム・パック

午前零時の文明





休息　　小杉放庵筆

民衆化されたる禪學の精髓！平易深刻な大衆的修養書！

釋宗演全集

門は開かれた！人生の祕義に參じ自然の妙趣に徹せんとする人士は來れ!!

宗演禪師は鎌倉圓覺寺派の管長として高德博學一世に鳴り、參禪求道の士常に門前市をなしてゐた。本全集は禪師が生前萬人大衆の爲に禪の奧義處世の要諦を道破說法せられた講話もの並に遺墨の全部を輯錄したるもの萬人修養の寶典であり社會講話の活資料である。

- 第一卷 禪學大衆講話
- 第二卷 観音經講話
- 第三卷 碧巖錄講話
- 第四卷 碧巖錄講話
- 第五卷 無門關講話
- 第六卷 禪海一瀾講話
- 第七卷 金剛經講話
- 第八卷 印度巡錫記
- 第九卷 支那巡錫記
- 第十卷 傳記遺墨集

內容見本贈呈
實物全國書店にあり
締切 五月卅日

東京麴町
平凡社
振替東京二九六三九

申込金 一圓納めきり
會費 一圓五拾錢（一時拂）拾五圓
送料各拾四錢 東京市內六錢
全十卷 一冊一圓半

田中内閣の唯一功績

——（卷頭言）——

田中内閣の功績などと云つたら人が笑ふだらう。悪政の方は數へ立てれば際限がない。馬鹿に公平振つて強いて功績とでも云ひ得るものを探して見ると唯一つある。そは下院に多數の味方を擁する以上何と言はれても辭職するの必要はないと云ふ憲政上の重要原則を事實の上で擁護して呉れたことである。

尤も我々國民は此上一日も田中内閣の存續を冀ふものではない、何ん時倒れても一毫一末の未練をも感じないのであるが、さればとて強て之を倒すが爲に憲政の機構を紊亂する樣な方策の採らるることには亦極力反對するものである。何と諭しても聽かぬものは擲るより外に仕方がないと云ふは、本人を誡むる言葉としては一應の理窟もあるが、之に基いて直に陰謀や直接行動に因る内閣倒壊策動を容認せんとするのは謬りである。田中内閣の失政は實は此理由からでも民政黨あたりの妄動を排斥し得ぬ程天下の信望を裏切つて居るので、世人はその速かなる倒滅を待望して動もすれば其由來する所の如何を問はざらんとするも、陰謀と直接行動とだけは憲政の逆轉として嚴に之を警戒したいと思ふのである。

田中内閣の存續に由る第一の而して最大の被害者は國民だ。近く政權の廻り來るべしとの淡い期待の下に覺束なき結束を維持して居る民政黨に取ても、現内閣の此上の存續は成る程その土崩瓦解に導く恐れのある脅威には相違なからう。政友會に對立する牽制力としての民政黨の頽勢は、或る意味に於て好もしからぬ現象ではあるが、既成政黨の掛引に本來何の望みをも繫けぬ一般國民の立場としてはそんな事はどうでもいゝのである。たゞ我々は政府側の誘に應じ利權と節操との交換に依て濫りに黨籍を變更する夫の賤むべき議員等の氏名を銘記し他日之に嚴しい制裁を加ふるを忘れざるを以て足れりとする。

我々は下院に擁する「多數」なるものの不義の所産なるの故を以て現政府に道德的の反省を要求したい。反省の實を現はす方法としては一方に總辭職があり又他方に議會の解散がある。孰れの方法を採るかは政府の裁量に任せるとして唯此儘に濟まされぬことだけは篤と考へて貰ひたい。併し何と云つても今の所あの儘居据る意圖らしいから、我々國民としては殘念ながら次の總選擧を待つより外に途はないのかも分らない。而して待つに堪へざる程の不滿を轉じて國民相互の開導啓發に力を注ぎ次の選擧で見事に多年の溜飮を下げるを得ば、こゝ暫くの隱忍も亦まるで無駄には了るまい。

若し來るべき選擧に於て國民の志望が正しく表現されその示す所の結果に基いて内閣の更迭を餘儀なからしめたとせば、今日の田中内閣が石にかぢり付いても其地位を離れなかつた事が始めて有意義なものになる。由て以て爾後永く陰謀其他に由る倒閣策動を封じ得べきを以てゞある。

この意味に於て田中内閣今日の態度は誤つて或は憲政史上の一功績となるかも知れない。但し其功たるや不義を逞うして下院議員の節操を蹂躙し且又貴族院の面罵を忍び樞密院に見苦しき叩頭を續けて始めて擧げたるものなるを思ふとき、丁度女郎になつて親の難儀を救つたと云ふ話を聞かさるると同樣、有り難いと云つていいのか迷惑だと云つていゝのか分らなくなる。それにしても田中内閣の功績と云ふ樣なものは強て探して見て此外に一寸見當らぬのだから致方はない。

中央公論



第四十年第六號
六月號
四百九十七號

イギリス總選擧の展望

大内兵衞

議會制度による政治的支配と云ふものは、被支配者の總意による支配と云ふ論理に立つてゐるものである。この論理は眞實には甚だたわいのないものであるのかも知れないのだが、一應は尤もらしく聞える論理である。そしてかう云つたやうな抽象的な『政治教育』を多分に受けてゐる現代人は、そのことのために却つて彼等の被支配的地位の現實をば正直に

見る能力をもつてゐないのである。それ故に彼等に對して總意による政治的支配の極めて微細な機會が與へられるやうなことがあれば、彼等はその度毎に、その機會が値するに比しては無暗に不當な興奮を覺えるのである。昨年の「普選」による總選擧に日本人がした興奮もそれであり、昨年の大統領選擧にアメリカ人の馬鹿騷もそれであり、今年の昨今イギリス人がやつてゐる『清き一票』の投け方に對する大袈裟な掛聲も亦それである。そしてその掛聲が日本にまで反響するとき、日本の支配者乃至は被支配者の意識――要するに何等かの政治意識も多少興奮的に反應するものと見え、本誌のK君は、私にまでこの機會における『感想』を徵して止まぬのである。私は、敢て斷るまでもなく、イギリス帝國の被支配者であると云ふ自覺や希望やをもつものではない。それ故にイギリスの選擧について何等か興奮を以て語るべき感想を持ち合せてゐる次第ではないが、乞はるゝまゝに、ともかくも、遠方からの雜觀を述べよう。

一

帝國主義イギリスは一九二四年において、その資本主義の長子國家としての世界における「特權」を維持すべく、「力」の政治を要望してボルドヰンをして國政の舵手たらしめた。それは勞働黨內閣の無力に對する反感でありその內閣の政策に對する不信の結果でもあつた。

それから四年半の成績は、ボルドヰン內閣は相當の行政的手腕を有するものであることを示した。わけても、それは彼等をして政治に立たしめた資本、ことに國際的資本の利益のために、そのよき保護者であることを實證した。金輸出解禁による金本位制の確立と對ロシアの外交斷絕は、この意味での彼等の政治の着手であり、この二政策を因緣として起きた炭坑ストライキ及びそれにつゞいたゼネラル・ストライキに對してとつた彼等の狂暴な彈壓政策は、彼等の努力のクライマックスであつた。それより後、彼等は勞働組合法の最も反動的な改正を實行した。そして彼等は一方この高壓力を利用

しつゝ他方勞資協調の旗幟をおしたてゝモンド(メルシエット卿)に喇叭を吹かせて勞働者團體をさし招かしめ遂に勞働階級をも産業合理化の運動への協働者たらしむに成功した。また、地方産業の發達のためには地方稅制の改革をもなし、大資本のためには所得稅率を減じ、重要産業のためにはいろ〳〵の關稅を高めることにも成功した。これほどの治績を示したことであるから、少くも保守黨自身の解釋によれば、今回の政戰に對しては今更別に目新しい政綱をかゝげる必要がないのである。ボールドキンは云ふ、「保守黨は不言實行を以て本領とする、從つて吾人は實行出來ると確信する政策を國民に向つて約束するものであるから、その政策は至つて穩健なものである。吾人は英國の産業の立直しをする政策をつゞけて行くつもりである」(東京日々、四月二十日特電)と。これより前本年一月にも彼はウエルベック・アベーで「安全と確信と繁榮とにかけては、吾が黨成立以來着々としてその實が上つた」と云つてゐる。そしてまたビウドレーではかうも云つた「過去四年の間に吾々はたくさん種を蒔いておいた、今後その果實が獲られるに相違ない」と。

かくの如く保守黨は過去の治績に對する確信と自負とを以て立ちつゝあるけれども、總選擧が目前に迫るに從つて、彼等は選擧民の心を氣にしつゝ所謂選擧對策を弄して不當に人心の興奮を利用することも忘れない。その證據としては、かの女子參政權の徹底的擴張が、本來かゝる改革の反對者たる保守黨によつてなされたことをあげれば充分であらう。これは選擧權擴張を自らの手によつてやることによつて自らの反動性を糊塗するイギリスのトーリーの百年來常套の故智だ。この外、藏相チャーチルが、今年の豫算演說においてイギリスの地位を說明して「米國が驚異的に發展してゐてもロンドンは依然として世界金融の中心である」と云ひ、あくまでも家愚の歡心を買つたのは何のためであらう。また彼が茶と砂糖の稅率を下げることを聲明したのは何のためであらう。これには、曾て『朝めし自由(フリー・ブレックファスト)』のスローガンによつて勞働黨が開拓した發所のための政治意識を右へ動かして見たいとの希望が藏されてゐないだらうか。そも〳〵彼が突如として炭坑地方に對して窮民救助の大運動を聲明したのは何のためであらう。かゝる莽式な社會政策の實效はどうあらうとも、今や眞

に饑餓に瀕してゐる三十萬の炭坑地方の家族にとつて、これが三年前にさし向けられた劍と鐵砲とに比しては溫情の表示と見えることであらう。

しかし、以上のやうな『自信』と『對策』とにかゝはらず、多くのイギリス通信は、この選擧において保守黨には人氣が割合に少いと云つてゐる。ラウンド・テーブル誌(一九二八・一二月號)さへ問題は如何ほどまで保守黨がいまゝでの議席を喰ひ止め得るかにあると云つてゐる。そは、何故であらう。人心が新たなるを得ないからであるとも云ひ、政治に倦んだからであるとも云ふ。勿論その通りではある。しかし、私の見るところによれば、イギリスそのものゝもつ沒落の運命の死重はあまりにも大きい、そしてそれはイギリスの傳統的政治勢力を以てしては、——たとへ特に『力』の政治にその特色を有するボルドキン・エンド・コムパニーのそれであらうとも——最早如何ともし難いのである。

二

帝國主義イギリスの運命に關する現段階の觀察についての學者の意見はもちろん區々である。エドキン・キヤナンの如きは『エコノミック・ワールド』、その最も樂觀的な見方を代表してイギリスの社會狀態は戰前に比して遙に好化してゐると云つてゐる。之に對してヴアルカの如きは、イギリスが沒落の過程にあることは既に自明のことであり、たゞ問題は、この過程の中における安定そのもの、性質如何、その不安定の原因たる矛盾の銳化如何、またその一時的變態的景氣の可能如何のみにあるとしてゐる。『コルキン報告書(リポート)』でもよい、最近の『バルフォア報告書』でもよい、乃至は自由黨の『イギリス産業の將來(ブリテンス・インダストリアル・フューチュアー)』でもよい、多少とも信賴すべき報告書によつて事實を檢するならば、ボルドキン四年半の政治の後と雖もイギリスの經濟は根本的には何等改善されてゐないのを知ることが出來るであらう。

こゝにはほんの二三の事實を語らう。四年半前に比してアメリカが經濟的に躍進しつゝあることも事實であり、ロシア

か經濟的に復活しつゝあることも事實であり、佛獨が鋭化した競爭者となつたことも事實である。そしてインドとエヂプトと支那とその他の植民地はイギリス帝國の地位を高からしめる狀態にないことも事實である。そしてこの外交方面こそはボルドキン政策の最も「力」を致した點であることも事實である。果して然らばボルドキンの政府が如何に强辯し、その支持者が如何に之を承認しやうとも、この事實が語る外交に對する不滿は之を如何ともし難いであらう。更に内政の方を見れば、久しく緩和することなき慢性的な不景氣がある。たとへ人造絹絲、自働車、電氣器具、蓄音器、ラヂオ等一部産業の勃興はあつても、少くともイギリスの主要産業たる石炭、鋼、鐵、紡績の事業及び農業は、こゝ數年來何の改善をも示し得てはゐないのである。そしてこの慢性的不景氣の結果としてイギリスは巨大なる失業者群をもち、且つその存在は殆んど半永久的である。この事實は、資本家的政策そのものの生産性の最も雄辯なる否定、換言すれば「働きさへすれば食へる」と云ふ資本主義の最大敎義の破産の實證に外ならない。かくの如く對外的にも對内的にもその問題を解き得ない帝國主義イギリスの政治的無能の總結果は、社會が最も力弱き階級の苦惱と犧牲とを通じて、その社會全體の萎縮となつて表はれる。今や、全イギリスの人口が急調を以て減少する傾向を示しつゝあるのは、之を語る何よりの證據である。そしてその出生率はフランスにすら及ばないのだ。試に左表を見よ。曾つてイギリスの智識階級の「産兒制限」の事實を以て優等人種としてのアングロサキソンのために悲しんだラツセル、ウエブの如き人々と雖も、今や一層彼等の視野を擴大せねばならぬことに氣づくであらう。（人口一〇〇〇につき）

	出生	死亡
一九〇一―一九一〇	二七・二	一五・四
一九二一	二二・四	一二・一
一九二二	二〇・四	一二・八

一九二三	一九・七	一一・六
一九二四	一八・八	一二・二
一九二五	一八・三	一二・二
一九二六	一七・八	一一・六
一九二七	一六・六	一二・三

かくてこの事實の前にはさすがの保守黨もその政策的無力を告白せざるを得ぬ次第であるが、右に述べた如くこの由來そのものが不可抗的な事情である以上、保守黨をして政權を維持せしめてゐる者にとつては保守黨をしてなほ引繼ぎその『力』の政策を實行せしむるの必要は絕對的である。これ保守黨が益『選擧對策』を以て人心を興奮せしむる要ある所以であり、且つ、保守黨が不人氣にして、しかもなほ實力を有すると云はるゝ所以である。イギリスの政治に通ずるものはこの一應不可思議な事實の解釋を或はボルドキンの個人的人氣に歸し、或はそのマドロス・パイプの煙のユトリに歸し、或はアスター夫人以下の花やかなる活動に歸してゐる。傳統と手管と不當の興奮との渦卷は吾々をして容易に事實の眞相を捉へることを得せしめないけれども、ともかくもボルドキン內閣は不人氣の內になほその政權をもちつゞけるの多くのチャンスをもつもの丶如くである。かくてイギリス社會全體の萎縮が漸次に實現されやうとも、ボルドキンを政治的役者とする金融資本は、なほその特權維持と自己完成の可能とを期待してよいのである。

二

一九二三年だつたらとにかく、一九二九年においては、保守黨の相手は自由黨ではなくて勞働黨だ。これはこの前の選擧のときの投票數が保守黨七百三十八萬票に對して勞働黨が五百四十八萬票であつたのに、自由黨が僅かに二百九十八萬

票しかなかつたことによつても、ほゞ確定的である。この外になほ、その後補缺選擧の成績は自由黨の進出を語つてはゐるけれども、勞働黨のそれは一層著しいと云ふ事實もある。そしてこの前のときの成績においては小選擧區制の結果として勞働黨は投票數に比して非常に少い割合ひしか議席を得なかつたと云ふことをも考へ合せねばならない。そこで、自然の發達傾向において著しい變化が起らぬ限りは、今次の選擧においては勞働黨は現在の議席一五一を幾分增加し得ると見るのが常識である。

一九二三年における勞働黨のロンドン大會においてウエブは「入口に立てる勞働黨」の地位を論じてその投票數の增加を豫想し「凡そ一九二六年には、勞働黨は全英國における投票數の過半數を占めることは明らかである」と云ふ豫言をした。この豫言よりも早く勞働黨の首領マクドナルドは「召に應じて參內」することゝなつたが、昨年のバーミンガム大會においては、來るべき總選擧の結果必ず第二次勞働黨內閣が出來ると云ふ確信の空氣がみなぎつてゐた。そしてスノーデンは勞働黨は八百萬票を得て第一黨となると傲語した。豫想はあくまでも豫想であり、スノーデンが近い將來において再び大藏大臣の印綬を帶びるやうになるかどうかは、なほ一つの問題であらう。それにしても、勞働黨の人氣は大したものだと云ふが本當であるらしい。

いまこれを本當として、この勞働黨の政治的人氣は何に由來するものであるかを考へるに、それは、保守黨の不人氣の直接の結果であり、また、自由黨の不人氣の直接の反面でもあり、從つてまた勞働黨穩和化の結果であらう。

戰後において、勞働黨が社會主義化しながらその勢力漸次に旺盛となり、急激に政權に近づいたとき、本來ブルジョア的なイギリスの社會常識はたしかに革命の恐怖をもつてゐた。しかし、九ケ月の勞働黨內閣は、何をし得なかつたにしろ勞働黨そのものは優柔不斷の政黨であり、社會制度の根本に關しては何等改革の意思と實力とを有しないものであると云ふことだけは、たしかに之を天下に實證し得たに相違ない。しかもなほこの點に關して殘存した多少の懸念を意地惡く利

用したものが、かのジノビエフ書簡事件一件であつた。そしてこの事件の處置に對する周章狼狽を通じてマクドナルドの一派は如何に世界プロレタリアートの味方でおらぬかを更に入念に立證したのである。その後勞働黨のこの穩健着實性を最も雄辯に立證したのは、かの一九二六年のゼネラル・ストライキであつた。云ふまでもなく、あのストライキはイギリスにおける資本家的反動のクライマックスであり從つて保守黨の反動政策そのもの丶クライマックスでもあつたのだから、若し勞働黨にして眞に勞働者階級の要求を代表し、眞に保守黨の對立政黨であつたとしたならば、當時彼等が爲した議會における討論と內相官邸における妥協との外に、なほ多くの爲すべきことがあつた筈である。しかるにこの際彼等は勞働者階級の大なる反感を買ひつ丶も徹底的にその穩健性を立證したことは周知の如くである。そして今や如何と云ふに勞働黨はかのモンド・ターナー會議への參加を公然と認め、以て資本家的合理化へと合流するやうにまでなつてしまつてゐる。かくてイギリス勞働黨をその「危險」の故に恐怖するものはないのは當然である。そこに或意味においての人氣の原因があるのである。

今次のイギリスの選擧戰において勞働黨を彩るものは、左手に聖書を手にしてするマクドナルドの演說會開會の辭であり、二三の讃美歌によつて階級鬪爭の否定を說敎するスノーデンの財政講義であり、そしてまた、カーゾン卿の愛孃モースレー夫人の金をいとはぬ夫君應援であり、なほまたボンフィルド孃のかの有名な人道的熱辯等々である。彼等の發する高聲は如何に調子が高からうとも、世人は、彼等によつて實際臺閣に送らるべき人物はどう云ふ人々であるかを知つてゐる。それはヘンダースン、トーマス等々曾つてイギリスの帝國主義戰爭のために偉勳を樹てた人々なのである。

四

イギリス勞働黨が、若し右のやうな人々を役者として臺閣に上るならば、何を爲し、何を爲さぬであらうかはほゞ明白

である。即ち、その最大限度は昨年バーミンガムの黨大會で採用に決した新綱領『勞働と國民』の示すところである。それはその前の綱領『勞働と新社會秩序』に比して非常に具體的であると共にすべての急進的なものを切りすてたものである。それは勞働組合法の撤廢、勞働團結權の復活を要求してはゐるけれども、曾つての約束であつた炭坑國有の即時實行の主張はない。それは五百磅以上の收入あるものに對する特別所得税設置は要求するが、資本課税は口にしない。それは大藏大臣、商務大臣、實業家、勞働者を代表する公設機關による英蘭銀行の管理は宣言するが所謂基本的産業の社會化については、賠償主義をとると云ふ外、その方法は之を明示しない。それ故に一言にしてこの綱領を評すれば、これは、國家資本主義乃至は集産的改良主義の政策カタローグである。タイムズ（一九二八年七月七日）の評に曰ふ。「これは二重仕掛のカラクリ絲で並べてあるショウ・ウンドウの商品だ…。店の番頭は申します、『諸君！　品物を窓から出すのには時間がかゝりますよ。まア差當りはこの店先に並んでゐる結構なのをおもちなさいよ』と。そのウヰンドウの中に飾つてあるのが社會主義の理想、その店先に並んでゐるのは自由黨の代物である」と。

勞働黨のこの資本主義黨への變質は、曾つて勞働黨の智識的指導者であつた獨立勞働黨の凋落にも表はれてゐる。第一次勞働内閣における閣員の多數はこの歴史ある社會主義政黨に屬したのであるが、彼等は權力者たる地位に立つに及んで全くこの黨の立場をすて只管に勞働黨の主義主張のみに追隨した、そして自然勞働黨内における獨立勞働黨の存在の意義は失はれたのである。（ディ・ゲセルシャフト・一九二九年十二月號・ヴエルトハイマー所説）そこで獨立勞働黨自身の方においても、多年の首領マクドナルドを批難するものが出來、スノーデンを追拂つてしまひ、最も左翼的色彩あるマックストンをその黨首としたのである。云ふまでもなく、之によつてこの黨の勞働黨内における勢力を復活し、今や一切の精神を喪失せる勞働黨そのものにイギリス流の社會主義の精神、即ちハーデーの所謂「不斷の反撥的運動」と「階級的自主の運動」とを生かさんとするの意圖であつたのである。この意圖は昨年六月におけるかのクック、マックストン二人連名のマニフエストとなつて表はれた。マックストンは獨立勞働黨の闘士的首領であり、クックは三角同盟崩壊後の坑夫聯盟の書記長に

して、あの大ストライキのリーダーである。かゝる有力なる二人の蹶起は一時異常のセンシユーシヨンを起したのであるが、その後の經過によればかくの如き運動はほんの線香花火に終つたらしい。過日イースターに行はれた獨立勞働黨のカーリツスルの大會では、マツクストンは例の如く氣焰をあげて、「租税こそ社會主義的進歩の鍵であり、社會黨の大藏大臣たるものは不勞所得に重課してこの上二億五千萬磅を得、之によつて地代と利潤と利子とを社會に返還さすべきである」などと云つてるけれども、(ニユー・リーダー、四月五日號)かくの如き意見すら、今日の勞働黨に對してはあまりに過激であるもの丶如く、またかく云ふ獨立勞働黨それ自身既に危機にあるもの丶如くである。

かくて勞働黨の選擧のスローガンは先づ何よりも當面手近な現實の問題『失業者救濟』であるのは當然である。四月四日、ロンドン・聯合通信は云ふ、「あはよくば次期内閣を組織せんと意氣込む勞働黨が振りかざして總選擧にのぞむ綱領は、…トーマスによつて發表された。…勞働黨は英國現下の最大問題たる失業者救濟に全力をそゝぎその第一具體策として義務教育年限を一ケ年間延長して勞働民衆に對する新しい學校卒業者の増加をふせぎ且つ六十六歳以上の勞働者に對する養老手當を増加して約三十五萬の老勞働者を隱居せしめる、かくするときは六十萬人の失業勞働者が職を得ることが出來る」

五

今回の選擧において最も大なる運動を起し、且つ最も大聲をあげるであらうものが自由黨であることは疑がない。それはたゞに權謀雄略並びなきロイド・ジヨージなる老政治家がアスキス亡き後の自由黨の獨裁權を恢復したからの故のみではない。それは戰時を通じて保守、勞働兩黨の上に君臨した一九一八年までの光榮の昔を今になすことは、この黨にとつてはこの機會を措いてはまたとないと云ふ事情からである。

自由黨は昨年『自由黨産業調査委員會』なるものを作り『イギリス産業の將來』と云ふ報告書を出した。それはイギリ

ス現下の經濟調査であると同時に自由黨の主義政策の綱要であるが、これを讀む者は何人も自由黨は最早自由主義に立つものではなくして國家資本主義に立つ政黨であることを疑はぬであらう。（「社會科學」・三月特輯號所載・拙稿）。卽ち、自由黨の政策の要點は、第一に、産業組織（オーガニゼーション・オブ・ビズネス）においては獨占の程度生産物の五〇%以上のものは半公企業を以て經營すること、第二に、勞資關係（インダストリアル・リレーション）においては協働主義により最低賃銀の保證と調停機關の完備と勞働者の企業參加を認めること、第三に、國内資源の開發（ナショナル・デベロープメント）については「國民資源局」（ボールド・オブ・ナショナル・インベストメント）と「國家資源開發委員會」（コムミチー・オブ・ナショナル・デベロープメント）とを通じて大々的統制を行はんとすること、等々にある。果して然らば今や自由黨の自由放任主義（レーセフェール）は國家資本主義へ轉化したものと云ふの外なくこの轉化の過程において自由黨は終に保守黨又は勞働黨に對立するものとしての根本的立場を失つたものと云はねばならない。今の自由黨の政策は、殆んどあらゆる産業を權力によつて獨占へと導くと同時に殆んどあらゆる小商工業及び小農をも現狀のまゝに維持せんとするものであり、それは、國權によつて勞働條件の維持改善を計ると稱すると共にあらゆる産業の利潤をも減却したくないと云ふのである。そこで彼等にとつて何よりも必要となるものは、故なくして湧き出ずる無限の資金か、然らずば少くとも眼前をゴマかすに足るデマゴギーの言葉であらう。

この戯畫的立場を最も端的に示すものは、ロイド・ジョージの失業救濟策なるものであらう。同黨は本年三月その案を發表した。そのパンフレットの表紙には、「吾々は失業問題を解決し能ふ、ロイド・ジョージがそれを保證する！」と書いてある。この驚くべく自信ある案なるものは、要するに、政府が金を出して橋と路と家と電話とを大に作り且つ農業を大に保護すると云ふ計畫である。之によつて約六十萬の勞働者が職を得 これによつて失業者は一年の内にノルマルな狀態、卽ち、五十七萬程度まで減少すると云ふ。之に要する金額は一億四千五百萬磅！ これを如何に調達するかと云へば、道路その他の設備より來る將來の收入を擔保として起す公債によるのだ。とこれはまさに、一世紀の昔フランスの財政學者ガルニエーが提出した最も得意の失業救濟策と同一である。

自由黨は過去におけるその長き在職の當時において最も多く貴族を製造した政黨である。そしてまた最も選擧の軍資金

に富む政黨でもあると云はれてゐる。現在ロイド・ジョージの手許に保管せらるゝところの軍資金は一千萬圓とも云ひ或は二千萬圓と傳へられてゐる。眞僞はもとより吾々の與り知るところではないが、選擧戰において自由黨が最も花々しき戰を爲すであらうとは多くの人の豫想するところである。それ故に保守黨と勞働黨との攻擊も亦右の失業對策に向けらるに相違ない。既にチャーチルは四月十五日の豫算演說でこの案を批評して云ふ「政府は過去四年間において國家の債務を一億七千五百萬磅だけ減少した。この額はロイド・ジョージ氏が來るべき總選擧に勝たんがために提案してゐる二ヶ年間の公共事業費と殆ど匹敵するものである、卽ち、國民は餘程注意しなければ、吾々として漸にかち得た國民の乏しき貯蓄を見世物師の休日を作るために犧牲とせられるであらう」と。

要するに自由黨をめぐる選擧の興味は、右のロイド・ジョージにふさわしき提案によつて、「健全なるイギリスの常識」なるものが如何に興奮させらるゝかにある。ロイド・ジョージは曾つては人民のための革命家として名を爲した人である。彼が人民に約束したものは一度は「人民には土地を(ザ・ランド・フォア・ザ・ピープル)」であつた。また一度は「戰爭をやめるための戰爭(ザ・ウオア・ツー・エンド・ザ・ウオーア)」であつた。そしてまた一度は「ドイツをして賠償金を拂はせろ(メーク・ジャーマニー・ペー)」であつた。そして尙一度は「貧民窟撲滅(アボリツシヨン・オブ・スラム)」であつた。今や彼は、「失業問題を解決し得る!」ことを天下に保證しつゝ、その政派の信を天下に問うてゐる。そして彼は今一度誓を立てることを忘れない。曰く、「余は常に約束を守つた(オールウエース・アイ・ケプト・ザ・プロミセス)」と。(本年三月二十一日、ボストン)。

六

以上、イギリスの總選擧を訪ねてその三つのキャンプを一巡した吾々は、なほ一瞥をイギリス共産黨に送るを至當とするであらう。それは各黨いづれもが五百名以上の候補を立てゝゐる今次の選擧裡に僅に、二十四名の候補しか立て得ない小黨である。

一九二〇年に成立したこの政黨は一九二四年までは勞働黨と不卽不離の關係にあつたのが、かのジノヴィエフ事件以來

勞働黨政府の方針に伴れて、勞働黨自身の態度も變り漸次この黨員を排除するに至つた。が、その後のゼネラル・ストライキに際しては、この黨は最も勇敢に戰ひ勞働黨の無氣力を罵倒した。その結果として共産主義者の勢力は或意味では非常に増大したが、彼等と勞働黨との關係は益險惡となつた。そこで勞働黨は敢然として共産主義者排撃の態度をとるやうになり、共産黨も亦獨自の立場をとるやうになつたのである。それ故この黨にとつては今回の選擧は、自己の黨の名においてする選擧の初陣であり義理にもその實力を實證せねばならぬ戰場である。彼等は昨年既に本部の忠告に從ひ「從來のイギリス共産黨の態度の混亂と不統一とを片づけ新しい形勢に應じ、新しいタクチックにより、プロレタリア大衆の指導に對する鬪爭に役立たん」と宣言した。今回獨立の候補者を立て勞働黨を敵としてこの總選擧に臨むのはこの主旨である。こゝに彼等の所謂現下の新しい狀勢とは、もし勞働黨が政府を占むるに至れば、彼等は直ちに國權を勞働者攻撃の武器とするであらうと云ふやうな狀勢を指すのである。そしてかゝる狀勢の認識よりして彼等の新しいタクチックが定められた次第であり、それによればなるべく多く獨自の候補者を立て、この選擧の機會を利用して勞働黨に對しては最も無慈悲な批判を行ひ、以て社會政策をふりかざして、その實資本家階級の更生を援助する勞働黨の假面を剝がうとしてゐるのである。

去る一月十九日からロンドンで開かれた第十回大會における報告によると、イギリス共産黨においては、その黨員の數は著しく減退して一九二六年の一萬から下つて三千五百となつてゐる、そしてその内部における統一についても亦疑問があるものゝ如くである。

何と云つても、共産黨は選擧のための政黨ではない、そして、今のところその實力においては、勿論選擧の興味を値するほど大きいものであるとは云へない。それ故にもしこの黨に關する現下の興味を求むるならば、その勇猛果敢なる鬪爭力であり、その一切の權威と敵黨の不徹底とに對して爲す政治的曝露そのものであらう。即ち、これによつて彼等が如何ほどまで勞働者階級の人心を捉へ、約束のために如何程の潜勢力を養ひ得るかにある。

七

さて、選擧の結果はどうであらう。

それに答へることを私が試みることは、私が賭博をやることである。今晩（五月九日）の東朝夕刊のロンドン特電に云ふ「七日取引所における豫想賭博によれば、保守黨は數日前よりも優勢であつて二七四、勞働黨は二四七、自由黨は八八である」と。

又或は問ふであらう。もし保守黨の多數が著しく減少したやうな場合には、勞働黨と自由黨とが聯立內閣を作るであらうかと。

私は答へて曰はう。それはロイド・ジョージが最も大聲をあげて否定したことであり、また多數の勞働黨の領袖連もまけずに否定したところであると。しかし、私は附け加へて云ふであらう。多くの言論家が既に默認するが如く、それはあり得べからざることではあるまいと。

何故に然るか。それは本質的に大差のない兩黨の立場及び政策から必然的に生じ得べき結論であることは上來指摘したところによつてほゞ明白であらう。しかも現實におけるイギリス資本の狀勢はこの兩者の協力を要求するかにも見える。卽ち、若し保守的反動的政策にして眞にイギリスを救ふに足らぬとするならば、殘されたる唯一の道は、國家社會主義又は國家資本主義に立つ開明的（エンライテンド）資本家的政策以前に差當りの道がないからである。果して然らば資本家的攻勢に對して消極的態度を持し、その實資本家のために合理化を完成することを擔當するに最適の當局は勞働黨を措いては外にない。また現在の負擔を將來にのばすことによつて產業振興の道を講ずることを擔當するに最適の當局としては自由黨を措いて外にない。かゝる意味において、萬一にも、近い將來に改良主義の波上にたゞよふ船の舵棒の前で、ラムジー・マクドナルドとロイド・ジョージとが握手するの光景を見るやうなことがあつても、吾々は敢て之を奇とはしないであらう。

さて、もう一つ、選擧の結果の結果は如何であらう。×

問題の要點は、恐くはそこにあらう。詳しく云へば、問題は、この選擧を通じて何がイギリスに齎されるであらうかにあり、帝國主義イギリスは如何に變革されるかにある。×

私の見るところ、イギリスの總選擧が示すいろ〳〵の兆候によれば、イギリスは今や資本主義の更に新しい段階へと入りつゝある。保守黨が勝つか勞働黨が勝つかは、たか〴〵、勞働者階級に對する直接の政策又は外交政策の局部的方面において多少の意義をもつ問題に過ぎない。いづれが朝に立つにしても、この老朽せんとするイギリスの資本主義の復興のために大なる努力を現すことは確實である。かくて彼等は老大イギリスを驅つて今一度世界的競爭の舞臺に馳驅せしめんとするものである。×

かくの如き私の觀察にして、萬一にも正しいとするならば、次の問題は、かくの如き方向をとりつゝあるイギリスの進展はイギリスのもつ問題を解くものであるかと云ふことにあらう。歷史の進展は、反動政治の破綻するところに表現し、反動政治の悲哀はこの破綻を救ひ得ぬところにある。そしてこの問題はイギリス自身がもつ內部の矛盾が解決せられるやの問題に外ならぬ。この大問題の一端をとれば、結局、かゝる方法によつて失業問題は解決できるかと云ふことになるであらう。私は恐れる。選擧時における興奮によつてイギリスの『健全なる常識』はかゝる可能を信じつゝあるのではないかと。しかし吾々のやうな傍觀者にとつては、それは全く選擧の興奮による幻想としか見えない。そして私は信ずる。吾々にしてもつと科學的に事實を分析して行くならば、そのことの不可能は、十分的確に立證せらるゝであらうと。果して然らば、かまびすしき總選擧そのものは如何なる結果に終らうとも、イギリスの社會は、現下のイギリスの政黨では解き得ないほどに大なる問題をもつものと云はねばならない。問題それ自身なほ發展せねばならない。(一九二九・五・九)

問題はそれを解くべき主體を求める。

共産黨功罪論

赤松克麿

共産黨は神か惡魔か

共產黨の出現と活躍とは、最近我國の社會的感覺に對して一大衝動を與へたやうである。所謂共產黨事件なるものは、大正十年八月に起つた曉民共產黨事件、大正十二年六月に起つた日本共產黨事件等を數へて來れば、昨年三月の事件は第三回目の共產黨事件である。我國の社會は、第一回目の事件に就いては、當時急進的勞働運動の目覺ましい活躍があつたために、またその規模が小であつたために、あまり騷かなかつた。第二回目の事件に就いては稍々騷いた。次いで第三回の事件に對しては深刻な衝動を感じてこれでは默つては居られぬといふ脅威的意識を生じたのである。時恰も政局に當るものは、近來の政界に於いて最も反動性を發揮しつゝある政友會内閣である。共產黨の惡印象は、笛太鼓の鳴物入りで國民の心理に刻み込まれた。かくして政府は、社會運動に關心の乏しい國民大衆の認識に對して、共產黨を以て惡魔的存在たらしめることに成功した。

資本主義の支持者に取つて、就中反動的資本主義者に取つて、共產黨はたしかに「惡魔」でなければならぬ。政友會閣僚諸公の言を借りていへば、彼れは天人共に許さざる極惡無道の存在でなければならぬ。反動主義者等に於いては、共產黨の邪惡性は、絶對的であり無條件的である。政友會内閣が巨大なる國費を投じて特高警察網を全國に張りめぐらしまた思想善導の諸設備を充實したのはこれがためである。强盜を捕へる警官が表彰される如く、政友會政府は共產黨といふ近代的國賊を檢擧し彈壓したことを以て、我黨の功名となし、得々然と手柄顏をしつゝあるのもこれがためである。極右の反動主義者と極左の共產黨との距離は、同じく日本人仲間といへども、正にアイヌ族と生蕃族との距離に似たものがある。

共產黨が反動主義者に取つて惡魔であるのに反して、彼れは一般の共產主義支持者に取つては、たしかに神でなければならぬ。唯物論を奉ずる共產主義者に對して、「神」といふ表現を用ひるのは聊か御門違ひのやうではあるが、共產主義者が共產主義に對して有する一種の宗教的情

の熱情を見るとき、「神」といふ表現を用ひることは強ち奇矯でもないやうである。聖書に對するキリスト教徒の如き態度を以て、レーニン主義を無條件に信奉し、これが實現のために有らゆる迫害と艱苦とを突破して邁進しつゝある共産黨は、一般の共産主義支持者に取つて、たしかに崇高なること神の如き存在でなければならぬ。

まことに共産黨は一方の人々に取つては惡魔であり、他方の人々に取つては神である。果して共産黨は惡魔であらうか。それともまた神であらうか。この二つの認識は、あまりにも懸け離れて居る。しかしこの絶對に相反する二つの認識は、現下の我々の社會に於いて、決然と對立し抗爭しつゝあるのである。我々はこうした兩極端の鋭角的な相剋狀態に對して、正しき社會進化のために、新らたなる一個の認識の光を投げる必要を認める。我々の認識の任務は、共産黨が神でもなければ惡魔でもないことを明かにするにある。我々は共産黨から神性と共に惡魔性をも剝奪して、もつと平凡に、そしてもつと科學的に、これが解剖と批判とを試みなければならぬ。これ私がこゝに共産黨功罪論を草する所以である。

共産黨の政黨的位置

共産黨は現代政黨界に於て如何なる位置を占めるものであるか。いふまでもなく現代の政黨は、資本主義を支持せんとする有産政黨と資本主義を變革せんとする無産政黨とに二大別することが出來るのであるが、共産黨は無産政黨の左翼派を形成するものである。無産政黨は全世界を通じての一般的現象として、右翼派の社會民主主義政黨（社會民主黨）と左翼派の共産主義政黨（共産黨）とに分れて居る。我國に於ける社會民衆黨は前者の型に屬し、大山郁夫氏を指導人物とする勞農鬪爭同盟は後者の型に屬する。尤も勞農鬪爭同盟が即日本共産黨であるとはいへないであらうが、勞農鬪爭同盟が合法的存在性を許されないところの假面的存在たる日本共産黨の外形的運動形態だと推定しても大した間違ひはあるまい。

無産政黨には社會民主黨と共産黨以外の政黨はあり得ない。若しありとするならば、それは一時的な變態的存在であつて、何等の繼續的根據を有し得ざるものである。かの日本大衆黨の如き中間政黨は一個の過渡的なる野合的集團であつて、一定の時間的經過によつて、それは當然社會民主黨と共産黨とに分解し去るべき運命を有するものである。尤も日本大衆黨の左翼には山川均、猪俣津南雄氏等を理論的指導者とする共産主義者の一群（舊無産大衆黨）が存在する。しかしながら彼等の把持する思想は共産主義であつても、彼等には共産黨特有の果敢なる直線的鬪爭力を缺いで居る。彼等が勞農鬪爭同盟から裏切者の如く罵られ、且つまた第三インタナショナルの大本山モスコウの指導部から共産黨としての公認狀を與へられないのも理由のないことではない。

前にも述べたるが如く、共産黨は無産政黨の左翼派の位置に立つものである。政黨に有産政黨と無産政黨とがあり、更にまた無産政黨に右翼派と左翼派とがあることは各國共通の必然的現象であつて、ひとり無産政黨の左翼派だけが、我國に於いて特殊の眼を以て見られ、特

殊の取扱ひされる筋合ひのものではない。旣に歐洲諸國に於ては共產黨は公然たる合法的存在となり、政黨社會に於ける一個の不凡的實在となつて居る。共產黨を一個の平凡なるそして必然的なる政黨的存在と考へないで、恰もこれに對して德川時代の異端邪宗の徒に對するが如き無批判的態度を取ることは、我國一般の社會思想の發達の低度なること、我國民衆の獲得せる政治的自由の小なることを示すものでなければならぬ。

私は無產政黨の右翼派に屬するものであるが、從來有產政黨と戰ふと共に共產黨とも戰つてきた。また現に戰ひつゝある。共產黨が無產政黨として多くの誤謬を有することは明かであるが、その誤謬はあくまで無產階級運動に對する無產政黨左翼派の誤謬としてこれを究明しなければならぬ。故に反動主義者の共產黨批判の如きは、我々から見れば、共產黨の誤謬以上に多くの誤謬を有するものである。我々はこの双方の誤謬を何れも淸算しなければならぬ。私がこゝに共產黨の功罪を論ずるのも、資本主義に對する共產黨の功罪ではなくして無產階級運動に對するその功罪を右翼派の立場から論じやうとするものである。

共產黨の遂げた最大の功績

無產階級運動から見て、共產黨の功績は現在よりも過去にある。そしてその過去の功績の最大なるものはロシヤ革命の成功であると信ずる。

ロシヤ革命は一個の異常なる社會的激變である。同樣の現象が同樣の過程を以て他の諸國にも起るとは考へられない。我國の左翼靑年の間には、若し將來我國が帝國主義戰爭に參加する場合には、直ちにロシヤ革命と同樣な革命が起るだらうと信じて居るものが少くないが、實にあまりに簡單なあまりに粗雜な觀察と云はざるを得ない。英國勞働黨のブレイルスフオードの說く所によると、ロシヤ革命の成功は三個の特殊原因によるといふのである。

(一)、ロシヤが自給自足的要素を多分に有する國家であつて、列國の經濟封鎖に能く堪え得たからである。ドイツやオーストリーの如きはロシヤよりも革命的條件が成熟して居たに拘らず、封鎖による饑餓の脅威のために革命に發展することは出來なかつた。英國はもつと多くの革命的條件を備へて居るけれども、同樣の理由によつて、恐らく斯くの如き革命は困難であらう。

(二)、ロシヤの大衆は農民であつて、革命は農民の支持を得たから成功した。ところで農民は傳統的に土地に對する渇望を有するものであつて、この渇望は產業的無產階級の要求よりは簡單であり、且つ遙かに實現され易いものであつた。こゝにロシヤ革命の容易なる成功性があつた。

(三)、ロシヤの支配階級特に資本家階級の革命勢力に對する抵抗力が弱かつた。彼等は遺憾なくその無能と無氣力とを暴露した。それはロシヤの資本主義發達の低度によるものであつた。ロシヤに於ける革命的內亂は可成り殘酷であり破壞的であり そしてまた繼續的ではあつ

たが、若し同じやうな闘爭が西歐諸國の强力なる資本家階級に對して行はれたとするならば、ロシヤのそれと比較にならぬ程度の激戰と破壞と損害とをもたらすに相違ない。こゝにもまたロシヤ革命の一つの容易性があるといはねばならぬ。

ロシヤ革命が多くの有利なるそして特殊なる條件の下に成就したことは明かであるが、しかし革命の原動力はロシヤ共産黨（當時のボルシエビキ）であつて、特殊的條件に惠まれたとはいへ、共産黨の果敢にして巧妙なる戰術により、世界歷史に於いて始めて一個の資本主義國家を崩壞せしめたといふ驚異的事績は、これを共産黨の努力に歸しなければならぬ。さて斯くの如きロシヤ革命の成功は、全世界の無産階級運動に對して如何なる影響を與へたであらうか。

社會運動に對する强烈なる心理的刺戟

ロシヤ革命の直後數年間に於いて、全世界の無産階級運動がこれによつて深刻なる衝動を受け、その前途に光明を發見し、從つてその運動狀態に潑剌たる活氣を帶びるに至つたことは蔽ふべからざる事實である。ロシヤ共産黨を樞軸とする第三インタナショナルの西歐諸國の目覺ましき進出、これに鼓舞された歐洲無産階級の攻勢は、たしかに歐洲資本主義更に進んでは世界資本主義を脅威したのであつた。しかし第三インタナショナルの積極的な西歐進出は、大戰直後約三年間の現象であつて、一九二〇年に至り財界が一大反動期に入るや、形勢は一轉して資本の攻勢となり、所謂世界革命の歩調は著しく緩慢化するに至つたのである。

第三インタナショナルが一氣に世界革命を遂行しやうとした計畫には彼等の世界資本主義の現實狀勢に對する認識の誤謬があつた。彼等はその後といへども運動方針の上に多くの過誤を犯した。各國の無産階級も共産黨に對する嚴正批判の態度を明かにするやうになつた。各國に於ける共産黨勢力も革命指導者として精彩を失つて、平凡なる左翼政黨としての地位に就くやうになつた。しかしながらロシヤ革命の成功と第三インタナショナルの活動とが、たとひ多くの誤謬を犯したのに拘らず、各國の無産階級運動に對して未曾有の心理的衝動を與へその結果運動神經に强烈なる活力を與へるに至つたことは沒すべからざる功績と見なければならぬ。

英國社會運動に於けるロシヤ革命の影響を見るに、最初英國の勞働階級も歡呼してロシヤ革命を迎へ、勞働黨も英國政府のロシヤに對する武力干渉に反對したのであるが、英國の無産階級は遂に共産主義を受け容れなかつた。英國共産黨は到底全無産階級の覇權を握ることは出來なかつた。だがロシヤ革命及び其後の共産黨の活躍が、最も保守的とされて居た英國社會運動の指導方針の上に、多大なる影響を及ぼしたことを看過してはならぬ。英國勞働黨が始めて社會主義的綱領を發表したのは、一九一八年六月の勞働黨大會であつて、有名なる「勞働と新社會秩序」が即ちこれである。この綱領の發表は英國社會運動史の上に劃期的意義を有するものであるが、これが原因を究明するに、從來からのサンヂカリズムの影響、英國政府が戰時中採つたところの

所謂戰時社會主義(產業の國家管理)の實行による影響等も學げなければならぬが、私はロシヤ革命及び共產黨の活躍による心理的刺激を最も重視すべきであると考へる。「勞働と新社會秩序」は共產主義的でなくて社會民主々義的であるが、從來久しきに亘つて、當面の近眼的利害に囚はれて社會主義を拒否してきた多數の勞働組合によつて支配された英國勞働黨をして、確然と社會主義の指導精神に立脚せしめたことに就いては間接的効果ではあるが、たしかに共產黨の業績を認めなければならぬ。

ロシヤ革命と我國の社會運動

ロシヤ革命が我國の無產階級運動に與へた影響も大いに注目に値するものがある。抑々我國の社會運動は世界大戰による社會狀勢の激變によつて飛躍的發展を遂げたものであつて、大正六七年頃より勞働爭議は激增し、勞働組合も續々と組織され、一方に於いては社會主義運動、普通選擧運動等も活潑な步調を取り出してきたのであるが、こうした變動的過程にある無產階級の階級意識に對して、油を注いだのはロシヤ革命の成功であつた。當時各新聞の外電が每日の如く報導するロシヤ革命の發展過程の事實、次いで報導されたドイツ、オーストリー、ヘンガリー等の革命的事實は我國の無產階級運動に驚異的感動を與へずには置かなかつた。そして斯くの如きロシヤ革命を起點として歐洲諸國を徹ふた革命的氣運は、今にも全世界に擴がり行くのではないかといふやうな異常な豫感を生ぜしめたのである。當時我々の眼にはたしかに社會革命の黎明が近いたやうに見えたのであつた。

かくの如き我國無產階級運動の感じた心理的錯覺は、運動方針の尖銳化と鬪爭意識の狂熱化とを生ぜしめるに至つた。運動戰線は非常な活氣を帶びて來た。この間に於いて特に注意すべきことは、靑年知識階級の社會運動への進出であつた。行き詰つた資本主義文化に對する反逆意識に燃えた靑年知識階級は、獻身的氣槪を以て續々と社會運動に身を投じた。それはロシヤ革命史の前期を彩るインテリゲンチヤの「人民の中へ」の殉情的行動が影響する所が多かつた。新人會其他の知識階級團體が果敢なる運動を開始したこともこうした時代的雰圍氣の所產であつた。しかしてこれらの精銳なる知識階級の社會運動への進出が社會運動全線の上に大なる熱と力とを加へたことは明瞭な事實である。要するに我國の社會運動は、世界大戰前に於いては序曲的のものであつて、大戰後に於いて始めて大衆運動となつた次第であるが、その大衆化の行程に於いて、ロシヤ革命及びその直後の第三インタナショナルの活躍が大なる心理的效果を及ぼしたことを記憶しなければならぬ。

社會思想史上に於ける一業績

ロシヤ革命直後の數年間は、我國の無產階級は殆んど無條件にこれを讃美した。ロシヤ革命の本質が未だ判明せず、それが無政府主義的革命であるか、共產主義的革命であるか、國家社會主義的革命であるか、そうした內容に亘つては少しも分らなかつた。たゞこれによつて一個

の强大なる資本主義國家が崩壊し、世界史上始めて無產階級的國家が地球の一角に建設されたといふ事實に對して、極めて漠然たるそして簡單なる讃美を寄せたのであつた。だから無政府主義者の大杉榮氏一派も社會主義者の堺利彥氏一派も國家社會主義者の高畠素之氏一派も其他の戰鬪的勞働組合主義者の一派も、一齊にロシヤ革命を讃歎し、我國に於ても出來るだけ早く同じやうな社會的變革をもたらさんことを熱烈に期待したのであつた。

その後ロシヤ革命の内容が漸次判明するに及んで、共產主義者の外はこれに對して批判的態度を取り、また反對の態度を取るやうになつた。そして堺氏一派の青年共產主義者によつて曉民共產黨なる秘密結社が組織され、それが檢擧せられたのが大正十年八月に起つた我國に於ける第一次共產黨事件である。大正十年頃から共產主義者は山川均氏を指導者として盛んに共產主義（レーニン主義）の紹介、研究、普及を試み、その結果として、社會運動内部に共產主義思想が勢よく浸潤して行つた。ところが共產主義の洗禮を受ける以前の社會運動に於ては革命的サンヂカリズム（無政府主義的勞働組合主義）が優越的地位を占めて居たのであつて、そこに於いて共產主義と無政府主義との猛烈なる思想鬪爭が展開されることになつた。その結果は無政府主義が壓迫され遂には殆んど克服されるに至つた。

共產主義が無政府主義を克服したことは、我國の社會思想が發達の一段階を進めたことを示すものであつて、この點に於て共產黨乃至共產主義者の業績を認めなければならぬ。我國の勞働運動界にサンヂカリズムが迎へられて優越的地位を占むるに至つたことについては、しかるべき社會狀勢が存在したのであるが、この思想は空想的要素を最も多分に持つものであつて、一面に於て階級意識の深化について功績もあつたけれども、他面に於てあまりに非現實的なる革命主義なるがために、特にその偏狹なる經濟行動主義のために、社會運動の視野を狹小化し、そして社會運動の大衆的發達を著しく阻害したのである。共產主義はサンヂカリズムに比較すれば、より科學的であり、より全面的であり、より現實的である。共產主義の勝利の結果社會運動から浪曼的又は氣分的衝動主義が著しく清算され、理論的又は科學的考察の傾向が助長されるやうになつたことは動しがたい事實である。大正十二年頃より社會運動が政治行動否認の方針を改めて、政治行動肯定に赴いたことも、もとより社會運動の經驗に對する反省が主たる動因ではあるが、サンヂカリズムの純經濟行動主義を理論的に克服したところの共產主義者乃至共產黨の理論鬪爭の一功績と見なければならぬ。

共產黨の持つ劇藥的役割

共產黨の持つ一つの特徴は、公式的鬪爭主義である。彼等は言論に於て公式主義を排して居るに拘らず、實踐に於ては最も典型的なる公式主義者である。從つて彼等の行動方針は常に直線的であり銳角的である。客觀的狀勢の如何、現實的效果の如何等は彼等によつて殆んど無視されて居る。かくの如き特徴は共產黨の有する重大缺點であるけれども一方からこれを考へるならば、これがまた社會運動に於て彼等の

一個の役割を演ずる所以であるともいふことが出來る。

右に述べた共産黨の持つ一特徴は、必然的に共産黨運動をして少數運動化せしめざるを得ない。現實的なる生活意識を離れることの出來ない無産大衆は、これが共産黨の陣營に誘導することは困難である。一つのストライキを行ふにしても、大衆は勞働條件のために、現實の生活問題のために、これに參加するのであつて、共産黨の欲するが如き社會革命のために、勞働者政府樹立のために、これを行ふのではない。從つて共産黨の闘爭綱領に共鳴するものは一般大衆にあらずして、一部の無産青年、學生青年に外ならない。青年は公式理論を好み、直線的闘爭を好み、革命的情熱を好む。現代の如く資本主義が行き詰り、知識階級市場が供給過剩に悩み、青年學生の前途に何等の希望を見出し得ざる狀態にあつて、覇氣に富む青年學生群が、滔々として共産主義理論の別名たる社會科學に興味を見出し、更に進んでは共産黨運動に投ずることは決して怪しむに足らない社會現象といはざるを得ない。要するに共産黨運動は一個の青年運動であり、また青年運動化せざるを得ない本質を有するものである。

共産黨が少數運動であるのに反して、右翼無産政黨は大衆運動化する性質を有する。それは彼等の運動方針が大衆の現實的生活利害を重んじ、常に實際的建設的立場を取るからである。ところで眞の右翼の大衆運動と左翼の少數運動との相互關係を觀るに、右翼は左翼を以て空想的なりと攻撃し、左翼は右翼を以て妥協的なりと痛罵し、兩者は絶えず對立抗爭の關係を續けつゝある。或る論者はこの左右兩翼の闘爭を無意義なりとし、兩者の合同統一を主張して居るが、我々はむしろこれが有意義なりとし、そこに社會運動の合理的發達を促す微妙なる交互作用を見出すものである。

これをたとへて云ふならば、共産黨は劇藥である。劇藥は常服用の强壯劑には適しない。しかし劇藥を適當なる少量によつて用ふるならば、身體の健康性を保持することはあり得る。しかも時あつて健康性の危機を救ふこともあり得る。これに對して右翼運動は無産大衆の常服用に適する。しかし常服用だからといつて安心は出來ない。時に不純なる夾雜物がこれに混入して、健康を惡化することもあり得る。右翼政黨が無産政黨としての本格的陣營であることは確かであるとしても、これが大衆化すればする程、現實化すればする程、これが階級性の保持のために嚴正なる反省と警戒を必要とするのである。この黨に關して共産黨の存在は、社會運動の健全なる發達のために、必要なる劇藥的役割を持つものといふことが出來る。右翼政黨の發達は、左翼政黨を少數化たらしめる作用をなし、左翼政黨の存在は、右翼政黨の階級性監視の作用をなすものであつて、勿論現實に於て兩者は隨分無意義なる闘爭をも演じつゝあるけれども、兩者の闘爭を通じて此の微妙なる交互作用の價値を認むることは、社會運動の正しき發達のために妥當なる考へ方があると信ずる。

共産黨の犯した最大の罪過

共産黨の持つ最も著しい特徴は、前にも述べた如く公式的革命主義

を基調とする運動方針である。彼等は評論に於て公式主義を排撃しながら實踐に於ては明確に公式主義を暴露して居る。複雜なる現實の社會狀勢を無視し又は飛躍して、簡單なる革命的公式理論に從つて自派の運動方針を決定する所に、そしてまた斷くすることが成功すると信ずる所に、幾度か彼等の無慘なる蹉跌が生れた。彼等は今日まで何回となく過去の運動方針の過誤を修正しまた揚棄した。しかしながら彼等が如何に戰術を變更しても、彼等はその基調に於て公式的革命主義を脱却することは出來ないで居る。恐らく今後といへども彼等は多くの誤謬と失敗を犯すであらうが、それに拘らず彼等は革命的公式主義そのものを揚棄することは困難であらう。

かくの如き革命的公式主義に基く彼等の運動方針は階級鬪爭の局面に對して如何なる影響を及ぼすかといふに、それが支配階級の態度をして不自然に硬化又は反動化せしむることは明かな事實である。無產階級の鬪爭力の發達につれて、支配階級が次第に反動化的傾向を帶びるに至ることはいふまでもないけれども、無產陣營の未だ微弱なるとき、共產黨の如く革命が直前に迫つたやうな急激なる運動方針を實行しやうとすることは、支配階級に對して不當に反動的武裝をなさしむるに好箇の理由又は口實を與へるものである。例へば治安維持法及びその改惡緊急勅令の制定の如きこれである。これらの法律及び勅令が時代錯誤の暴壓法令であつて、支配階級の露骨なる反動性を表現したものであることは明かであるが、かくの如き暴壓法令を制定するに至つた理由又は口實に就いて、共產黨は一半の責を負はなければならぬ。共產黨の狂激なる言論行動が、支配階級に一種の脅威を與へたことが、この暴壓法令の生れるに至つた一因であるからである。

共產黨の言論行動には、我々の常識を超越した奇矯のものが少くない。昨春の第一回普選の最中に、日本共產黨の署名をしたもので國體の變革其他を主張した選擧應援の宣傳ビラが配布された事件があつて、痛く當局の神經を尖らしたことがあつたが、一體何の必要があつて斯くの如き時期に斯くの如き宣傳ビラを配布したのか、我々には到底理解出來ないことであつて、それが勞農黨公認候補の選擧のために有利であるとするならば、我々は共產黨の諸君の腦細胞の健全性を疑はざるを得ない。また共產黨の言論行動には客觀的狀勢から見て、全然不可能なことを主張し命令する傾向が濃厚である。例へば本年の紀元節に擧行された建國祭に對抗するために、無產者新聞は全勞働階級に對してゼネラルストライキを敢行すべきことを要求した。一體ゼネラルストライキなるものが、しかく簡單に實行し得るものかどうか、多少勞働運動に經驗を有するものは直ちに分かることである。しかもそれが建國祭に對してであるから尚更のことである。こうした大言壯語は時には氣晴らしにもなるが、支配階級に彈壓の口實を與へることに於いて極めて不聰明な態度と云はざるを得ない。

共產黨の責任回避論

ところが共產黨の見解によれば、政府の彈壓政策は今や急激なる沒落過程にある資本主義の自己防衞のための必死的努力の現はれに外な

らぬ。即ち資本家地主の政府は、その異常なる政治的經濟的危機に直面して、これを切り抜けるために、あらゆる彈壓政策を以て臨み、勞農大衆の戰鬪的部分に對しては壓殺的破壞の手段を下しつゝあるのである。最も鬪爭的なる大衆團體たる勞働農民黨、勞働組合評議會、無産青年同盟が解散されたのも此の理由によるといふのである。

しかし共産黨の見解には、明かに責任回避の詭辯を含んで居る。現下の社會狀勢に於て、正氣の沙汰とは思はれないやうな狂激な言動を敢てする共産黨に對して、政府が彈壓の手を下すことを以て、一概に資本主義の危機を切り拔けるための必死的努力の現はれだと解するのは、明かに事實に反するといはざるを得ない。それは共産黨の自己辯護と見るべきである。たとへば反動主義者が最も利用し易いところの國體に關する事項を、最も奇激なる表現を以て公然と宣傳するが如きことは飛んで火に入る夏の蟲に類する無智的蠻勇の致すところであつて、これに對して反動的政府が彈壓の手を下したことを以て、資本主義の斷末魔的暴虐行動と見做すことは、自己の小兒病的過誤を棚に上げたものと認めなければならぬ。彼等は支配階級の一切の彈壓政策を、崩壞の危機に立つ資本主義の苦悶的反撥作用に歸する。そして共産黨は資本主義の破壞に邁進する最も鬪爭的なる大衆團體なるが故に彈壓を蒙るのだと說明する。けれども事實の問題として、現在各國の資本主義が崩壞の危機に立つて居るとはいへない。また各國の共産黨が就中日本共産黨が、資本主義を正に崩壞の危機に追ひ詰めて居るとも思はれない。要するに共産黨の說明は、顧みて他をいふ卑怯なる責任回避の辯でなければならぬ。

共産黨の公式的革命主義による多くの過誤が、支配階級を不自然に反動化せしめることに就いては前に述べたのであるが、この支配階級の不自然なる反動化は、共産黨一派にだけ彈壓を下すばかりでなく、他の一般社會運動に對しても甚しい惡影響を及ぼさずには置かない。かの治安維持法の制定は社會運動の全線に對して一個の威嚇を與へる。また共産黨事件によつて政府が思ひついた思想善導と稱する反動主義の組織的宣傳運動は、社會運動の順潮なる發達に對して確かに障害となりつゝある。その他社會運動は同樣の原因により政治的經濟的自由の獲得について多大の損失を蒙りつゝある。要するに共産黨の飛躍的革命主義のために階級鬪爭の戰局は不自然に緊張化され、その結果として一般無産階級の正常なる組織的發達は著しく阻害されつゝあるのであつて、私はこの點が共産黨の犯しつゝある罪過の最大なるものと信ずる。

共産黨の戰線分裂主義

次に共産黨の罪過として擧ぐべきものは、彼等の有する無産階級戰線分裂主義である。彼等の分裂主義には各國の社會運動が等しく惱まされた。最近に於てはその分裂主義もあまり威力を發揮しなくなつたが、それは一般の社會運動が彼等の分裂主義の正體をはつきりと見究め、これが對應策を講ずるやうになつたからである。

さて共産黨の分裂主義の正體を說明すれば、彼等は表面には戰線統

一主義又は共同戰線主義を標榜する。しかも誰よりも最も熱意を以て高調する。そしてその理由とする所は、資本主義の壓迫に對する全無産階級勢力の集中の必要である。若し彼等の戰線統一主義がその額面通りの意味のものであるならば、極めて妥當なことであつて何等これに反對すべき根據はない。しかし彼等の實際の行動を見るとき、彼等の戰線統一主義は一個の欺瞞的大義名分であつて、その裏面には共産黨本位の黨略が潛んで居ることが分かる。彼等は一方に於て戰線統一主義を高調しながら、他方に於て共産團體以外の無産團體幹部に向つて猛烈な闘爭を浴びせかける。「階級的裏切者」「ブルヂョア代理人」「日和見主義者」等々の有らゆる中傷的宣傳を行ひ、そうすることによつてこれらの幹部の大衆的信賴を失墜せしめやうと努力する。

彼等の戰線統一主義は各無産團體の相互の諒解と信賴とに基く民主主義的戰線統一にあらずして、この美名に隱れて無産戰線に於ける共産黨の發展を圖らんとするものである。卽ち共産黨は戰線統一の旗の下に他派の團體に接近し、他派の幹部を放逐してその大衆を獲得し、依つて以つて無産陣營に於ける共産黨の覇權を確立しやうとする魂膽なのである。つまり彼等の戰線統一主義は、資本主義に對するものにあらずして、無産陣營內に向けられた黨略に過ぎないのである。これは一種のマキヤベリズムである。彼等の戰線統一主義の正體は戰線分裂主義なのである。この分裂主義の黨略が、組織的に執拗に行はれるがために、或る時期に於て無産戰線は甚しく混亂を生じた。そして戰線は諸分派に決裂した。また左右兩翼の對立抗爭も必要以上に行はれた。共産黨は今後とも一貫して分裂主義を行ふであらう。しかしその効果は次第に薄らいで行くと思はれるが、この黨略の實行は確かに共産黨の罪過の一つに數へなければならぬ。

共産黨の民主主義否定

ロシヤ革命は共産黨の獨裁政治によつて成就された。共産黨（當時はボルシエビキ）は民主主義的な憲法會議を解散して、獨裁手段によつて政權を掌握した。共産黨は、資本主義から社會主義へ推移する過渡期に於いて無産階級の獨裁政治が存在するのは必然的過程だと辯明して居る。この共産黨の獨裁主義に關しては贊否交々の批評がある。しかし私はあの當時のロシヤの混亂狀態に於て、共産黨が獨裁手段に訴へて政權を掌握したことは、一個の歷史的必然の事實と認めて差支ないと考へる。民主主義の發達が低級であり、封建的傳統勢力の尙ほ蟠屈したロシヤに於て、かくの如き社會的混亂を生じた場合、共産黨が民主主義手段によらずして獨裁手段を執つたのは已むを得ざるに出でたものと認めてよい。民主主義の訓練の乏しい國家には、必ず獨裁主義が擡頭するのは當然である。

右に述べた意味に於てロシヤ革命の手段の獨裁性を私は肯定するものであるが、若しこの獨裁主義を劃一的に各國の社會運動に强制しやうとするならば、それは社會事實を無視した觀念的革命主義であつて、我々はこれに承服することは出來ない。民主主義が相當の程度に發達し、無産階級が民主主義によつて啓蒙、組織、政治的經濟的地位の向

上を遂げてきた國家に於て、無産階級に對して、民主主義の確認と獨裁主義の信奉とを高調しても、その効果は中々擧らない。例へば英國の社會運動に對する第三インタナショナルの熱烈な執拗な働きかけが今日まで繰り返されたけれども、その効果はモスコウのコミンテルンの豫期に反したではないか。ひとり英國ばかりでなく、他の西歐諸國の社會運動に對する第三インタナショナルの進出も悉く失敗に歸したといつて差支ない。

社會運動の民主主義的發達に一定の限界が存するかどうか、これは一個の問題である。だが民主主義的發達を遂げてきた諸國の社會運動は、その遂げ得る最大の範圍まではその歩みを續けるであらう。しかして現下の客觀的社會狀勢、資本主義の動勢は、各國社會運動をしてロシヤ流の獨裁手段を執らしむる必要のある狀態に至つて居ないことは明かである。更に若し民主主義方法によつて其の目的が完全に達成され得るならば、各國の無産階級は敢て獨裁手段を選ばないであらう。なんとなればそうすることが無産階級に取つても利益であるからである。流血の暴力革命でなければ氣がすまないといふのは、社會運動を劇的氣分を以て見るロマンチシズムに外ならない。然るに共産黨は、ロシヤ革命の實驗を楯に取り、無産階級の獨裁政治に對して普遍的價値を與へ、各國の社會運動に對してこれを公式的に強行せんとする傾向が濃厚である。これは折角民主主義的發達を遂げつゝある各國の社會運動に對して攪亂的作用をなすものである。共産黨が不當に民主主義の價値と役割とを否定し、自己流の獨裁主義を強調することは、たしかに一個の獨斷であつて、こゝにも共産黨の一つの罪過が見出される。

共産黨の官僚主義

ロシヤ共産黨は政權獲得後に於ても無産階級の獨裁政治を主張し且つ實行して居る。しかしながら無産階級の獨裁政治は、無産階級が數個の政黨に分れて居る場合——そうした場合が普通であるが——無産諸政黨中の一政黨の獨裁政治といふことになる。故に無産階級の獨裁政治は、判然たる無産階級の舊有産階級に對する獨裁政治にあらずして、無産階級の一部が無産階級の他の部分並に舊有産階級に對して行ふ獨裁政治といふことになる。即ち共産黨のいふ無産階級の獨裁政治は、實際は共産黨の獨裁政治に外ならぬ。現にロシヤがその通りである。ロシヤに於ては共産黨のみが合法的存在を有し、他の無産政黨は存在を許されない。更に注意すべきは、共産黨自體に於ても黨内の民主主義が行はれない。黨の最高權力者の意志と多少異りたる意見を有する者は手厳しい壓迫を受け、投獄流刑の憂目に遭はなければならぬ。革命の動功者トロツキーの最近の沒落はその一例である。昨日の同志も今日は裏切者の烙印を押されるのである。かゝる狀態にあつては、無産階級の獨裁政治とはいふものゝ、事實は極少數の權力者群の官僚政治である。そこには必然的に陰鬱なる探偵政治が跋扈する。

ロシヤ共産黨が暴力革命によつて政權を掌握し、その政權を維持するために武力的反抗を試みる舊有産階級に對して極端な官僚政治を行ふのは當然であるといへる。また無自覺な無産大衆を統治する

がために、支配者たる自黨の極端なる官僚政治を行ふのも當然であるといへる。更に民主主義の發達しない國に於て、共産黨一派が完全に政權を維持しやうとするがために、他の無産政黨を彈壓し、且自黨内の異論者をも彈壓し、絶大の權力と鐵の如き統制とを有する共産黨の專制的支配下に全國民を置かねばならないのも當然のことゝいへる。私はロシヤの場合に於て、共産黨の官僚主義を否定することが出來ない。

ところでかくの如き共産黨の官僚主義は、多少なりとも民主主義の發達した國家に於て果して可能であらうか。よし一時は可能なりとしても、果して共産黨以外の民衆の永く堪え得るところであらうか。共産黨の官僚主義にせよ、ファシストの官僚主義にせよ、官僚主義は明かに社會進化に逆行する反動的政治形式でなければならぬ。我々がロシヤの場合に於て已むを得ずこれを肯定するといへども、官僚主義を唯一の正道なりとして各國の社會運動にこれを植ゑつけやうとすることは確かに誤謬でなければならぬ。第三インタナショナルが秘密結社主義とマキヤベリズムとにより各國の社會運動を極少數の權力的指導者の官僚的支配下に置かうとすることは、社會運動の健全なる發達を阻害し、これを邪道に導くものといはなければならぬ。

社會科學の非科學化

共産主義の祖師であるマルクスが、社會主義を科學的基礎の上に置いた最大の功績者であることは何人も異存のないところであるが、マルクスの理論を以て全部的に神聖不可侵のものとなすことは、近代科學の批判的精神に背反するものでなければならぬ。更にまたマルクスの理論を發展せしめたレーニンの理論を無批判に神聖視して、ひたすらにその一言一句に反くことを恐るゝが如き態度も、科學的態度を逸脱したものでなければならぬ。今日、マルキシズムもレーニズムも共産黨運動の聖典化して居る有樣であるが、これは政治的に專制主義を執る共産黨が、思想政策に於ても批判の自由を許さざる一定の思想體系を民衆に強要するのは必然のことゝ見ることが出來る。卽ち共産黨に取つての共産主義は、マホメット敎徒に取つてのコーランにも比肩するものである。

マルクスもレーニンも社會思想發達史の上に於ける輝かしき功績者であるが、彼等の理論に、しかもその片言隻句に絶對主義的價値を附與することは、これを政略とすれば理解は出來るが、それは嚴正なる社會科學の立場を離れたものである。すべて絶對主義なるものは中世的であり宗敎的であるか、しからずんば一黨派のためにする御用學的のものである。今日、共産主義者に於て社會科學といへば共産主義の別名に外ならぬ。社會科學を研究するといへば、いかにも聞えは科學的響きを持つて居るが、事實はキリスト敎徒が獨斷的な聖書の說敎を拜聽するのと少しもかはらない。多くの年少の學生群が、社會科學に興味を持つのは、その科學的異質性にあらずして、その絶對主義的なる宗敎的なる革命感情によるのである。かつては上杉愼吉博士の絶對主義的主權論に感激した帝大の學生が、今日時勢が變つて、共産黨の絶對主義的革命論に陶醉することは單なる絶對主義の一變化にすぎない。

官僚政治の御用學府である帝國大學が、共產黨の御用學府となるならば聊か運命の皮肉といはざるを得ないが、官學として長く絕對主義的法律論を敎へてきた帝大の學風に、新らしい絕對主義が流行することは別に驚くには足らない。

マルクス、エンゲルス、レーニン等の建設した社會理論の中に、多くの價値あるものの存することを我々は認めなければならぬ。我々はそれらの中から攝取すべきものは十分に攝取しなければならぬ。しかしその態度はどこまでも批判的でなければならぬ。換言すれば科學的でなければならぬ。この意味に於て我々は、共產黨の思想政策としての「共產主義の聖典化」に反對する。かくの如き政策は現在のロシヤ國內に於ては必要なる政略であらうけれども、各國に於ける社會科學の正常なる發達を阻害するものといふべきである。

共產黨は神でも惡魔でもない

最後に重ねていふ。共產黨とは何んであるか。それは左翼無產政黨である。そして彼れは多くの功績と多くの罪過とを持つ無產政黨である。彼れは明かに神ではない。神にしてはあまりに多くの罪過を犯して居る。彼れを以て唯一の眞正無產政黨なりとすることは認識の幼稚を示すものである。また彼れは明かに惡魔でもない。惡魔にしてはふさはしからぬ無產階級解放の熱意を持つて居る。そして無產階級運動の上に多くの貢獻をして居る。社會進化の潮流からいふならば、共產黨はこれに棹すものであり、反動主義者はこれに逆行するものである。共產黨を惡魔視する反動主義者は、共產黨の罪過のみを誇張してその功績を理解することが出來ないばかりでなく、自らの逆時代的存在たるを悟らない無智を暴露して居る。

共產黨は神でも惡魔でもない。これを讃美し禮讃するのも間違ひであれば、これを恐怖し彈壓するのも間違つて居る。我々は共產黨を以て一個の平凡なる政黨的存在と見且つ遇すべきである。西歐諸國に於ては、共產黨は既に平凡なる一政黨となり、合法的存在性を獲得して居る。共產黨が存在するからといつて、急に狼狽して極度の彈壓を加へることは、反動的政治家の頭の時代錯誤を語るのみでなく、西歐諸國に比して、我國の民主主義發達の低劣なることを示すものである。

極端は極端を呼ぶ。反動主義者の跋扈は、共產黨運動の優勢化を招くであらう。反動派と共產派とが正面から白兵戰を演ずるやうな情勢をもたらすことを、我々は合理的なる社會進化のために避けなければならぬ。若しかりに兩派の劇しき抗爭の結果、反動派が勝つて我國にフアシスト政府の武斷政治が布かれるとしても、また共產黨が勝つて我國に共產黨政府の專制政治が布かれるとしても、何れにしても無產大衆は不幸である。我々は無產階級解放の運動をして合理的發達の過程をたどらしむるために、これに適する社會條件を作らねばならぬ。その社會條件とは何んであるか。一つは反動主義の撲滅である。共產黨に對してのみならず、無產階級運動そのものに對して妨害的作用をなす一切の反動主義を排擊しなければならぬ。二つは共產黨に對して正當なる認識と正當なる地位とを與へることである。共產黨の本質を理

解し、共産黨の持つ獨自の立場を認めて、一個の合法的存在性をこれに與へることである。

かりに共産黨に合法的存在性を與へたところで、健實なる無産政黨の發達は、共産黨の優勢化を不可能にし、これを少數黨化することは確かである。英國の如きはその適例を示して居る。英國共產黨は合法政黨として存在を續けてきたが、その黨員は毎年激減しつつある。これ英國勞働黨の發達によるのである。我國に於て比較的共產黨運動が生彩を有するのは、支配階級の反動的彈壓のために却つて共產黨に對する同情と共鳴が集まるのと、反動主義のために健實なる無產階級運動までが發達を妨げられて居るのとに原因する。いづれの社會に於ても共產黨の行き方は公然か又は秘密裡に實在する。これは社會運動戰線の一方に必然的に發生する一つの潮流と見なければならぬ。しからばこれに對して正當なる認識を下し、且つ正當なる地位を與へることが、合理的なる社會進化のために、最も望ましい賢明なる措置といはなければならぬ。

我國の外資問題

牧野輝智

一

我國で始めて外國の資本を事業に使用したのは、明治三年四月に英國のシユレーダー商會及び東洋銀行を取扱銀行として、倫敦に於て借入れた英貨一百萬磅である。是より曩明治元年七月に舊幕府の負債を返却するために英國東洋銀行から洋銀五十萬弗を借入れたことがある。けれども、普通募集の方法により公債の形式を具備し、外國が資金を輸入したのは此の明治三年四月の外國公債が最初である。其の募債額英貨一百萬磅は當時の邦貨で四百八十八萬圓に當り、利子は年九分であつた。此の外債は我國の鐵道建設資金に充つるために借入れたもので、東京横濱間の鐵道及び大阪神戸間の鐵道は此の資金にて敷設されたものである。當時の我國の對外信用は微弱なものであつたから、利率は九分、其利廻りは九分二厘五毛、それに擔保として鐵道益金及び海關税を提供してゐるに拘らず、此の外債の成立を以て寧ろ奇蹟の一でゝもあるかの様な成功として見られたのである。其の後三年を經、明治六年五月に矢張り東洋銀行の手で倫敦で二百四十萬磅の外債が成立した。是は利率も幾分か低下し年七分、募債の目的は士族の秩祿奉還者に就業資金を給する爲であつたといふ。

明治初年以來我が外債募集の相手國は英國のみであつたが、明治三十七年五月に日露戰爭軍費の一部を紐育で募集した。其金額は五百萬磅、是は六分半利附英貨公債一千萬磅の半額を紐育に於て調達したもので、米國に於ける我が外債募集の最初のものである。明治三十八年十一月卽ち日露間の平和克復條約成立後程なく、巴里及び伯林に於ても外債の一部を調達した。當時巴里にて募集した額は千二百萬磅、伯林にて募集した額は三百廿五萬磅、之が佛蘭西及び獨逸にて我外債を調達した最初のものである。

二

歐洲大戰前世界の資本市場として目せられたものは第一が倫敦、其の次が巴里であつたが、巴里の資本的勢力は倫敦に對して雁行といふ程度にも至らなかつた。從つて我國の外資は主として倫敦にて調達され、日露戰爭中及び其の直後に始めて紐育、巴里、伯林に於ての外資調達が實現されたけれども、歐洲大戰直前まで我國の政府外債の約五割は倫敦に於て調達され、其の次が巴里であつた。而して佛・米・獨の市場に於ける起債を合計したものが、ほゞ倫敦一市場の分と同額といふ狀態であつた。歐洲大戰後紐育の金融的勢力は俄に增大し、今日にては、兎に角資本力に於て倫敦のそれを凌駕することになつたが、しかし我國は大戰後にありても屢ゝ倫敦市場にて起債を試みてゐる。

我國の政府が明治初年以來借入れる外債（外債としては別に市債と民間社債がある）は償還濟の分をも合せて二十四億圓であるが、其の國別は左の通りである。

倫敦	一、一二六、三〇四、〇〇〇圓
紐育	六七三、四四〇、〇〇〇
巴里	四七三、三六〇、〇〇〇
伯林	一二九、三二〇、〇〇〇
合計	二、四〇二、四二四、〇〇〇

明治初年以來最近まで我政府が外國市場にて起債した總金額二十四億圓（滿鐵社債を政府にて肩替りした分をも含む）の内約十億圓は償還濟となり、昭和三年末の外國債現在高は十四億五千萬圓である。

三

次に我が外債の利率の變遷を見ると、明治初年に九分、七分等の高利を以て起債したのは別として、又日露戰爭中に利廻り七分七厘强にて募債したのを特別の事情によるものとして除外すれば、歐洲大戰前までは總べて四分乃至五分の利率にて起債されてゐる。之を利廻りから見ても四分二厘乃至五分〇厘三毛位であつた。然るに歐洲大戰後各國の金利が昂騰したため、而して我國は大正十三年に卽ち大震災の直後に、期限到來の外債償還の必要其他に迫られ、强いて英米の市場に起債を成立せしめた爲めに、英貨債は六分（利廻り六分九厘六毛）米貨債は六分五厘（利廻七分一厘二毛）といふ高利を負擔することになつた。國辱外債などと非難されたのが卽ち此の外債である。

更に擔保の問題から我國の外債を考察して見ると、明治初年から日露戰爭當時までの外債は悉く擔保がついてゐた。或は鐵

道益金を擔保とし、或は米作を擔保とし、或は海關稅、或は煙草專賣益金等を擔保とした。民間の社債ならば兎に角、國家の外債に擔保を附するといふは非常な恥辱であつたが、國力が十分でなく經濟的信用が乏しく、而かも外資によることの避けられない事情があつた爲め、此の種の擔保を附することも亦已むを得なかつた。併し、それが爲め償還期限を短くし、返濟に努力することになつたので、今日では擔保附の政府外債は存しないことになつた。斯の如く我國政府の外債にて、既に償還濟となつたものは、僅に大正二年の佛貨國庫債券を除く外、全部擔保附であつたといふことは、我外債の歷史を尋ねるに當り最も感慨を深ふする事實である。試みに我政府外債中償却濟の分を列擧すれば左の如し。

償還濟外債(政府)と擔保

(一)九分利附外國公債（明治三年四月發行）

發行金額	一百萬磅
發行地	倫敦
利率	年九分
利廻	九分二厘五毛
擔保	鐵道純益及ビ海關稅
償還濟	明治十五年八月

(二)七分利附外國公債（明治六年五月發行）

發行金額	二百四十萬磅
發行地	倫敦
利率	年七分
利廻	七分六厘九毛
擔保	每年米四十萬石マデヲ擔保トス
償還濟	明治三十年七月

(三)第一回六分利附英貨公債（明治卅七年六月發行）

發行金額	一千萬磅
發行地	倫敦及ビ紐育ニテ半額宛發行
利率	年六分
利廻	七分一厘九毛
擔保	日本政府關稅收入ヲ擔保トス
償還濟	明治四十年九月

(四)第二回六分利附英貨公債（明治卅七年十一月發行）

發行金額	千二百萬磅
發行地	倫敦及ビ紐育ニテ半額宛發行
利率	年六分
利廻	七分七厘八毛
擔保	日本政府稅關收入ヲ擔保トス
償還濟	明治四十年九月

(五)第一回四分半利附英貨公債 (明治卅八年四月發行)

發行金額　三千萬磅
發行地　倫敦及ビ紐育ニテ半額宛發行
利率　年四分半
利廻　五分三厘二毛
擔保　日本政府煙草專賣益金ヲ擔保トス
償還濟　大正十三年十月

(六)第二回四分半利附英貨公債 (明治三十八年八月發行)

發行金額　三千萬磅
發行地　倫敦、紐育及ビ伯林ニテ一千萬磅宛發行
利率　年四分半
利廻　五分三厘二毛
擔保　日本政府煙草專賣益金ヲ擔保トス
償還濟　大正十三年十月

(七)佛貨國庫債券 (大正二年五月發行)

發行金額　二億法
發行地　巴里
利率　年五分
利廻　五分二厘六毛
擔保　ナシ
償還濟　大正十二年五月

四

以上は主として我政府の外國債に就て歴史的の觀察を試みたのであるが、外債としては國債の外に、市債があり、民間會社の社債がある。我國にて外國發行市債の最初のものは、明治卅二年七月の神戸市水道公債二十七萬圓である。明治三十五年に至り横濱市の外債九十萬圓と大阪市の築港外債三百八萬五千圓とが倫敦にて發行された。明治卅九年に東京市の事業外債百五十萬磅が矢張り倫敦で發行された。東京市は其の後三回に亘り倫敦・巴里・紐育にて相當巨額の外債を發行し、大阪市横濱市名古屋市等でも外債を發行し、是等各市の外債は電氣事業・瓦斯事業・都市復興事業等に使用された。利率は五分乃至六分（利廻り五分乃至六分七厘三毛）である。

又民間社債にて外國發行のものは南滿洲鐵道會社、東洋拓殖會社の如き特殊會社及び東京電燈、大同電力、東邦電力、宇治川電氣、信越電力、日本電力等の諸會社、銀行として日本興業銀行、北海道拓殖銀行等がある。試みに我國の外債の現在高を國債、市債、社債及び銀行債に區別して示せば左の如し。

對外公社債一覽表 (單位千圓)

	大正十二年末	大正十三年末	大正十四年末	昭和元年末	昭和二年末	昭和三年末
國債	一、二九〇、六〇五	一、五二四、二六六	一、五〇〇、二二五	一、四七七、八六九	一、四六〇、二三三	一、四五三、〇九二
市債	一三一、四〇八	一二七、五三七	一二五、二二四	一三〇、三九八	一五八、一九八	一五五、六四八
銀行債	一三、三三七	五七、二九八	五七、〇五四	五六、八九九	一三、五一六	一三、四五九
會社債	一二九、六二四	一三七、二三七	一七八、六九七	一九六、九一四	三〇二、九八三	四八四、一一五
合計	一、五六四、九七四	一、八四六、三三八	一、九六一、一八〇	二、〇四七、〇八一	二、〇三五、九三一	二、二〇五、五一七

（備考） 外國貨幣の換算は法定平價による。

更に民間社債の現在高を會社及銀行別に示せば次表の如し。

（政府外債現在高の内譯は後段に讓る）

民間外債の內譯表 （單位千圓）

	大正十二年末	大正十三年末	大正十四年末	昭和元年末	昭和二年末	昭和三年末
日本興業銀行債	一〇、二八六	五四、四〇八	五四、四〇八	五四、四〇八	一〇、二二九	一〇、二二九
北海道拓殖銀行債	三、〇五一	二、八九一	二、六四六	二、四九一	二、三八七	二、二三〇
計	一三、三三七	五七、二九八	五七、〇五四	五六、八九九	一三、五一六	一三、四五九
東洋拓殖會社々債	五一、一七三	三八、七九八	三七、〇〇七	三五、九八二	三四、九四八	七四、一四四
南滿洲鐵道社債	三九、〇五二	三九、〇五二	三九、〇五二	三九、〇五二	三九、〇五二	三九、〇四〇
東京電燈會社々債	二九、二八九	二九、二八九	八三、二九一	八三、二九一	八三、二九一	二二九、〇五六
大同電力會社々債	―	三〇、〇九〇	五八、一七四	五四、二二四	五二、五一九	五一、二三九
東邦電力會社々債	―	―	三三、〇一九	五三、三二七	五一、五七四	四一、六八八
宇治川電氣會社社債	―	―	一八、〇八四	一七、〇三九	二六、二五二	二五、七五四
信越電力會社々債	―	―	―	―	一五、三四六	一五、一五〇
日本電力會社々債	―	―	―	―	―	一八、〇五四
計	一二九、六二四	一三七、二三七	一七八、六九七	一九六、九一四	三〇二、九八三	四八四、一一五

（備考） 滿鐵社債は政府肩替以外のものである。

五

我國の外債の現在額は國債、市債、社債を合せて二十二億圓、其の一ケ年の利子負擔は約一億一千萬圓である。二十二億圓といふ外債は、募債當時の直接の目的としては、或は軍費を支辨するため、或は戰後の經營に資するため、或は交通機關の整備、或は電氣事業の開發等のために調達されたものであるけれども是を國際貸借全般の問題として考察すると、要するに明治時代以來の輸入超過其他の國際勘定上の支拂超過が累積して二十二億圓の外債となりて殘つてゐるのである。是に對する利子負擔一億一千萬圓は我國の國力として必ずしも憂ふ可きものではないけれど、一方に斯の如き利子を拂ひながら依然十億圓を超過した正貨を日本銀行の庫裡に蓄藏して置くことは經濟政策として果して合理的な手段であらうか。

我國の外債中其の償還期限が一年半の後に迫つてゐるものが二億三千萬圓からある(第二回四分利附英貨公債)。是に對しては、如何にして借換ゆ可きかの問題のみが當然の手段の如くに

考慮されてゐるけれど、私は寧ろ我國の兌換券發行制度を改正し、歐米各國の制度と同樣、之を比例準備制度となし、正貨準備は發券額の四割見當にて足るものとなし、是が爲に生ずる正貨の剰餘を一年半後に償還期限の到來する英貨債の償還に充當してはどうかと考へてゐる。斯くすることにより我國の貨幣制度が危くなるといふならば別問題だが、各國が比例準備制にて好成績を納めてゐるのに、我國のみ借金しても全額準備を原則とする制度を維持せねばならぬ理由はない。

幣制の外形からいふと、英國は我國と同樣依然全額準備を原則としてゐるけれども、英國の新制度は保證發行制度が二十六億圓といふ巨額である爲めに、正貨準備の實際の比率は四割に過ぎないから、實質に於ては比例發行制度と異るところはない。米國の樣に正貨が横溢してゐるなら別問題だが、(其米國でも比例準備の發行制度を採つてゐる) 我國のやうに外資を負ひながら紙幣發行に對し常に九割內外の正貨準備を死藏してゐるやうな現在の發券制度を維持する必要はないと思ふ。是は主として幣制上の問題であるけれども、私は外債問題として考へても、外債利子を負擔しながら、而して一年半後に借換へられる外債は滿期の外債より遥に高利であるを免れないことを知りながら、發行制度改善の問題に手を染むることを看過するは甚だ間違つたことであるやうに思ふ。

六

我國の外債にて增加率の大なるは民間社債である。大正十二年末の民間外債は一億三千萬圓であつたが、五年後の昭和三年末には五億圓に達してゐる。我國にて民間會社の外資輸入は明治卅八年十二月に關西鐵道會社が倫敦にて百萬磅の外債を募集したのが最初のものである。其の一ヶ月後に北海道炭鑛汽船會社が矢張倫敦にて同額の外債を借入れた。其の後民間の外債といへば殆ど特殊銀行會社のみに限られてゐたが、今日では、政府の保證ある特殊會社の外債よりか、普通の民間會社の外債の方が其金額に於て遥に超過してゐる。而して利率に於ても特に高利といふのではない。特殊銀行會社の外國社債額一〇〇とすれば、普通の民間會社の外國社債は三〇〇といふ比率になるのである。是は民間會社の對外信用が著しく高まつたことを示す一つの證明であるけれども、更に其の民間會社の種類を考へて見ると外資を利用してゐる民間會社は電力會社のみに限られてゐる。曰く東京電燈會社、曰く大同電力會社、曰く東邦電力會社、曰く宇治川電氣會社、曰く信越電力會社、曰く日本電力會社、何れも電力會社のみである。是を別の言葉でいふと、我國の對

外社債は、興銀・拓銀のやうな特殊銀行、滿鐵・東拓のやうな特殊會社の外に、純粹な民間會社としては電力會社のみが之を發行してゐるのである。電力會社は發電設備に巨額の資金を固定せしむるのであるから物上擔保の提供に便宜多い會社である。此の點からいふと電力社債なるものも實は會社其のものの一般的信用により起債し得るのでなく、擔保物件が獨占的であり確實である爲めに外國市場に於ける起債の目的を達してゐる次第である。

然し翻つて考へて見ると政府の外債でさへ日露戰爭當時までの分は殆ど全部擔保の設定件によりて其の目的を達してゐるのであるから、一般の民間の會社が外債に對して物上擔保を提供してゐるのは、已むを得ないことであるやうに思ふ。(電力會社にて無擔保で起債したことも二三あるが之は寧ろ例外である)

事業資金として外債によるが良いか否かは當時の經濟事情と事業の性質とを考へて決定す可きことである。內地の金融市場にて低利の資金を募り得可き場合に、それよりか高利にて外債を募集する必要はない。故に外債募集に於て考慮さるべき第一の條件は低利といふことであらねばならぬ。歐洲大戰前歐洲諸國の財界が平穩に推移しつゝありし頃には四分の利率にて外債を募集することが困難でなかつたが、今日では四分利の外債などいふことは始めから話にならない。昨年米國有數のフヒナンシャーたるハリス・フォルブス商會の代表者リンゲル氏が我國に融資の目的にて來朝したことがある。一日同氏は私の處に訪ねて來て、日本の金融事情に就て私の說明を求め更に日本の今日の變態的低金利が何時頃まで續くかといふことに就て私の意見を徵したことがある。その時同氏はアメリカの遊資を外國に融通することは我々の希望する所であるけれど、七分以下の利廻りでは貸せないといつてゐた。是は恐らく米國フヒナンシャーの代表的の意見であらうと思ふ。本年に入りて以來の米國の高金利は之亦變態的のものであるが、米國の金融界が落付いて後も、我國の民間社債を利廻り六分五厘位で募ることは容易ではあるまい。斯樣な次第であるから昭和五年一杯にて償還期限の到來する政府の英貨四分利附外債二億三千萬圓などは借換をするとなると、例の國勢公債程ではないにしても相當高い利子を拂はねばならぬことになるであらう。是は餘程考慮す可きことである。

七

今日世界の金融市場にて遊資を海外に融通す可き十分な實力を備へてゐるものは紐育のみである。倫敦の金融的實力は相當

に恢復され、且つ倫敦は國際金融の中心市場として資力以外の附隨的な條件を具備してゐるけれども、何といつても根本の問題たる資本力が紐育のそれに比し著しく劣つてゐる。倫敦ロムバード街が一九二八年中に本國以外の起債を引受けた金額は十四億圓であるが、其の內にて外國に融通した額は五億五千萬圓に過ぎない。其の內譯は左の如し。

外國債	五四八、五〇〇、〇〇〇圓
自國領土債(印度債を除く)	七六四、二〇〇、〇〇〇
印度及錫蘭島債	七五、六〇〇、〇〇〇
計	一、三八八、三〇〇、〇〇〇

英國の純然たる對外融資が五億圓程度であるに對し、米國の同年中の外債引受けは三十億圓を超へてゐる。更に注目に値することは米國の對外貸付が年々著しく增進しつゝあることである。左に一九二三年以後の外債引受額を掲ぐ。

一九二三年	一、〇七八、〇〇〇、〇〇〇圓
一九二四年	二、四二〇、〇〇〇、〇〇〇
一九二五年	二、五五〇、〇〇〇、〇〇〇
一九二六年	二、六三六、〇〇〇、〇〇〇
一九二七年	三、一七二、〇〇〇、〇〇〇
一九二八年	三、一五三、〇〇〇、〇〇〇

歐洲大戰前まで米國は寧ろ債務國であつた。資金の不足を歐洲の諸國、それも主として英國の資本にて補充してゐた。然るに歐洲大戰のために米國の資本力は著しく增大し逆に歐洲の諸國へ資金を供給するやうになつた。英國はそれ程でないが、獨逸・伊太利・佛蘭西・白耳義・墺地利其他歐大陸の諸國は米國の資本にて幣制改革其他財界の復興に目鼻をつけたのである。而して今後尙ほ米國資本の利用を期待することが頗る多い。紐育の金融界は倫敦のそれに比して對外融資のことに不慣れである。手續も頗る面倒である。外債の引受には國務省の認可を要することになつてゐる。而して米國政府は對外融資を外交上の手段に利用せんとする傾向がある。其の一例としては先年米國のフヒナンシヤーがブラジルの外債を引受けたのに對し、政府でブラジルの珈琲保護策が米國に不利だといふ理由にて之を拒否したことがある。又米國政府が佛國の一億弗公債發行問題を利用して佛國の對米關稅戰計畫を挫折せしめたこともある。政府がフヒナンシヤーの對外放資を外交の道具に使ふなどいふと國際金融の覇者たるべき者として甚だ了見の狹い考である。此の點からいふと倫敦は何といつても多年の歷史に於て國際金融の中心市場たる要件が具備されてゐるけれど、何をいつても金融資本そのものが不十分である。紐育は國際金融の中心市場

として色々の條件が不十分であるとはいへ資金が横溢してゐるため今後の起債は米國を主とするの外はない。

現に我國でも近年の民間對外社債は主として米國にて發行されてゐる。大同電力・信越電力とヂロン・リード商會、東京電燈・東邦電力とギャランチー・トラスト會社、宇治川電氣とリー・ヒッキンソン商會、日本電力とハリス・フォッブス商會、是等の當事者間の募債關係は何れも我が民間會社と米國金融市場との關係を語るもので、最近の例として我國が米國以外の市場に外資談を成立せしめたのは、昨年の東電外債中四百五十萬磅を倫敦で發行したもの位である。

八

斯の如く觀じ來ると今後我國にて外債を募集するとするそれは主として米國の市場によるの外はないが、米國の金融業者は昨年でも七分以下の利廻りでは外債に應じ難いと稱してゐた。最近の例として東京電燈の外債はそれよりか幾分低利であつたとはいへ、表面の利率は六分利廻りは六分八厘である。僅に二厘だけ安い。

外債の借換、在外正貨の補充等特殊の目的のため是非とも外資を必要とする場合ならば格別だが、生産資金として低利の資金を必要とする場合に、外資の利廻りが七分にも當るやうでは低資としての便宜は消滅する譯である。我國にて目今の外債問題としては滿鐵の外債計畫と臺灣日月潭の外債計畫とかあるが昨秋來米國では投機熱旺盛のため金利が奔騰してゐる。而して本年に入りて株式熱は益〻激烈となり、コールの如きは一割五分に昂騰したこともある。それがため正貨の對米流出を防止するため本年二月に英蘭銀行では公定歩合を四分半から一躍五分半に引上げ、伊太利・獨逸・墺地利・匈加利・和蘭・波蘭等の大陸諸國でも金利を引上げてゐる。斯樣の次第であるから我政府では在外正貨補充の必要から滿鐵や日月潭の外債成立を急いでゐる模樣であるけれど、今の有樣ではとても外債談が成立しさうにない。よしそれが成立することがあるにしても、利子は相當に高利であることを免れないであらう。

資本に國境なしとは古くからいはれた言葉であるが、それが交通機關の發達に從ひいよ〳〵文字通りに實現するやうになつた。しかし我國の現狀では外資によることが果して利益であらうか。民間社債としては低利債といふ條件が絕對に必要であるが、現在の狀態では內地の金融市場で募債よりか安い金利で外資を利用するは困難である。例へ我國の金融市場は社債に飽き氣味であるとはいへ外債を募集し得る程の會社であるならば內

資を利用するの力は存してゐる譯である。歐洲の各國が米國の資金を當にして戰後の復興をあせつてゐる間は大戰前のやうな金利の低下は望めない。我國は資本的に自給自足の方針を樹て堅實なる產業的發展を期することが肝要であると思ふ。

× × ×

最後に參考として我國の政府外債現在額十四億五千萬圓の内容を左に摘錄す。

政府の現在外債と其の條件

(一)第一回四分利附英貨公債(明治卅二年七月發行)

發行金額 一千萬磅(償還未濟額 九、三五五、五〇〇磅)
發行地 倫敦 利率 年四分(利廻 四分五厘二毛) 擔保 ナシ 償還期限 昭和二十八年十二月

(二)第二回四分利附英貨公債(明治卅八年十二月發行)

發行金額 二千五百萬磅(償還未濟額 二三、四四六、六二〇磅)
發行地 倫敦 六百五十萬磅、巴里 千二百萬磅、紐育 三百廿五萬磅、獨逸 三百三十五萬磅
利率 年四分(利廻 四分六厘八毛) 擔保 ナシ 償還期限 昭和六年一月一日

(三)五分利英貨公債(明治四十年三月發行)

發行金額 二千三百萬磅(償還未濟額二二、八〇七、八二〇磅)
發行地 倫敦及ビ巴里ニテ半額宛發行
利率 年五分(利廻 五分三毛) 擔保 ナシ 償還期限 昭和二十二年三月

(四)四分利附佛貨公債(明治四十三年五月)

發行金額 四億五千萬法(償還未濟額 四三七、六四二、〇〇〇法)
發行地 巴里 利率 年四分(利廻 四分二厘一毛) 擔保 ナシ 償還期限 昭和四十五年五月

(五)第三回四分利英貨公債(明治四十三年六月發行)

發行金額 千百萬磅(償還未濟額 一〇、七九八、九〇〇磅)
發行地 倫敦 利率 年四分(利廻 四分四厘八毛) 擔保 ナシ 償還期限 昭和四十五年六月

(六)六分半利附米貨公債(大正十三年二月發行)

發行金額 一億五千萬弗(償還未濟額 一三五、七七六、四〇〇磅)
發行地 紐育 和蘭 利率 年六分五厘(利廻 七分一厘二毛)
減債基金 減債方法ニ關スル特別約款アリ
擔保 本公債存續中ニ特殊ノ歳入又ハ資產ヲ擔保トシテ公債ヲ發行スルトキハ本公債モ亦同樣ニ擔保セラルヽモノトス

償還期限 昭和二十九年二月

（七）六分利附英貨公債（大正十三年二月發行）

發行金額 二千五百萬磅（全額未償還）
發行地 倫敦 利率 年六分（利廻 六分九厘六毛）
減債基金 減債基金ニ關スル特別約款アリ
擔保 六分半利附米貨公債ト同樣ノ約款アリ
償還期限 昭和三十四年七月

（八）第一回滿鐵社債（明治四十年七月發行）

發行金額 四百萬磅（全部未償還）
發行地 倫敦 利率 年五分（利廻 五分二厘二毛）擔保 ナシ 償還期限 昭和七年七月
政府肩代 大正九年十二月日本政府ニテ承繼

（九）第三回滿鐵社債（明治四十一年十二月發行）

發行金額 二百萬磅（全部未償還）
發行地 倫敦 利率 年五分（利廻 五分一厘八毛）擔保 ナシ 償還期限 昭和七年七月
政府肩替 大正九年十二月日本政府ニテ承繼

（一〇）第四回滿鐵社債（明治四十四年一月發行）

發行金額 六百萬磅（全部未償還）
發行地 倫敦 利率 年四分五厘（利廻 四分六厘四毛）擔保 ナシ 償還期限 昭和十一年一月一日
政府肩替 大正九年十二月日本政府ニテ承繼

以上の外債總額十五億九百餘萬圓、内償還額五千八百萬圓、現在高十四億五千一百萬圓、平均利廻りは五分二厘强である。

一朝鮮人としての考察
(朝鮮問題の眞髄について)

辛泰嶽

一、緒言―朝鮮問題の歴史的考察

朝鮮問題は拓殖省官制問題と關聯して、今や日本政界に於る中心問題となりつゝある。然るに果して朝鮮問題なるものが、政府の主張と政府の辯解的説明の如き範圍内に於て論じ得べき問題であらうか？

顧れば、朝鮮問題は日本の獨立自存のために、換言せば、支那を舞臺とせる西力の東漸、殊に露西亞の朝鮮を通じての帝國主義的態親は、朝鮮問題を、日本の朝野に喚起せしめた。此の時代の朝鮮問題は、單なる、日本の國防、又は安固のための、消極的意義を持つに過ぎなかつた。是れ日本に於ける朝鮮問題の第一期である。然るに日本が日清戰爭に依り、南に臺灣を得、日露戰爭に依りて、北に樺太を占むるに及んで、始めて朝鮮問題は、積極的意義を持つに至つた。日本は島國である。何うしても、大陸への進展を圖らざるに於ては、日本は自滅する他途がない。是れがその第二期に於ける朝鮮問題の意義である、斯の如き必要に迫られて行はれたる大陸への發展、海外への移民は畢に各地の排斥を受け、アメリカに於ける日本人排斥、支那に於ける日貨排斥を見るに至つた。玆に於て朝鮮問題は、原料の供給地として、又日本内地の製品の販賣地、資本の投下地として、重大なる意義を持つ事となる。是れ、その第三期に於ける朝鮮問題の意義である。この意義に於ける朝鮮問題は、今尚ほ存續して居る。官邊の宣傳は主に夫れである。「朝鮮は人口稀薄にして、未開地多く、地味は肥沃にして、農業は改良の餘地多く、僅少の資本にて多大なる利益を得る事業は幾らでもある」是れが、朝鮮への農業移民を奬勵する、官僚的宣傳である。然らば果して朝鮮の事情は是等の宣傳と一致するや？

朝鮮は確に生産政策上、原料特に農産物の供給地として日本に貢獻した。又製品の販賣地としても、他に劣らざる地位を占むるに至つた。且又朝鮮の勞働賃銀の低廉、其他の事情は、朝鮮に於ける商工業の勃興を見るに至り、内地の資本は滔々と朝鮮へ流入した。而して其の結果は朝鮮産業發展の不均等、朝鮮産業革命に依る下層階級の窮乏化を齎した。由つて、社會には現代的意義に於ける、階級的對立を激成し、是れに依る過剩人口は、海外へ流轉するの止むなきに至つた。斯の如き海外への流轉は支那特に滿洲に於ける朝鮮人歸化問題を惹起し、日本内地、特に勞働界に於ける朝鮮人問題となりて現はれた。この現

象は沓々をして「朝鮮人口問題を解決するに非れば日本人口問題は解決を得ない」との極論まで耳にすることを得せしめた。(猪谷氏著朝鮮經濟史第一九七頁參照)

即ち朝鮮問題は既に其の本質に一大變動を來たした。現下の日本に於ける朝鮮問題は、早や第三期を離れて第四期に向ひて進んで居る。此の第四期に於ける朝鮮問題の意義は日本の大陸的野望でもなければ、經濟的搾取の期圖でもない。果た又朝鮮を如何に統治するかの問題でもなくして、朝鮮は何處へ往くべきかの問題である。實に朝鮮問題は將に日本の存亡――特に人口問題に關して――の問題とならんとしつゝある。是れが日本の現今に於ける朝鮮問題の眞髓でなければならない。即ち朝鮮問題の要點は朝鮮の人口問題であり、朝鮮の人口問題は日本の人口問題である。以下朝鮮問題の眞髓たる朝鮮人口問題に就て述ぶるであらう。

二、朝鮮人口の增加率と密度

朝鮮は昔より農業を國本として平和なる社會に、裕かなる生活を續けて來た國である。一面は大陸に接し三面は海に臨みて、陸産に、海産に、何に一つ不足を感ずることなく、子々孫々、相傳へて來た國である。此處に現代的意味に於ける人口問題なるものあることなきは勿論である。然るに之れが明治四十三年の日韓併合を劃期として、日本移民の激增、日本の金融資本による朝鮮搾取は、竟に朝鮮人口問題なるものを生ぜしめた。左に朝鮮人口の實增加率を示せば

朝鮮人口の實增加率

年次	人口數	指數
明治四十三年	一三、三一三、〇一七	一〇〇
大正 元年	一四、八二七、一〇一	一一一
同 五年	一六、六四八、一二九	一二五
同 十年	一七、四五二、九一八	一三一
同 十四年	一九、〇一五、五二六	一四二
昭和 元年	一九、一〇三、九〇〇	一四三

更に、世界各國の人口增加に關する比較研究の爲め、最近二回の人口調査期間に於ける毎年平均增加率を示せば左の如し(太陽年鑑昭和三年版第三七七頁參照)

日本	内地	一三・一%
	朝鮮	二四・九
	臺灣	一七・九
オーストラリア		二〇・一
カナダ		二〇・〇
丁抹		一七・一
オランダ		一四・五
イタリア		一〇・六
スウエーデン		六・七
英吉利		四・四
スウエッツル		三・五
獨逸		二・三
白耳義		△〇・三
佛蘭西		△五・五

右表に依りて朝鮮人口の增加率が、世界無比の非常なる高率にあること、一目瞭然である。又更に、朝鮮人口の動態を知るため人口千に對する出産の割合を、年次別且つ種族別に示せば左の如し

朝鮮人口千に對する出産の割合

年次	日本人	朝鮮人
大正十年	二四・二五	二九・八五

大正十一年	二四・七三	三四・〇二
同 十二年	二二・八九	四〇・六九
同 十三年	二三・七〇	三八・六四
同 十四年	二三・九九	三八・四一
昭和 元年	二三・七九	三五・七六
右平均	二三・八九	三六・二二

右表に依りて朝鮮に於ける日本人の生產率は朝鮮人の生產率より低率である事を知る。其の理由としては(1)朝鮮に於ける內地人は獨身者の比較的多いこと、(2)朝鮮の氣候風土が日本人に適せざること。等を擧げることが出來る。是れを日本內地の出生の割合に比較せば、

日本の生產率

大正十 年	三五・一
同 十一年	三四・二
同 十二年	三四・九
同 十三年	三三・八
同 十四年	三四・九
昭和元 年	三四・八
右平均	三四・六

即ち、朝鮮人の出生率は、世界一の多產國と稱する日本內地の出生率よりも、より高率であることを知るに足る。又更に是れを世界列國の生產率と比較せば、左の如し（朝日常識講座第一卷第五七頁の所揭數字に依る。左表中各國名下の數字は平均を算出した年數）

列國出生率の比較

日本	(27)	三三・〇
洪牙利	(25)	三二・〇
西班牙	(27)	三一・九
葡萄牙	(23)	三一・六
伊太利	(25)	三〇・一
和蘭	(26)	二八・六
墺地利	(24)	二八・一
獨逸	(27)	二七・一
丁抹	(25)	二六・五
諾威	(27)	二五・七
英吉利	(26)	二四・二
瑞西	(27)	二三・四
瑞典	(27)	二三・三
白耳義	(24)	二二・五
佛蘭西	(20)	一八・四

上揭の統計に依りて知らるゝが如く朝鮮人の出生率は世界無敵の高率である。然るに出生の反面には死亡がある。出生率より死亡率を減じたるものが、眞實の意味に於ける增加率である、この自然增加率の比較、詳言せば最近二回の人口調査期間に於ける每年平均出生と死亡との差減率を、參考までに示せば左の如し（昭和三年版、太陽年鑑に依る）

日本 內地	一二・五%
日本 朝鮮	一二・七
オーストラリア	一五・三
カナダ	一四・七
丁抹	一一・五
オランダ	一三・四
イタリア	六・九
スウエーデン	七・八
英吉利	七・九
スウエツル	六・三
獨逸	三・〇
白耳義	二・六
佛蘭西	△二・六

右表に依り、吾々は朝鮮人口の自然增加率

が内地よりも高く、世界を通じて、オーストラリア、カナダ、オランダ等の三國を除くの外、首位を占むるを知ることが出來る。此の統計に現はれたる朝鮮人口の自然增加率の中には、朝鮮に於ける日本人の低き自然增加率も包含平均せられたるものなれば、其の實、朝鮮人の自然增加率は、より高率なることを、付度するに足る。斯の如き高度の自然增加率を有する朝鮮人の住む所の朝鮮をして、そのまゝ放任しても、遠からざる將來に、當然人口過多を生ずべきは、自明の理なるに拘はらず朝鮮には不自然にも、日本人の大移住、支那勞働者の襲來ありて、人口の上、勞働市場の上に不治の病根を植付けて居る。並に明治四十三年以來、來住移住せる外國人及び日本人の數を示せば左の如し。

年次	日本人	外國人	合計
明治四三年	一七一、五四三人	一二、六九四人	一八四、二三七人
大正元年	二四三、七二九	一六、五八九	二六〇、三一八
同五年	三二〇、九三八	一八、〇一二	三三八、九五〇
同十年	三六七、六一八	二五、九四二	三九三、五六〇
同十四年	四二四、七四〇	四七、四六〇	四七二、二〇〇
昭和元年	四四二、三二六	四六、五四一	四八八、八六七

此の來住又は移住に依る、朝鮮人口の增加は又非常なるものである。斯の如き來住の反面には往住、即ち朝鮮人の流離がある。此の來住往住による增加率、換言せば、實增加率と自然增加率との差に付き、列國の比較を示せば左の如し。（同上大陽年鑑に依る）

日本	内地	〇・六
	朝鮮	一二・二
	臺灣	二・三
オーストラリア		四・八
カナダ		五・三
丁抹		五・六
オランダ		一・一
イタリア		三・七
スウエーデン		一・一
英吉利		三・五
スカエツル		二・八
獨逸		〇・七
白耳義		二・九
佛蘭西		二・九

即ち、現今の朝鮮は追ふものと追はれるものゝ交際地の觀がする。この追ふものと、追はるゝものゝ差によりて、朝鮮人口は多大なる影響を受くる。高率の自然增加に、加ふるに前述の如き異民族の大なる侵入は、朝鮮人口の密度の上にも現はれて、現今に於ては實に平均一方里に付き人口一千三百三十八人八分（昭和元年末統計）と云ふ數字を示すに至つた。更に密度の增加に關する統計を次に示せば左の如し。

平均一方里ニ付人口（密度）

年次	人口	指數
明治四十三年	九三〇・二	一〇〇
大正元年	一、〇三六・〇	一一一
同五年	一、一六三・二	一二六
同十年	一、二一九・五	一三一
昭和元年	一、三三四・八	一四三

右の統計に表はれたる密度は是れ人口を土地にて割りたる數にして、朝鮮の如き山國に於ては、稍々その正確を缺く嫌がある　而して若し是れを　人口÷耕地　とか、又は　人口÷(土地生産力＝土地×生産率)等の式によりて算

出せば、より高度なることを知り得るであらある。

年次	輸移出	輸移入
明治四三年	一九、九一三、八四三円	三九、七八二、七三六円
昭和元年	三六三、九五四、八〇〇	三七二、一六九、七八三

尙ほ農業に於ける耕作面積を見るに

年次	田(畑)	水田(田)	其他	合計
明治四三年	一、六一七、一三六町	——	八四七、六六八	二、四六四、九〇四
大正五年	二、二四九、一七八	一、二四〇、三二五	二八五、五七七	三、八七五、〇八〇
昭和元年	二、八〇四、七九九	一、五七四、一五六	—	四、三七八、九五六

三、朝鮮産業の發展と朝鮮人の沒落

朝鮮の産業は近時非常な速度を持つて發展して往く。或ひは農業に於て、或ひは水産業に於て、また林業、工業、鑛業、其他各種の産業に於て、悉く發展の形勢を示すのは事實である。明治四十三年に於ては生産額三億六百萬圓、輸移出入額六千萬圓に過ぎなかつたものが、大正十一年に至つては生産額十五億九千萬圓に達し輸移出入額四億七千萬圓を算し併合當時に比するときは生産額に於て、約五倍、輸移出入額に於て、約八倍を示して居る。尙ほ大正十四年度の生産額を見れば農産物に十三億四千一百二十四萬七千圓、林産物に五千三百四十八萬六千圓、水産物に八千五百八十二萬五千圓、鑛産物に二千八十七萬六千圓、工産物に二億九千五百二十萬四千圓、合計十七億九千六百六十四萬一千圓である。是等の事實は、彼の貿易關係を見ても明かである。

更に工業の方面を見れば、明治四十四年の統計に於て、工場數二百五十二、機關數百四十八、馬力數六千五十八、生産品價額一千九百六十三萬九千六百五十圓でありしものが、昭和元年には工場數四千二百九十三、機關數二千五百七十六、馬力數十二萬八千七百三十、生産品價額三億六千五百八十四萬九千三百十七圓を算するに至つた。又朝鮮に本店を有する會社數を見ても、明治四十四年には日本人設立會社百九所、朝鮮人設立二十一所、日鮮人合同十六所に過ぎなかつたものが、昭和元年には、日本人設立九百七十四所、朝鮮人設立百八十四所、日鮮人合同百十三所、外國人設立二所、日鮮外人合同三所に達した。其他各方面に於て、朝鮮の發展は著しき事實である。その綜合事實として、鐵道發達の累年の比較を見れば、

年次	國有鐵道	私設鐵道	合計
明治四三年	六四〇・三哩	五・八哩	六四六・九
昭和元年	一、二四一・六	六四七・三	一、八八八・九

斯の如く長足に發達する朝鮮の産業が、その朝鮮人に對する關係は如何? それは正反對の事實を示して居る。

先づ納稅額より日鮮人の富の差異を見るに、百圓以上の納稅者數は、

年次	日本人	朝鮮人	外國人
大正元年	八五七	一、七一三	二
昭和元年	三、七八三	三、六四三	二九

即ち大正元年に於ては朝鮮人の百圓以上の納稅者數が、日本人より八百五十六人程多かつたものが、昭和元年には、逆に日本人の數が朝鮮人に優ること實に百四十人となつた。之れは苟しくも朝鮮に於ける裕餘階級間の比較であるが、更に貧窮階級間の比較を見れば、

尙ほ驚くべき現象である。斯の如く、日本人による朝鮮人の富の略奪は朝鮮人の中產階級以下のものを急激に沒落せしめて、彼等は、擧に生活を求めて流離せざるを得なくなつた。

日本人の官吏が增し、東拓の移民が增し、日本人による朝鮮產業の發達の度が加ふるに從つて、朝鮮人の貧民は增し、流離の民は激增せられ、海外移住の敗殘者は其の數を增す、情深き故土を背後に、飢えて泣く婦女子を携へて、或ひは荒蕪な滿洲に、或ひは寒風身を刺す西比利亞に、或ひは風俗人情の異なる日本內地の勞働市場に、當なき流浪の旅に立たざるを得なくなる。是れ朝鮮產業の發達と共に、朝鮮人に課せられたる必然の運命である。

朝鮮人海外移住累年統計

年次	北間島	西間島	其他	合計
自明治四三年九月至大正四年末	四二、九六〇	三六、四五〇	一三、八六九	九三、二八一
大正六年	七、七一八	四、九九五	六、一九八	一八、九一一
同八年	一一、七六三	二五、三七二	七、二〇九	四四、三四四
同十年	五、〇五八	二、四二三	五、六七二	一三、一五三
同十二年	四、四五〇	一、四五四	一、六四一	七、五四五
同十四年	五、一二一	一、五七一	三、〇五二	九、七四四
昭和二年	一八、八九一	四、七四九	六、三五七	二九、九九七
總累計	一四五、八六五	五六、六六四	六七、三九九	四二〇、〇二一

（右累計は大正七、九、十一、十三、十五年度の移住者も加へたる合計である）

又日本內地に移住した者は

自明治四三年至大正七年	自大正八年至同十二年	自大正一三年至昭和二年	合計
三三、四四二	五六、〇〇四	六九、六六九	一五〇、〇八四

右の統計は勿論正確なものではない、唯知れたものだけを計算に入れたものに過ぎない。從つて吾々は此の外に無數の海外移住者あることを知ることが出來る。尙ほ朝鮮總督府調査の朝鮮人海外分布を見れば

北間島	二九一、四〇〇人
西間島	一七八、二六五
中東線	一〇、七四五
吉林地方	四四、二一七
關東州	九〇
中國本部	約三、〇〇〇
勞農聯邦	三一四、三六二
北米地方	一七、〇〇〇
英國	二〇
合計	八五九、一八九

是等移住者の內には、日韓併合に對する政治的不滿より本國を離れて漂流するものも少なくない。がしかし其大部分は生活難に逐はれて止むなく本土を離れたものである。從つて其の確かなる數字を示すことは至極困難である。而して朝鮮人海外居住者の數を、或ひは百五十萬と謂ひ、或ひは三百萬と謂つて、未だ定まつた數を謂ひ得ないが、去る大正十二年九月末の朝鮮總督府警務局の統計に依れば、日本內地に於ける在住者を除いて、八十五萬七千百九十九名と謂ふ、この數字は信憑すべき確かなものではない。その調査方法が在外日本官憲の勢力範圍內、又は可能範圍內に於ける調査に過ぎない。故にその範圍外のものを前記數字の約五割と見積り、夫れに日本內地の居住者を約二十萬として、之れを概算し、少なくとも百五十萬には達すると見るのが正當であらう。

而して其の流離の趨勢を當局の調査に依りて之れを見るに日韓併合の歲、卽ち明治四十三年より大正七年までの九年間は日本內地を含めて十二萬四千二百八十六名であつたの

が、獨立宣言の大正八年より昭和二年までの九年間は二十九萬五千七百二十六名を算するに至つた。此の大正八年(己未運動の歳)を中心にして前の九年間と、後の九年間に於ける移住者の數の大なる差隔は、取りも直さず朝鮮人の海外移住者の激增を物語るものである。是等移住者の大部分は日本の帝國主義的進出に依る朝鮮産業發達の結果の犧牲者であることは、前にも少し觸れて置いた如くである。即ち「朝鮮は發展するも(否!それと正反對に)朝鮮人は沒落する」、是れ目下朝鮮の現狀である。

四、朝鮮産米增殖と全鮮飢饉

朝鮮の一般の産業が長足の發展を示すことは、前述の如くなるも、之れと共に朝鮮の農業も近年非常なる勢を以て發展して來た。産米は、その作付反別に於いて、收穫高に於いて、又は反當收穫に於て、悉く增加し、而して日本內地に向つての移出を盛んになし、日本の食糧問題の解決に貢獻すること大である。左に米の輸移出量を示せば

年次	總輸移出量(石)	指數	移出量(石)	指數
明治四四年	五四四、〇三三	一〇〇	三〇八、九八二	一〇〇
大正七年	二、一三〇、一五一	三九〇	二、二一九、八〇三	六八六
同十四年	四、七五八、〇六八	八七七	四、七四五、〇六六	一、五三七

斯の如く每年莫大なる産米を日本の市場に送るが、之れ果して朝鮮內の需要に滿たした餘分の移輸出であらうか? 吾々は此の莫大なる米の輸移出を見ると同時に、又次の事實を見ることが出來る、即ち外國米と粟の輸移入是れである。日本內地への移出米が多くなればなる程、是等代用食の輸移入も又多くなること次表の示す如くである。

粟輸移入高

年次	支那及其他(石)	指數
大正元年	六九、九一六	一〇〇
同 八年	九一五、六六九	一、三〇九
昭和元年	五、二四三、四六三	七、四九九

右の現象は全く朝鮮の殖民地的犧牲に依る結果である。この現象は更に日本內地に於ける食糧問題と伴つて、彼の有名な朝鮮産米增殖計劃なるものを産んだ。この計劃の內容及び批判は、他の機會に讓り、茲では唯この計劃の成果と現在政府當局の米穀政策に少し觸れて置かうと思ふ。

元來朝鮮産米增殖計劃なるものは、その大部分が日本內地の食糧問題の解決のためであることは勿論である。そこに朝鮮のためだとか、朝鮮人のためだとか謂ふような觀念が無かつたことは、今次の古米朝鮮拂下問題によりて、一層明かになつたと思ふ。朝鮮に産米を增殖せしめて置いて、日本內地の米の市場に都合のいゝときは是れを利用するが、一旦都合が惡ければ、之れを防ぐ。而して更に年來買上げた政府所有の米が古くなつて、內地に於て無用となれば朝鮮に賣り飛ばす。是れ朝鮮に産米增殖計劃を實行しつゝある政府當局の二ノ手である。

斯の如き、繼子扱的の朝鮮に對する歷代の經濟政策は、朝鮮をして全く日本の經濟的附屬となならしめ、且つ日本の金融資本の無制限なる朝鮮侵入は一般的意味に於ける階級的懸隔を激成し更に朝鮮內に於ける差別的な經濟的保護は朝鮮人の經濟的沒落を齎した。

左に地主及び小作人の増減表を示せば

年次	農家戸數	大地主	地主	自作	自作兼小作	小作
大正八年	二、六六四、八二五	一六、二七四	七四、一一三	五二五、八三〇	一、〇四五、六〇六	一、〇〇三、〇〇三
	百分比	〇・六	二・八	一九・七	三九・三	三七・六
昭和元年	二、七五二、二一四	二〇、七三七	八四、三五九	五一九、三八九	九〇九、八四三	一、二一七、八八九
	百分比	〇・七	三・一	一八・九	三三・一	四四・二

即ち大地主及び地主が増加する反面に、自作と自作兼小作農が減少し、更に小作人の激増したことが分かる。この現象は朝鮮に於いて土地兼併が盛んに行はるゝを示すものであるが、その兼併たるや主に人種的に行はるることも容易に知ることが出來る。左に農業戸數百戸に對する日本人と朝鮮人の區別を示せば

	自作	自作兼小作	小作
日本人	三一・一	四一・四	二七・五
朝鮮人	二〇・六	三四・五	四四・九

右表に依つて、吾々は朝鮮人の大部分が小作人であり、日本人の大部分は自作、又は自作兼小作人、更に地主であることを知るべきである。斯くの如き朝鮮人の悲惨な狀態はその食米量にも表はれて居る。

朝鮮人食米量

大正八年	(斗)七、(升)一、(合)六
同九年	六、二、五
同十年	六、六、二
同十一年	六、二、二、三勺
同十二年	六、三、九
同十三年	五、九、二
同十四年	五、一、二
昭和元年	五、一、八

是等の食米量を日本内地の一人當消費量（大正十年及び十二年は大豊年にして何れも一石一斗五升三合、又昭和三年度は一石一斗三升八合である）に比較するときは實に莫大な差がある。之れも毎年減少する傾向を示して居るに於いては、朝鮮人の將來を卜することも難くないであらう。即ち朝鮮の農業は毎年發達して産米は増殖せらるゝも、朝鮮の飢饉は、之れと共に増して往くのである。この全鮮の飢饉狀態は、このまゝでは永遠に不治の病根となつてしまつた。茲に於て朝鮮人の流離を生じ、此の流離が東洋に於ける人口問題を醸成して居る。

五、結論

豫定としては、斯の如き朝鮮の現狀と思想的傾向に關して、少し觸れて見ようかと思つたけれども、餘り長くなるやうだから、是れに就ては後日の他の機會に詳細に論ずることとし、直ちに結論に入らうと思ふ。

以上を要約すれば、朝鮮問題なるものは、決して樞府で心配するやうな問題でもなければ、政府で辯明するような問題でもない。朝鮮總督が統理する諸般の政務を『拓殖大臣により内閣總理大臣を經て上奏をなし及び裁可を受ける』とか、直接に『内閣總理大臣を經て上奏をなす』とか、又は『朝鮮だけを拓殖省所管から除外する』とか、『拓殖省の名稱を變へる』とかと云ふような問題は、何等問題にならない問題を問題にして居るのである。

朝鮮問題の眞髓は、そんな卑賤的な論難のための口實の中にあるのではない。朝鮮總督

が天皇に直隷するとか、總理大臣の監督を受けるとか、所謂平大臣の下に位ゐするとか、又は一局に屬するとか謂ふことが、若し朝鮮民衆の自負心を損ひ、朝鮮統治上危惧を生ずるものと思ふものあれば、それは實に安價な統治策と謂はざるを得ない。

成る程、朝鮮は半萬年の歴史を有し、夫れ獨特な傳統と文化を持つて居る。而して自民族に對する自尊心と、自國土に對する自負心が、非常に强いことは、齋藤子の謂ふが如くである。が併し、その自尊心と自負心が、一總督の地位如何の問題と關聯して、統治の根本に重大な影響を及ぼすものであると思ふならば、何故に、その自尊心自負心が、日本人の總督を戴く場合（例へ天皇の直隷にしたとしても）に作用する關係には思ひ至らざるであらうか？私の見る所を以てすれば斯の如きは實に五十步百步の議論に過ぎないと思ふ。

然らば朝鮮問題の眞髓は、是れを他に求めなければならない。以上說明した如く、朝鮮問題の根本は、その人口問題に存する。朝鮮帝國の不均等なる發達、近代的資本主義の確立による階級對立の激成、全鮮に於ける飢饉の襲來等の事情は、朝鮮の民衆をして、其の土に安住せしめず、四方八方に流轉するの止むなきに至らしめ、殊に日本移民の大々的侵入、朝鮮人の高き自然增加率等は斯の如き趨勢を一層激甚ならしむ。而して生じたる過剩人口は或ひは日本の勞働市場を脅かし、或はは滿洲西伯利亞等に於いて、種々な問題を惹起して、實に朝鮮人は國際的厄介者となつたのである。その根本を探求して、其向ふ處を知る所に、朝鮮問題の眞髓がなければならぬ。

エンリコ・フェーリと犯罪社會學

—フェーリ教授の訃を悼む—

風早八十二

一、空想派犯罪學より科學的犯罪學へ
二、犯罪現象の社會的原因
三、フェーリの印象

一

イタリアのトスカーナの町に一人の煉瓦工が棲んでゐた。彼は正直で眞面目で善良な家父として通つてゐた。處が一日大きな不幸が彼を見舞つた。其日、工場で働いてゐた彼の頭に一片の煉瓦が落ちかゝつたのである。彼は人事不省に陷つたが手當の結果、外部の傷害は殆んど判らぬ程度に治療された。だが彼は此の打撃によつて生理的にも道徳的にも別人になつて了つた。彼は癲癇病者となつてゐたのである。今まで溫良であつた彼の性格は一變して、酒は飲む喧嘩はする仕事は怠ける、揚句の果は酒場で相客を毆つて監獄に入れられることになつた。彼は毆打傷害罪と云ふ通り一遍の罪名の下に懲役と云ふ通り一遍の刑罰を與へられ、否應なしに監獄に打込まれた。監獄——此の『生ける墓場』の生活が彼の癲癇を益々激發し、その性格をひねくれさせ凶暴に仕立て上げた事は云ふ迄もない。彼は遂に眞物の氣狂ひと看做されるに至つた。この外觀は彼を再び幸運に導く機緣となつたのである。彼はモンテルーポの精神病犯罪人病院に送られた。院長アルジエーリ博士は、患者の腦髓を綿密に診察した後、其處に骨の一裂片があるのを發見した。哀むべき煉瓦工の癲癇と一切の反社會性との內奥の祕密の扉は遂に開かれた。博士は古傷の周圍の頭蓋骨の一部に圓鋸術を施し、患者の腦髓の中にあつた一つの骨片を實際に除去する事に成功した。博士は更に進んで、手術の箇處に白金板を被らせることによつ

て患者の腦髓の保護を完了したのである。かくて患者の癲癇の發作は、永久に過去のものとなり、再び健全なる煉瓦師として復活するに至つた。之は一八九〇年頃アルジエリ博士が親しくフエーリ教授に語つた所である。

人間の意思は、此の煉瓦工の一例によつても判るように、獨立性と自由とを持つてゐるものでなくして、人類學的條件によつて制約されてゐるものである。これは十九世紀の後半に於てロンブローゾ教授が始めて科學的に證明した命題であるが、ロンブローゾにより『斯學の偉大なる使徒』(il grande apostolo della nostra scienza)と云はれた所の彼の門下の第一人者エンリコ・フエーリによつて完成せしめられ適用され宣傳された所である。ロンブローゾは手始めに犯罪人の頭蓋骨の解剖學的研究を爲したのではあるが、その所謂人類學的原因と云ふのは、ただに器官的要素にとゞまらず、個人の頭腦、及びその他の心理學的要素、更に人種的要素の影響にも及ばねばならない。例へばイタリアに於ける犯罪分布を見ると、狂熱的若くは身體的犯罪は北部から南部へかけて漸次その密度を増し、他方財産に對する犯罪は南部から北部へ進むに從つてその密度を増してゐる。これは一方に於て北部イタリアは南部に於けるよりも動産の發達が著しいこと、他方に於て、南部はサラセンの血が混じてゐると云ふ事實によつて說明されるものである。

だがフエーリは犯罪の人類學的原因の外に猶ほ物理的及び社會的原因を求める。犯罪の物理的原因は犯罪統計の示す所によれば、氣候、土壤の性質、季節、大氣の狀態、農産等であり、社會的原因として擧げられるものは人口の密度、輿論及び宗教の狀態、家族組織、教育制度、工業生産、酒精中毒、經濟的及び政治的組織、行政司法及び司法警察の組織、そして最後に民刑立法組織一般である。

フエーリ教授によれば、犯罪は以上に述べたような必然的現象であつて、一定の社會は、一定の條件の下に於て必らず或る程度以上の犯罪を有するが、然も決して或る程度以上を超えるものでない。即ち犯罪の量は、その社會の條件が許してゐる最下限から最上限までの間を上下してゐる波線を描くものであると云ふのである。この思想は、始め、統計學の泰斗ケトレーの『社會物理論』に於て、その萌芽を見出すことが出來るが、後にデユルケームの『自殺論』に於て統計的明證が與へられた。フエーリはこれを犯罪現象に適用して、『犯罪飽和の法則』と稱したのである。

かように犯罪を以て人類學的、物理的、及び社會的環境の相互的作用を原因として發生する必然的現象であると見る事はフ

エーリ教授に至つて始めて科學的體系に迄築き上げられた理論であつて、それ以前に於ては全く別の考へ方が支配してゐた。

ベッカリーアからカララに至る迄の空想派犯罪學では犯罪人を一の抽象的な又、ノルマールな人間として考へて居るのに過ぎない。強姦をした一切の人を單純にして抽象的な『強姦犯』として、一切の殺人行爲を『殺人犯一般』として而して凡ての窃盗行爲を一様に『窃盗』の型に入れてしまふ事を以て滿足して居た。然るに一々の強姦、殺人、窃盗には夫々具體的なる人類學的物理的乃至社會的の複雜なる原因の競合が存在して居るのである。それを意識しない所の思辨的犯罪學者――在來の裁判官はその典型である――は刑法典の條文に規定してある僅かばかりの犯罪項目のいづれか一に具體的犯罪をあてはめてしまひさへすれば能事は終つたと心得てゐる。彼等は犯罪人の人格とその人格の形成その行動の動因を探究しないで行爲にのみ拘泥する。だからどんな内容と歴史を背負つた行爲であつても、此の思辨的犯罪學者の手にかゝつたが最後、否應なしに刑法第〇〇條に入れられ次で監獄の第〇號室に放り込まれるだけである。多樣にして豐富なる人格がかくも極端に無視された揚句、終に無視さるべき人格もなくなるほどにすり減らされて出獄した者も、迫害と無職業と貧乏とによつて再び犯罪を犯すならば、裁判官は簡單に累犯の規定してある第〇〇條を以前の條文の上に貼りつけるのである。


右よりフイリッピン代表アルザーテ
氏　フエーリ教授　日本代表泉二博士
（岡部常氏撮影）

思辨的犯罪學は、中世以來の雜多にして獨創に富んだ一系列の刑罰――焚刑・四裂刑・車刑・絞刑・斬首刑・箕刑・栲問・終身若くは有期漕役刑・終身若くは有期追放刑・斬手刑・切唇刑・切舌刑・笞刑・烙印刑・謝罪刑・首枷・手枷・勞役刑・藁帽子を被つて町を引廻される刑・譴責刑・誡告・罰金・布施刑――を全廢して單一にして量的差異を有するに過ぎない『監獄收容』を以てした。資本主義は一切のもの（貞操でも名譽でも人格でも）をあげて金錢的量的性質に還元せんとする傾向を有するが此の制度の下に

於ては一切の刑罰までも一様化せしめられ、一切の犯罪はその複雑なる具體性を捨て去つて刑の期間の分量的長短によつて測定計量されることになつたのである。

此のような一律さは熱病に對しても肋膜に對しても齒痛に對してもその他萬病に對して一様に（たゞその量を一粒二粒ちがへるだけで）同一の萬能藥を勸める漢方醫の一律さである。

だが、今日の醫學及び社會衛生學はもはや漢方醫の空想主義とは根本的に區別されねばならぬ。ペストもコレラもチブスもそれ／＼の異なつた病原菌を發見する事によつて我々はその豫防注射を有效に行ひ、又、種痘によつて天然痘を防止する事が常識とされるに至つてゐる。社會衛生に於ても朝夕の齒みがきの習慣によつて齲齒を豫防する事が小學生によつてさへ實行される時代となつて居る。だのに、ひとり犯罪現象に就てのみ形而上學的な抽象論にとゞまつてゐてい丶わけがない。其處でフエーリ教授に從へば實證的科學的方法によつて犯罪現象の人類學的物理的及び社會的原因の複雜なる相互作用を考察し、これに對する複雜なる豫防方法を有效に施す事は、これ乃ち社會科學をして漸く社會衛生學發達の現代的段階に迄高める事になるのである。

此の見地に立つならば、在來の刑罰と云ふものは、一體、犯罪に對する鬪爭に於てどれほどの價値があるものであるかゞ既に察せられるであらう。卽ち、在來の道義的意味の刑罰は刑罰を科する立場に在る連中の自己滿足を買ふと云ふ役目を一先づ度外視して、苟くも、現實に犯罪を豫防しようと云ふ目的に對しては、もはや、萬能藥はおろか、殆んど價値なき手段の一であるに過ぎぬであらう。犯罪を根本的に防止し得べき手段は既に犯された罪に對して反射的に加へられる所の在來の刑罰ではなくして犯罪の原因の除去に在る。フエーリは、刑に代替すべき斯う云ふ手段を總稱して『刑の等價物』(Sostitutivi penali)と稱してゐる。今日の刑事政策の領域に於て問題となつた『保安處分』と稱するものがそれである。在來の刑罰は今や二つに一つの選擇を強いられてゐる。從來その中に盛つてゐた內容を捨て丶保安處分を置き換へるか。或ひは刑罰の名稱を在來の內容と共に捨て丶しまふか。新らしい酒は所詮新らしい革袋に盛られねばならぬとすれば、その途は恐らく後者に過ぎぬであらう。

だが、この途はなほ遠く峻しい。蓋し若し眞に、フエーリの理論を徹底させるならば、『刑の等價物』は或ひは社會組織の根本的弊害に對する救濟策を意味することにならねばならぬであらうから。其處で、私は、今少し、フエーリの理論の根本に批判を加へることを餘儀なくさせられる。

二

此處に問題になるのはフエーリが唱へた犯罪の『社會的原因』である。

　元來フエーリ教授には『社會主義と犯罪性』（トリノ、一八八三年）、『社會主義と實證科學』（ローマ、一八九四年）などの著書があり、マルクス主義とダーウインの進化論との調和を以て犯罪現象の原因を探究し、政界に乘り出しては忽ちイタリア社會黨の首領になつたほどであるから、犯罪の社會的原因を重要視してゐる事に多言を要しない筈である。だが、若し正確にフエーリ教授の所論を傳へんとすれば、此の點に於ける彼の折衷主義的態度をも亦看過するわけにゆかない。彼れによれば『一國の經濟的條件はその政治的道德的知的條件を決定するが、その經濟的條件は夫自體更に他の諸要素の結果である。例へば貧乏は、戀愛や友愛の感情を不可能ならしめ、家庭の團欒を破壞するが貧乏だけでは現實に犯罪を發生せしめるに足りない。病理學的精神狀態が之に加はつて始めて子殺しも出來るのである。又、性的犯罪は春夏に多く冬は少量になるし、財產的犯罪は冬になつて却つて增大するが、之なども氣候の要素と社會的條件の要素との結合の結果に外ならない』と。

だが、若しフエーリがマルクス主義者を以て任ずるつもりならば、さう云ふ考へ方をしてはならなかつたのではないだらうか。

　今日では大多數の犯罪學者は經濟的條件が多かれ少かれ犯罪發生に對して一の重要な地位を占めて居ることを認めてゐる。然し論者によれば經濟的條件以外の條件も亦、有力に影響を及ぼしてゐると云ふのである。それでは史的唯物論の設定した經濟的條件と隔る事遠い。

　或る小數の論者は、經濟的要素の影響は最も首位を占めると云ふ。それだけならば異論はない。所がそれらの「論者も多くは「經濟的要素」と云ふ語に極めて狹い意味を與へてゐる。此の語の下に彼らは單に貧乏と富とを包含せしめる。而して、又彼等は之らの現象が夫自身說明を要せざるや否や、又、經濟的條件が社會の全構成に大なる勢力を有せざるや否やを疑問としない。彼れは、經濟的現象を以て、社會生活の他の諸方面と同樣な價値を有する現象として考へてゐる。換言すれば、大概の論者は生產の現代的態樣及び其の歸結を說明する事を閑却してゐる。

　『午併、私の意見によれば、經濟的條件は、一の全く異なつた地位を占める。それは社會的建築物が橫はる基礎である』。（ボ

ンガー「犯罪態と經濟的條件」第二四四頁）。

反社會的性格としての犯罪性と云ふものは一體何によつて發生せしめられるのであらうか。

第一に、私有財產と交換と分業による現在の經濟組織の個人主義的、分立的、非計畫的特質が、社會的感情を弱めるのである。交換による組織は、各人の利益をして常に對立關係にあらしめる。これは資本主義が他の經濟組織と異る根本的特徵である。而もそれだけではない。生產手段の所有と非所有の關係はプロレタリア階級を發生せしめる。彼等は勞働力以外に身を支へるものがない。止むを得ず、その力の限り勞働する事になる。その結果は人間に於てのみがかち得る所の社會的本能や生き〱とした活力的な感情を發達せしめようがない。殊に、此の事は幼年及び少年勞働者に對して甚しい。又此の事は、絕えず不就業に惱まされる第三層第四層の產業豫備軍には著しい。

婦人犯罪に於ても同樣である。婦人犯罪に就ては、直ちに、生理的理由、例へば、月經と犯罪の關係などを重要視する論者もあるが、これは眞の原因ではない。何よりも大切な事は、犯罪婦人は九割以上も極貧者にあると云ふ統計さへ示してゐる國のあることとである。この事實は月經では說明出來ない。婦人の意識の統一性をこわす所の貧乏である。大切な事は月經でなくして、月經の時にも何らの安靜をとる事を許されず、外に出て普通の勞働を强いられる環境である。有產者の婦人は犯罪率零と云ふ統計を示してゐる場合ある事は、有產者婦人に月經のない證據ではなくして、以上の事を裏から根據づけるものに外ならぬ。

賣淫制と犯罪と云ふ事、酒精中毒と犯罪と云ふ事、これ凡て賣淫或は酒精中毒を現在の經濟組織の結果と見る事に依つて判然してくるのである。

又、所謂、性的犯罪と雖も、やはり經濟的條件に制約されてゐる。先づ姦通罪は離婚を不可能ならしめ又は困難ならしめてゐる所の現在の社會組織と直接關係がある。

第二に、成年に關する性的犯罪は、未婚者に特に多い。而して結婚統計により、婚姻の數は、經濟事情に依つてゐるから、これ亦、その間の關聯は明白であらう。而して性的犯罪を犯すものは絕對多數的に讀み書きを知らぬもの、全然性的道德のない性的生活を動物的方面からのみ眺めてゐる環境に育つたものである事も亦、同樣の結論に導く。

以上は社會を其構成の過程から眺めた場合に過ぎないのであつて、現實の社會は今日に於て階級的に分裂を來してゐることを看過してはならぬ。フエーリの犯罪社會學は此の點を明確に

してゐない。從つて新興階級を背景とする政治犯罪は彼の學說をそのまゝ踏襲する學者によつては到底理解され得ない。私はその本質の批判を別の機會にゆづらう。

三

エンリコ・フエーリの謦咳に親しく接するの機を得たのは、一九二五年八月六日、ロンドンから少し離れた王宮ウインゾール・キャッスルに於てゞあつた。世界大戰後始めて開かれた國際監獄會議に列席した各國の代表が其處に一日の淸遊を試みてゐた。ロンドン見物旁〻その會議を傍聽してゐた私もそれらの代表に追隨して――平素は滅多に拜觀出きぬと云ふ――其の城を訪れたのである。八月とは云ひ乍らイングランドは深い雲に蔽はれがちであまつさへその日は降りみ降らずみ、霧のようなものを頰に感じる空模樣であつた。灰色の大氣の下に無氣味に橫はつてゐる巨大なウインゾール・キャッスルの其饗應場でフエーリ教授夫妻と私共は最初の言葉を交はすことになつた。彼の頭には皺のような白髮が豐かに殘つてゐたし、純白の口髭顎鬚が美しく光つてゐた。そしてその巨大な頭骸、その偉躯、熱の籠つたその會話！ これが七十歲の老學者？ と云ふよりは、流石に、其の昔議政壇上に獅子吼した社會黨首領の俤を偲ばしめるものがあつた。彼は滿身元氣に充ちゝ、記憶力も明晰であつた。日本人が極めて智的であること、イタリア學派をよく咀嚼してくれること、日本は牧野教授と云ふ新派の世界的刑法學者を有すること、死ぬまでに是非日本に行つて講演がしたい等々私は話にきゝ惚れて、饗應になる筈の紅茶を飮みそこなつて了つた。別れるに臨んで教授は詳しい番地や地圖を書いて『ローマに來たら是非やつて來い。何なりと世話をしてやる』との言葉を殘された。

翌年一月から三ヶ月あまり、私はローマにフエーリの家のすぐ傍に滯在して犯罪社會學の研究に着手した。で、教授の殘された言葉の通り或る日其家を訪れた。

辯護士法學博士教授の肩書のついた標札が揭げてある一階のアパートメントを訪れると相當廣い部屋が幾つかあつた。その最も大きな部屋が研究室兼事務所になつてゐて、その四圍の壁は天上まで書棚がしつらへてあり、世界中の刑事學的文獻がギッシリつんでゐたし部屋の中には大きな机が縱橫にあつて刑事學關係のあらゆる雜誌が竝べられてゐた。或る一つの棚には彼の名著『犯罪社會學』の譯本がヅラリと竝んでゐた。その中の一つは山田吉彥氏の日本譯(全二卷)であつた。教授はそれを取出して『これは牧野博士が贈つてくれたものだ。日本にも私の

書物の譯が出た事は實に嬉しい。」『此の譯者――山田と云ふ人――は何をしてゐる人、――等と尋ねておられた。客間に通ると世界各國のフエーリ崇拜者から贈られた無數の紀念品が飾られてゐた。

フエーリはイタリア第一のローマ大學の刑法講座の唯一の正教授であり、大學附屬の犯罪學應用學校の校長をも兼ねておれる傍ら、更に辯護士でもあつた。自家用の自動車を乘り廻して目まぐるしい忙しさであつた。私も之に乘せられてローマ大學にフエーリの講演をきゝに行つた。フエーリは劈頭、偉人ムツソリーニの治下に在るの光榮と喜悅とを披瀝して後、イタリアの實證派犯罪學が今や全世界の文明國を征服しつゝあることを證明しようとしておられた。フエーリが昔社會黨の首領であつたことを思ひ合せると其處に――ムツソリーニ禮讃の言葉の中に――彼も亦老いたりと云ふ感を起させるものがある。が、當のフエーリは案外平氣でやつてのけておられた。私は更に學長デルヴエキオその他の士に引合はされた。夜の犯罪學應用學校に、フエーリと四十名餘の熱心な學生との質疑應答を傍聽したことも再度であつた。其の頃私が着手してゐたベツカリーアの「犯罪と刑罰」邦譯に就ての助言も受けた。その間終始變らぬ親切な導を彼は惜まれなかつたのである。そのフエーリ教授が去る四月十二日の午後十一時四十六分遂に逝かれた。あの慈父の如き面影が今も猶ほ髣髴としてゐる。私は今、哀悼の奥底から靜かに彼の七十四年の生涯を省みる。それは高く聳へた實證派の記念碑に外ならぬ。よかれ惡かれ彼は實證派犯罪學そのものである。だが、我々の任務は？ 彼の實證主義の折衷的特質を認識すること、換言すれば、實證主義を眞に徹底せしめ、之を止揚する或るものに迄到達することではあるまいか。これを以て追悼の辭に代へる次第である。

（一九二九年五月九日）

アメリカニズムとルシアニズムの交流

新居　格

A　アメリカとロシヤとの對立面と交錯線

アメリカとロシヤとの對立面は、前者が資本主義を組織の核線にしてゐるに對し、後者は社會主義を主軸としてゐる點である。今のロシヤの社會主義がどこまで社會主義的であるか、むしろ社會主義的彩色をもつた國家資本主義でしかありえないのか、さうした研究は自ら別問題であるが、兎にも角にも今のロシヤを支配してゐるものはコムミユニストである。事實それがどの點まで無產階級的施設に於いて成功し若くはしつゝあるかどうかの事實もまた問題が別になる。だが、彼等はコムミユニズムを根柢として各般の施設を意思しつゝあるとだけは明白に云へる。であるから、勞農ロシヤは社會主義を主軸として兎にも角にも立つてゐる。その點で、ロシヤとアメリカとは對立してゐる。

アメリカは資本主義組織をその社會形態の核心にしてゐると云ふ見方に何人にも異議のある筈はないが私はアメリカの資本主義即ち高度に發達した機械力の應用、合理化の傾向——例へばフォードの經營形態の如き——等を舊來の資本主義にたいして、ネオ・キヤピタリズムと特に指稱してゐた。しかし等しく資本主義的機構である限り、さうして結局資本主義者の資本主義的な社會圖案である以上、合理化の姿態を見て直ちにネオ・キヤピタリズムと指稱したのは私の餘計な心遣ひであるに過ぎなかつたのである。

それは兎に角として、アメリカの資本主義に對いして明らかに二つの見方がある。一つは現在のアメリカの經濟現象―かの高度に發展した機械主義によるマツス・アンド・スピード・プロ

ダクション・テエイラリズの適用に仍る能率主義、産業の合理化、―新しい經濟現象はマルクスの豫想し得なかつた狀態、マルクスの批判對象としての資本主義とは著しく形相を異にしたものであり、むしろ資本主義を共産主義の壁一重にまで背中合せをすべく發展させたもので、從つてあれだけの高度極盛の資本主義の發展は沒落崩壞への途に急ぎつゝあるよりも社會主義的歩武を取りつゝあるとなす見方、もう一つは現在アメリカに於けるが如き技術の素晴らしい進歩によりてなされる資本主義即ち「同一の勞働者がより大なる、より複雜な機械を運轉し、同等の勞働力の支出をもつて、同一の使用價値を有する商品を遙かに、より大量に生産する」ところの「勞働の生産性の増進」と「規準化、標準化、同型化による勞働時間の節約」とによるそれらはマルクスの純粹資本主義に接近するもので、「生産の可能性と販賣の可能性との間の矛盾の尖銳化に導き、深刻な經濟危機のより急速な連續へ導く」と見る見方である。後者はヴアルガが「世界經濟年報3」に於いて示すところの見解である。（右の文中「　」は經濟批判會譯に據る）

アメリカ現在の資本主義をマルクス的に見解すると否とに拘らず、それが資本主義の形態であつてそれ以外ではなく、ロシヤの社會主義がマルクス的國家資本主義の實體であると否とを問はずその意圖に於いての社會主義を尊重してアメリカとロシヤとの間には對立の斷面があることは指摘され得ていゝことである。

それと共にそれは全面性に於いての對立でなくて、一面に於いて交錯線を持つとも云へる。交錯線をもつてゐると云ふよりはロシヤがアメリカニズムの線條を攝取したことである。その點を富士辰馬氏は「オブローモフ性とアメリカニズム」（「ソヴエート藝術」五月號）の中でよく記敍してゐる。

「自國の工業を資本制國の工業から獨立させ、從來の農業工業國を工業農業國に轉化し、以て他國の工業に追ひつき他國の工業を追ひ越さうと是れ努めてゐるのが今日のソヴエート・ロシヤであり、これがために「西ヨーロッパとアメリカの經驗と科學の最も完全な利用」に馳突するのが今日のボリシエヴイーキである。そこで、この數年來、アメリカニズムの輸入が殊に顯著となつた。アメリカの技術はどしどしとソヴエート・ロシヤに輸入される。ソヴエート・ロシヤに新しく建設される企業でアメリカの技術家が參加してゐないものは殆どないであらう」と云ひ「レーニンはロシヤ人の中に深く生殘つてゐるオブローモフ性を根絕やすためにアメリカニズムの好い所をボリシエヴイキの中に生かし始めた」こと「スターリンがアメリカ的な實

務性を尊重してゐる點をも示例してゐる。わたしは或る外國雜誌でロシヤが曾つてレーニン、トロツキーとヘンリー・フォードを併稱しフォードを革命家として取扱つてゐるのを見たことがある。思ふにフォードによつて鮮明に表現されてゐたアメリカ的實務性それはロシヤのコムミユニスト達にはまさに革命的の鋭截調を持つものとして他山の石としたかつたのであらう。

（註）レーニンによる一九二一年九月のネツプ綱領第五項には「國家企業へエフイセント・ビジネス・メソツドの導入」を擧げてゐる。

エイゼンシテインは渡米する豫定になつてゐた前に次ぎの如くに云つてゐる。

——「われわれロシヤ人の方法とアメリカの非常に發達した映畫のテクニツクは強力なる結合をもつべきである」と、そしてその言葉は映畫に就いて話したものだが、それはレーニンやスターリンが彼等の政黨の行動綱領に就いて云つたのと軌を一にしてゐる。ヴアルガがアメリカ資本主義のもつ合理化の危機を指摘した。だが、合理化（産業の）そのものがいけないのではなく現にソヴエート・ロシヤではゴスプランの統制下では生産階級のためによき結果を示してゐるとのことである。

ロシヤ或はロシヤのイズムが現在のアメリカに何を光被してゐるか。スコツト・ニアリング、故ジヨン・リードその他少數の無産階級的作家と評論家と勞働貴族ではない無産階級にそのイデオロギーを送つた以外には社會全體に何を影響として與へたか今の私には指摘しがたい。それ故に對立面の半面にあると稱した交錯線は相互性を十分にもつとは云ひがたいのではあるまいか。

たゞ性の問題に就いては兩國はそれぐ〵に——相互的に何等影響し合ふところなく別箇に解放的な動向と徵症とがあるのが、理由の相異はあれ、注目に値する現象と思ふのである。

右はロシヤとそしてアメリカ竝に双者の關聯に就いて概觀したのである。

B　日本に於ける交錯姿態

本稿に取扱はんとするのはこの國日本に就いてである。日本は東にアメリカを、そして西にロシヤを、である。わたくしの想像が誤りでないとすれば新造語の發生多き國はアメリカとロシヤとそして日本であるやうな氣がする。その實例は示すまでもなく分明なことであるが、新しい言葉を矢繼早に創造して行くやうな國々はエラン・ヴアイタルが多いのである。アメリカがそれに値する。ロシヤも同樣である。そして日本もわたくしはヴアイタル・フオースの多い國だと斷言していゝと思つてゐる。し

から日本は右に掲げた二つの國に介在してゐる。そしてその二つの國から多くのものを取り容れつゝある。ロシヤイズムとアメリカニズムとの交錯して——代表的に受容し或は半呑し或は消化しつゝあるのは日本の如きが最も顯著な例であるかも知れないのである。

日本が右の二つの流れを或は光線を受け入れつゝあることを否定するものは恐らくはあるまい。たゞその場合を對立的に見て、その何れが優位をもつかを懸題にするものと、二者からうけたそれを全く交錯的に考へる人とがあると思ふ。わたしは後者につく。

Bノ一　アメリカは何に?

アメリカ風の光被は各國での問題である。最も反對位に立つべき筈の現在ロシヤですらが、上述の如くアメリカ風を攝取することに於いて考慮をしない。イギリスのチエスタアトンは英國の田舍の宿屋ですらが、アメリカ風のホテルになつて行くのを癪だと云つた。巴里——傳統とシックとを誇る巴里——さへ金をふんだんにもつてゐるアメリカの觀光客たちのためにどんなにアメリカ風にされて行くかを人々はまざ〳〵と見ると云ふ。そしてジャヅ音樂は全世界の人のこゝろを搔き交ぜ、がやしてしまつた感さへある。それからアメリカのシネマは世界のどんな田舍者の瞳の前にでも近接した

だから、云ふまでもなく、アメリカ風の押寄せるのは日本計りである譯はない。尤も今世界はコクテール時代である。國々の色と匂とひゞきとが國際的溶解を迅速にする世紀である。萬物交響（コレスポンダンス）のエポックと云へる。その時代だから、日本が、アメリカ、ロシヤの二つだけを受容してその他のものを拒斥してゐるのではない。何れの國からも受け、そしてまた何れの國にも受けさせてもゐる。たゞ、右の二つからが特に顯著にあらはれてゐる丈である。そのアメリカ風と現在日本の社會姿態との關渉を先づ取りあげよう。

ジャヅ音樂が這入つてゐる。河合ジャヅバンドの黑坊の模倣的身振は全くたまらないものではあるが、わたしにだつてジャヅ音樂は不快ではない。若かいゼネレーションはジャヅ音樂にステップを踏んで心から快く踊れるらしいのである。ジャヅはまるで新しい時代へのマルセイユの曲の如く彼等の心にはひゞくものであるらしいのだ。その音樂はバア、カフエーの蓄音機で鳴り、ラヂオで放送されてゐる。であるから特別にダンス・ホールで踊らない人々の耳にも忍び込んでゐるのである。

映畫——映畫はほかの國からも來る。ドイツ、フランス、時たまにはイタリー又ロシヤから。しかも日本人は大陸映畫を

好んでアメリカ映畫を侮蔑する癖さへ持つてゐる。ロシヤ映畫に對する熱求は相當に强いものがあるが、よきロシヤ映畫は公開され難いのである。アメリカ映畫を口や筆では侮蔑する方法を心得てゐながら、生活的には一番多くの影響を受け取つてゐるらしいのである。日本で近代生活と指稱されてゐる多くのあらはれは——特に服裝及び施粧はアメリカ風であるやうだ。新青年の服裝やスタイルはアメリカ映畫から摸寫したものが多いらしく觀察される。新女性の頭髮を、顏を美粧する極く有名な美容院主はアメリカでその技術を修得して來た人々であるやうだ。日本のシネマ俳優が最も强く影響されてゐるのはアメリカ映畫であるらしい。

トーキーが、(テレヴイジョンが、——但しテレヴイジョンの問題はまだ少し先きだが)もう事實的に實際問題となつて來た。この發聲映畫が何ものかの影響を投入するとすれば、それもアメリカ風に於いてであることは明らかである。

レヴイウとカフエーとはあきらかにアメリカの影響ではない。しかしその二つの中に流れるリズムはアメリカ的なものを內含してゐる。

レヴウ(ルビウ)はフランスでの發生であらうが、今の日本人は乾度アメリカ風のトーンを入れようし、カフエーも同樣であるが、そこに鳴るジヤヅはアメリカのものとすれば、今の場合よし、歐羅巴的發生のものでもアメリカの色と味とが附せられずにはゐなからう。

百貨店は有力な近代の都市的商業の樣式である。この販賣形式を案出したのはアメリカの猶太人だつたのである。であるからデパートメントはアメリカからの輸入樣式である。震災で壞滅した東京へ招致して新しい東京のプランを考へさせたその人がアメリカのベアード博士ではなかつたか。丸ノ內はアメリカの都市の如く、銀座の飾窓は主としてアメリカの品物で飾られ、ビジネス・メソッドはアメリカ風にそして街巷の步道にはアメリカ風の服裝施粧の青年男女が少なからず輕步する。

アメリカ人を好きでないことはアメリカ映畫を好まないと同樣である癖に、なんと〳〵アメリカ風の波及をうけつゝあることか。

そこに事のよしあしは別にして、現在日本の生活の一面がまさにある。

たゞ文藝特に繪畫彫刻の如きはアメリカからは殆ど影響を取らない、特に後者にあつては。文藝はアメリカ的に明るさを微光的に反照せんとするナンセンスへの動向が少しはないでもなく、一、二のアメリカのプロレタリア作家評論家のや、迎へら

れた例もないではないが、さうした事よりもより以上に生活的にアメリカ的明るさ、女の方としてはフラツパアドムが受容されてゐるのではなからうか。

ビジネス・メソツドのアメリカ風、享樂姿態のアメリカ風、アメリカ式のビルデングに通勤して、日曜の晝間に野球を見物し、或はドライブし、夜はダンス・ホールでチヤヅ音樂につれて踊るとかシネマ劇場に時を消すが如きは比率的に云へば一番アメリカ風でもあらう。

ただこゝに一つ指摘したいことは、生活的乃至情感的にアメリカ風である青年男女がアメリカのもつ理智的方面を閑却しがちであることだ。ブルジヨアの間には彼等の資本主義が合理化の採擇に歩武を向けかけてゐるのに反し、プロレタリア竝にインテリゲンツイアの間ではアメリカのもつ理智或は機械主義の長足的進歩から來る社會觀の移動風景に按外無關心ではなからうかと思へることだ。例へばエレクトリシチーを神の占席に据えて劇曲を書いたオニイルがあるが、さうした方面への着眼がどれ丈に拂はれてゐるかどうかと云ふことだ。

日本の若き女性はアメリカ映畫のシーンによつて男性にたいする應酬のテクニツクを知得し、アメリカ女の如くタクシーの中で戀することをも覺えたかも知れないが、彼女等は――アメリカ風の彼女等――は科學の進歩そのものにたいする積極的知解を無視しがちなところはなかつたか。開け放しのアメリカ風の無邪氣さは彼女等――アメリカ風の女達の胸のなかに流れ込みはしたらうが、そしてホリウツドの女優達のお洒落と映畫の所演同樣の戀愛三昧と某判事の友誼結婚の說位はすぐ分かつても、アメリカ女が、現代に於いて最尖端位に位していゝとわたくしには思はれる。理智的聰明の細線で批判すれば彼等悉くが取るにも足らぬ愚昧さであることを直ちに結論しうるかどうかを疑ふ。わたくしはアメリカニズムもアメリカ風も好みではない。けれどアメリカ風には實によき愛すべき明爽性がある。それにたいする着眼が忘られてゐはしないかと思はれる所がわたしが不滿とするところであるとしたい。

Bの二　ロシヤ

今のロシヤに傾投する青年もまた多いことをわたしは認める。それは青年(男女)計りでなく、この國の所謂思想家評論家の大半はロシヤに贊意を寄せてゐる。ボルシエヴイキの主張、第三インタアナシヨナルへの好意だ。彼等はイデオロギイシユな立場を取る。わたしはロシヤとロシヤ人はアメリカ人よりも遙かに好みである。わたしはわたし達の同志であるアナルシスト達を殺戮し、追放するに餘念のない現在ロシヤの支配者には好意を持ちえない。けれどもわたしは冷靜且つ公平に現在の勞農ロシヤにも對してゐる。と云ふのは彼等にしても尙且つ無產

階級のためにつくしてゐる所もなくはないからである。わたしは彼等のよき施設さまで非難はしない。それは兎に角としてコムミユニズムの思想を思想とする青年は實に多いのである。コムミユニストの立場を明かに表明して立つものはより少くあらう。コムミユニストとしての實際運動に携はるものはさらにより少いとも思ふ。けれどもコムミユニズム思想への好意を寄せるもの、それを信奉するものそれは實に夥しい數であらう。そしてそれも現在日本の一つの社會姿態である。現在ロシヤはそれ故にかなりに強い影響を投げてゐる。で、若しも職業上、地位上、生活上の關係でカムフラーヂユをしてゐるものが、何等の支障なくその立場を表明しうるものとすれば實に夥しい數のコムミユニストを見るであらう。わたしは明白にそれを認める。

その立場を表明すると否とに拘らず、彼等はイデオロギツシユに物を見、物を考へる。但し、イデオロギー（この場合はコムミユニズムの）にたいする理解の深淺が事象にたいする見當を深淺にすることも明白である。

それはしばらく措く、勞農ロシヤが勞農ロシヤ風の生活樣式を或る程度までこの國の信奉者に波及させてゐる。それも主として都會的な現象だが、都會の青年並に工場勞働者に勞農ロシヤ風の扮裝が見受けられる。質素で活動的な、スマートな格好で鞄を抱へて足早に行く姿、集會が持つソヴィエト式な雰圍氣、ビラ、ポスタアに表現された勞農ロシヤ的色彩、戀愛にたいする同志的選擇組織にたいするソヴエート流の企劃、文章、スローガンにあらはれた第三インタアナショナル的な格調、匿名、變名によるカムフラーヂユ、わたしはマルクス主義書籍の夥しき刊行を決して一時的な流行現象とは見ない。成程營利を與件とする出版書房は利益の豫想の下には如何なる種類の書册をも出版する代りに賣行の頽勢を見ては方針を直に變更もしよう。その意味と範圍に於いてのマルクス主義書册の增減はあらう。だが、それを以つて流行事象と斷ずる譯には往かないのである。ヤンガア・ゼネレーションは感激と感受とが強い。フランス革命の波及が當時の英國にリバチー・ボーイを生んだ如く勞農ロシヤ革命が日本の青年の間にマルクス・ボーイを生んだとてそれは極めて自然な事象である。そしてどんな強烈な彈壓が彼等の上に降らうがそれは潜行に追ひやられても絕滅しうるものではない。思想として感情として、生活意識として、また生活表現としてロシヤのイズムは日本の社會生活裡に織込まれてゐるのである。

C　對立か交錯か

日本の社會生活に織込まれたアメリカ風とロシヤ好みとは對立して何れが結局に於いて勝つかを懸題にするものがある。し

かしわたしはさうした對立觀よりも二者の交錯に就いてより多く考へられると見るものである。

ソヴィエート・ロシヤ自體がアメリカニズムの導入に鋭意してゐることは上述の通りである。むしろ導入から來たアメリカ風の強烈な腐蝕性を危惧して最近のロシヤはアメリカ映畫の拒斥を開始したとさへ傳へられてゐる。(森岩雄氏談―新潮合評會の席上に於ける) 理由はアメリカ映畫のもつ魔魅力がソヴィエート・イデオロギーの弛緩を作用するからに違ひない。日本はロシヤ映畫こそ多くの場合拒斥するが、アメリカ映畫にたいしては無制限の受容である。現代の青年はロシヤ好みであらうとアメリカ好みであらうと映畫にたいして高度の牽引を感ずるのである。さうした日本ではロシヤ風のイデオロギーを考へながら、アメリカ風の趣味性をもつものが少くはなく、よし又アメリカ風の生活様式に生活しつゝある所謂モダン・ボーイにしても社會主義には決して無關心ではないのである。その二つの對角線上に新しい尖端日本の一形相があるとわたくしには考へられる。尤もわたくしはそれを眞にあるべき、またあつていゝ尖端だとは思はない。わたしは現在日本の表象を彩る現象形態とはさして關係のない、今ではまだ徵微にして胚芽的な狀態の下にある(とも云へる)われ〳〵の思想を固く守つてゐる。だが、その思想が受容されるためには廿世紀の前半期はあまりに低劣でさへあり過ぎはしないかと思つてゐる。

何れにしても現在日本の着色は極めて混淆的である。が、その中で最も鮮明な形をとつて流れてゐるのは生活のアメリカ化と思想のロシヤ的傾向であるとは指摘されうるのである。わたしは持論として今の日本が最もよく知るべく研究しなければならない國はアメリカと、ロシヤと、さうして支那だと思つてゐる。しかもその何れにたいしてもまだ十分な研究と十分な理解が行き屆いてゐないと見たい。

支那は別問題になるが、アメリカとさうしてロシヤを知ることは現在日本の正しい分析を最も正しくしうることであるに違ひないのである。この問題即ちロシヤのイズムとアメリカニズムの交錯狀態を現在日本の社會形相に於いて見んとすることはきわめて痛切緊要なテーマであるべきだ。そして相當に大きい問題でこの一小短篇では委曲を盡しうるものではない。わたしは本稿の執筆にたいして十分の調査と觀察(現在日本の社會狀態に就いて)とを加へたいと思ひながら、病臥のために果しえなかつたのは遺憾である。特に、アメリカが投影した現在日本の近代性は考察に値するものと思つてゐる。

結論を加へる。本稿に論じた二つの動向が如何なる比率と程度とに交錯しつゝ、何を生み、また如何に結果して行くかに至大の興味がかけられるのである。

蔣馮二人を繞る支那時局

長野朗

一度長江に風雲を呼んだ蔣介石と廣西派との爭鬪も、蔣介石の機先を制しての內部切崩しにより、廣西派脆くも破れて古巢に引込んだが、爭端一度開けて一つの風雲は次の風雲を呼び、蔣介石と馮玉祥との間に暗雲が漸く濃厚になつて來て支那の時局は再び不安を惹き起した。蔣介石の方では之の勢に馮に一撃を喰はせたかつたらしいが、そこは悧巧な馮玉祥のことであるから、そつと氣合を外したものゝ、何時かは衝突すべき氣運は漸次促成されつゝある。之の蔣馮の對抗は國民政府の前途に大なる關係を有つて居るだけでなく、國民黨の左右派の爭鬪にも少からざる交渉を有ち、日支關係にも影響が少くない。そこで兩者の睨み合ひを中心に、支那時局の推移に就いて觀察を下して見たいと思ふ。

蔣馮の關係を述ぶるためには、全然異つた二つの觀點から之を見なければならぬ。それは今の國民政府が二つの要素から成立つて居るからである。一つは軍閥的要素であり、一つは黨內部の關係である。之の二つは各々の間に種々の縺れがあるだけである。兩者の間にも因緣關係があつて、支那の時局を非常に複雜にして居る。卽ち軍閥の中には蔣介石派廣西派、馮玉祥派、閻錫山派、張學良派があり、黨の中には左派、中間派、右派、西山派がある。そこで先づ始めに軍閥としての蔣介石と馮玉祥との關係を述べて見やう。

國民政府內の新軍閥には五つの派があるが馮蔣を除いた他の三派は勢力も弱く、且つ中央に遠い所に居るために、中央政府の覇權を爭ふに至らない。殊に最近廣西派は新たに敗れて其感が深い。之で廣西派は當分出れないし、閻錫山は消極的で覇氣がないから先づ安心だとして、張學良は場所が東三省にあるのと、其地位が不安固で中原に乘り出す餘裕はあるまい。そこで天下の覇權を爭ふのは自然蔣介石と馮玉祥との二人だと云ふことになる。角力ならば之れからが愈々横綱の取組みである。

そこで蔣と馮との實力を點檢して見ると、馮玉祥の地盤は甘肅から陝西、河南、山東と黃河流域の隴海鐵道に沿ふて細長くなつて居るが、其兵力は二十萬と云はれて居る。然し眞の子飼ひの軍隊は十萬位らしい。馮の軍隊の強味は雜物が無くて馮玉祥系だけの純粹なものであると云ふことゝ、訓練が巧く出來て居ることである。北伐完了後の馮玉祥は、一意軍費の稼ぎ溜めと軍隊の訓練に力を盡して來た。然し一方彼れの弱點として見るべきものは、其地盤は帶のやうに細長くなつて居るから、何處か帶の一部を斷ち切らる、虞れがあることである。馮玉祥の地盤の全長は六百

里に亘ると云はれて居る。そこに僅かに二十萬の軍隊を主要都市に配置して居るに過ぎない。然も其周圍には反馮玉祥系の種々なものが存在して居る。甘粛には回教徒が反對氣勢を揚げて居るし、陝西には舊軍閥の一派あり河南には紅槍會の連中が居るし、山東には蔣介石系の軍隊が前後左右に控へて居ると云ふ有様である。それに海への出口が有たないから、海外から武器を輸入したりするのに不便である。そこで彼れは一方では山東を得て海への出口を求めんとし、一方では帶の巾を廣くして其地盤を安全にするために、直隸に勢力を伸したり、安徽を覘つたり、武漢を手に入れやうとしたりして焦つて居るが中々巧く行かない。次には軍資金の問題である。支那の軍閥には軍資金の多少が其勢力範圍の大きさを決定すると云つても宜い位である。蔣介石と廣西派との戰ひでも、蔣介石が使つた一千萬元の買收費が勝利の主なる原因である。所で軍費の問題になると馮玉祥は餘り惠まれて居ない。彼れの地盤には餘り富裕な者はない。從て彼れの收入となるのは凡ての軍閥がそうであるやうに、鐵道收入、厘金、地租、鹽稅である。鐵道では京漢線から毎月五十萬元、隴海線から七十萬元搾つてゐると云ふことである。鹽稅も大したことはあるまいし、厘金、地租を併せても其額は多くない。それに二十萬の軍を養ふには一師一萬で月に十萬元として毎月二百萬元を要するから餘裕は僅かであらう。其上に陝西、河南一帶は大飢饉があつたから民力は著しく疲弊して居る。然し蔣介石から搾り取つた金が若干有るだらう。それにしても蔣介石と比較しては物にならぬ。次には武器であるが、馮玉祥の管内には僅かに河南鞏縣の兵工廠があるが、之れも貧弱で大した製造能力はないが、さて外國から買入れるにしても海港を有たず、ロシヤからの供給を受けるにしては交通が不便で極めて小量の武器しか持込めない。

次には馮玉祥と他の軍閥諸派との關係であるが、馮と北方にある二大軍閥閻錫山及奉天派との關係は良くない。馮と閻との敵對關係は數年前からであつて、閻は奉天派と結んで馮に當つて來たが、北伐により表面協同はしたが今では以前の關係に還つて居る。之れ馮閻は共に支那の西北を根據として發展を許らうとするのであるから、地盤の關係から根本的に相合はないのである。馮と張學良とは利害關係よりも感情的であつて、張學良は馮玉祥は蟲が好かないが、蔣介石は大好きだと云ふから、馮には都合が惡い。それでは南方にあるものはどうか、蔣介石とはもとより兩雄並び立たずだが、廣西派との關係は、蔣介石と廣西派のやうな仇敵の關係にはないが餘り好くない。廣西派は國民黨でも右翼だから、左派の馮玉祥を好まないのである。然し双方共に第一の敵は蔣介石だから、蔣介石を倒すために一時提携することはあり得る。

次には蔣介石に就いて述べなければならぬ。蔣の地盤は南京を中心に江蘇、浙江、安徽、江西、福建と長江下流の富裕な地方を占め、今度廣西派を破つて新たに湖北、湖南、廣東をも其手中に收めたため、他の軍閥に比し甚だしき優勢を示して居る。彼れの兵力は馮玉祥と伯仲するものがあり、今度の戰勝で多少多くなつたらうが、然し軍隊の內部は純一性を缺き、彼れが廣東で訓練して北伐に伴れて來たものは極めて少く、其大部分は北伐途中に附隨したものか、各地方土着軍隊の集

まりつゝあつて、雜物が非常に多いだけ結束がなく、それを金力で打ち堅めて居るから、一度敗るれば四離滅裂となる虞れがある。現在彼れの信頼すべき眞の部下は三四萬に過ぎないだらうと云はれて居る。然し彼れの强味は中央に據つて居るのと、軍資が裕かなことである。軍資の方は南京政府の收入は鹽稅、關稅、鐵道收入、地方からの送金であるが、鹽稅は各地軍閥に取られて江蘇の江淮鹽の收入が入つて來る位で物にならず、昨年は年二百萬元位であつた。關稅は中央の一大收入であるが、內外債の擔保に提供して餘裕なく、二月一日からの新稅率で年に二千五百萬元の增收が豫期されたが、其中の五百萬元は外債仕拂ひに當てねばならぬ。殘り二千萬元中、關稅增收擔保の內債が二億元發行されて居たし、それに今度の裁兵公債五千萬元、計二億五千萬元、內債の利息は普通年八分であるから、其利息が年二千萬元、それを差引けば政府の收入は一文もなしと云ふことになる。鐵道は中央政府の手にあるのは短距離の滬寧、滬杭角の二線に過ぎない。從て其收入は僅かである。又地方各省からの送金は蔣の勢力下にある五省からだけしか來なかつたが、それもだん〳〵減つて僅かに江蘇、浙江、安徽位となり、安徽は極く少く、浙江は始めの月五十萬が三十萬となり二十萬となつた。かくて中央政府の支出は月に一千萬を要するのに、收入は四百五十萬元位であるから、之を補ふために內債を募り、又軍費や俸給の不渡りとなつた。然し之れは表面の國民政府の財政であつて、蔣介石自身は數千萬元の金を持つて居るし、先頃も米國の銀行に千萬元か二千萬元か預けたと云ふ噂があるが、一體それは何處から持つて來るかと云ふに、最近には裁兵公債五千萬元の中から一千萬元か二千萬元かの收入があつたらう。支那の現在の金融界では一回に二千萬元以上の募債力はない。之れが今度の戰爭で廣西派內部軍隊の買收費になつたのだと思ふ。南京市の收入も蔣介石派の收入になつて居るらしいし、一番大きいのは阿片の密賣である。先日も武漢から大量の阿片を蔣の臺所役財政部長の宋子文が上海に密輸したのを、上海の公安局長が野暮で職掌柄取押えたため、新聞に傳えられた阿片事件を起し、公安局長は命だけ助かつて馘首された。之の阿片收入は軍閥の主要な軍資で、吳佩孚等も阿片收入は年に一千萬元位あつたが、蔣介石の方はもつと多いだらう。それに最近設けられた禁煙局は、阿片禁止の局でなくて阿片專賣局であるから、その收入はかなりの巨額に上り、役德もあるらしく、總局長の職が六百萬元で賣買されると云ふことである。それと今度武漢、廣東が手に入つたから、こゝで大分搾れそうだし、蔣介石の懐具合は餘程宜くなつた。武器の方も上海からどし〳〵輸入されるし、漢陽の兵工廠と廣東石井の兵工廠が新たに手に入り、それに英米の肝煎りで今度列國の武器禁輸申合せが除かれたから、益々蔣介石には有利になつて來た。

次に蔣介石派と軍閥各派との關係を點檢して見ると、蔣介石と張學良は前に述べたやうに氣が合つて居るが、張も兵を中原に進めて援助するには至るまい。そうなれば今日の張の不安な位置としては甚だ危險なことだからある。次には閻錫山であるが、閻は馮玉祥との關係から、馮が存在して居る間は蔣介石と結ぶだらうが、蔣が馮を潰して更に手を北支那に伸すことには反對だらうし、從て蔣と

結んで馮を抑へながら、蔣の勢力が餘り北支那に侵入して來るのには贊成しないだらう。蔣介石と廣西派とは、北方に於ける馮と閻との如く根本的に相合はないものである。それには種々の素因がある。第一に廣西派と廣東派とは民國の初めから爭鬪を續けて來た。孫文の如きも廣西派のためには絕えず苦められて來た。然るに廣西派では首領陸榮廷失脚して李宗仁、白崇禧、李濟深等之れに代り、廣東派では孫文死し、汪兆銘、胡漢民、蔣介石等が之を繼いだが、之の兩派は北伐で合流し、廣西派は大に働いたがために其勢力を恢復して廣東、廣西、湖北を得て更に湖南に手を伸ばそうとして蔣介石と衝突するに至つた。それに廣西派は元來國民黨には反對で、國民黨を擁へて來たが、北伐で一時國民黨を利用したに過ぎない。從て彼等は國民黨右派とだけは提携するが中間派及左派とは合はず、之の方からも蔣と反對だし、殊に蔣の中央集權に對して地方分權を唱へ、之の點では政治分會の存廢問題等で幾度か衝突せんとした。又同じく南支那を地盤とするため之の方面からも合はない。從て彼等の爭鬪は今後も續くものと見なければならぬ。廣西派の第一の敵は蔣介石であつて、馮玉祥の如きは第二次的のものに過ぎない。然るに蔣介石は最近廣西派を酷くたゝき付けたため、廣西派は復活には相當の時間を要するだらうし、彼れの軍內關係は非常に良好である。

以上のやうな狀態にある蔣馮は、早晚衝突すべきことを知つて、いづれも着々準備して來た。馮は軍費を集め兵を練ると共に、其地盤の幅を擴げ、且つ山東に進出して海への出口を求め、蔣と閻との連絡を斷たうとした。又蔣と廣西派との對立を利用して漁夫の利を收めんとした。そこで兩者の風雲急なるや兵を湖北境に進め、例の洞ヶ峠をきめ込んで武漢を其手に入れやうとしたが、蔣介石の手際が餘りに早く、さすがの馮も得意の術策を施す違がなかつた。かくて蔣馮間には廣西派と云ふ緩衝地帶が取れ、愈々正面衝突の免れ難きを知つた蔣介石は、之の勢に乘じて馮玉祥を叩き付け、一擧に中央集權の實を擧げやうとして、閻錫山、張學良と結んで反馮の三角同盟を造り、馮軍の湖北境からの退去を迫り、又山東を馮に與ふる口約を翻し馮軍の引繼ぎを停止して喧嘩を賣り、方振武を自派に引入れて着々と準備を進め、形勢は蔣派に取つて有利に進展したが、相手は老熟なる馮玉祥だし、そんな喧嘩に乘る筈がなく、中央に對して忠誠を表明し、兵を湖北境から退け、山東問題では妥協と出掛けた。そこで蔣介石は之の機會に成るたけ馮玉祥を抑え付けるために濟南附近は馮玉祥の兵を入れるが、山東東部には自己系統の軍隊を入れ、殊に靑島には南京から直接兵を送つて其部下を据へて海への出口を確實に抑えて居る。之れでは馮玉祥も折角山東を得ても何んにもならないことになるので、馮は山東を放棄して河南に引込んだ。又一方では閻錫山、張學良との間に益々反馮同盟の結束を堅くし他方では馮と連絡しさうな廣西派を飽まで叩き付けて再起出來ないやうに努めて居る。從て今の所では蔣介石側に有利に時局が進んで居るから當分小康を保つだらうが、それだけ將來に危機を藏して居る。

即ち廣西派を叩き付けて武漢を取り、一方山東に手を伸して大に統一に向つて進みつゝあるやうに見えるが、それは表面だけで、裏面に於ては之により愈々馮玉祥との眞劍な對

抗となり、又廣西派の敵對心を增長させ、地盤の擴大に伴ひ內部の統制が困難となり之を維持するため多くの經費を要して財政は益々窮乏し、多くの敵を造ることになる。かくて力を用ふるものは力によつて倒るゝ虞れがあり策を以て人を制するものは策によつて窮する時がある。

次には國民黨の各派と蔣馮の關係を少しく調べて見やう。國民黨內部の黨派は大體四つに分れて居る。汪兆銘を首領とする左派、蔣介石を首領とする中間派、胡漢民を首領とする右派、と之の外に張繼、居正等の最右翼の西山派がある。今日國民黨內で最も多數を占めて居るのは左派であるが、多くは中下級黨員であり、上級には中間派及右派が多い。共產黨と國民黨とが分離した後、國民黨は甚だしく右傾し、ために左派は政權から遠けられ中間派と右派の聯合政府が出來、左派は在野黨と云ふ形である。そこで左派は其勢力恢復のため、第五次中央執行委員全體會議で、民衆運動の復興と黨部の權限を明かにし、之を以て政府を指導するやうにしやうと努めたがそれも失敗に終つた。そこで本年三月十五日から開かれた第三次國民黨代表大會で堂々と勝負を決しやうとした。これは左派としては充分に自信力のあることである。何んとなれば黨內では數に於て左派が優勢を占めて居るから、大會代表の過半數を其手に納め、政權を獲得することも出來るからである。之に對し政府派は種々考へた結果尋常では勝算がないので左派に準備の時間を與へないやうに會期を一月一日とし、且つ代表の半數を政府で指名する案を提出した。然しかゝる亂暴な案に左派が贊成する筈はなく、猛烈に反對した結果、會期は三月十五日に延びたが、代表の大部は政府の指名又は半指名により選定され其一部のみが選擧された。其上に廣西派との戰爭で之の方面からの代表は來ず、馮玉祥及北京方面でも反對して代表を送らなかつたため、全く蔣介石、胡漢民等政府派の會議と化し、それだけ會議は順調に進捗したが、甚だ權威なきものとなり、左派との間の溝渠を深くした。卽ち之の代表で選出された中央執行委員に就いて之を見るに、卅六名中で蔣介石派十四人、胡漢民派十四人、閻錫山派二人、以上三十名は右派で、左派は殘り六名である。其中には馮玉祥派二名、准左派二名で、純左派としては御挨拶だけに首領の汪兆銘と孫文未亡人宋慶齡が加はつて居るだけである。其他は悉く除かれた。卽ち之れで見ても國民黨が蔣、胡兩派により專斷されて居ることが分る。更に黨の組織に於ても、從來黨部活動の中心であつた農民部、工人部、青年部、商民部、婦女部、海外部を廢し、僅かに組織、宣傳、訓練の三部とし、之を蔣介石一派の手に收めて居る。かくて國民黨部も漸次有名無實のものとなり、蔣介石の專制に傾きつゝあるから之に對する各派各方面の反對も增大しつゝある。次には國民黨各派と軍閥各派との關係を述べなければならぬ。國民黨各派が政權を握るには有力なる軍閥の背景を有たなければ、左派が第三次代表大會で敗れたやうになる。軍閥の中で左派と目すべきものは馮玉祥だけであつて、蔣介石は中間派として左右の間を絕えず遊動して居る。閻錫山、廣西派は全くの右派である。從て馮玉祥と蔣介石を中心とする反馮同盟は、左派對右派の爭ひでもある。蔣介石最近の傾向は益々右傾しつゝある。廣西派と對時して居た間は、廣西派が右派の相

漢民一派を支持して居た關係から、之に對し左派とも連絡して居たが、今日では其必要がなくなつたのと、政權を握つて居れば益々右傾するのは當然である。之の傾向は前述中央執行委員の派別及國民黨部の組織改正に見ても明かである。かうなつて來ると蔣介石と馮玉祥の立場は右と左に判きりして來る。一方では蔣と馮とが仲介物を除いて向ひ合つた爲に衝突の可能性が增大し、一方では國民政府の右傾と其專制の增進、左派に對する壓迫の增大により左右派の對立が愈々深刻となり、之と蔣馮の對立とが相合して將來に於ける不安性を增大する。之を戰ひに依て決濟するか、それとも他の方法を採るか、何時衝突が起るかと云ふやうなことは、事將來に屬し全く豫斷を許さないが、たゞ何等かの形で兩者衝突の可能性が增大し、之を平和裡に解決することが容易でないと云ふことだけは云ひ得る。

然らば蔣馮の何れかゞ中央の政權を握つたことによつて支那及日本に如何なる影響があるかと云ふに、蔣介石の政權が續けば國民政府の政策は右傾し、同時に國民黨では右派が黨制權を有つことになるが、同時に黨全體としての權限はだんだん縮少され、凡ての權力は政府に移り、黨は名目を殘して其實質を薄らいで行くことになるだらう。又右派の天下では民衆運動が振はず、勞働組合も農民組合も學生會も今日のやうな有名無實の狀態を續け、階級爭鬪は絕對に否認され、國產奬勵が盛んになり、資本主義的傾向が增加する。現在右派は階級爭鬪を國家に對し有害なりとし强制力を有する勞資仲制裁判制度を設け、農村に對しては小作料の率を規定して居る所がある。然し國家主義と國產振興は對外的の感情を緩和するものでなく、排日の如きはかうした意味から深刻さを增すだらう。

然らば馮玉祥が政權を握つた場合にはどうかと云ふに、國民黨左派が頭を擡げて來るだらうし、其結果として黨の勢力が增大して來ること〻、民衆運動が盛んになつて來ることだけは察し得る。之の二つは左派が何時も主張して居る要求だからである。左派の中には少からざる共產黨分子も混入して居るから、彼等は階級爭鬪を當然のことだとして主張し組合の擴張及勞働爭議も增加すること〻思はれる。又對外的には反帝國主義運動を起すだらうが、右派の運動とは全然性質を異にし、右派は國產振興のため、左派は列國資本主義打破のために動く、尙戰亂が支那の產業を破壞し、列國の貿易を妨害することは勿論だが日本として問題になるのは東三省の政局である。張學良は蔣派に加入して居るから、彼れが次第に深入りした場合には、蔣介石の失脚は惹いて張學良の位置を危殆ならしめ、東三省内部の政變を招く虞れがある。張學良もそれ位のことは知つて居るだらうから、成るたけ深入りすることは避けるだらうが、そこはどうなるか將來のことは分らない。

又蔣馮の關係、惹いて國民黨左右派の關係が今日の狀態で續いた場合には、左派は政府に反對するため罷業を煽動し、或は對外硬を主張して排日の如きも根强く續けやうとするだらうし、右派では之を抑へやうとするだらう。

支那の軍閥の地位は前にも述べたやうに、外見は鞏固のやうだが内面は何れも甚だ脆いものだし、それに案外容易に火蓋を切るものだから、何時如何なる變化が起らないとも限らない。

現實ロシアを語る

（スターリンとトロツキー）

大竹博吉

一

追放されたトロツキーの書いてゐるところを讀むと、彼は、まつたくスターリンとの喧嘩のためにのみ、スターリン個人の權勢慾と感情の犧牲になつてロシアから叩きだされたといふことが鮮明に描きだされてゐる。この場合、トロツキーの頭を一貫して支配してゐることは、彼がもつともはつきりと描き出さうとしてゐることは、何かこう、ダントンにたいするロビスピエル——といつた風な、專權獨裁者としての、暗黑な陰謀政治家としての、スターリンの姿である。主義や政策上の異見にたいする説明は、トロツキーの濃厚な反スターリン感情のために遠くおしのけられてゐるやうである。

「スターリンが今までの反幹部派とおなじやうに、近いうちにルイコフやブハーリンやトムスキー等に猛烈な毒舌を浴せるだらうことは慥かである』

トロツキーはさう言つてゐる。トロツキーの言葉によるとソヴエト聯邦共產黨幹部の勢力あらそひから來る內紛はトロツキーの追放によつて終局を告げるものではない、つまり近い將來に第二のトロツキー、第三のトロツキーが續出する、少くともスターリンと肩をならべることの出來るやうな目ぼしい幹部の誰れ彼れを徹底的に叩き落してしまふまでは、スターリンの陰險な專恣橫暴は止む時がないであらう——と言ふ結論になる。果してさうであらうか？

人間同志がおかれる相互關係のうちで政治といふものほど豫測しがたい激變をともなふ關係は滅多にない。私はモスクワにゐて親しく見聞したあの當時のことをはつきりと想ひ起して見

た。

一九二三年の秋と、一九二四年の秋に、トロツキー派と幹部派の間に大きな論爭が起つた。トロツキーは今になつてその當時のことを想ひ起して、自分の病氣中に振りむけられた論爭だと言つてゐる。外國人である一記者としての私の記憶に殘つてゐる當時の事件の印象では、必らずしもトロツキーが現在言つてゐるやうに、百パアセントまでトロツキーが受身であつたとは考へられない。そこにはトロツキー派とレニン派の激しい鬪爭の潮流が波うつてゐたのである。當時の事情について私の觀るところは後段で述べるが、いづれにせよその當時反トロツキーの急先鋒であつたジノヴィエフとカメネフは、それから一年半の後には新反對派となつてスターリン、ブハーリン、ルイコフ等の幹部派と激しい鬪爭をした。しかもトロツキー派と提携して幹部派に當つたに拘はらずあの樣なみじめな失脚をした。であるからルイコフやブハーリンやトムスキーが近い將來にスターリンから酷い目に逢はされるだらうといふトロツキーの豫言が絶對に信じがたいものだと言へないかも知れない。併し、そこには厳然とした理由がなければならない。

二

私はこゝで細かい政策上の異見といふ觀點からトロツキー派やスターリン派の内紛の問題を觀ることを避けよう。——それが内紛の原因として何の意義も持たなかつたといふ譯ではない。たゞ人と人との關係といふ觀點から物事をはつきり見やすくするために、問題を簡單化する方がわかり易いと思はれるからにすぎない。

レニンが死んだ時、私は東方通信の特派員としてモスクワに住んでゐた。全ロシアがレニンをうしなつて暗い弔意のなかにおかれてゐる時、私は一人の外國通信員として『レニンの後繼者は誰だらう?』——といふ問題に興味を引かれてゐた。役人や新聞社の幹部、教授、學生、國營工場の赤色支配人、住宅委員會の議長——ありと有らゆる接觸してゐるかぎりの共產黨員や非共產黨員にこの問題を投げかけて見た。

トロツキーの名はすでに明らかにレニンと並稱されてゐた。世界的であつた。ジノヴィエフ、カメネフの名も何となしに大きな響きをもつてゐた。しかし當時、共產黨中央委員會政治部のピャチョルカ(五頭領)の中にはトロツキーの名はなかつた。それはジノヴィエフ、カメネフ、スターリン、ブハーリン、ルイコフの五人であつた。

スターリン——といふ名は、その頃では何となしに若い響き

をもつてゐた。彼は一八七九年に高架索のチフリスで生れてゐる。年齢から言へばトロツキーと同年であるから決して若くはないのであるが、唯だ何かなしに若いといふ響きをもつてゐたのである。ジノヴィエフよりは三つか四つも年長である。――しかし、ロシア共産黨を統制するレニンの唯一の後繼者はスターリンだといふことは、多くの共産黨員の一致した意見であつた。トロツキーの名を擧げる者も、ジノヴィエフ、カメネフの名をあげる者も殆んどなかつたのである。

レニンが死ぬ少し前の、一九二三年の秋の論爭を、トロツキーは自分の病氣中に起されたスターリンの彈壓の第一歩だと言つてゐるけれども、第三者から公平に見れば、これは明らかにそのころ黨内に實權をもつてゐなかつた、そして何とかして勢力をもたうと焦つてゐたトロツキー派が、少數反對派として二三の集團をなしてゐた黨内の不平黨と提携して幹部派攻撃の火の手をあげたのであつた。

三

この時のトロツキー派の作戰は、一方からは經濟問題について幹部派の政策を攻撃すると共に、他方共産黨の組織統制問題を主題とした。

ロシア共産黨は、黨員として一定年限の經歴をもつ人物でないと黨務の要職には就けない規定になつてゐる。地方支部の書記長になる資格は、黨員歴で制限されてゐる。一九〇三年に社會民主黨が分裂してボリシェヴィキとメンシェヴィキに分れたが、ボリシェヴィイキ派に屬した者は、その時代から起算して共産黨員としてこれを黨員歴に加へられるのである。併しメンシェヴィキその他の黨派に屬してゐて一九一七年のロシア共産黨が組織されると共にこれに參加した者は、新らしい入黨者として黨歴を計算することになつてゐる。共産黨の基礎となつたのはボリシェヴィキ派であるからだ。從つて、黨務の要所々々は悉く古いボリシェヴィキ派の黨員によつて占められる組織になつてゐる。中央委員會の書記長であるスターリンがそれをしつかりと握つて統制してゐたのである。そして今でもその通りである。

だから、トロツキーの名はレニンと並稱されて内外に有名になつてゐたし、レニンの死んだあとで個人として一番大きな幅員をもつてゐたのは彼であるが、黨内における勢力はあまり大きくはなかつた。たゞトロツキーを取りまく一つの集團はあつた。それは元來のボリシェヴィキでなくて、一九一七年十月革命の時にレニン派に加擔して政權獲得に功績のあつた、ボリシェヴイキから見れば新來の黨員である。そのうちの代表的な人物がト

ロツキーだつたのである。かうして自然とトロツキー派といふものが形成されてゐた。トロツキーは二月革命が起つてから、アメリカからロシアへ歸つて來たが、彼はまだレニン派と一緒になるか、或はそれ以外の黨派と提携するかといふことを、船の中では極めてゐなかつたと言はれてゐる。さういふ譯で、トロツキーはロシア共產黨にとつては新來の黨員である。けれども彼のソヴェト政權建設と赤衞軍組織における功績は、彼の名をあの樣に內外に有名にしたのである。そこで「黨內に民主主義」を徹底させねばならぬといふトロツキー派の要求が起つた時、古いボリシェヴィキの間には、これによつてトロツキーが幹部派の勢力にとつて代らうとする野心をもちはじめたのだといふ印象が强く起つた。

　共產黨員の中には一九一七年革命以後の黨員の方が多數である。だから、かういふ新入黨員の意思を徹底的に尊重して民主的に黨の統制上の仕事に携はる機會を開放して、新入黨員でも適任者であればさういふ仕事に就かせるやうにしなければならない――といふのがトロツキー等の主張する所である。幹部派はこれはトロツキーのナポレオン主義だと見てとつたのである。トロツキーがレニンに代つてレニン黨を簒奪しやうとしてゐると見た。これに對してジノヴィエフやカメネフも極力鬪爭をした。古いボリシェヴィキ派の勢力を擁護するために鬪つたのである。

　この當時、地方は別としてモスクワにおけるトロツキー派の勢力は決して微弱ではなかつた。この論爭問題は、大會で最後の決定することになつて、まづ各地方支部の總會にかけられた。五區に分れてゐるモスクワ各區の支部總會で、全體としてトロツキー派の意見は少數派になつたが、或る一區ではトロツキー派が勝つた。殊に黨員中の智識階級分子の中にはトロツキー派を支持する者の數が割合に多かつた。地方では無論トロツキー派は微弱な少數派となつた。が、幹部派は、黨內に智識分子の割合がだん／＼增加して行くことの危險とトロツキーの勢力の決して侮どりがたいものであるのを知つた。レニンが死んでから間もなく「レユンの召集」といふ名目で黨員の大募集をやつた。これには主として勞働者と農民の間からだけ黨員を募集して智識階級からは入れなかつた。智識階級黨員に對して勞農出身の黨員を壓倒的な多數にして置くためである。

　この時もしトロツキー派が勝つてゐたらどうなつたであらう？　スターリンが今日の勢力を築きあげるに至らなかつたこと無論であらう。併し、スターリンが完全に今のやうな勢力の中心になるまでには、もう一つの鬪爭段階があつた。

四

トロツキーは一九二三年秋の論爭ではまさしく慘敗した。併しこの闘ひで表面からも裏面からもレニン派とレニン主義を代表して一番大きな聲でトロツキズム攻撃に立ち向つたのは誰であつたらう？それはスターリンではない。ジノヴィエフとカメネフである。トロツキーは敗北と病氣とに惱みながらクリミヤ沿岸の療養地スフムへ去つた。一たいトロツキーの正面の敵は誰れなのであらう？　その當時、トロツキー派の主なる連中を即座に黨から除名してしまへと頑強に主張したのは、ジノヴィエフとカメネフであつた。しかし除名説はそのまゝ立ち消えになつて、トロツキーは反對にそれまで彼の名の偉大さにも拘はらず彼を加へてゐなかつた政治部(ポリト・ビユロー)の部員として推された。この時除名論に反對してトロツキーを政治部員にし彼との妥協説をもつとも熱心に唱へたのは、他でもない、スターリンとルイコフの二人である。

この時代に、ジノヴィエフとカメネフの名は、殊にジノヴィエフの名は、トロツキーの敗北と共に稍や大きさを加へて來た。併しまだレニングラド派といふやうなはつきりしたものはなく口さがない小市民たちがジノヴィエフのことを「レニングラド王」――と陰口を叩くぐらゐに止まつてゐた。

クリミヤに轉地してゐたトロツキーは、自分の文集「一九一七年」のために序文を書いた。この序文は有名な「十月革命の教訓」と題する一文である。それは一九二四年の秋のことである。これを動機としてレニン派のトロツキー總攻撃がはじまつた。この一文は、政治部員に推したりして妥協を試みやうとしたスターリン等の意圖に反して、トロツキーがまだ／＼レニン派の驥尾に附するといふ氣にはなり得ないといふ覇氣を示したものである。彼の言ふところは、十月革命はいはゆるレニン派といふ古いボリシェヴィキの働きだけで成功に導かれたものではない。新たにソヴェト政權と共産黨の旗下に加はつて勇敢に革命建設の仕事をした新入黨員の功績は決して古いボリシェヴィキ黨員と區別さるべきものではない。――さう言ひながらトロツキーは、恰かもその例證でゞもあるかのやうに、政權獲得の瞬間には自分がレニンの決意を促がしたといふことや、ジノヴィエフやカメネフが政權を取るのをおそれて躊躇逡巡してゐたことを指摘した。當時、トロツキー自身の書いてゐることは、これを別の言葉でいへば、十月革命の最大の偉勳者は、トロツキーである、そのトロツキーが、當時の情勢に害を與へたと言つてもいゝ、ジノヴィエフやカメネフの下風に立たねばならぬのは、當

の組織に缺陷があるからだ――といふことに歸着するのである。

これが口火となつて、あの一九二四年秋の大論爭つまりレニン派のトロツキー總攻擊がはじまつてゐるのである。トロツキーが今になつて、病氣中にスターリンの陰謀で論爭が仕かけられたといふ風に訴へてゐるのは、公平に見て當らない。成るほどトロツキーとしては沈默の出來ない事情があつたのであらう。が、所詮政治は權勢である。トロツキー派が勝つたとしたらレニン派は悶々の情を抱きながら引込まねばならなかつたであらう。妥協といふことに滿足が出來ないかぎりは、さうなるより他はない。

一九二四年秋のトロツキー派總攻擊でレニン派が完全に勝利を告げた頃から、「スターリン派」とか「レニングラド派」とかいふ言葉がちらほら外國人である私たちの耳にまではいり出して來た。レニングラド派とは、ジノヴィエフやカメネフを中心とする、後に新反對派の名で有名になつた一派である。スターリンはその頃ヴォロシーロフやモロトフのやうな股肱の活動家を政治部へ入れて、一方からはルイコフ、ブハーリン、カリニン、トムスキーなどの支持をうけ、政治部の中でもはや動かし難い勢力となりつゝあつた。こゝでジノヴィエフとカメネフの二人が政治部内に少數派を形成し、スターリン派の多數と對抗する運動がおこつたのである。これはレニン派とトロツキー派の對立ではなくて、すでにレニン派の分裂である。もし人と人との關係が政治の上にも反映するものであるとすれば、レニンの死後にかうしたエピソードが起るのも、避けがたい成行であつたのであらう。レニン夫人クルプスカヤ女史は、初めこのレニングラド派に屬してゐたが、レニンの妹マリア・ウリヤノワ女史は幹部派に屬して鬪つたといふ風に、明らかにトロツキー派の擡頭運動に相當につよい打擊をあたへた後に起つたレニン派の分裂である。

併し、悧巧なスターリンはこの事のあるのを豫知してゐたに違ひない。ジノヴィエフとカメネフが眞向からトロツキー除外說を唱へた時に妥協的態度を示したスターリンは、近い將來にジノヴィエフ等のレニングラド派と爭ふ時の來るのを知つてゐたに違ひない。ジノヴィエフ等はトロツキー派壓伏の勢ひに乘じて自分たちの勢を伸張させやうとしたのである。そこでスターリン派の勢力とぶつかり合ふのは當然である。この論爭は一九二六・七年の兩年にわたつて猛烈に行はれた。前からの行きがゝり上、トロツキー派の態度は注目に値するものであつた。トロツキーが、前にトロツキー除名說を唱へたジノヴィエフ等のレニングラド派につくか、またはトロツキーに妥協の手をさしのべたスターリン派につくかといふことは可なり興味のある問

冠であつた。初めのうちトロツキーは沈默して新らしく起つたレニングラド派とスターリン派の論爭を傍觀してゐた。が、急に旗色を鮮明にし出した。彼は洞が峠の順慶のやうに形勢のいい方へつかずに形勢の惡い方へついたのである。こゝに反對派としての、革命家としての彼の特色があらはれてゐる。トロツキーの性格で大きな勢力について、その旗下に立つよりは、弱い方に力を藉してそこで大きな力になるチャンスを捉へるといふ途に就いたのである。ボリシェヴィキがまだ勞兵會議の中でも少數であり、臨時革命政府と惡戰苦鬪してゐる時代に、他のメンシェヴィキ派の連中と分れて敢然とボリシェヴィキ派を支持した彼であつた。それと稍や事情を異にするが、スターリン派とレニングラド派の爭ひの中に立つて、昨日までは猛烈に罵しり合つたレニングラド派に彼が加擔した理由は、やはり弱きをたすけて驥尾に附くよりも弱きをたすけて自から躍進のチャンスを得やうとした心理が強く動いてゐた。しかし黨内におけるスターリンの勢力は、すでに段ちがいとなつてゐた。レニングラド派とトロツキー派の聯合勢力も、もはやどうにもすることの出來ないほどに根を張つてゐた。

五

スターリンがトロツキーを國外に追放した氣持はやゝ明白である。彼はレニンが死んでから五年の間に黨内に完全に勢力を植ゑつけてゐる。併しこゝに至るまでには毎年のやうに何かの形ちで反對派といふものと鬪はねばならなかつた。そのために彼は自分の政策を行ふために色々な障害にぶつかつてゐる。トロツキーが言ふやうに『スターリンは既に私を追放してチェンバレンの希望に添ふ用意のあることを示した』――のであるかどうか疑問であるが、力一杯に思ふ存分に、黨内の分派的な意見に顧慮しないで、自分の政策を實行して見たいと考へてゐるに相違ない。

スターリンは最近數年の間にトロツキー派とレニングラド派の二つの勢力を徹底的に征服した。これは彼の意思の力と統制の力と、それから黨内をソヴェト聯合國内の現實的な要求を見すかす政治家としての力が、歴史の上で彼に課せられた試驗に及第したことの證明である。トロツキーが豫言してゐるやうに、近い將來にルイコフ、ブハーリン、トムスキー等を、スターリンが今までの反對派と同じやうな立場に追ひやるかどうか？それは畢竟、これらの人々がトロツキー派やレニングラド派のやうな反スターリン勢力を形成するか否かにかゝつてゐる。

スターリンのヂョルジャ人式な根氣づよさと、或る時には陰險にさへ見える策謀の力は、おそらく最早や、何人もこれを凌ぐことは出來ないであらう。

アメリカ大量文明の人格化

フーヴアとフォード

清澤洌

労働者に出來るだけ高い給料を支拂つて製品を出來るだけ安く賣ることが、商賣繁榮の秘訣だといふ發明は、人類あつて始めての——恐らくはそれは蒸汽機關の發明と同じ程度の大發明であらう。

今までは一人が富むためには必然的に他を犧牲にせねばならぬものと考へられてゐた。卽ち富と資本の蓄積は、他を搾取することによつてのみ可能であるといふのが認められた原則論であつた。この理論を實驗的に叩き壞したのがフォードである。

あなたの少年の時に、アメリカの映畫といへば必らずカウボーイが出て來て、目も遙かな平原に大冒險を試みたのを記憶するであらう。その光景が何故近頃のアメリカの映畫に出て來ないか。單なる趣味の變遷だと思ふならば、あなたの觀察は明らかに間違つてゐる。そうした時代は、もうアメリカにとつては過去の歷史であつて、今、米國は新しい文明の發足點に立つてゐるのである。

米國には克服すべき自然と平野がなくなつて、その無類の冒險的精神は、建設と組織の上に向けられてゐる。舊世界の政治と理想はウイルソンの沒落と共に葬られて新世界の新道德は——それが必らずしも尊敬すべきものである必要はない——ハーデイング、クーリッヂを經てフーヴアに到つて確立して來た。米國が成年に達したといふのはこの意味である。フーヴアの名が何よりも米國精神を語つてゐる。

一、フォードとフーヴア

アメリカといふとわれ等の頭には直ぐフォードとフーヴアの名が浮び出る。

世界無比の輿論國に生れて、この二人ほど輿論を味方とする資格に缺けてゐる者は少ない。この二人が何故アメリカ人の心をとらへて、アメリカ人はこの二人によつて代表されることを名譽とさへ感じてゐるか。

昨年の春のことである。ヘンリー・フォード夫妻は英國に行つた。船には變名で乘り込んで幸ひに新聞記者の包圍攻擊を免がれたが、さて誰も注意してくれるものがないのも有名人には淋しいのか、二三日して自から『私はヘンリー・フォードである』と發表して、忽ち船中の中心となつた。

ロンドンの歡迎は大體斷つたが、サヴオイ・ホテルで開かれた米國協會の歡迎會にだけ出

席した。何しろ世界に響いた巨人である、英米人の有力者は一堂に會した觀があつた。米國大使の挨拶、ロンドン市長の歡迎の辭、カーズン子爵の禮讃等、いづれもこのアメリカの珍客を歡迎し、その事業を賞讃するに遺憾がなかつた。

長い歡迎の辭の後にフオードは立つた。會衆は聽耳をたてた。

"I want to say that Mrs. Ford and I are highly honoured to be present on this occasion to meet so many distinguished representatives of two great nations. I think you."

かれはかういつてそのまゝ坐(すは)つてしまつた。列席の者からの拍手さへも出どころを失つたほど飽氣ないものであつた『三十一字の演說(スピーチ)はフオードの自動車と共に世界の記錄であらう』。重厚な英國の新聞が、皮肉とも報導ともつかぬ調子でかう書いてあるのを私は讀んだ。

それから少したつて同じ英國の新聞が當時大統領候補者であつたフーヴアの記事を書いてあるのが私の注意を惹いた。その筆者は匿名であるが、相當に有力な人であるのは記事の內容から明らかであつた。

この筆者はそれから七八年以前にニユー・ジヤーシー州のある午餐會でフーヴアに逢つた。當時フーヴアは中歐諸國の貧兒救濟の大任に當つてゐたが、その歸米を祝する意味からかれを主賓に會合が開かれたのである。この時の光景をかう書いてゐる——

『かれは司會者から歐洲における經驗を話すやうにいはれた。かれは極めて恥かし氣にまた極めて不愉快そうに、天井を見、テーブルを見た。それから漸やく決心したらしく、聞えないやうな小さい聲で何か話した(中略)。その晩公衆を對手の會合があつたが、それにはわれ等が幾人も話すことになつてゐた。司會者は前食糧監督にして、當夜の主要辯士たるかれに對して時間を切ることが如何にも堪(た)へられないやうであつた。恐る恐る神經的に「三十分以內でお話しを終るやうにお願ひしたいのですが」といふと、かれの顏には明らかに恐怖の色が現はれた。「とてもそんなに長く話せません」とかれは戰くやうにいつた。かれの演說は十分を越さなかつた。そしてそれは私が聞いた最惡なものであつた』

幾つもあるエピソートの中から以上一つづつ竝べただけでも、二人共にいはゆる大衆的英雄としてはその素質を備へて居らないことが分る。そのフオードとフーヴアが何故米國文明のシンボルとして、米國民衆の人氣を一身に集めてゐるか。

これには米國の昔に遡つて少しく說明を必要とする。

二、米國の文明に轉機來る

米國の歷史を知つてゐる者は、そこに來た移住民が容易に人に屈しない、そして冒險的精神の持主であつたことを知つてゐるであらう。

始めに來たピユリタンが故國の宗教的迫害に抗して、斷然新しい天地を望んで來た人々であつた。ニユーヨークは最初はニユー・アムステルダムといつて和蘭(オランダ)人によつて切り開かれたものだが、オランダ人が當時世界を家として恐れることを知らないのは有名なものである。續いてドイツ人が來、スペイン人、

渡り、ノールウエー人が行つたけれども、いづれも自己の信仰を他に屈せしめらるゝを嫌ふ者か、乃至は新しい天地に自己を開拓せんとする冒險人であるかの點は同じであつた。

この人々が上陸した米大陸は、氣候の寒い一面の處女地であつた。彼等は生きんがためには翌日から働かねばならなかつた。その上にかれ等の前には前住者のアメリカ・インデイアンがゐて、絶えずこの人々と衝突を繰り返した。が、これが却つて冒險人であり、獨立人である彼等の滿足を買つた。彼等は大自然と既住人種を征服して西へ、西へと突進した。映畫の中にカウボーイが出、羽を頭にかぶつたアメリカ印度人が現はれ酒屋が出、金鑛が出て來る頃のことである。

この冒險的精神が米國の歴史を一貫する特長である。數ふるに足らない十三州の州民が何故大英帝國を對手に獨立戰を敢行したか。その後も何故英國と戰ひ、スペインと戰ひ、ロシアを脅かしてはオレゴン方面を放棄せしめ、フランスを一喝してメキシコから手を引かしめたか。また何故歐洲列强を前に廻して當時尚弱少の米國がモンロー主義を宣布し、彼等の米大陸に對する干渉を強く峻拒したか。これ等を米國初代人の冒險的精神——斷じて人に屈しない、それがためには故國をも捨てゝ來た人々の心理狀態を外にして說明するのは困難である。

ところが西へ西へと進出した彼等に終りの日が來た。彼等がアレキサンダー大王のやうに最早征服する國がないと涙を流したかどうか知らないが、太平洋まで出た彼等はそこで踵（くびす）をめぐらさねばならぬことを知つた。今でも彼等が常に『世界一』を目がけるのはその征服心の一の現はれだと私は考へて居る。

西の先端（英國には frontier といふいゝ文字があるが日本語で譯しにくい）がなくなつて、大陸征服が完成すると、米國には新らしい時代が生れて來た。今まで米國の必要としたものは開拓者（パイオニア）であつた。パイオニアーといふ文字が持つ尊敬と自負は日本では想像もつかないほどである。この開拓者の最も代表的なものが政治的にはリンカーンであり、產業的には荒野に鐵道を走らせたヒルの如き人々である。この時代に續く新しい時代とは何か。オルガニゼーションの時代である。今までのやうに冒險によつて處女地を征服することでなくて、踏み荒した地を整理し、組織によつて生產することである。

米國が成年に達してフォードとフーヴァの時代が來たのである。

三、兩文明の十字路のフォード

この二つの流れ行く文明の十字路に生れたのがヘンリー・フォードである。

米國の地圖を擴げて見給へ、かれの生れたミシガン州はアメリカ大陸の中央にある。前に述べたやうに、米國人はその頃は既に東部の大自然を征服して、その西漸の鋒先はミスシッピー河の河幅で暫らくの停頓を見てゐた頃であつた。豐かでもない父の農園に立つて眼をあげれば、かれの東一面は新しい物質文明が早足にその辿るべきを辿つて工業國の基礎は漸く確立してゐた。かれの西を見れば、そこには尚未開拓の平野が萬里に續いて、誰のものとも分らない森林の中には狐や小獸がなほ處を得顏に活躍してゐた。

鋼鐵時代の幕をあけた製鐵爐がその新方法を開始したのはかれの生れる一年以前であつ

た。石油輸送のためのパイプが敷かれたのは二ケ年後であつた。太平洋沿岸のカリフォルニア州までユニオン・パシフィック鐵道が貫徹したのはかれが生れてから六ケ年の後のことである。即ちかれは機械時代の先端に生れて、目まぐるしいほどの動的社會相の空氣を吸ひながら育つたのであつた。

ミシガン州のデアボーンに生れたかれは（一八六三年七月卅日に生れたから日本流に數へて今年六十七歳である）教室が一つしかない小學校に通つた。これだけがかれの全部の學校教育である。その後かれは町と田舍――二つの文明の何れに適歸すべきかに迷つた。十七歳の時には、その當時十萬人の人口を有するその地方唯一の都デトロイト市に出て機械屋に働いた。併しかれは二十一歳の時には父に呼ばれて、農家に歸りそこで結婚もして、材木と開墾に落つき、一生百姓に精進するかに見えた。

がかれのやうな機械人にとつては都會の誘惑（わく）は餘りにはげしかつた。十二歳の時に父と共に馬車でデトロイト市に出た時に見た『馬無し車（ホースレスキャリーヂ）』の記憶と興味が、歳と共に増大して行つた。かれは新婚の妻君を携へて、思ひ切つて機械の中に飛び込んだ。

かれの成功傳を書くのでないこの文においては、その後のかれの發展振りや苦心振りを詳しく書く必要はない。三十歳の時にかれは走りうる車を造るに成功した。四十にしてかれは始めてフォード・モーター會社を組織した。最近かれは『人間は四十歳まではドシドシ消費せよ、蓄積（ちくせき）は四十歳過ぎてからで結構だ』といつて大分物議をかもしたが、これはかれ一流の消費經濟論に發してゐるのは勿論だが、かれ自身の發足年齢もその議論を助けてゐるのであらう。

かれの出現の意義はかくしてかれが巨萬の富を積んだからではない。かくして機械時代を造りそして新しい經濟理論を實行したからである。自動車一つを造るのには五千種類の異つたパーツを必要とする。之を一々自動的機械に依て製出して一つに纏めることは元より重大な仕事であるけれども、それよりもつと重大なとは斯くの如くにして出來た大規模の製産品を市場に捌けうるや否やである。機械人のフォードは一轉して經濟人になつた。

そればかりではない。一九一四年にかれはかれの工場においては最低賃銀を一日八時間五ドルとすることを發表した。門番をしたり庭を掃いたりする者が五ドルなのであつて、米國としても驚ろくべき賃銀である。しかもその結果は奇蹟的な成績を得た、生産品は一ケ年二百四十八萬臺から三百〇八萬臺に上り値段はグット引下げて五百ドル以下にした。最高の給料で、最大の生産をして、最低の値段で賣る――フォードイズムの勝利でなくて何だ。

かれはこれを如何なる場合にも實行してゐる。かれはその後鐵道を經營し、石炭鑛を經營してゐるが、かれの手に經營が移ると直ちに勞働者の給料をあげそれで營業狀態が恢復してゐる。石炭業の儲からないのは有名な事實だが、現在他の會社の坑夫の賃銀は一人頭四ドル四十センツであるのに、かれは七ドルを支拂つて會社は儲かつてゐる。個人と會社と國家が富むためには勞働者を出來るだけ優遇ねせばならぬといふのがかれの哲學である。

四、大量の文明時代來る

何人よりもかれのインフルエンスによつて(恐らくはエヂソン一人を除き)米國の機械化は完成した。

米國はこの機械文明を持つて來るのに、最も恵まれた地位にあつた。そこには無限の沃野があつて食糧と原料が豐富であつた。また人口が少なく、しかもその人々も幼い日は故國にあつて働き盛りになつて米國に渡つたものが多かつた。その上にあの廣大な大陸に國境がなくて、關税などの人工的障壁に煩はされることなく、自由な發展をとげて行つた。

かうした土壤の上に冒險的精神、猪突的精神が根を据えたのである。新しい世界であるからそこには何等の歴史的因襲の發展を妨害すべきものがない。かうして米國の物質文明は大鷹が羽を伸すやうに伸して行つた。私は米國の發展をたゞ一つの原因——たとへば富源の豐富だけに歸するやうな論者に同じえない。それなら同じ富源に富んでゐるメキシコは何故榮えない? アメリカ・インディアンの頃は米國では何故榮えなかつた?

米國人は物質的に發展すべき完全な條件を備へて偏へにその道を進んだ。生産品の物價を安くするためには大量生産の外はない。大量生産をなすためには大量文明に依頼するの外はない。(大量文明については後で説く。米國では近頃は Mass civilization といふ文字が流行してゐる)。そこに能率主義(エフイシエンシー)も生れ、そこに標準化(スタンダーヂゼーション)運動も生れ、そこに又合理化(ラショナリゼーション)運動も起つたのである。

ここで私は佛國學者シーグフリード(André Siegfried)によつて歐洲と米國との文明が異なつてゐる點をあげてをきたい。かれによれば米國の文明はその根本において民主的であるに對し、歐洲のそれは傳統的に貴族的なことである。かれはいふ。——

『標準化された商品に個性と精練(リファインメント)を缺く。物質的標準のためには生活における個性を犠牲にするは當然である。これならわれ等は能率のために政治的自由の少しでもを捨てなければならないか。ケーンズ氏があの有名な "The Economic Consequences of the Peace" において説いたやうに、十九世紀の歐洲の繁榮は、勞働者はその安い賃銀で滿足し、また中産階級は節約の不能な滿足させるために低い生活程度を受け入れたためである。この自制主義のために、少數者の智識的及び美術的の精緻(リファインメント)は、多數者の犠牲によつて得られたのである。米國の民主的成效は歐洲の尊敬をかち得るであらう。併しながら古い組織によつて道徳的利益を得てゐる者は反問せざるを得ないであらう。物質的安慰の代價は何なのかと』

即ち同氏の説くところは歐洲は米國の組織を受けいる事により、米國の如くに成效しえざるのみならず、これによりてその有する人格をも破壞し去ることなきや、これが歐洲の有する危險だといふのである。(The Atlantic Montly March 1928)

いづれにしても米國の文明が大量生産の上に立てられたものであり、大量生産ならんがためには小異を捨てて大同につくに到るのは明らかである。即ちその文明は質によらずして、數によるものなのである。これが大衆文明(マス・シビリゼーション)の名ある所以である。

この文明が米國特有なものであることについては多くの社會學者は一致してゐる。そして歐洲から持つて來た古い文明は尚米國の太西洋沿岸に殘存してゐるが、米國の中部に行

くに從つて未だ曾て地球に生存しなかつた新文明―大量文明が根を据えたといつてゐる。

五、米國文明の人格化フーヴア

この文明を人間にしたやうなのが米國大統領フーヴアなのである。

かれもフオードが然るやうに二つの文明の十字路に生れた。かれはオハイオ州の鍛冶屋の子に生れたが、それは半農半工の田舎人であつた。八歳で兩親を失ふや、かれは太平洋沿岸のオレゴン州で田園を營む叔父の家に行つた。即ちかれは米國西漸の潮流にのつて、中部アメリカから西に進出したのである。太平洋沿岸に落ついてからも、かれは田園と都市の間を迷つた。

當時、太平洋沿岸殊に加州にはクロンダイクその他の金鑛が發見されて、一攫千金の成金がゴロゴロしてゐた。かれはこの時代の流れを見落さなかつた。加州のスタンフオード大學に入學して、自活しながら冶金採鑛の學を修めたところに、かれも亦、フオードが自動車を修得したと同じ機敏さがあることを見得るのである。

かれの學業は決して全校の目をそばだたしめるほどの優秀なものではなかつた。否、かれは入學試驗がお情けで及第し、また卒業する時の英語が落第點で級の先生の交渉によつて漸く卒業しえた程である。日本の大學のやうな定規的劃一主義の學校ならば、かれは大學を卒業しえたかすらも疑問であつた。

然らばかれは何の特長もない凡才であつたか。かれの特長はたゞ一つあつた。數學が得手だ、また組織がすばらしく上手であつた。今でもかれが電話をかけてゐる時に、紙に落書をしてゐるのを見ると、文字や繪でなくて線を引つぱつて居り、それが暫らくの内に立派な圖表になるとかれの傳記者は書いて居る。といふ意味は普通人は落書きをする時には文字か何かを書くものだが、かれにあつては線を書きかれの頭へは物事が線や數字を以て諒解されるらしいといふのである。

その組織的天才は大戰中、中央ヨーロッパの貧民救濟、ロシア饑餓救濟、米國の食糧監督官等で發揮された。殊にかれがハーディング内閣の下に食糧長官となるや、戰後の米國産業は漸く組織の時代、標準化の時代になつて來た。かれはこれ等の問題を悉く能率主義によつて解決した。ビジネス・サイクルの研究委員には政治的には反對黨であるオーエン・ヤングを委員長にした。浪費征伐運動を始めた時には、少しも議會の問題とせずに、各商業會議所と提携して效果をあげた。かれの目がけるところは如何にして結果を得んかである。

かうしてかれほど米國の大量文明に寄與した人は少ない。かれは商品の種類の多いことが非能率的であることを强調して、アスフアルトを八十八種から九種に、ミルク罎を四十から九つに、ベットの毛布を七十八種類から十二種類に、整理フアイルの種類を一千三百五十一から四百九十六にした。かうして悉く標準化を斷行し、一つの産業で五十萬ドルから二億二千五百萬ドルといふ巨額の浪費を省き得たのである。

六、フーヴアの貧困征伐

フーヴアは政治技術家である。かれの英語は落第點しかとれなくても、かれの政治知識は無に近くても、大量文明の米國にはかれこそ最好適な技師なのである。

不思議なことにはフォードも、フーヴァもその運命を造るのに同じ潮流に乗つた。フォードが中央州に生れ、機械文明の普及するに乘じて自動車の大量生産で成功したのは前にのべた。フーヴァは先頃の選擧において米國南部を獲得することによつて大勝した。人も知るやうに南部は農業の根據地である。それが農業地である間、それは飽くまで民主黨として止まるであらう。併しその南部も最早農業だけに停止してはゐられなくなつた。農園をも食糧工場に轉化するほどの米國の機械文明は、漸次南方諸州を襲ふて、工場は林立されつゝある。

大量文明の侵すところ、フーヴァの外に何人を選びえよう。リンカーン以來、かつて絶對に他の侵入を許さなかつた南部米國は、一九二八年に到つて始めて民主黨を捨てゝ共和黨に走ることになつた。これにはスミスの宗敎、禁酒問題等の理由があるのは勿論だが、併しこれを文明史的に見れば、大量文明の南下、南部の工業發達の必然性がフーヴァを選ばしめたといふのが正當であらう。

然らばフーヴァのいだく政治哲學――世の以てフーヴァイズムとでもいふべきものは何か。私はかう質問する人に聞きたい。技師に技術はあるが哲學はあるかと。たとへばかれはその基調を『個人主義』において、自から『アメリカ個人主義』の著書もある。しかしかれは個人主義と大量生産主義の二つを並べて、徹底的に考へたこともないやうである。尤も米國の文明の底に强烈な個人主義があることは疑はれない。それが今日の社會的成果を生んだ所以であることは前にも述べたが、フーヴァの議論がこの邊の論理的體系を備へてゐるかは疑問である。

かれの政治理想の中心は貧困征伐である。この理想は、併しながら如何なる高邁なる政治理想よりも緊切であり有意義である。かれは昨年八月十一日、大統領候補受諾演說において述べていつた――

『人類の最も崇高なる要求の一は貧困を捨つることである。貧困といふ意味は働く意志を有する者が營養不足、寒氣、無智及び老後の生活におびえて居ることである。現在米國は世界の歴史の何處よりも、貧困に對して勝利を得るに近い狀態にある。貧しい家は我等の社會からなくなりつゝある、併し我等はまだ目的に達してゐない。しかも我等に藉すに、過去八ケ年の政策の前進の機會を與へられゝば、神の助けにより、我國から貧困が一掃される日があるであらう。』

ラッセルも云つたやうに米國の文明がわれ等の趣味に合するか否かといへば、われ等は然りと答ふるに躊躇する場合が多からう。併しながら、どう割引してもそれが最大多數の者に、最大な幸福を與へ得る一事に至つては卽ちこれを否定するに困難である。そしてフーヴァの貧困征伐がどれだけ成功するかは、米國のためのみならず、世界のために最も關心を有する問題である。

米國の文明は確かに新しい内容を備へつゝある。併しながら古い文明を破壞するに何人よりも責任があつたフォードとフーヴァは、その抱く哲學において最も舊い時代に停滯してゐる點は注意を要する。機械的には殘酷なほど急進に、しかも哲學的には最も古いのがこの人々の特長である。そしてこの言葉が、やがて現在の米國文明を批判することになりはしないであらうか。

英國の三黨首論

馬場恒吾

一、スタンレー・ボルドウイン

今年五月三十日に英國に行はれる下院總選擧は再び勞働黨に政權を與へるであらうと云ふ意味に於て興味をそゝる。今の儘で行けば勞働黨が下院の過半數を占めなくとも、第一黨には間違なくなるであらうと、保守黨系と見られるデーリー・メールすら力說してゐる。今年になつて英國に補缺選擧が九回あつた。

其九回の補缺選擧で勞働黨が得た投票總數が九萬二千、保守黨が八萬八千、自由黨が五萬餘と云ふ數字を見ても、天下の大勢が如何に動きつゝあるかゞ判る。

保守黨は四年半政權を有つてゐた。そして國民に倦かれた。首相ボルドウインは始終パイプを啣へて居る。其パイプが目障りだと人が云ふほど、倦かれてゐる。ボルドウイン自身も人心が去つた事を知る。それを知つてゐればこそ、彼れは議會を五月十日に解散して、總選擧を行ふと、早くから發表してゐるのである。本來から云へば政府が自から進んで、今急に議會を解散する必要はない。議員の任期は五ケ年である。今の議會は一九二四年十月二十九日に選擧されたのであるから、まだ五ケ月は此儘にして置いてよい。保守黨は選擧後には四百十五名居つた。今はそれが四百名に減じてゐる。それでも議員總數六百十五名に對しては堂々たる絕對過半數を占めてゐるのである。併しボルドウインの考へでは、政府が選擧に勝てると云ふ確信がない。若し負けるときは政府を他の黨派に讓らなければならぬ。然るに、何の政府でも次ぎの年度の豫算編成にかゝるのは夏頃からである。議員の任期が盡くる迄今の下院を存在せしめ

そして政府も亦それ迄壽命を延ばすとすれば、次ぎの政府として來る連中が困る。保守黨内閣が編成して置いた豫算を押付けられる事になる。少しの修正は出來ても、根本的に豫算立て直しをする時間はない。其事情を考へて、ボルドウインは議會に優勢な絶對多數を有しながら、そして今別にこれぞと云ふ大問題もないに關らず、半年も早く、内閣の進退を決せんとする。國を預つてゐるのは政府黨ばかりではなく、反對黨も同じく國の政治を行ふのだ。だから政治は公明正大に、お互の便利を考へて行ふべきだと云ふ所の、議會政治の要領を心得て居る。一度握つた政權は金輪際放さないと云ふ所の封建的精神とは甚だしく其色彩を異にしてゐる。

ボルドウインは正直な紳士である。それは敵も味方も異存のない所である。しかし才氣溌剌と云つたやうな面白味がない。日本にも彼れの演説集が二種類も來て居るが、讀んでも面白くない。私は或英國人の新聞記者に聞いて見たが、其人は、あれでボルドウインは面白い人物だ。英國人には非常に好かれてゐると云つた。其何處が面白いか判らない。

彼れが初めて總理大臣になる少し前に、彼れは或宴會の席で自分の理想を語つた。それによると、ボルドウインの理想は閑が出來たら好きな本を讀んで豚を飼ふのだと云ふ。日本人ならば閑雲野鶴を友とすると云ふ所である。それを豚を飼ふと云ふのは、岩谷松平氏を思ひ出さしめるもので、政治家らしくない。尤もボルドウインに云はしめると、豚も非常に可愛いものだと云ふが、其趣味が甚だしく田舍紳士的である。ボルドウインを評するものは、彼れは英國の標本的な田舍紳士だと云ふ。それは決して貶した意味でない。英國の田舍紳士は質實剛健の代名詞になつてゐるのだ。

日本の如く遠くからボルドウインを見るときは、ボルドウインに興味を惹くのはそれが文豪のキップリングの從弟である事だ。ボルドウインの母とキップリングの母とは姉妹である。ボルドウインはキップリンクの小説を愛讀すると云ふ。それならば、今少しく彼れの演説に色彩があらうと思ふにそれはない。尤も總理大臣と云ふ責任の地位にあるものに、色彩の強い演説を望むのは無理かもしれぬが、それでも自由黨のロイド・ジョージや勞働黨のマクドナルドは何日でも民衆を熱狂せしめる演説をする。ボルドウインはさうした民衆的な雄辯を有つてゐないと云ふ事が、定評になつてゐる。

彼れが初めて總理大臣になつたのは一九二三年の五月であつた。彼れは急速に出世したのである。彼れが大藏次官になつたのが一九一八年、商務大臣として初めて内閣に入つたのが一九

二一年、そして一九二三年には總理大臣になつたのである。其年ボナー・ローが病氣で引退するとなつたとき、次ぎに保守黨を率ひて總理大臣となるべき候補者が今一人あつた。それは保守黨の大先輩侯爵カーゾン卿であつた。此人は前に印度總督であり、長く外務大臣をして居り、現に上院に於ける保守黨の首領であつた。其東洋に關する著書は有名なもので、學問と云ひ見識と云ひ、英國一流の政治家である事に誰れも異存はなかつた。只餘りに高慢臭いので人に好かれない。

カーゾンは學生時代から總理大臣になる事を一生の目的としてゐた。官吏として、政治家としての四十年間の刻苦精勵は只此目的の爲めになされたと云つてよい。ボナー・ローが病氣の爲めに總理大臣を罷めると云ふ時、彼れは英國の田舍の別莊に居つた。ボナー・ローの後の內閣を組織せよと云ふ大命が今來るか、今來るかと彼れは胸を焦がしてゐた。傍で見て居ても氣の毒に思はれるほど彼れはソワソワしてゐた。夜になつて皇帝秘書スタンフオダム卿から翌日お目に掛り度いと云ふ電報が來たので稍落着いた。翌日汽車で倫敦に行くときの心持ちは彼れの日記にある。

「朝刊の新聞を見ると、首相にはボルドウィンか、私かと云ふのであるが、私の方が可能性が多い、皇帝の意志も確かにさうであらうと何の新聞も書いて居る。倫敦の停車場に着いた時も私の家にも、新聞社の寫眞班が詰めかけて居た。かうした事は當てにはならぬが、少くとも人心の傾向をば示してゐる」

其日の午後二時三十分皇帝秘書はカーゾン卿を訪問した。それはカーゾン卿に內閣組織の大命を下されるのではなく、何故カーゾン卿をお召しにならないかを說明する爲めであつた。つまり英國の議會では勞働黨が第二黨になつてゐる。そして勞働黨は上院に出てゐない。だから總理大臣となる人は下院に議席を有つ人でなければならぬ。侯爵で上院議員であるカーゾンでは駄目だと云ふ事を婉曲に說明するのであつた。カーゾンの其時の心持ちは再び彼れの日記に依る。

「これが我官吏生活四十年の報酬である。かうして私は永久に總理大臣にはなれないと云ふ事を知らされたのである」

併し彼れはボルドウィン內閣でも外務大臣を勤めてゐたが、それから一年半の後死んだのである。

ボルドウィンは議會でカーゾン卿を弔ふ演說をした。其中に「私とカーゾン卿との交涉で二度辛い事があつた。一度は私の內閣に外務大臣として殘つて貰ひ度いと云ふ交涉をする時であつた。故人は內閣總理大臣となるべき人であつた。其人に外務大臣たれと賴むのは辛らかつた。併しカーゾン卿は快く引受け

られた。二度目はカーゾン卿に向つて、外務大臣を罷めて帝國會議の議長になつて貰う時であつた。其時も快く引受けられた。其虛心坦懷な態度に感動せしめられた」と。

カーゾンの不平を知つてゐて見れば、ボルドウインの此演說は何んとなく上滑りのやうに聞へる。

ボルドウインは總理大臣になつて約半年許りして議會を解散した。それは戰後の英國の經濟狀態を改善する爲めに保護貿易主義を主張した結果である。これまでは保守黨は下院に於て三四二名と云ふ絕對多數を占めてゐた。然るに保護貿易主義を掲げて總選擧を行つた結果、保守黨は二五九名に減じ、玆に初めてマクドナルドの勞働黨內閣が出現したのである。

其時ボルドウインは輕卒不謹愼であると云ふ非難を受けた。保守黨の絕對多數は彼れが作つた絕對多數ではない。彼れの前に保守黨を率いてゐたボナー・ローが作つた絕對多數である。ボナー・ローが病氣で引退するが爲めに、彼れは此絕對多數を預けられてゐるのである。然るにそれに關らず、彼れは英國の傳統を破る所の保護貿易を實行せんが爲めに、此絕對多數を賭けて博奕を打つた。そして奇麗に負けたのである。彼れに何の權利があつてこんな博奕を打つたのだ。ボナー・ローの遺產たる絕對多數を弄ぶ權利は彼れにないのだと。

八ケ月間勞働黨に政權を讓つて居た保守黨は一九二四年の總選擧で以前に增す所の四一九と云ふ絕對多數を以て議會に殺倒した。以來四年半ボルドウインは總理大臣であつた。

彼れの性格に於て目立つ事は、彼れが徹頭徹尾正直である事だ。誤魔化しや技巧は彼れが絕對に排斥する所である。だからロイド・ジョージの如きお上手ものに對しては心から反感を懷いてゐるやうに見へる。ロイド・ジョージの聯立內閣に終りを告げしめたのはボルドウインの主張が有力な原因だ。ロイド・ジョージは戰時中から一九二二年迄六年間聯立內閣の首班となつてゐた。聯立內閣は政黨の黨爭を中止せしめて、內閣の專制政治を可能ならしめる。それは英國に行はれる如き政黨政治の立場から見れば政治の墮落である。一九二二年の秋のカールトン俱樂部の會合と云へば、保守黨が此聯立內閣から脫退を決議した所の、歷史的な會合であつた。此會合を動かしたのはボルドウインであつた。彼れは斷然としてロイド・ジョージが首相たる事に反對した。政界の手品師に依つて、政治が詐欺になつてゐる。技巧は國民に採つて危險だ。國民の爲すべき仕事は簡單明瞭であるからだ。政黨は自分の眞實の精神に歸らねばならぬ。たとへそれが政權を離れる事であつても已むを得ないと。これがボルドウインの主張であつた。そして保守黨の敗退で

イド・ジョージ内閣は潰れたのである。ボルドウインは派手な政治家でない。併し彼れが自分の信ずる所に忠實である事は認めてやらなければならぬ。

今のボルドウイン内閣が出來て以來の最大事件は一九二六年の總同盟罷業であつた。其前年ボルドウインは盛んに勞資協調を唱へた。三月十二日リーズで演說して

「吾々は歷史的な創造時代に生きてゐる。吾々の責任も大なると共に、吾々は大事業が出來るやうに感ぜられる。卽ち各人が協同して働けば、國民の生活狀態に大なる改善を施す事が出來る」と。これは勞資協調に關する演說であつた。

ボルドウインは資本家の家に生れ、彼自身も鐵道會社の取締役であつた事がある。だから彼れは勞資協調に依つて社會の幸福が增進せられるものと信じてゐる。そして其信念を大膽に告白する正直さを有つてゐる。

彼れの勞資協調のすゝめを裏切つて、翌年は英國の炭坑爭議に關聯して全國的な同盟罷業が勃發した。全國の勞働者が結束して支配階級に反抗した。一時は大英國の終焉が近付いたかの如き觀があつた。ボルドウインの勞資協調の福音はカルタで拵へた家の如く何處かへ吹き飛ばされた。

ボルドウインの志す所が必ずしも間違つてゐるとは云へない。其後に英國の勞働組合が、資本家との共同的な會議を進行せしめつゝある事が、それを證明する。併し炭坑爭議に臨んでは、ボルドウインは頑冥な資本家を壓迫する事が出來なかつたと共に炭坑勞働者をも壓迫する事が出來なかつた。雙方に對して遠慮した結果が遂に總罷業になつたのである。此罷業が終つた後は、ボルドウインは漸次資本家側の勢力に引づられて、苛酷な勞働組合法を制定し勞働組合の政治資金に制肘を加へた。其外に彼れの內閣はこれぞと云ふ大なる仕事をしてゐない。現在の英國の失業問題に對しても、保守黨內閣は目立つた政策を提供してゐない。

只現在の社會組織を維持して、漸次に產業の發展を計り、そして失業者のなくなるのを待つと云ふのである。それは過去四年半保守黨內閣が行つて來て、大いした效果を示さなかつた方針である。

蓋しボルドウインは安全第一の政治家だ。常識に富んで、穩健着實で、正直で、自分の信ずる所に忠實で、此人に任かして置けば大丈夫だと云ふ感じを與へる人だ。只併し時勢は躍る。現代の大衆はかうした人に倦く。かうした人に心を引かれない。それ故に保守黨は倦かれたと云ふ一般の空氣が生れてゐる。

ボルドウインに比較すれば彼の内閣の大藏大臣たるウインストン・チャーチルは旋風的な男だ。保守黨出身で自由黨に行き又保守黨に歸つた。大臣になり、戰爭に行き、書物を書き、繪を書く。スポーツが好きで時々怪我する。精力が餘り過ぎて、靜かにしては居られぬらしい。彼の使命は共產黨征伐にあるが如く振舞つてゐるが、共產黨を嫌ふ事に於ては勞働黨も五十歩百歩である。それは最早問題でない。ボルドウインの後に保守黨首領となるものはチャーチルであると、さうした事が英國で話題になつてゐる。それが古風な英國にも新時代の風が吹きつゝある事を示す。

二、ロイド・ジョージ

ボルドウインの後にロイド・ジョージを見るのは能狂言の後に活動寫眞を見る如な感じがする。ロイド・ジョージは野心家だ、政界奇術師だ、臨機應變家だと、種々の惡評を受けてゐるが、兎も角も面白い男だと云ふ事に誰れも異論を唱へない。彼れが六十七歳の老年で（ボルドウインは六十二）、其白髮を振り立てながら、今でも街頭に立つて、今度初めて選擧權を得た二十代の娘子軍に、自分の主張を納得せしめんとしてゐる圖は、確かに彼れの鬪志が未だ衰へざる事を示す。少くとも、大戰中英國の首相として、世界第一の政治家とも見られた彼れが、往來で若い女に個々面接をするのは日本の大政治家には出來ない藝だ。彼れの率ゆる自由黨は一年以内に英國の失業者を常態に復して見せると廣言してゐる。英國の失業者の數は百四十萬餘に達してゐる。其常態と云ふのは七十萬位であるから、一年の内に七十萬の失業者に職業を與へる事を約束してゐる。其方法は十億の金を使つて道路、港灣、殖林などの事業を始める。それは英國の經濟的發展の基礎になる事業だから、決して無駄にはならぬと云ふのである。ボルドウインは反問して、一體其十億圓の金は何處にあるのだ。結局は税金を取り立てゝ、人民を苦しましめる事になる。さうした手品みたやうな事に迷はされてはいけないと演說をしてゐる。

今英國の自由黨は悲境のドン底に居る。大戰前に下院に絕對多數若しくはそれに近い數を占めた自由黨は一九二四年の選擧には僅かに四十名の代議士になつた。現在では自由黨は終に消滅するだらうと悲觀するものさへある。かうして自由黨の沒落に近い直接の原因は自由黨の首領であつた故人アスキスとロイド・ジョージの喧嘩であるが、其外にも種々の原因がある。其最も大なるは勞働黨の進出であつて、英國の政治は保守黨か勞働黨かに任かして置けばよい。其の中間に自由黨と云ふ間的政

黨の存在は只政局を不安ならしめる外に效能はない。

英國人は何よりも政局不安定を厭がる。基礎薄弱な政府の存在は國家に不利益だと信じてゐる。其結論は二大政黨主義になる。從つて自由黨は不用だと云ふ事になる。此氣分は一般國民の中に存在するのみならず、自由黨内部にも感染して、現にウインストン・チャーチルは保守黨に行き、ケンワージー少佐は勞働黨に行つた。

一九二四年勞働黨内閣の時に、自由黨は初めは之を助けて、後には之に叛いた。さうした反覆表裏は英國人には厭がられる。嚙んで吐き出すやうに厭がられる。それ故にこそ、四十名の少數黨に沒落したのである。

所ろでロイド・ジョージは此頽勢を盛りかへさんと奮鬪しつゝある。そして如何なる風の吹き回はしが彼れに再び政權を與へないとも限らない。現にデーリー・メールの如きは社會主義者（勞働黨を指して云ふ）の進出に對して英國を守るものはロイド・ジョージの外にない。大戰中彼れが英國の首相として、英國を守つた事は吾々の記憶する所だ。此儘にして行けば英國は勞働黨の天下になる。だが保守黨と自由黨と共にロイド・ジョージの周圍に集つて、我英國を守れと絶叫してゐる。

保守黨や勞働黨が如何に惡評を逞ふしても、私はロイド・ジョージは英國の政治家中、一番面白い人物だと思ふ。世人は彼れは主義がないと云ふ。それは彼れが民衆と共に動き、時代と共に流れる故に、自然に主義のない人であるかの如く見へる。實際政治家として、眞實の仕事をする事と主義を墨守する事とは必ずしも兩立しない。殊に自由黨の依つて立つ處の自由主義は最早昔しの自由主義ではない。今は寧ろ自由主義に社會主義を加味したものを自由黨の政策として採用して居り、昔しの自由主義は保守黨に於て守られてゐる。今より二十年前、ロイド・ジョージが大藏大臣として提出した豫算は所得税の累進課税、閑地税、相續税の增加、土地增價税と云ふが如き社會主義的原則を含んで、それが英國の下院と上院との衝突を招いた。其時總理大臣であつたアスキスは上院を反省せしめる爲めに二度下院を解散し、上院をして財政案に對しては無能力者たらしめる所の上院改革案を提出した。之を提出するに際して彼は皇帝陛下に上奏して、若し上院が飽くまで政府に反對するならば、政府は上院の反對議員を壓倒する丈けの新華族を拵へてもよいと云ふ所の勅許を得た。然し此勅許のあつた事は最後の瞬間まで祕密にしておかれた。上院改革案が上院に於て討議され、正に裁決に移らんとするとき、上院に於ける政府黨の首領であつたジョン・モーレー卿はポケットから紙の切れを出して、上院が反

對するならば、政府は上院を壓倒する丈けの新華族を製造する。其勅許を得て居ると讀み上げた。滿場シーンとして語を發するものがなく、暫らくして今一度讀んで呉れと云ふものがある。モーレー卿は聲を大きくして今一度讀んだ。ローズベリー卿は上院は上院を救ふ爲めに、此改革案に贊成せねばならぬと演說し、遂にそれが上院を通過したのである。これはモーレー卿の回顧錄に記載されてゐる。

大戰中の一九一六年にロイド・ジョージがアスキスに代つて總理大臣になつた事が、ロイド・ジョージの陰謀だと誤解されてゐる。スペンダーの書いたロイド・ジョージ傳はロイド・ジョージとアスキスとの往復文書迄揭げて詳しく事情を述べてゐる。要點は當時英國は國が亡ぶか助かるかの戰爭をしてゐる。政府の力は戰爭に集中して、如何なる事があつても此戰爭は勝たねばならぬ。それには平時の內閣組織ではいけない。軍事內閣を組織して軍事の事を迅速に、果敢に決行せねばならぬと、これがロイド・ジョージの意見であつた。アスキスも一時それに贊成した。然るにノースクリフ卿の支配してゐるタイムス(一九一六年十二月四日)が妙な社說を書いた。其中に、アスキス氏の贊成する事も速かだつた。だが彼れは事態が避くべからざるやうになる場合には、何日も機敏にそれを察する男だと書いた。それは恰かもアスキスを嘲るかの如く響いた。アスキスは直ちにロイド・ジョージに手紙をやつて、事態がかうなつては、自分は此儘ではやつて行かれぬ。自分は閣員全部の辭職を要求し、そして自分の奏請する通りの新內閣を組織する權限を、今日陛下から與へられたと云つた。

ロイド・ジョージはまだタイムスの社說を見てゐなかつたがかうなつては自分の進退をアスキスに一任するより外はなかつた。これが後に、ロイド・ジョージとノースクリフが組んで、アスキスを追出したと云はれる原因になつた。

アスキスは內閣改造を企てたけれども、保守黨のボナー・ローが援助せざるが爲めに出來ず、陛下はボナー・ローに內閣を組織せしめんとせられ、ロイド・ジョージもボナー・ローを薦めたがこれにはアスキスが反對して出來ず、遂にロイド・ジョージを首相とする聯立內閣が出來たのである。大戰中はロイド・ジョージとノースクリフは棒組であつた。それが休戰當時から急に仲が惡くなつた。其の事情を當時軍需大臣であつたチャーチルが素破拔いてゐる。それに依ると、ノースクリフは巴里講和會議の全權委員たらんと欲したのである。總理大臣のロイド・ジョージは其前に如何なる官職でもノースクリフの望みに任かして與へんとした。大臣になり度ければ大臣にする、名譽が欲

しければ名譽を與へると云ふのであつた。ノースクリフは汎べてそれを辭退して、只新らしき世界を作らんとする講和會議の全權委員たらん事を要求した。ロイド・ジョージはそれを拒絕した。重ねて要求すると、ロイド・ジョージは糞喰へ（Go to the devil）と怒鳴つたと書いて居る。

ロイド・ジョージは激情の人だ。人間味を豐富に有つてゐる。だから議會に出で其初めは議會の型にはまつた演說は出來なかつた。何處か議會の調子に合はない處があつたが、それでも後には自分流儀の演說振りで議員の心を捉へる事が出來たと云ふ。其代りに公衆の前に立つて演說するときは、彼れは機智縱橫、民衆の心を摑んで放さない。畢竟するに彼れは民衆の人だと云はれて居る。其生れからしてさうであつた。彼れはウエールスの海岸の一寒村に、貧乏な學校敎師の子として生れ、父親が早く死んだ爲めに靴直しの叔父の處に引取られた。辯護士の試驗を受ける爲めに佛蘭西語とラテン語が必要であつた。叔父も元よりさうした語學を知つてゐる筈がなかつた。併し二人で辭書と首引きで此語學を硏究した。叔父がロイド・ジョージを助ける積りでさうしたのである。そしてロイド・ジョージは試驗に及第した。一時辯護士をしてゐて、間もなく政治に興味を持ち、英國の地主の壓迫に對して、ウエールスの農民の獨立を叫び、二十七歲で國會議員になつた。議會に於ける地主黨が此青年の反逆兒を憎んだとき、彼れは

『保守黨の連中は、貧乏小家に育つた人間の時代が來た事を知らぬのだ』

と叫んだ。

ロイド・ジョージは民衆と共に動く。だから其云ふ言語が演說口調になる。曾つて、英國のヴイクトリヤ女皇はグラッドストンを評して、グラッドストンは女皇に向つて話しをするときでも、恰も公衆に向つて演說するやうな調子だとこぼされた事がある。ロイド・ジョージも其嫌ひがあつた。だから議員になつた初めの頃は、野人禮にならはずの感を與へた。巴里講和會議の頃、私は英國の議會を傍聽して、遠くからロイド・ジョージを見た。其時も彼れは總理大臣らしく濟ましては居らず、傍の人と話したり笑つたりしてゐたが、別にそれは不行儀には見へず、却つて自由豁達な空氣を漂はすかの如く思はれた。

自由黨は今悲境に居る。併し彼れの鬪志は衰へず、大戰中に英國を背負つて立つた功績は未だ國民に忘れられない。だから自由黨の恢復が全く絕望とは云へぬ。尤も此選擧で第一黨になる事は自由黨自身ですら望んでは居らぬ。此選擧に相當の數を得れば、次ぎの總選擧に第一黨になると云ふのである。

只それに邪魔になる事は、大戰の勝利に醉つて、ロイド・ジョージが少しく英雄になり過ぎた事である。獨逸皇帝を絞首臺に上げよと云ふ如き、復仇的な標語を掲げて戰後の選擧を爭つた如きは聊か際物師的だ。そして今一つの邪魔は自由黨には五百萬乃至二千萬圓と云はれる黨費があると云ふ事實である。其金はロイド・ジョージが政權を握つてゐた際に、勲花式に爵位を振り蒔いたときの寄附だと云はれる。ロイド・ジョージ自身が潔白である事は少しも疑はれてゐない。併しかうした大金が黨の金庫にあると云ふ事實が世人の同情を冷却せしめる。自由黨の復活は先づ此金が遣ひ果たされた後の事だと見られる。

三、ラムゼー・マクドナルド

ラムゼー・マクドナルドには社會主義に關する幾多の著書がある。其論文は屢々雜誌や新聞で見る。併し私はそれを讀んでもどうしても終りまで讀む氣がしない。回りくどくて、キビキビしないで、學識と修辭が鼻に付くやうで面白くない。何故それがさうであるかを考へた。

マクドナルドは蘇格蘭の一漁村の勞働者の家に生れた。十三歲の時に已に農夫として働き、行く行くは漁師になる所であつたのを、學校の教師が此兒は見込があると思つて、學校の見習教師にした。二十歲で倫敦に來て市の倉庫の帳簿付けになり、二十三歲で自由黨代議士の祕書になり、それから新聞の寄書家などして出世の途を開いた。

さうした微賤の生れの如く見へるが、其血統は蘇格蘭の豪族の血を受けてゐた。だから彼れの趣味には貴族的な處がある。彼れの上品な顏と上品な文章が其證據である。彼れは貧苦の中に生長して、無産階級の運動を生命とする。併し其心の底には貴族的な本能が流れてゐる。だから無産階級の運動が彼の手に依つて行はれるときは、何處となく氣品が高くなる。

マクドナルドに對する同僚の批難はマクドナルドは容易に心を打ち開けない。同じ內閣の閣僚、勞働黨の同志に對しても、何んとなく障壁を設けてゐると云ふ事にある。それは蘇格蘭人特有の人見知りする性質がまだ拔けないのだと說明されてゐる。併し事實はさうであるまい。何となれば彼が公衆の前に立つて演說するときは、感激に醉つて、自己を忘れて、腹の底の底まで吐露する如く叫ぶ。平生沈默勝ちな彼れが、演壇に立てばどうしてこれほどまで雄辯になり得るか。彼れは友人の友人でなく、公衆の友人であるとさへ云はれる。無産階級運動に身を投じたものは、只一つ公衆を賴りにするより外に、行く道はないからであらう。

今でこそ彼は前總理大臣として、儀式の時は宮廷服を着て出るのであるが、大戰中は戰爭に反對したが爲めに他の勞働黨員とも意見を異にし、全國民の迫害を受けなければならなかつた。彼れが演説に出ると、國賊、非國民と呼ばれて、僅かに身を以て裏木戸から逃げ出し、塀を越へて隱れなければならなかつた。そして一九一八年と一九二一年の二度の選擧に敗れ、マクドナルドは終に政界から葬り去られるかの如く見へた。併し彼れは蘇格蘭人特有の勇氣と剛情を以て、忍耐した。戰爭開始以來八年間の受難時代を經て、一九二二年十一月の總選擧で議會に復活し、直ちに勞働黨の首領に選ばれた。翌年十二月の選擧で、勞働黨は百九十二の議席を得て、マクドナルドを首班とする英國最初の勞働黨内閣が成立したのである。

勞働黨内閣は八ケ月にして潰れた。併し此八ケ月間、實際の政局を擔任した經驗は、勞働黨に取つては非常に有益な經驗であつた。彼等の主張は益々穩健着實になり、彼等は爾來數年間革命的な共産黨を排擊する事を以て黨の一貫したる方針とした。そしてそれが爲めに彼等に對する國民の信頼が增して、今回の選擧に於て第一黨となるべき豫想が生れたのである。

勞働黨が如何に右傾しつゝあるかは、勞働黨内部に自由黨との連盟を主張するものがあるのを見ても判る。而かも其説を唱へるのは勞働黨中の穩健派でなく、却つて左黨の一派である事が面白い。其中のブレールスフォードは左黨機關紙ニュー・リーダーに書いて

「自由黨の主張は輿論の眞實の傾向を代表してゐる。吾々は民主々義者だ。若し吾々が絶對多數にならない場合には、吾々は自由黨と公開的に交渉して、二四年提携して行けないかを確めて見るべきだ。それが何の恥づべき事であらうぞ」

そして其爲めに大臣の椅子を三つか四つ自由黨に與へてもよいと云つて居る。

勞働黨の失業問題に對する解決策は、六十五歳以上の老年に恩給を與へて休養せしめ、義務教育を一年延期して十五歳迄の少年を勞働市場から引込ますと云ふのである。さうすれば百四十萬の失業者の約半數はなくなる勘定である。所で、驚くべき事は、此案は例の勞資協議會の立案と一致してゐる事だ。英國の勞働黨は今迄も屢々階級鬪爭に反對である事を宣言した。今は資本家と協議して當面の問題を解決せんとする。それが悪いと云ふのではない。只事實がさうなりつゝあると云ふ事を明かにして置かねばならぬ。

だから保守黨のヒュー・セシル卿はサンデー・エキスプレスに論じて、今の政界を保守黨、自由黨、勞働黨と分けるの[illegible]

違つてゐる。彼等の政策の根本的な主張に大差はない。政界の眞實の分界線は勞働黨内の右翼と左翼の間にある。現在の社會秩序を維持するか、變更するかの點にあると云つた。

ヒユー・セシル卿の左翼と云ふのは勞資協議會に反對したマツクストン一派を云ふのである。マツクストンとスノーデンは勞働黨中の頭の良い二人と云はれる。併し其マツクストンも勞働黨の右傾化の大勢には抗爭する事が出來ず、表面はマクドナルドの統制に服してゐる。

マクドナルドの社會主義は具體的の政策ではなく、政策を決定する心の態度である。だから直ちに社會革命を行ふのでなく社會革命の方に顏を向けてゐると云ふ事である。だから酷評するものは之をゼスチユアの社會主義だと云ふ。併しそれ故にこそ、彼れに率られる間は、英國の勞働黨は極めて安全な政黨たり得る。

若し勞働黨内閣が出來るとすれば、マクドナルドは今度も首相と外相を兼ねるであらうかと、これが勞働黨内部で問題とされてゐる。前の勞働黨内閣の時に首相が外相を兼ねたが爲めに種々の不便があつた。成るべくは兼任しない方がよい。所ろで勞働黨にはマクドナルド以外に外相の適任者がない。だからマクドナルドは須らく外相となつて、首相は他に讓るべしと云ふ説がある。

マクドナルドに代つて首相となるべき人は誰れぞ。其候補者は見渡す所ヘンダーソン、トーマス、スノーデン、クラインスの四人の外にない。倫敦オブザアヴア紙は此四人を評して云ふ。スノーデンは黨首になる野心がない。ヘンダーソンは人物と精力に缺點はないが議會の驅引が下手だ。トーマスは驅引きは巧い。だが有力なる黨員を率ゆる力がどうかと疑はれる。クラインスは皆んなに尊敬されて、黨を統一して行く力はある。だが黨首としての底力と精力に缺けてゐると。

かう列擧して見れば、矢張マクドナルド以外に黨首なく、從つて亦勞働黨内閣の首相となるべき者はないと云ふ事になる。勞働黨の首領として、マクドナルドは餘りに上品で、餘りに穩健着實であるかの如く感ぜられる。併し英國人が滿足してゐる上は、それを吾々が何んとも批評すべき限りにあらず。

午前零時の文明

零時の風景

酒井眞人

その瞬時には、このまゝ永久につゞくかと思はれるやうな盛大な銀座街も、あらゆる東京の小さな横町と同じく、忽ち死んだやうに静かな世界へ入つて、マツダ・ランプの電氣廣告さへ、のらくらと眠たさうに落ちるのだ。

落合の廊下見たいに、晝間何か晴れ晴れしい僥倖がころがつてゐるやうに思はれた兩側のペエブメントには、そしてその頃になると、醉つぱらひが女に抱きつくやうにして街燈にしがみついたり、月給を貰ひたての脂肪肥りの紳士がたつた一人のウエイトレスの爲めに三人女を連れて蕎麥屋から出て來たり、いつも一緒に酒を飲むといふので愛し合つてゐる二人の男が一齊に手をあげて夜を跳ねかへして走つて來るヘッド・ライトを止めたり、最後の交渉で決裂したカフエ好みの長い髪の毛の男が自分の絶叫を樂しむかのやうに空洞な笑ひを浮べて薄氣味惡くひよろついて來たり、表通りのカフエが閉つてからたつた三十分の間に、街はすつかり姿を變へて嫌に濕つぽく脅かされて來るのである。

×

今日は金があるので裏通りで飲まうといふので、若い二人の男がゆつたりと女主人公の酒場に腕を突いて、次から次へカクテルを註文してゐる。金のあることが、互ひにお酒をおごらうとしてゐるので女たちに直ぐ分るのである。二人は憂悶と悦びを、赤くなつたり青くなつたり白くなつたりするアルコールに溶かし込みながら、互ひに面白い話を語り合つてゐる。薄桃色の小さな部屋の片隅から「赤い唇」がきこえて來ると、客の誰れも彼れもが陽氣な心持で惚れた女のことを考へる。自慢の恰好のいゝ足を見せる爲めにスカートを短かくしたウエイトレスが、もうあと五圓で三十圓になるのだがと胸算用しながら、オール・バックの中年紳士に微笑を送つてゐる。長椅子に陣取つて妙にひそひそと話してゐる三人づれの男は、小説家か詩人か、何かの藝術家

は違ひない。洋服をきた背丈の低い何處かの重役のやうな肥つた男が、意氣な美人をつれてこれもゆつたり飲んでゐる。金があるので皆んな幸福だ。藤紫の紋の手拭の美人も、少し勝手の違ふこの浮かれたジャツのレコードに、それでも一緒にゐることを幸福に感じてゐるらしい。客のお酒をたゞで飲んで、おまけに三倍も儲けてゐる女主人公がそろそろ醉つて來ると、客を悦に入らせながら懇望によつて自ら得意のカクテルをつくつて、代つた手でまた二三杯飲ませる。ちやうど十二時が鳴つた。その時突然おもてに、

バンザアーイ！

と秩序を保つた歡聲が湧きあがつた。そしてそれからつゞけて、今度は別々に、

バンザアーイ！　バンザイ！　バンザイ！

と輪になつて動くやうな叫び聲がきこえた。先つきの藝術家の一隊が、今日は女主人公が始めノンベエ女給たちに、パントマイムの示威運動によつて一滴もたかられなかつた稀有の大成功を祝つてのバンザイなのである。

×

街に明るいし、人通りは絶え間ないし、暖簾の屋台店はズラリと軒を並べてゐるし、確かに六區の活動寫眞が閉ねてから大分たつたのだが、それでゐて今が十二時なのか一時なのか眞夜中なのか、さつぱり見分けがつかないのである。油くさい燒鳥屋の暖簾の中につゝ立つて、金や雛子や、色々のモツに飲み疲れた後の口直しをやりながら、割に整つた燒鳥屋のぼつちやりした長顔をちらちらと見てゐる中に、成程いつの間にか斜向ふのカフヱ・オリエントが閉まつてしまつた。下關の河豚のやうに、この燒鳥屋の燒鳥は新らしくて安全だといふので、肩と肩がぎつしり擦れるくらゐに繁昌してゐるので、二人並んで一緒に入ることが出來ぬ時は、一人が他の一人の後ろについて時々入れ違ひにならなければならぬのである。雷門から田原町まで殆んど一杯に並んだ屋台に、何處からともなく人が出て來て、それが皆んな申し合せたやうに、壽司屋とか天麩羅屋とか支那蕎麥屋とか燒鳥屋に入るのである。それぞれ贔屓々々を持つて。新宿行の赤電が故障車のやうに一人も客を乘せずに疾走して行つてから間もなく、土工の親方のやうな逞しい二人の男が怒つたやうに馬鹿笑ひをやりながら、威勢よく人を押し退けるやうにして燒鳥屋に入つて來た。よつぽどいゝ儲け口でも拾つて來たのか、二人は互ひに何んの疑念もなく時々ボンボンと互ひの肩をたゝき合ひながら、安いアルコールの臭ひを大きな口に漂して專門語を喋つてゐる。印形彫りの四角な金指環を嵌めた手を大きな皿の向ふに頻りに伸ばして、腹に詰まるだけ食べようといふ魂膽らしい。が、今お互ひに笑ひ合つてゐるこの二人の男は、ひよつとして三十分の後毆り合ひを始めるかも分らぬのだ。毆り合ひをしようと思へば、その岩乘な太い腕を除いても彼等は毆り合ひをするに至るやうな理由を燒鳥をむしやつきながらつくり出すことが出來るのだ。

×

生れた赤ん坊が泣くから若い細君が揺つてやる頃から、玉の井の私

娼家は仕事を始めるのである。この暗黒街へ一日一萬人の客が出入りするといふのだから、アテにして出かけた腰硝子のマデモアゼルが既にこの時間、二階に姿を消してゐるのは尤もである。あんまり澤山ありすぎて何處の露路だか女のゐる家が分らなくなつてしまつて、第一の露路から虱つぶしに調べると、斷髮のモダン・ガールの娼家の二階はもう薄紫に閉つてゐる。「道頓堀行進曲」を口笛で恐ろしく急調子で吹いて合圖をすると、マダム・ボナシユーのやうに二階の硝子戸をそツと細目にあけて、

明日の午前いらつしやらない？　と艶めかしい聲と一緒に白い首を半分覗かせた。目蓋の重くなつた疲勞した人たちが、後悔のやうな恰好をしながら淫亂の迷宮から鈍い足を運ばせて行く……

眞夜中の試寫

――或モダンガールが呉れた手紙――

北村小松

Mさんはひどい方ですわ。先づ一等先きにさう書いてをきますから、よくさうおつしやつてをいて下さい。

この間Mさんと一所に街を歩いてゐたら向ふから來た一人の青年がいきなりMさんの肩をた〻いてから云ふんです。

「今夜やるぜ！」

「何時だい？」

「うん早くやるつもりだけど、まあ一時だな！」

「そ云つてをいて四時半か五時になるんぢやないのか？」

「大丈夫、今夜は早いよ。たのむぜ！」

「O・K……」

Mさんは一人でのみ込んでゐるのです。

「今夜何があるの？」――私だつて、さう聞いて見たくなるわ。一體、何の話だか分らないんですもの……。そしたらかうなんです。

「なあにね、いつもの眞夜中の試寫なんですよ……」

「活動？」……私は活動と聞いてはぢつとしてゐられないたちなのをあなたゞつて御存知でせう？　「活動なら私も連れてつてよ」

私はMさんを攻撃しました。

「だめだめ！　「眞夜中の試寫」は誰にも見せないんです。それにあゝ云ふ場所で夜明けまであんたなんか起きてられるもんですか！」

「あゝ云ふ場所つてどこ？　そして夜明けまで、どうするの！」

「それが、さ、あなた方の來るべき所ではないんだから……」Mさんはニヤニヤ笑ふのです。さうなると私だつて口惜しいし、是非連れてつて貰ひたいからすつかり駄々をこねてやつたの。そしたらMさんはおしまひに、やはりニヤニヤしながら、「ぢや連れてつて上げるから、ちやんと服裝を取りかへてお母さんの許しをうけてらつしやい。ダンス場なんかへ行くのとは事がちがふんだから……」つて云ふんです。

Mさんつてひどい方よ。

私約束通り蒲田のKホテルにMさんをたづねたのは夜の十一時すぎでした。

「さ行きませう……」Mさんはオーバーセーターなんかひつかぶつて、「夜あけ方が寒いからなあ！」なんてうそぶくんです。私、どつかの邸宅のワイルドパアテイにでも行くんだ、そしてそのあとで綺麗な活動を見せて貰へるんだと思つてわざわざドレスに着かへてその上からレインコートをひつかけてゐたんです。そしたら驚いた。私を撮影所の中にひつぱり込むのよ。

何て汚い工場なんでせう、まつ暗な廣つぱの中でバラックの様なダークステーヂだけ紫色に明るいんです。Mさんと二人で中をのぞくと、セットのかげに腰かけてゐた若い女優さんが「Mさん、おいしいお菓子でももつて來て頂戴よ！ 又今夜も徹夜だわ！ 私誰をうらめばいゝんだか、脚本家をうらめばいゝんだか、監督さんなんだか自分なんだか分んなくなつちまふわ！」とつぶやくんですの。

「さうさね。こんなお嬢さんや社長をうんと恨むんだね」――かうなんです。

「まあ大變！」女優さんはあたしの方を見て急に晴々しく笑ふの。私が外部の人なんでやつぱり職業意識が働くのね。

星が三つ四つ輝いてゐる暗やみに、どつかからヂャズの音が聞えるんです。見ると向ふのコンクリート建ての二階の明るい窓からなのよ。私、ほつとしたわ。あすこで踊りでも踊つてるんだらう と思つて。

Mさんつてひどい方！ ――私、喜んであの二階へかけ上つて何を見たとお思ひになつて。……まるで兵隊さんの様に帆布をしいたまんま二人、熊の子みたいにキヤメラの助手さんが一枚のわたのハミ出たふとんにくるまつて寝てゐるんです。しかも石つころのやうにグーグー眠つてるんです。

ジヤズのレコードの聞える室をのぞいて見るとあんまり若くないのに油汗を流して、キヤメラマンと助手の人がフイルムをつないでゐるんです。フイルムのくづが五萬と散らばつてゐる中からバナナの様なアセトンの匂ひと一所にホワイトマンのジヤズが「ホイスパリング」かなにかをガナリちらしてるんです。

「おとゝいの晩夜間撮影で三時までやつて昨日は朝八時から晩まで強行で撮影してしまつて昨夜は又一晩ネガの整理で徹夜でせう！ それをけさ現像場へ焼きつけに廻してさつき出來上るとすぐこの有様です。あゝもう十二時半だ！ も一時間半ほどおまち下さい！」ひろまの街で「今夜やるぜ」と云つた人がかう云ふのです。紹介されたら監督のYさん。

「あんた方お嬢さんを喜ばせて、社長のお腹をうんとふくらませて上げるために、まあ見てごらんなさい。煉瓦みたいに寝てゐるあの助手達は、一日も寝てなかつたんですよ。」

Mさんは「眞夜中の試寫」なんてセンセーショナルな言葉を使ふんですもの、誰だつて素人なら眞夜中の魅力と映畫の魅力とを一所にした感情にあふれ立てられて夜ふかしでもする氣になると思ふわ。私だ

つて假裝舞踏會か、ワイルドパアーテイを考へてゐたんですわ。私、お茶一つならボロ工場のコンクリート建の二階で十一時から二時までアセトンの匂ひをかぎながらポカンと床の中のあつたかさを考へながら待つてゐようとは思はなかつたわ。——ステーヂへ行つて見たら可哀さうに、うす暗いすみつこでさつきの女優さんが居眠りしてるんです。そして「だめぢやないか！眠つたら風邪をひくぜ！」つて助手の人にどなられてるんです。

二時すぎに試寫が初まりました。せまつくるしい試寫室で……。

あの額の赤銅色をした目尻にしわのある醜い女は誰だつたでせう？あれがあの人氣のあるスターのC・M子孃でせうか。試寫のスクリーンの上の美しい、M子孃と同じ人でせうか？私、驚いてあとでMさんに云つたら

「だからあなた方の來るべきとこぢやないんですよ。丑滿時にはお化けだつて現はれるんだから……」つて叱られちやつた。

Mさんつてひどい方！初めつからテストならテストだとおつしやれば私だつてドレスなんか着込んで無理につれてつて貰やしませんわ。何だか今日頭が變でアスピリンをのみました。そ、おつしやつて下さい。「眞夜中の試寫」なんてセンセーショナルな言葉をあまり澤山使はないで下さい。私達は都會の女ですから、そんな言葉にでも敏感すぎるんだからつて……。

深夜の街は
月光にあてられて居る

龍膽寺雄

蒼ざめた薔薇色の滿月が、低く中空へ懸つたもの悩ましい春の夜更け、——火災報知器の細い眞ッ赤な鐵の柱へしがみついて、彼女は風に頭の地まで髪を吹分けられながら、「厭や〳〵」とむしやらに頸を振るのです。つひそこの暗い路地から、どッと猛つては渦巻いて來る砂ッ埃に撫でられて、ペエヴメントは石の樣にコチ〳〵と固まつて居るのに、彼女の脚には靴もなければ、片いッ方には靴下さへない白々と纖い素足です。手を引ッ張らうが腕を摑ぐらうが、顔一杯に髪がからまつてもつれやうがワンピースの裾がまくれて、お腹の方まで猿股がむき出ようが、金輪際この鐵の柱を離れッこはないと云ふ見幕なので。踊り場は十時にはいれたのですから、そのまゝ素直にホテルのママのところへ送り返せばよかつたのですが、踊り場の地下室でいゝ氣に彼女にグラスを重ねさしたのがしくぢりのもとで、がらくたなタクシイのクッションに代はり番こにお尻を跳ね上げられて居るうちに、だしぬけに彼女はむづかり出して、——眞夜なかの寂靜まつたこの十字路に、勝手にタクシイをとめてしまつたのです。

『厭や！　…あんなことをするンだから、あんたは！』

人聞きのよくないことを叫んで、私に追はれながら、眼も口も開けられない埃風の中で、溺れたものは藁でもつかむと云ふ風にしがみついたのは、窓硝子へ小さく闇を覗かした、路傍の眞ッ赤な火災報知器なのです。——醉つて正體のない踊り衣裳の彼女を、グニヤグニヤと膝へ抱いて、調子に乘つてウカといたづらの過ぎたのが、この始末なのですが、汗ッぽい彼女の靴下を床から拾つて、兩手に小さく靴をブラさげて、自動車のステップへ脚をかけた時には、彼女は風にあふられてくらげの樣にフワリ〳〵と、薄暗い深夜のペエヴメントによろめいて居るのです。

『ぢや、こゝでいゝ、君。』

運轉手の手のひらへ紙幣と銀貨とをゴチヤ〳〵に載ッけたのですが、一體こゝはどこなのやら、頭の上にはまンまるい薔薇色の月が、とぼけた樣にひッそりと懸かつてるきり。——

赤い柱へ氣まゝにかぢりつかせたまゝ、彼女の脚を喧嘩腰で抓つて、ヤッとこさと片いッ方だけ靴を嵌めると、ぶらんこの樣に邪慳に彼女は脚を振つて、コロ〳〵とまた骰子ころの樣にペエヴメントへ、靴を跳ね飛ばしてしまふのです。

『あたくし、ママにさッきのことみんな話しちやうから！』

ザラ〳〵た鐵の柱へ戀人の樣に頬ずりをして、彼女は指で睫毛をこするのです。何かしら狂言らしく涙まで見せて。

『ママに話したッていゝから、…とにかくこんなとこにただをこねてたッて。…』

『厭や！　…あたくしこゝに明日まで居るから』

『明日ッたつて。…』

さう云ひかけて、私は仄かな通りの灯りに腕の時計をすかすのですが、蟲の樣な針は十二時のところで、こッそり重なり合はうとしてるぢやありませんか。——もうらきこのぶんでは、明日にもなッちまひさうなので、氣が氣でなく私は一策を案して、靴を片手にブラさげたまゝ、突然冷淡に彼女に云ひ出したのです。

『ぢや仕方がない。そこにおいで。…私はこれだけ頂戴をして、お先きにホテルへ歸つて、ママにさう話しとくから。さよなら。』

彼女はしかし、だしぬけに頬まで涙に光らして、からだぢゆうを波の樣に搖すぶつて、ヒステリックに叫ぶのです。

『あたくしこゝの硝子をこはして、東京ぢゆうの自動車ポンプをみんなこゝへ集めちやうから。…』

冗、冗談ぢやない！　拳を小さくかためて、涙の頬に髮を拂つたところは、そのくらゐのことをもしかねまじいので、私は靴をブラさげたまゝ途方に暮れて、どうやら木ものにしやくりあげて泣きはじめた彼女を、ぼんやり眺めて居るほかはないのですが、そこいらにいゝ智慧の落ッこつて居る筈もなく、戸を閉ざした通りの家並みが、いたづらに化粧壁と看板とを明るく、風に掃はれた人けのないペエヴメントに月光を蔽せて、からりと遠く灯りに見通せるだけなのです、

『ちやどうすりアいゝんだい。』

彼女の頸へ手を廻はすと、彼女はしやくりをあげ〳〵首を振るのです。――無理やりに髮の中から唇を掻き出して、動かさない樣にシカと頬を抑へて、半分顏から亂暴に唇をぶッつけると、何と！　彼女は淚の中で、どうやら嬉しげに鼻から忍び笑ひさへ漏らすのです。

――いゝ按配に、自動車が三つ四つ、探しものでもする樣にヘッドライトで地面を照らして、一とつらなりに滑めらかに、通りの片側を流れて來るので、あはてゝ地面から靴を拾ひかけると、折柄どッと猛つて渦卷いて來た埃風が、こゞんだ私の頭から、

『あッ！』

シヤッポを。――

とめどない嬉しげな彼女の高笑ひに遮られて、埃風と一緒にクル〳〵とペエヴメントを轉がつて行くシヤッポを、あはてゝ鶩鳥の樣に追ッかけてるうちに、買ひたての十二圓のグレエンの中折は、油ッぽく滑べる自動車の轍に、餡パンの樣にペシヤンコにペエヴメントへ轢かれて。――

どうも東京のこの頃の深夜は、春の月光にあてられてるらしいのです。

自稱醫學博士とS子

中本たか子

自稱醫學博士兼自稱探偵小說家のR氏は、頭の中央に滑らかな不毛地帶がある代りに、頰から顎へかけて、これは又セヴィラの理髮師でも泣き出しさうな一大ステップがある。彼はその白魚のやうな眼を細めて、女給S子の袖を放さない。そして、袴の紐にぶら下げてゐた袋をとり出して、中から丁寧に紙に包んだ藥や密封した箱入りの藥を十幾種かとり出して卓子の上に並べ、一々開いて見せた。內國產、輸入品、その何れも愕くべき奇藥妙藥で、又特殊な職能を持つもの許りだ。それの使用と效果を見るのは、午前零時頃だと彼は話した。それを袋にしまふと、今夜店が閉つてから彼の伴をしないかと、しきりにS子を促した。S子の望むのは彼との體操ではなくしてチップである。この際、R氏からの搾取率を高めるのは、彼女の微笑だ。彼女は表面同意して見せた。そして、數寄屋橋の袂で會ふ約束が成立した。R氏はチップを五圓置いて一先づ店を出て行つた。

十二時になると店を閉めて、S子は友と肩を並べて尾張町の角で電車を待つてゐた。彼女はもはやR氏との約束を忘れて、朗かに口笛を吹いてゐた。早く火を落す銀座は、晝間の文明の機關とそれを驅使する人間とから生ずる喧騷をエボナイト板のレコードのやうに吸ひとつて、相場師に似た陰謀と詭辯をかくしてゐる。

ふと、S子の肩を叩く者があるので振り返ると、あの偉大なるステップの中から覗いたR氏の顏が、彼女の面前を塞いだ。

「おい、行かう。」といふより早く、R氏はS子を提げて步き出した。

紙入れの中に溫る五圓紙幣を思ふと、S子は聲も立てられないで彼に

同行した。R氏はS子を自動車の中に投げ込んだ。自動車は築地の方へ頭光(ヘッドライト)を向けてゐる。S子の心臓は縮み上つた。あの忌はしい遊民層の細菌の中に自分の身體を埋沒しては堪らないし、R氏の持つ奇藥の試験管にされても堪らない。其處で彼女はなるべく長く自動車に乗つてゐて、その間に何とか切り抜けようと考へた。そこで、極力、新宿行を主張した。R氏もそれには賛成した。

S子は口を噤み、下段を思ひ衝す窓サイドグラスに額を附けて外を眺めてゐた。昂奮するとかつとなる癖を持つ彼女は、眼先に變る事ばかりが頭を占めて、考へようとする努力はどこかへ飛ばしてしまつた。彼女の悩みを外事に、深夜の街は晝間の文明を訂正し、分解してゐた。

尨大な廣告と金看板とは原色版の名所繪葉書だ。街路樹と鋪石道は驛辨當だ。電車の軌道と電信線は蠅の效用だ。バラックはパンフレットで、高層建築は商品の買足を早めるカタログだ。新聞社の屋上の繫氣球は玄米パンのメガホーンだ。革命とは溝の浚渫であり、生活とは劇場の前に散亂した紙片であり、思想とは街路に光と交錯した建物の投影である。

S子はふと氣附いて、傍で満足に腹皮を動かしてゐるR氏を振り返つた。如何しても逃げられない時は、アリバイ(現場不在證明)を行つて彼を始末つけろと、横行してる朦朧自動車が敎へる。街燈の靜かな羅列は、ブローニングの力と音を試して見よと唆かす。

やがて、新宿へ着いた。S子はそこの一流のカフエーにゐるT子を知つてゐるので、先づそれへR氏を導いた。そこはまだ活々と火を殘してゐる。まだカクテールと白粉と電氣の世界だ。R氏はすつかり歡んだ。

「なるほど、新宿は好いや。遊び人にとつては全く治外法權だ。」

S子はわざとR氏を唆かして、T子の腕を撫でさせた。その間に、S子は一寸お化粧へ行くと見せかけて、裏口から抜け出た。そして、走り來た朦朧自動車にとび込んで、口から出任せに市ケ谷と命じた。

走りながら、彼女は緩り考へようと思つた。だが、胸がどす黒い太鼓を叩き、頭が栓抜きのやうにくるくる廻つてゐる。巧くR氏を撒いて來たが、執拗な彼のことだから後を追ふことは決つてゐる。周章てた彼女は何も考へられなかつた。市ケ谷見附まで來て彼女は始めて自分の家が青山であることを思ひ出した。そこから自動車を青山へ向け換へた。

段々昂奮がさめて來ると、彼女は寒々とした悔恨に捉はれて來た。

ご回：黒三×参ご…の比に悩まされた。だが、悩みは其處にも轉つてゐる、道の横を掘り下げてその中で働く道路工夫の。左側に月が登つてもマルキシズムだと信じ込むのは早すぎる。月は一つの遊星だ、勞働の搾取率を數へはしない。S子を常に敎唆してゐる良人のコムミユニストだつて、本當に經濟を知つてはゐない。午前零時の經濟は、自稱經濟學博士のR氏の方が、或はよく知つてはゐないだらうか。

小路の角で自動車を捨て、S子はひとり狭くて細長い小路を歩いた。すると、前方からひゞく靴音と佩劍の音がS子の心臟を掴んだ。脅威と卑屈をショールで包み、S子は何氣なく歩いて見せた。靴音が次第に大きく育つて來ると、早速彼女は呼びとめられた。誰何、訊問、叱責！　チン、警察棒と反文明の陰構にひいたアンダア・ラインだ。

家へ歸ると、彼女は怒を發し[illegible]てゐる良人の頬を打つた。相手は

すぐ、眼を醒した。S子は何も狂しく良人の頬を打つた。動く相手を抑へて彼女は甲高く叫んだ。
「ま、黙つてらつしやい。あんたの頭を訂正してあげるんだから。私、今夜は歩き廻つてほんとによく解つたわ。」
隣室にゐる佝僂の三文批評家が、紅殻を溶いて秘密な絵を描く手を休めて、此方の騒ぎを力のない咳で諷した。

時計が空つぽになつた時刻

久野豊彦

この夜の十二時の文明を探しに、僕はいま丸ビルの裏梯子をそッと急速に登つてゐる。

十二時とは、どうも厭な時刻だ。白晝の十二時には、地球とその健康な文明が、まッ二つに割れて、夜の十二時になると、割れた半分が、またしても二つに割れて、漸く明け方近くなつて、やつと、割れた断片が縫ひ合されながら大きな地球に返つていつてその頂上が桃色に染まりだすのだ。いま、僕はこの三分の一の月のかけらやうな時刻を上の方へ上の方へと登つてゐるのだが、文明は巨大なビルデイングをして空の方へ都會を吊りあげる起重機なのだ。裏梯子は僕に断面圖を見してくれるのだが、さて、どこまでいつても灰色一點張の四角い螺旋にすぎないので、僕は一寸、スタアに火をつけてみた。すると紅い一點の火を中心に煙もなにもかもがすべて灰色の四角になつて登つてゆく。僕は息のつまるやうな氣がしてならなかつた。

この裏梯子を登る前に、銀座裏である女が僕に薄氣味悪るくつて、とても、登られるものぢやない。登つたら、何でもあんたの望みを叶へてやると云つたので、この機會に僕は夜の建築の内面に潜んだ文明をのぞいてみるために、さうして序に、彼女が腰を抜かしさうな僕の願望を遂するために、かうして僕は灰色を登つてゐるのだが、それにしても、どうして彼女のいふやうな怪しげなるものが建築のなかになで潜んでゐようか。機械文明の尖端にある建築は精神の純粋な創造なのだ。さうして、この建築の設計圖は内から外へ微塵の隙間もなしに乗りだしていつて、外部の建築の姿は内部の結末に過ぎないのだから、これらの關係にある建築のなかには、どうやら悪魔の這入り込みさうな隙はどこにもない筈だし、それに現代では建築家もまた一種の思想家なのだから、僕の登りゆく頂上の方には秩序の齎らす精神の眞の創造があるばかりだ。だから、今に、彼女は腰を抜かすであらう。僕が彼女の肉體を目方で以つて古新聞なみに買つてやると云つたら……

頭の上の螺旋が短かくなつて八階へ近づいてきたので、いきなり僕は灰色のドアを力まかせに押して床へ飛びだした拍子にぐわんと扉の開いた口から、一丁位の大きな音が、はるかに突きあたつた向ふで反響した。誰か悪戯したのぢやあるまいかと、淡い電燈の光で床をすかしてみると床が、だんだん、こちらの方へ、暗い影をなして、伸びながら走つてくる。働くための機械であるべきこのビルデイングのなか

に、僕は影げり易い冬の日射の野原を感じて、なんとも厭な氣がして、こんどは走るともなく走ると僕は巨大な靴を急に穿かされてゐるやうな音響がして、立ちどまつてしまふと、俄かに僕の靴がすうッと見るまに小さくなつてきた。確かに、僕はどうかしてゐるにちがひない。暗い床の影は次第に黑インキのやうに流れてくる。僕は身震ひをしてゐた。床を這ひながら、いまは夜の文明を探したり彼女の腰を抜かさしたりするどころぢやない。こつちの身が危やぶまれるので、角のところを急に折れて暫く這つて行くと、角を反對の方向へ黑い床が曲つていつて、やがて、小さくなつてゆく音がしたので、一寸僕は振返つてみたら、一番後を走つてゐる鼠族の尻尾が一本、ぴんと僕の眼に映つた。

氣味惡るくつて、僕は走るともなく這ひ下りてゐたのだが、それにしても、節約の法則と計算に導かれて美しく出來上がつたこのビルディングはわれらに秩序の尺度を贈物にしてゐる筈なのに、どうして、ある部屋では首のない洋服がぶら下がりながら幽閉されてゐたり、あるところでは胴のない頭ばかりの帽子が缶づめになつてゐたり、手術室の上に歯が落ちてゐたり、一ぺん這入つたら自分の顔を見違へるやうにしたりする化粧室があつたりして、僕を悩ますのであらうか。これは正しく人間の怖ろしい執念が光と影と壁と空間のなかを巡禮してゐるからだ。それに白晝に、これが買ひたいだの、あれが欲しいだのと夥しい人間が恨みながら睨んでいつた執念だとか、厭々ながら破産してしまつた丸×の遺恨だとかが五十年の間に時代を支配した鐵と硝子のなかに隠れてゐるためかも知れない。いや、さうではなく、僕たちのなかに喫驚する神經がある限り幾何學のなか には怪物が潜んでゐるのだ。やつとのことで、僕は第一階の床へまで下りてきて、ふと仰ぐと、頭の上で米田屋洋服店の硝子に、夜の十二時だといふのに、半分の太陽に怪しげな蝙蝠がとまつてゐるので、僕は地下室から間道へ抜けて、繍花室の窓から街路へ飛びだしてしまつた。

なんだか、僕は自動車に飛び乗つてからも僕は僕でなくなつて、僕は僕の傀儡であるやうな氣がしてならない。時計を見ると未だに夜の十二時だ。僕の懐中時計も東京驛の大時計も、あらゆる生きてゐる時計はみんな同じことで、夜の十二時になると、どんな時計でも時計の内面を掃除して、一ぺん時間を空つぽにするのだ。さうして、掃きだされた遠い一日の鬱積した時間は、いへば、まあ僕でもあることになる。僕を掃きだした傀儡の乗つた自動車が銀座の方角へ走つてゐる。

荘司の噴泉浴場の小さな箱のなかでは、空ろにたつた番號つきの指環が重なり合つては、旅人の指を夢みてゐるであらう。堀割にそつた朝日新聞社では市内最終版のために輪轉機を動かしては社會の風景を刷つてゐるらしかつたが、閉場したあとの浴場のやうな銀座街ですれちがつた流星のやうな自動車には紅い脣と口ヒゲがひッついてゐた。ペーブメントの上を塊になつてくる、脚をとられた泥醉者の群が一瞬明滅してそのまま、自動車は、とある酒場につくと、一ぱい列んだ酒の空どんのなかに脚をとられた泥醉者の脚だの精神だのが、アルコールづけになつたまま、つまつてゐた。

——いらッしやいませ！

暗い光線のかげから女が顔をだした。女は夜の文明のなかに咲く紅い珊瑚樹の花である。それともわれらの妹であらうか。

東京ガス裸身像

石井満

市民相手の公益事業

東京市には二百餘萬の市民を相手とする幾多の公益事業がある。そのなかでも、電車と水道は全然市が經營してゐる。電燈と乗合自動車と近き將來出來る筈の地下鐵道とは半分は市、半分は民間で經營することになつてゐる。そして、瓦斯供給事業に至つては全く民間の營利會社が獨占的にこれを經營してゐるのである。もし、この瓦斯供給事業が、全然民間の會社の自由經營に放任してあるならば別に大した六かしい問題もおこるまいが、幸か不幸か、瓦斯を供給するには道路の下に鐵管を埋設しなければならぬ。この道路の下を使用するがために、東京市と瓦斯會社との間に『報償契約』が結ばれてゐる譯である。而して、この報償契約といふ一本の鎖のためにガス會社と市との間に切りはなすとの出來ない複雜な關係が生じて、こゝにガスの問題が時々市長、市議、市會の手を煩はす重大問題として現はれて來るのである。

電車の如く全然市で經營してゐる事業においては、その性質上いはゆるガス飲み疑獄のやうなものゝおこる機會が少ない。

半ば市、半ば民間の經營による電燈、乗合自動車、地下鐵道の如きものですら從來大がかりな疑獄といふものを生まなかつた。これは市と民間の會社の間に、自由競爭がおこつて相互に警戒するためであるかも知れぬ。

ひとりガス會社の場合になると、事ごとに重大なる問題を生むで、こみ入つた物議を醸す。これ果して如何なる理由によるだらうか。

いふまでもなくその經營者が最も弱い立場の民間の事業家で、公共團體たる市がこれに相當の監督權、干渉權を有つてゐるがためである。民間の會社だからなるべく儲けなければならぬ。儲けるためには市の諒解を得なければならぬことがある。市の諒解を得る爲めに時にはかなり面倒な理論の關所を通らなければならぬ。その面倒な關所を通る場合、利益を得ることに急な會社の人々と、自己の私腹をこやすに多忙な市議、市吏員等との間に、醜惡なる金品贈收の問題がおこり勝ちなのである。

市議は選擧費用が莫大にかゝるので大概金錢の入用のさし迫つた人々。市吏員は概して國家の官吏よりも地位の安定を欠いて、待遇などもあまりよろしくない人々である。その人々の前に金ビラ札ビラ切つても自家の案を通したい民間會社の存在することはまさに、『猫に鰹節』ではあるまいか。

因果の鎖、報償契約

そんなら、ガス供給事業について、會社と市とを結びつけてゐる云はゞ因果の鎖、「報償契約」なるもの ゝ本體は何かと云へば、現在行はれてゐるものは、明治四十四年十一月廿五日に締結されたものである。もと、東京ガス會社が、獨占事業をいゝことにして横暴を振舞つたのに對して反感を持つた人々が千代田ガス株式會社なるものを作つた。千代田ガスが東京市からガス管埋設許可をうけるとき其の條件として東京市と契約したものが報償契約であつて、云はゞ市から會社に、料金その他について著しい制限を加へたものである。その後東京ガスと千代田ガスと合併したときに、新合併會社は市と千代田ガスの間に締結された契約を承繼することになつたのである。契約は卅ケ年間有效といふことになつてゐる。

この契約は全部で十五條から出來上つてゐるが、その重なる條項としては

まづ第一に市はその所有又は管理に屬する道路、橋梁、堤塘、公園其の他の土地工作物に對し會社の營業上必要なる埋管その他の工事をなすことを承諾し、これに對して料金を徴收せず、又市税を賦課徴收しないことを決めてゐる。(第一條、第二條)

また市はこの契約期間中その會社の獨占事業たることを認め　料金は一立方呎、當分一圓八十錢、明治四十六年七月一日以降は、一圓七十一錢と定めた。(第四條第五條)

料金の變更と、配當制限については、會社は拂込資本額に對する年率九歩の配當を標準とし、利益九歩以上の場合は之を會社と需要者とに均分するの主義の下に、その半額は料金引下に充當することにし、その代り、九歩に達しないときは料金一圓七十五錢を限度として次年度から不足金の半額に相當するだけの料金引上をすることを認めてゐる。

また石炭の價格の激變その他特別の事情に依り料金引上を必要とする場合は、前に市の承認を求むることになつてゐる。(第六條)

この外に會社は、毎決算期における總益金より諸損金を差引きたる殘額の百分の六に相當する金額を市に納付することになつてゐる。(第八條)

會社の資本金增加又は減少、拂込資本金の四分の一以上の社債又は借入金をなす、等の場合には豫め市の承認を受くる必要がある(第十二條)

これ等が報償契約の重なるものである。

瓦斯料金の値上

この報償契約に依つて、東京ガス會社は當時は一圓八十錢、大正二年七月一日以降はスライデング・スケールに依つて、一圓七十一錢といふ料金になつてゐた。ところが歐洲大戰の結果、石炭の値段は天井知らずに昂騰したので、會社の經營は異常なる困難に陷り、如何にしても料金の値上を斷行せざるべからざる狀態とはなつた。

ガス料金の値上が申請されたのは大正七年で、東京市がこれを承認したのが翌年十月三十六日であつた。

ガス會社が大戰勃發後、炭價の騰貴に苦しみながら、ともかくも大正七年まで、ガス料金

の値上を斷行せずにすんだのは、三井との特約があつた爲であつたと云はれてゐる。

ガスの原料としては、新々張の石炭が一番上等である。これが長期の契約になつてゐて三井汽船が運送をひき受けてゐた。しかも戰爭中の炭價の昂騰は更に運賃の增加がその原因をなしてゐた。ところが幸にもこの石炭の一部は室蘭渡し、一部は横濱渡しといふことになつてゐたが、この横濱渡しの石炭があつた爲めに會社は息をついて來たのである。

それはともかくもとして、このガス料金の値上が一度東京市に提出されるとハタと困つたのは市のお役人達であつた。

元來市のお役人達は、ガス料金をイクラ値上していゝかといふ的確な知識がなかつたのである。會社の主張は一千立方呎について一圓の値上を要求してゐるのだが、果してどこまでを承認してよろしいのか全く不明の狀態にあつた。

そこで泥縄的に材料を蒐集し、理屈を考へて見たものゝ名案も浮ばず、止むを得ず時の理事者の一人が會社へ出かけて行つて、社長の久米良作に、一體かけ値なしのところイクラ値上すれば會社はどの位儲かるものか教へて貰ひたいと頼みこんだ位であつた。もとより久米がその實狀を話す氣づかひもないが、こんな程度の知識しか持たない東京市の人達が、金儲けを生命としてゐるガス會社を監督してゐるのだから面白いといふものだ。

今日ガスの値下げの議論をするに方つて、石炭の値段が下落しても、會社は長期契約の拘束をうけて比較的高い石炭を買つてゐるので、直ちに値下げをすることは出來ないといふ論を吐いてゐる人達もあるが、嚮きに値上げのとき會社から出した陳情書なるものを見ると『……殊に唯一の製造原料たる石炭に於ては四倍以上の暴騰にして同業經營者の困難は實に其の極度に達し居り候、幸に當會社に於ては、炭量約半數の廉價特約を有し居り候得共是とても近來瓦斯需要の激增は益々以て此の優越なる地步を失墜する結果に相成居り候』と云つてゐる。シテ見れば、値下のときにこれと反對の理由がそのまゝ市民から會社に向つて云はれない道理もないやうである。

値上問題を繞る悲喜劇

ガス値上が問題となると、例に依つて、物論は各方面から蜂の巣をかきまわしたやうにおこつて來た。だが冷靜に考へて見ると、この『物論』なるものがよほど考物である。現に浩瀚なる調書を作り、ガス値上の鍵を握つてゐる筈の市の役人達すら確信のある知識がなかつたと告白してゐるのである。遽か作りの片手間仕事の人達が、果してどこまで正確な材料をつかんで公憤をおこしてゐるのか聊か眉つばものでもある。

現に、×××一といふ某區から選出された市會議員などは反對の急先鋒で、ビラを撒き演說會を開き、ガス會社を目して『市民の敵』と呼ばり、『吸血鬼』とまで叫んだものである。が、この人が何を感じたか反對運動の最中に一日ガス會社の久米良作のところへ行つて金の無心を云つてゐるのだから、表面と裏面とでは大した違ひのあるものであることを看のがしてはならぬ。

△△△裕。これも西南部の某區選出の市議

だが、やはり反對の急先鋒、これがあとで聞くと會社に手を廻はして何等かの强請に出でたらしく、しかも本人は『金は貰つてゐない唯ご馳走になつたばかりだ。元來僕は養子で、家にあつては女房の手前すきな酒ものめない身分だ。時たま會社あたりから接待されること位は大目に見て貰ひたい』と本音を吐いたといふことである。

會社からお手當のあつた爲めに、あたまから會社の御用を勤める人間はまだ正直な部で、こんな複雜なことをやるものが多いのだから、『市民の聲』もあまり當てにはならぬ。そのほか唯反對せんがために反對して喜んでゐた佐○○○○などは罪の輕い部であつたらう。

最もヒドいのになると、□□□郎なる人物は常務の磯部の手から四萬圓を請取つて、いく人かの市議を買收する約束であつたが、値上がすんで疑獄の最中に死んで仕舞つた。死人に口なしで、この男が莫大な金を請取り市議買收を引受けてゐたばかりにこの人物と往復してゐたものは皆買收の嫌疑を蒙つたものだ。△△△△次などはこれにひつかゝつた一人で、二千圓使の手を經て貰つたと云はれ本人は絶對にそんなことはないと云ひ張り、ついに法廷で、使の者を呼び出してまで調べられたがこれが△△△△次の使ではないといふことがわかつた。結局、四萬圓の金の大部分は人の手にわたらず、□□□郎が着服したらしいといふことが判明した。

ともかくも、會社側の一圓値上要求に對して、この要求にはいく分のかけ値があると云ふ會社の打明話に基き、市の理事者は大びき一割の九十錢といふ修正案を作つた。これに對して垣見八郎右エ門君は三十五錢、大崎清作君は五十錢案、その外に七十五錢案を出すものもあつたが、結局大崎君の五十錢案どころが穏當であらうと、市會の意見はこゝに落ち着いて、さしもの懸案も一とまづけりがついたのであつた。

大崎君一派の五十錢案に添附した理由書は實に堂々たるものであるが要するに材料は會社が提供したらしい。つまり會社から云へば五十錢案結構といふので材料を出したので、よく考へて見れば、會社に飜弄されてゐる形であつた。

瓦斯疑獄の發生

かくて、七年から八年にかけて市の重大案であつたガス値上問題は一應落着したのであるが、大正九年に至つて突如明治神宮表參道の不正工事問題に端を發し、東京市空前の大疑獄が司直の手によつて摘發され、奇怪なる瓦斯事件が明るみへさらけ出されるに至つたとは、讀者諸君の記憶に新なる所であらう。

足かけ二年に亘るガス値上の爲めに會社がバラ撒いた金は約二三十萬圓と云はれてゐるが、事實は七十萬圓を越へてゐるらしいとも云はれてゐる。この莫大な金を、會社の帳面づらにつけておけば直ちにバレる恐れがあるから、當時、社長久米良作名儀で約束手形を振り出し、若尾銀行が之を割引して現金としたのであるが、ガス値上問題も一段落となつて、まづは一と安心といふところで、恰も若尾が久米と代つてガス會社の社長となつたを機會に前記の金をガス會社の帳簿にふり代へて仕舞つた。正に油斷大敵と云はうか天罰とでも云はうか、その爲めに疑獄が發生するとは會社では大あわてに遽てたといふことである。

當時ガス會社の幹部がいかに周章狼狽したかを想像するに足るエピソード一二。

事件がおこると、技師長にして取締役たる參木錄郎は帳簿の一部をインキ消しで消し去つて、ほかのことを記載しておいて、何喰はぬ顏をする積りでゐたが、書類はそのまゝ押收され、證據煙滅の事實がのこらず看破された。

細かい傳票などはのこらず破棄して仕舞つたが、大部な帳簿類の處置には全然當惑したらしい。そこで×××（政友系深川區議、壯士にして女郎屋の主人）はのこらず火をつけてその帳簿を燒いて仕舞へと主張したけれども、まさかにそれも出來ず、色々思案の結果關係ある帝國火藥會社の、愛知縣下にある牛田工場の事務所の片隅にかくしておいたが、これも間もなく發見されて仕舞つた。

こんな子供のまゝ事のやうなことまでやつたのだが、事件はそれからそれと火がついて、ついに全部が白日の下に曝されたのである。只二三十萬圓の金のゆきどころが今以て判然しないとも云はれてゐる。

市民の膏血！　われわれの竈から零細な金をとり立てた揚句の果てがこの仕末である。

東京市民はこんな税金まで拂つてもまだ白晝の未夢に目ざめないとすれば、餘程のお人よしか乃至は無頓著者の集りと云はれても一言もない筈だ。

會社としては、社長の久米はキレイな方面の事務、表むきの方面の仕事をやり、磯部保次が常務取締役としてキタナイ方面、裏面の方の仕事を擔當することになつてゐたが、一旦緩急と云ふ場合になつて、取調を受けたら、二日目にその肝腎の磯部が口を割つて、何もかもぺら〳〵ぶちまけて仕舞つたので『腐甲斐ない奴だ！』と久米がカン〳〵に怒つたといふことである。

行衞不明の二三十萬のなかゝら、かなり巨額のものが新聞關係に撒かれてゐるらしいといふことはある消息通の話である。現に當時××××××の安△△△が磯部から四萬圓を請取つてゐるらしいが廣告料としては多額すぎるし、新聞社の會計に全部渡つてゐるかどうかも疑問である。

また、この外にガス會社の重役が、乘合自動車の權利株を市議に與へたことがある。これも某區選出の硬論市議、×林××が磯部の手を經て二千株を貰ひ受け、これを自分の選擧人にバラ撒いてゐる。本人から云へば、會社から、選擧人にくれるのを、自分が仲介してやつたにすぎないと理屈をつけやうが、ともかくも彼れが貰つて、それを人にくれたのであるから、會社が、何も關係のない彼れの選擧人に直接くれる道理がない。彼れが貰つたものであることは明かである。尤も、この株については貰つた人が後には非常に恨むだ相である。何かと云へば、彼れ等は貰ふとき只で貰つたのではなく、二圓五十錢の證據金を支拂はせられてゐる。ところがあとでプレミアムがなくなつて仕舞つたから、つまり二圓五十錢で株をおしつけられた形になつて仕舞つた。これ等は慾から出た哀話の一つとでも云はうか。

こんなわけでさすがの×林××も疑獄がおこると自分も召喚されて問題にされる覺悟をきめ、彼れの妻君はけなげにも（?）毛皮のチヨツキまで新調して、夫が行くべき處で健康を損はせまいとの心づくしを見せた程だが、幸にも彼れはそのお見舞をうけずにすんだ。

新聞記者のなかにもかなり會社からこの問題にからんで金をせしめたものがゐた。

五千圓	やまと新聞	大輪董郎
二千圓	各新聞經濟記者	同人扱
八千圓	やまと、中外新報	橋本、木村扱
千二百圓	東京朝日	小堀貞吉
五百圓	報知新聞	小川魏之助
千圓	東京日々	羽田
四百圓	東京日々	佐藤憲次
三百圓	東京毎夕	金子
三千三百圓	萬朝報	福永
七百圓	同上	原田、松浦
五百圓	東京夕刊	中島
二百圓	中央新聞	加藤
同上	國民新聞	菊池
二千圓	東京毎日	水谷
五百圓	都新聞	楠
二百圓	二六新聞	金澤
千二百圓	牛込公論	宮田
五千圓	赤心雜誌	赤羽隆治
二百圓	朝日新聞	中島經太郎
二千圓	二六新聞	安藤
八百圓	東京毎夕	齋藤外一人
三百圓	時事新報	堀川
二千圓		市政記者
四千圓		雜誌記者

外略す

等等等……で實にこれだけでも四萬三千圓に上つてゐた。これ等は當時の新聞紙にも掲載されてゐるから茲に明記した譯である。

ガス値下げ論出づ

近來のガス値下論の急先鋒は無產黨の諸君であつた。彼れ等は地方において電燈料値下を主張して、至るところで大衆の共鳴と感謝とを受けてゐる。無產黨の諸君の東京市民への第一の引出物は實にガス料金の値下案であつた。それにつけこんで、若い市長代理の船田君が辭任に際して、置土產の下心もあつたであらうが、通常の場合ならば後任市長の抱負經綸に待つべきものを、自ら値下案を出してガス會社に肉迫した。船田君のやりすぎることに反感を抱いてゐる人々は、市長代理として、辭任の日を目前にしながら、こんな重大な問題の交渉を始めたことを一種の越權沙汰のやうに解してゐるが、ともあれ、この重大な案件に指を染めた船田君の決斷は見上げたものである。

瓦斯料金値下については、これより先、大正十五年九月二十五日の市會において、石炭の價格が著しく低下したことを理由として、相當値下をなさしむるため理事者に手續を運ぶやう決議してゐる。

これに對してガス會社は「一般炭價は低落しても、本社は特約炭等特別の事情の爲め、その利益を享受することが出來ず、また副生物の收入も激減してゐるから到底市の要求に應ずる餘裕がない』と答へて來たことがある。

ところが西久保市長時代になつて、むしろ値下決議と相反するやうな報償契約改訂案を市會に提出し、革新會の橫車で即決可決にしやうとして失敗し、却つて革新會に分裂を來した。この經緯については、本年二月の本誌に掲載された拙稿「東京市會の暴露」のなかにも書いておいたからこゝには詳述をさける。

無產黨の諸君や、市の當局者が主張した値下げの理由や、ガス會社の鈴木常務のこれに對する反對意見などは、つい先頃の新聞紙に詳報されてゐることであるからこゝに紹介することを省くが、唯特に一言しておきたいこ

とは、ガス會社の人達はこの値下論をウンと力説させておいて、かねて自分達の計劃してゐる增資と同時にこれを斷行しやうといふ腹があるとの説である。なるほど實際の事業家としては、この位のことはたくらみ相なことで、こんなことをされては、純理論として値下げを要求してゐる無産黨の諸君は浮ばれまい。

　さらにまた、東京ガス會社が何の爲めに增資するかと云へば、此の際市内市外に大擴張をする爲めだとある。東京郊外には未だ事業許可を得てゐない小さな瓦斯會社の卵がイクラもある。この郊外ガスを征服してこゝにも獨占の威力を振ふために、擴張に要する增資であると會社側は辯明してゐる。だが、よく調べて見ると、この郊外ガスの企業者のなかには從來民政黨系の人達もゐたが、何時の間にか政友系のものが多數を占めるやうになりこの小さな郊外ガスを東京ガス會社に合併して、あわよくば一と儲けをしやうとの企みだとも云はれてゐる。政治の別名はカラクリかは知らぬが、聞けば聞くほど空おそろしくもある計劃である。値下論は會社の不利益かと思へば、何ぞ知らん却つて『增資の母』であつたり、東京ガスが猛威を振つて郊外に進出し、獨占を擅にするのかと思へば、敵本主義で、郊外ガスをだしに使ふ金儲けであつたり、眞に神變不可思議、表裏反覆、恐ろしとも恐ろしき限りである。

　東京のガスの値段はほかの都會ことに外國の都市の料金とくらべて必らずしも高くはない。だから値下げの要求に對して鈴木貞彦君が『ガス會社は慈善事業をしてゐるのではないからこれからさきの値下げは斷じて出來ない』と豪語してゐるのも一面無理はないが、東京は、從來需用者も多く殊に需用家のガス使用量も傳統的にほかよりはるかに多いのだから、東京は東京として別に考へて見る必要がある。嘗つて石炭の値段の昂騰の爲めガス値上をした點から觀ても、石炭の價格の低落した今日ガス値下を斷行するのが當然だといふ議論には相當に強い根據がある。

眉つばものゝ增資案

　値下案の代償としてガス會社の考へてゐる增資案は、現在の一億圓を一躍して二億圓とし、二百五十萬圓の功勞金のなかから、五十萬圓は重役に分配する案になつてゐるが、これについては各種の反對意見がある。第一に目下一億圓の會社でありながら、社債が僅かに六千二百圓しかない。もつと社債を增加しても差支ない筈である。第二に、社債ならば六步位で借りられる所を何を苦しんで九步の利息を支拂つて增資をする必要があるか。第三に、社債ならば利子は經常費から支拂ふが資本のときは、利子を株式に對する配當の形で支拂ふことになるから、會社は純益金として之に課税される。かゝる損失不利を敢へてしてまでも增資をする理由は全くプレミアムに依つて重役が私腹をこやさんが爲めであると云はれても一言もない筈である。また一説にはこの利益を以て郊外ガス買收を企てるだらうとも云はれてゐるが、ともあれ妥當一樣のものでないといふことだけは想像に難くない。

　ことに重役達は大正十五年四月二十八日東京市會で承認された增資（四千五百萬圓から一躍一億圓）のとき既に相當の功勞金を頂戴してゐる連中であるから今度も亦增資に依つて功勞金にありつくのは慾がよすぎるといふ

說が多い。また功勞株なるもの〻處置について、當時世間に幾多の疑惑の種をまいて今尙とかれぬ謎となつてゐることは周知の事實であるから、此度の增資についても世上に極端なる雜論の多いのは無理ならぬことである。

報償契約の缺陷

ガス値下論、增資反對の議は廣く行はれてゐるが、報償契約そのもの〻缺陷についてはあまり世間に知られてゐない。

その一はコークスの問題である。ガス値下論の一つの根據として、ガス會社がコークスをあまり安く拂下げてゐることを指摘してゐる人はあるが、進んで、このコークスが如何に販賣されてゐるかを知つてゐる人は少いやうである。東京ガス會社のコークスを販賣する爲めに、ガス會社の構内に、東京コークス販賣株式會社がある。株主が僅か十人ばかり重役は大概ガス會社の重役で、云はばガス會社の重役の副業であるが、この內職がなかなか馬鹿に出來ない。卽ちガス會社から二束三文で拂下げを受けたコークスを一噸に付六圓ほどの口錢を取つて賣つてゐるのであるから年產額十萬噸としてザッと六十萬圓の丸儲けである。机三四脚、重役、株主十數人の會社としては天下まれに見るボロい儲けであるが報償契約はこれ等の點に關して何等取締の條文をもたないのである。

報償契約の第二の缺點はガスの熱量に關する規定のないことである。市政調査會の後藤曠二氏の調査に依ると、大正七年のころに五千五百カロリーあつた筈の熱量が近來は三千六百カロリー位しかなくなつた相である。

如何にしてかく熱量が減つたか。要するに粗惡なるガス、もつと適切に云へば一圓の値上げを五十錢に値切られても尙九步の配當をつゞけてゆかれるところの手品が行はれてゐるわけである。もつと詳細に云へば、ガス會社が三菱あたりから大仕掛な送風機を購入したり、その製造所に開かずの間があつたりして、そこでガス中に空氣をまぜる仕掛をやつてゐるであらう所の疑問を抱かせてゐる點ではあるまいか。

つまりガスといふ商品について品質に關する規定を缺いてゐる所に、また報償契約の大きな缺陷が存在してゐるのである。

聞くところに依れば、ガス會社の鈴木常務はなかなか仕事ずきの男で、面倒な仕事に打勝つてゆくことに一種の興味すらもつてゐる人物だ相である、かの最も難事業とされてゐる東京株式取引所の增資問題を解決するためにその理事長として白羽の矢を立てられた位だからその辣腕ぶりは想像がつく。その鈴木君と、新東京市長堀切善次郎君とは同鄕の間柄だから鈴木君の意をうけて某々策士が堀切君の市長就任のため奔走したとか、鈴木常彦ともあらうものが先頃の市議改選に方つても幾分の五人や十人市會へ送つておかぬ筈はないとか、疑心暗鬼を生むで色々樣々の取り沙汰が行はれて、さすがにガス問題らしい爆發の危險性を暗示してゐる。

ガスの問題は一億圓の大會社、東京ガスの存亡の岐る〻所であるばかりでなく、東京市民中二十數萬の世帶の利用者にとりて密接なる利害のつながるものがある。淨化を標傍して立つた新市會の人々の手に依つて、また新進氣銳を以て鳴る新市長の腕の冴えに依つてこの複雜なる大問題が如何に手ぎわよく解決されんとするかは、大に興味ある問題であり東京市民の自治政治に對する一個の試金石でもある。（四、五、一二）

脅威下にある我財界の現状

小汀利得

一

四月十二日夜に催された吉例の手形交換所聯合懇親會の席上に於ける、三土大藏大臣と、土方日本銀行總裁の演説は、例によつて既に知れ切つた數字の羅列に過ぎないところの、頗る生彩なきものであつた。從つて翌朝の新聞は殆んど筆を揃へて三土、土方兩氏――特に三土氏の演説の無味乾燥であり、財界指導の任を全うし得ざることを攻撃したが、唯一つ或る新聞が兩氏の演説をば、從來のそれと異つて金解禁に向つて、數歩を進めたものと紹介し、政府はまさに近く金の解禁を斷行すべし、と經濟面の殆んど全部を費やして報導した。

勿論此の報導は、それが掲載された當日に關する限り、財界では一笑に附して對手にしなかつた、すなはち爲替は下り、株は反撥した。蓋し親しく三土、土方兩氏の演説を聽いた銀行家は素よりのこと、新聞紙上に現はれた演説の内容を一讀した程の者には、兩氏の演説のどこをさがせばとて、金解禁斷行の意志の無いことを、ハッキリ意識して居たからである。

云ふ迄もなく、金解禁と云ふが如き一黨一派の利害を超越したる、重大なる經濟問題に就いては、如何に黨派根性の強い大藏大臣と雖も、故意にその眞意を示さずして曖昧的態度に出づるが如きことは考へ得られない。況んや政府から全然獨立し、一國金融機關の中樞に居る日本銀行總裁に於いてをやである。

然るに此事あつて後中橋商工大臣は、恰かも政府に近く金解禁の意志あるかのごとき説を公然新聞記者に語つた。それが爲めに、財界は俄かに金解禁懸念が濃厚となつて、一週間後の四月廿日には株式市場に於いては株式も公債社債も一齊に相場崩落し、爲替は反對に二月以來の低落歩調から一轉して、反騰した。株や公社債の外に、綿絲布その他の商品市場も、漸やく一種の恐怖に襲はれ取引は著しく縮少し、相場は一齊に低落した。

二

昭和二年四月に起つた金融恐慌の直接の動因が、當時の大藏大臣片岡直温氏の行つた正貨の現送から、金解禁に對する市人の恐怖を刺戟したものであることは、何人も認むるところである。また昨年十月に起つた公債及び株式相場の暴落が、東京大阪銀行業者の金解禁即行決議に脅えたものであることも説明を要しない。

而して今度亦解禁説の流布に遭つて、株式、公債を初め、その他廣汎なる範圍に亘つて、財界が一種の恐怖狀態に陷つたところを見ると少くともわれ〳〵は左の二つの事實の存在を見逃すことは出來ない。二つの事實とは

（一）金の解禁が財界に深刻なる影響を及ぼすべき懸念が廣く財界に行き亘つて居ること。

（二）嘗つては金解禁に反對し、最近に於いても、尙は爲替相場が正貨現送點に近付いた時でなければ、金解禁をしてはならないと主張して居る現政友會内閣が、當日時の利害の打算からと、内閣の首班に在る田中氏の經濟的無知との爲め、動もすれば經濟以外の理由から不意打的に解禁を行はんとする惧れのあること。

の二點である。

第一の點については後に述べるが、第二に擧げた政友會内閣に金解禁斷行の意志があると云ふことは、世間一般には信じ難いことである、蓋し永い間内閣の責任ある大臣はもとより、政友會の有力者によつて金解禁がわが財界に取つて容易ならざる事態を惹き起すものであることを聞かされて居たのであるから、最近に到つて解禁に不利な事情こそ大いに生じて居れ、何等有利に展開して居らない今日に於いて、突如として、この永い間の解禁反對論者の集團たる政友會内閣の手で、金解禁を行ふなどゝ云ふ事が信じられないのは決して無理ではない。

三

それならば政友會内閣は金解禁に反對であらうか。三百代言的に云へば初めから政友會は反對でなく、唯尙早論を唱へたに過ぎないと云ふのであらうが、現在の財政經濟の實狀から見て、三土氏の云ふ如く『爲替相場が現送點に近づいて來て、之れならばよいと云ふ見込がつく』時は到底有り得ないのであるから、この意味から云つて尙早論――特に責任ある關係の尙早論――は明らかに反對論なりと斷じて差支ない。

さてこの多年反對論を唱へて來た政友會は、私の見るところでは、從來の金解禁反對から、解禁贊成へ急轉回すべく、目下適當な口實の發見に苦慮して居る最中であるやうに思はれる。その根本的な理由を一言にして盡すならば、看板塗替の必要からである。

政友會はこれまで所謂積極政策をその傳統として來た。そしてこの積極政策なるものはおもに世界大戰の如き、外から起つて來た偶然的の爲めに、破綻を暴露しないで今日に及んだのであるが、今度と云ふ今度は本當に行詰まつてしまつた。彼等の所謂積極政策は破綻を暴露したのである。

從來も屢々行詰まりを叫ばれたものであるが、それは今日の狀態とは、全く事情を異にして居つた。例へば餘りに政友會が放漫な政策を行ふ時は反對黨若しくは、藩閥軍閥等の勢力によつて取つて代られたから數年後に、政友會が政權を握る時には再び積極政策を行ふことが困難でなかつた。加ふるに行詰りと云つても、それは眞の行詰りに逢着しない中に軈て來るべき行詰りを惧れて政友會内閣を破壞する丈の實力あるものが存在して居つたから政友會としては多年の傳統を放擲することなく、『積極政策』を遂行して行くことが出來たのであつたが、今日では議會以外にさう云ふ勢力が無く、議會は權力と金力を以て如何やうにもし得る爲めに、政友會はその希望通りいつまでも政權に噛りついて居ることが出來る。ところが、いつまでも、政權にありついて居れる身分になつた時には、政策は自分のものが行へないで、いまゝで散々惡罵を浴せ掛けて居た、反對黨の所謂『消極緊縮政策』を借用せざるを得なくなつたとは、何たる運命の皮肉であらう。

四

現内閣は不戰條約その他の問題で、進退兩難に陷つて居ると同樣に、否なそれ以上に、財政上の行詰りに逢着して居る。今年度は本豫算と追加豫算を併せて十七億七千三百萬圓と云ふ我國有史以來の大豫算が議會を通過したが、來年度豫算の編成は今年度の如く容易でない。私は茲で財政を論じて居る遑がないから、成るべく簡單に片付けるが、先づ第一に永い間財政の遣り繰りに利用された剩餘金の使途未定のものが、僅かに百六萬一千圓しか無いし、租稅の自然增收も經濟界の不況から思ひ切つて少いところへ、得意の借金政策も亦利かなくなつた。それはかうである。いま全國の銀行はざつと百二十億圓の預金を持つて居つて、この資金を以て國債に二十五億圓を投資して居る。そこでもう國債を買ふ餘裕が無い、換言すれば政府に資金を貸付ける餘力を持つて居ない。だから六月一日に期限の來た國債の借替成績でも非常に惡かつた。併し之等の銀行が政府に金を貸して呉れないでも、政府は預金部と稱する自分の銀行を持つて居たので、いままでは一向驚かなかつた、ところがこの政府の資金調達所たる預金部も、近頃は資金をすつかり焦げつかしてしまつて、三月末日現在の内地用金と云ふものが、僅かに一億九千九百萬圓しかない、此の中から銀行が引受けて呉れなかつた第四十九回國庫債券を幾らか持たなければならないし、今年度の新規國債一億九千六百萬圓の大部分も引受けねばならないと云ふ有樣であるから、もう預金部資金も涸渇に近い。そこで止むを得ず一度大藏大臣が、民間の銀行家と約束した郵便貯金の利下げまで犧牲にして、政府の手に資金を集めることに浮身をやつして居る程なのである。

それなら内地で借金が出來なければ海外ではどうかと云ふに、之れまた海外市場の金利高等の現象を度外視しても、政府は第二回英貨四分利公債二億三千四百餘萬圓の期限が昭和六年一月一日に到來するので、之が借替へにさへもすでに今日から頭痛鉢卷の態であつて、新規の借金などわが財政上からは素より外國市場の現狀から云つても

迄も思ひも寄らないところである。すでに租税收入や官業收入が財界不況の爲め增加せず、剩餘金は殆んど使ひ果してしまつて、しかも借金の目途も立たないとあつては、如何に放漫政策の好きな政友會でも看板の塗替へを餘儀なくされざるを得ない。

併しながら唯來年度の豫算編成が困難だから、今迄攻擊して來た反對黨の消極緊縮政策を採用するとは、如何に厚顏なる內閣諸公と雖も云へないであらうし、また云ひたくない。加ふるに從來鐵道を敷いて與れたり、橋を架けて與れたりするからこそ、政友會を謳歌して居た地方の黨員達には財政の實狀も何も判らないから承知する道理がない。茲に於いてか、どうしても環境そのものに一大變化を起さしむることが必要となつて來る。すなはち金解禁をしたについて、止むを得ないと云へば、立派に云ひ譯が立つ。從つて積極から消極への宙返りも案外無事に出來やうと云ふことになる。

五

さらにもう一つこの內閣をして金解禁を餘儀なくせしめるのではないかと考へられる事情がある。

それは爲替維持、在外正貨補充等の問題である。政府の發表するところに據れば二月末日現在の在外正貨は九千六百萬圓で今日は更に減つて居るから、文部省から派遣して居る在外研究生の學費や、官吏の洋行費等は、全部爲替決濟に據るとしても、國債の利拂ひや、海軍省關係の海外拂ひ丈を見ても、あと一年分には足りないのである。

我國の物價その他經濟上の理由からは、もつと下るべき爲替を、兎も角も四十五ドル以上のところに維持して來たのは、畢竟するにこの在外正貨の作用によるものであつたから、在外正貨が段々少くなつて來るに從つて、爲替はヂリ〳〵安くなつて來た。で政府は之れが補充策についてはあまり多くも無い智惠を隨分絞つたが、突きつめたところ左の諸點に歸着した。

一、臺灣電力、滿鐵その他民間の外債を起さしめ、之れを買ひ上げて、正貨の補充を圖ること。

二、內地に在る正貨を現送すること。

三、預金部等の所有に掛る外貨國債を正金銀行に貸付け之れを擔保として(買ひ入が無い爲め賣つて金にすることは不可能に近い)借入金をなさしむること。

右の中第一については、少くとも議會に臺灣電力會社外債の政府保證案を提出した當時に於いては、アメリカの金利も間もなく低下する位に樂觀して居つたやうである。然るに實際はさうは行かないで、目下のところ何時アメリカの金利が低下し、ニューヨーク市場で外債を消化し得るやうになるか全く見當さへもつかない。

また第二の正貨現送を行ふとして、目下內地に所有して居る正貨は僅かに二千萬圓前後のものであるから、政府所有の分丈を送るならばそれは單に財政上の損失を少くすると云ふに止まつて、爲替の上には殆んど影響がないであらう。若し爲替に相當響く程の正貨現送を行はんとすれば、どうしても日本銀行が兌換準備として、持つて居る正貨

に手をつけなければならない。準備正貨に手をつければ、通貨は當然收縮する、さうしてその實際の影響が現はれる前に、經濟界は神經過敏になつて、またく〵一種の恐慌を招來すべきこと、ほゞ疑ひないところであらう。

しかし問題はそれ丈に止まらない、いやしくも兌換準備にまで手をつける以上、そこに金解禁と云ふ目標が無ければ無意義である。唯漫然と政府の海外拂——一番重なるものは國債の利拂ひであるが——に保有正貨を使ふと云ふことは、あまりに無策である。

然らば外貨國債、すなはち日本政府の發行した英米佛貨公債を以て外國に於いて資金を調達する方法はどうかと云ふに、この方法も相當困難ではあるが、これならば全然望みなきことではない、しかしながらこの方法に據つて、そして成功することが出來たとしても、資金を調達し得る程度はせいぐ〵一億二三千萬圓に過ぎない。しかもかうして時借りして置いても、金の解禁を行はざる限り、之を返濟し得る見込みは全然無い。すなはち返す見込みのない借金は出來ない、否な政府としてはそれでも借りたいであらうが、對手たるニューヨーク若くはロンドンの金融市場がさう云ふ不良貸しには應じない。

六

そこで最後に智惠者が考へ出したのが、クレデットの設定である。政府が海外にクレヂットを設定するとなれば、議會を召集してその協贊を求めるか、それ丈の時が無いとすれば緊急勅令として樞密院の議に付さなければならないが、樞密院は若槻内閣以來鬼門に當つて居りまた國債の利拂ひ困難の爲め、海外に信用を設定すると云ふ理由で臨時議會の召集も出來ない、そしてまた事態は決してそれ程までに迫つて居らない。そこで此場合は日本銀行を當事者とする以外に方法はないが、之れまた如何に窮したればとて、十億六千萬圓の正貨を保有する日本銀行が、金解禁に直接何の關係もなく外國でクレデットを設定すると云ふが如きことは中央銀行の面目からも出來ないし、またいまの日本銀行當局が如何に腰拔けでも、それ丈の非常識は敢えて企て得ないであらう。

かうして新聞に傳へらるゝ種々の方法を檢討して見ると、結局どれもこれも出來ない相談であることが判る。

而して政府が從來の聲明や諸施設に反して、金解禁の決意をする危險は玆に在る。どうしても窮通の途が無く、しかも經濟界に充分の見通しの利く人物の居ない場合に、動もすれば踏み迷ふ途は この金解禁の一路である。

現内閣は今日まで金解禁に對して全然準備をして居らない。否な金解禁からはいよく〵ますく〵遠ざかりつゝある。之れをたとへて云ふならば、金解禁の途が東海道を西に向つて走つて居る時に、現内閣は東京をたつて奧羽方面に疾走しつゝある、然り現にひた走りに走つて居るのである。然るに此の奧羽路を走りつゝあるマラソン選手は、いまひそかに東海道を西に下らんことを、胸中に企らんで居る。彼れがこの考へを行ひに現はす時、彼れの身邊に如何なる慘害が起るであら

こ？　東京から彼れを護つて來た幾臺かの自動車、サイドカーは勿論多數の彌次馬の間に衝突、追突が起つて、彼れが方向を急轉還したその瞬間、路上には幾多の死傷者を出すべきこと、火を睹るよりも明らかではないか？

若し現内閣の閣僚中に經濟界の實情を知つて居る者が一人でも居るならば、前述せる如き政治上の理由や財政上の行詰りから、敵本主義的に金解禁の舉に出づる惧れは全く無いのであるが、首班たる田中氏初めいまの當局はすべて人の和を得て居ない。これは閣僚のみの問題でなく、日本銀行の幹部にしても同じことであるが、金解禁と云ふやうな重大なる事業を比較的無難に成し就げ得るやうな政治的手腕と經濟上の知識が全く缺けて居る。

而も之れは政府と日本銀行のみに、固有の缺陷ではなく、一般的に日本に於ける情實本位の人事行政の行詰りと云ふことになるが、いまのやうな政府及び日本銀行當局者の手腕では、金解禁の場合に起り得べき恐慌をばミニマイズしないで、反つて益々波瀾を大きくするおそれが多いのである。

それにも拘はらず、我國の制度の上に於いては、金解禁は形式上時の大藏大臣の一存によつて、何時と雖も行ひ得る。すなはち簡單に大正六年九月十二日に公布された、大藏省令第廿八號なる一片の省令を撤廢することによつて、この全國民に重大なる影響を及ぼすべき大事件が惹き起されるのである、少しく言葉に極端であるかも知れないが現當局にかゝる絕大なる權能が與へられて居る狀態をば『氣狂ひに刃物を持たして居る』と評したならば、最もよく實情を說明し得るであらう。

若し不幸にして現内閣の壽命が今秋まで保たれ、五年度の豫算編成期まで保つとすれば、金解禁の危險はいよ〳〵濃厚の度を加へるであらう。

そこで問題は現内閣の壽命如何に懸つて居ると云はなければならない。

かくの如き危險に曝されて居ればこそ、常識を以てしては、到底想像も及ばない、政友會内閣下に於ける金解禁なる聲にも、財界は異常なる脅威を感ずるのである。

七

以上私は現内閣がいま岐路に立つて、動もすれば金解禁の暴舉（無準備の解禁は暴舉である）を敢えてなさんとする事情を說明した。

しかし財界が常に金解禁を猛獸の如く恐れ、金解禁なる事實をば正に一種災害視するに至つた事情——財界固有の——の研究も亦決して忽せにすることは出來ない。

日本の財界がいま金の卽時平價解禁を甚はだしく怖れる根本の理由は産業界が新たなる革命途上に在るが爲めである。歐洲大戰後世界の重なる工業國は深刻なる産業革命に直面した。しかして逸早くこの新産業革命を完成したアメリカは何人も知る如く今日の繁榮を享樂して居り、歐洲諸國も亦既に成就しまたはほゞ完成に近いのに、日本は政治家に無知であり、財界には明治初期に存して居たやうな、眞面目な

指導者を有しなかつたことゝて、折角の戰時好況時代を無爲に過ごし、加ふるに、戰後の經營と整理とを誤つて、長くこの世界的風潮の外に立ち、最近數年この外部に行はれた產業革命の實質的壓迫に遇つて漸やくいまその道程に在る。若し金解禁なることが今より十年前の產業狀態に於いて行はれたとしたならば、財界は決して今日の如く恐れ戰きはしなかつたであらう。何となれば十年前には我國の二大產業たる棉絲紡績と蠶絲業とは得意の絕頂に在つた。棉絲紡績は多年の苦辛經營が報ひられて漸やく自信がついたところであつた、また蠶絲業も世界の產額の過半を占めて市場を充分支配し得る確信を得て居た時であつたが、棉絲紡績事業は大正十年のワシントン會議にその動搖の一步を踏み出し、內は深夜業廢止等の勞働問題に煩はされ、外は歐洲品の競爭に曝されて、今日は僅かに爲替の保護によつて、之等の競爭に對抗しつゝある有樣であるから、少くとも今即刻金の解禁を見んか、棉絲紡績業は內を固むる遑なくして、外敵に曝される危險がある。生絲は漸やくにして歐洲絲を驅逐し宿願成つたかと思へば、レーヨンなる強敵が現はれて、世界的市場支配の夢は破れたのみならず、彼我經濟力の相違は如何ともすることが出來ず、爲替の暴落より生ずべき差益の如き、之れを悉くアメリカの輸入業者に占められる程のあはれさである。

數年前現大統領フーバー氏は、商務卿としてゴムの供給について、英國と渡り合つたが、さう云ふ場合に英國のゴムに於けると同じ地位に在る日本の生絲について、氏は一言の日本を攻擊するところなかつた。併しこの現象は日本產業界の爲めに欣ぶべきことであつたらうか、それとも悲しむべきことであつたらうか？

日本の蠶絲業者もその製品をより高く、より有利に處分せんとする點に於いて、決して英國の企業家に退けを取るものではない。それにも拘はらずフーバー氏の攻擊に遭はなかつたのは、英國がゴムの供給に於いてその優勢なる地位を利用し、之れが最大の需要國たるアメリカをコントロールして居たのに反して、日本の蠶絲業者は世界の生絲產額の過半を制しながら、その經濟力の差から、完全に需要者たるアメリカに支配されて居つたからに外ならないのである。換言すればフーバー氏を憤慨せしむる程の實力を有しなかつたが故に、おこられないですんだのである。

代表的なる二大產業にして既に然り、他に果して如何なる產業が、世界に濶步し得る丈の自信ある地位に置かれて居るであらうか。

八

然らば新興產業は如何？　最近內輪喧嘩をして、世界に醜をさらした露領漁業にしても、若しいま金の解禁を見、爲替が一瞬にして一割有餘騰貴したとすれば、日魯漁業會社の如きも、その得らるべかりし收益の少からぬ部分は、失はねばならない實狀に在る。鐵鋼窒化學工業等日本としては幼稚工業であつて、いま少しく爲替低落の自然的保護を失はなければ、前途相當望みある產業も、いま卽時に平價を以て解禁が行はれるならば、彼等は二葉にして摘み取られる憂目に遭ふで

あらう。

財界が金解禁を怖れる理由は、これ丈では盡きない。

それは多年の無知なる放漫政策の祟りに、搗てゝ加へて一昨年の九億圓と云ふ不自然なる特別融通資金放出から生じた惡結果である。

試みに手近な例で財界の行詰りを示すならば、東京市内に空家の多いことである。新聞に據れば東京市内にはいま六萬九千戸の空家があつて貸家總數の一割に當るさうである。それが爲め家主は恐慌を來し家賃を思ひ切つて引下げる外、從來唯で使つて居た敷金に六分の利息をつける者が出たと傳へて居る。

若しさう云ふ方法で、東京市內六萬九千戸（五人家族としても三十四萬五千人、同居者を加へればもつと多くの人口を收容し得る計算になる）の空家がふさがるものとすれば、問題は極めて單純であるが、恐らく如何に好條件を以て住民をさがしても、吾等の空家の大部分は塞がらないであらう。單に東京市中の貸家の家賃が高い爲めに、空いて居ると見る如きは經濟的に全く盲目なる者であつて、眞の理由は大正十二年の震災後市外に移住して再び市内、特に下町に歸り住む者が少くなつたこと及び消費者が目醒めて近所の小賣屋から物を買ふことが少くなつた結果として、市內に於いて小賣業を營んでも商賣が成り立たない爲めに、住宅街、小賣街とも市內の人口は絶對的に減少したところへ、一昨年の金融恐慌以來特別融通資金の放出によつて、銀行は適當なる投資物に困り、市中の家屋擔保に貸付けを行つたが、此場合しもたやよりも店舖式建物に對する貸出しの掛けをよくする爲めと區劃整理の結果道路に面する家屋敷地の數が殖えた結果、先見の明なき家主達は銀行より金を引き出して競つて店舖式貸家を建てた、すなはち之れが爲め市內の家屋、特に下町の店舖は絶對數を增したのである。

かう云ふ理由であるから、東京の貸家過多は今後少くとも數年、長ければ十數年の間、家主、金融業者、市、府等を苦しめるであらう。

地方は如何？　我國の物價指數は明治三十三年を基準として一百二十五前後で、就中國際的商品の中には當時に較べて、僅かに一割前後の値上りを見て居るに過ぎない物があるのに、米の指數は二百五十前後と一般物價平準より一割以上高位に居りながら、農家は常に米價の割安を訴へて政府に數億圓の巨資を融通せしめて、米の買上げを行はしめて居る。

これ何故であるか、勿論種々の理由もあらうが地價を徒らに高くしたことが根本且つ直接の原因ではないか？

九

此種の經濟狀態の不健質なる實例は、到底私に與へられたスペースを以てしては擧げ切れないから、最も著しいものに止めるが、金融界は一昨年の特別融通資金放出以來、全く變態に陷り、金利は嘗つて見ない程に低下したが、それでも尚ほ放資物件がない爲めに、止むを得ず國債に放資して政府の放漫政策を助長して居る。しかも此上國債に投資する餘地は全くない、株式も社債も金融安に拘はらず、騰る

低位に在つて一流の株式にして尚ほ且つ利廻り八分に近きものが多大數で、國債は五分七厘何毛と云ふ驚くべき高利廻りである。これは畢竟するに今日までの財界の虛僞が、金解禁によつてその假面を剝がれることを感知して居るからに外ならない。

若しそれ金の卽時平價解禁の影響に至つては、恐るべきものであつて、日本の市場金利の標準たる紡績手形割引步合は、年利にして三分六厘五毛から四分二厘であるが、ニユーヨークは九十月、商業手形の割引步合六分五厘と、二分乃至三分近くの開きがあり、また國際貸借關係も我れに不利であるから、一度び解禁を行はんか、相當巨額の正貨流出を見、從つて通貨、信用の收縮を見るに至り、物價の低落から幼稚產業の沒落となり、失業群の增加となつて、恐るべき狀態を現出するであらう。

併しながらさきにも述べたやうに、現內閣はその行詰まり打開の爲めに、かゝる事情をも無視して何等かの形ちに於いて金の解禁を企圖する危險が充分にあり、また財界にも指鉢的乃至は無知の結果としての、解禁論も擡頭して居るので、かゝる一部の議論を逆用することは有り得ることである。若し果してこの懸念が一片の杞憂に終らないならば、その時こそは財界は長い間の瀰縫の總決濟を行ふは秋であらう。

而してそこに財界恐怖の眞因はひそむのである。

中央公論五百

大懸賞原稿募集

舊きもの必ずしも貴くはない。舊くして而も新たなる、日月の如くにして始めて貴い。わが中央公論は來る九月號を以て五〇〇號を算へんとしてゐる。創刊實に四十有四年である。起伏興廢恒なきわが雜誌界において確かに異數とするに足りる。而も四十有餘年儼として太陽の如く、わが言論界唯一の最高標準としてその存在を保つて來たことに至つては、何人の前にも誇つていゝと思ふ。われらの歴史は一頁と雖も汚されてはゐない。今も昔も、日本唯一の最高言論機關たるに渝りはない。代は明治、大正、昭和と移り變つたが、その間を縫うて、一貫して言論界に最大炬火をかゝげて來たこと、洵に太陽のそれの如くである。いかに新奇を趁うに氣紛れなる我國人と雖も此事實の前に頭を垂れざるを得ないであらう。五〇〇號雜誌の發刊は一中央公論社の欣びではないのである。

我社はこの未曾有の歴史的事實を祝福するために「五百號記念號」を發刊しようと思ふ。さうしてその史的記念を意義あらしめるためには、一夕の祝宴やお祭り騒ぎを排して我國人大衆と共にその欣びを頒ちたいと思ふのである。

大懸賞原稿募集はその計畫の一端である。即ち來る九月號の大部分を我一般讀書界のために開放して、廣く隱れたる篤學同好の士を求め、一は現代社會の文運に貢獻し、一は多年の愛顧に酬いんとするのである。來り會して、この史的記念を意義あらしむると同時に、無くてはならない唯一の存在たる太陽の光輝をして益々永劫の光榮に輝かしめられんことを希望する次第である。

號記念號豫告

應募規定

一、論　文（社會、經濟、政治、科學、其他一般評論）

枚數　四百字詰原稿紙三十枚以內

一、中間記事（隨筆、讀物、實話、傳說、考證、其他）

枚數　四百字詰原稿紙四十枚以內

一、創　作（小說、戲曲、シナリオ）

枚數　四百字詰原稿紙五十枚以內

（注意）優秀なる原稿は幾篇にても採用す。

一、締　切　昭和四年六月三十日

一、應募原稿は總て中央公論編輯局「五百號紀念號應募原稿係」宛と表書する事。

一、住所姓名は最初の頁に楷書にて正確に明記する事。

一、返送を要する原稿は其旨明記の上、郵券を添付する事。

一、掲載の原稿に對しては一枚三圓以上十五圓以下の賞金を呈す。

一、一人にて幾篇投稿するも可なれども各篇必ず住所姓名を明記し各別に綴ぢておく事。

巴里へ

正宗白鳥

De Grasse

カリホルニア州南端のサンデゴで、M畫伯に會つた時、「大西洋をお渡りになる時には、大きな船の二等室をお取んなさい」といふ注意を受けた。米國から歐洲への航路には、四萬噸五萬噸の巨艦が通つてゐて、船内は豪奢を極めてゐると、私はかねて聞いてゐた。をり／＼少數の日本人がその中にまじつて、片隅で小さくなつて、日本人同志でこそ／＼チップの相談なんかしてゐると、ある人から聞いたこともあつた。M畫伯の注意は、「一等室に收まつて、歐米乘客の華美贅澤な社交を見せつけられて、神經を惱ますよりも、二等室にゐる方が氣樂だ」といふ意味なのであらう。

ところが、シカゴでT君にその話をすると、「あなたが二等室なんか入つちやいけない。堂々と一等船客としてお通んなさい」と云つて、私などが歐米人に對してひけ目を見せるのが、さも國辱であるかの如き口吻を洩らした。

ニューヨークでその話をすると、常識に富んだK君が、「大きな船の二等室は、客種がいけない。ジューが多いし、世間ずれのしたいやな奴が多い。それよりも、一等だの二等だのといふ差別のない普通の船がいゝでせう」と云つた。私はK

君に一任した。そして、郵船會社の周旋で、佛蘭西船の「ド・グラス」號の一室を取極めることにした。三月の中旬で、歐洲漫遊の季節としては、まだ早過ぎるのだが、私の心は先きへ〳〵と急がれるのであつた。

船に弱い私達は、太平洋よりも波の荒い大西洋を氣遣つてゐた。五月以後はこの荒海も鏡のやうになるのださうだが、三月の今は日本と同じく季節の變り目で、平穩な航路は望まれなかつた。それに、いざ立つとなると、ニューヨークで見殘してゐる芝居などをもつと見たくなつて、船室の約束を取消して、二三週間航海をおくらせやうかと迷つたが、そんな交渉も面倒なので、豫定通りに船に乘ることにした。

その日は小雨が降つて鬱陶しかつた。霧が深くつて、ハドソン河から沖へ乘出すまでに暇が取れた。一生に再び來る當のないアメリカに、甲板の上から別れを告げて、船内を見廻つて、自分の部屋に落着くと、旅愁を感じるよりも、「アメリカ見物」といふ一仕事を終つたといふ安易を覺えた。

この佛蘭西船に一歩入り込むと、アメリカと違つた感じが心に觸れた。このド・グラッス號は、一萬噸足らずの船だが、コレア丸などゝは大違ひで、荷物船と遊覽船との相違があつた。瀟洒なる裝飾は佛蘭西の美術を想像させた。狹い船室も遺憾なく居心地のいゝやうにつくられてゐた。何よりもペンキ臭くないのが有難かつた。まだ季節が早いので、客室は半分以上空いてゐた。乘客三百人の過半は佛人らしく、その他は大抵米國人で、東洋人は私達二人だけであつた。先づ食堂の席を極めて、最初の晩餐に出て行くに當つて、洋裝と日本服とのどちらにするかが問題となつた。少くも晩餐の時だけは、男はタキシード、女はイブニングドレスでなければいけないと云はれてゐた。しかし禮服がないために、食堂へ出られないで、自分の部屋でコソ〳〵食べるなんか腑甲斐ない譯であるし、見聞を狹める譯なので、私は妻を勵まして、二人とも日本服で出掛けた。ところが、出て見ると、多くの日本人がいつも氣にするほどのことはなかつた。脊廣の客も多かつた。彼等の方が却つて日本人ほどに服裝に拘泥しないのであつた。食事はフランス料理で、葡萄酒が一本づつ附く

のだが、酒の飲めない私などは、生ぬるい水によつて、新鮮味に乏しい肉や魚を嚥下するのであつた。ニユーヨークのやうな大都會では、半年も冷藏庫に收められた肉類を食卓に供せられるのを常としてゐると云はれてゐるが、調理がいくら巧みであつても、繊細な滋味を缺いでゐるのは、そのためなのであらう。私の口には、西洋の洋食よりも日本の洋食の方が遙かにうまいやうに思はれるのである。

しかし、大西洋航海の九日は、意外に快く過された。幾日も雨は續いて、波も穩かではなくつて、卓上の食器にワクを嵌められた日も多かつたが、私は一度も食事を缺かさなかつた。しまひには、興味を以つて激浪を眺めることさへあつた。「經驗ほど人間を鍛えるものはない。」船醉ひについても、醫藥は何の效果のあるものではない。人々の敎へて呉れたいろ／＼な豫防法も殆んど役には立たない。ただ太平洋上十五日間の航海が、私の心身を船に馴れさせたのである。人世の事すべて然り。

それで、私は、陸上にゐた間よりも、よく食ひよく眠りよく動いた。日に／＼顏馴染になつた米人や佛人の生活振りを傍觀してゐると、さう退屈はしなかつた。彼等は、毎日を樂むことを勉めてゐる。活動寫眞が映されるし、音樂が演ぜられるし、競馬が催される。夜は十二時過ぎまで、ダンスが行はれる。ダンス場は私達の部屋の上なので、猛烈な靴音が頭上に響くのだが、それが煩くは思はれないで、寧ろ壯快であつた。喫煙室ではトランプの遊びが盛んで、チヨツキーブレーとかいふ日本の双六のやうな遊びも行はれてゐる。私達は勸められても仲間入は出來なかつたが、競馬だけは金をかけさへすればいゝのだから、二三度試みた。五六頭の模型の馬が、賽ころによつて動くのである。

毛色のちがつた我々は、珍らしがられるのか、弱者として憫まれるのか、いろ／＼な男女から親切さうに話しかけられた。をり／＼は小うるさく思はれることさへあつた。ことに、お婆あが所謂老婆心から注意を與へたがるのである。

中に一人旅の青年があつた。小雨そぼふる甲板の欄干にもたれて、果てしなき大海を茫然として眺めてゐる私の側へ寄

つて來て、

「君はアメリカをどう思ふ?」

「アメリカは物の豊かな活氣のある國だと思ふ」と答へると、

「僕はニューヨークに生まれたのだが、ニューヨークは嫌ひだ。……僕の友人で東洋へ行つて歸つて來ないものがあるが僕も支那や日本へ行つて見たいと思つてる。今度は歐羅巴の田舍を旅行するつもりだ」

「僕は多くの日本人のやうに、巴里や倫敦をよく見たいと思つてる」

「それよりも都會なら、ウヰーンへ行け。僕は戰爭後の歐洲は知らないが、以前は、ウヰーンが一番住心地がよかつた」

かういふアメリカ嫌ひなアメリカ人もあるが、大抵の米人は、米國第一をもつて自から任じてゐるらしい。ある男は

「英語さへ話せれば、歐洲のどこを旅行しても不自由はしないよ。長い間外交の用語は佛蘭西語であつたが、將來は英語が外交語になると、おれは思ふ」と、傲然として私に云つた。實際この佛蘭船でも、米人を重要なお客としなければならぬため、映畫の說明文にでも、毎日の船中の報告文や注意書にでも、すべて英佛兩語が並べられてゐた。

しかし、よく見てゐると、船中の米人の顏は俗つぽくつて、佛人の顏には雅味があるのであつた。

連日の雨も、着陸前二三日は名殘りなく晴れて、夕陽や月光が、單調な海上を華やかに色取つた。英國のある尖端の燈臺の光が微かに見えだすと、乘客は騷ぎだした。帆前船がちらほら見えだした。數ケ月前に米大陸の一端をはじめて見た時にもまして、私の心はどよめいた。着港の前々夜には、「船長の晩餐」と名付けられた、別れの饗宴があつて、その後では、假裝會があつた。かういふことには、老翁でも老媼でも熱心になるのが、洋人の常例なので、我々異邦人をして噴飯させるやうな扮裝も少くなかつた。全身をナプキンで包んで出て來た若い女もあつた。またある女は濾紙にくるまつて白から手荷物になつて、荷札をつけて運搬人に扮した男に曳かれて出た。支那人になつたり、白狐になつたりして現はれる

のが、それ〳〵に繪のやうに彫刻のやうになつて、佛人の具へてゐる美術趣味はそこにも見られるやうであつた。私達夫妻は傍觀してゐたのであつたが、ふと、ある男が、和服姿の妻のところへ來て、強いて行列に加はらせた。行列は、數人の審判官の前を二三回廻つたのだが、審判の結果が讀上げられると、第一「ジャパニースガール」で拍手が湧き上つた。假裝しないものが、假裝一等に當選したのだが、これによつても、日本の服裝は、現實の人間服とは見られないで、珍奇な假裝として、洋人の目に映つてゐることが分るのである。この船にも、イブニングドレッスとして、ハッピーコート（吉原仲の町などと銘を打つた印袢天）を着て得々として食卓についてゐる女が二人もゐた。

巴里到着後最初の幻滅

快い航海を終つて佛蘭西の北方の港ハーブルに着いた時は、初春のうらゝかな日が天空地上に限なく照つて、わが向ふ所のいかに華やかであるかが豫感された。私の心は十年も若くなつたやうであつた。何と云つても、アメリカは俗國である。實業の國である。パリこそ藝術の都で、我々の心を陶醉させるであらうと期待された。

正午に乘つたパリ行きの汽車の窓から見ると、茫漠たる米大陸の光景とは違つて、丘陵や田野が日本に似通つてゐて、故國に歸つたやうな親しみが覺えられた。また寒くて冬枯だらうと豫想してゐたのに、草は青く樹木は芽を吹いてゐた。汽車の動搖の烈しいのと、室内の穢汚いのとには、少し驚いたが、これは船客のみを運ぶだけの臨時汽車であるためだらうと、大目に見られた。途中、ルーアンといふフローベル閑居の町を一瞥したのも意外の樂みだつた。寂寥たる田舍町のやうにかねて空想してゐたのに、それは賑やかな大都會であつたので、空想と實際とはかうも違ふものかと感ぜられた。

パリに近づくと、先づエッフエル塔が目についた。セーヌ河が目についた。エッフエルと云ひ、セーヌと云ひ、その名がいかに我が心に懷かしみのあることか、大都會の郊外らしい光景が次第に目にうつりだした。それらの光景はコンクー

ル、ゾラ、モーパッサンの作中に、多分描かれてゐるにちがひない。

私は、船中で見た案内書によつて、いろ〳〵なホテルの位置を調べて、そのうちの一つを選ぶことにしたのであつたが、ニユーヨークのK君の用意周到な手くばりによつて、H君やW君が、私達の車室の外に出迎へに來てくれてゐた。そして我々に適したやうな宿が豫め取極められてあつた。その宿は、凱旋門の近くで、日本なら麹町の番町あたりに匹敵するやうな、高級な住宅地域に在るといふのであつた。

タキシーでその宿に着いて、お茶を飲んで暫く雜談をしたあと、私達は、佛語の巧みな年少氣鋭のW君に導かれて外出した。太平洋の時とはちがつて、航海の疲れはなかつたので、一刻も早く巴里の町を見物したかつたのであつた。まづ近所の日本料理屋で、久振りの日本食を取つてから、凱旋門へ行つて、戰死者に手向ける不滅の燈火を見た。ロンドンのピカデリーとともに、巴里の最も華美な町として私の頭に刻まれてゐるシャンゼリゼを一瞥して、淺草になぞらへていゝモンマトールの方へ出て、それから、畫家の巣窟であるといふモンパルナスのあるカッフェーへ寄つて夜を更かした。ド・グラッス號に同船したある男が、ふと私達を見つけて側へやつて來て、「パリは氣に入つたか」と、ニコ〳〵して聲を掛けた。

「どういふ譯だか、日本では、シャンゼリゼを銀座のやうな町だと思つてゐますが、間違ひです。米國人なんかを相手のホテルや大きな商店があるだけで、夜の散歩なんかに適した所ぢやありません。シャンゼリゼから先きのブルヴアードが賑かで、カッフエーや興行物があつて面白いのです」とW君は云つた。

「こんなカッフエーの堅い椅子に腰をかけて、寒い思ひをして往來を眺めてゐて、何が面白いんだらう」と、私は云つた。しかし、W君の說明によつて見てゐると、そこらに出沒してゐる女がいづれも曰くのある女らしいので、その目顏や擧動を見てゐると面白くないこともなかつた。ただどの女も美しくはなかつた。服裝も粗末だつた。

夜更けて宿へ來ると、私達夫妻は、「フランスは貧乏な國だ」と、口をそろへて云つた。米國の富有が顧みられた。

春と云つても、まだ日本の彼岸時分で、夜は寒さが身に染みるのに、部屋は溫められてゐなかつた。鉛管の防寒具は備

付られてあつても、スチームは通はなくなつてゐた。こゝは三流くらゐな宿ださうだが、アメリカならどんな宿だつて、スチームを惜む所なんかないのである。カリホルニヤなんかあの暖地でありながら、いやといふほど部屋が温められて、シヤツ一枚で汗をかくくらゐであつた。それからこのフランスの宿では、灰皿があるのにマツチがない。(カツフエーでも料理屋でも大抵はさうだ)それから、浴室にはシヤボンがない、それから部屋の電氣が薄暗い。あの電燈の光のかがやいてゐた米國を見馴れた目には、宿が陰氣に見え出した。

そこで、私はニユーヨークで何氣なく聞いてゐたことをふと思出した。「パリには日本人のよく泊る西洋宿があるさうです。番頭が、『入らつしやい』なんて日本語を使ふさうですが、家が薄汚くつて、風呂場にはシヤボンがない。シヤボンを呉れつて云ふと、その代金を取るさうです。いやですな、そんな宿は……」

私は、この言葉を思出して、「この宿のことだな」と可笑しくなつた。それにしては、薄汚いと云ふほどではなくつて、少くも日本の西洋式ホテルに比べると、上等の部類なのだが、番頭の日本語は實際滑稽なのである。「御散歩ですか」なんて、發音もなか〳〵巧いので、感心して日本語で話しかけると、當人けろりとしてゐる。こちらの云ふことはちつとも分らないのだ。

「アメリカはどうした?」と訊くから、「あちらには見物する所があまりない」と答へると、

「さうです。アメリカはビジネスの國です。ただそれだけだ」と、番頭はさも佛蘭西をほこりたげに云つた。

しかしこの宿でも、米人は第一のお得意様であるらしく、そちらからの觀光客が多く泊つてゐて、日英兩語に通じてゐるこの番頭はなか〳〵忙しさうである。

私の佛語の教師である或未亡人も、この番頭のやうに、「私はアメリカ人はきらひだ(I hate Americans)……アメリカは物質主義で、趣味が低い、日本はさうであるまい。精神主義であらう」なんて云つてゐたが、しかし、「私の生徒にはアメリカ娘が多い」と告白した。

この未亡人や番頭の如く、佛人は米人を卑みながら、米人のポケットから豊かな貨幣を奪はうとしてゐるのである。至る所の商店にでも食堂にでも、「英語が話せます」と記されてある。ところが、私は、滯米中しば〳〵壓迫を感じさゝれたかのドルの國に對して、日に〳〵好感を抱くやうになつた。ヤンキーの活氣と率直とを思出して、佛人のいとはしさを厭ふやうになつた。パリジアンとは、「ずるさ」「こすさ」の異名のやうに思ふやうになつた。それは實に意外であつた。無論私は上流の佛人をも、知識階級の誰れをも知らない。しかし、米國に於ても、下級の人に接しただけであつた。そして、米人の氣象のむしろ男性的なのを喜ぶのである。

アメリカは非常に物價の高い國である。しかし公明正大に高いのである。私は四ケ月の滯在中、旅馴れない身でありながら、騙されて高く取られたことはなかつた。巴里は物の廉い國である。しかし、言葉の通じない我々は、やゝもすると虚に乘じてふんだくられるのである。到着後間もなくある盛り場の大きなキャツペーに入つた。二三の料理の外に、果物を注文すると、「うまくして持つて來てやらう」と云つて、酒をかけた零細な果物を持つて來たが、勘定書を見ると、料理は定價表通りだが、果物は定價表になかつたために、一皿二十フランとなつてゐた。理由を糺すると「特別によく調理したのだ」と壓制的に云つて、しかも、まだ勘定しない前に、「チップを出せ」と強要的に云ふのだ。チップの強請は、この都會では常例で、米國ではかつて知らなかつたことである。それどころか、米國では、チップをやると「おれは給料を貰つてるから、チップなんか入らない」と云つたものが二三あつた。巴里では、見物料を拂つてゐるのに、說明者にはチップをやらなければならない。活動でも芝居でも、案内者には必ずチップを與へねばならぬのだ。切符を買つてさへ、それを手渡ししたものにチップをやる必要もある。煩いこと甚しい。日本の帝劇や歌舞伎座などはそんな惡例のないだけでも上品である。到着後間もなく、中村星湖君に連れられてあるミュージックホール(寄席)へ行つた時なんか、席につくと、中村君が案内にチップをやつたが、それと同時に、私も、一フランを取出した。「私がやりましたからよろしい」と中村君が云つたので、私がちよつと躊躇してゐると、女の案内者は、「ノー」と勢ひ込んで叫んで、私の手から一フランをふんだ

くるやうに取つて行つた。それは瞬間の出來事であつたが、私は呆氣に取られた。日本なら、やらうとしても「お連れの方から頂きましたから、よろしい」と云ふところなのだ。それからドゥッファン(二フラン)をディッファン(十フラン)と聞きちがへて、二フランの小册子に十フラン拂ふと、賣り子は知らん顏してそれを取つた。それから便所へ行くと、便所の戸に鍵が掛つてゐて、こゝでもチップをやらねば開けてくれないのだ。人寄せの場所でありながら、祝儀をやらねば小便さへ出來ぬのが、この巴里の實況なのだ。

こちらはタキシーが非常に廉い。アメリカとは雲泥の相違である。しかし、私は滅多に乘らないことにしてゐる。たび〳〵ごまかされたからである。旅のものとして馬鹿にされることの不快に堪へないからである。

こなひだあるカッフエーで休んでゐた時、隣りの席で、服裝の整然たるパリジアンが茶菓を喫してゐたが、一フランのチップを置いたかと思ふと、給仕が横へ行つた間に、その一フランをあたふたと、ポッケットにしまつて、つゝと行つてしまつた。……

ことに旅行者の最初の不快な印象として、誰れしも感ずることは何處かへ自動車を着けた時、賴みもせぬのに、横合から來て、その戸を開けて、さも正當な勞力に對する報酬であるかの如くに、チップを要求するなんか、言語道斷で呆れて物が言へない譯である。

私は、渡佛後三週間になるが、毎日のやうにかういふケチ臭いいやなことを見聞していやな思ひをしてゐる。「人を見たら泥棒と思へ」といふ格言を、「お菊夫人」の著者の國に來て、私は服膺しなければならぬであらうか。

かういつても、私はこと更幻滅を志してゐるのではない。古色を帶びたこの藝術の都は新興の米國の都會とはちがつてゐる。シカゴのストックヤード(屠牛場)に驚かされたとはちがつた意味で、ルーブルの名畫に心を打たれた。

「銀座なんかをうろついてるモダーンボーイに、ホリベルゼの美人踊りを見せたくつてなりませんよ。魂消るだらう」と、ある青年が云つたが、私も同感した。(四月十五日)

オスカア・ワイルドの墓

本間久雄

私が巴里の墓地ペール・ラ・セーズを訪ふたのは、十月の始めであつた。

この墓地には佛蘭西の多くの文學者が眠つてゐる。ド・ミュツセエもゐる。モリエールもゐる。バルザックもゐる。ラ・フオンテーヌもゐる。しかし、これらの佛蘭西の文學者たちの中に、英吉利の文學者オスカア・ワイルドが一人まじつてゐて、而もその墓がまた、普通のとは異り、極めて怪奇な感じを與へるものであるのが、特に人目をひく。

墓地は九十七に小さく區劃されてゐる。正門から這入つて、途の突當りにあるバルトロメ作で、死の恐怖と靜寂とを表象した有名な『死の門』と題する二間四方位な大きな彫刻を見て、それから途を右に取り、幾度かだらだら坂を迂曲して、大かた落ち散つて、黄色の葉を僅かにとどめてゐる篠懸の梢を途々仰ぎながら登る。墓守の業であらう。落葉を燒く匂ひの、どこからともなく漂つて來るのも、秋の墓地のそゞろ歩きには、ふさはしい風情である。ワイルドの墓は、かくして登りつめた場所の八十九の區劃地にある。

墓石は、横一間、竪一間二尺位の大きさで、上半分に、スフインクスまがひの男性の全身が、翼をひろげて、天がけるところが彫つてある。墓は一九〇八年に計畫され、一九一二年に完成したもの。作者は英吉利のヤコブ・エプシュタインである。

エプシュタインは、今日でこそ、「ロダン以上」と云はれる英吉利第一の彫刻家ではあるが、その頃は、僅かにその鬼才を一部の人にのみ知られた新進であつた。オスカア・ワイルドは、人も知るやうに、一八九五年に、アルフレッド・ダグラスとの例の男色事件で、入獄して以來、その時迄、文學者として異常な

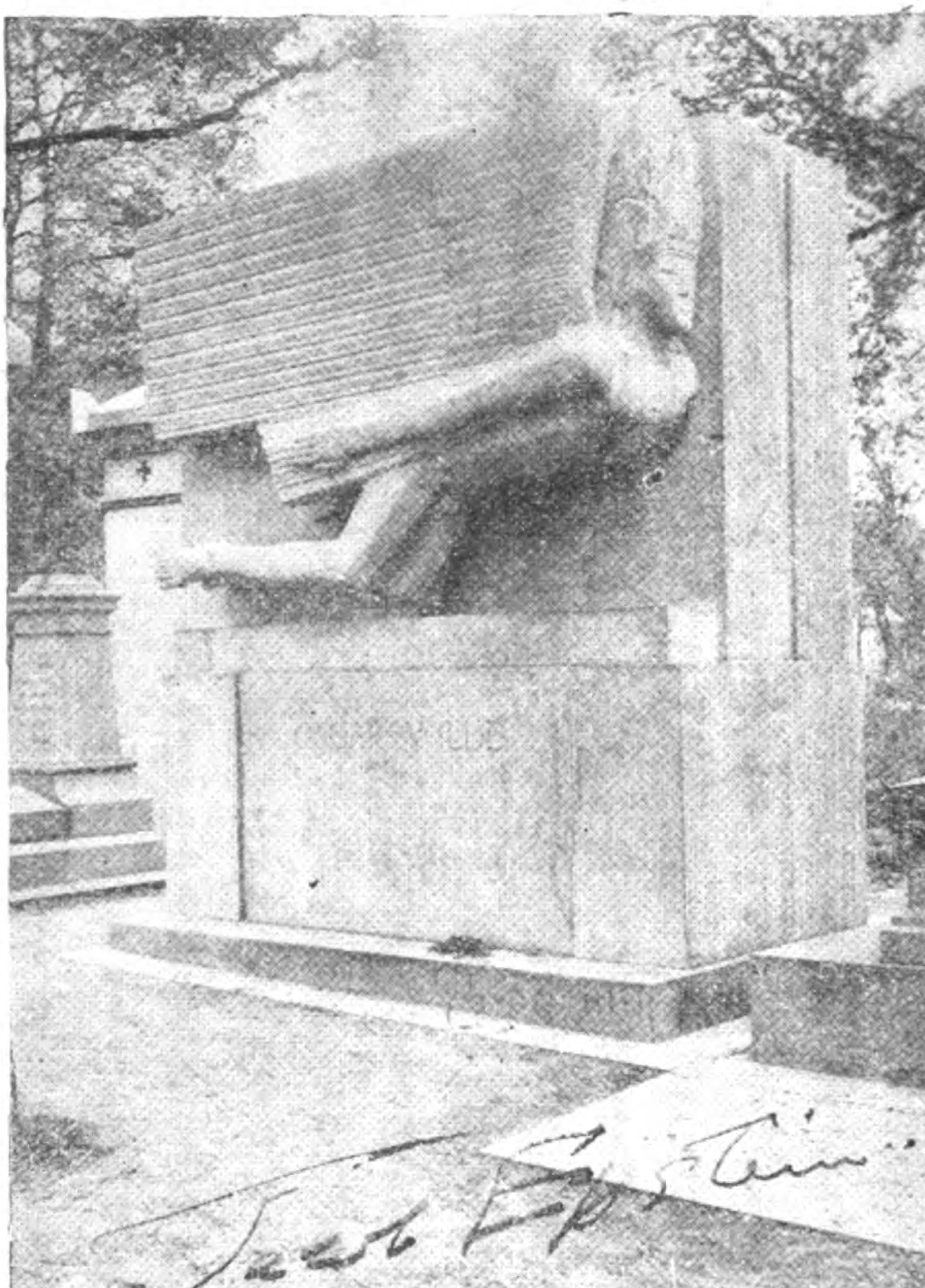
人氣を博してゐた彼れの聲價が、とみに落ちたばかりか、一九○○年の十一月に、あまたの借財と、まだいたいけな二人の男の子を殘して、巴里の陋巷に、慘めにも窮死したのであつた。彼れの親友で、彼れの著作の監理者であつたロバアト・ロスは、一つはその借財を拂ふため、一つはその二人の遺子の養育の資のために、一九〇四年に、ワイルドが牢獄中で執筆した遺稿『どん底より』を公刊して、一面、藝術家としてのワイルドの人氣を囘復し、つゞいてワイルド全集十卷の出版を企て、一九〇八年にそれを完成した。そして、この完成を紀念するために、ワイルドの愛讀者である匿名の一婦人が、エプシユタインにその設計を委せるといふ條件つきで、二萬圓を寄附し、それによつて、この墓が建てられることゝなつたのである。同時に、エプシユタインも亦、この墓によつて、いよ〳〵その鬼才を認められることゝなつたのであつた。

しかしこの墓はその建設當時は不道德な感じを與へるものとして、おそろしい物議をかもした。ペール・ラ・セーズ墓地の管理者はこれをそのまゝに建設することを拒んで、作者の改修を要求し、巴里の警察署も亦それに贊して、この墓全體を布で卷いて衆人に見せることを禁じた。それればかりではない、これに反感を持つてゐるやからは、これに泥を塗つたり漆喰を塗つたりした。作者は、このまゝにして置いては、或ひは槌で破壞されはしないかといふことをひたすらに恐れた。が、彼れは頑として管理者からの改修の要求には應じなかつた。彼れは憤りに充ちた口吻で、英國の新聞紙上でかう云つてゐる。「私は墓を改修しようとは思ひません。墓地の管理者が、その權限内でどういふことをしようともそれは彼れの勝手です。しかしこのことは同時に藝術の自由といふことに關した重大な問題です。巴里の秋のサロンの會長は、この墓を見て純潔な感じを與へると云つてゐます。又、倫敦で、これを大方の展覽に供した時も、これを不道德な作品として批難した人は一人もありませんでした。」又曰く「墓地管理者はこのことについては全く保守的な見解を持つてゐる官吏です。彼れは、自分の保守的な標準に立つて、作品を稱讚することが出來ない時には、ただその理由だけで、その作品を恐ろしく不道德なものと考へるやうなさういふ種類の人間です。」と。墓地の管理者も我を折つてか、つひにそのまゝに建設することを許したのであつた。さて、どこが、墓地管理者の忌諱に觸れたのであるか。

前にも一言したやうに、この墓はスフィンクスまがひの彫刻であるが、それは世の常のスフィンクスとは異つてゐる。スフインクスは普通には身體が獅子で翼があり、而も顔は女といふ

奇怪な謎の怪物であるが、ワイルドの墓のスフィンクスは翼のあることや、顏の女面であることは同じだが、身體がすつかり人間の男である。そしてこのスフィンクスが翼をひろげて天がけるのを下から眺めると男の全裸形を仰ぐといふことになる。墓地の管理者は、この點を指摘して、或ひは猥褻な感じを觀者に與へはしないかといふことを考へたのであつた。

　しかし、ワイルドの墓のこのスフィンクスは、決してさういふ猥褻な感じを與へるものではなかつた。作者のエプシユタインは、恐らくワイルドが、ルーブルの博物館で古埃及のスフィンクスの彫刻を見て、「美妙なる怪奇のもの、半ばは女人にして半ばは動物なる怪奇のもの」と叫びかけ「感覺なき石の中に心狂へる情熱を眼ざめしめよ」と歌つて、遠き世の埃及の情欲と罪悪との怪奇な世界を忍んだといはれる有名な長詩『スフィンクス』から暗示を受けたにはちがひない。しかし、エプシユタインは彼れ自身の獨白の想念に基いてこの作をものしたことは云ふまでもない。



オスカア・ワイルドの墓及びエプシユタインの自署

美術批評家のルキス・ハインドはその當時の『デーリー・クロニクル』紙上にこれを評して次のやうに云つてる。「エプシユタインのこの作は、彼れ以前には全然モデルがない。全く彼れ獨白の想像から生み出されたものである。彼れは、その鑿を取つて石に向ふ前にすでにこの作の全體を彼れの想像の中に拵へあげてゐたのだ。彼れの作はすべて、彼れの確乎不拔な目的に從つてなされたのだ。彼れは理想家である。そしてその理想を實現するために、彼れはまつしぐらにその獨白の途を歩む。彼れは後期ブイクト

リヤ期における唯一の埃及人である。彼れに取つては優雅とか可憐とかいふことは問題ではない。吾等は彼れのこの作を見て、最初にひきつけられるものはその細部ではない。それは、ただ尨大な、時代を超越した、人間的な、そして又非人間的な沈默した、孤獨な、愁ひを含んだ、しかし無關心な、スフィンクス然たる彫像である。」

面白い評言である。人間的であるとも見られゝば又、非人間的であるとも見られる。どこかに、獨りぼつちで、愁ひを含んでゐながら、而も一切に無關心な、超時代的なおもかげもある。女面獅子有翼の怪物が、古代神話時代の『謎』であるとすれば、エプシュタインのこの女面男子有翼の怪物は近代生活の『謎』とも云へるかも知れない。『自分と近代の社會とは一種の象徴的關係にある』と考へたワイルドは、又、自らを近代生活の謎を以て任じた。實際、彼れの藝術は、彼れの生活は見様によつては明かに一代の謎であつた。從つてこの『謎』の人物であるワイルドの墓碑として見るとき　エプシュタインのこの作ほど適はしいものはない。

私はこの怪奇なスフィンクスの墓碑を眞ともに眺め、下から仰ぎ、右から見、左から見た。そして暫く墓の前に佇みながら、ワイルドその人のこと、わけても、ワイルドと、嘗つては彼れが愛し、後には彼れがその亡骸を埋めた藝術の都巴里との關係のことなどをそこはかとなく思ひつゞける。

『巴里におけるオスカア・ワイルド』と題する論文を書いたアアサア・ラムソムはオスカア・ワイルドが巴里に深い因緣を持つてゐることをワイルド生涯の三つの時期から觀察してゐる。即ちワイルドの下獄前、下獄中、及び下獄後の三時期である。實際、この何れの時期においてもワイルドと巴里との關係は甚だ深い。見様によつてはそれは彼れと倫敦との關係よりも更に深いと云つてもよいかも知れない。

ワイルドの巴里愛好は、その少年時代に始つてゐる。この時代に彼れは既に巴里に遊び、佛蘭西語を學び、長じて佛語を書き又は話すことにおいて佛人とまがふまでに上達をする基礎をつくつた。一八七四年、又巴里に遊んで、上に擧けた有名な長詩『スフィンクス』を書いた。それから十年後には新婚の夫人と連れ立つて又巴里に遊んだ。この時には、英國の文學者としてよりも寧ろ佛蘭西の文學者として遇せられたほどであつた。その後一八九二年彼れの作『サロメ』をサラ・ベルナールが倫敦のパレース座で上演することにきめながら、時の檢閲官がその上演を拒んだ時には、彼れは心から憤つた。そして英國人の藝

を脱して佛國人に歸化しようとさへした。それほど彼れは佛蘭西に懷かしみを持ち、親しみを持つてゐた。

一八八三年に、佛蘭西に來たときには、彼れは英國唯美派の文學者としての聲名が大にあがり、伊達者(ダンデー)としての評判の高い頃であつた。彼れはその後一八八九年に、十九世紀初頭のイギリスの作家で、兼ねて又、叔父を毒害し、義妹を毒害し、義母を毒害した古今無類の病的な作家として有名なトマス・グリフィス・ユーンライトのことを書いて、併せてその中に、自分自身を甚だ多く書き込んだといはれる『ペン・鉛筆及び毒薬』と題する長論文を公けにしたが、この文の中で、彼れは「チスレリーのやうに、エーンライトは、自分を一個の伊達者として都會中を驚かさうと決心した。彼れの美しい指輪や、その古代風の浮彫を施した胸針や、又はその蒼い、レモン色の山羊の皮の手袋などは有名なものであつた。而もハヅリットの如きは、それらを以て文學における一個の新樣式の記號であると觀察した。一方又彼れの豐かな縮れ毛、涼しい眼、及び人並すぐれた白い手は、彼れが、他の人々とちがつてゐるといふ、危險にして且つ心地よい誇りを彼れに與へた」と書いてゐるが、この評言は、直ちに移して、彼れ自身の上に當てはめ得るものであつた。彼れは前にその名を擧げたランソムが云つてゐるやうに、一個の伊達者として、巴里中を驚かすためにやつて來たやうなものであつた。そして彼れは、エーンライトのやうなそのふさふさした豐かな髮の毛と、やはりすずしい眼と、人並すぐれた白い手とが與へる彼れ自らの所謂「危險にして且つ心地よい誇り」を身自ら味つたのであつた。ランソムは又、ワイルドの親友のアンドレエ・ジイドの言葉をひいて、その頃の巴里の社會は、彼れの豪奢な生活ぶりに驚いて、或者は彼れをアジヤのバッカスに比較し、或者は彼れを羅馬皇帝に比較し、或者は彼れをアポロオその人に比較したこと、彼れがその當時贅澤品として、倫敦でもさうであるが、巴里では、猶更、驚きの眼をみはるやうな「金口の葉卷を常に飲んでゐた男」であつたこと、それから彼れが、いつも「日廻りの花を手にして街道を歩いた」こと、「道ゆく人が皆、喜んで彼れを振りかへつて眺めた」こと等をひいて、彼れがこの頃いかに巴里人の間に持てはやされたかを述べてゐる。

ワイルドは又、稀代の談話家であつた。彼れはその天性の機智と、頓才とその文章に見るやうな修辭の甘さとで、相手になつた人々をいつも、魅惑しずには措かなかつた。『ワイルド傳』を書いたロバアト・シエラルドやワイルド會見記『巴里の反響』を書いたロオレンス・フウスマンやは、ワイルドを以て「こ

れまで私の知つてゐる人の中で、最も驚くべき話上手であつた」と云つてゐる。又、アンドレエ・ジイドは「人々はいつもワイルドの話しをきいて、その潑剌たる機智頓才と該博な知識と、深奥な見識とに驚かされる。彼れの生前に生れ合せて、而も彼れの話しを聞かないのは、あだかもアゼンスに住んで、パルセノンを見にゆかないやうなものである」と云つてゐる。

彼れは、倫敦においても、さうであつたやうに、いつの間にか、巴里の文學者の中心の一人となり、社交界の花形の一人となつてゐた。

一八九五年の彼れの入獄事件は、彼れの藝術家としての心境を根本から更へさせた。その前の彼れは、彼れ自らその獄中手記『どん底より』において「私の云つたこと、行つたことで、世人をして驚嘆せしめなかつたものは一つとしてなかつた」と云つてゐるほどの天才者ではあつたが、同時に又いたづらに「愚かな、淫猥な、安逸の永き連鎖に、吾れと吾が身を誘はれるに委せた天才の浪費者」でもあつた。彼れは「快樂にして私の經驗しないものは一つとしてなかつた」と云つてゐるほどの快樂兒であつた。彼れは「靈魂の眞珠を酒の盃に投げ入れ、笛の音につれて薔薇の花咲く小徑を歩き、蜜蜂の巣の甘き蕩りに生活した」と云つてゐるやうに、ひたすらに、まつしぐらに此世の快樂を追ひ求めた驕慢兒であつた。この快樂兒であつたワイルドは二年間の牢獄生活によつて、今迄嘗つて、覗いても見なかつた別な新しい世界を見出した。それは「悲哀」の世界であつた。「謙虚」の天地であつた。彼れは彼れ自らの云つてゐるところによると獄中において、堪へがたい絶望に陷つた。傍の見る目も氣の毒なほど哀傷し嗟嘆もした。恐ろしい、制し切れぬ憤怒に身を悶えもした。吾れ自らを冷罵し叱咤もした。苦しみの餘りに聲高く泣きもした。慘めさに聲さへ出ないこともあつた。悲しみの餘りに言葉さへ出ないこともあつた。彼れはかくして悲痛のありとある心境を經驗した。そして、その結果「悲哀のあるところ、そこに聖地のある」こと、悲哀の心境の奧の奧にこそ「野に埋れし寶」のやうに大切な「謙虚」の德のあることを彼れは見出したのであつた。そして、同時に、藝術家としての彼れは、從來よりは、一層その内生活がゆたかになり、ひろくなり、深くなり、且つ高くなつた。

しかし、社會人としての彼れは、藝術家としての彼れとは反對に貧しくなり、慘めになり、低くなつた。といふよりは、彼れは殆んど社會的に葬られて了つた。彼れが有罪の判決を與へられたその日から、英吉利の社會は彼れを社會人としては遇し

なくなつたばかりか、彼れを嘲笑と侮蔑の的とした。彼れの詩や小説を讀むことは恥とされ、彼れの名を口にすることは、穢はしいものとされた。その時まで、彼れの作を上場することを誇りとしてゐた多くの劇場は、一せいに、彼れの作を舞臺から引き下げて了つた。英吉利の社會は、それほど彼れに辛く當つたのだ。

しかし、佛蘭西の社會は、彼れに對してそれほどではなかつた。尤も、彼れの有罪の報と同時に彼れの捕縛の報を傳へた時には、巴里の社會は驚駭した。そして彼れの有罪の眞相が解つたときには無論、彼れを侮蔑し嘲笑した。しかし英國の社會の彼れを遇することの餘りに酷薄なのを知つた時、とりわけ、彼れが獄中において病苦に惱まされてゐるのを知つた時、佛蘭西の文學者たちは彼れに對して同情心をおこした。そして、小說家で詩人で、その頃丁度佛國學士院の會員に擧げられたアンリイ・ド・レニエを始め、ステユーアル・メルリユ其他二三の文學者が發起して、獄中にゐる彼れの赦免請願の運動を英國政府に提出することゝした。その請願の要旨は、(一)人道の名において。といふのは、ワイルドが恐ろしく健康を害してゐることが、公的にも私的にも證據が擧つてゐるから。(二)藝術の名において。といふのは、彼れがこのまゝにして置いて、もし死にでもすると、彼れの文學的過去に照して、十分に保護さるべき彼れの作品に惡影響を與へるから。といふのであつた。流石に文藝の國である佛蘭西らしいところがあつて面白い。尤も、この運動を冷眼視したものもあつた。ゾラの如きその一人であつた。が、若い作家たち就中その頃はまだ無名で後年有名になつたといふ人々は、喜んでこの請願書に署名した。たゞし、この請願書が、英國の法律を動かすに足らないものであつたことは想像するまでもない。

ワイルドがレッデングの監獄を出たのは、一八九七年の五月十九日であつた。その日、彼れは直ちに海を越えて、フランスの北海岸ディープの一村落ベルヌブァルにやつて來た。これより先き、彼れの苦役中、彼れに同情しつゝあつた友人の盡力で、少なからぬ金額が、彼れの出獄を待つて、彼れに與へられた。で、このベルヌブァルに來た時には、彼れは格別、不自由を感じない身分であつた。が、彼れはまたゝく間に、『ワイルド傳』の著者シエラルドの所謂「船乘りが、港に着き、又は、囚人が牢から出て來た時のやうに、たゞわけもなく、停止するところを知らずといふやうな態度で、金を費つて了つた」のであつた。といふのは、彼れは、その金を、或ひは監獄内で親しくな

つた囚人の友人に送つてやつたり、或ひは時々贅澤な饗宴をひらいて、「モンマルトルの詩人たち」を招いたり、又は、貧窮してゐる詩人や文人に金を與へたりしたためであつた。その結果は彼れ自身が忽ち金に困つて來た。そればかりではない。二年の牢獄生活はいたく彼れの健康をそこねた。彼れの宿つてゐるホテルに彼れを訪ね、ランプを圍んで、親しく彼れと話を交したアンドレエ・ジイドは、彼れの面影の變つたのを見てかう書いてゐる。「私は、彼れの顏の皮膚がひどく荒れ、肌目があらくなり、指には、矢張り昔のまゝの幾つかの指環を嵌めてゐるばかりでなく、彼れがやはり昔からひどく愛玩してゐた例の瑠璃を鏤めた指環をさへ嵌めてはゐたが、その手は、顏の膚よりも、もつともつとひどく荒れてゐるのを、はつきりと認めたのであつた。歯は又、歯でおそろしく蝕ばんでゐた。」と。

　ワイルドは、ベルヌヴァルに滯在してゐるうちに、脚本を書きそれを土産に巴里に出て來ようと思つてゐた。が、それをつひに實現しなかつた。そして間もなく伊太利のナポリにゆき、同じ年の十二月に巴里に來た。それからかれは、或ひは又、ナポリに、或ひは又、瑞西に旅したことなどもあつたが、彼れが一九〇〇年の十一月に亡くなるまで、大部分を彼れは巴里で過した。

巴里には、彼れに同情を寄せてゐる多くの文學者がゐた。しかし、彼れには最早筆を取る氣力も失せ、想を凝らす精力も次第に盡きて行つた。物質の窮乏は又、次第に彼れを自暴自棄に陷らせた。彼れは、一時を糊塗するために、金のあるなしにかかはらず、カフエーからカフエー、酒場から酒場とよく飲み歩いた。そして人に金を借りたり、又他人に迷惑をかけることを平氣でやつて退けた。彼れに同情を持つてゐた人々も次第に彼れを見捨てるやうになつた。彼れは次第に世間から忌みきらはれて、全くの獨りぼつちになつた。

　アンドレエ・ジイドは、あるカフエーで偶然にワイルドに逢つた。

「私は誰れかゞ私の名を呼んだのを聞いた。それはワイルドであつた。ベルヌヴアルで見たときよりは、何といふ面やつれであらう！　彼れはカフエーのテレースに腰かけてゐた。彼れはコクテールを命じた。私は彼れと向ひ合ひに坐つた。で、私は其所を通る人達に脊を向けてゐることになつてゐた。彼れは「おい、こゝへお掛けなさい。私の次へ」と云ひながら、彼れは自分の隣りの椅子を指して更に云つた。「今、私は、本當に獨りぼつちです」と。

　數日後、私は、また彼れと會つた。」ジイドは更に語りつゞけ

る。「彼れは、もう一度、創作に取りかゝらうにも、既にその力を失つて了つてゐることをひどく歎いてゐた。私は、彼れが、一篇の創作をものしないうちは、巴里に出て來ないと彼れ自身に誓つたその誓ひを彼れに思ひおこさせるやうに仕向けた。彼れは私の言葉を遮り、私のからだに手をおいて、悲しさうに私を見つめた。そして云つた。「失敗した人には一切、物をたづねてはいけません。」と。

　敗残の人ワイルドの姿が、この短かい記述の中にもあり〳〵と現はれてゐる。

　彼れの生活は、彼れの死際に近づくほど慘めなものとなつた。彼れの男色の對象であつたアルフレッド・ダグラスは、この著『オスカア・ワイルドと余』の中で、この頃のワイルドを次のやうに記述してゐる。

「彼れは次第に巴里の放浪者のやうな風丰を呈して來た。彼れはよく金を拂はないで、食事を濟したり、おまつさへ給使人(エーター)どもから金を借りたりした。彼れの健康は酒精のために恐ろしく害はれて行つた。彼れは僅かのことにも興奮してよく泣いたり呪つたりした。尤も、彼れはその最後まで、その博學と機智との閃きを悉まゝにしないではなかつたが、それとても、つまりは、彼れ自分の哀れな破船と影とに過ぎなかつた。彼れは至るところ顔を知られてゐた。そして私は、彼れが這入つて來た、めに、人々が、カフエーを立ち去るのを屢見かけた。又、私たちが、彼れと一しよに料理屋などにゆくと、よく人々が聞えよがしに彼れのことを嘲罵し冷笑するのを屢聞いた。彼れの死ぬ間際には、彼れに對する世間一般のその反感は益々其度を加へて行つた。そして終ひには、彼れと一しよに歩いたり、彼れと行き來をしたりすることが、最も惡德の一つと思はれるやうになつた」と。

　文學者エルネ・ラ・ユヌスの『ワイルド追懷記』は又曰く、

「ワイルドは、西班牙に行きたいと望んでゐたり、又、再び伊太利の海岸にゆきたいと望んでゐたりした。けれども彼れは、巴里以外には、どこへも行き得ない境遇にあつた。而もその巴里は、そこにある家といふ家は、すべて彼れに對して、すべての戸を閉ぢてゐる巴里であり、彼れが酒を飲むために僅かに這入り込む酒場さへ、やがて彼れに對して提供しなくなつた巴里であり、彼れの要求には何事も耳を借さず、彼れを餓死させ、彼れを痙攣せしめなければ止まない巴里であり、彼れに取つては、何等の永遠もない、何等の神話もない一都市としての巴里であつた」と。

　わがオスカア・ワイルドはかやうにして始めにまづ英吉利か

ら捨てられ、次には彼れが一時は歸化しようとさへしたほどの佛蘭西からも捨てられて了つた。而も死後の彼れの唯一の安息所のしるしである墓石までも一時はこの國から拒否されようとしたのであつた。

彼れはその獄中手記『どん底より』の中で、「私の前には、爲すべきかずかずの仕事がある。私にして、それを些かも完成することなくて、黄泉の客となるならば、それは實に一つの恐ろしい悲劇である」と云つた。

實際、彼れの死は、大きな悲劇であつた。切角、悲哀の三昧境、謙虚の心境に味到しながら、彼れはつひに、それに新しい文學上の樣式を與へることが出來ないで了つたからであつた。もし、彼れの云つたやうに、表現が藝術家の究竟目的であるならば、表現のない生活は、結局未解決に殘された一種の謎である。

彼れは、この意味で一種の『謎』であつた。謎のまゝに殘された悲劇の主人公であつた。

彼れの『謎』の墓を仰ぎ見て、私は、今更のやうに、この感を深くする。（五月七日記）

『スパイ』の告白

―里村氏の記述について―

黒瀬春吉

凡ては戰ひである。

スパイも亦一個の戰術である。

階級戰にヘーグ條約なき限り、スパイであらうとダムダム彈であらうと、勝手氣儘に使用されるに違ひない。

曾て香具師の用心棒として全國を歴遊した一無政府主義者は、一日某地方の警察署で激しく署長から毆打された事があつた。

『お前達は國法の存在を認めないと云ふことだから、こちらでも國法を認めずに斯うしてやる。口惜しかつたら、どうかしてみろ』と云ふのである。

彼は堪へ難き苦痛を忍びながら、莞爾として之に答へた。

『有難う。あなたが私の主義の正しいことを認めてくれたので、こんな嬉しい事はありません。何れ御返禮に伺ひます』と。

これは其場の負け惜みであらうが、負け惜みとしても上乘の部類である。陳腐な道德論の上からスパイ排斥を試みやうとする憒々者流に比して、優ること萬々と云はねばならぬ。

惡いと云へば、こちらに都合の惡いことは何でもみんな惡いのだ。特にスパイだけが惡いわけではない。『口惜しかつたら』こつちでも負けずに其の手を使うまでだ。

『サア來い！だがちよつくら待つてくれ、それでは手が違うぞ』

そんな鈍間な喧嘩があつておたまりこぶしがあるものか。

私をスパイだと云ふ者がある。私は今まで誰からもそんな非難を受ける様な眞似をした覺えはないが、假りに私に日本に於ける社會主義若くは無政府主義者中の或一派に裏切る様な行爲があつたにした所で、それがなぜ惡い。それは誰でもみんなやつてゐる事ではないか。やらぬ者はやれぬ者だけだと云つても可いくらゐに。

云ふ迄もなく今日の社會に於て暴力の尤と認むべき物は黄金の力である。茲に其筋から貰つたお手當金を仲間喧嘩に使う一無産政黨幹部があるとしたら、それは所謂スパイの行爲と本質的にどんな違ひがあると云ふのだ。

勞働組合にはアナ系の物もある。社會主義者だつて十人が十人ながらボリシエビストとは限らない。茲に勞農露國から給與された赤化宣傳費を以て、自國の日本主義的無産者に戰ひを挑む惡漢があるとしたら、それは所謂スパイの行爲と、本質的にどんな違ひがあると云ふのだ。

更に又茲に同志から騙取した『運動費』で、

女郎買などする事を常習とする奴があるとしたら、それは所謂スパイより少しでも立派な行爲をする者と云へやうか。

無産階級戰線に立つお互の中にだつて、敵もあれば味方もある。變節改論自由自在、左傾右傾その場限りの當節であつてみれば、敵と味方の區別は決してさう容易にできるものでない。

勞働同盟會を潰したのは誰の仕業だ。

精工舍のストライキを妨害したのは？

毒を以て毒を制するも亦餘儀なしとする場合がある。假りに私が、私の戰線を亂すそんな奴等を敵に賣渡したにしたところで、それが何の非難に値すると云ふのだ。彼等こそ都合の好い時は、恥も外聞も關はず平素の主張を棄てゝ、いつでも法律や官權の力にばかり賴り縋らうとしてゐるではないか。戰術としてのスパイが卑劣だと云ふのか。有吉氏に對する『フンドシ事件』はどうして卑劣でない。同志に裏切る行爲その物が公明を缺くと云ふのか。それなら聞かう——お前達がいつ俺を同志扱ひにした事があるのだ。

似而非兄弟達！どうか勝手な時だけ同志呼ばゝりするのは止めてくれ。

抑もスパイとは何の事か。どんな事をする者がスパイなのか。

スパイの憎むべきことは誰でも說くが、その本質は餘り判然しない。曾て千葉龜雄氏は本誌上に『凡てのものの中で他人の好意を利用することは最も惡いことだ。それは忘恩よりも惡い。ましてや好意を利用してその祕密を知り、それを利益で賣るに至つては、罪惡が三重になる。獸類には、そうした技巧や、心的機構が始めから與へられない。たゞさうした人間たる權能を利用して、そうした罪惡を働らく點において、裏ぎり者は獸類よりも劣つて居る』と、平素に似合はぬ激越な口調を以てスパイを罵倒されてゐる。

私は近年暫く同氏にお目に掛つた事もないが、同氏には『文庫』時代から私の生活窮乏の絕頂期を通じて、多少の知遇を頂いてゐた。相手次第では人を人と思はぬ私のやうな野人でも、同氏のやうな溫厚篤實な君子人に對すると、自ら自分の姿が省みられて、こちらが立派な——昔の不面目を取り返すやうな立派な仕事でも仕上げてからでないと、ちよいとお目にかゝりにくい。それで御無沙汰を續けてゐるわけであるが、斯ういふ舊知の人々が私の良からぬ噂を聞いてどんな感じを持たれることか。それを考へると、どうしても默つてゐる事ができない。云ひたい奴には何とでも勝手に云はして置けと云ふやうな無關心な態度が取れぬ。

それで斯んな愚痴めいた繰り言も書くわけだが……。兎に角千葉氏にしても、前記の通りスパイの憎むべき事は力說されてゐるが、その本質に就ては餘り學問的に深い省察を加へられてゐない。從つて之を排斥する理論上の根據が、極めて因襲的に墮し易い。餘りに安價な批判である。

私は前にも斷言した通り、如何なる意味に於てもスパイと見られる樣な行ひをした覺えがないのだから、敢てスパイの辯護をする必要もないわけだが、私は同じスパイでも其の動機に不純な利己的分子を含まぬ者は、他の

鬪爭手段と同樣これを道德的に是認するのが寧ろ甚だ合理的であると思ふ。その實例は國事探偵などに就ても之を見る事ができやう。

而も世は樣々で、中には『泥棒々々』と連呼しながら逃げ出して行く智慧のある泥棒もあるのだ。『スパイだ、スパイだ』と叫ぶ者が必しも反つて本物のスパイでないとは限るまい。

里村氏は兎角露西亞の例を引用されるが、私は日本人だから日本の例を引く。明治十五年二月四日發行の『郵便報知新聞』を見ると、

政府の間諜と僞りて民間の事情を探偵する徒は、素より其職を奉ずる爲め自ら其業に甘んずる者なれば敢て咎むるに足らねど此ごろ然るべき紳士に政府の間諜をなす者あるが爲め、正直の士も間諜の疑ひを受くるに乘じ己れ自らの間諜たることを掩はんが爲め誰は間諜なり彼は岡引なりと言觸らす族ありて迷惑極まると云ふ投書あり。

と云ふ樣な記事が出てゐる。露西亞はどうか知らぬが、日本にはこんなずるい奴もあるのだ。

マルクスはバクーニンをスパイと呼んだ。堺利彦、大杉榮の面々も一度はスパイと呼ばれた事がある。スパイといふ名は附かないでも、鈴木文治氏のやうに金肥りに肥り返つてその出處進退に明白を缺くと見られる者も少くない。最近に田中首相から何萬圓とかの金を貰つて黨の查問會？に附せられた麻生久、平野力三氏等も事情を知らぬ者の目から見れば、スパイの一種と見えぬ限りもあるまい。

その動機を察せず、その結果を圖らず、徒らに日常行爲の末端を捉へて之を非議するに及ばゞ、青天白日の下、何人か多少の創痍なきを得やう。

その點からいへば、無爲無能で何時も人のお先棒にばかり使はれてゐる、お人好しのでくのばうが一番理想的な革命家になるわけだが、生憎そんな男に命を的の仕事が出來るやうな氣慨のあるのは一人もない。

日露戰爭當時には露探と云ふ言葉が流行した。町內の憎まれ者などに對して、誰云ふとなく『彼奴は露探だ』といふ樣な噂が立つと、忽ち近所の若い者共が寄つてたかつて表札を剝す、石をぶつける、此の礫を外さぬ金をゆする。出さなければいよ〳〵惡評を立てる。遂には此の卑劣な戰術が政爭の上にまで利用される事になつて、秋山定輔氏などが其の犧牲者となつた。震災當時の鮮人に關する流言なども、その多くは之に類する物と見られる。

安部磯雄氏は曾て本誌上に『スパイを憎む』と題し『人間には種々弱點もあり醜惡な性質もあるが、世に恐らくスパイ位醜惡にして卑劣な者は少いであらう。それは罪の深い點から云つても泥棒や詐欺と同日の論ではなく、それ以上の罪の深さを持つてゐるものであつて若し之れを職業とするに至つては世に之れ程さもしい職業はない』と極力スパイの憎むべき所以を說いてゐられるが、氏にして若し此の習俗觀を群集心理の上に適用する卑劣漢の、如何に多いかといふ實情に留意されたならば、恐らく氏の憎惡心は數倍の熱度をもつて彼等の頭上に爆發したに相違あるまい。

何とかして人にケチを附けなければ、自分の地位を保つ事ができぬ樣に考へる御殿女中式心理の所有者は、何時でも如何なる場所に

でも相當の勢力を占めてゐるものだが、昔から女房の取りッくらと、俺が俺がの角突き合ひとを常習とする日本の主義者仲間に、それが特に多いのは今更いふ迄もない事である。

が、それ程スパイを怖がる奴が何をするかといふと、そんなてあひに限つて、今までスパイを怖がらなければならぬ様な事は何一つ仕出かした驗しがないのだから笑はせる。いや寧ろ口先ばかりで何もできぬ奴が、先に立つてテキパキと仕事をする者を目障りにして之を陷れ、お山の大將俺ひとりを極め込まうとする――その時にいつも慣用されるのが此の奥の手なのだ。

本誌前々號に『日本社會運動スパイ物語。六、名物おでん「吾助」の主人』といふ題で、里村欣三といふ人が大分私の術惡を洗ひだてしてゐる。

記事の大半は一と昔前に發行された雜誌『新社會』からの拔萃で、素より今更取り立てて問題とすべき限りのものでないが、此の記事には右の拔萃以外、可なり惡意の批評が加へられてゐる。批評だけなら宜いが、到底聞き棄てにならぬ様な虚構の事實に關するものが頗る多い。

私は今のところ社會運動には何の方面にも關係を持つて居らぬし、また此の記事の筆者とも何等の恩怨が無いので、筆者が特に微力な私を陷れ、又は辱めるために此の記事を書いたであらうとは、どうしても信ずる事ができぬ。それに筆者は、どうも餘りよく私の事を知らぬ人らしい。知つて居る人なら、あんな時代錯誤な記事を書く筈がないのだ。

私が六區の銘酒屋街に『悟助汁』の看板をかけて、地廻り相手の居酒屋をやつてゐた時はまだ『おはんちやん』と稱する『美人』は内にゐなかつた頃であるし、大杉その他の『さうさうたる連中』も店に『出入』しない以前である。記事の模樣で察するところ、それは私の店が十二階下『グリル。ネーパー、クロツスド』となつてから後の事であるらしい。

里村氏は果して其の頃の私を知つてゐたか。知つてゐたにしては餘りに與太が多過ぎる。知らぬにしては聊か輕卒の譏りを免かれ難い。いや、輕卒はそッちの事だからどうでも可いが、どうでも可くないのは私の迷惑だ。

人ごみに足を踏まれてさへ默つてゐられゝば腹の立つものだ、何の理由もなくスパイ呼ばはりをされて、腹の立たぬ者は恐らく一人もあるまい。

私は昔から腹が立つた時はいつも腕力で報復をすることに極めてゐる。それは大抵の場合『議論は無用』の結末に歸することを知つてゐるからだ。腕力だつて餘り強い方ではないが、死に身になればどうにか勝てる。が議論の方は、相手に正しい物を正しいとするだけの勇氣と認識とが不足する場合、何を云つたところで無駄なのは知れきつた話だ。

里村氏の場合はどうか――私は夫を知らない。夫は知らぬが、元來此の記事が私と同時代に運動に從事したこともなく、また恐らく私と一面識もない氏の筆によつて書かれたものとすれば之を一種の受賣りと見るのが至當であり、夫が受賣りである限りに於て材料の出處を明示される義務があつた筈と思ふ。然ら[illegible]料關係だからとて糞も味噌も一緒にこ

ね廻して善い害はない。そんな事をするのがマルキシストの倫理なら、私は更めて堂々と反動の旗幟を掲げるに躊躇せざる者である。

いかさま師目の利く奴を煙たがり

兎角人の事を何んの彼のと云ひたがる奴に限つて、自分に後暗い所のあるものだ。お若い方らしいので無理も御座らぬが、里村氏とやらも斯うした物を書かれるからは、も少し世相の表裏に通達せらるゝことが肝要であらう。附和雷同を事とするアナやボルの末輩共が、悪指導者の催眠術にかゝつて言ひ觸らす與太ッぱちを眞に受け、原稿料稼ぎの出放題なスパイ物語を書き飛ばすなどは、餘り善くない洒落である。

里村氏は云ふ『黒瀬春吉は威采堂々たる巨漢で、大逆事件の際には紙幣僞造の嫌疑を受けて市ケ谷に入監してゐた。大逆事件が結審すると共に、彼にかゝる一切の嫌疑が晴れて出獄した』と。

これは別段事實に相違の點があるわけではないが、何となく奥歯に物の挾まつた樣な所もあり、後世スパイ史家の參考にもなる事であるから、一應その顛末を略述しやう。

大逆事件の起る少し前の事であつた。私は中央の同志とは何の連絡もなく、九州の一角で或る急進的な運動に從事してゐた。そして××の御用商人たる私の地位を利用して、多數の××と××とを貯へた。事を朝鮮に擧げやうとしたのである。

私は朝鮮の旅から歸ると直ぐ、それ等の運動費を得る目的のために、ピヤクトン、ヘンプンと稱する韓貨の僞造を企てた。僞造といふと如何にも質が善くない樣だが、當時韓國内に通用する貨幣は、その大部分が此の僞造白銅なので、銀行へ持つて行くと九分通り兩替を拒絶されるが、通用には少しも妨げがない。而もそれが大抵は大阪邊から密輸された某々政商等僞造の悪貨で、潰しにしたらせい〴〵一個五厘位の玩具同然な代物なのだ。

私はそれまで物理學を專攻してゐたので、設計は比較的容易にできた。それは今でも質の持ち腐れとなつてゐる一種の發明を應用したもので、その發明によれば、どんな複雑な彫刻でも、それが金屬性の物でさへあれば、何等の原型を要する事なくして、無數に之を復製する事ができる。而もその設備には百圓と金がかゝらぬと云ふ便利至極な物である。

私が無罪となつたのは、主として唯一の物的證據となつた此の機械の構造が發明者以外の何人にも會得されさなかつた爲めで、それが若し普通の鑄造機械であつたら、到底有罪の判決を免れる事ができなかつたに違ひない。

私は右の計畫について、同志中に僅か二人の協力者を求めた。その一人は府社會黨幹事松崎源吉氏で、餘り乘り氣にならず、そのために疎遠となつて、たうとう絶交同樣になつてしまつたが、右の計畫については私から細大漏らさず之を聞知つてゐたのである。

他の一人は印刷工某氏で快く私の協力者なることを承諾しながら、一切の秘密を佐藤某と稱する或意味で札附きの男に打ち明けてしまつた。

大逆事件勃發當時まで私は東京市中に居を構へて、コツ〳〵その試驗を續けてゐたが、だん〳〵身邊の警戒が嚴重になつて、一二

も常尾行が附くやうになつてしまつたので、俄かに危險を感じ、一切を抛擲して難を九州に避け、某村役場の書記となつて徐ろに時期の到來を待つた。

そこへフラリとやつて來たのが、前記の某氏で、近く××先生等の公判が開廷されるについて、是非私に例の物を持つて上京して貰ひたい、といふ。既に死を極めた五六の同志もあるとの事。

私はうか／＼とその話に乘つた。

某氏が二等のパスを所持してゐたので、私がその出處を詰問すると、平氣で佐藤から借りた物だと云ふ。

『しまつた！』

私がさう感じた時はもう遲かつた。二人から目を放さぬ異樣な男が傍に附き纏つてゐる。

『もうどうする事も出來ない』

覺悟を極めた私は、何も氣のつかぬ振りをして彼等と共に上京した。そして彼等の油斷を見すまして、密かに貯藏品の處置に關する二三の重要な信書を投函した。

『せめてあの方だけでも……』

それが私の唯一の念願であつた。

東京監獄には半歲餘り拘禁されてゐた。室は幸德、奧宮、森近、內山等の諸氏と同じ八監の獨房だつた。

笑止なのは印刷工某氏が木乃伊取りの木乃伊となつて、私と同じ運命を背負ふことになつてゐた事である。

保釋は何度願つても許されなかつたが私は汐判事掛りの豫審で有罪、飯島裁判長掛りの公判で無罪となつて、やつと出獄する事が出來た。掛り檢事は後に辯護士となつた乙骨半二氏である。辯護は今政友會の代議士になつてゐる磯部尙氏と、故宮崎某氏とに依賴した。

罪名は貨幣僞造だが、所轄の意見書などが恰も××事件にでも關係あるかの如く頗る不利益に出來上つてゐるので、辯護士も可なり心配したものと見えて熱心に辯護してくれた。が何しろ佐藤のやり方が頗る陰險で、私が拘禁されると直ぐ松崎氏の許へ驅けつけ、

『どうも黑瀨と云ふ奴はけしからん。自分の事は棚に上げて、何も彼もみんな君のせいにしてゐるらしい。今に君も呼出されるだらうが、その積りでしつかりやらないと馬鹿を見ますよ』

など〻巧みに離間策を施すので、何も知らぬ氏は『野郞見やがれ！』とばかり、證人となつて洗ひ浚ひ私の不利益になる事實をぶちまけてしまつた。

その儘で裁判が進行すれば、如何に物的證據は薄弱でも到底助かる見込みは無かつたのだが、幸ひ氏は公判開廷前にそのトリックを看破したので、自ら僞證罪となる覺悟を以てガラリとその陳述を飜へし、反つて佐藤が飯島裁判長の追究に會つて、すつかり其の面の皮を剝かれる事になつてしまつたのである。

彼自身の供述によれば、彼は私を賣り込んだ代價として×××から僅か六十圓を收受したものであつた。その後彼は警視廳からも見放されてしまつたので、無暗に新聞記者の名刺などを振り廻し、脅喝罪で入獄中死亡したとのことである。

日本社會運動史上これほど明白なスパイは

他に一人もないのだが、相役が不人氣者の私であるために折角の惡名を千古に垂るゝに至らないのは、彼も甚不本意な事であらう。

私は法廷で前後數時間に亘る社會主義同志攻擊の熱辯を振つた。

差入物一つした事のない名計りの『同志』は、無料の芝居見物でもする氣で犇々と傍聽席に詰め掛けてゐる。彼等に對する反感がいよ〳〵私を雄辯にした。私は縷々として彼等殺潰し共の同類に非ざる所以を說いた。

磯部辯護士は後に『生來始めて斯の如き雄辯に接した』と激賞したさうだが、何しろこつちは生死の分れ目なので、嘘から出た誠が天にまで通じたものであらう。此の辯論は遂に裁判官の中にまで貰ひ泣きをする者が出來たほどの偉効を奏した。

その結果、兎に角私は無罪放免になる事ができたのだが、私が一番心配したのは、此の裁判の進行中武富檢事（現民政黨代議士）によつて更に他の重大な嫌疑に關する訊問を受けなければならなかつた事である。

それは例の××××の處分に關するものであるが、幸ひにも裁判所に於ける私の神妙な態度が、十分の效果を奏してゐたので檢事は單に之を一個の××事件として取扱ひ、時效によつて不起訴の決定を受ける事となつた。

そこで『大逆事件が結審すると共に、彼（私）にかゝる一切の嫌疑が晴れて出獄した』のである（註。一月結審、六月出獄す。）

大逆事件に關する限り、××氏の如き定評ある人物に至るまで、木伊乃取りの木乃伊となつて自己清算を強ひられなかつた者は唯の一人もない。私が一流の手腕を發揮して某處から之を持ち出し、堺氏夫妻と共に徹夜で謄寫した一件書類を見ても、口さがない下郎の運命は歴々指掌すべき物がある。スパイ稼業の割に合はぬ事は、誰よりも一番よく私が知つてゐた筈だ。

里村氏の記述に還る。氏は曰ふ『中村還一もまたおはんちやんとの關係を取沙汰されたうちの一人であつた。亭主の黑瀨といふ男はまた風變りな人物で、自分の女房を他人の自由にさせて置いて、自分は自分で勝手に某女史を追かけ廻してゐたのだ。とこゝが不圖したことから、黑瀨は中村が某女史と關係してゐると誤解して、それから二人の間が急に仲違ひになつた。その後ある所で偶然に中村と黑瀨が落ち合つて烈しい口論になつたことがある』と。

『取沙汰』は人の勝手だからどうでもいゝが、『自分の女房』と云ふのは一體何の事か。

苟も共產主義者ともあらう者が、わが好む女を獨占して之を『自分の女房』と名け、他人には指一本も觸れさせないとしたら、こんな辻褄の合はぬ話はあるまい。萬一私が社會主義者の一人として『女房』の獨占權を主張し之を『他人の自由にさせ』ること、恰も自己の所有物を他に轉貸するが如くしたりと云はるゝならば、私は斷じてその實證を聞かざるを得ない。

微なりと雖も『おはんちやん』また一個獨立の人格である。如何に私が之を『他人の自由にさせ』やうとした所で、さう妄りに他人の自由になるものでもなからう。萬一なるとしたらそれは『おはんちやん』自身の問題で、

私の問題ではない筈だ。それとも中村氏の如き共産主義者は『女房』に限つてその私有を是認せんとせらるゝのであるか。

社會主義でも女房は一人占め

主義や主張は飾り物ではないのだから、之を口にする以上は、隨時隨所必ず實行の意氣を以てして貰ひたいものだ、と思ふ。

序でにお伺ひするが、氏の所謂スパイの『女房』を『自由』にした不都合千萬な御『他人』樣と云ふのは自體どのやうな人々なのか。相手なしでは出來ぬ事柄、先づ其の方から御詮議を願ひたい。

『おはんちやん』事、當時相共に生死を誓ふ同志諸君との御交際以外には、餘りさうした機會を持たなかつた筈なので、如何にも合點行かず、或は同志諸君の潔白を疑ふ不束者の現はれぬ限りもないので、念のため此點を明白にしておきたいと思ふ。』

『某女史』と云ふのは誰の事か當りも附かないから言譯のしやうもないが、兎に角私は二十年も前に命懸けで惚れた或女に、左の小指を根元からプッツリ切つてやつて以來、一度も眞から女に惚れたことがないので、たとへ『中村が某女史と關係してゐると誤解し』たところで、そのために『二人の間が急に仲違ひにな』る譯もなし、從つて『烈しい口論』などは一度もした覺えがない。その當時、氏は既に勞働同盟會員であつた現夫人（新村××氏令妹）と同棲されてゐたのである。

更に曰く『この戀の鞘當から中村と黑瀨の仲が益々惡くなつて、先づ最初に怪しいと黑瀨にスパイの嫌疑をかけ始めたのが中村であつた』

有吉氏に嫌疑をかけ始めたのも同じく中村氏であつたと云ふ。之ではまるで中村氏が一手にスパイの嗅ぎ出し役でも承つてゐた樣で、甚だ面白くない。が、事實は違ふ。

私に『スパイの嫌疑をかけ始めたの』は、その當時私と仲の善かつた中村氏ではなく、岩佐作太郎と呼ぶ桑港歸りの食ひ詰め者だ。

山崎辯護士の事務所で初めて顏を合せた時に、變な乞食坊主みたいな野郎だから、頭を下げずにゐたところ、それが癪に障つたものと見えて、後から山崎氏に

『あいつの面つきはスパイ面といつて、亞米利加では誰も相手にする者のない不快な面だ。今後あんな者は決して寄せつけぬ樣にした方が善い』

と、ぬかしたさうだ。

私が『自ら同志との交際を遠慮すべき旨を岩佐作太郎氏に申出た』のは、その間の事情を知らず、岩佐をまことの同志の一人と信じたからで、それ『に係らず、其後北風會の會合に出席したの』は、始めて彼の不純な策謀に氣がついた爲めである。

元來一と口に『同志』と稱してゐた、當時の主義者中にあつて大杉氏と岩佐とは所謂アナ系の兩大關（アナアキストに大關があつたり小結があつたりするのも可笑しな話だが、實情だから仕方がない）に位し、互に――と云つても、大杉氏は入獄中だつたので、寧ろ岩佐が火事泥式に、お山の大將俺一人を極め込まうとした結果、手懷け易い者は之を手懷け、手懷けにくい者は之を排斥するといふ、桑港ゴロ相應の作戰に出たのである。

私の『しきりに有吉の辯護につとめた』事も亦私に『疑ひがかゝ』る直接の誘因となつた樣だが、私は常に少數權力者の壓制を憎むと共に、また心から多數の横暴を憎むものである。私が大杉氏と最も親しく交はつたのは氏が悲境のドン底に沈淪した、極端に云へば唾をひつかける者もない樣な時であつた。多數の者が寄つてたかつて或る一人を壓迫する樣な時は、理非はさて置き先づその一人のために、良き友であることを私の性情が要求したのである。

私が社會主義者の行動に飽き足らぬ主要な原因は、彼等が平素の主張に似合はず、常に事大思想に驅られて、弱い者いぢめを能事とする所にある。弱い者いぢめをする位なら、社會主義など唱へるに及ばぬ。資本主義でも專制でも何でも關はぬ、強い者が勝ちさへすればそれで善い筈ではないか。

望月某と呼ぶアナ黨家は、余及び宮嶋資夫氏と共に、最後まで有吉氏の庇護者となつた男だが、私がそのために他から包圍攻撃を受ける段になると、あわてゝその態度を飜へし、且つ洒々として余に絶交を申し出た。彼等の輕薄と無定見とは概ね此の類である。

而も彼等は頗る打算的で不人情極まるのを通則とする。人を利用して利益のある時は散々これを利用するが、利用がきかなくなれば直ぐ向ふをむいてしまふ。

私が若しスパイであるとしたら、私にスパイをさせた者は誰か。私は食はずに居ることはできぬが、彼等はしばしば私の食ふ物さへも『同志』の名によつて、私から奪ひ去らうとするのである。いや實際奪ひ去られた爲めに食ふ事のできぬ日さへもあつたのだ。

若し世に、自分ではスパイをするだけの度胸も手腕もないくせに、人にスパイをやらせて、其の上前をはねる事を常習とする者があるとしたら、之を何と云はう。

私が徹夜の業務に疲れ切つた體で、鋼索を肩に河岸へ買出しに行かうとする出會頭、一人の友が見なれぬ男を連れて訪れて來た。

『おい金を貸してくれ、馬附きなんだ』

『へッ、戯談云ふねえ。一晩中寢ずに稼いでるのが見えねえか、ほんつくめ』

さすがの私もムッとして、斯う云ひ放たざるを得なかつた。それが後に×××となつた其の友との最後の會見であつたことは云ふまでもない。

更に謂ふ所に由ると、岩佐等數名の同志はその前から相謀つて、有吉氏のスパイたる事實を確認してゐたとの事である。それを自分達の間だけで祕密にして置きながら、何も知らず同志づきあひをしてゐる者が、四面楚歌の内に立つてゐる彼のために、敢然辯護の勞を取つたのが怪しからぬと云つて之を非難するが如きは、恰も陥穽を設けて他人の之に陥るを待ち、手を打つて快哉を叫ぶ者と何の異なる所があらう。(彼等が有吉氏をスパイと認める旨の通知狀を發したのは、私が氏のために辯護の勞を取るを待ち受け、その直後に於て之を發したものである)

彼等こそは何故氏のスパイたる事實を確めながら、之を北風會に近づけ、仍て以て兇行を中村氏に加ふるの機會を與へたのであるか。而も彼等は、余と有吉氏と共に又中村氏

の排斥を爲し了したのである(査問會評決)。之を爲し了したるの後、彼等のかち得たる運動の成果は果して何物であるか。私の衆と共に與り聞かんと欲する所である。

私は今日に於ては、有吉氏を信ぜざるが如く、又彼等を信ぜざる者であるから、氏の眞にスパイなりや否やは之を判斷し得ざる所である(刃傷事件の直後、望月方に於て同席の氏に向ひ『お前が本當のスパイだつたら俺が承知しないぞ』と云つた宮島資夫氏が承知してゐる所を見ると、どうも本當のスパイでは無いらしい)が、結果に就て俄かに之を見れば、中村氏を刺させたのも全く彼等の所爲といふ事ができやう。日頃の大言壯語に似合はず、當日一人の起つて能く有吉氏の兇刃を防ぐ者が無かつたと云ふ事實に見ても、その疑ひは十分であらうと思ふ。まさか腰が拔けて立てなかつたわけでも無からう。査問會で腕捲りした豪傑も居るのだからな●

『精工舍のストライキ』に關する余の行動の如き、彼等に果して之を云爲するの資格ありや否や。彼等こそは、チラシ一枚撒く手傳ひをするでなし、握り飯一個失業者のために分けたでなし、反つて罷工團の勢力を殺がんがために、暴行脅迫を以て中村氏を勞働同盟會より脫退せしむる等、寧ろその敗るゝことの一日も速かならんを願ふが如き冷酷な態度を取つてゐたではないか。

事敗るゝの後、最後の報復手段として、余が單身工場長某を襲ひ、途に之を負傷せしめたるに際し、只僅かに吉田一氏一個の傍らに在つて、余に聲援したるを例外とするのみである。

彼等に取つては、資本家の勝つ事よりも、仲間の勝つ事が怖いのだ。故に私が靑年會館でやつた勞働同盟會の發會式には、直接行動の緊急動議を持ち出して之を攪亂せんと企てたが、そのシッペ返しに私が北風會で直接行動論を唱へた時は、あわてゝ之を揉み消したのみか、反つてそれがスパイの行爲でもあるかの樣に言ひ觸らすのだ。自分が警視廳などに出入して、たま〳〵人に出逢ふと『あいつはおかしい』などゝ云ふ。斯うなつては、まるでお得意爭ひをする酒屋の御用聞きの心理に異らない。

『鑛山勞働同盟の機關誌が發賣禁止になつた時、公の通知に先だつて『その事實を知つてゐた』と云ふやうな事まで、彼等は私を排斥する理由の一つに數へてゐるが、一體全體スパイと云ふものは、資本家ばかりの使ふ戰術なのか。折角出來上つた雜誌を根こそぎ押收されるのが可哀相だから、奴等の薄ぼんやりしてゐる間に、ちよいと氣を利かせて助けてやつたのだが、自分がぼんくらなら人までぼんくらなものと思ふからそれが不思議に見えるのだ。お汁で顏でも洗つて來ねえ。そんな事まで査問會へ持出す樣なドヂを踏まされたお蔭で、こちとらは震災當時どんなヤバイ目をみたか知れねえのだ。糞面白くもねえ寒山子野郎め。

『新社會』に載つた『犬の裁判』と云ふ記事は、勿論原文そのものが私に對する或る成心を以て書かれたもので、書いた人が多少の恩義を感じてゐる堺氏でもなければ、そのまゝ棄て置くべき筋合の物ではないのだが、甲村氏の登進となるとそれは更にひどい。

『證據さへなければ自分にかゝつてゐる嫌疑は譯なく一掃できると、圖太く(圏點黒瀬)考へたのであらう』とまで云つてゐる。

『圖太』いと云ふ以上は、勿論私のスパイたる事實を認定されたのであらうが、氏は如何にして一面識もなき私のスパイたる事實を知られたのであるか。斯うして他人の名譽、若くは生命にまで關する重大な臆測を紙上に發表されるからは、勿論相當の根據がある事と思はれるが希くば其れの御明示に與りたい。

査問會當時その座長であつた堺氏も『右の諸點に關する黒瀬氏の辯解は皆な相當の理由があるかのやうに私には聞かれた』と云つて居られるので、里村氏の認定には自ら他の根據が無ければならぬ筈と思ふ。

念の爲めにお斷りして置くが、私は勿論こんな問題について三百式に證據呼ばはりをしやうと云ふのではない。只『黒瀬春吉氏のスパイたる事實を認むるに足らず』と云ふ査問會の評決は、『全員一致』とあるから、その中には一人も里村氏の樣な意見の持主はない筈であるし、其の他には又『祕密會』の内容にまで通じてゐる人が一人もゐない筈なので、氏が何處からその判斷の資料を得られたかと云ふ事が不思議に感ぜられるのである。

それにしても、有吉氏の嫌疑については、『フンドシ事件』とやら、鼻持ちのならぬトリックまで用ひて『まんまと』『一杯喰』はせる事の出來た彼等が、私の身上に係る嫌疑に限つて、一の證跡だも之を捉へる事ができなかつたと云ふのは一體どうしたわけか。敢て證據呼ばはりをする積りはないが、相手が證據好きのお歴々だけに、何となく只往生しろとだけでは浮かばれぬやうな氣持もする。

尤も査問會の評決には、前文の次に『然れども同氏の平生の行動は我々の信用を繋ぐに足らざるものあり、依て同氏は今後當分(圏點黒瀬)我々と運動を共にする事を遠慮されたし』と云ふやうな負け惜みの文句が附け加へてあつて、それでやつと彼等排斥組の顔が立つた形になつてゐる。

故意か偶然か、里村氏は其處でもまた『當分』の二字を取り落してゐるので、私が永久彼等から木戸を突かれた樣になつてゐる。どうでもいゝ事ながら、木戸を突くにも突くだけの口實が見當らないので『當分』とお茶を濁したところに千金の價値があるのだ。評決員諸君折角の苦心を無にするのは惜しい。

最後に言ふ。同志(査問會に所謂『我々』組)は私を見棄てるであらう。だが私は常に彼等の先頭を歩いた。私のする事はいつも彼等の非難の的となつたが、五年十年の後になると彼等は極つて私の足跡に追隨する。さうして之が我々の發見した道だと云ふ。

兵器事件と××事件――韓貨事件と××事件――勞働同盟會の主張と無産黨の政治的進出――スパイ戦術の逆用と共産黨軍用金問題――等々。呆れて口も利けないとは此の事だ。

お前が居ては運動ができぬから『當分遠慮』せよとの事なので、願つたり叶つたり爾來十年斯うして『遠慮』だけは續けてゐるが、何時まで『遠慮』してゐても一向はか〲しく私が邪魔になるだけの仕事を仕出來してお見せ下さらぬのでは、さう際限なくべんべんとお待ち申して許りゐる譯にも行かなくなる。

人生五十、餘命幾許もあるわけではないのだから、もう善い加減に『スパイ』を愧死せしめるに足るだけのドエライ仕事をしてお見せ下さるか、さもなくばあつさりと兜を脱いで『何時まで遠慮して貰つても、我々には到底君を邪魔にするだけの仕事ができさうもないから、もう決して御遠慮には及びません。どうぞ今後とも何分よろしく御引廻しを願ひます』と云ふ様なことに行かぬだらうか。

兎もあれ、もう斯んな詰らぬ問題には成るたけ指を觸れぬ事にしたいと思ふ。お望みとあれば幾らでも御相手はするが、犬の遠吠えみたいな紙上の押問答はもう御免だ。議論なら對決喧嘩なら出會ひ次第いつでも素つ首をお渡し申さう。

大杉氏に對しては此際少しく意を得たい廉もあるが、死人に口なし、如何ともすべからず。

和田久太郎氏が、査問會の後に及んで反つて私と親交があつたのは人の知る通り。

成敗は知らず。操守二十有餘年、聊か友誼の重んずべき事を知つた積りである。天下一人の能く頭顱のために斯んな迷惑を蒙つたと揚言し得る者があつたら、生きて再び斯仕の御目に掛るまい。

タッタ一つ今までに申譯のない出來事が有つたとすれば、それは私がほんの少しばかり當局の誠意——國政に對する當局の誠意に信頼した爲めに、有望な一人の同志を見殺しにするの止むなきに至つた事であるが、其の禍は寧ろ反つてその歸すべきに歸したるを信ずることができる。今や××の××となつて××に××する彼と共に、聊かその意を安んずる所以である。

既成政黨打破を叫んでゐるうちに、世はいつか既成アナ、ボル退治を必要とする時代となつた。その爲めのスパイなら一つ命がけで大いにやつてみても善いやうな氣持がする。

どうも私には何から何まで十把一とからげの大衆運動とか云ふ奴が氣に食はない。人の尻馬に乘つて走ることは知つてゐても、自分では滿足に歩くことさへできぬ者が、大勢寄り集つて一體何をしやうと云ふのか。[illegible]輩位ならどつちにした所で大した事はないから善いが、そんな奴等が惡指導者の手に掛つて盲目的行動を演ずる事になつたら、それこそどんな珍事が出來するか知れたものでない。百萬の大衆もその一人々々が一本立ちのできる立派な目明きの人間でなかつたら、徒らに暴力の勢威を示す外何の得る所もあるまい。狂人の持つ刃物は切れる程あぶない。彼等の持つ理論は——疑ひもなく危險思想である。

此の一文は、舊同志中余の排斥運動に參加されなかつた唯一の知己、宮島資夫氏の斡旋によつて、強ひて本誌上に掲載せらるゝことを得たものであるが、内容は勿論毫も同氏の關知せらるゝ所に非ざるのみならず、余も亦敢て氏の意を迎ふることを念としなかつたのは言ふ迄もない。氏の厚意に對し茲に深く陳謝の意を表する者である。

中村氏に斯の如き誤聞を傳へた者の何人なるや、またその意圖の奈邊に存するやは、略想像のつかぬ事もないが、今は之を云はぬ。うつちやつて置いても、どうせその内に尻尾を出す代物だ。

北洋の魚群は誰のものか

(日魯漁業爭奪戰觀望)

北海漁人

百の理論を語るよりも、一つの事件を示す方がずつと早判りに簡單でよろしい。

「北洋漁區爭奪事件」——資本と資本とが嚙み合つて、白日の下に正體を曝露した大芝居である。當世實業家氣質、しかもその登場人物の中にずらりと當代內閣の閣僚たちまで出て來るのを見れば、同時にこれは當世政治家氣質でもあるであらう。とにかく近來注目すべき大芝居である。しかもその一方には二萬五千の漁業勞働者が在るに於てをや！

昭和四年五月某日、帝國ホテルから總理大臣官邸へ電話がかかつた。

「おい田中を出してくれ！」

そこで、日本帝國總理大臣陸軍大將田中義一閣下は急いで受話器をとり上げた。

「はあ、どんな御用でございますか？」

「一寸こゝまで來てくれんか？」

そこで閣下は早速に、諾々として自動車を走らせたのであるが、しかしそれにしてもこの相手は誰なのか？　ともあれ一國の宰相を呼寄せる豪氣者である。でホテルの帳場を覗いて見ると、「杉山茂丸」とある。

杉山茂丸といへば、桂や伊藤の時代の政治家とは可成りに密接な關係のあつた名であり、その頃の田中などは次の間から挨拶を交した程の人であつたと言はれてゐる。して見れば大先輩の格でもあり、諾々として出掛けて行つたにも無理はないかも知れぬが、それはそれとして併し、一體どんな用事であつたのか？

「日魯の問題、ありや堤のためにも島のためにも早う何とかせ

んと不可ん！」

島とは一體誰の事か？　堤とは一體誰の事か？　この會見の折、ホテルのボーイが時めくおらが大臣とは知らず、杉山老人の方へ敬意を表し過ぎたが餘り、つい田中の方へ卓上の塵を拂ひ落して、後になつて恐縮——するにも當らん事だが——したなどといふ珍談もあるのであるが、とにかくこの宰相密談の場などは、蓋し全卷中での秀逸な場面の一つであらう。

△

日に青葉山ほととぎす初鰹——この頃になつて漸やく極北の地カムチヤツカには春が訪れる。山嶺の雪が消え、河の水が爽かな音を立てはじめる。すると「カユルヤ」といふ鳥がかういつて啼きはじめる。

「チヤブイチヤ！　チヤブイチヤ！　チヤブイチウ！　ヴイチエル！」

チヤブイチヤといふのは、通例「鱒の助」と譯されてゐるやうだが、河を溯つて押寄せて來る魚群の中の先驅者ださうである。チヤブイチヤが見えたぞ！　平年通りならば大概が五月の十日前後であるが、この啼聲を聽きつけると、村の人はいそいそと去年の舟を引出して今年の水の上に浮べる。網を繕ひはじめる。漁梁の杭を用意する。何しろ永い冬の間中、鹽漬と干物とで暮して來た彼等にとつて、ぴちぴちしたあの新鮮な生魚の味である。このカユルカの聲は、江戸つ子にとつて初鰹を知らせるほととぎすの比ではないであらう。犬さへが河端に出て吠えずり馳けずり廻る。

オホーツク海は人も知る世界三大漁場の一つ。海底の寶庫には限り知れぬものが潜んでゐると言はれる。大體五月の中旬から八月頃までが漁期であるが、この期間に來襲する魚群の夥しさは、あの沿岸一帶想像を越えて凄まじいものださうである。チヤブイチヤに續いてハイコ鮭か殺倒する。續いてキヂウチとかゴルウシヤとかいふいづれも鱒の種類。それに續いて鰊、それから鱈、この外にはあの蟹が素晴らしい。これらがすべて、いざ押寄せたとなると、重なり重なつて文字通り舟行が困難になる程だといふから恐ろしい。

だがこれは一體、誰のものか？

元來が天然の産物である。誰もなく彼もなく、見つけたもののものであるべきであり、幕府時代北海道の勇敢な邦人漁業者は、早くもすでにこれを發見して自由に出漁してゐたものらしいが、その中にロシアの帝室政府も氣付いたらしく、十九世紀の末に法令を出して、異邦人の立入りを禁止した事があつた。

がこの問題については、明治八年、千島樺太交換の際、日露兩國間に締結された條約を見ると、その中の一項に

「日本國船及商人、通商航海の爲めオホーツク海及カムサツカの海港に來り、又その海岸に沿ふて漁業を營むにつき、凡て露國最懇親の國民同樣なる權利及特典を得べし」

と謳されてゐる。で日本人に對しては、その時以來開放されてゐたといへば言へるやうなものであるが、しかし、この漁業權利の國際關係は明治三十七八年戰後の結果によるポーツマス條約が結ばれるまでは分明を缺いてゐたといつてもいいであらう。

「日本人は、ある指定せられたる灣、入江、河川等を除いては正當なる權利を以て漁業を營むを得べく、漁區の租借に當りては、凡て露國人と同等に競爭入札法によりて、租借區の決定を受くべきこと。」

卽ち、滿洲の山河を蔽ふた同胞幾萬の骨肉の代償として、前の「露國最懇親の國民同樣」といふ妙な文句が「露國人と同等」とまで訂正せられて、ここに初めて國際的權利が確保された譯であつて、言ひ代へて見ればわが日本は、同胞幾萬の骨肉を捨てて、ここオホーツク海の鱒を、鮭を、鱈を、鯡を、蟹を得たのであつた。

そして今は、堤清六と島德藏の二人が、この鱒を、鮭を、鱈を、鯡を、蟹を間にして大喧嘩を始めたのである。

だが一體、これは誰のものか?

△

この日露間の漁業條約の成立は、當然、日本の北海漁業家の進出となつた。今日問題の中心人物である堤清六などは、その先驅をなした中の一人であつたらう。

越後の國では、家柄の上下に從つて息子の呼稱を三樣にしてゐる。最上が「あんさま」で次が「あんにやま」最下が「あんにやさ」であるさうだが、堤清六はその「あんにやま」に位する太物屋の伜として生れた。廿五歲、日露戰爭の勃發すると同時に、酒保員として從軍し、苦力の受負などをやつて頻りに活躍したらしいが、戰後もなほ滿洲から露領ハバロウスク邊までを遍歷し、とにかく一二萬の金を握つて歸鄕した。と當時締結されたこの漁業條約を見て、こいつはと睨つたらしい。親戚の反對を一蹴して、友人間を勸誘した末が堤商會といふものを設立し、百五十噸ばかりのぼろ船を買込んで、自らそれに乘込んでカムチヤツカに向け出帆した。これが漁業家としての彼の第一步であつたのだが、なんとこの百五十噸が、廿年足らず後の今日に於て、廿四萬噸の船を動かす日魯漁業會社の活動になら

うとはである。彼の成功といふよりも、資本企業の膨脹力の強大さに驚かざるを得ないではないか。

尤も、現在の日魯漁業は、この堤商會のみが前身なのではない。――堤商會と並んで當時北海に發展してゐたのに一井組といふのがある。久原の出資で久原の番頭の中山説太郎の經營してゐたものであつたが、これと現在日魯の重役である眞藤愼太郎の白令漁業、この二つが合併して、今問題の島徳藏の手に賣られて、こゝに始めて日魯漁業株式會社なるものが出來上つた。とこれへ眼をつけたのが堤である。その頃の堤は新潟から函館函館から東京と、次第に事業の本據を進めて來て得意の絶頂期であつただけに、その野心も大きかつたらしい。この新會社日魯の株に手を入れて散々に賣叩いた。と同時に一方貸金の關係から三井物産御用の御目附役として重役の椅子に座つてゐた壇野禮助を籠絡して味方とした末が、筋書通りに島徳一派を逐ひ出して自身乘取つてしまつたものである。その上で、彼自身經營の堤商會の外、これも彼の系統であつたカムチヤツカ漁業や日本輸出食品會社などを一丸としてこれに合併させ、一躍一千七百萬圓の大會社とし、己れは社長の椅子に座を占めて完全にその實權を握つてしまつたものである。

當時の事件を堤の方では、決して乘取つた譯ではなく、二百萬圓ばかりの會社を一千萬圓で買受けただけだと言ふのであるが、島徳側に言はせれば飽くまで策謀に陥れられたのだと言ひ今度の事件はその復讐戰だとも號してゐるらしい。陣營の顏觸れを見るとどうもそれが眞實らしくも思はれるが、それはとも角としても、芝居ならば當然こゝら邊りが序幕となつて、今に見ろ！」で島徳が見得を切り、幕、となる處に違ひない。

が、それにしても、如何なればこそこんな泥仕合の中へ、當世お歷々の高潔なる政治家諸君が、同じ泥に塗れながら顏を出さねばならぬのか？

△

島徳といへば、實業界殊に株式界では、あゝあの男かで名うての人物であり、母親の臨終の際にさへ堂島の市場で、賣つた買つたをやつてゐたといふほどに骨髓からの株屋である。

久しく大株の理事長を勤めてゐたが、その間に振つた彼の辣腕などは、到底小膽の人間には仕果せる事ではなかつたらしい。大正九年、原内閣時代、全國の取引所が殆んど一齊に增資された事があつたが、その當時など、彼は得たりとばかり一千四百萬圓の資本を約三倍の四千萬圓にまで上して、その新株の内の二十一萬株を「仲買團及同年上期迄株整理功勞者へ」とい

ふ不思議な名目で、行方不明にばら撒いたものである。この手際などは中でも壓巻の一つであつたらう。行方不明の行方などを問ふこと勿れ。とにかくその故かどうかは知らぬが、その折の總選擧に於て政友會は、何處で工面したものか、豪勢なほどに札びらを切つて金力振りを示したとある。

大連の民營商品取引所の創立なども、これに似てもう一つの例であらう。同じ原内閣の時代であつたが、創立委員長は三申小泉策太郎、その下に顧問として鄕誠之助男爵とこの島徳がゐた。時の農商務大臣は山本達雄であつたが、まんまと認可を得て株式募集のプレミアムが當時の好景氣を反映して一株百七八十圓。傳はるを聞けば、横田千之助へ五百株、奥繁三郎へ五百株、その他等々だつたといふのであるが、百八十圓として五百ならば正に九萬圓であらう。當時更にこの際小泉三申から政友會へ持込まれたのが九十萬圓だつたなどといふ評判もあるから政友會にとつては、仲々袖には出來ぬ島徳藏である事が判るではないか。

だが筆者はこゝで、餘談ながら當時の日本の社會的狀勢がどんなであつたかを追懐したく思ふ。

大正七年この年は、「兩に二升の米が喰へるか!」と時の大臣仲小路廉の玄關に怒鳴り込んだもの、あつた時ではなかつたか。富山縣滑川町の漁業勞働者の妻女たちが、隊を組んであの全國的騷動の口火を切つた年ではなかつたか。

大正八年、全國に於ける同盟罷工の數は四百九十七件といふ飛躍的記錄を示し、釜石鑛山のそれには軍隊までが出動したのではなかつたか。

さてその當の大正九年、彼等が九萬圓を懐にして私かに北叟笑むだその年には、八幡製鐵所三萬人の職工が、官憲並びに御用暴力團と衝突して、遂に流血の慘をすら見たのではなかつたか。

抑も彼等がよく口にする「國利民福」とは一體何であらう。最近に至つて漸やくこの北洋漁區の問題も、單なる一會社の爭奪戰ではなく、實は北海二萬五千の勞働者とその家族十萬の死活に關る事だとして、國家重大の由々しき事件の如く閣議など開いてはゐるが、しかし諸君よ、その彼等が「曾て斯くありし」彼等である事を斷じて忘れ給ふな。

全體、誰が今度の事件を惹起してゐるか? ひとり島徳のみか? ひとり堤のみか?

△

しかし、再び漁區へと戻つて行かう。

ポーツマス條約締結の後は、當然日本人對ロシア人との競爭であつた。だが極東ロシア人の資本漁業は、當時まだ〱資力的にも技術的にも貧弱幼稚であつたらしい。時の帝政政府も頗りに運賃輕減や販路開拓やに力を盡してはゐたらしいが、到底その敵でなかつた事は、次の數字に見ても知れるであらう。卽ち全漁區への漁業投資總額の八割までが日本人によるものであり、その漁獲總高の八割七分までが日本人の手中に占められてゐるといふのである。

ポーツマス條約は、毎十二ケ年にその更改をする約束であつた。だがその第一の更改期である大正八年には、早くも相手方の帝政ロマノフ家は沒落し、しかも新政府ソヸエート共和國に對して日本政府はまだ承認を與へてゐない。そこで例のオムスク政府と臨時協約を作つたり、次いでは所謂アントノフ政權と協定したりして、依然前條約の儘に續けてゐたが、大正九年、問題の尼港パルチザン事件が勃發するや、宜しいとばかりに日本政府は軍艦を北海一帶に馳らせて、自由出漁といふ事に出たものである。軍艦新高の沈沒といふ不祥事が、この間に在つた事だけでも、これはまだ諸君の記憶に鮮かなものがあるだらうと思ふ。——處で、これも稍餘談の嫌ひがあるが、當時露領水産組合が自發費として支出したのが五十六萬圓、これに加へて海軍支出が八百萬圓。今度の問題では借區料を二百萬圓も出したのでは、到底漁業の採算は望まれないなど、騷いでゐるが、この時にはその三倍の九百萬圓が煙と消えて無くなつた筈である。考へて見ると、どうも「國家經濟」といふ算盤くらゐ不可解なものは無いらしい。

この以後、大正十四年のカラハン芳澤の間で成立した日露新協約で、ポーツマス條約が完全に效力を存續すと約されては見たが、何はさて相手は、原則として帝政時代ロシアの締結した一切の條約を放棄するといふソヸエート共和國だけに、具體的な交渉となると仲々に六敷く、ロシア國營漁區の優先權問題とか、漁獲制限高の問題とか、更には、ソヸエートの方では日本漁業會社に對しても勞農政府制定の勞働法を適用するぞと言ひ出したりする上に、大正九年度以前及以後の日本側借區料の滯納請求があつたりして、昭和二年の五月、暫定的な解決を得るまでは、難外交問題の一つとして霞ケ關にとつては大きな頭痛の種だつたらしい。後藤新平がはる〲出掛けて行つたなぞも一にこの爲であつたのであらう。

が遂に翌る昭和三年の五月、遂に確定的な新條約が締結され樞府を通過して互ひに批准の交換をする事になつた。がこの際樞府が政府に對して注意した二つの項目がある。

一、本條約の實施に際しては、特に國際的關係を考慮して、我國の權益を毀損せざるやう。
二、政府は、出漁關係者の思想取締に十分の注意を拂ひ、將來の災禍を防止するに努むべき事。

この二番目の方では現政府も躍氣な大努力をし續けてゐるらしい。ロシア歸りの無邪氣な勞働者を頻りに檢束して見たりして大童であるが、さて今度の問題は第一項である。

今度の問題で、この樞府の老人諸卿が果してどんな風に動いてゐるか。何しろ今年度はその條約の實施にかゝつての入札第一回早々なのである。本來ならば當然顏を潰されたといきり立つべき場合であらうが、そこには又そこが無いとも限らぬ。風の便りにでも知りたく思ふのだが、何がさてこゝは庶人垣間見禁制の世界だけに、どうもこれは仕方が無い。

△

露領水產組合――といふ邦人漁業家の集團がある。

「本年度漁區競賣入札期日は、二月廿八日と致すべく候」

としてロシア政府からの告示が來た。それを閲んで組合員がその告示に附加された貸下條件の內容を審議したのだが、

「怪しからん！　漁獲制限高が少な過ぎる！」

「怪しからん！　在來の日本人經營漁區がロシア國營漁區の中に包含されとるわ！」

「怪しからん！　借區料に對する二割八分の抵代稅の外に、五分の繁殖保護稅とはこりや何ぢや！」

「怪しからん！　入札保證金を借區料の五割からいきなり六割五分に引上げとる！」

「怪しからん！　漁期を一齊に繰上げとる！」

「怪しからん！　今度の競賣には日露以外の第三國人の侵入を容認しとるではないか！」

その他等々の「怪しからん！」については、農林外務の兩者も頻りに、いづれは條約に從つて修正要求を出して解決するからと慰めたのであつたが、結局は「入札不參加」といふ聲明を取消させる事が出來なかつたらしい。折柄議會の開會中でもあつたし、民政黨では早速にこれを問題として、坂本幸太郎に緊急質問をさせたりしたが、遂に二月二十八日の入札場には一人の日本人の影さへも無く、競賣漁區四百三十七の中、八十七區が完全にロシア側のみの入札によつて落されたものである。

さて、問題はこゝに始まつた。

この漁區の借區料ばかりでも、邦貨でざつと九十萬圓、一區の施業費を十萬圓としてもやつと九百萬圓、よしんば彼等が所

謂ネップマンであるとしても、當節のロシア人にそれだけの資本力のある筈がない。とすれば差詰めこれは極東銀行あたりが出してゐるに違ひない。處が條約の成文には、競爭入札參加の資格を個人企業者のみに認めてゐる。これは怪しからん！

「勞農政府は、その競爭入札に當り、入札者たるロシア人に裏面より資金を供給し、以て日本人に勝ち、わが漁業權益を露領沿岸より一掃せんとする方針を有すと思はれるが、政府の所見は如何？」

これは、坂本代議士が質問の中の一節であるが、これに對して政府委員は「そんな事はありますまい」と簡單に答へた。がこれも考へて見れば、日本の漁業家にしろ、第一が朝鮮銀行に百五十萬圓かの借金を背負つてゐる日魯である。その他にしてからがどうせ自分の金ばかりぢやあるまい。銀行の金なら結局が日銀の統制を受けてゐる。とあつて見ればこれも五十歩百歩の事であらう、がしかしそんな事は宜しいとして、漁業家連中も不參加と威勢よく怒鳴つては見たものの、左樣ですかと出られては狼狽せざるを得ない。中には、ぢやいよ／＼自由出漁だ、海軍の用意を頼む、などと血迷ひ出した人もあつたらしいが、結局は外務省へ泣込んで、前競賣の取消再競賣の要求といふ騷動になつた。——この間である、積年の恨みに機を覘つてゐた島德一派が、鋭いその爪を磨き出したのは！

△

島德の下に、久原の番頭の中山説太郎のゐる事はすでに述べたが、この中山自身も堤に對しては積年の恨みがある。——神戸の森本六兵衞を説きつけて、五六年前の事と思ふが、冷藏船の會社を起して、横濱船渠に四隻ばかりの新造註文をした。それが如何した事か、差押えられて競賣に附せられた事がある。さてその入札を開けて見ると、落したのが人もあらうに堤の日魯であつた。中山にして見ればどうも面白くない。的切りこれは奴等の策謀だなと思ひ込んだらしい。しかも日魯は前に述べた通り、中山自身創設した會社である。

久原といへば、この久原房之助にも堤に對しては淺からぬ恨みがあるのだから面白いのがなほ面白くなる。——政界利權の爭奪にはつねに影の如く動きまはつて、その報酬としては下らん品物を馬鹿々々しい高價で賣りつけて歩く、骨董屋清辰といふ妙な存在があるが、この清辰が、小原達明社長時代の八千代生命を、關伊右衞と一緒になつて、如何ですかと久原の許へ賣込んで來た。何しろ生命保險といへば取附といふ心配が無いだけでも、金融的背景としては銀行よりも確かである。當時の八

千代生命はその契約高五億圓、監督官廳の監視附きではあるがそれは當時大臣の久原の事だ。如何にでもなる。で買はうとまでなつたのだが、一方でこの同じ品物が、時田勇の手で堤の方へも持込まれてゐたとは知らなかつた。手を打たうとした時には既に、堤が自分の保證で三百萬圓を朝鮮銀行から引出し、奥平昌恭を社長にして、そつくり買受ける相談が出來てゐたばかりか、事務には商工省の宮川といふ陣立てまで出來てゐたのだから、久原としては癪にさはつた。だがこの憤慨も堤に言はせれば「散歩をしてうつかり犬の尻尾を踏んだやうなものさ。久原が欲しがつてゐると知つてりや、何も取らなくともよかつたんだが。」と涼しい顔であるらしい。がその顔が涼しければ涼しいほど、癪の方は餘計に障る譯であらう。

處が、堤を恨んでゐるものがまだこの外にあるとなつてはいよ／＼更に小説的であらう。宮川豐吉といふ人物がある。中山説太郎の番頭のやうな役目であるが、これが堤の番頭の三浦良次と結托して日魯株の買占めを企てた事がある。株價を百五十圓までに釣上げた上で増資のプレミアム稼ぎをしやうといふ魂膽で、これには勿論堤の賛成があつたのだが、この妙案も結局は思ふ通りとはならず、五六百萬圓の大穴を開けた末が仲間割れの喧嘩となり、宮川が詐僞横領で訴へられるやら、堤が契約不履行で反訴されるやらの騒動になつた。かうなれば昨日の味方が今日は敵である。よし、それならばで宮川が、馳けて往つた處が、外でもない、島徳藏方だとなると、これで大概顔觸れが出來上つた事になる。

△

さて、外務當局の奔走で、四月五日再入札といふ事になつた——尤もこの事も、意地惡く言へば、條約の明文に

「競落者なき漁區については、前回の競賣後五日以後十四日以内に再競賣をなす事を得」

とあるからには當然の次第であつて、ただ入札保證金が日本側の主張通りとなつた位がせめてもの手柄であつたかも知れない、がとにかく、外務農林兩省の役人立會ひの上で露領水産組合の代表が、嚴肅に入札タケツトを投込んだ。

處がこの時、突然異様な人物が現はれたのである。極東銀行神戸支店の信用狀を携へて、名をコルサコフといふロシア人、入札時間の將に切れやうといふ時であつたが、つかつかと入場して、同樣タケツトを投げ込んだのである。ロシア人ではあつたが、このコルサコフとは何者であつたか？——入札人名簿に記入された處を見ると、日本人K・UDAの代理とある！

K・UDA！　宇田貫一郎――これはあの島德の專務時代、庶務課長をしてゐた男ではなかつたか？

露領水産の事業に參ずるものは、すべて組合に加入する規約となつてゐる。しかもこの組合員以外には入札に參加せぬ協約がある。宇田貫一郎は斷じて組合員ではない！　と一應はいきり立つて見たが、しかしロシア政府にとつてそんな協約は何でもない、法規は正當にK・UDAの正當なる權利を認めねばならない！

が、開札して見ると、更にその驚きは二重であつた。日魯が完全に己れのものと信じてゐた優良漁區の七十七ヶ所及び西出商事經營の一ヶ所、併せて七十八區が、二百九十五萬六百六十四留といふ法外な高價によつて、宇田の手に納められてゐたからである。

さてこの時に、島德派に宮川豐吉のゐた事を忘れてはならない。先きに堤と結托して買煽つた彼は、今度は島德に加擔してこれより先きから盛んに日魯を賣叩いてゐた。會社はこれに對抗して防戰買ひを續け、暫くは百五圓臺に保合つてゐたのであつたが、この開札の報が傳はるや否や、一擧にして大慘落であつた。五十圓ヤリ、果ては三十圓ヤリ、立會は勿論停止。まことに突風の襲來である。事情を知らぬ仲買も客筋も、たゞ呆然としてその混亂の中に自失するばかりであつたらう。

この時になつて、始めて、にやりと微笑を浮べて覆面をかなぐり捨てたのが島德藏であつた。爾來表面に現はれて今になほ結着を見ぬ騷動であるが、しかしそれにしてもこの島德の背後にあつて、資金の絲を操つてゐる裏面の人物は果して何者であらう？

△

久原だといふ説がある。やりかねない彼ではあり、しかも前述の如く堤に對しては含む處がある。

彼は先年、田中義一の命を受けて、産業使節としてモスクワまで出掛けて往つた。クラシンやチチエリンにも會ひ、そこは流石商賣人だけに拔目なく立廻つて、西比利亞利權についての諒解を求めて來たといふ噂もある點から見て、彼に漁業方面の野心が無いとは見られない。

更には、乾新兵衞だといふ説もある。番頭の西川末吉が、問題の起つた以來しげ／＼と森恪外務次官などと會見したりしてゐるのを見ると、或ひはさうかも知れぬとも思はれるが、何しろ乾といへば、人も知る田中の政友會入り持參金三百萬圓を寄贈に投出した男ではあり乍ら、同時に田中への時貸百五十萬圓

に十錢日歩で三十萬圓を大引きしたなどとも噂される男である。儲け口と聞けば何をやるか判らない。

がそれは兎も角として、島德の落札した値段と日魯側との間に、どれだけの開きがあるか？　七十八區の中の主要なものを拔いて左に擧げて見やう。

漁區番號	昨年度入札價格	今年度入札價格
二〇二區	二二、八〇五留	一〇五、五〇〇留
一八九デ區	一〇、七八〇留	四五、六六〇留
二一五區	七、〇二六留	六八、五六〇留
二一六ジエ區	七、四五二留	四四、一一〇留
二一六エ區	八、六八五留	四一、一七〇留
二一六ベ區	四、八三六留	四八、八〇〇留
二一六ア區	四、五七一留	四八、七六〇留
二二六區	九、三九〇留	九三、一六〇留
二二九區	二二、八〇〇留	一一一、五五〇留

總額について言へば約四倍であるが、漁區別に言へば、甚しきは十倍を越すものゝあること右の通りである。日魯漁業が三割の配當をした程の事業であるから、收益は夥しいものであるかも知れぬが、しかし以上のやうな法外の借區料を拂つてなほ且つ採算が合ふものであらうか？　これに對して日魯側の觀測では、鱒の收益が三十萬石、十石當り千五百圓として四百五十萬圓、鮭が二萬五千石、二千五百圓の十石當りとして六十二萬五千圓、紅鮭が同じく二萬五千石の十石當り三千圓として七十五萬圓合計五百八十七萬五千圓に對し、十石當りの支出千二百圓、これが四百二十萬圓、固定銷却を一漁區二萬圓として百三十八萬圓それに借區料その他の三百八十四萬圓を加へれば、總計九百四十二萬圓となつて、差引缺損三百五十五萬圓だといふのであるが、しかしこの數字では借區料が僅に三十萬圓見當でない限りは收支が償へぬ事になるので、信を置く事は出來ないが、しかし若し採算不能のものとすれば、敢て法外な高價落札をしたその裏には、何かしら秘められた魂膽が無ければならない。傳へられる處によると、島德が本來目的とした處は、漁場の實際經營ではなく、株價の寶川き利鞘を納める事に在つたといふのであるが、一味の中山說太郎が、これも元露領漁業家であり水產組合員であつた兒島侃二を引入れやうと勸說した際、

「何も急いで經營せずとも、たゞ經營權さへこつちに確保してしまへば、それでいゝ。寶川が日魯の先賣りをしてゐるから、これが實現の曉には、六十圓位までは暴落するだらうし、一年間の不經營の缺損なぞは、立ちどころに塡補出來る。」

と言つたといふ事などが眞しやかに評判されてゐるのは、果して事實であらうか。すでに株式市場の大波瀾に乘じて島德一派が收め得た利鞘は、東で五萬株、西で三萬株、その總額は三

百萬圓近いと傳へられてゐるが、此處に到つては投機の惡用恐るべしと謂ふより外は無いであらう。

が、それはそれとして、かうなつては日魯としても狼狽せざるを得ない。

△

山本農林大臣は、伊豆伊東の温泉から歸京の途中である。その汽車が國府津へ着くと、慌しく重役の增野禮助が飛込んだ。

山本悌次郎は佐渡である。堤は新潟である。越後者は賴まれゝば江戸までも米搗きに來るといふが、況してや同鄕の關係である。同鄕の關係などといふものは、政治家同志の間に在つては情理以上に不思議なものであるらしい。勿論大臣は增野によつて齎された堤の依賴を承知した。よろしい。早速島德を呼びつけて何とかする！

一方では高橋光威や田邊熊一などが、田中義一の許に馳込んで往つたらしい。二人は共に北信會である。高橋に至つてはそれ以上に日魯の重役である。

なぜ高橋が重役であるか？　これにはかなり複雜した因緣があるらしい。原内閣の時代であつた。堤が朝鮮銀行に百五十萬圓の借款を申込んだ。が漁業會社といふものは元來がその年の豐漁不漁にのみ賴る性質の、謂はゞ水物に屬する。がそれを、國家の得た利權を代つて堤が經營するのだからと、熱心に時の頭取美濃部俊吉を說き伏せて運動したのが、その折書記官長をつとめてゐた高橋光威である。その百五十萬圓で財界戰後のパニックを免れたと言はれるだけに、堤としては高橋に報いなければならない。そこでといふ次第らしいが、氣の毒なのは美濃部俊吉で、後にあの銀行を去つたのなども、これなどが不良貸出しの一つに數へられて責任を背負はされたのであつたらう。

だが、田中を動かす力は、この高橋でも久原には敵ふ筈がない。田邊熊一よりは乾新兵衛である。もし世評通りに背後の黑幕が彼等であつたなら、そこは田中である。よしんば山本悌次郞が尻を捲つた所で動くものではない。況してや山本には、眞逆それまでの茶氣も無いであらうし――折角の堤の註文も、却つて島德の傲語となつて返つて來るばかりであつた。

「日魯との妥協なんて話は、田中首相に對してでもなければ考慮の餘地はありやしないよ！」

これは彼が新聞記者に語つた言葉の一つである。己れの目論見は資本金二千萬圓の新漁會社を創立する事にある。日魯なんぞは眼中にない！

代議士としての堤は中立を標榜して出てゐるのではあるが、

内實純政友である事は謂ふまでもないであらう。だが今度の事件では妙に、會内の人氣が無かつたやうである。鳩山にしろ、秋田にしろ、さては宮田にしろ、表面は別として内々は反日魯であつたやうに言はれてゐるのは何故であらうか？　ソヰエート政府から島徳派について「漁營能力ありや否や」の照會があつた際、森恪が「有り」と答へさしたなどいふ噂は、確かにこれを裏書きするものであるが、その外にも、北海道の木下成太郎が、やはり堤派から泣付かれた際、俺を差置いて山本なんぞに北海道の問題を相談する奴ならそれでよろしいではないかと鼻の先きであしらはれたといふ話もある。

堤自身は好人物なのだが、人事關係に於て、番頭の三浦良次が宜敷くないのだと彼の爲に辯護してゐる人もある。三浦といふのは田邊熊一の姪婿だが、神戸の高商出身で、仲々毒才を持つた人物らしい。前身は日清紡績あたりだつたといふが、とにかく堤は萬事を彼に任せ切りにしてゐた。それをよしとして、今度の事件は彼が堤を誤らしめたのだと言ふ人は言ふのである。しかし浮世の轉變、これは仲々人間の眼では見通しの出來ぬ事であらう。

堤その人には實際面白い點が無いではない。堤商會當時、カムチャツカ鮭の良質鑵藏を企て、セールフレザーからチヤシヤイナ鹽湖の鹽を取寄せ、それを廉價で同業漁業者に頒布してやり、そこを見込まれて爾來セールフレザーからの密接な援助を得た點など、一面の彼を語るものであらう。實業家としても、安川雄之助と結んで三井との鑵詰シンヂケートを作るかと思へば、又大北漁業を年賦銷却で引受けて三菱と共同販賣の契約を結ぶあたりなど、泳ぎ上手といへば泳ぎ上手、中々の才腕でもある。彼のモットーとしては「大膽な行爲ほど實に却つて安全なり」といふ事ださうであるが、彼の今日は、しかし單なる大膽のみではないらしい。

が、その彼としては、何といつても今度だけは不覺であつたらう。

△

利權とは何であるか？　これに對してア・カラッスは答へる。

「ソヰエート共和國に於ける利權とは、プロレタリア國の生産力を恢復する目的をもつて、ソヰエート政權がその階級上の敵たる外國資本と結ぶ契約なり。」

一九二〇年レーニン制定の所謂新經濟政策なるものも、つまりはこの見解に出立したものであるが、今度の漁區事件などはその點でロシア側にとつては願つてもない恭悅であつたらう。

條約に從へば、一つの漁區が高價に落札された場合、その近接の漁區はそれに準じて借區料が引上げられる事になる。で五年間の契約としてロシア政府の收入に計上される增加額は約一千五百萬圓位に達するであらう。それだけに島徳派の行動は、恰かもロシア側に操られたかにも見え、萬事彼等と通謀の上の結果の如くにも言はれてゐるが、その疑を濃くしたもの丶一つには、中山說太郎が東京日々の記者に語つた次の言葉などが擧げられてゐるらしい。曰く

「今日の入札に對して、入札價格が非常に高いといふが、實は露國側と、もし今日の入札値段で契約成立の上は、從來の漁獲制限高を幾分緩和し擴張すべき默約があるから、それによつて十分採算をする事が出來るやうになつてゐる。」

一方では又、ソヰエート政府として利權の讓渡は、相手方の國內に在るプロレタリア階級に生產勞働の機會を與へるのが一面の目的でもあるからして、今度の島徳の如く、事實出漁の期を逃し、多數の人々を失業苦に陷らしめる如き不德を働くに於ては、斷然以後に於ての入札參加を取消し、場合によつては契約期間中でも契約解除を請求するかも知れんといふ說もある。が今日までのソヰエート政府としては、日魯漁業の三割配當などにかなり苦々しい感情を覺えてゐたらしく、そこでこ丶の處は、たゞ冷靜に觀望中であるのだといふ觀方が多分は一番正しいのであらう。イズヴエスチヤの紙上を見ると、次のやうに論じられてゐる。

「この問題は單に日本內部の資本家的紛爭であつて、國際的には何等わが聯邦と無關係である。原因は、日魯漁業が日本人同志間の對抗競爭を恐れて、漁場競賣の破棄を企てたによるものである事が、今に至つて全く明白にされたが、この事實を以てしても、一九二八年締結の日露新條約の條件が、いかに彼等日本漁業資本家にとつて有利であるかを察する事が出來るであらう。」

この間に在つて、ソヰエート政府自身の態度は、國營漁區經營の發展に努力することに在るらしい。就中二十二區を占有するア・コーシヤなる名稱の國營會社などは、米國へ五隻の汽船購入を註文したり、幾つかの加工々場の新設を計畫したりして、頻りに活潑な處を見せてゐるが、傳へられた處によれば、日魯に向けて、會社所有の設備一切の讓渡方を申込んで來たといふ事でもある。日魯としては見縊られた話でもあり、憤慨もしたであらうが、しかしこれに依つて見ても、充分彼等の意氣込みが察しらるるではなからうか。

が、それはそれとして、忘れてはならぬ問題がある、筆者は

こゝで筆を本道に戻して、再び問はなければならない。——あのオホーツク海沿岸一帶に亙る大漁群は、一體、誰のものであるのか？

島德のものか？　堤のものか？　それとも？

こゝに二萬五千の漁業勞働者がゐるのである。その內の一萬五千以上が、彼等のその泥合戰のために、目前に魚群を望みながら、空しく安閑と手を拱き、徒らに小樽函館の埠頭に立つて足摺りしながら襲ひかゝる失業苦の不安に脅えつゝあるのである。しかもその背後には彼等の家族の十萬がゐる。

あゝ、あの魚群は彼等のものではないのであるか？

△

流石に要路のお歷々も、今になつて漸やくこれらの人々の存在を知つたらしい。如何にして彼等を救濟すべきか？　しかし救濟とは何であるか？　誰が一體救濟せねばならぬやうな事情にまで彼等を陷入れたのか？

不幸にしてわが日本には、勞働者が資本家に對抗して戰ふ場合、これを彈壓する法律は存在しても、資本家が己の利慾のために勞働者の職場を閉鎖した場合、これを處罰する條項は規定されてゐない。しかも更にわが武士道の國日本に於ては、一資本家のために日夜を奔走する大臣があり代議士があり實業家があつても、この二萬五千の勞働のために代辯する彼等の一人も住んではゐない。彼等はたゞ口々に資本家の無情を口に呟きながら、終日波頭の碎けるのを眺めてゐるのみであらう。

不幸にして彼等のすべてが未組織自由勞働者なのである。彼等の一半は一年の生計をその四ヶ月の漁期に賴り、その餘を僅かな工場勞働によつて補ふものであるが、殘る大半は主として東北沿岸の農民が、農家窮乏の經濟を救はんがために、目前に迫る農繁期を家族の手に托して、怒濤の中に生死を賭けんものと集つて來たものである。しかもなほ封建時代的なボスの受負制度の下にあつて、全然奴隷の如き虐使にも甘んじなければならない。

一漁期約三ヶ月乃至四ヶ月、それを通じて平均百八十圓程度の契約である。この外に九一制度といふのがあり、十尾の收穫に對して一尾の步合報酬といふ事になつてはゐるが、これが到底その通りに行はれてゐるものでないといふ事は、少しく事情を知るものにとつては察する事が出來るであらう。しかも赴く先は極北の夏である。太陽は不斷に沈むことなくして、つねに果てなき夜であり、果てなき朝である。北歐前代の詩人が讃えた惱ましき戀の白夜（ベーラヤノーチ）も、彼等にとつては苛酷なる勞働の連

結を強ひる外の何物でもないであらう。――この彼等の生活については雜誌「戰旗」の誌上小林多喜二君が「蟹工船」と題して丹念な描寫をしてゐるが、しかし筆者は次の言葉を、昭和二年八月廿日の東京朝日新聞夕刊の記事より抽いて置く。

「ペトロパウスクを經てウスカムまで、東西の海岸を視察して來たが、漁夫の生活には哀れなものがあつた。」

極北の邦人漁區を廻つて歸つて來た野口侍從の言葉である。

がこの酷使と窮乏に堪えてまでも、彼等にとつては必死的な收入唯一の道なのではないか。それが今や中央の首都、堂々たるビルディング街の一角に當つて行はれた醜怪なる泥合戰によつて途絶されつゝある！

△

こゝまで書いて來ると、今朝の新聞紙が、問題の解決について曙光が見えはじめた如く傳へてゐる。――では彼等も亦漸やくに、己れが邪惡に振返つて來たといふのか？　否！　此處では三千度も繰返して否と怒鳴らなければならない。

消息通が傳へる處を記さう。

島德、乾の最初からの考へでは、[illegible]日魯系の漁區を全部に亙つて奪取するつもりであつた。到底あの會社が自立出來な

いまでに叩き潰す。中山や宇田からの報告によつて兩人ともそれが可能であると信じてゐたらしい。處が實際では、まだく日魯の方に九十幾ヶ所かの漁區が殘つてゐる。もし緊縮的な方針をさへ採るならば、それだけで會社の存續は出來るらしい。で折角の目算が外れた處から、先づ乾が憤慨して出資を斷はると言ひはじめた。つまりは仲間割れが始まつたのである。かうなるとさて日魯の方に勝味があつて島德の方に歩が弱い。

島德の事はさて置くとしても、乾新兵衞だけは見殺しに出來ぬ義理の男がこゝに一人ゐる。それは誰か？　名を祕してゐすぐおれと知れるであらうが、その男がそこで今度は立上つて、かう言ひ始めたからだといふのである。

「おい！　これは國家のために、早く解決せんと不可ん！　萬事はおらがえゝやうにしてやるで！」

詳しく書かうものなら、正に一篇浩翰なる小說ともなるであらう。以上はたゞ事實の記述に過ぎないが、終りに臨んで筆者は三度び繰返して借問しやう。

オホーツク海一帶。あの大魚群は、抑も誰のものなのか？

新聞懺悔

太田正孝

一

書き續けるべき豫定で筆を切つておきましたが、やつぱり締切期日にならないと氣が乘つて來ません。先達鶴見祐輔君と落ち合つたとき、「盛んに書きますネ」と申したところ、——「自分は毎日何かと書く、小説——といふより感想に近いと本人が註される——も書く、エッチ・ジイ・ウエルスなども、日課のやうに筆を執つて書かれるさうだ、自分もたゞ書くので、それが尻切りトンボにならうと、また雜誌などに載らうと載るまいとは問題でありません。たゞ書くのにすぎない。」——と答へられました。さうすると、その席にゐた岡本一平君が、すかさず「それぢやクシヤミをするやうなものですネ」と、寸鐵を打ち込みました。しかし私には鶴見君のやうには出來ません。もと／＼私の筆の運びが遲いからでもありませう。いつぞや蘇峰先生と大森からの電車のなかで一つしよになつたとき、「あなたや下村さんは良く書きますネ」といはれたことがあります。——飛んでもない、私は下村さんのやうには書けません。宴會の席でも、つまらないスピーチでもするものがあると、手際よく食卓の隅なり下なりにハガキを忍ばせて、一筆まゐらせるといふ健筆師海南博士のやうにはゆきません。もちろん、何といつても、速さにおいても量においても、新聞界に蘇峰先生におよぶものはありますまい。これから先きも彼に比べるものは出ないかも知れません。達人です。新聞人としての蘇峰先生は、昨年私が外遊するまへに、私が少しでも新聞界を遠ざかるのは寂しいといはれ、行く先き／＼で繪ハガキを送つてくれとのことでした。輪轉機の廻る騷しい音を聞きつゝ書くのを樂しみとし

てゐる老新聞人は、數ならぬ私ごときものまで、書く人として賑かでありたいといふのは、如何にもうれしいではありませんか。それはさておいて、私が締切時間にならねば筆をとらないといふのは、記者たるものは問題にぶつかるまで打つちやつておいてよいといふのではありません。いふまでもなく、用意して持ち越した文章には、『時』の味が出ません。私が、續きものとして拙ない『町人諭吉』を書きましたときも、筆にするのは史上人格者ですが、やつぱりその日〳〵の氣分を打ち込むやうにと心掛け、旅行先きまでもさうして來たのです。もちろん、記者は常に知識を貯へるやうに勉強し、その時になつて、その時の氣分で、その時の空氣のうちで書かないと、第一讀者がついて來ません。これが著述などとちがふところでせう。しかし私は、勉強もせず、たゞその時〳〵に筆を執つて來た過去をおもふと、耻ぢます。悔ひます。このことは、新聞事業をやつてゐるうへにおいて、いろ〳〵主催される會合などに臨んでお話し——講演するやうなときも同じです。永井柳太郎君などは、前もつて草稿を充分練つてから演壇に立たれるとのことです。また、さうあるべきですが、新聞人としては、そこにも『時』に對應する新聞眼をもつてしないといかないやうです。テーブルスピーチも、さうです。そこへゆくと、やつぱり蘇峰先生や楚人冠は手に入つたものです。私には、口を働かす新聞人としても怪我の功名をしたぐらゐの思ひ出しかありません。最近では、昨年の冬大阪で福田徳三博士と金解禁問題について講演したときのことですが、それを一寸書かせていたゞきます。當夜は三人の講演で、福田博士は夜行で來てつかれてゐるからといふので、當然眞打ちをすべき順序をかへて、私より先きにやられることになつたのです。お話しは例によつてうまいものです。強ひていへば講演の筋を運ぶのに聽くものゝ助けとなることの少ないではないかと思はれる原語を出されることが少し多すぎたやうですが、ともかくも聞きほれました。しかし、三人で一時間か一時間半と割り當てらるべきものを二時間以上もやられ、十時を過ぎるやうになつたので、私は、ジレ出しました。カンシャクも出ました。やつと濟みましたのは、十時三十分ではありませんか。私は腹を立て、『もうシャべらない、福田さんのいはれた以上には、たいしていふことはない』と、頑張りました。——それには、會の幹事の方も困られたやうです。が、結局は一寸顏を出すといふことで折れ合つて、私は壇上の人となつたのです。このとき聽衆はと見れば、長講演と寒さと、モウ一つの必要——小便のために立ちかけてゐるではありませんか。氣の毒です。それを思ひやつた私は、『これから說かうとする金解禁

問題、わけて何時解禁すべきかといふ問題は、丁度諸君が小便したくてたまらず待ちこらへてゐるといふ氣分と同じです』とやつたものです。さうすると割れるやうな喝采です。小便をこらへて手を叩いてゐます。私は調子に乘つて、それからそれへと小便眞理を三四十分ばかり金解禁問題に引つけて説きました。やつぱり新聞人だといはれました。——とにかく新聞人は、その思ひを筆に乘せて書くときと、口を開いて談ずるときとを問はず、『時』についての對應性をもつことが必要であるとおもひます。しかし、何といつても平素の勉強が最も大切です。私が耻ぢるばかりでなく、一般に現代の記者は勉強が足りないではないでせうか。尤も勉強と申しても、專門的學者になれといふのではありません。——この意味において、お互は、いつでも川意された蒸氣ポンプのやうに、またいつでも火を點じ得る乾いたマッチのやうにありたいものです。

二

私は、いま記者根性を書いてゐますが、實はいまゝで書いた以上に、もつとスッパぬけといふ註文を受けました。それは主として筆を執る人たちからですが、殘念ながら、すでに記者たる人たちに向つてスッパぬくべきほどの良い材料を持ち合せません。たゞ新聞に興味なり利害をもつ一般の人たちからは、あんなことでも面白いといはれます。それにしても、私はこゝに筆の人と經營の人との關係をハッキリしておかねばなりません。新聞を作る人と新聞を賣る人との關係です。それが私の立場を明かにする所以であり、かつみづからの足らざるを悔ゆる點ともなるからです。

このことについて、最近世間の注目をひいたのは、蘇峰先生が國民新聞を退社されたといふ事實です。私は、彼の『予は何故に國民新聞を去りたる乎』といふ文章——蘇峰先生慰勞のために開かれた席上で話されたもの——を讀んで、とくに筆の人としての彼の心情を知ることが出來たのです。私たちは、彼が筆力において現代第一人者たることは、よく知つてゐます。しかし、彼の筆が、その心の命ずるがまゝに正しく進んでゐたかどうかといふことについては、世間も疑ひもし攻擊もしたものであり、彼みづからもそれを知つてゐたやうですが、大膽率直な彼の告白を讀むに至つて、はじめて、藩閥政府打倒のことから、對露強硬外交策のことから、對世界政策と桂との關係などに至るまで、なるほどと納得される點が少なくありませんでした。しかし彼は筆の人です。筆の人として、『新聞を作らうとして新聞を作つた』人です。しかも新聞を一つの事業として見るとき

に、その營業上の方面――狹い意味の經濟――については、代表者であり社長となつてゐましたが、少なくとも近年は力を入れられなかつたやうに思はれます。國民新聞創立當時の金のなかつたこと、その以後とても『金錢の不自由』であつたことは自白されるとほりでせう。筆陣第一主義の彼は、日露戰爭後の有名な燒打ちにあつたときも、營業の人たちから、『貴下は實に困つた人である。折角此處までやればまた元に戾してしまふ。貴下はまるで賽の河原の石積同樣である。漸く千辛萬苦して積み上ぐれば、また元の杢阿彌だ。これではとてもやりきれぬ』と訴へられても、みづからは『決して新聞の營業者ではなく、新聞を以て國家に貢獻せんとした者でありますから、何と云はれても致し方なかつたのであります』といはれてゐる。何たる果報者でせう。これではやりきれぬとなげく人たちを下積みとして、理想のために筆を進ますことの出來たのは、彼れ自身社長であり實權を握つてゐたからです。たゞ筆一本で働いてゐる記者では望んでも出來ることでなく、そんなことするまへに首をハネられてゐるのが、いまの世のならはしと思ふと、當時の蘇峰先生は、うらやまれてよい人です。『ソロバンを知らない筆の人たることを自認自重された彼は、震災後資本家を求める必要に迫られて、絲をおろして釣つたのが根津嘉一郎氏です。

その金の人である根津氏から、彼の筆に對してかれこれいはれ『筆致の不自由と不安心の爲め、』『新聞道のために、』『言論自由を擁護』せんことを重なる理由の一つとして、つひに四十年も住みなれ、みづからの手にかけて育てあげた巢から出たといふのです。私は、こゝに二人の泥仕合を想像したり論評したりする『惡趣味』をもちません。たゞ筆の人と金の人との相調和すべきものであるか、筆の力に絕對の力をおくべきものであるか、それとも營業第一主義でやつてゆくべきものであるかといふ命題を解きたいのです。それは古から議論のある、しかもつねに新しい問題です。この點については、私みづからも、いさゝかこの兩方面のことをのぞいて見ましたがゆゑに、それがこれから先きにも起るべき問題なるがゆゑに、それを考察することは無益でないとおもふのです。尤も蘇峰先生は、東京每日新聞の島田三郎氏や日本新聞の陸實氏(この點では、萬朝報の黑岩淚香氏や時事新報の福澤諭吉翁も加ふべきでせう)とゝもに經營一元の實行者であり、日本においては、『その後を絕つた』ではないかといはれてゐます。あの文章のなかには、いはゆる狹義の營業眼からする經營については述べてゐられないが、新聞としての積極策、とくにその編輯眼からする意見には、うなづかれる點があります。彼のいふ如く、いたづらに經費を節減し、まる

で鰹節を削るが如く、唯だ細くなつて行く』ことが、もし事實であるとしたならば、無職兩であり、同情すべきことであると信じます。ことに大阪系新聞に對抗する意味からも、考へねばならぬことゝ思ひます。もちろん、私は國民新聞の經營の實際を確めて、それを是非しようといふのではありません。たゞ、私自身の見るところをもつてすれば、新聞の事情に通じない素人や實業家畑の人たちは、たゞ計數のみをニラミ、編輯の作用するところを知らず、手をつけては整理するに從つて、肺病やみの細るやうになつてゆくことは、隨分ソコラに例を求め得るでせう。――醵つて金を出した根津氏にも經營上の權利があるものとすれば、問題はやゝこしくなるわけです。根津氏が大阪で廣告關係者を招いた席上において、德富氏の痛烈な言辭に對して逆襲されたものの――『新聞之新聞』第千二百九號にかゝげられたものを見まするど、私たちに實益のない泥の部分は拔きにして、なかなかに耳を傾くべき點があります。すなはち、『諸君考へても御覽なさい、新聞なるものゝ生命は何處にありますか、新聞發行の目的は何處にありますか、言論と報道が新聞の生命であり發行の目的ではありませんか、筆政上に何等の權能なくただ默つて金を出すだけの經營者といふものが世の中にありませうか』とあるのが問題となるのです。此二人に關しては穩かでありません。けれども、私はそれが拗く必要はありません。たゞ冷やかに、筆の人と金の人との調和問題について說き、併せて過ぎにし日のみづからに鞭打てばよいのです。

三

いふまでもなく、筆の力と金の力との二元を一手に收めて、うまく一致さして、新聞を思ふざま伸ばしてゆけば、結構至極です。さういふことの出來る理想の人は廣い世界の新聞界に、多くは見當りません。やつぱり求めて見れば、さきの日のノースクリッフぐらゐなものでせう。彼は筆の力もすぐれており、營業の實體をリードし得たとおもはれるからです。彼は隨分思ひ切つて自己の主宰する新聞に統制力をあらはし、專制的といつてよいほどに振る舞つたやうです。彼の略名アルフ(本名アルフレッド・ハームスウオス)の稱が恐ろしい響きとなつたのは、經營一元の實行者であつたからでせう。その對內關係としては、パリー平和會議のとき、彼によつて罷免された――しかも各紙から特派されて來てゐるほどの優秀な記者が五十名あまりもあつたといふことをもつても知られるし、その對外關係としてはロイドジョウジ氏をして今日のやうな悲境にまで叩き落し得たことによつても知られます。しかし、かやうな人は少ないです。

否、大體において各國の新聞事業は資力關係もしくは營業關係に引づられてゐるものが多いではないかとおもひます。アメリカの新聞のやうに、實業界――とくに出資者もしくは廣告利用者に左右せられることが多く、極端に筆の自由を奪はれることになるのは、新聞本來の性質にかへりみて、良い傾向ではありません。アンプトン・シンクレアの書かれたブラッス・チェックにあるやうになつては困ります。わが國ではそれほどではありませんが、新聞の經營が營業本位に向つてゐることは事實です。朝日毎日の二大新聞經營者たる村山、本山兩氏が營業に主力を置く人たちであり、本山氏の如きは、年來新聞商品主義をみづから高唱してゐるほどです。傳へられるところによれば、記者をして株主や大廣告主の利益を害せぬやうに、それぞれ名簿を渡してゐるものもあるとのことですが、眞僞のほどは知りません。とにかく、わけて本山氏は、強い統制力をもつてゐるやうですが、それも營業本位から出發してゐます。尤も彼等は古く新聞界に育ち長く新聞を生命として戰はれて來た人たちですから、筆もつ人の氣分をよく呑み込んでゐます。その點は、ただ金持ちであり偶然新聞事業に頭を突き込んだ人たちとはちがつてゐませう。それにしても問題は筆と金との調和にあります。世間の人たちから、よく新聞を良くするやうにとか、新聞を倫理化するようにといふことが要求されますが、それには第一に記者の物質生活をよくしなければならず、それには必然的に新聞を營業上から上手にまかなつてゆかねばならぬことになります。また實際において大新聞に屬する記者が、その素質において割合によいのは、その給與關係によつてゐるといふことも、おもはねばなりません。從つて、營業關係が悪るく、記者の給與が充分でなく、いはゆる昔の羽織ゴロ時代と同じやりくちをしてゐる新聞人は排さねばなりません。さりとて筆もつ人たちを營利一點ばりで壓迫することはよくありません。主筆が勢力をもち、社說で世のなかを動かすといふやうなことは、アメリカ式の新聞編輯が勢力を得てニユウス本位となるとともに、次第に影がうすくなつたやうですが、もと〳〵新聞は社會の公器であるといふ立場から、何とか筆と筆の人とを保護すべきではないでせうか。まして、いはゆる新聞の賣買が、ただ當事者間においてソロバンを彈ちいて行はれ、朝たに甲の經營者の命により動き、夕べに乙の經營者の意を迎へる――然らずんば失業するといふ――ことの社會の公器であり、讀者團體により支持されてゐるといふ意味において、避くべきことであるからです。この意味において、千九百二十年二月十一日に作られたオーストリアの新聞記者法や、千九百二十六年一月九日附で新聞業組主

協會と新聞協會との間に結ばれたドイツの勞働協約は、記者の良心を保護してゐるものとして、私たちは充分研究しなければならぬことゝ思ひます。蘇峰先生は、拙づい釣をされたといはれます。事實は知りません。しかし、退社する際に新聞自由のために投げられた石は、新聞人にとつては考へさせる問題を殘されたものとして、却つてこれを多としなければなりません。

しかし私は金の力なり營業關係なりを輕ずることは、よくないと思ひます。この點で根津氏の考へてゐることも汲んでやるべきではないかとおもひます。もちろん金さへ出せば何でも支配力をもつといふことは——おそらく多くの實業家の考へるところであらうとおもひますが——根津氏は實際にはそれほどまでにしなかつたといはれますが、——くれ〴〵も考へていただきたいのです。もちろん、新聞事業に資本的利用の少なからざる部分があり、これには、是非資本家の力を要します。たゞ、ドイツの新聞協會長クルムハール氏のいはれたやうに、新聞に對する言論の壓迫がある個人から來るものであるといふことのないやうに、愼んでもらひたいとおもひます。結局、筆と金とは水と油です。立て前がちがひます。しかも、互に敬して近づくべきか、主力を營業において筆の自由をなるべく認めるといふのが、資本的競爭主義の現代ではやむを得ぬことかと思ひます。

それにしても私は、記者の領分と營業の領分と相當に覗いてみたにかゝはらず、誇り得るほどのことも致しませんでした。考へると、記者諸君に對して時々無理な營業上からの註文をしたこともあります。たゞ私がこゝに批判を願ひたいのは、資本力に無理がなく、かつその片寄るのを防ぎたいことゝ、思ひ設けない資本的の移動によつて、社員の身が知らぬ資本家のために左右されることの危險を防ぎたいために一つの試みをしたことです。その試みを行つたのは、報知新聞が組合組織を株式會社組織に改めたときのことです。私は第一に、資本の見積りをなるべく少なくしました。これは後でも申す機會があるかも知れませんが、新聞事業はもと〳〵一般の營利事業ともちがつてゐますし、これを多く見積るやうなことをすると、自然配當關係などにおいて無理をすることになるからです。よく新聞の資產を評價するときに、新聞評價を計上することがあります。もとより、いはゆるシニセ料として相當額を見積ることもよいでせう。何となれば新聞一部を擴張——すなはち安定した一人の讀者を得るのには五圓もかゝるからです。すなはち、百萬部の發賣部數をもつてゐる新聞は、五百萬圓の新聞評價もしくは營業權をもつてゐるとも見られ得るからです。けれども私は、さういふ額を見込みませんでした。小心です。堅いです。無理な

經營をすべきものでないからです。そして資本金は全額拂込みの百十萬圓としたにすぎないといへば、大體私の根性を知つていただけるだらうとおもひます。このことをかつて松本烝治博士に申したところ、その額の餘りに少ないのに驚かれたのです。それにつけても私は、一般の事業界においても、隨分資本家根性で評價に過ぎた形成資本があつて、事業の經營に無理をしてゐることを面白くないことゝしてゐます。第二に私は、その資本の內十萬圓を社員に分けることにしました。當時職制は事務上から編輯と營業と總務と工務といふ四つの局に分れてゐましたから、各局にもたすことにしたのです。それには一定の比率によつて分配し、いやしくも社員となつたものはその日から株主たる權利を得——反對に退社すれば同時にその權利を失はしめることにしたのです。それを『局持株（きよくもちかぶ）』と名づけました。つまり、その局その局の代表者が株主總會に出て、經營に對して發言し參加せしめることが道理であると考へたからです。たゞし、分けらるべき額は總額にして十萬圓にすぎず、從つて到底投票權を爭ふほどの力はありません。しかし、全く新しい工夫ではありませんか。また、その配當はどうするかといふと、それは各局に分配されて、それが忘年の宴會費として飲み盡くされようと、その他の費途に向けやうとは各局の自由にしてゐるのです。第三に私は、一人の株の持分は、資本總額の五分の一を越してはならぬといふことに定めたのです。それは資本家たる一人の力によつて大多數の株を買ひ〆めて自由に資本的移動をなさしめないやうにといふ考へからです。つまり最大限度の株を有するものが三人以上に合同するのでなければ會社を動かすことが出來ないといふことにしたのです。さうしておけば、社員の意思に無頓着に新聞を賣り渡すやうなことが——やらうとすれば出來ないことはありませんが——むづかしいことになるからです。——まア、それくらゐのものです。とてもノースクリッフのやうな强氣のことは出來ず、およばぬ理想としておくにすぎません。

四

さきにも述べたやうに、新聞に筆の力と金の力の作用することについて、前者が後者によつて引づられてゐるといふことは幸か不幸か、現代日本の新聞界における事實であり、否世界を通じての大勢といつてもよいでせう。いはば新聞資本主義の發現です。蘇峰先生は、新聞に資本主義の働きかける惡作用を認められてゐますが、おそらく、それは記者眼をもつてしましたならば、そして新聞經營の內幕を知つたならば、誰れでも同じ

やうに感ずることであらうとおもひます。一體資本家が新聞事業に金を出さうといふときには、實在財産として機械をながめ土地家屋を値ぶみし、しかもなかく\手許の金を離さうとしません。出すにしても、危險性をおもつて一部を貸金にして、それから高い利子をとるといふやうなことは、彼等としては當然のことゝ考へてゐるのです。おそらく新聞に投資したものが、さらに融通金を出してゐるといふときに同樣な方法でカセイでゐないものはないでせう。否、いはゆる大新聞の出資者の利益が、さういふ方面から出る——記者からみると搾取せられるやうに感ずるものがあるでせう。總じて新しい記者の氣分から申せば、資本主義の横暴を叩きたいものですが、いづくんぞ知らん新聞が大きくなればなるほど、資本主義が強く振る舞はれてゐるのです。それから生れる利益の一部分を賞與の形でありがたがつてゐるより外ないのです。また、その資本の力が、如何にも統制力のあるやうに見せてゐるのです。しかも新聞資本主義を認めるのでなければ——營業主力主義でゆくのでなければそれが記者の經常收入としての給料なり臨時收入としての賞與としてうるほふのでなければ、記者生活の安定向上——引いては新聞倫理化が實現されないのです。衣食足るところに、倫理化があるといふことは事實です。これは廣く世界的事實であるといつても過言ではありますまい。

翻つて讀者眼からしますと、どうも日本には新聞の數が多くて困るといふことを聞きます。いはば教科書のやうに一つの確かな報道機關があれば、ありがたいといふのです。また、廣告を出すうへにも、助かるといふのです。さうするためには、理想として國家の機關によつて編輯し、これを專賣せしむるといふことに落ち付くでせう。ロシアとかイタリーとかスペインの新聞統制の如きは、その一端とも見られますが、それが果して新聞本來の使命を達してゐるでせうか。ある主義を吹き込むためとか、反對思想を壓迫するためとかいふごとき特殊の目的のためにすることは、新聞本來の使命とはなりません。さなきだに役人根性をもつた人たちによつて、時を爭ふ仕事が出來ますか。時を爭ふがゆゑに、新聞の便があるのです。時を爭ふがゆゑに間違ひが多いから新聞を排せよといふのは、一時に生活しない人たちの批難です。世界は廣いです。政治も經濟も走り廻つてゐるときに、仙人むきの官報に類する報道が何になりますか。もちろん、かく申せばとて、虛報をしても構はぬといふのではありません。かやうな意味において新聞の私營が原則であり道理であるといふことになります。すでに私營主義が原則となりますれば、いろ〳〵な事業における傾向の如く、資本主義

のおもむくところは、新聞の合同に向はしめるでせうか。なるほどヨーロッパやアメリカにおいて、新聞の合同經營の傾向が現はれてゐることは、何人もみとむるところでせう。あるひはアメリカにおけるハースト系の新聞のグループとか、イギリスにおけるノースクリッフ系の新聞のグループとか、ドイツにおけるスチンネス系のグループとか、やがて手を擴げるではないかとおもはれるフランスのコッテイ系の新聞などがあります。それならば、かうした傾向がわが國にも現はれるでせうか。また現はれることが新聞界のためによいことでせうか。考へさせる問題です。おもふに人さまぐ\の氣分と理解と利益とあるからには、そのいづれにも向く新聞をつくることはむづかしく、販賣部數を增して偉大な勢力をもつ新聞は出來ましても、數多き小新聞をたほし得るものではないかと信じます。丁度二大政黨に勢力が分れるものとしますれば、政治をやる人たちからいへば、甲から乙へキャッチボールでもするやうに政權の動くことをのぞむにちがひありません。けれどもお互の利益を鏡にうつすところに立憲政治運用上の理想があるとしますれば、百人の利益が百種でなくとも數種に分たれるところに、小黨の分化があるわけです。ドイツの政黨がそれです。さらに普通選擧制とともに說かれる比例代表制も、次第に小黨の勢力が芽生へするやうな結果を生んでゐるではありませんか。また、わが國における社會民衆黨などの新興勢力も、いまゝで陰されてゐた國民の利益が表現されることになつたものと見るべきではないでせうか。尤も、この點においては、わが國の新聞は、地方紙は別として、政治上の色彩をもつことを避けてゐるものが多いのですから、この點からする新聞の合同はないでせう。また經濟上社會上の關係においてはどうであるかといふと、これまた二つなり三つなり乃至は五つなりに經營上のグループをつくることはむづかしいではないでせうか。四五の新聞が次第に勢力を得つつあることは事實ですが、これがさらに、他紙を買收擴張してゆくことになるでせうか。この點について難點となるのは地方新聞の地位です。同時に大新聞の發行してゐる地方版の關係です。いまのいはゆる東京大阪の大新聞といはるゝものも、その發行部數の少なからざるものが、各地の材料を特別に編輯してゐる地方版を載せたものによつて占められてゐるではありませんか。中には地方に分布されるものが半數以上におよんでゐるものもあるとおもひます。かういふ新聞がその地方で固有に出してゐる新聞を合同經營することになれば、本來の新聞の發行部數――廣告力などに響かないでせうか。もとより合同經營によつて、人的經費においても物的經費においても節減整理され

る利益はあるでせうが、たとひソロバンに合ふとしても、大新聞の勢力の殺がれることは難點であると申さねばなりません。しかも、日本の地方新聞は、アメリカやヨーロッパのそれとはその存在および發展の基礎を異にしてゐます。もとより名古屋とか仙臺とか札幌とか福岡などのやうに近來めき〳〵地方新聞の勢力を增しつゝあるものも見受けますが、何といつても、その地方固有の經濟力が弱いのです。廣告力が乏しいのです。維持發達せしめる原動的資力が少ないのです。それさへうまくゆけば、地方紙はもつと發達すべきでせうが、さうゆかない原因は、そこにあるのです。かういふ見解のもとに、私は、非常に遠い將來のことは知らず、近い將來において、新聞合同の氣運がわが國に實現されるやうにはおもひません。もちろん交通機關なり通信機關なりの發達が異常であつて、新聞製作のコストが非常に少なくなるか、地方の經濟力と廣告力とが異常に增加してくれば、それは別問題です。たゞ、かうしてゐる間に、東京大阪の大新聞が、その資本力を働かして、その販賣部數を增し勢力を增すであらうといふことは申されませう。それにしても、東京新聞について見ましても、かつて榮えたものゝ衰へつゝあるものもありますが、なか〳〵その影をかくしてしまひません。それさへあるに、形ばかりの保證金だけを定めてゐる新聞紙法のもとには、新聞を發行することが容易であるため、その數は却つて增してゐるではないでせうか。もちろん『新聞』といふ文字だけで斷ずることは出來ませんが、老人などに聞いてみても、新聞らしい名をもつてゐるものは、過去三四十年來十五から十七で、ほとんど增減がないといふのは、私の上述せるところを裏書きするものではないでせうか。——また、とかく新聞が勢力を增すにつれて橫暴にながれ、ときには、不當不正な競爭をして他紙を壓迫することは、先年時事新報に對してなされた事實を以ても知ることが出來ます。記事による斬り捨て御免をやる大新聞の惡るいことは申すまでもありません。また善良なる廣告主を壓迫することもいけません。この意味において、ヨーロッパ戰爭においてベルギィの如き小國が正義の旗の下に勇ましくも働いたといふロイドジョウジの言葉のやうに、また、橫暴なデパートメントストアに對する正直な小賣店のやうに、いはゆる小新聞の存在が、正義のために形式上の大新聞に對して働かれることに價をもつてもらひたいとおもふのです。けれども、何といつても、小新聞は、その通信網や販賣網や廣告網において大新聞にかなひ得ませんから、結局は第一戰に立つ數箇の大新聞があり、それが新聞正義のために互に是正しあつてゆく程度で進むより外ありますまい。大阪系の二大新

聞のみで新聞界を占領するといふことは、考へものです。かういふ意味で私も、相當闘ひつとめて來ましたが、如何にも微力でした。悔ひてゐます。よく東京新聞に對して大阪新聞の發展のすばらしいことと、何となく壓迫を感ぜられることに對して東京系新聞の發展をのぞむといふことを聞きますが、それは、横暴な資本力の伸びてゆくことがいけないといふ意味においてのみ正しいことです。私は、こゝに大阪系新聞の時事新報に對する壓迫事件を批判してみたいのですが、遠慮します。たゞ戰ひは正々堂々としてほしいといふことを大新聞のいづれにものぞんでおくにとゞめておきます。

五

私は、大新聞は益々榮えるものとし、新聞の數は増しこそすれ、近い將來に減ずるものでないことを申しました。こゝまで來ると、前號に申した新聞マルサシズムへのつなぎが出來るわけです。

× × ×

新聞マルサシズムといふのは、私のつけた名です。讀者において大體想像されますやうに、經濟學者のマルサスが人間の増殖率が食糧の増加率よりも多い――これを調和せしめるものは種々の原因と方法とあるなかにおいて、道徳的制限の必要であるといふことから思ひついたのです。そして同じ題のもとに、大正十四年の夏、輕井澤で開かれた東京朝日新聞社主催の夏期大學でお話したことがあります。――この問題について、本文の讀者は、まづ、新聞購讀の増加率をどの位に見るべきかといふことから考へていたゞきたい。一體新聞といふものは、その本來の使命に基いてつくられてゐるかぎり、――學問の研究に沒頭してゐて日露戰爭の始まつたことも終つたことも一切知らないでゐたといふ學者はいざ知らず、――一般には何人にとつても必要なものです。否、社會人としては、むしろ下級の人たちほど必要なわけです。また社會相を示すものとしては、ラスキンのいはれるやうに、いはゆる社會種のうちに潛む貧乏や救貧の正確な狀況こそ上流もしくは富者に知つてもらひたいものです。とにかく、食べることに次ぐといふより、食べることゝならんで新聞は社會人にとつて必要なものとなつてゐます。この意味において、イギリス人は、すぐれてゐます。新聞といふ――常識養成機關によつて育てられてゐることに負ふことが多いからです。けれども、わが國の現狀に於いては、それが質のうへにおいて如何なる效果をあらはしてゐるかといふことを別として、量のうへにおいて、どのくらゐ行き渡つてゐるでせう

か。新聞社では讀者を増すために、あらゆる努力をしてゐます。とくに都會において甚しいです。新聞購讀の勸誘は靜な家庭生活をしてゐるものにとつては、うるさいほどです。乞食は追ひやられてホットしましたが、新聞は文明の利器であるといふ名目で、隨分思ひ切つた購讀の押しつけをしてゐるといふことは一般に認められてゐるところです。そのことの新聞社側において改めねばならぬもの、あることは別として、一體、どの位の階級の人から新聞を購讀する力があるでせうか。食料費住宅費と經濟上の生活必要費かち推してゆくと、都會と田舍とでもちがひ、趣味のためとか職業關係によつてもちがひますが、大體貧乏線以上の階級――もし達觀することがゆるされるならば、六七十圓ぐらゐの月額所得者以上のものではないでせうか。一體、日本の人には、大正九年の國勢調査によると內地朝鮮樺太を合せて七千六百九十八萬餘人であつて、いまは八千萬人を越してゐるかと思ひます。そして、新聞購讀といふやうな點から見るには、世帶數から見るべきでせうが、それは大正九年に千五百二十三萬餘あつたのですから、いまは千六百萬餘になつてゐるではないかと思ひます。そして、このうちどのくらゐが新聞購讀者階級に屬してゐるかは、分りません。現行法のもとにおける第三種所得稅を納めるものは、上述の標準よりズット高いのですが、昭和二年度において百萬二千餘人しかなく、改正前の大正十四年度においても百八十九萬八千餘人にすぎないのですから、標準にもなりません。この點についても私の達觀がゆるされるものとしますれば、右の世帶數の半分すなはち八百萬見當と見たらばよいかとおもひます。もとより讀書力とか讀者の風習は、內地と朝鮮と臺灣と滿洲とそれ〲にちがひますし、內地でも東京大阪名古屋京都神戶橫濱などは特に購讀者が多く、地方でも長野縣の如く讀書力の進んでゐるものもあるし北海道東北地方の如き冬期の讀書が習性となつてゐるものもあります。が、こゝには平均して考へるより外ありますまい。假りに八百萬世帶の購買可能のものがあるとして、どのくらゐ新聞は供給されてゐるのでせうか。新聞社みづからは、聞かれたり見に來る人たちに對し、また廣告を出す人たちに對し、發行部數の大いことの宣傳を怠りません。いふまでもなくそれは、實際の發行部數より可成り多いのです。その證據には、各新聞社のいふがまゝの數字を正直に書きとつて寄せ上げてゆきますれば、非常な數になり、それは內地における製紙高よりも――もし輸入紙があるとすればそれも加へて――必ず多くなるからです。つまり無い紙を發行發賣してゐることにしなければ、辻褄が合はないことになります。わが國にはアメリカなどに見る

やうな、發行部數の信頼すべき調査機關がありませんから、内地の製紙高を標準として調べてみるより外には方法もありません。いまこゝに大正二年以來の製紙高と、その販賣高とをかゝげてみます。單位はポンドです。

年度	抄造高	販賣高
大正二年	二二五、九五三、一一七	一二八、五七三、六九〇
三年	一五二、六二四、六四八	一五〇、五五五、五三九
四年	一七〇、七六五、〇五七	一七二、三三九、五三一
五年	一八一、二七〇、九二三	一八〇、三二七、七八六
六年	一九八、七九三、二八五	二〇〇、四三八、八〇八
七年	二〇七、〇四一、〇九一	二三五、三六四、一〇九
八年	二三九、七六一、七六二	二三三、九〇九、七三三
九年	二五四、七七七、一六三	二四二、三六三、七五五
十年	二七五、一七〇、四二一	二六三、一四八、九二〇
十一年	三〇四、二六一、七四五	三一三、〇三八、五〇七
十二年	三二〇、一四八、〇三八	三二一、八〇三、九〇二
十三年	三五七、九八五、六一八	三六五、四〇四、六九四
十四年	四三九、〇七一、五五〇	四三九、五一六、二〇四
昭和元年	五〇一、八〇三、二九〇	四九八、三九一、五八四
二年	四三八、七五五、六二五	四九五、〇一〇、一一七
三年	五一五、一六一、七〇〇	五一二、五九〇、四二一

これによつて見ますれば、販賣高はヨーロッパ戰爭前の大正三年にくらべて昭和三年度は四倍強の增加になつてゐます。エライ進み方ではありませんか。結構です。この抄造高のうちには、新聞用紙となるものと、更紙として用ゐらるゝものとありますが、その割合は大體八と二の割合であると申しますから――如何に製紙會社が新聞用紙の製造を主力としてゐるかもわかりませう――新聞用紙は販賣高についてみると、昭和三年度はザット四億ポンドと見ればよいでせう。なほ、このうちには支那などへの輸出もありますが、それも高々一割見當であるといはれてゐますから、それを差引きますと三億六七千萬ポンドになります。私たちの聞いてゐるところでは、一ケ月の新聞用紙供給量は八萬六千トン見當であるとのことですから、それをポンドに換算すると年額はやゝ等しいものになります。そこで各新聞の一日のページ數が同じであれば簡單ですが、それが區々になつてゐますので觀察がむづかしくなります。すなはち、東京大阪の新聞の多くは十二ページになつてゐますが、日本全體についてみますと、四ページのものや六ページのものや、八ページのものや、あるひは十四ページのものがあるからです。假りに平均して十ページ述てとして、四十七ポンドの紙を用ゐてゐるものとしますれば、いくらになるでせうか。そのうち印刷の

際破れたり刷り損じしたりするものなどを考へのうちに入れますと、ザット一日六百萬部見當になるかとおもひます。これは上記の假想購讀可能階級の八百萬に對して七割五分になり、總世帶數に對して三割八分になります。なかには一軒で二種以上も購讀せられてゐるものもありませう。また、右の數字は製紙會社から新聞社へ賣られるもの、印刷される高ですが、そのうちには、販賣擴張と申して讀者を得るために見本的に繼續して投入する數も含まれてゐることを注意しなければなりません。それは平均總數の一割から二割見當でありますから、上記の數は、さらにそれだけを減じて見なければなりませんから、彼れこれ今のところ發展開拓し得る餘力は一割餘見當あるではないかとおもはれます。

問題は、かうした新聞の需要——なかには新聞社側より強制されるものもありますが——に對する製紙の供給量如何の問題です。さらにきりつめていへば、製紙の原料となるパルプの蓄積されたものがどのくらゐあるかといふことです。それが無限でなくとも、相當の將來まで確保されてゐますならば問題でありませんが、それが心細いから、新聞マルサシズムが起るのです。現在の消費量は丸太にして五百萬石見當であり、大半は樺太と北海道とから得られ、極めて少量を内地に求め、なほ不足するところをシベリヤから仰いでゐるのです。しかも將來の增加する需要に對しては、内地や北海道に求むることが出來ません。唯一のたのみとするのは樺太だけです。——その樺太における針葉樹の蓄積量も、現在五億八千萬石見當と推定されてゐるにすぎません。たとひ天然更新によつて增加することを計算のうちに入れるにしても、二十年さきはむづかしいといふことになります。ましてや折角の山林が、あつたら毛蟲によつて害せられるものが少なくなく、加ふるに大面積に擴かる山火事によつて灰になるものも少なくないといふにおいておやであります。

もう私の話のネラヒとするものが何であるかといふことの大體の見當がついたでせう。とにかくこれをどうすればよいかといふことは、大きい國家問題です。一般の讀書力は、紙の消費される年額一人當りの量をみると、物質文明萬能の國といはれるアメリカの一割にすぎないといはれてゐます。尤も、よい紙は目方も重いから、その點を考へのうちに入れるとしても、まだ讀書力は增さねばなりません。しかも、一方に用紙の供給量の將來が悲觀されるといふのですから、輸入紙本位にする方針をとるか、新に代用品が發明さるれば格別、否、とにかく用紙をもつたいなく使はぬやう——むだのないやうにしなければな

りません。人口が戰爭や疫病などによつて滅ずることがあるやうに、小さい新聞で競爭上抵抗し得なく倒れるものもありますが、大體においては、さきに申したとほりその傾は極めて少ないのです。そこで、この際道德的に制限する方法があるかといふことを考へてみねばなりません。その第一は、私が前號に縷々申した新聞の型を小さくし、タブロイド型を採用することです。それは記事を增すときにも、讀者を增すときにも、廣告を收容するうへにも、少なからぬ利益があり、用紙のムダを省くうへに助けとなるのです。一ページの段數を增すことも紙幅利用の一方法ですが、それには活字の大きさとの關係もありますから、にはかに斷じ得られません。それから、第二には、新聞社側はよい新聞をつくり、讀者はよく撰り分けるといふことです。尤も如何なる新聞がよいものであるかといふことは、新聞論の出發點であり歸着點でありますが、それはこゝには說きません。また、さういふ意味で資本的に貧弱な——無理な通信網によつてやゝもすると虛報を公けにし、世を害し國をそこなふごときものは、この世のなかに用はない、消えてしまつてほしい、さういふ結果をもたらすための合同なり整理なりは、何人ものぞむところであるとおもひます。

六

筆は、良い新聞の如何といふことにおよびましたが、私は、經營にたづさはつてゐる間に、新聞に對する讀者の喰ひつく見當を間違へたことが少なくありません。いろ／＼の失敗のあるなかに——。

震災のあとで、何とか新しい工夫をして非常時から普通時に移るべく適切な新聞をつくりたいといふことは、同業者の誰もが考へたところでせう。そのとき編輯長は、『ノンキナトウサン』といつたやうな題で漫畫を書かして見たいといはれたのです。私は、反對しました。こんなに國民一般が神經を高め緊張してゐるときに、それは餘りに『弛やかな』——人を馬鹿にするやりくちであると信じたからです。しかし、編輯長は信ずるところが深かつたのでせう。とにかく暫く任してくれと申します。惡るければ早く切りあげるといふことにして、麻生豐に書かすことになつたのです。ところがどうです。世間の評判も素張らしいではありませんか。あるときは笑はせ、またあるときは悲しませます。あはれな人たちに對する同情もよび起します。千言萬語にあらはせぬ含みのある敎訓をも說かれます。最も氣のきいてゐる論文以上です。否、總じて文句の少ない、畫だけで、ク

スツと來るときに漫畫の第一價値が生れるやうです。――私は如何にも編輯長のネラヒがよく、麻生君の筆の運びのおもしろかつたことを思ひ出すとゝもに、當時これに反對したことを恥ぢざるを得ないのです。悔ひます。同じことは、やつぱり編輯長が矢田揷雲君に『江戸から東京へ』を書かせようとしたときにも、私が反對したことです。それは私が入社してから間もないことで、八ページを十ページにするときの特別案で、はじめて家庭面といふもの（報知新聞は從來家庭記事が多いといはれましたが、家庭面として獨立したページをつくつたのは大正九年六月十六日の增ページのときからです。それから各社のこれに倣ふものが出來たのです）をつくつて、そこに入れ、それがまた少なからぬ人氣を買つたのです。そして、これによつていままで隱れてゐた才筆矢田揷雲の文名も一時に高まつたのです。かういふ方面において、編輯局長の高田知一郎は非凡な頭のサエをもつた人であると信じます。同君は、あまり世間に出られませんでした。出ることを好みませんでした。それを難ずる人もありましたが、私は當代に得易からぬエライ新聞人であるとおもひます。彼が新聞の文體を改め、漢字制限を唱へ時代を導く考へをもつてゐたことは、後に述べる機會があることでせう。

また、よくあることですが、新聞記事の材料を供給するといつて、よく相手方の宣傳に乘ぜられることがあります。私の思ひ出は、震災のときにあります。それは大正十二年の九月の末か十月の始めであつたと記憶します。ある日、時の內務大臣後藤新平さんが、田島祕書官を私のところへ遣はされて、鄭重な言葉で一寸官邸まで御足勞を累はしたいといふことでした。――何はともあれ、私は約束の時間に霞ケ關の官邸にまゐりました。それは午後の三時ごろであつたと記憶します。申すまでもなく振れ出しも大きく、また實際それ以上大切なことはない――帝都復興の大問題を控へてゐましたので、新聞記者は、各社とも大勢詰めかけてゐたのです。もちろん、非常時ではあり、整頓されてゐませんので、玄關のところにゴタ〳〵と集まつてゐました。私は二三の知り合ひの顏も見ましたが、スウート勝手知つてゐる奧の方へ消えました。さうすると――たしか玄關脇の廣い部屋へ案內されて待つてゐる間もなく、後藤さんがニコニコしてやつて來ました。二人きりです。そしてドンなお話が出るのかと待つてゐますと、――後藤さんは、みづからいろ〳〵の地圖や設計書を澤山机の上にひろげて、こゝへ橋を架けるの運河をどうするのと――いはゆる後藤さんの大計畫なるものを發表されたのです。計畫は大と中と小と三種類におさめてゐるがといつて、もちろんそのうちの大計畫を細々と示されたので

す。私はかういふ話が出るとは期待してゐなかつたことですから、たゞアッケにとられるばかりです。しかし、スキな道ですから、數字だけは頭のなかに入れて、約一時間半もお話を聞いてかへりました。常時燒け殘つてゐる新聞は二つ三つしかなかつたので、とくに私に大切な祕密を打ちあけられて、そして新聞によつて市民に吹き込むようにしてもらひたいといふ寸法だなと、氣がついたのです。尤も、お話のうちに、後藤さん一流の宣傳に屬するものが少なくないといふことは、編輯の人たちの判斷でした。いはゆるニユウス本來の領分と、然るべき宣傳と然るべからざる――「提灯」といはれるやうな――宣傳との見わけをするといふことは、カケ出しの記者にはむづかしいことです。私もさういふ場合に接したことが少なくありません。そして時々、判斷を誤つたことを悔ひます。尤も、この場合の後藤さんの態度は、眞面目であり、宣傳としても然るべき部分に屬するものが多かつたでせう。いはゆる然るべからざる宣傳が、い、い、ノセラレるといふ奴です。つひでに申しますが、記者の一番ありがたくおもふのは、よいニユウスをもらふことです。御馳走ではありません。お金などには良心ある記者は手を出さないはずです。反對を申せば、このよいニユウスをやるといふコツを知らなければ、少くとも新聞に受けのよい政治家もしくは民衆的の實業家となることは出來ないものであると信じます。いまの世の中とは、廣く見渡して、それだけの氣のきいた大膽性をもつた役人も政治家も實業家も見當りません。新聞を生かして動かした政治家は、やつぱり大隈老侯についでは後藤さんではなかつたでせうか。

いろ〳〵思ひ出されるなかに、過ちの功名をしたことを一つ書き添へておきませう。それは、原敬さんの遭難事件です。――あの夜、私はある宴會によばれてゐました。社からすぐ來るやうにとの電話でしたから、宴半ばにして、驚くお客さんを殘して歸りました。――編輯室は、上へ下への騷ぎです。工場の人たちが原稿の一枚一枚づゝをムシリとるやうにしてもつてゆく、營業の人たちが號外戰の手はずに馳け廻るといふ混雜です。私の第一にすべきことは、すでに組みこまれてゐる明日の朝刊の社説を原敬さんを悼むの辭に代へねばならぬことです。―しかも、地方版などの關係があつて、わづか三四十分ばかりの間に書きあげねばならないのです。いふまでもなく、この大舞臺の出來事を筆に乘せるには、私の力は遲くかつ弱いのです。一句書いては、溜め息をつき、二句書いては筆を置くといつた調子です。心細いことかぎりありません。それには、兎角世間から報知新聞は反政府的政黨の色彩が強いと見られてゐました

ので、――かね〴〵それを打ち消したい考へで努めて來てゐましたので、――却つてそれにトラはれて筆が進まなかつたことも事實です。――さうかうしてゐるうちに、締切の時間は刻々と迫ります。新聞の一段は當時十五詰めにして八九十行ですがそれすらなか〳〵出來ないのです。やつとのことで六十行見當まで漕ぎつけましたが、あとは一行も一字も出てきません。かつて三木善八から聞いたところによると、原敬さんが大阪で新聞の主筆をしてゐたところは、自分の思ふだけのことを書けば、それが一般に滿たなくとも、それが新聞印刷の體裁をなさなくとも、一向頓着することなく、切りあげたもので、こゝにも原敬さんらしい特徴がありますが、この際の私には、さういふ決心もつきません。さうしてゐるうちに編輯からいよ〳〵時間も迫るので催促に來ました。私は、どうにもなりません。たゞボンやり考へ込んでゐました。そのとき老練なる社僚もじつと私の原稿を見てゐましたが、「何とかしませう――活字でも大きくして――」といつて、その原稿をさらつてゆきました。私は、ともかくも救はれました。しかし、不安です。やがて待つ間もなく、試刷りになつたものを見ますと、暗殺された大久保と木戸とを間違へて書いてゐるといふほどのキズがあるではありませんか。しかし、活字は四號を用ゐて、丁度一段に組まれてゐます。型をくづしてゐますが、どうやら間に合つてゐます。――翌朝になつて本刷りになつたものを他紙とくらべて見ますと、却つて大きい活字で少ない文字をつかつてゐるのが嚴肅の氣分もあらはれて引立つてゐるではありませんか。私は、私の拙ない筆の不足を、かうしてまで形づくる社僚の工夫に敬服せざるを得ませんでした。――かういふ大きい活字で社說を組むことは、その後大事件に際して外の社でも試みられるやうになつたかと記憶します。また、この原さんの社說の取扱ひは、大隈老侯もことの外喜ばれました。とくに綾子刀自の如きは、平素隨分論難の的としてゐる原さんに對して、その筆鋒を緩めて大政治家を弔ふの態度に出で、『原君の死は國家の不幸なり』と斷ぜしめたことを喜んでゐられたのです。私は、かういふことを考へるにつき、新聞が綜合的作品であり、社員一人々々の力の強いことを思はずにはいられません。私の懺悔の筆は、反對に社僚の功を說く以外にはないのです。私は思ひ出します。私たちがお呼びして、わが國で十二回も北極橫斷の壯擧を講演されたアムンゼン翁は、一度だに、一語だに、みづからの功を說かれませんでした。宮中において、陛下の御前に講演されたときもさうでした。すべて彼れの謙遜心から出てゐます。大德です。しかし私は、本當に社僚によつてのみ助けられたので、社僚の

功を書く以外に申すことがないのです。――たゞ賤を空しうしたことを悔ゆるのみです。

こゝに附け加へておきたいことは、新聞と政黨色との關係について私の經驗したことです。――人も知るごとく、日本の新聞發達史をひもどきますと、その初期において、大體に立憲政治の布かれるまでは、新聞は政黨の機關紙として伸びて來ました。伸びると申すのは、經營がうまく行つたといふのではありません。否、反對に、經營はむづかしかつたのです。政治の犧牲になつたのです。それが日清日露の兩戰爭をしたころから、大衆主義に進んでゆくとゝもに、新聞は政黨色を削るやうになりました。新に新聞を出すものはもとよりです。大阪における朝日毎日の發展したことについては、地理的に惠まれてゐるとか、いはゆる戰爭景氣が關東より關西に濃くあつたなどのいろ〳〵の事由もありませうが、政黨的色彩を避けてゐた點においても、うまく行つてゐるとおもひます。尤も一般的に申せば、とかくわが國では、つねに反政府的の筆致が新聞を賣れるものとする考へから馴致せしめた傾向もあるかとおもひます。また、一面には藩閥と軍閥と官僚による變態政治が長くつゞいて、政黨政治の形さへ充分整つてゐなかつたからでもあつたでせう。とにかく報知新聞は、世間から強い政黨色をもつてゐると見られてゐましたがため、相當經營上には困つたのです。最近の大隈内閣時代の如きは、政府の方では記事の材料を特別に供給して他紙から恨まれることを避けたいとするために、却つて他紙よりもタネを得るのに苦しかつたといはれてゐます。しかし、新聞が政黨色を避けたいとすることは、日本に關するかぎりのことです。イギリスでもアメリカでも政黨色をもつたものが多いやうです。とくにドイツでは、さうです。ターゲブラット紙のヴォルフ君などは、私が日本における新聞の非政黨的傾向のことを申したところ、どうしても解し兼ねるといはれたほどです。尤も、わが國でも、東京大阪などの大都會の新聞以外の地方新聞には、いまもなか〳〵政黨色をもち、反對黨紙といがみあつて經營してゐるものが少なくありません。――こゝで私は私についての一つのエピソードを書かしてもらひます。

それは私が報知新聞へはいつてから、一年ぐらゐたつたときのことです。夏のこと、記憶しますが、私は大阪へ講演に出掛けまして、東上する汽車のなかで、渡邊鐵藏博士と一つしよになつたことがあります。二人は特別急行の展望車のなかで、おもしろく話し込みました。汽車が名古屋へ着くと、憲政會の總裁加藤高明さんや總務の早速整爾さんなどが、ドヤ〳〵と乗り込み、私たちのゐる展望車のなかへやつて來ました。渡邊博士

は加藤さんも早速さんも知つてゐるので挨拶されましたが、私はいづれも知らない人たちですから、敬意の表しやうもありません。またみづから新聞記者と名乘つて、何にか問題でもつくつて聞いてみるといふ氣にもなれなかつたのです。しかるに渡邊博士は、私のこの態度を見て不審をいだかれたのです。小聲で、『君は報知の副社長で加藤さんとは良く知つてゐるんだらう』といはれます。『イーヤ知らない。』――『君の新聞は憲政會と關係が深いではないか』――たゞし渡邊君は世間の人たちが、ムキ出しに憲政會の機關新聞ではないかといふのとはちがつてゐましたが、それでも内容はさうとれるやうにおもはれたのです。私は、加藤さんもしくは憲政會と報知新聞とは特別な關係をもつてゐない、物質上にも政治行爲のうへにも、緣故的交渉をもつてゐない。――重役などに黨員もありますが、それは新聞とは立ち場を別にしてゐます。また實際箕浦勝人先生などはこの點でエラかつたとおもひます――とキツパリ說明し、現にこの通りですと申しました。それなら政黨の首領として御紹介しようといふことで、はじめて加藤さんと早速さんとに引き合はされたのです。早速さんは當時故郷の新聞に關係されてゐたので、問題となつてゐた新聞用紙のことなどについて、いろいろと私に聞かれたことなど記憶します。渡邊博士は、途中でおりました。私は遊びに來たまへといはれるので、加藤さんの部屋で東京へ着くまで話しました。座談はうまいものです。學生時代に演說など聞いたときは、イヤにむづかしい人のやうにおもつてゐましたが、なか〳〵どうして、ソンなことはありませんでした。敷島かなにかをスパ〳〵やつて、スコツトランドで魚釣りをした話を興じつゝやる――面白い人でした。私は、その後死なれるまで、彼と親しく話す機會もありませんでした。

とにかく私は、報知新聞をして政黨色を避けるために精進しました。――面白い思ひ出があります。――地方へ講演にゆくと、その土地の政治家などが、むかしながらの考へで政黨的色彩のあるものとして、ステーションなどに迎へに來られますが私はいよ〳〵演壇に立つと、ズバ〳〵と各政黨の批判をしますので、當てがはずれたと感ぜられるのでせう――もう歸りには送つても來ませんでした――などといふ記憶もあります。

私は、さらに、これが憲政會內閣瓦解の原因となつた臺灣銀行事件について、懺悔の筆をつゞけたいのです。

――昭和四年五月三日稿――

歐米映畫資本戰と『トーキー』の出現

大竹二郎

歐米映畫企業の現勢は『排米映畫運動』と『トーキーの出現』とを說けば足りるのである。然し乍ら、歷史的現象である『排米映畫運動』並に『トーキーの出現』をよりよく理解するためには現在の映畫界を當來せしめた、史的過程を了解しなければならない。で暫く映畫企業三十年の回顧をしよう。

一、レシムル、ヅツカー、そして、フオツクス

活動寫眞の發明者は、米國人に云はせると、米人フランシス・ヂエンキンス或は米人トーマス・エヂソンであるし、佛國人に云はせると、佛人ルイ・ルミエルである。又英國人は『光榮ある其譽』を、英人ロバートポールに與へ樣として居る。今其正否の檢討は暫く置き、此等四人の發明者が、其考案の結果を公開したのは、ヂエンキンスの一八九四年六月を始として、ルミエルの『シネマトグラフ』の同年七月、ポールの『アンマトグラフ』の一八九六年一月、エヂソンの『ヴアイタスコープ』の同年四月の順である。此等は學術的意味の公開とすると、興行的意味の公開は一八九五年八月卽ち、エヂソンの『ヴアイタスコープ』の公開に先だつこと一年、既にジョーヂア洲アトランターの木綿製品博覽會に於いてヂエンキンス自身の手に依り、二十五仙の觀覽料を取り、一般に公開されて居るのである、更に此に先だつこと二ケ年、一八九三年の市俄古萬國博覽會にはキネトスコープ(覗き眼鏡の一種)が出品されて居る。此に依つて考へると、活動寫眞は、生れる其以前から、或は生れるや否や金儲のネタ、營利の客體であつたのである。其故か、數年たらずして、映畫は、寄席やサーカスの添物たる地位を脫して一人立をする樣になつた。

其最初が、米人ヂョージ・ヘール考案の『ヘールの世界旅行』と云ふ見世物である。スクリーンに寫る風景を見て居ると、恰も車中にあるが如き感を抱かせる工合のものである。十五六年前、現在の淺草帝國館のあたりに、ルナパークがあつた時、此ヘールの見世物も設けてあつて、『陸軍大將か、然らずんば汽鑵車の運轉手』をと云ふ志望を持つた少年達――現在『マルクスかフオードか』と云つて居る靑年達である――に大歡迎されて居た。

扨此ヘールの見世物は好評ではあつたが、特種の實寫物に限られて居るので、其他のものは、又別な寄り所を捜さなければならなかつた。といつて常設館を建築する程の資金もないので、彼等は、商店を買收した、卽ち洗濯屋を、八百屋を、乾物屋を、そして映畫を映寫した。所謂『ストアーショウ』である。そして最初の映畫常設館は、一九〇五年設立の市俄古のエレクトリック座である。其後斯業の發達と共に、常設館は增加し一九一〇年には驚く勿れ一萬に達したのである。

次に映畫製作方面を見るに、一八九七年アルバード・スミス及スチユーアート・ブラックに依つて、ヴアイタグラフ會社が起されて以來、近々拾年間に、エヂソン會社、バイオグラフ會社、パワース會社、パイスン會社、カレム會社、タンハウザー會社、ルビン會社、エッサネー會社シーリグ會社等の諸會社が設立された。所が此等の會社は、各々、撮影機、映寫機等の特許を持つて居て、特許權の紛爭が絕えなかつた。此を匡正するため、且映畫市場を獨占するため、一九〇八年九月モーションピクチユアー・パテント會社を設立した。此に參加した諸會社は前述の十會社の殆ど全てであり、全米國映畫の約八割を製作し、完全に映畫界を支配した。凡つ配給、貸付、興行の方面にも手を延ばし、一九一〇年、フイルム・コムパニー・オブ・ニユージヤーシを起し、全米百十六(或は五十八とも云ふ)の內たゞ一箇を殘して全部を買收した。其結果、全國の主要都市二十六を選んで、此をエキスチエンヂシテイ(貸付市)とし其處に支店を設け、其が管理する常設館に自作の映畫を配給せしめた。其上、此特許會社は免許制度を採り、映畫製作は十の工場に限られ、免許のない興行者は、其作品を上映し得なかつたのみならず、時の支配人、ヂエー・ヂエー・ケネデイは、全國にスパイを配し、免許違反を取締ること苛酷を極めたものである。

此風潮に慨して起つたのがカール・レンムルである。彼は一九〇八年インプ映畫會社、一九一一年モーションピクチユアー・デイストリービユーテング・アンド・セールス會社、一九一二年ユニバーサル・フイルムマヌフエクチユアリング會社の設立に關與し、其外ロンドンに支店を設け、ロサンゼルスにユニーバーサル市を開き、フローレンス・ローレンスを使つて最初のスターシステイムを開く等、特許會社に對抗し、獨立派の中にあつて最も目覺しき働きをなした。

此より先き一八九〇年、米國聯邦議會に於いて、ヂョーヂ・シヤーマン提出のアンチ・トラスト・ローが滿場一致を以て通過した。所謂シヤーマン法と呼ばるゝものである。所が一九一二年八月十五日、米國政府自身が原告となり、特許會社は、シアーマン法違反として、解散請求の訴訟を提起した。此爭ひは三ケ年の長きに及び、原告側の勝訴に歸した。其後は、製作方面にも、配給方面にも、自由競爭が行はれ、映畫企業の進步の顯著なるものがある。アドルフ・ツッカーは此潮流に掉した成功兒である。カール・レンムルがスターシステイムの開祖とするならば、彼は、映畫界に、舞臺の名優を送り込んだ最初の人である。彼が一九一〇年歐洲に旅立つたが、歸米後、サラア・ベルナアルの『エリザベス女王』全四卷を一萬八千弗といふ莫大な權利金を支拂つて輸入し、紐育のリセアム・セアターで上映するや、大好評を博し、純益八萬弗に

及んだ。此に力を得て、フエーマスプレフヤース會社を起し、しきりに舞臺の名優(ジエムス・オニール、ジヨンバリモア等)を招き、フイチユアー物を發表した。一九一六年、ラスキーと同盟し、今日のフエーマスプレヤース・ラスキー會社を起し、其の社長に就任したのである。そして間もなく、其配給會社、パラマウント映畫會社を合同した。此事は、製作と配給との統一を意味するものであつて、米國第一の配給會社、パラマウントのシアターチエーン、六百館は、今日のパラマウントの盛大を至す所以となつたのである。然し歴史は意外な所に、意外な人物を登場させるものである。かの、サンシヤインコメデイとトムミックスのフオックス社が、トーキー流行の潮に乘つて、M・G・Mを買收し、七百五十館のシアター・チエーンを擁して、パラマウントの一大强國となつて現出したのである。

二、排米映畫運動

上述する所は、アメリカ映畫企業の發達である。翻つて歐洲の映畫企業を概觀するに、戰前の其は、アメリカに數歩を先んじて居た。米國映畫會社が歐洲に支店を設けたのは、一九一二年、ユニバーサルのロンドン支店を以て嚆矢とするが、フランスのパテエ會社は、之に先ずること八年、一九〇四年、紐育にパテエ支社を設立し、米國各洲に三十餘の支店を起し、一九〇七年には映畫燒付工場を、一九一〇年には撮影所をニユージヤーシー洲チヤーシーに設けたのである。又伊太利には、チネス、イタラ、獨逸にはビオスコープ、ヴアイタスコープ、瑞典にはスウエンスカ、バイオグラフ、英國には、チヤールス・アーバン等の會社があり夫々良き作品を發表し、アリメカに輸出して居た。そして、映畫市場の中心は、英京、ロンドンであつた。

然るにかの歐洲大戰は、世界を逆轉せしめた。休戰ラッパが鳴り、平和の鐘が響き渡ると、歐洲映畫界は完全にアメリカ映畫界に壓倒されて居た。アメリカ映畫の歐洲輸出高は、一九二三年には四千萬呎、一九二四年には六千萬呎、一九二五年には七千五百萬呎の多額に上り、歐洲上映映畫の八十パーセントを占めたのである。殊に人種と國語と風俗を同じうする英國は、潮の如きアメリカ映畫の侵入に堪え切れず、一九二六年の如きは、自國製作品は、上映映畫數の一パーセントと云ふ悲慘な狀體にあつた。茲に於いて、歐洲映畫業者は、アメリカ映畫に對抗するため、次の樣な三つの手段を取つた。第一の方法は、良き藝術家を迎へて、良き映畫を作ること、第二の方法は資金の潤澤を計ること、第三の方法は政府に依る保護政策の實行である。時しもあれ、ソヴイエート・ロシアを逃れた、ロシア映畫團の大移動は、第一の手段の實行に良きチヤンスを與へた。フランスに移動したロシア映畫團は、エリモリエフ氏の統率の下に、アレキサンドル、トールヤンスキー、イワン、モジウヒン、ナタリー・リセンコ、ナタリー・コヴアンコ等の多能の士を擁して、エリモリエフ會社を起し、後アレキサンドル・ヴオルコフ、ニコライ・コリン、シヤック・フエデー、マルセル・レルビエ等が加はるに及んで、『キーン』『生きて居るパスカル』『戀の凱歌』『千一夜物語』の名篇が生れた。他方ウラジミル・ヴエンゲロフに率ひられた、グレゴリ・クラ

マ、ボーラ・ネグリ等のロシヤ映畫團は、ドイツに留まり『罰と罪』『オセロ』『ダントン』等の良き作品を作つた。又英國のブリテイシユ・インターナシヨナル會社が、ドロシー・ギッシユやデユボンを招いて『ロンドン』『ムーラン・ルーヂユ』『ピカデリー』を作たのも此第一の手段の現はれである。然し此方法は、弗に買はれて、歐洲の藝術家が渡米すること に依つて餘り大きな効果を擧げ得なかつた。第二の手段たる、資金の調達は、大フーゴー・スティンネスの嗣子、エドモンド・スティネンスが、ロシア映畫團の統率者ヴエンゲロフと共に、一九二四年九月、兩者の名前をとつたヴエスティ映畫會社の成立と共に、實現の途に上つた。ヴエスティは豐富な資金を以て、ドイツ第一の大映畫會社なると同時に、フランスにシネ・フランス會社を起し、シネ・フランスはパテーと協定成つてパテエ・ヴエスティ會社を設立した。ヴエンゲロフの年來の希望たる歐洲映畫聯盟は六分通り完成されたのである。然るに、一九二四年ドイツ財界の大恐慌はスティンネス一家を沒落の淵に追ひ落して、ヴエスティ會社も僅か一年有餘の命數を以て解散してしまつた。其後アメリカの大會社に對抗し得べき映畫會社を見ないのである。

第三の手段たる政府の保護政策は、一九五二年一月、ドイツのコンテインゲント法を以て始まり、漸次他の諸國で採用された。フイルムデーリーの年鑑に依ると、諸國に於ける國産映畫の保護、換言すれば、排米映畫運動の狀勢は次の如くである。

オーストリヤ	一割同國映畫上映
ベルヂユーム	皆無
ボルヴイア	同上
フランス	製作者に依つて排斥運動猛烈、巴里では一九二八年三月末日後は不燃性フイルムを使用しなければならぬ
ドイツ	政府は新輸入法を制定して内外一對一、一九二八年一月以降十八ケ月間に百七十本以上の映畫は輸入されない。表面は二百六十本になつて居り、内九十本は政府が適當なりと認むるものに限るのである。
ギリシヤ、和蘭	皆無
ハンガリー	一年二十本輸入（平均一本一千五百米突）そして同額を國内で製作する
・ーゴースラヴイア、アルバニヤ	自國製映畫或歩合上映の制限運動が進行中
ポーランド	思考中

以上の表に依り推察さるゝ如く、内國映畫保護の方法は、免税、資金貸付、と共に最も重大なる制度は、クオタ・システイムである。一九二年十一月、時の商務卿、カンリフ・リスター卿に依り、英國映畫を起死回生せしめた、英國活動寫眞法第十二條は、此クオタシステイムを規定して居る。

一九二八年以後、英帝國ニ於ケル公開ノ目的ヲ以テ、登錄濟ミ映畫ヲ興行者ニ賃貸スル業務ニ從事スル者ハ、賃貸ノ爲メ、毎年取得スル登錄濟映畫ノ中、少クトモ別表ニ示ス割合ヲ以テ登錄濟英國映

畫ヲ取得スベキモノトス。

別表（百分率）

年	賃貸人	興行者
一九二八	七・五	—
一九二九	一〇・〇	七・五
一九三〇	一二・〇	一〇・〇
一九三一	一五・〇	一二・五
一九三二	一七・五	一五・〇
一九三三	二〇・〇	一七・五
一九三四	二二・五	二〇・〇
一九三五	二五・〇	二二・〇
其以後	二五・〇	二五・〇

此クオタ・システイムに依り、アメリカ映畫は、輸入國の映畫製作を盛大にしない限りは、多くの輸出は望まれず、輸入國映畫製作が盛になれば、當然輸出は減少すると云ふ頼を蒙つたのである。其結果、アメリカ映畫の輸出は減少し、一九二八年の其は、ネガとポジとを合算して前年に比較して四分三厘の減少を見て居る。

一九二八年
ネガ、　七・七〇一・八〇一呎
ポジ、　二一四・四一〇・七八五呎
一九二七年
ネガ、　七・七〇一・八〇一呎
ポジ　二二二 六五五・九三二呎

國別に之を見れば、一九二四年度に於けるフランス上映の米國映畫は五八九本であつたが逐年減少し一九二八年では三一三本となつて居るドイツに於ても一九二六年二二九本のアメリカ映畫が檢閲を受けたが、一九二八年では一六五本に減じて居る。英國に於ても同様に、自國製映畫は增加し、アメリカの其は減少の趨勢にある。斯の如き狀勢にあつて、米國當業者は如何なる方針を取るべきであらう。クオタ・システイムの存在する限りに於ては、外國會社を買收し準アメリカ映畫を製作するの一途があるのみである。所が、茲にトーキーが出現した。此は、アメリカに取つて、又歐洲映畫企業者に取つて、天來の福音であつた。

三、トーキーの出現

トーキー（發聲映畫）の歴史は、映畫の歴史である。映畫の發明者達は、映畫は、有色、有聲、立體でなければならぬと考へて居た。で、無色、無音、平面の映畫の完成と共に、直に、發聲映畫の研究に取掛つて居る。ロンドンの特許局の帳簿面には、一八九二年より一九一二年の十年間に、驚く勿れ、九拾壹箇の發聲映畫の特許が登錄されて居るのである。又獨逸には古くから、ギイド・ゼーベルの『ゼーベロフオン』佛蘭西にはゴーモンの其があり、米國には、エヂソンのフオトキネトグラフ及キネトフオンが存在して居る。其後クロノフオン、ヴアイヴアフオン、オークセトフオン、シネフオン等經て今日の、ヴアタフオン、ムービトーン、フオノフイルム、フオトトーン等の出現を見るに至つたのであ

る。

翻並に吾々が注意すべきは、發聲映畫の研究が年々著々と進歩を續け乍らも、世間の注視の外にあり、一九二六年以後に於いて、殊に一九二八年以降、俄然世界の映畫界を壓倒したといふ點である。之には歷史的根據がなければならぬ。一九二六年或は一九二八年以前に於いては、アベル・ガンズの、ルネ・クレールの『映畫は光の交響樂である』『白と黑とが織りなすリズムである』と云ふ映畫論は全く正しかつた。なればこそ映畫は、演劇の支配を脫して、獨立の藝術たり得たのである。然しフエルナン・レジエの『純粹映畫』ルットマンの『絕對映畫』の主張となるに及んで、無聲、無音、平面的映畫は、全く行く詰つた。コンティニユテイとカメラの研究は一段落に到達した。今後必要とするものは、有聲、有色、立體の映畫であり、其研究でなければならなかつたのである。そして大衆は其を欲したのである。そして、此機に乘じたのが、アメリカ映畫業者であつた。前述の如くに、アメリカ映畫は、諸國のクオタ、システイム、其他保護政策の影響の下に、輸出の逐年減少を見て居た。然しアメリカ映畫の市場は、七十五パーセントが國內であつて、殘りの二十五パーセントが海外市場である。で此二十五パーセントの海外市場の不況は、國內に力を注ぐことに依つていと容易に取返し得るのである。其手段として彼等はトーキーを利用した。そして思ひも掛けない大きな魚を釣つた。海外市場の不況を補綴して、尙餘りある好結果を得たのである。トーキーの先驅者、ワーナーブラザース會社が、一九二六年八月、ションバリの『ドンフアン』を、ヴアイタフオンで演出した所、紐育全市の客を吸收した。續いて同樣、ヴアイタフオンに依る『ジヤズシンガー』(アルヂョンソン出演)は、より以上の興行成績を獲ち得て了つた。グレーター・アミユーズメント協會の、一九二八年度推薦映畫に於いては、其興行價値と內容の點に就いて、此シヤズシンガーが、キング・オブ・キングス、テムペスト、街の天使を拔いて、斷然第一位に位して居る。此時頃よりトーキーのアメリカが始まり、本年に至つてトーキーは益々其勢威を發揮して居る。本年二月、パラマウントの發聲映畫『アビーの白薔薇』『カナリヤ殺人事件』『醫師の祕密』『インターフエアランス』『ショッピングガール』等は全て百パーセント以上の興行價値を擧げて居る。(別表參照)

"Abie's Irish Rose"
Paramount (T.)

City and Weather	Theatre and Seating Capacity	No. of Days Run and Admission Prices	Percentage Rating; Normal Business Equals 100%	Shorts	Presentation
Indianapolis, Ind. Weather: Fair	Circle (2500)	7 (25¢-60¢)	135%	Fox M. News; "Visions of Spain"	None
Ottawa, Ont. Weather: Fair	Regent (1225)	6 25¢-60¢	97%	Fox M. and Para. News; 6 Brown Bros. T.	Orchestra

	Baltimore, Md. Weather: Cold	Parkway (1092)	6 15¢–35¢	108%		
	Syracuse, N. Y. Weather: Cold	State (3000)	7	100%	M-G-M-T. Revue; M-G-M and Fox. M. News	Orchestra
	Memphis, Tenn.	Palace (23[illegible]7)	6	125%		
	Salt Lake City, Utah	F press	7	125%		
"The Canary Murder Case" Paramount	Portland, Ore. Weather: Cold	Portland (3068)	7 25¢–60¢	125%	M-G-M News; A. Lincoln subject	Publix Unit: "Beaux Arts"
	Seattle, Wash. Weather: Cold, snow	Seattle (3150)	7 25¢–35¢–50¢–69¢	120%	Lincoln Sound Reel; Para. News	Anita Stewart; Publix Unit
"The Doctor's Secret" Paramount (T.)	Des Moines, Ia.	Capitol (1600)	7	135%	Para. News; Vita. Acts	Publix Unit
	Kansas City, Mo. Weather: Stormy	Newman (1866)	7	90%		
	Macon, Ga. Weather: Rain	Rialto (500)	3	100%	Fox News; Para. Shorts; Vita. Acts	
	Houston, Tex. Weather: Cold	Metropolitan (2400)	7 15¢–25¢–60¢	98%		
	San Francisco, Cal. Weather: Cold	Granada (3000)		150%		Acts
	Birmingham, Ala. Weather: Mild	Alabama (2200)	6 25¢–35¢–60¢	100%	Para. T. and News	Spot Show
	Des Moines, Ia.	Capitol (1800)	7	130%		Stage Show
	New York City Weather: Clear	Paramount (3666)	7 40¢–65¢–75¢ 85¢–$1	110 3/10% (2d Week)	"That Certain Party" (Para. T.); Selected and Fox M. News	"Cooling off"
	New Haven, Conn. Weather: Excellent	Olympia (2500)	7	110%	"Bride's Relations" (Educ. T.)	Publix Unit; Overture; Organ
	Syracuse, N. Y. Weather: Snow, cold	State (3000)	7 25¢–35¢–50¢	75%	Fox M. and M-G-M News; Lincoln reel; Roach comedy	"Zeppelin Flight"
	Milwaukee, Wisc. Weather: Mild, snow	Wisconsin (2902)	7 2[illegible]–75¢	110%	Fox M. News	"Black & White Revue;" 5 Acts

フオック社の如きは、此趨勢を見越して、フオックのトレードマークのある映畫は、全て、トーキーであらうと云ふ素晴らしい宣言書を發表して居る。

扨トーキーは、有聲の種類度合に從つて、音樂（ミユージック）、音響（サウンド）、對話（ダイアログ）そして、オールトーキングと四つに分たれる。ミユージックトーキーとは部分的に音樂のみ挿入さるゝもので、對話及音響トーキーも同樣に、對話と音響のみが有聲である、オール・トーキングピクチユアーは、以上の三つを兼ねたもので、M・G・Mならばあの商標のライオン迄が、ホーコーして觀客の心膽を寒からしめる譯である、昨年度のトーキーは、長篇物八十八本、短篇物は約其四倍の割合である。長篇物八十八本を種類別にすると、對話、音樂及音響二十二本、音樂及音響二十三本、音響三十一本、對話、音響二本對話二本、オール・トーキング五本といふ内譯である。パーセンテーヂにすると、對話を含む物が四十九パーセント、對話を含まないものが六十一パーセントである。一般にトーキーは米國映畫の輸出を止めると云はれるが、此六十一パーセントのトーキーは立派に輸出し得るし、對話のあるものは、サイレント版に編輯し直せばよいし、日本の樣に、ダイアログのあるトーキー迄も、輸入し樣と云ふ勇敢な國もあるので、米國映畫の輸出は大した減少を見ないと觀測される。

次にトーキーが映畫界に及ぼした、最大な影響は、今迄インフアント・インダストリーである映畫企業を一躍、大企業と比敵せしむるに至つたことである。昨年二三月頃迄は、二十二弗であつたワアナー株は十一月には百三十九弗にまで奔騰し、本年に至つても百三十四弗を維持して居るし、フオックス社のA株は、昨年度の最低六十八弗より暴騰し、今年に入つて百弗以上の高價を保つて居る。一躍ウオール・ストリートの花形株となつた譯である。其と同時に、映畫界に、資本專制の風が吹き初め、企業合同の徴候の顯著なるものがある。ヴアイタフオンに依つて復活したワアナーブラザース會社は先にフアースト・ナショナル社を買收して、大いに氣勢を見せたが今亦、ユナイテイッドアーチスット社買收の交渉を進めてチヤップリンの斷然たる反對に合つたことを、外電は報じて居る。最良の發聲映畫、ムービートン（デイアログはヴアイタフオンの方が優れて居る）を眞向に振りかざしたフオックス社は、M・G・M社とロウ會社とを合併し、フオックス系會社の資本額合計二億三千萬弗の巨額に登つた。其支配館は、從來の六百館に、ロウ系の百七十五館を加へて、パラマウントを壓倒する一大勢力を形成した。噂は噂を生んで、ワアナーとパラマウント、パテエとユニバーサルの合併がしきりに傳へられて居る、此狀體は、恰かも、初期の映畫企業界ー活動寫眞特許會社發生當時の感を與へる。只異なる所は、米國大財閥の映畫界の侵入である。一體發聲映畫は、レコード式とフイルム式とに分れる。レコード式は蓄音機とフイルムをシンクロナイズ（同時化）して映出する方法であり、後者は、音を光に變じてフイルムの側に刻み付け、映寫時には、其逆を、卽ち、光を音に變ずるのである。ヴアイタフオンはレコード式の代表であり、ムービートーンはフイルム式の代表である。そして此等兩式のトーキーは各々特種な映寫裝置を必要とする。所が、米國

に於いては、全ての發明、考案は、皆特許が取つてあるのである。そこでトーキーの出現と共に、電氣會社、ラヂオ會社等が映畫界と密接な關係を持ち初めた。ウエスターン・エレクトリック會社の映寫機は、フイルム式、レコード式兩式共に使用されるので、ワアーナー・フオックス、パラマウント等十社に使用されて居る。ウエスターンエレクトリック社と對抗するヂエネラル・エレクトリック社の姉妹會社たる、R・C・A社（ラヂオ・コオポレーシヨン・オブ・アメリカ）は、F・B・O映畫會社及キース・アルビー・オーヒニームと合同し、パテントを持つ、フオトフオンと取り、R・C・Aフオトフオン會社を作り映畫界に進出して來た。R・C・Aも、W・Eも米國大財團、或ひはモルガン、或はロックフエラー或はフオードと夫々淺からぬ關係を持つので、今後の米國映畫界は、此等大財團の策動と共に、集合、集散が行はるのであらう。

扨トーキーは、映畫界に大なる變動を與へたのである。然も其變動たるや、石卷良夫氏が云はるゝが如く、正に一回轉である。映畫界は再び昔に歸つたのである。なんとなれば、初期の映畫界の五大特徴は、其儘は現在にあてはめ得るが故である。即ち、（一）舞臺劇の模倣（二）短篇物の流行（三）特許權爭ひ（四）ノベルテイの映畫界入り（五）企業合同——全て現在の歐米映畫界の姿である。で我々が待ち望むのは第二のグリフイスであり、第二のチヤツプリンであり、第二のヅツカーでなければならぬ。（一九二九・五・七）

堀切善次郎論

ＯＰＱ

一

市長と云へば、いつも大臣の古手か、さうでなくても所謂大臣級の人物なるものを持つて來るにきまつて居た東京市も、今度は流石に無産黨が六人も市會議員に選出された丈あつて、市長にも當年取つて四十六歳そして純然たる事務家である堀切善次郎を据ゑて少々若返つた感がある。

我等の新市長堀切善次郎は、政友會代議士にして、前議會に豫算委員長を勤めた堀切善兵衛の弟であることは、あらためて玆に紹介するまでもない。いやそれどころではない、之れからは兄の善兵衛が反つて弟善次郎の兄として、世の中に紹介されるやうになるであらう。彼れは明治十七年九月福島縣二本松の素封家堀切良平の二男と生れ、早稻田中學、第一高等學校を經て東京帝國大學に入り、明治四十二年七月二十六歳で同大學を卒業、文官高等試驗をパスして官界に入り、東京府屬を振り出しに、內務屬、警視、岩手、廣島、京都等の理事官を經て內務省參事官となり、書記官、會計課長、都市計畫局長、土木局長から神奈川縣知事となり、復興局長官に轉じて今度市長になるまで、その職に在つた。かうして彼れの今日まで踏んで來た途を辿つて見ると、彼れの生涯はまことに順調であり平凡である、その步んで來た途は、坦々砥の如しと云はふか、生れ落ちるとから、今日まで四十六年の彼れの生涯に稍々彩りを添へる者は、僅かにいまの妻君澄子を內務省のタイピストから拾つて、亡妻たる阪谷芳郎の娘の後釜に据ゑたこと位のものであらう。

二

學生時代の彼れはどうであつたかと云ふに、少くとも高等學校時代までの彼れは、教師にも亦生徒の間にも、一向ハツキリした存在を示すやうな、何の印象をも與へて居らない。

或者は彼れが校庭の一隅、木を背に青い顏をしながら、讀書に餘念なかつたのをよく見受けたと傳へるが、高等學校時代の彼れは、少くとも柔道と水泳に相當の熱を示して居たから、彼れが青い顏をして本を讀んで居つたと云ふことは、彼れの後年の勉强振りを見て特につくつた話か、しからずとするも大學の卒業期前の間違ひであらう。

それはいづれにしても、高等學校時代までの彼れは仲間に何等の印象をも殘さない程、平凡なる一箇の勉强家であつたに過ぎなかつた。

聽て大學に進んだ時には、彼れは大分努力したやうであつたが、それでも四年の大學生活中最初の三年までは他人に首席を讓つて居る。一年と二年は、いまの大藏省主税局長藤井眞信と、裁判官になつて數年前物故した清水行恕が各一回宛特待生となり、三年では現に大藏省の會計課長たる佐野正次が首席を占めた。

堀切が努力を初めたのは、それ以後のことに屬する。

四年になると堀切は儼然としてラスト・ヘビーを掛けた。かう云ふ時に金に構はず、參考書を整へ得ることは有利である。彼れは必要な本は

どし〱買つた、中には本は買ふけれども一向讀まない者があるが、彼は買つた參考書をば盛んに讀んだ。その結果卒業試驗の成績は頗る優秀で、當時點の辛いのでは有名であつた松波仁一郎の口述試驗にも見事滿點を取つて、その時恰度助教授になり立てのホヤ〱で、松波教授の口述試驗に立會つた吉野作造をして舌を捲かしめた程であつた。

卽ち彼れ堀切のラスト・ヘビーは、見事圖に當つて、政治學科の青木得三(現東京稅務監督局長)佛蘭西法兼修の安倍四郎(現日本銀行金澤支店長)の二人と肩を並べて、彼れは獨逸法科の首席として當時學生間に於ける最高の名譽であつた銀時計を拜受した。

三

あの冷靜そのものであるかのやうに見へる堀切にも、當時靑年らしいアスピレシーションは有つた。大學を出て、まづ内務省を擇んだのは早く出世がしたかつた爲めであつた。彼は一日學友を顧みて云つた、『ねえ君、内務省へ入つた方が、一番早く勅任官になれるな』と。

最も早く勅任官になることを望んで、内務省に入つた彼れは間違ひなくその希望を達した。彼れは阪谷芳郎に見込まれて、阪谷の娘を妻に迎え、トン〱拍子に出世して、遂ひに嘗つては岳父の占めた東京市長の椅子につくまでになつた。

彼は飽くまでも不偏不黨である。兄の善兵衞は現に黨人であるせいもあらうが、なか〱野性に富んで居つて、議會ではあまりに蠻勇を振ひ過ぎて、刑事被告人にまでなつた程であるが、善次郎は此兄を持ちながら微塵も黨臭がない。彼かは嘗つて憲政會内閣の下に神奈川縣知事に任命され、つゞいて復興局長官に引上げられた。彼れの橫濱在任は僅か一年ばかりで、まことに短かつたが、それにしても、憲政知事のチヤキ〱清野長太郎の後を襲ひながら、全然どちらの色もつかないまゝ、東京に引上げて來たところは、恐らく彼れならでは出來ないとであつたらう。

尤も彼れの不偏不黨は決して努力の結果ではない。彼れは生れながらにして冷靜である。大抵の人間は相撲を見ても野球を見ても、どつちかへ贔屓したくなる、程度の差こそあれ、好惡の感情は誰にもあるものだが、彼れには全くそれが無い。學生時代からさうであつたが、嘗つて他人を刺戟するやうな擧措をしたことがない、その裏を云へば彼れは他人によつても、何等の刺戟を受けないのであらう。或人は之を全く生理上の理由に歸する。すなはち彼れの頭の格好を見ると後の方は、全然切つ立てた斷崖の如くなつて居る、是れ彼れの感情の極めて穩やかなる所以であらうと、或ひはさうであるかも知れない。新聞は彼れが市役所へ初登廳の際、全く無表情であつたと書いて居た、その通りである。彼れの顏には表情は無い。

四

品行方正なることも彼れの特長の一つである。川柳に、『女房で味を覺える大痴愚』と云ふのがあるが、彼れはこの意味に於いてまさしく大たわけである。クラスの評判では大學時代まで童貞を守つて來た者は彼れと、もう一人それは鈴木喜三郎の内務大臣時代に福岡縣知事から左遷され、憤慨して辭表を叩きつけた大塚維精とこの二人位のものであらうとのことであつた。たわけでもこんな痴愚はまことに結構、擧世滔々腐敗墮落の途を急いで居る今日の俗世間に、この種のたわけの尙ほ存在して居ることは大いに心强いではないか。彼れが岩手縣の理事官として、

盛岡に居つた頃は年はまだ若いし、金持ちではあるし、土地の藝者になか〳〵騷がれたものだ、しかし幾ら盛岡藝者が騷いでも、彼れには一向それが通じなかつた。

だから堀切一生一代の色事として、世間に噂されるいまの妻君、當時のタイピスト平井澄子の事件だつて、決して世間並みの浮いた色戀ではなく、彼れは先妻が五人の子供を殘して逝いた後の、家庭の主婦を物色して、たま〳〵澄子を得たに過ぎなかつたであらうとは、學生時代からの友人の等しく彼れの爲めに辯ずるところである。

それにしても、あまりに突然ではないかと云ふ者があるかも知れないが、そこは阪谷のやうな家庭(母は澁澤の息女)から迎えた妻は、どうしても我儘であつたらう、この我儘な妻に懲りて、二番目は思ひ切つて無名のしかも職業婦人を擇んだものであることは、彼は口にこそ出さぬが、友人の等しく同情して居るところである。

職業婦人と云つても、澄子は新潟縣の女學校を出た女で、そこいらからストリート・ガールを拾つて來るのとは違つて居る。それでも澄子の父金藏は堀切から正式に交渉があつた時に、あまりに身分が違ふから一時のおもちやであらうと、斷つたが交渉使たる彼れの友人某が、淳々と彼れの品行方正と、考への眞面目なことを說いたので、やつと話が纏まつたと云はれて居る。

かく冷靜そのものゝ如き堀切も、友情にはなか〳〵厚く、その點で彼れを德として居る者が少くない。

いま復興局の經理部長をして居る赤木朝治は、嘗つて若槻内務大臣のもとに祕書官をつとめた廉を以て、例の鈴木が神社局長を首にするところだつたが、之れを聞いた堀切は早速赤木を貰つて經理部長に据えた、また憲政會内閣の下に警視廳の刑事部長かなにかをして居て、馘首された鈴木敬一を第二出張所長に拾ひ上げた如きその著しい所である。かう云ふことが出來るのは彼れが兄善兵衞の關係から、政友系によい爲めもあるが、少くとも暖かい友情と、強い決心がなければ出來ないことで、かう云ふ點は無條件に褒めてやつてよからう。

五

個人としての堀切について、餘りに多くのスペースを費やした。之れから大急ぎで彼れが市長に擔ぎ上げられた經緯を述べやう。

市長選擧の運動はあれでなか〳〵猛烈なものであつた。就中最も活躍したのが、永田秀次郎を樹立する一派で、この一派は市會議員選擧にも、可なり資本を投下して居つたし、市長には永田と、もう初めから極めて掛つて居たので、或る有力なる新聞の幹部の如き、表裏とも必死の運動をなし、また議員選擧當時の投資を回收することであるから、必らずしも不可能でないと信じて居たやうであつた。尤も斷つて置くが、さうした烈しい運動には當の青嵐は全く沒交渉であつた。

併し堀切が市長にきまつて居つたのは、議員選擧のすんだ直後からであつて、堀切以外に交渉を受けた候補者は井上準之助にしても、誰でも皆當て馬に過ぎなかつた。然らばどうして、また誰と誰とが彼れを候補者に推したのであらうか。

こゝで一寸の間堀切善次郎論から離れて、現在の市會の狀勢を說く必要がある。

這間の消息に通じない者から見れば、新市會は從來のそれと異つて、大層立派な聖人君子の集まりのやうに見えるが、實はそれは少數の無産

派と三四の例外だけの話であつて、あとは舊態依然たるものである。すなはちちやんと民政、政友の二黨に屬して居り、彼等の影には三木武吉と中島守利が絲を引いて居る。そこでさういふ事情を知らなかつた所謂永田派の如きは少からぬ資金を投下して永田派の議員の製造に努力したのであつたが、永田派から廻る藥よりは三木、中島等を通して出て來る藥が分量も多く、利き目も強い以上、議員共が依然として三木中島の傀儡であるのに何の不思議もない。

市會の現狀がすでにかくの如くである以上、三木と中島に反對されては市長になれる道理がない。すなはち堀切は暗闇の中に於ける三木と中島との握手の所産である。

さればこそこれ丈の立派な人格者であり、また冷靜なる事務家である新市長に、無産派が最後まで反對しつゞけたのである。

市長としての堀切は、かくして三木中島の野合によつて生れた私生子であるが、その産婆役をつとめたものは警保局長横山助成であつた。横山は堀切とは大學時代の級友であるが、堀切とは違つて純然たる政友會員であり、また所謂政治屋肌の男である。この横山は三木中島の野合を知つて暮夜ひそかに內務省の自動車を飛ばして內閣はもとより、政友會內の有力者の間を驅け廻つた。市長選擧に最も有力なる發言權を有つ警視總監の宮田の如きは別に意中の候補者がある爲めに、容易に承諾しなかつたが、橫山はこの宮田をも承諾せしめて、とう〳〵堀切市長を物にしたのである●

六

横山助成が産婆役であつたことを知らなければ高級助役に白上佑吉を引つ張つて來たことの意味が判らない。白上は人も知る如く橫山と共に例の優諚問題で閣班からすべつた水野錬太郎の子分で、嘗つて鈴木喜三郎の手で富山縣知事から島根へ左遷されたのに憤慨して辭表を叩きつけ、のち水野が文部大臣となるに及んで實業學務局長に拾はれ、水野と一緒に野に下り、一時は田中義一に弓を引いて水野の爲めに、優諚問題をぶちまけやうといきり立つた程親分思ひの男である。すなはち失意の水野としては、目に入れても痛くない程可愛いゝ男であるが、そこへ行くと橫山は、同じやうに水野の引立を蒙つて居りながら、平然として內閣に居殘つて近頃水野に覺え目出度くない。そこでその埋合せに白上を推薦して水野の怒りを解いた。つまり堀切のエキスペンスで、水野への義理を足したので、所謂人の褌で角力を取つた上乘のものである。

白上は堀切より一年あとの明治四十三年の政治科出、純情ないゝ男で、この點堀切にも氣に入りさうな男であるが、唯正反對なのは才氣喚發、宴席なんかでは歌ひもすれば踊りもすると云ふタイプである。しやべる事もうまいので彼れの鳥取縣知事時代など、縣會で彼れが答辯する日には傍聽者も多かつた位である。年は堀切と同年の明治十七年生れ、唯十二月生れだから幾月か若いわけだ。

筆序でに殘る二助役を爼上に上せる。第二助役の田中廣太郎は大正二年の政治科出、頭はいゝ方ぢやないが、學校を出ると直ぐ內務省へ入つて、コチ〳〵と地方財政を勉強し、今では地方財政通として重寶がられて居る、政友會の元老元田肇の女婿たること、前助役の船田中と同斷。第三助役の廣瀬久忠は田中より一年あとの大正三年政治科出、今度の市役所は市長以下全部東大出で、堀切が獨法である外は、助役は三人とも政治科出である。この廣瀬は之れまた政友會の古株若尾璋八、廣瀬爲久

の實弟、復興局では文書課長で事實上堀切の祕書官をやつて居た。

尙ほ一言附加へて置かなければならないとは、堀切が市長就任の條件に船田中を居据らせることを出したと一二の新聞が傳えた事件である。之れは凡そ堀切を知つて居る程の者が、いづれも不可解に思つたことであつた。と云ふのは船田と云ふ男は前市長の助役でありながら一緒に行動もしないのみか、市長代理と云ふ名義上の地位をも忘れて、積極的に市の人事異動を大々的に行ふやうな、物の道理を辨へない男であるのにその男を態々堀切が懇望するとは、あまりに平仄の合はない話であつたからである。併し之れは船田の親分たる宮田が新聞に宣傳したので、堀切は最初から船田を止させることにきめて居たのだ。

七

堀切の人となりや、市長就任の經緯はいゝとして、市長としての彼れの前途はどうだらう？　今日までに現はれたところを見ると、彼れは就任しても、歴代市長がいや〳〵ながらやつて居た、市會議員の私宅へ挨拶に廻ることを断然しなかつた。この市會議員の私宅訪問と云ふとは、比較的名市長と謳はれた故奧田義人でさへもやつた處て、それも就任當時丈でなく、何か問題の起る度毎に臨時にそれをやつた事さへある。だから奧田は當時『大臣をして居ると貴衆兩院と云ふ厄介なものがあるがそれでも此の方は一年に三ヶ月だからいゝが、市會の小姑は市長をして居る間中そばについて居るから困る』と歎聲を洩らした位であつた。

今の市會はさきの大檢擧後だからまだほとぼりのさめぬ間はおとなしいが、その中にそろ〳〵本性を現はして來た時に、從來事務官しきやしたことの無い堀切が之れに堪え得られるかどうか？　現に五月二日に英國特使グロスター公が見えた時の如き、府會議員は東京驛のプラットホームへ入つて迎えたのに、市會議員は驛外に立たされたと云つて、カン〳〵になつて堀切のところへ怒鳴り込んだやうな例もあつて、彼れも少々驚いて居るから、かうしたことから案外短命に終るかも知れない。

尤も彼れと雖も大抵市のうるさい位のことは知つて居るし、またあれで居て世渡りのコツは相當心得て居る。それは彼れが官吏として珍しく人に御馳走をすることである。勿論御馳走と云つても藝者招んで馬鹿騷ぎはしないが、神奈川縣知事時代でも始終官舍へ東京の官邊の先輩後輩を招んで、横濱自慢の支那料理なんかを御馳走したし、復興局長官になつてからも、よく復興進捗視察なんかを名として人をよんだ。

だから適度な世渡り術は、あれでちやんと心得て居るわけである。かう云ふ男だから無産黨に對するかけ引なんかも、決して拙くなく市長就任前に會見申込みを拒絶して置いて、さていよ〳〵就任すると今度は自分の方から進んで會見を申込んで單純な無産派を欣ばしたりするところなか〳〵味をやる。

市長としての彼れの試金石は差向きガス料金値下げ問題である。彼れはそれにも公文を以て問合せしたりして居るものゝ、すでに彼れが三木中島野合の所産であり、またそれを承知の上で出て來たものである以上此一派と東京瓦斯會社の關係から推して、堀切が果してどこまでやるかはまだ未知數と云ふべきであらう。

蓋しその性格から云つても彼れは西久保や永田のやうに強い潔癖家ではなく、唯冷靜なる事務家であるから。それは兎もあれ『明るい東京市を建設したい』と云ふステートメントを出しても、それがまことらしく響く市長を得たことは祝福しなければなるまい。

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルデイング七七六區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)二〇六番

代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金はなるべく振替を御利用下さい。
御註文の際は郵税をお忘れなく。
宛名は必ず「中央公論社代理部」として下さい。

麻雀の廉價販賣

◆前號豫告の通り、本月からいよいよ近品を開始すべく一切の用意が出來ました
◆麻雀は、元來支那のものですが、現在では全く世界の社交界を風靡する勢で、我が國でも近來急速に大衆の迎へる所となりました。
◆從來非常な高價で、到底限りなき需要を滿たす事は不可能とされてゐた麻雀牌を十三圓以上六十圓までの廉價でお頒ち致します。
◆先づカタログを御請求下さい。

[illegible]

古本賣買のお取次

主として地方在住讀者諸氏の御便宜を計る目的で特設いたしましたのが弊社代理部の「古書案内部」です。どうぞ御遠慮なくどしどし御用命下さい。古本御購入のお取次はもとより御賣却御希望の古本古文書、和本、錦繪等價格不明の御不用品の評價、賣却のお取次をいたします、お問合せだけで御返事いたしかねるやうな種類のものならば、一應御送附下さいますれば早速市内一流の專門家に囑して正確迅速に評價して御返事を差上げます。

古本賣買お取次規定

(A)紹介は往復葉書又は返信料添付のこと。(B)註文はなるべく振替で、但送品は着金後一週間以内。(C)評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月、發行所、汚損の程度等詳細御報のこと。但古文書、錦繪等の如きは現品拜見の上ならでは正確に評價できない場合がありますからその旨お含みおき下さい。御返送の場合の送料は申受けます。(D)宛名は中央公論社古書案内係と明記のこと。

小型活動寫眞撮影器と ガリレオ双眼鏡

◆本社代理部特選のシネニゾー小型活動寫眞撮影器は、科學の國ドイツの最優秀品です。



◆シネニゾーは、自動式と共に手動式を兼ね、一齣づゝの撮影から、高速度撮影に至るまで、小型活動寫眞撮影器としては、他には見られない凡ての條件を具備してをります

◆時には撮影者自らの運動を撮る事も出來、高速度撮影では、飛び交ふ小鳥の巧みな空中の動作を分解する事も出來、シネニゾー一臺を所有する事によつて、本日の行樂を永遠の生ける記憶として隨時隨所に再現する事が出來ます。

◆先づカタログを御覧下さい。

九ミリ半撮影器　一六〇圓ヨリ
十六ミリ　一六五圓ヨリ

◆本器は普通オペラグラスと云はれてゐるものの中で、最高級品です。

◆高級な光學ガラスのレンズ十二枚を使用し、極度に精密な設計により一々嚴格な試驗濟ですから、レンズの周邊まで鮮明に見えます。

◆オペラグラスと云つても、野外用の日除けが附てゐますから、廣大なグランドの一角に立つて、選手の一擧手一投足の微妙な動きをも正確に、見る事が出來ます。



◆光學的に正確なばかりでなく、價格に於ても亦市場の類似品の比ではありません。

定價　A(少し小型)十八圓　B十七圓　――ケース付――
送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

スプリングコート兼用

バーバリーレインコート

英國製と同樣の生地を用ひ純國產品。品質も仕立も非常に吟味されたもの、色は紺及茶系統の最も嶄新な流行色。

寸法襟下鯨二尺六寸より二寸每に各種

定價　一着　十九圓



純良レインコート

上質の羽二重にゴムを裏付して、上品な縞柄を染出したもので如何なる豪雨にも絕對に水の透る事なく、折疊んでサツクに入れゝば少しも嵩ばらず、一番輕量で、夏期流行中突然の急雨に備へるには最適。色はネヅミ、茶、テツ系統の最も嶄新なもの。

定價　一着　十三圓

送料東京市內十二錢　內地二十七錢　領土五十五錢

經濟と實用とを兼ねた

替ズボン

地方在住の方々のために、最も經濟的實用的な替ズボンを左記の特價で提供致します。

茶褐スレン園藝用	二圓十錢
鼠綿綾セル執務用	二圓四十五錢
黑セル	五圓四十錢
上等黑・紺セル	五圓八十五錢
絹セル黑・紺セル	七圓
鼠フラノ(蒲ラシヤ)	六圓
夏物	
白地縞綿セル	二圓三十錢
白綿ギヤバジン	三圓二十五錢
純毛白絹セル	八圓八十錢

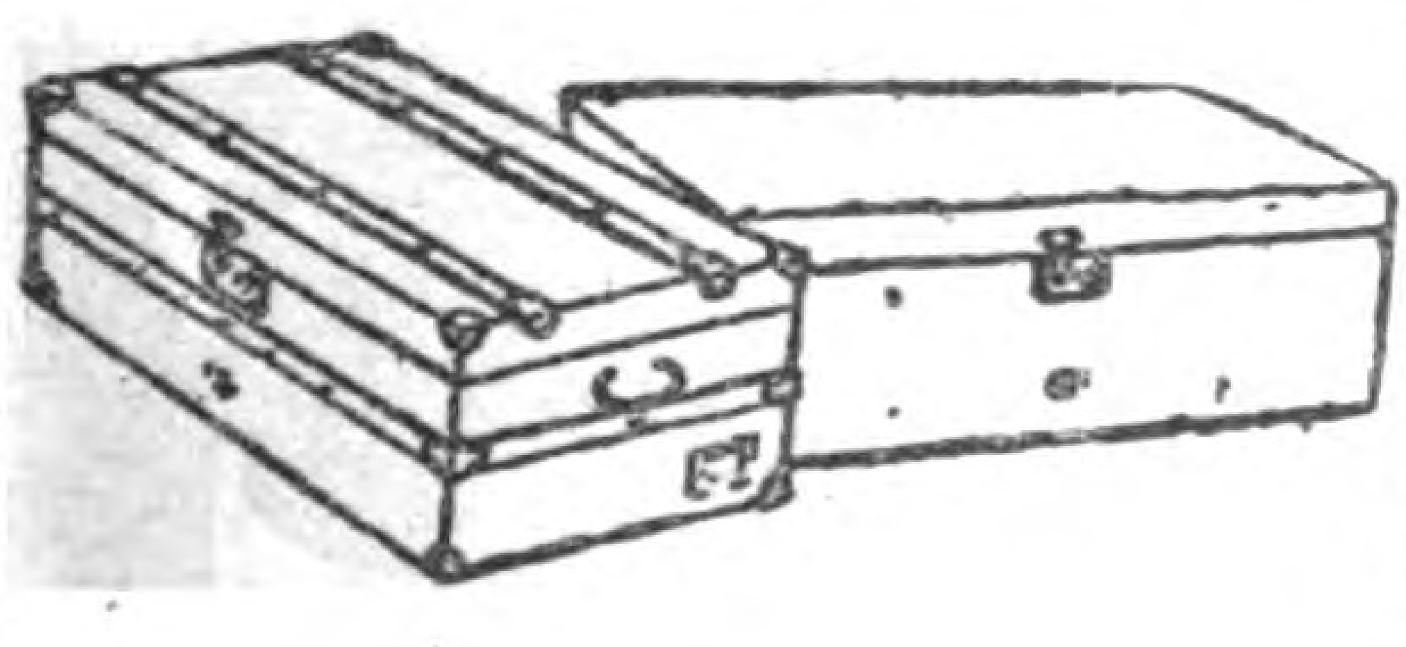
寸法

	腹廻鯨	股下
大	約二・五尺	約一・九尺
中	二・三尺	一・八尺
小	二・二尺	一・七尺

送料　東京市內十二錢　內地十八錢　領土四十五錢

昭和文庫

厚い鐵板張り、タテ二尺七寸、幅一尺二寸、厚サ八寸五分の堅牢な容器で、內部の四方を丈夫な木板で圍み、中にナフタリン樟腦入れを備へ、外面には漆の燒附けを施して立派に仕上げ、絕對に外氣の侵入を防ぐ樣工夫された、毛織物又は貴重書類等をしまつてをくのに必須な品です。



特製はトランクとして、そのまゝ送り出す事が出來、鐵筒や支那鞄より遙かに便利です。

定價　特製　九圓八十錢
　　　並製　六圓八十錢

送料東京市內十二錢　地方運賃先拂

洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備した紋紙製品で、而も洗濯が出來、布よりも丈夫です

定價　大　一圓二十錢　小　八十錢

送料　東京市內十二錢　內地十八錢　領土四十五錢

スタイルセット

油やアルコールを含まず。しかも餘りさばさばしない理想的の新美髪料で、香水とポマードとを兼ねた合理的新製品であります。
使用法はまづ髪を少量の水で濕らしておき、掌に少量のスタイルセットを滴らして、毛髪全體にゆきわたる様に塗りつけて、後は普通に櫛で自由自在の型に整へます
定價　六十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢
領土四十五錢

にきびとり 美容水

脂肪過多で、年中にきび其他の吹出物が出來てゐるのは、男子でも見苦いものです。
このにきびとり美容水は、さうした人のために造つたもので、これを常用すれば、何日の間にかにきびも吹出物も忘れてしまひます
但し荒れ性の人には適しません。
定價　一圓五十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢
領土四十五錢

シエービングローション

顔剃、髭剃りの後につけると、刀剃まけすることとなく、肌を痛めないので好評を得てゐます。
粗製品と異つて、ぷつぷつの出來る心配もない、皮膚の保護劑です。
定價　一圓五十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢
領土四十五錢

ユトマ・ポマード

毛髪の榮養を兼ねた純良なポマードを棒狀輕便な容器につめたものです。使用法は蓋をとつて容器から直接に毛髪に塗りつけるだけで、少しも手に脂がつかず、使はれた丈の脂は常に表面の網を潜つて出て來る裝置の、一抹の無駄もない、至極重寶な、特に外出前や旅行先での使用には一層便利を感じます。
定價　六十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢
領土四十五錢

バレイ安全剃刀

バレイ程完全且簡便な優秀品は今はどこにもありません。巧妙な裝置で、どんな素人にも。毎日研ぎたての刄で剃る事が出來、一枚の刄が半年以上も毎日の使用に堪へ、經濟的にも他の普通の安全剃刀の比較ではありません。
C型(替刄二枚付)　一圓五十錢
同　二圓
B型ニツケル箱入十三圓五十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢
領土四十五錢

アテナ萬年筆

使ひ出せば、間もなく執筆者の手と書風になじみ、使へば使ふ程いよいよ書きよくなると云はれ、舶來品に勝る國産第一の優秀品です。
定價　三圓五十錢　四圓
四圓五十錢
(回轉式吸入型)　三圓五十錢
送料内地十八錢領土四十五錢

インターナショナル式 新聞綴器

近來の新聞はみな欄外が狹くなつたゝめに、普通の新聞綴器では折目に近い部分は讀む事が出來ず一々取はづすのは餘りに煩瑣極ると云ふ缺點を、完全に一掃した新工夫の新聞綴器です。本器は、新聞を挾んだまゝ欄外その他の部分も完全に讀む事が出來、廻轉裝置で任意の一枚でも容易に取はずせる點に最も工夫をこらした、凡そ新聞を讀む家庭には是非備へ度い品です。
定價　一圓二十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢
領土四十五錢

理想的な 産兒調節器

獨逸製「オクルサトル」は。海綿纖維質の部分と絶對に水液の通過を妨げるゴム障壁と把柄から成つてゐる産兒調節器であります。
このオクルサトルに添附の殺菌用錠劑を挿入して使用すれば、錠劑は内部で溶けてカーボニツクホームを形成致します。この泡は隙間なく擴り、殺菌微生物も皆殺して了まふもので、オクルサトルの海綿様部分は、この殺菌錠溶液を吸收して、約一ケ月間保存いたします。
オクルサトルは、非常に簡單で且つ巧妙に工夫されてをり、實際使用中でも、本人自身氣が附きません。これは永久的使用に堪えるものですから二回目からの御註文のために、別に錠劑だけが用意されてあります。
一度お産した人までは〇番
三度お産した人までは一番
四度以上の人は二番を使用
定價(錠劑十二錠付)　六圓
錠劑のみ十二錠　二圓
送料東京市内十二錢内地十八錢
領土四十五錢

除毛劑タキー

顔に危險な刀剃を用ふる時代は過ぎました。
このタキーは、手足、腋の下、襟、其他任意の所に塗つて、五分乃至十分後に水で洗ふと剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかり毛が除れてしまひます。
これを五六度繰返して使用する間に、次第に毛が薄色の弱いものとなり、遂には全く發生しなくなつてしまひ、又腋臭を除く效果があります。
皮膚に害はないかと云ふ問合せが澤山參りますが、一個毎に添附の説明書の通りに御使用下さる限り全く無害で、效果は一層確實です。
定價マスクリーム付二圓二十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢
領土四十五錢

オプチサナ

獨逸藥品の偉力は世評の認める所ですが、特にこのオプチサナはせきを止めるのに著しく效果があります。甘くておいしいので百日ぜきの子供も喜んで呑み、一週間服用すれば效目があらはれ、殊にぜんそくのせき止めには喜ばれてゐます。
各所々から醫家の纏つた御註文がありましたが、今後十個以上纏つた御註文には、多少の割引をいたします。
定價　二圓
送料　東京市内十二錢
内地十八錢　領土四十五錢

ネオラチヲリン 痔の妙藥

慢性痔病にも、急性痔病にも著しい效果を持つネオラチオリンは危險なきゝめありと、荻原博士も推奨されて居ります。
定價(大)二圓　(小)一圓
送料東京市内十二錢内地十八錢
領土四十五錢

プデイン 糖尿病特效散

體内の榮養分を、どんどん失つてゆく糖尿病は、中々全治し難いものとされてゐますが、このプデインを服用すれば、直ちに病状の進行を止め、奇妙に根本から全治さすと云はれ、本社特選の獨逸製藥品であります。
定價　十二圓
送料東京市内十二錢内地十八錢
領土四十五錢

強精劑ルンブリン

一時的の昂奮劑でなく、其の吸收性は極めて敏活で、血肉細胞の新陳代謝を旺んにし、全身神經を強壯にして、特に神經衰弱に偉效を奏する最新強精劑であります。
預白色の錠子に造られた本劑は頗めて愉快な獨自の芳香を放ち、藥劑の服用を厭忌する婦人であつても喜んで用ゆる事が出來ます。
定價(一週間分)三圓五十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢
領土四十五錢

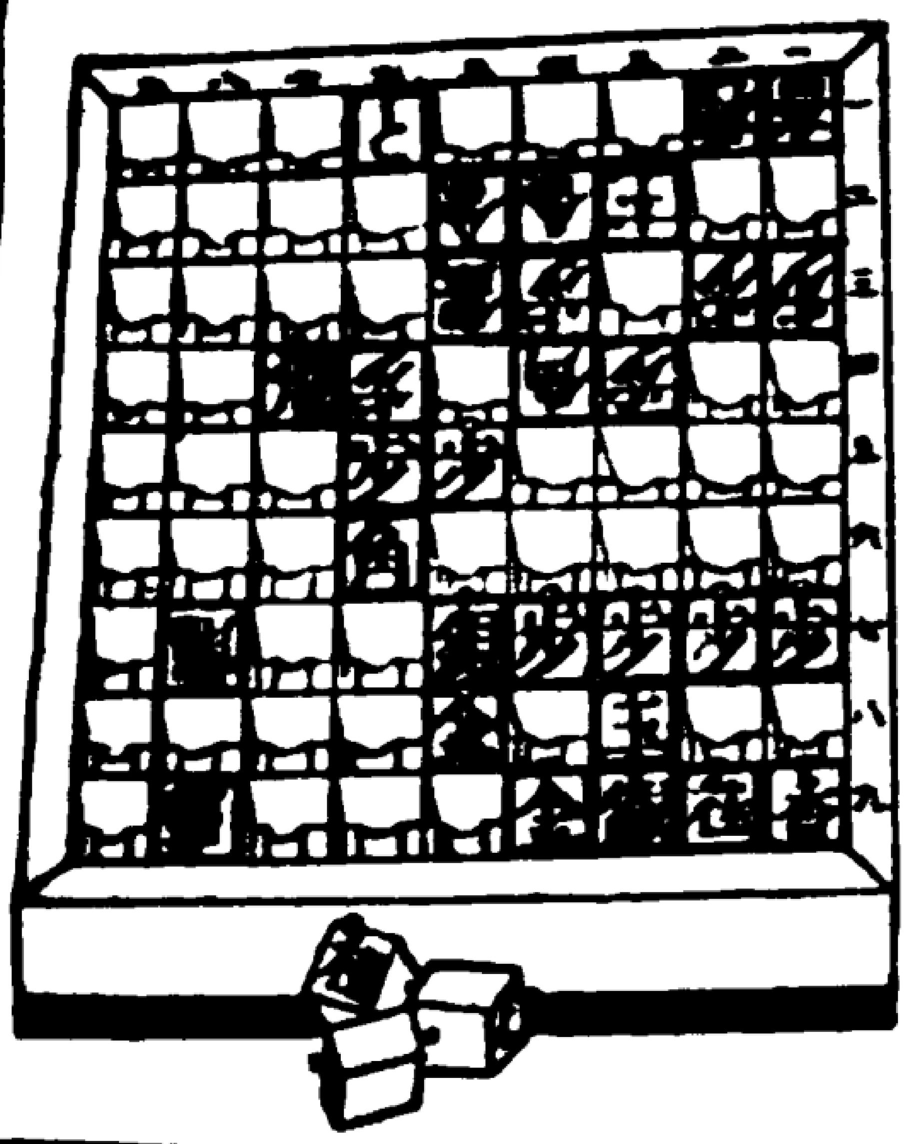
萬能書見臺

小には机上の書見臺から、大には約五尺五寸位までの自由な高さになり、腰掛けて見る場合、寢て見る場合等には各々に適合した形となり、書架の部分には頁止めを附してありますから、炎夏樹蔭に立つても風に吹きめくられる心配もなく、音樂用の譜面臺にも好適、屋外ではスケツチ用の畫架ともなり、横に曲げて氷嚢つりとなり、寢臺に取附ける事も出來ます。

大部分は鋼鐵製ニツケル鍍きの、木箱入携帶至便、分解組立共に自在な 文字通り萬能書見臺です。

寢ながらの書見には、下向の書物を完全に把持し、而も高低左右角度長短傾斜等、意の欲するまゝです。

定價 一臺 八圓五十錢
送料 東京市内十二錢内地五十五錢領土八十五錢



最小型將棊盤

縱三寸七分横三寸二分厚さ五分の最小型輕便將棊盤です。

木とアルミニユームとで造られてありますから、ポケツトに入れて少しも重く感じる事なく、駒には一個一個磁針が附けてある等、婦女子の眼にも可愛らしい程のものです。

駒は標準文字を用ひ、盤には縱横に數字が記されてありますから、新聞を見ながらの研究には一層便利です。

其の他繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に、或ひは湯上りの腹ばひのまゝで、或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る、好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。

定價(説明書附) 一圓八十錢
送料 東京市内十二錢 内地十八錢領土四十五錢

最新艶出布

このフレツシユマン ダスト アブソーバーは、特殊の纖維物に機械的工程と化學的處理とを施したものでありますから、器物固有の塗色を損ずる事は決してありません。

この布は從來の艶ふきんと異り、塵りを吸ひ取りしかも美しい艶を出す不思議な作用を有して居ります。

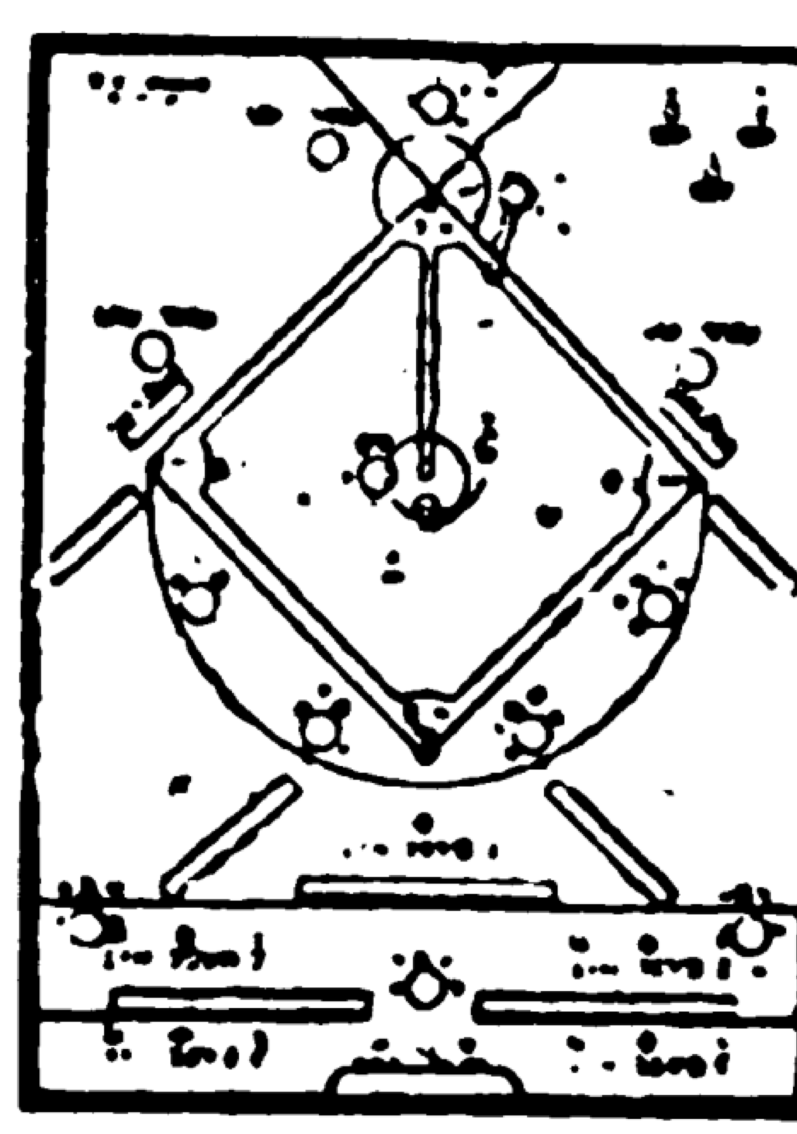
漆器類、殊に蒔繪の器具、ピアノ、オルガン、卓子、自動車等用途は中々廣く蓄音器のレコードをこの布で拭へばレコードの壽命を永くし、音は非常に美しくなります。

定價(金屬製容器入) 一圓
送料 東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

誰にも愉快な
野球競技盤

約二平方尺の盤上へ野球の實戰と同じ興味と緊張味を移す事に成功したのが、この高級式野球競技盤です。

盤面は飛行機上から見た野球場さながらで、投手は球にあてた指の力一つで、直球、曲球、緩球、剛球自由自在に出す事が出來、打手も亦選手がボックスに立つた時以上の緊張した氣分で、バットの振り方で安打本壘打を飛ばす事も出來れば油斷をすれば投手に好く計られて、三振「アウト」にされて了ひます。



實戰に臨む人はもとより、野球の興味が婦人の世界にまで及ぼうとしてゐる現今、高尚な新らしい家庭遊戯として、一般の家庭におすゝめ致します。

定價 小型 一圓六十錢 中型 三圓八十錢
送料 東京市内十二錢内地小型は十八錢中型は二十七錢領土小型は四十五錢中型は五十五錢

スマドレ・ヘヤトニック

このスマドレ・ヘヤトニツクは米國で唯一の日本向の化粧料を出してゐるスマドレ會社の製品でニユーヨーク、ロンドン、パリー在住の日本人間に愛用されてゐるものです。

洗髮後や朝夕に數滴を毛髮の根元に振りかけて、指頭で輕くマツサージしてをけば、フケを除り拔毛を止める事は妙であとには得も云はれぬ芳香が永く殘り、使用するにつれて、毛髮は絹の様に軟くなり、日々益々の美を増します。

定價 婦人用 紳士用 特大瓶各二圓五十錢
送料 東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

スマドレ・シャンプー

理想的洗髮液スマドレ・シャンプーは短時間に地肌からキレイに汚れを落すことが出來、同時にフケを除り艶かな潤のある美しい髮にする一方、ちゞれ毛や、縮毛を直す事は全く不思議な程で、スマドレ・ヘヤトニツクと共に、ニユーヨーク、ロンドン、パリー等の日本人に愛用されてゐる世界的特許品です。

日々忙しい社會に立つて、男子の髮を整へる事が、重要な禮儀の中に數へられる今日、僅かな時間に之を用ひて、每もさつぱりとした髮で、自他共に氣持ち良く行動する事が出來ます。

定價 特大瓶 二圓
送料 東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

春と夏の香水

此の頃は一般に一年中香水が用意される樣になりましたが、それも何時も同じものでなく、その時々の氣分に應じ、出る場所に應じて、變つたものを用ふるために、中央公論社代理部で特に四季の香水を揃りました。

中でも、すがすがとした春の旅、夏の納涼の香水は、今夕もいとして是非おすゝめ致し度いもので、御贈答品にもふさはしい樣、華麗な紙製の函に納めてあります。四季何れでもお好みのまゝにお註文下さい。

定價(春・夏・秋・冬) 各二圓
(四季組合せ)七圓五十錢
送料 東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

御注意

◇振替は、一番安全な送金法ですが、普通近い所で四日位かゝりますから、そのお積りで、御註文は少々お早目に願ひます。

新着月評

最も權威ある批判であり推薦である

折口信夫著　古代研究（國文學篇）

久松潜一

　折口信夫氏の古代研究が發表されたのは、古代文學研究の上に大きな喜びである。折口氏がその民俗學的立場を以て古代文學の新しい見方を提唱されてから最早かなり長い年月になる。その間氏は絶えず一貫した立場でその所説を部分的に發表して來られた。日本に於ける民俗學的立場は柳田國男氏等によつて唱へられ、從來多くの興味は與へながら學問的には閑却せられた各地の民間説話や民間風習を豐富に蒐集し新しく見なほすことによつて、次第にその學の成立を見つゝあつたのである。さうしてかういふ民俗學の成立のためには折口氏の研究も重要なる寄與をされたのは勿論であるが、殊に折口氏はこの民俗學を民俗學として研究せられるのみならず、その立場から、古代國文學の研究を行はれて、國文學研究の上に新しい態度をたてられたことは注意せらるべきである。氏の古代研究の民俗學篇が國文學篇の立場を見る上に離すべからざる關係にあることは言ふまでもない。

　思ふに國文學史の扱方に於て列傳的の扱方から思潮もしくは形態による扱方に展開したことは大きな革新であつたが、さうしてこれは文學の本質研究としては注意すべき點であるが、多少文學の普遍的な性質のみを重んじて、日本文學の獨自な特殊的な姿を見ることに缺けてた點があつたと思ふ。そこに演繹的に過ぎて歸納的な點が乏しかつたのである。その結果日本文學の特殊的な性質を見る必要を感じて來たのである。日本人の有する文學意識を考へることもそのために現れた一の傾向であるが、更に日本の民間説話、民間風習を蒐集考察することは日本文學の母胎や根源を探り、また日本文學の特殊性を明らかにする上に重要なる方法として考へられるのである。かくの如きは從來の有職故實研究や風俗史研究の上にも多少見られた所であるが、その立場が固定してゐた上に有職故實に於ては公家もしくは武家のそれに止まつて民間風習には未だ至らなかつたのであるが、新しい立場を以て民間風習に着眼した所に注意すべき點がある。そこにこそ文學の原始的な姿は見られるからである。たゞ文學意識の發生した後の文學はかういふ民俗學的な立場のみから扱ふことは困難であるが、文學意識の發生以前の文學や、かういふ系統を引く文學の研究に於ては民俗學的立場は最も重要なる研究の立場となるのであらう。さうしてかくの如き立場による考察の最もまとまつた創見の多い研究として折口氏の國文學篇は擧げられなければならない。

　然らば本書に於てはかくの如き立場にたつてどれだけの結果を得られたか。これは短い言葉では言ひ盡されないことであるが、本書に收められた十七篇の論文は對象からいふと大體四部分に分けられる。第一は國文學の發生に關する研究であり、第二は和歌を中心とした中古から中世へかけての文學の考察であり、第三は萬葉集の研究であり、第四はその他の部分的考察であつて或は叙景詩の發生をとき、古代生活に於ける戀愛をとき、古代民謡を研究し、日本書と日本紀との關係をとく等種々の方面にわたつて居るが、日本書の考察の如き歴史的にも注意すべき新説を提供して居

られる。しかし本書の主要なる部分は前の三の考察にあることは言ふまでもなく、その中でも國文學の發生は最も注意すべき研究であり、民俗學的立場による文學の發生論として尊敬すべき卓説にみちて居る。文學の發生に關して土居氏の文學序説第二版や土田氏の文學の發生をはじめ種々の研究があるが、この問題の解決は民俗學的立場によつてはじめて解決されるべきと思ふ。折口氏は文學の發生に信仰起原説を主張されて、信仰による呪文に於てその最も古き形を見出されて居る。さうして「戀愛や悲善の激情は感動詞を構成ずる事はあつても、文章の定型を形づくる事はない」と言はれて居る。この後の提言には多少の異論もあらうが、信仰が文學の重要なる起原をなすことは確説であらう。さうしてこの呪言から出發した文學は叙事詩の形態を有するといふ結論は、出發點を異にしながら土居氏等の立場から來た結論と同一になつて居るのである。氏の文學發生論はまれ人をとき、賤民の文學をとき、戲曲、舞踏詞曲の考察にまで進んでゆく。氏の鋭い直觀と洞察力とは時には所謂論理を飛躍しても、氏の言はれる民族論理と體驗の確實さとを以て新しい問題と新しい結論とを作られてゆくのである。

短歌本質成立の時代と女房文學から隱者文學への二篇は和歌を中心とした中古中世の文學の考察であるが、こゝにも鋭い觀察が見られる。たとへば源經信の歌才を見出し、玉葉風雅集の價値をといて、そこに短歌の本質が完成した時、歌人としては伏見院と永福門院とを見出されたのも同感される。萬葉集に關する四篇の中、萬葉集の成立では平城天皇の御代の完成とする説を細やかに説かれて居り、萬葉びとの生活と萬葉集研究では國文學の發生で扱はれた立場から萬葉集を説かれて居る。

かういふやうに氏の扱はれた問題を見てもかなり廣くわたつて居り、それ〳〵に創見を示して居られるが、本書の最も大きい特質はその古代文學研究に於ける一の立場を確立された所にあるであらう。部分的に見て必ずしもそのまゝにうけ入れられない點があつても氏の立場の上から見るとよく分るやうな心持がする。それほど氏の叙述は大きな體系を持つてゐる。どこを見ても氏の立場がくまなく行きわたつて居るのを感ずるのである。さうしてこれだけの量をもつ國文學篇も氏の大きな體系の一部分に過ぎないやうな感がする。その大きな體系に容易に入りこんで了へない焦燥と氏の藝術的な表現とが時に難解を感じ

新刊紹介

價格と獨占（高田保馬著） 經濟學理論の核心たる價格と獨占に關する博士の近業にて收むる所「獨占の本質」「剩餘價値と資本蓄積」「經濟靜態論」「經濟とは何ぞや」「歸屬學説について」「生產係數論」「私の人口論」「資本蓄積第二論」の八篇。所説獨創の見に滿ち啓蒙暗示に富む、現代の資本主義日本を理論的に解するに必讀すべき好著。尚本書の少からぬ部分は河上土方博士等との論爭及び批評に當てられてゐる。（菊判三八四頁、定價二・三〇、東京京橋第一相互館千倉書房）

現代歐洲の藝術（マーッア著・藏原惟人杉本良吉共譯） 著者は明確なるマルクス主義的分析によつて歐洲現代各國の藝術全般の檢討を試みて居る。爲めに混沌の觀ある西歐藝術の狀態及び發展は諧調と論理とを與へられプロレタリアの文化建設的意義も解明されてゐる。マルクス主義藝術理論叢書。（四六判二八八頁、定價一・〇〇東京市神田區錦町一ノ一二上野書店）

支那革命に於ける農業革命の躍進（アジアチクス著・別府重夫譯） 原著者は國民政府機關誌「支那通信」編輯者たりし人、本書は同誌所載の論文集にして、曩に第一部を出した「廣東から上海へ」の第二部「武漢から上海へ」の全譯である。支那問題叢書2（四六判三七二頁、定價・六〇、上野書店）

フォードかマルクスか（松山壯才譯） 原著者ヤコブ・ワルヘルは、自働車王ヘンリー・フ

させるが、しかしそれはよき香味にようはされたやうな快さがある。私は今その香味によひながら汲んでも汲んでも盡きない靈泉のやうな氏の頭腦から國文學上の創見卓説が今後も不斷にほとばしり出ることを祈らずには居られない。(菊判七〇六頁、定價六・五〇、東京麻布本村町一八　大岡山書店)

西村眞次著　人類學汎論

小山榮三

船の史的研究で特に有名な西村眞次氏は「文化人類學」「體質人類學」「萬葉集の文化史的研究」「日本古代社會」等殆んどたちつゞけに其の業蹟を發表せられ今又ここに「人類學汎論」を上梓された。私は先づ著者の異常な精力と該博な學殖とに驚嘆してゐる者である。

我國の人類學の發達は明治十二年モールスの大森介墟編の出版以來既に五十年を閲みしてゐるが人類學的興味と研究が一般に普及したのは極く最近に屬してゐる。その理由は多々あるであらうが通俗的な近寄りやすい形を以つて人類學を記述し一般民衆の人類學的關心の水準を昂めようとした氏の功績が最も偉大な寄與をなしてゐるであらう。殊に其の流暢な文章と妍麗な筆致とはとかく乾燥無味になり勝ちな學術書を創作を讀むが如き容易さと興味とをもつて理解せしめる。從つて氏の述作は啓蒙的なるところに其の存在の獨特な意義があるのである。

此の點に於て氏が「私は日本古代史の研究を專門としてゐるものであつて人類學は單に專門の研究を正しい道に導びかう爲めの基礎學を修めてゐるに過ぎない」と自ら謙遜されてゐるにも拘はらず世間が氏を目して人類學の第一人者と數へてゐる原因であらう。

氏の著書の持つ價値と内容は既に最大級の賞讃の辭の下に多數の人々に依て紹介されてゐる。從つて私が今更に本書の「良き方面」を讃へることは寧ろ徒勞であり、讀者も又迷惑と感じられるであらう。それで私は逆に批判的立場から本書が含む學術的體系と其の組織の基體を形成してゐる取扱方を檢討してみようと思ふ。私はこうすることに依つて一に著者への參考に供し、二に讀者に異なつた人類學の存在と、獨斷からの解放を注意し三に私自身が教を乞はうと欲するのである。

著者は先づ「本書の第一特色は全然新體系を有つた點に在る。著者は在來の如く人類を

オードの事業經營方法はマルキシズムの否定ではなく寧ろその例證だと説く。(四六判二三六頁、定價・九〇、上野書店)

コミンテルンと戰爭(今村保男譯)　帝國主義戰爭に對する、竝にソヴイエート聯邦擁護の爲のコミンテルンの鬪爭に關する諸文書を集めたもの。(四六判一六三頁、定價・八〇、上野書店)

支那古代史(ヒルト原著・西山榮久譯補)　原著ヒルト博士は支那學の權威、その "The Ancient History of China" を譯せる本書は、博士獨自の研究竝に諸學者從來の研究成果をも併せ擧げ支那古代史を批判的科學的に組織化せるもの、譯補文また雅馴平易高育。絶版となれる好譯書の再刊を讀書家の爲に欣ぶ。(菊判四一二頁、定價三・五〇、東京市小石川區原町丙午出版社)

社會思想批判(安伏高信集)　本書は著者が社會主義思想の研究を始めた當時のものから十二篇を採錄せるもの、社會主義思想入門書として一讀の價値がある。(四六判四二四頁、定價一・六〇、東京市京橋區山下町、田舍社)

資本主義頽廢の諸相(高橋龜吉著)　日本の資本主義制度は外部的には無産階級の擡頭により内部的には資本主義制度自體の頽廢により今や崩壞の危機に立つ。本書は後者に於ける資本主義の自己崩壞現象を具體的に取扱へるものにしてその點に本書の特色が視はれる之等諸論文は主として諸雜誌に一度發表されたものを纏めたもの。(四六版四九三頁、定價二・二〇、東京京橋區第一相互館千倉書房)

體質と文化との二つに區分せず、兩者を打して一丸となし肉體と精神とを同時同格的に取扱ふところの新人類學を建設した。本書に於て私達は初めて眞の一般人類學を得たわけである。」と揚言してゐる。然しながら此の企圖は果して其の主張の如く論理的な統一を以つて遂行されてゐるであらうか。

又著者の主張する文化と體質の一元的操作は方法論的に可能であらうか。

氏は「方法論上の諸問題」に於て「獨逸南西學派の尻馬に乘つて普遍だの一回性だのと議論してゐる間に私達はタイラルに系統を引くところの事實に重點を置く」と論じられるが――著者の云ふ南西學派は恐らく西南學派の誤りであらう――然し理論的なるものは單なる事實から自然的に發生するものでない限り「事實を敍述する」ことは必然的に對象の認識を豫定しなければならない。敍述する爲めには思惟の要求に基づいて事實を整理し雜多なもの丶中より一定の徵表を抽出し揭示しなければならない。自然と歷史の對立は人類に於て此の二現象間の緊密な相互關係を容認しても尙ほ所與のものとして體質並に文化に對應する認識客體の二元性――タイラーの體質人類學と文化人類學――の異なる範疇に措定されるのであつて此の體質と文化の二概念を取扱ふ場合にはそこには科學一般に妥當する自然科學的な論理と文化科學的な論理の對立があるのである。此の二元的な取扱ひ方は最近オックスフォード、ロンドン大學等及び一般に大陸學者の承認採用してゐる合理的な分類である。氏は此の基本概念に關し充分な識別を持たない。否寧ろことさら回避されたやうである。それで「從來概ね並列に過ぎなかつた人類學を系列に改めた」と稱せられるも事實は文化と體質が並列的に取扱はれてゐるのであつて其の間に何ら有機的連絡がないのである。此の兩者が系列的に組織される爲めには文化が體質の抽象的相關(コレレート)であるか其の本質的なもの丶函數的依存關係が最初に證明されなくてはならない。氏は本書の構成に於て非常な努力も拂はれてゐるにも拘らず此の檢證を怠つた爲めに學術的に云へば其の一般人類學樹立の企圖は全く不成功に終つてゐる。

又氏は人類學は綜合的に取扱はれることが現今世界の一般傾向であると論じられてゐるが之は甚だしき誇張であつて私には寧ろ逆な傾向を辿つてゐるように思はれる。此の點に關しては氏はタイラア、マレット等を引例されるが同じ英米派とも云ふべき更に近代のテ

古代研究――民俗學篇第一册(折口信夫)　我國民俗學國文學の權威たる著者の論文二十六篇を收む。曾て何人も容易に試みなかつた方法即ち民俗學的檢討により古代文化の凡ゆるものに發生的な系統を與へたもので、透徹せる觀察と超然たる構想とは典麗なる表現を俟つて金玉の響を發して居る。近來の名著として推薦する。(菊判六四〇頁、定價六・〇〇、東京市麻布區本村町一八大岡山書店)

古希臘風俗鑑(矢野源一譯)　原作者マルセル・シュオブはフランス文壇に象徵的幻想的作風を以て獨得の地歩を占めてゐた人で、これは一八九四年に公けにされたMimesを反譯したもの。材を古代ギリシヤにとつた短い散文詩集で奔放な才氣の溢つた好著である挿繪二十三葉。(四六判一一六頁、定價・一八〇、東京麴町區一番町第一書房)

お互に愛したら(鈴木善太郎譯)　モルナアルの短篇集の飜譯、コントとも掌篇小說又は戲曲と名づくべき短篇が三十近くも收められてゐる。いづれもフランス流に氣のきいたものばかり。譯文も流暢裝幀もいゝ。(新四六判二七五頁定價一・八〇、東京麴町區一番町五第一書房)

戲曲オルフエ(ジャン・コクトオ著、堀口大學譯)　一篇の戲曲並に自筆のデッサン數十葉に才人コクトオの全貌を見る。(新四六判三[illegible]頁、定價一・八[illegible]、第一書房)

合金學(工學博士作井正治著)　本書は小工場及び個人經營の家內工業的工場にその如き設備の完備なく良き技術者なき工場の懇切な

イクソン、ハツドン、ゴールデンワイザー等の逆な傾向を無視して居られるやうである。

次に本書の缺陷は人種―同時に人類の成立混血、消滅現象として現はれる遺傳學的一般原理の適用即ち輓近最も研究されてゐる生物學的人類學に殆んど觸れてゐない事である。

更に又氏は其の進化過程の取扱ひ方に於て所謂先驗的進化論的見解と文化史的見解とを混用されて其の統一を亂し且つあれ程廣範に亘つて諸學說を紹介されてゐるに拘はらず英米以外の人類學を殆ど度外視されてゐると云ふことである。

以上は私の一寸と氣付いた非難である。然し又は望蜀の感であるかも知れない。そして私は以上の缺陷の故を以つて本書の價値を少しも輕視しようとは思はない。何んとなれば本書は現在日本で出版された人類學關係の書物中最も包括的なものであり且つ人類學の全分野を集大成して鳥瞰を與へてゐるからだからである。更に又人類に關する總ての問題を百科辭典式に含んでゐる本書の中に、私達は無數の教示を發見し、將來の研究の指針を求めることが出來る。この意味に於て本書は人類學に關心を持つものゝ必讀の書として推賞されるであらう。(菊判四八〇頁、定價三・五〇東京神田錦町、東京堂)

那須皓著 日本農業論

河西太一郎

一

凡そ我國に於て農村問題が、量的にも、質的にも、至重の意義を有することは、恐らくは多く異議のないところであらうと思はれる。量的には、此問題は、我農業の國民經濟的地位の重要性に掛り、質的には、その根本的解決の政治的並に社會的意義の深刻性に繫がる。これ蓋し我國に於ける農村問題の取扱の極めて愼重を要する所以であるが、これに關する一時の澎湃たる論議の後に、近時その研究が著しく實證的傾向を採るに至つたことはそれ自身確かに喜ぶべき現象であると云はなければならぬ。先に東洋經濟研究部編『明治大正農村經濟の變遷』あり、後社會經濟研究所著『農業政策綱領』があつたが、今又茲に那須皓博士著『日本農業編』の新刊を見るに至つた。前二者が著しく政策的見地よりの研究であるに反し、那須博士の新著は專ら事實そのものの研究的描寫を主としてゐる點にその大なる紳紹たらんため又一方斯界の工人並びに學生の參考に資せんがための意圖を以て世に送られたるものにして世を裨するの極めて大なるを信ず。(菊判七六〇頁、定價六・八〇、東京神田區神保町富山房)

世界經濟論(太田徹夫譯)　本書は獨逸マルクス經濟學界の偉材ナヒムソン氏の著書中白眉の稱あるもので、敏捷なる態度、深刻なる觀察と豐富な材料により、新舊學派の諸大家を縱横に解剖批判し現段階に於る經濟事象に辛辣たる批評をなしつゝ組織化した世界經濟論である。(菊判三六九頁、定價二・八〇、東京日本橋區本銀町三寶文館)

武家時代の研究(第二冊)(大森金五郎著)　西洋に於ては封建に次ぐ王政を史的過程とするに反して我國史の示せる事實はそも如何なる史因及び意義を有つか。本書は鎌倉時代より江戸末期に至る六七〇年即ち武家時代に公平寛大に批評を加へんとする意圖の下になされたるものの第二冊、論說的確、檢證豐富、理路整然、文章緻密。因みに第一冊は昭和二年一月發行。(菊判本文五一六頁附錄二二六頁定價第一冊二・三〇・第二冊三・五〇、東京市神田區神保町富山房)

良寛全集(大島花束編)　良寛についての斷片的な書物は今日までに數多く出版された本書は親切に正しく良寛といふ人を見てもらひたいといふ熱意から編まれたもので良寛に關する限りのことは殆ど全部といつていゝくらゐ蒐錄されてゐる。よき書物である。(菊判六三一頁、定價五・五〇東京神田區南神保町十五

特色があり、その意義に於て正に獨特の地位を占むるものである。

二

『私は本書に於て日本の農業を如實に摑かむと試みた。我が農業が幾何の土地と資本と勞力とを使用して幾何の生產を擧げてゐるが、國富生產上に於ける農業の職能が如何なるものであり、國民經濟上に於ける其の役割が如何なる特質と重要性とを持つてゐるか。これが卽ち私の說かんと欲した主題である』(序)そのために博士は本書の構成を、一、我が農業の國民經濟的地位、二、本邦農業の特質、三、我が農耕地擴張の限界と其の利用狀態、四、農業資本の構成並びに其の收益率、五、農業勞力の構成と收利力、六、米穀の生產費と價格、の六章に分ち、夫等の諸點から夫々詳密なる觀察を展開せられ、かくして本書の使命達成のために熱誠ある努力を傾注してゐられるのである。然らばその結果描き出されたる我農業の大觀は如何なるものであらうか。『屬領を合したる本邦全體としての農業は總戶數の五割六分に對する家業であり、三百九十五億の巨資を利用して六十一億の富を年々生產し、その中の四十五億は純富(生產物價格より消耗材料諸資を差引きたる殘額)として殘留するものである。內地のみにつきて之れを見るも農家戶數は總戶數の約四割九分、農業從業人員は總從業人員の約五割三分、農業勞働日數は總從業日數の約四割二分、又は總生產勞働日數の約四割四分を占むるものであり、生產資本總額の四割七分に當る處の三百五十億の巨資を利用して年々四十億の生產を擧げ、三十二億の純富を殘して我が國民生活の經濟的地盤を築くものである。農業と工業とを比する純富生產額に於て農は遙かに工を凌駕し、而して鑛、林、水產等は農工二者に比すれば其の生產額に於て格段の相違あるものなるが故に、農業は今尙、我が國民經濟の中樞たり根幹たるの地位を占めてゐるのである。』(三一九頁)次に「本邦農業の特質は如何なる點に存するか。小規模なる家族的勞作經營たること、養蠶及び開墾に伴はれたる主穀農業たること耕地の區劃小にして且つ分散し、急斜地をも耕地として利用し、從つて大機械を用ひざること、耕地の價格及び小作料の高額なること等を主とし、博士は更に之れを二十項に細別して指摘してゐられる。『然るに斯業の基礎たる耕地は、國家が開墾其他に鋭意努力するにも拘らず近年漸やく其の面積增進の勢が遲緩ならしめ、內地に至つては寧ろ後退の徵すら

岩波書店)

孔子鑑賞(大月隆杖著) 雜誌「人生創造」に連載されたものの外に「隱者と孔子及びその弟子」「陶淵的と孔子」の二章を新に附して一卷にまとめたもの。マルクスの流行もいゝが孔子の再吟味再批判もあつていゝ筈だ。(四六判三〇一頁、定價一・五〇、東京神田區小川町四一敬文館)

魚眠洞發句集(室生犀星著) 詩人である氏が詩の一形式である發句を作つたとて別に不思議のあらう筈がないのみならず、氏は實に十五歲の時から俳句に志してゐたのである。そして現在では發句道の奧の奧へと道を辿りつゝある。新鮮である爲には古風でなければならぬ詩的精神を氏は俳句によつて學び得たといつてゐる。裝幀典雅。(四六判一七六頁、定價二・〇〇、東京小石川目白臺武藏野書院)

黎明の南洋(井手諦一郎著) 十年間に五度ジャワ海を渡つたといふ著者の眼に映じたジャワの政治、思想その他國內の事情が有のまゝに記されてゐる。(四六判五〇六頁、定價二・五〇、東京牛込辨天町八一淳風書院)

類語辭典(横山青娥著) 文を草するに當つて困難を感ずるのは適切な辭句の發見である漢和、辭典、國語辭典が從來欠いてゐたこの缺點を補つたのが本辭典である。(三六判四二〇頁、定價一・五〇、東京小石川區江戶川町十八文園社)

朝鮮詩華集(中村漁波林編) (一九二九年第二輯、四六判七三頁、定價・八〇、大地舍)

郷土にうたふ(泉芳朗著) (四六判一一八頁

現はれ始めて、人をして内地耕地面積は既に其の絶頂を過ぎたるにあらずやとの疑を抱かしめる……今後に於ける耕地擴張の餘地は餘り大なるものと稱するを得ず、一方耕地の潰廢に歸する面積少なからざるを想へば、結局帝國內現存耕地總面積約一千二十萬町歩に對して其の一割以上の面積增加を見ることは之れを期待し難きものかと考へられる。』(三一九―三二〇頁)そこで博士は次に耕地の生産力の推移を詳細に觀察して、以て人口食糧問題の考察に備へ、更に進んで農業資本各要素の收益率を研究して、以て自作農創定政策批判の一基準を與ふるところあり、轉じて農業勞力の解剖に從ひ、以て我農業の最も重要なる特質を鮮明に浮彫せしめ、最後に我農産物中の王者たる米穀に就きて克明なる研究を展開してゐられるのである。而してその間に配するに百五十有餘の統計表(『本書所載の統計表中には單なる轉載にあらずして多大の時間と勞力とを投じて作製せるものが尠くない』)を以てせられ、以て我農業の實相の描出に於て遺憾なきを期してゐられるのである。

三

以上の簡略なる「紹介」によつて本書の風貌の幾分を讀者諸君に傳へ得たかと思ふ。要するに本書は那須博士の如き地位と準備とに俟つにあらざれば恐らくは不可能な、少くとも非常に困難な成果を一般に舉げてゐる點に於て讀者の感謝に値し、今後の我農業問題論の進展の上に寄與する處少くはないと思ふ。が筆者としては博士の問題の取扱に對して若干疑問を持たざるを得ないものがあるのであるが、遺憾ながら茲には最早それを詳論する餘白がないからその個々の點は之れを別の機會に讓り、茲に唯一つだけ筆者の讀後感を述べる事を許されるならば、本書の取扱は餘りに「物」に偏し、「人」が看過され過ぎてゐると云ふ事である。卽ち物としての農業の姿は刻明に描き出されてゐるに反し、農業に於ける人と人との關係がまるで無視されてゐる。百五十有餘の統計表の中に「自作、小作、自作兼小作別農家戸數」の一表が缺けてゐるのを以てしても思ひ半ばに過ぎるものがあるであらう。博士は『本書に於ては農業政策上の論議には殆んど觸れなかつた』(序)からだと云はれるかも知れないが、農業に於ける社會的生産關係も亦極めて重要なる一つの「事實」ではないのか。特に「人」の立場を重んぜらるゝ博士にして此の事あるは一見奇なるが如くにして、實は當然の歸結であるかも知れず、かくして本書『日本農業論』は遂に那須博士の『日本農業論』たらざるを得ないのである。(菊判三二二頁、定價二・五〇、京橋、南傳馬町、千倉書房)

定價・六〇、東京市外高田町雜司ケ谷龜原六一大地舍)

走馬燈(鈴木脩一著)(四六判五四一頁、定價二・五〇、東京市牛込區横寺町四三、聚英閣)

女浪人行進曲(北村兼子著)(四六判五一〇頁、定價二・五〇、日本橋區通二丁目四、婦人毎日新聞社)

晶子詩篇全集(與謝野晶子著)(四六判三一〇頁、定價二・五〇・實業之日本社)

政治家よ何處へ行く(山浦貫一著)(四六判五一三頁、定價二・〇〇、東京市麴町區三丁目日本書院出版部)

鳥の巣をとる 西田幸三著)(四六判八六頁定價・六〇、大地舍)

平原之兒(山田久壽郎著)(四六判一〇四頁川崎市砂子一の二六、詩之家編輯部)

蒼ざめた火(川井昌平著)(四六判一六八頁定價一・〇〇 青森縣三戸町、六居社)

各國勞働黨・社會黨・共産黨(酸井悌著)(新四六判二四八頁、定價一・二〇、日本評論社)

資本主義 探果汲水著)(菊判一二〇頁、定價一・〇〇、小石川區水道端、文明社)

旅に歌ふ(生田蝶介著)(四六判二七六頁、定價一・八〇 立命館大學出版部)

石川縣歴代長官物語(千代尚久著)(四六判二三六頁、定價・七〇、金澤新報社出版部)

ゆがめた(正木不如丘著)(ユーモア全集8四七判五三五頁、非賣品、現代ユーモア全集刊行會)

南國の空(吉江喬松著)(四六判二二〇頁、定價二・三〇、早稻田大學出版部)

¥1.50

"VALET"
AutoStrop
Safety Razor

バレー繁昌記

バレーは今東京の浴場の花形となつてゐます
浴場巡りでも書く人があるなら其人は
バレー繁昌記を書く事になります

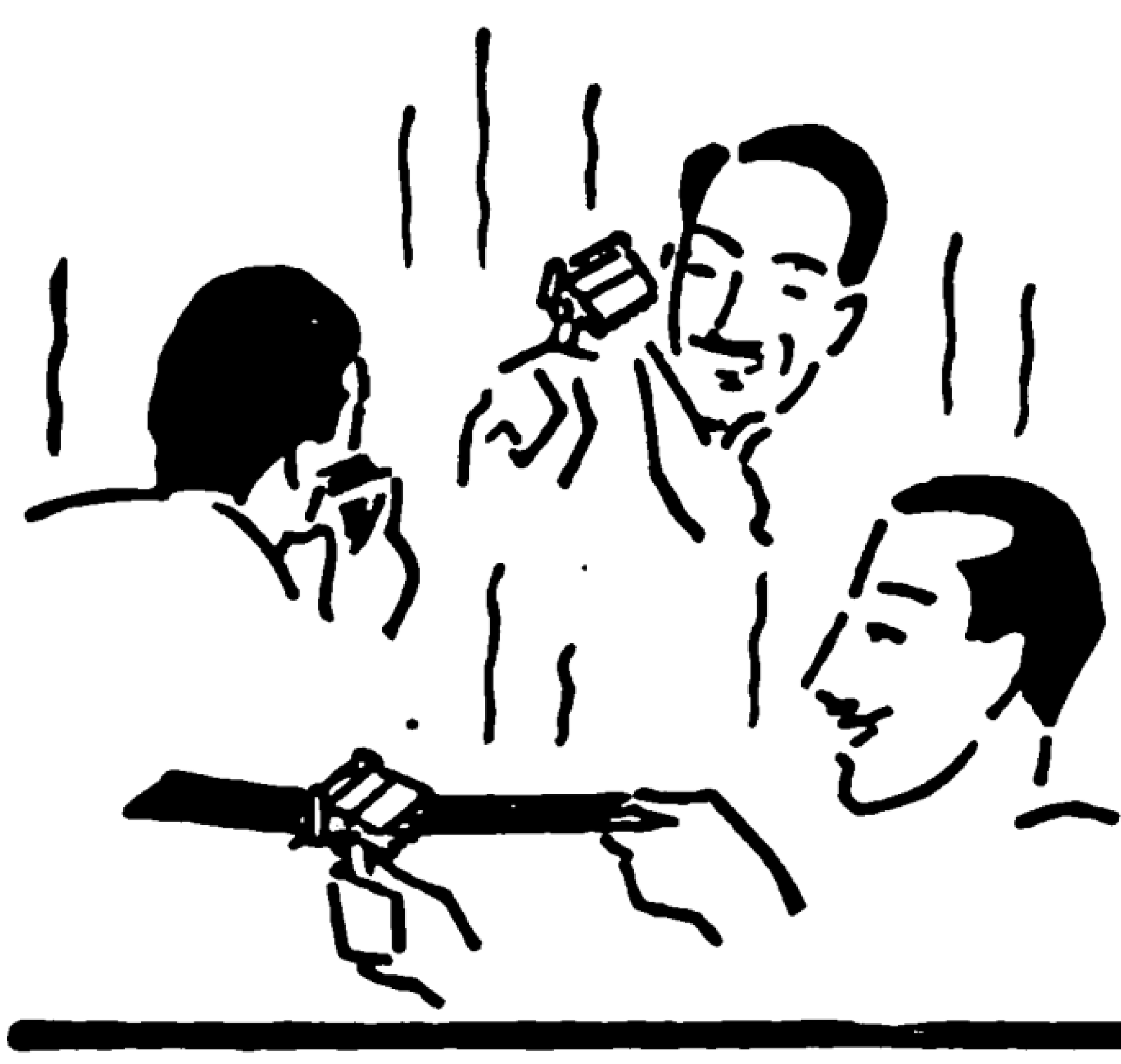
剃刀で研器を兼ね一枚の刃が半年使へる

バレー自働研安全剃刀

C型 一・五〇 二・〇〇 三・三〇 四・八〇
B型 一・三・五〇 以上各種
替刃利用ナイフ 刃一枚付 ・九〇
送料各・一八（カタログ進呈）

販賣所・大百貨店・著名洋物雜貨金物店等

中央公論社代理部にて取次ます



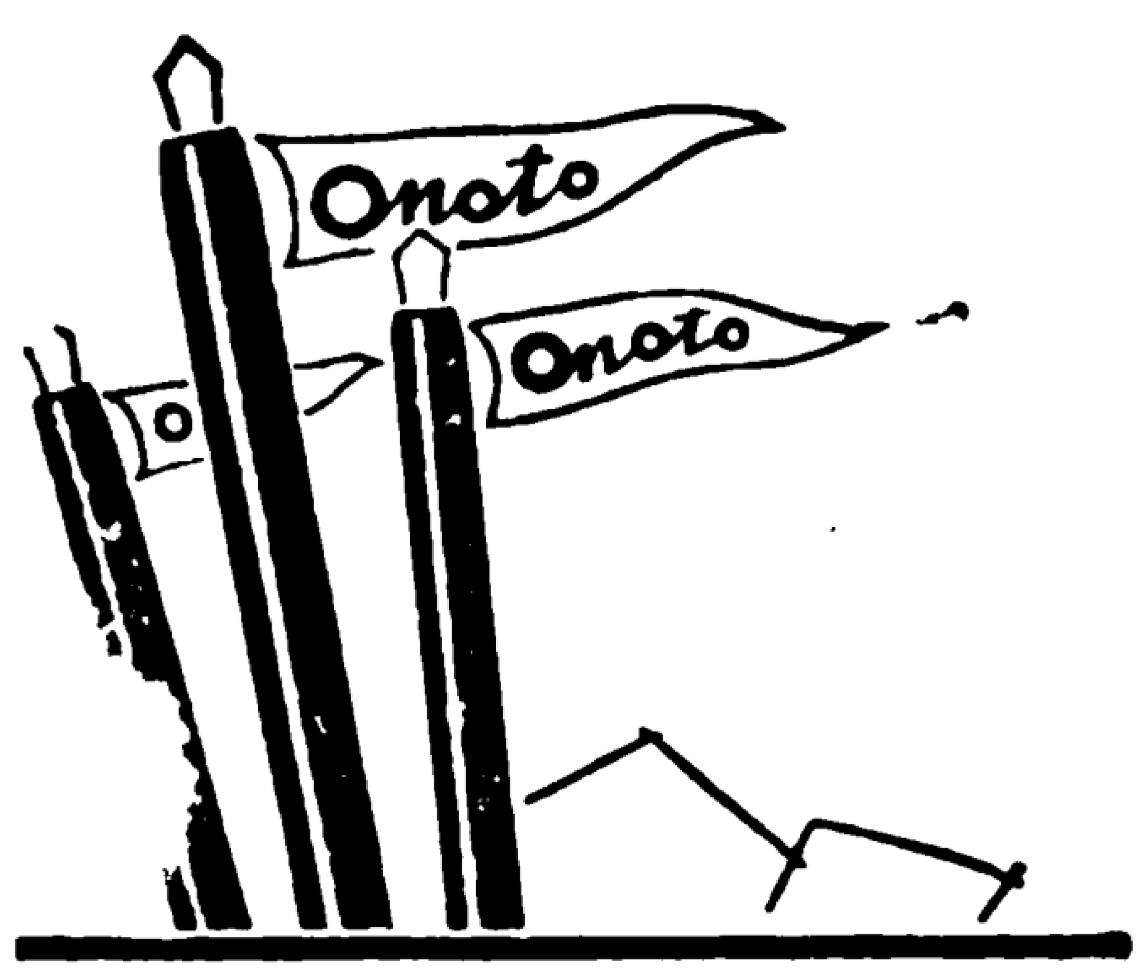
Onoto the Pen

オノト優勝！

萬年筆の競技大會でフォームさスピードさ
耐久力に總ての萬年筆をリードしたのが
オノト！ オノト！ オノト！

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

オノト萬年筆 七圓五十錢以上
アテナ萬年筆 三圓五十錢以上
萬年筆用アテナインキ 三十五錢
送料各十八錢（カタログ進呈）



東京日本橋通
丸善株式會社
大阪 神戸 京都 名古屋 横濱 福岡 仙臺 札幌
東京＝神田・芝三田・早稲田・丸ビル


新マツダ
お空に光るはお星様　おへやの中には新マツダ
ぱつとついたら日の光　其のさわやかで美しい
球は眼によい眞珠色　明るいおへやが嬉しいな
ギバ体温計
平型

内外時評

英國の總選擧・東京市會とガス問題
三越とその奴隷・暗から暗の新聞爭議・不經濟な失業解決名案……山川菊榮

英國の總選擧とフラッパーの活動……山崎廣子

廢れ行く典侍・掌侍……小寺信重

人相から見た美人と運命……小西久遠

谷崎潤一郎とペルシャ猫……奈良文子

吉田山から大學見れば（大學評判記・京都大學の巻）

◆ボーナスをどう利殖する？……前田繁一

情死するまで……栗島すみ子

情死とその時代……高田義一郎

傷ましき家族心中……小林隆之助

心中震災以後……安成二郎

支那の情死……上田恭輔

近代情死過去帳……梅原北明

◆香水化粧の表現法……瀧井不二

◆新型のハウス・ドレス
石井加代・西村光惠・岩崎喜久榮
千種中子・佐藤都代子・杉野芳子

◆生水美容法のお勸め
・・色を白くし艶やかになる水・・ミス・ユタカ
・・生水禮讃と實驗者の立場から・・早見君子
・・美容上から見た水の效果・・岡田道一

【情死未遂者の手記】……東郷青児

某令嬢と情死を企てた鬼才東郷畫伯は、異常な經驗を情熱溢る、近代感覺にて披瀝した。

▼理解できるだけ寂しい……東郷はる代

▼憑かれた女と……中藤英哉

▼生きてかへる……龍田榮二

心中情景

◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

乞食心中・ござ心中……長谷川伸

心中・花と月……平山蘆江

情死よもやま話……松村白南

人情話的實話……村松梢風

追かけ心中……藤島一虎

情死を嗤ふ

（私がダンテなら、凡ての情死者を屑籠地獄へ落す。時代錯誤の情死を絶對に否定）……林房雄

6月號

價七十錢・東京丸ビル七七六

中央公論社

日本動物圖鑑

原色版 21 葉
挿圖 4150 個
定價 15 圓

理學博士 丘 淺次郎氏外廿一氏共著

內容見本御申越次第進呈

理學博士牧野富太郎氏外四博士執筆

日本植物圖鑑

原色版 8 葉
挿圖 2550 個
定價 10 圓

夏・夏・夏・……………………………

野に山に水邊に珍らしい動植物を採集された方々が多いことゝ存じます。

その珍奇な收獲物の中に名稱のわからぬもの、又は科・屬・効用等に種々疑問の點はありませぬか。

疑問を直ちに解決せずに不問のまゝに置くときは折角の標品も塵芥に等しく採集の興味も意義も消え失せてしまひます。

一種々々鮮明な寫生畫にその名稱は勿論、懇切な解說を附けてあるこの兩圖鑑はそれ等の疑問を即座に解決致します。

執筆者は斯學界錚々の專門大家揃ひ、內容の整備は今更云ふ迄もありませぬ。兎に角內容見本をぜひ御覧下さい。

植物の名稱特に和名漢字・漢名・古名等を調べたい方々の爲にこの度「植物名彙」（四六判一三〇頁 價十五錢）と云ふ美しい本が出來ました。御希望の方は近所の本屋へ御註文願ひます。（直接御註文は切手でも差支ありません）

ラヂオテキスト JOAK 叢書

一手發賣元

東京・京橋

株式會社 北隆館

電話銀座 1788・1789・1795・1796

振替東京 750 番

圖書目錄御申越次第無代進呈



白い謝肉祭

谷譲次

1

私が、その希臘人の友達を Roger & Gallet と呼び出したのは、彼がこの巴里化粧品會社の製造にかゝる煉香油を愛用して、始終百貨店の婦人肌着部のやうなにほひを發散させながら、サン・モリッツのホテルの廊下を歩いてゐたことに起因する。

だから私は、私のいはゆるロジエル・エ・ギヤレ氏の本名は知らないのだが、それはすこしもこの話しの現實的價値を低めはしないと信ずる。

何故なら、私は、彼の名前こそ知らないが、彼がオスロか何處か北方の首府に仕事と地位を持つてゐる希臘の若い海軍武官であることも、何時も小さな秤を携帶してゐて、それで注意深くフイリップ・モウリスの上等の刻煙草を計つて、自分で混ぜて、晩餐後の張出廊(ヴエランダ)で零下七度の外氣

へゆつくりと蒼い煙りを吹き出す習慣のあることも、例の大陸朝飯――珈琲・卷麵麭・人造蜂蜜・インクの香の濃い新聞・女中の微笑とこれだけから構成されてる――を極度に排斥して、BEEFEXと燒林檎と純白の食卓布に固執してゐることも、趣味として部屋では眞紅のガウンを着てゐることも、いまはバルビユウスの "This and This" を讀んでゐることも、そして、實を言ふと、それよりも巴里版ルヰ・キャヴオの緋人好色本のはうが好きらしいことも、すべての犬を怖がつて猫に對しても虚勢を張ることも、英吉利の總選擧を豫想して各政黨の詳細な得票表を作つてることも、その一々に關して食後から就寝までの時間を消すに足る綿密な説明を用意してることも、それから、これは前に言つたが、半東洋風の黑い頭髪をロジエル・エ・ギャレ會社の製品で水浴用護謨帽子のやうに装飾して――で、私は彼にひそかにこの綽名を與へたわけだが、――聖モリッツ中の異性の嗅覺を陶酔させやうとTRYしてゐたことも、要するに、ロジエル・エ・ギャレといふ存在は、或ひは彼自身の饒舌により、または、私の作家的觀察眼で、ほとんど全部、私は、摘み上げて、蒐集して、ちやんと整理が出來上つてゐるのである。

では、何だつてこゝに希臘の一青年武官をこんなに問題にしてゐるのか――と言ふと、理由は簡單だ。この物語は、かれロジエル・エ・ギャレを主人公とし、私を傍觀者とする、瑞西の山中サン・モリッツの冬の盛り場における、一近代的悲歌劇の筋書だからである。

私は、主役の希臘人に關して既に多くを語つた。が、話しの性質を決定する必要上、忘れないうちに、前もつてひとつ斷つて置かなければならないことがあるのだ。

それは、このロジエル・エ・ギャレは、ウインタア・スポウツを自分で享樂すべく聖モリッツへ來てゐるのでもなければ、さうかと言つて、たゞ騒ぎを見物するために滯在してゐるのでもないといふ不思議な一事だ。ぢやあ何しに？――となると、これが何うも餘程變つてるんだが、彼自身そつと私に告白したんだから間違ひはあるまい。ロジエル・エ・ギャレは、實に漠然と結婚の相手を探しあぐんで、たうとうこの瑞西の山奥の社交殖民地まで辿り發つて來たといふのである。

とにかく、古いものと新しいものが妙に交錯して、其處に方向を引き歪められた文學的天才の片鱗が潜んでると言つたやうな、彼は確かに、誇張された感傷癖の希臘人らしい希臘人だつた。

と、紹介はこれで澤山だ。

ところで、場面は、瑞西サン・モリッツである。

ST.MORITZ——眼をつぶつて、心描して下さい。雪の山と、雪の野と、雪の谷と、雪の空と、雪の町と、雪の女とを。そして此の、切り離された小世界に發生する事件と醜聞と華美と笑聲と壯觀と雜音とを。

海拔、六千九十呎。エンガディン。テュシスから Coire 經由、又はランドカルト・ダヴオスから汽車。伊太利のテラノから這入つてポントレシナを過ぎる線が、すこし迂回になるけれど一番接續がいゝ。私達はこれを採つた。

サン・モリッツは、ファッショナブルな冬の瑞西のなかでも最上級のブルジョア向きと見なされてゐる土地である。そのため、大概の人が怖毛をふるつて、近處の村落に宿をとる。そして、そこからサン・モリッツへ通ふんだが、サン・モリッツのこの附帶地域中異色のあるのが、モリッツから一停車場下つた、五千六百五十六呎の高さに、谷を挾んで巣をくつてゐるCELERINAの村だ。幾分經濟的でもあり、第一氣安だらうと思つて、私たちも最初はこのツエレリナへ行つたのだつたが、同じ考へで人が殺到して來るのと、ツエレリナ自身が近くにサン・モリッツを控へてゐる利益を意識してる關係上、事實は、却つて中心のサン・モリッツのはうが遙かにぼらないことを發見して、二三日してあわて、そつちへ移つたのだつた。そして、これも、同樣の經驗から四五日前にツエレリナを逃げ出して來た許りだといふ、かのロジエル・エ・ギヤレに會つたのである。

しかし、ツエレリナは、あの有名な聖モリッツのCRESTA・RUNの競技の終點に當つてゐるし、スケイトもスキイも相當の設備が調つてゐて、わざ〳〵モリッツへ出なくても、そこだけで獨自の、金色の酒のやうな暖かい陽の照る、愉快な小地點（スポット）だつた。

サン・モリッツは、大きく二つの部分に別れてゐる。DORFとBADだ。つい先年までは、斜面の上のドルフでなければサン・モリッツでないやうに思はれてゐて、下のバッドのホテルなんか多くの場合閉め切りだつたものださうだが、それが、この頃ではすつかり變つて、各種のスポウツは勿論、名物の競馬などは、何うかするとバッドのはうが便利な程になつてゐる。私達の選んだのは、丁度その眞ん中へんの Hotel Beau Rivage だつた。

冬の聖モリッツは、兩大陸の流行の大行列だ。

倫敦と巴里と紐育の精粹が、ウインタア・スポウツに名を藉りて一時こゝに集中される。大小の名を持つ人々・新聞の寫眞によつて公衆に顏を知られてゐる紳士と淑女・女優・競馬騎士・

人氣作家・離婚常習者・商業貴族・生産のキャプテン達・彼らの家族中のＪＡＺＺ・ＢＯＹＳ・反逆年齢に達した娘たちの大集團・獨逸から出稼ぎに來てる首の赤い給仕人の群・舌と動作の滑らかな大詐欺師の一隊――現世紀に逆卷く唯物歐羅巴の男女の人生探検者が、おの／＼の智能と衣裳と役割を持ち寄つて、この一冬のＭＯＲＩＴＺに雪の舞踏を踊り抜く――それは、夜を日につぐ白い謝肉祭なのだ。

したがつて物價が出鱈目な點でも、季節のサン・モリッツほどのところはあるまい。何しろ、高ければ高いほど金の棄て甲斐があるといふ連中ばかり來るところなんだから、その法外さが随一なのは無理もないとして、近い例が、倫敦で一打入り一箱十片半のＸマス爆烈菓子が、こゝでは一個につき二法(フラン)――約一志六片(しるぺんす)――もすると、眼を丸くして話した善良な老婦人があつたが、これも、妻の誕生日贈物(プレゼント)に飛行機に飛行士をつけてやつたり、リンクでちよつと相識になつた人が歸ると聞いてこつそり買ひ入れた最新型の自動車を出發の朝ホテルの玄關へ廻して置いて驚かしたりする「巨大な人々(ビッグ・ピイプル)」にとつては、かうであるはうがほんとなのだらう。僕らの知つてる一人の中年過ぎた亞米利加の女は、音樂を奏した一大汽船を移動邸宅にしてそれに船長以下數百の乘組員と、身の廻りの召使ひと、男女達と客と、食糧と日常品を滿載してしおう世界中を浮かび歩いて遊んでると言つた。彼女の船にはプウル・舞踏場・玉突き室・大夜會場・テニスコウト・幾つかの自動車庫・それに農園まであるといふ評判だつた。その船は、いまゼノアに停泊してゐて、彼女は、船長と無線電信技師と愛人と執事と女中の上陸團を統率してモリッツ・ドルフのSuvretta Hausに可笑しいほど大袈裟な形の陣營を構へてゐた。

まあ、かういふのは僕らに直接關係がすくないにしても、こんなのが冬の聖モリッツを作る中樞系統なんだから、純粹にスポウツそのもの、ためにやつて來る人は比較的少數だと斷定していゝ。氷上ホッケイとクレスタ競爭がモリッツの呼び物なんだが、それだつてこれを見に集まるものも全體の三分の一で、他はことごとく、只何てことなしに、「今年の冬はサン・モリッツで大きな日(ビッグ・デイス)を持ちました」と威張るために出かけてくるらしい。

勿論、其處には、一年中の給料を貯金したので着物を買つて來てうまく名流令孃になり澄ましてゐるマニキュア・ガアルや故國の自宅へ歸ると暗い寒いアパアトメントの階段を頂上まで這ひあがらなければならない、自選オックスフオウド訛りの青年紳士やが、それぞれ「大きな把提(キャプテン)」を呼んで、このＳＥＴに

混じつて活躍してゐることは言ふまでもあるまい。聖モリッツは雪と景物の振消器（シエーカア）なのだ。みんながお互ひに make-belief し合つて相手の夢を尊重する約束を實行してゐる催眠狀態——山と湖と毛絲のOUTFITによつて完全に孤立させられてゐる別天地なのだ。おまけに、雪はすべてを平等化する——何といふ、adventurer と adventuress に都合のいゝ背景であらう！ そして、そこを占めるものは、男も女も同じ服裝で傾斜を轉がる笑ひ聲であり、濡れて上氣した女の頰であり、皮革（かは）類と女の汗の乾く臭ひであり、誰でもとの交友と・ダンスと・カクテル・パアティと・スキイの遠出と・夜ふけのホテルとであり——だから、男振り自慢の巴里の床屋は、外見を僞造して大ホテルへ乘り込み、「美術家」と自己登錄してゐることであらうし、港の運送屋は貿易商と、ピアノ運搬人は音樂批評家と、安芝居の道具方は舞臺裝置家と、帽子の賣子孃は「頭部の專門家（スペシアリスト）」と、自費出版の未亡人は詩人と、街路掃除夫は社會改良家と、踊り子は「舞踊家」と、郵便脚夫は「官吏」と、機關手は運輸業と、給仕は會社員と、賣笑婦は「獨立生計（インデペンデント・ミインズ）」と、銘々その化文字のやうなホテルの宿帳の署名と一しよに、かういふ觸れこみで押し廻つてゐるかも知れないのだ。The White Carnival!——St. Moritz!

2

「眞逆あなたは、この一つの修辭的方程式に盲目であつていゝとは仰言いますまいね。といふのは、聖モリッツの雪は、近代の戀愛と同じだといふ事實なんですが——如何ですか、私に、それを證明する光榮を許して下さいますか」

ロジエル・エ・ギヤレは、こんなやうなもの、言ひ方が大好きなのだ。

その時、私達は、正面のタレスに搖椅子を持ち出して、ちようど凍りついた夕陽の周圍を煙草のけむりで色どつてゐた。

私たちの前には、枕のやうな雪の丘が、ゆるい角度をもつて谷へ下りてゐた。高山系の植木が、隊列を作つて黑い幹を露はしてゐた。その、雪を載せた枝の交叉は、まるで無數のハンケチを干してゐるやうだつた。雪を切り拓いた中央の小徑を、食事に後れたスポウツマンとスポウツウーマンとが、あとからあとからと消魂しく笑ひながら駈け上つて來てゐた。スキイを皮紐（ストラップ）で縛つて肩へ擔いだ彼らの、はあはあいふ健康さうな息づかひが、私達のゐるところまで聞こえてゐた。ほ・ほう！ しきりにうしろの者を呼ぶ聲が溪谷に山彥した。雪は殘光に映えて藤紫（ラヴェンダア）に光つてゐた。山峽には、水蒸氣のやうな霧が湧き

けてゐた。町の灯が流れはじめた。これは、木彫りの熊・深山ははこの鉢植ゑ・一面に瑞西風景を描いた鈴・智恵の小箱・コルク細工の堡栓・色塗りの白粉入れ・等原始的な玩具の土産類をひさぐ店々である。ときぐ懐中電燈を照らして馬橇を走らせる人も小さく見えてゐた。遠くで汽笛がした。それが反響して星をふるはせた。あたりは赤く暗く沈み出して、當分のスポウツ日和を約束してゐた。スキイヤアスは、重い靴底で、ホテルの前の雪を思ひくに踏み固めてみて明日の「状況(コンデイシヨン)」を調べてゐた。雪の粗さやねばり工合が彼らには何よりも氣になるのだ。なかには、片手で雪を握り締めては、首を捻つてゐる人もあつた。いま積もつてる上へ濡れ雪が落ちることは、皆がみな怖れてゐる變化だつた。じつさい、水氣を含んだ雪の次ぎに一晩の酷寒でも來やうものなら、スケイトの熱心家は喜ぶだらうが、スキイヤアは一せいに泣き顏である。表面が石煥のやうに固形化して、自殺の意思なしではスキイられないからだ。人々は、何時までも雪に觸つてみたり、それから何度も空を仰いだりして、やうやく安心してホテルへ這入つて行つた。タレスに殘つてスキイの手入れをしてゐるのもあつた。そこにも此處にも雪を拂ふ音がしてゐた。石段を蹴つて靴を輕くしてゐるものもあつた。あるひは背中の雪を落しつこしてゐた。ボウイ達が柄の長いブラシを持つて走り廻つてゐた。誰もかれも眞白い呼吸をしてゐた。それは丁度人々の腹中に何かゞ燃えてゐて、その煙りが間歇的に口から出て來るやうに見えた。鈴の音が、いま汽車を降りた新しい客の到着を報せた。前から來てゐる知人達が迎へに走り出て、男も女も、女同士も男同士も、交る代る頬へ接吻し合つた。口々に絶叫する佛蘭西語の合唱が大事件のやうにしばらく凡ての物音を消した。何ごとが起つたのだらうと、上の窓に三つ四つの顏が現はれた。

闇黒の度が増すと、タレスから雪の上へかけてホテルの明りが、廣く黄色く倒れた。そこを、ダンスの人影が玄妙に歪んで一組づつはつきり映つたり、グロテスクに縺れたりして眼まぐるしく滑つて行つた。

私達の背後には、食堂の眞ん中の空地を埋めて彈ね仕掛けのやうに踊る人々と、紐育渡りのバワリイ・KIDSのジャズ・バンドとがあつた。彼らの三分の二は黒人だつた。サクセフオンは唸り、酒樽型の太鼓は轉がるやうに轟き、それにフイドルが縋り、金屬性の合の手が加はり――ピアニストは疾うに洋襟(カラア)を外して空へ抛つてゐた。

Was it a dream?

Say, was it a dream?

昨夜あなたは僕の腕の中にあつた
僕の腕はまだその感觸でしびれてる
それなのに夢だなんて！
Say, was it a dream?
Was it a drea-m!?

一曲終る。アンコウルの拍手はしつこい。續いてまた、直ぐに始まる。

Was it a dream?
Say, was it a.——

限りがない。

ロジエル・エ・ギヤレは、こゝでいきなり先刻言つたやうに私に話しかけたのだ。しかも、これが初對面の挨拶なのである。もつとも私は、その後よく彼が、この「サン・モリッツの雪と近代の戀愛」といふ得意の題目で、到るところで未知の人と即座に交際を開始する手ぎわを見たことがあるけれど、何しろ、その時は最初だつたし、それに、果して私にアドレスしてるのか何うか判然しなかつたので、私は、彼に不愛想な一瞥を與へたきり默つてゐた。すると、ロジエル・エ・ギヤレは面白さうににこにこして、勝手に私の横へ椅子を引いたのである。

これでも判る通り、このロジエル・エ・ギヤレは百パアセントの希臘人なのだ。古來ぎりしやは、何處の國よりも多くの獨斷家を産出した、哲學史上有名な民族である。そして、この種の獨斷家には、出來るだけ思ひがけない場合に、出來るだけ思ひがけないことを、例へば、同盟罷業を討議中の勞働組合總會の席上で、矢庭にダフオデル水仙の栽培法を説き出したりなんかして、人をびつくりさせることも、その才能の一つとして公認されてゐなければならない。

水仙(ダフオデル)を手がけて最上の效果を期待してい、ためには、先づ、排水の行き屆いた、壚坶性粘土の乾涸せる花床に、正五吋の深さに苗を下ろし、全體を輕く枯葉で覆ひ、つぎに忘れてならないことは、櫻草屬(ポリアンサス)の水仙だけは、他種に比較して餘程纎弱だから、これは、機を見て早く移植する必要がある。ETC・ETC——と言つたやうな、こんな主張が、希臘生れの獨斷家においてのみ、その「頭の熱い」ストライキの議論と、何と不思議に美しく調和することであらう！

で、私は、頷首いた。

彼は、自分の唐突な説が、私の上に影響したであらう反應を見きわめるために、身體を捻ぢ向けて、私の顔を下から仰いだ。

「は、あ！　驚いてゐますね。しかし、驚異は常に智識のはじめです——。」

かう言つて、彼は、少女のやうに肩で笑ひながら、彼のいはゆる「方程式の證明」に取りかゝつたのだつた。

私は、片つぼの耳だけを希臘人に與へて、もう一つの耳ではパワリイKIDSの狂調子を忠實に吸ひ込んでゐた。

Was it a dream?

Say, was it a dream!?

――ほかの國では、誰も、雪になんぞ特別の注意を拂ふものはあるまい。雪は、要するにあんまり有難くない白い軟泥の堆積で、あとで、もつと有難くない茶色の街路を作り出す原因に過ぎないとされてる。が、それは、雪がすくないから研究の機會も必要もないまでのことで、瑞西なんかでは、この一冬の地面の外套」を、あらゆる樂宴の必須條件として、皆はそれを見守り、試驗し、一種表現の出來ない、したがつて外部の人には想像もつかない心遣ひをもつて愛撫さへもしてゐるのだ。第一雪が降り出すが早いか、それは非常な心配のこもつた眼で看視される。純な白い雪片が、大きく穏やかに、そして盛んに落ちて來ると、人々は、二三日うちにすべてのスポウツ慾が滿足されることを知つて、歡喜の聲を上げる。若しそれが、うすい、速い、氷雨に似たやうなものであれば、これは徒らに、今までの積雪の表面に餘計な硬皮(クラスト)をかぶせるだけの役にしかたたない、から、折角の雛壇を滅茶々々にされて、みんな恨めしげに空を白眼んで祈るだらう。スケイトやとぼがん橇やカアリング――氷上ボウルスとでも謂ふべきウインタア・スポウツの一種で、三十から四十封度ある丸い石を氷のうへに轉がして、TEEと呼ばれる三つのうち中央の圓内へ、出來るだけ早く、そして多く入れやうといふゲイムだ――は、充分の雪量と適度の寒ささへあれば、雪の質にまであんまり八釜しいことを言ふ必要はない。がスキイは大いに雪を選ぶ。スキイヤアスの一番怖いのは、時ならぬ雨だ。何んなに完全な雪でも、半時間の雨で否応なしにされてしまふ。單に快走を妨げるばかりでなく、雨を吸つた雪が一日凍つたが最後、そこには、今まで存在しなかつた現實の危險が潜み出すからである。

そこで、ウインタア・スポウツの眼で見た雪の種類。

粉雪・柔い雪・固い雪・毀れない外皮(クラスト)・こわれる外皮・それから、これは雪ぢやあないが、地方的にFOEHNと呼ばれる不時の溫風――これらの區別が、ロジエル・エ・ギヤレによると近代の戀愛と完全に一致すると言ふんだから、確かに一つの「叫び(スクリイム)」だ。

3

ナタリイ・ケニンガムは、二つの愛稱を所有してゐた。ナニイとNANだ。だから、母親のケニンガム夫人は、この二個の名をいろ〳〵に使つて、娘を馴らさうと努力してゐた。言ふまでもなく、ケニンガムは倫敦から來てゐる母子である。

粉末雪――この、輕い、塵埃狀の雪は、スキイには持つて來いだ。一ばん愉快な滑走が得られる。初心者が方向轉換の稽古をするにも、この種の雪に限る。スキイの平行運動に強い粘着力が加はつて、それが走者の體重に丁度い丶足場を與へるから――歐洲大戰後の都會の廿歲臺の戀に似てゐる。それは、大學の芝生で、街頭(プロムナアド)で、キヤフエで、その他あらゆる近代的設備の場所で、降るともなく積もるともなく飛び交す、塵埃のやうに素早い視線の雪だ。一番自由な、無責任な滑走が得られる。初心者が方向轉換の稽古をするにも、この種の遊戲のうちに限る。戀の散步の平行運動に快い粘着力が感じられて、それがそのまま彼又は彼女の反撥を助けるから。

柔い雪――つもるばかりで固まらない雪。ちよつと見ると莫迦に有望なだけ、スキイには大敵だ。第一、スキイが深く沈み過ぎるし、おまけに崩雪の危險がある。經驗あるスキイヤアはかういふ雪では決して遠くへ出ない。何んなに油と蠟の利いたスキイでも、尖端に雪の山を押して折れるか、さもなければ途身埋沒して動きが取れなくなる――呼び出し電話ばかり往復して、never 何處へも行き着かない戀。年々夥くなりつゝある Good Girls といふ型(タイプ)が電話線の両端で標準國語を使つてゐる。ちよつと見ると莫迦に有望なだけ、大いに注意を要する――とロジエル・エ・ギヤレは說くのだ――第一、うつかりしてるうちに深く沈み過ぎるし、おまけに自ら感情のなだれを食ふ危險がある。つまり例の、泣きながら笑ふやうなことを繰り返す、戀のヒステリイ發作だ。だから經驗ある戀愛人は、かういふ電話では決して遠くへ行かない。何んなに噪狂なダンス・レストランの「隅の卓子」ででも、または街路樹のさきが窓の下に搖れてるCOZYなアパアトメントの一室ででも、彼はたゞ「窒(こも)つほの戀愛」に埋沒するだけで、何うにも動きがとれなくなるにきまつてる。

硬い雪――淺く滑らかに氷つた表面。しかし、あの、灰色にぎらぎらしてる硝子のかけらのやうなやつはいけない。多勢スキイヤアスの集る陽かげの丘なぞに、よくこの「硬い雪」の展開が發見される。一つはその上の頻繁な交通(トラフイク)に踏まれて出來るのだ。主に疾走に歡迎される。CHRISTIやステム・タアンにもい丶。クリスチはクリスチアナ――諸威の首府の前名から來てる――の略で、スキイを外側に開く使つて、急に向きを

變へる曲線（スタント）の一つである。ステム・タアンは、片方のスキイを上げて他と一定の角度に置き、それへ全身の重みを投げて急廻轉する。これはステミングとは違ふ。ステミングは、スキイの先を一點に近づけ、背後を擴いてV字形を逆さまに作る。傾斜の激しい氷面を降りる時になど、スピイドを殺減するための方法である――硬い雪は、近代的に場慣れた戀だ。だから、あの、硝子玉のやうに妙にぎらぎらする嫉妬の眼はいけない。「大戰後の新道德」を實踐して來た同士のあひだにのみ進展する戀である。これは、一つは、多くのシチュエイションを手がけたためだ。この戀は勇壯に疾走する。そして、よりいゝことには、相互の理解のうへで、色んな戀愛技術のSTUNTが行はれるだらう。

毀れない外皮（クラスト）――雪・雨・それから寒風とかう續くと、サン・モリッツをはじめ瑞西ぢうのスポウツマンは上つたりだ。地雪のおもてが氷のやうに硬張つて、しかも、何時それが「醜い姉妹（アグリイ・シスタア）」と呼ばれる次ぎの種類に急變しないとも限らない。で、最も嫌がられる一つである――結婚しなければならなくなつて結婚した結婚だ。大戰の直ぐあとの混沌とした時代に發生した、かういふ結婚の多くを、私たちは今日の歐羅巴文學の作品と實際生活のうへに見る「あらゆる事情」が「たつた一個の指輪」に罪もつてゐて、そしてそれが、毀れさうでなかなかこわれない。それだけ厄介なのだ。

こわれる外皮――スキイヤアスの惡夢である。續けて滑ることが出來ない上に、この種の雪は、廻轉（タアニング）を絶對に不可能にする。魔誤々々するとsitzplatzだ。山の中腹以下に多い。これを識別するには、雪を手で握るといゝ。指の間から水が滴るやうでは駄目だし、音を立てゝ軋んで、固いボウルになれば占めたものだ。雪融けは空氣のにほひで解る。また、風の方向の逝いに小波狀に光つてる場所も、避けなければならない――戀愛の惡魔だ。長つゞきしないくせに、タアニングも容易でない。そのうちに流行の離婚といふことになる。ほんとにあの戰爭の苦楚を甞めた中年以上に多い。

FOEHN――瑞西に特有な、俄かの雪解けをもたらす暖い地方風だ。これが吹き出すと、蠟を引いたばかりのスキイにさへ、雪が球狀に附着するから直ぐ豫知出來る。さうすると、毀れる外皮のあとにTHAWが來る慘めな二三日を覺悟して、人はみんなshank's ponyで町と森の逍遙をはじめる。そして、おかげで、聖モリッツや、モントルウや、インタラアケンや、ルッツェルンなどの小博物館のやうな記念品屋（スウヴニア）で、水を入れると歌ひ出す小鳥の形のコップ・開け方のわからない謎の洋樂箱・繪

微鏡でなければ針の讀めない程小さな時計・オルゴウル入りで「甘い家庭（スウィート・ホウム）」を奏する煙草函、なんかが店を空にするまで賣れて往くのだ。あめりか人の・英吉利人の・佛蘭西人の・希臘人の・日本人の、好奇なウインタスポウツ旅客團の襲來によつて——近代の戀愛に特有な、週期的な雪解けの微風である。これが吹き出すと、結婚したばかりの相手のポケットから見慣れない手紙が出て來たりする。さうすると、退屈と焦慮の今後を覺悟して、人は冒險心に乘つて町と森の逍遙をはじめる。そして、おかげで、大都會と開港場の戀の市場が空になるほど盛るのだ。亞米利加人の・いぎりす人の・佛蘭西人の・ぎりしあ人の・日本人の、好奇な戀の觀光團の襲來によつて。

說明を終つたロジエル・エ・ギヤレは、薔薇材のパイプに丹念に鼻のわきの脂を塗りはじめた。木を古く見せて、光澤を出さうといふのである。

私達のあひだには、スキイ——英吉利人はＳＫＩを北歐の原語どほりに「シキイ」と發音するが、この音の佛蘭西語には野鄙な意味の言葉があるから、大陸では矢張りスキイと言つたほうが穩當だ——のやうに何時までも會話が辷つた。

私が話した。

ひとりの若い日本の學者が、倫敦に來てゐた。彼は、研究の題目以外に、下宿の娘にも異常な魅力を感じた。娘も母も、自分たちが、その外國人の上にそんな大きな影響を投げてゐることは知らずに、さうすることを異國者に對する義務と思つて、出來るだけ好くしてゐた。娘は日本人と一しよに何處へでも出かけた。それは、彼女にとつては、戀からは遠い尊敬と友情のこゝろもちだつた。が、日本人はそれを戀と取つたのだ。そして、それによつて一層自分の感情を燃やして行つた。さういふ氣で見ると、何の意味もない娘の一擧一言も、彼には凡て別の內容をもつて響くのだつた。事實ふたりは、必要以上に何時も一緒にゐるやうになつた。それは、誰の眼にも戀人同士としか映らなかつた。近處は彼らの評判で賑やかだつた。その噂が母親なる主婦の耳にも這入つた。早晚彼が、正式に結婚を申込まうと思つてゐる或る晚、二人伴れで散歩から歸つて來ると、娘の母が言つた。

『さつきお隣の奧さんが見えて、こんな莫迦なことを訊くぢやありませんか。わたしは怒つてやりました。お宅のお孃さんとあの日本の紳士とは戀仲のやうだが、若しあの方がお孃さんに結婚を申込んだら、あなたは母として何うするつもりかつて——

——わたしは答へました。日本人は世界一に血の傳統的純潔を誇る國民です。彼らは、何よりも雜婚をいやしむのです。その日

本紳士から結婚を申込まれるなんて、うちの娘がどうしてそんな光榮を持ち得ませう？　考へるだけで、それは日本人にとつてこの上ない侮辱です——とわたしはあなたの名譽のために辯解しておきました。思慮のない人々が詰らないことを言ひ出すのにはほんとに困ります。が、さういふ人が少くないのですから、これからはあんまり二人で外出しないはうがいゝでせう。それに、忘れてゐましたけれど、此娘は近々田舍の親戚へ行くことになつてゐますし——。』

かういつて、彼女は、自分の機智を悦ぶやうに笑つた。勿論その「おとなりの奧さんが來てうんぬん」の全部は、事態の急を察した、下宿の主婦らしい彼女の作りごとだつたのだ。これで日本人の出鼻を挫かうとしたのである。彼女の計は的に當つて、日本人は蒼白な顏に苦笑を浮かべたきり默り込んだ。けれども、主婦が驚いたことには、この策は、結果から見て反對の效果を擧げただけだつた。と言ふのは、單に母親と違つた觀方を持つてゐることを示すために、急に戀を感じた氣になつた娘は、いきなりその場で、日本人の首に腕を廻して接吻してしまつたからだ。二人は母親と研究を捨てゝ、幸福と一しよに英吉利海峽を渡つた。食ふや食はずで困り切つてゐる彼ら夫妻に僕らは巴里で會つて識つてゐる。

異人種間の結婚に關するロジエル・エ・ギヤレの意見を叩くために、私は特にこの挿話を持ち出したのだ。ところが、このなかで彼の興味を惹いたのは、最後の「何事につけても母親と異つた意見を持つてゐて自分のしたいとほりにする大戰後の娘」といふ一項に過ぎなかつたから、私としては、見ごとにこの目算が外れたわけだけれど。

彼は語つた。

彼の友人に、倫敦で開業してゐる醫者がある。やはり生れは希臘だが、今は英吉利に歸化してゐて、まだ若いにも係らず、相當腕があるらしく、其の病家の多くは、いはゆる社交界と呼ばれる階級に屬してゐる。

いぎりすでは、WEEK・ENDを騒ぐ。土曜の正午から月曜の朝へかけて、誰もかれも田舍へ出かける。倫敦の周圍などには、海岸に、テムズの流域に、この小旅行の土地が無數に散在してゐて、或ひは別莊へ、ホテルへ、またはキヤンプに、人は義務のやうにして泊りに行く。郊外に近い家の往來に面した部屋なんかにゐると、土曜日曜は、グルフ道具・小鍋等を滿載してしつきりなしに流れる週末自動車の爆音で夜も眠れないくらゐた。

この週末旅行のなかで最も上等なのが、country home へ招

いたり招かれたりして、宴會・舞踏・カアド・テニスのパアテイを連日連夜ぶつつゞける種類である。何しろ爛熟し切つた物質文明を無制限に享樂する時代・場處のことだ。しかもこれが大掛りな私遊(プライヴエイト)なんだから、その如何にでかだんなものであるかは、あの有名な、petting party なんかといふ途轍もない性的亂痴氣が公然と行はれてゐる事實からでも、容易に想像されやう。そもそも、このペテング遊びなるものは――となると、第一傍道に外れるし、それに、何うもすこし説明に困るから、まあ、こゝぢやあ止しとこう。それよりも、今いつたロジエル・エ・ギヤレの友達の醫者(ドクタア)なる人の經驗だが、かういふ次第だから、彼が、ある week-end に、出入りの有力な病家に招待されて其の田舍の館の客となつたとき、そこに、一體どんなに大々的な歡樂の無政府狀態が彼を待ち構へてゐたかは、つぎのやうな一つの實話が發生しただけでも、それは容易に想像されやうと思ふ――。

ちよつと話を切つて、ロジエル・エ・ギヤレは背後の音波に身を浸した。

Was it a dream?

Say, was it a dream――?

で、僕も章(チヤプタア)を更へる。

4

土曜日の夜、といふよりも日曜の朝だつた。ダンスがこわれて、ドクタアは、與へられた階上の寢室へあがつて行つた。かういふ家は、泊りかけの客を考へて、まるでINNのやうに建てられてあるのが常だ。だからこれが小説だと「みんな一本づつ蠟燭を貰つて、階段の手すりを撫でながら寢室を志した。彼らの跫音によつて、古い樫材で腰板を張つた壁がなつた。天井は、お休み(グツド・ナイト)・お休み(グツド・ナイト)といふ口々の音を反響して暗く笑つた」といふところだが、どこかへ、ドクタアは自分の部屋を探し當てて寢仕度にかゝつた。燕尾服の直ぐあとで、パジヤマのゆるやかさは殊に歡迎された。彼は、醫師だけに空氣の流通を思つて窓と廊下の戸をすこし開けたまゝ、燈を消してベツドに這ひ上つた。

そして、暫らくうとうととした。が、彼の淺い眠りは、間もなく、しきりに輕く彼の肩を突つく柔かい手で破られた。

ぼうつとほの白いものが、寢臺の横に立つてゐる。

薄桃色の、裾長の絹を引つかけた女の姿だつた――なんかと尤體ぶらずに、手つ取早く「豆をこぼして(スピル・ゼ・ビインズ)」しまふと、要するに、かうだ。

女は、その日の午後、はじめてドクタアに紹介されたばかりの、倫敦の知名な實業家の娘で、しかも、父母や兄弟と一緒にこのW・Eに來てゐるのだつた。

その彼女が、深夜、獨り寢のドクタアの室へ扉の隙間から滑り込んできたのである。

誰かが急病！――と、職業的意識に狼狽てゝ撥ね起きたドクタアと、今にも彼のベッドへ這入りこみさうな彼女とは、早速こんな低聲のやりとりを開始した。

『何です？　どうしたんです？　何かおこつたんですか。』

『えゝ。いゝえ、あたしあんまり足が冷いもんですから――――。』

『足――？』

善良なドクタアが愕いてるうちに、彼女は容赦なく割り込んで來てしまつた。だから、このあとは、まるで夫婦のやうに、暗い寢室のBEDのなかでの問答なのである。

『困りますなあ。出て行つて下さい。後生ですから。』

ドクタアは、出來るだけ遠くの端に硬直して嘆願したことだらう。

『あら！　何故さう「大戰以前」でゐらつしやいますの？』彼女は無邪氣に笑ひ得た。『いゝ、ぢやありませんか。あたしのはうから來たんですもの――そして、うちの人にもお友達にもあたしが押しかけたのですとその通り言ひますから。さうするとみんな何時だつて喜んでゐます。』

昨夜あなたは僕の腕の中にあつた
僕の腕はまだその感觸でしびれてる
それなのに夢だなんて！
Say, was it a dream?
Was it a dra――m?!

――といふロジエル・エ・ギヤレのはなしなんですが、いかゞです、お氣に召しましたか。

すべての古いものは、その古いが故にそれだけで價値を失つた。今日では、それはすでに無智であり、罪惡でしかない。私達は、先づこの機械と工業の心もちにぴつたり當てはまる、新しい生活上の規約を要求して眞劍だ。これは、現在の歐羅巴に充滿する一の時代情緒である。それほど何處にでも、誰の胸にも強く感じられるのだ。だから多數の「次世紀」の少年少女達が、喚聲を上げて舊道德への突擊を開始してゐる。彼らは、かつて「しべりあで新しい宗教が發掘」されたやうに、いま自分達の身邊に、あたらしい美醜と善惡と大小の標準を査定しやうと焦つてゐるのだ。それには母の大地を掘り下げるやうに、

じつさい大地ほども根づよい既成觀念のことごとくを滅茶々々に破壊する戰爭行爲が第一だ。この地均し時代の階梯においてのみ、究局は離れなければならない運命のインテリゲンツイヤと勞農階級も、樂しく共同の作業を進めることが出來るのである。

この種の闘士は、國境と人種と形式を超えて親密に相識だ。私たちは、巴里で倫敦で伯林で、ストツクホルムで、羅馬で、そして聖モリツツで、これらの澤山の未知の靑年男女を街上の知人にもつたことを誇つてゐる。

若い人たち（ヤンガ・ジエネレイシヨン）のあひだにおける性道德の衰退――なんかとリンゼイ判事あたりが慨世的に喋ぎ立てゝゐるうちに、英吉利では、早や一つの新戰法が發明されて、どんどん實用に供されてゐる。それは、婚約といふ古い習慣を應用した逆手である。つまり、婚約者同士なら勝手だらうといふんで、はじめから相互に結婚の意思なく、盛んに婚約の成立を宣言しては矢繼ぎ早やに取消すのだ。そして其の婚約の期間中、ふたりは準夫婦のごとく振舞ひ、また、社會もさう受け入れざるを得ないことを、彼らはよく承知してゐる。これは、今後も當分効果のある新手として目下大流行である。何しろ、婚約者だといふんだから老年の「支配階級」も手が出ない。そこで、婚約しては破り、婚約しては破り――この「性道德の衰退」から一個のあらたな性道德が生れやうとさへしてゐる。もつとも、これは離婚といふ父母達の遊戯を、息子やむすめが忠實に眞似し出したところから來てゐるのだが――「性の歐羅巴」は何處へ往きつくか。現行の諸制度の社會的權威が、そろ／＼この邊から崩れかけたのではないか。とにかく英吉利では、「結婚を目的としない婚約」が性道德の破壞行爲として八釜しく論じられ、一方には、それほどの問題となるまでに、若い男女間に廣く行はれてゐる。霧の白いハイド・パアクの隅で、頭の上で高架線の唸るガアドの暗黑で、何と夥しい婚約者の群が愉快に性道德を衰退させてゐることだらう！　そして、婚約者のすることだから、誰も文句は言へない！　默つて、見ずに、さつさと通り過ぎて行く――。

ところで、ナタリイ・ケニンガムは二つの愛稱を所有してゐた。ナニイとNANだ。で、母親のケニンガム夫人は、その二個の名前をいろいろに使ふことによつて、何とかして娘の信頼をつなぎ止めて置かうと、それは／＼は慘めな努力を續けてゐた。言ふまでもなく、このケニンガムは、倫敦から來て、サン・モリツツのオテル・オボ・リヴアジユに私達やロジエル・エ・ギヤレと朝夕顏を合して滯在してゐるのだつた。

今までの場面がすべて倫敦なのでも判るやうに、かういふこ

とにかけては、見かけによらず、英吉利のはうが餘程突進的でしたがつて事件に富んでゐる。佛蘭西は、これから見ると、柄になくおとなしい。一たい巴里人なんかでも、一般に想定されてるとは正反對に、極く傳習的な、着實な人間なんだが、それが地方へ出ると一層古めかしくて、ふらんすの田舍では、今だに半職業的な媒酌人（マッチ・メエカア）が、たいがい一村にひとり位ゐて世界的に有名な日本のＭＩＡＩに似た結婚方法を司つてゐる。

『ベギユル・ヌウといふ鬼（ボウギ）を御存じですか。』

近くに椅子を寄せて、私の妻と話し込んでゐる、ロジエル・エ・ギヤレの知人――ホテルでの――だといふ三十前後の佛蘭西女の聲だつた。

先刻から何かしきりに妻と話してゐたのだ。

私とロジエル・エ・ギヤレは、言葉を中止して二人とも佛蘭西語の方へ注意を向けた。そして、非常に疲れた人のやうに正面を見詰めたまゝ、その話を聽き取らうと靜にした。私たちのがそつちへ傳染して行つて、妻と彼女も、結婚を中心とする雜談を始めてゐた。それがこの佛蘭西の女に、自分の結婚を思ひ出させたのだつた。

彼女は言つた。

『私は、ブリタニイのカルナク――あの「石の兵士」に近い村で、お祖母（ばあ）さん一人の手で育てられたのです。カルナクは、荒れた野のうへに一哩以上もの大石垣が走つてゐて、地球の若かつた頃を思はせる傳説の部落です。そして、そこの酒場は影のやうな人々で一ぱいですし、その人々はまた、土と官能の夢しか何ひとつ持ち合せがないのです。このカルナクの部落で、私と祖母は、鷄と兎を飼つて暮らしました。祖母は、誰にでもすこし氣が變だと思はれてゐました。幾つぐらゐでしたらう？顏に千以上の皺があつて、顋鬚が生えてゐました。』

5

『子供達はその顋鬚を怖がつて、祖母が市場へ買物に出ると、みんな木へ登つて、葉と枝のあひだから惡口を落とすことにきめてゐました。すると、黑いエプロンに白の帽子をかぶつた祖母が、大きな杖を振り上げてあちこちの方角へ罵聲と白眼を投げるのです。言葉はブリトン語でした。私たちは牛酪を作つた旅行者へ賣りました。

祖母は、一つの性格でした。昔からの怪談と鬼どもの話だけはすつかり暗誦してゐて、村の人は信じはしませんでしたが、祖母のお話を聞くことは誰も好きなやうでした。只怖がられるのが面白かつたのかも知りません。色んな人が、夢や前兆のこ

とを訊くために祖母を訪れました。そして、それが不思議に、みんな祖母の言ふ通りになるのです
一度こんなことがありました。
ケリユウ爺さんといふ村の麵麭屋が、或る晩、自分の前を走つていく Begul-Nouz を見たと言つて、蒼くなつて祖母の所へ駈け込んで來ました。このベギユル・ヌウといふ鬼のことを御存じですか。これは、結婚と葬式の前觸れをする役目の小惡魔なのです。そこで祖母は、骨だらけの指をケリユウ爺さんの鼻先で動かしながら、お前さんは一月うちに死ぬか結婚するか何方かだと明言したものです。お爺さんは三度も女房に別れた人でもう一ぺん結婚するくらゐなら、お葬式のはうが增しだなんて言つてゐましたが、それが何うでせう！ 次ぎの月の六日にはどこからか渡つて來た頭髮の赤い、若い女と一しよになつて、祖母のところへお禮に參りました。これには村中が大笑に笑つて、聖コルネリの寺院に、まるで灯の山のやうにお蠟燭が上りました。
ブリタニイの女は、牛に似てゐます。
その牛のやうだつた私も、若い男達の眼を惹くやうになりつつありました。牛を敎會へ連れて行つて、お水をかけて貰ふ日があります。これは大變です。何人もの男が私の牛を引いてつてやらうと申し出るのです。聖ジヤンの祭禮の晩には、村の廣場に篝り火を焚いて、青年たちが夜どほし眞鍮の盥を叩く例です。が、私だけは家に閉ぢ込められて、只その騷ぎを遠くに聞いてゐなければなりませんでした。
何故つて、お祖母さんは、カルナク村の結婚世話人もしてゐたからです。これは、年頃になつた何處かの息子と、どつかの娘を、自分が仲に立つて結婚させて、兩方の親達からお禮を貰ふ一つの商賣でした。じつさい、これが、祖母の收入の全部ですのに、自分の孫である私の結婚となると、今考へてみても可笑しいほど、祖母はむきになつて反對したものでした。それも私を手離すのが淋しかつたのと、もう一つは、あり勝ちな醜い嫉妬心の形を變へた心もちからだつたのでせうが、結婚の口ききを稼業にしてゐるくせに、私の縁談には冷淡以上に、慘酷なほどの態度をとつてゐました。そのために、言ひ寄つてくる男たちも何時しか遠のいて、私は、大きな身體に子供のやうな服を着せられて、相變らず牛の乳をしぼつたり、枯草を乾したりなんかばつかりしてゐました。もし若い男が私に話しかけでもしやうものなら、祖母は狂氣のやうに飛び出して行つて、頤鬚を振る、指を曲げて樣々な惡魔の形を作つて見せる、さては杖をかざして、ブリトン語で呪文を唱へながら白眼みつけるとい

ふ仕末ですから、たうとう村中の男が誰も、私には、冗談は恐か、視線の一つも投げて呉れないといふことになつてしまひました。

が、結婚の問題は、ぼんやりながら始終私の頭にありました。若い女は、何よりも「遅くなる」ことを恐れるものです。しかし、さうかと言つて、私は祖母に言ひ出すことはできませんでした。カルナクでは、女は只ぢつと待つてゐなければならないことに決められてゐるのです。

村外れの石山に、ケルト族の碑標だと言はれてゐる圓い大きな自然石があります。Croez-Moken――つまり、若い女が、夜更けに出かけて行つて其の上に腰をかけると、一年以内に結婚が出來るといふ言ひ傳へのある石です。私は、今でも一番よくあの邊を覺えてゐるほど、毎晩のやうに祖母の眼を忍んでは腰かけに行きました。

ところが、その夜は大雨で、私は自家にゐなければなりませんでした。あなたは、ブリタニイの雨を御存じですか。大粒なのが地面を穿つて叩きつけるのです。私たちは、早くから戸を閉めて寢に就きました。が、雨風の音で眠れないので、私は長いこと床のなかで眼をさましてゐました。すると、ちようど眞夜中でしたが、俄かに起き上つた祖母が戸口や窓のところに立つて、しきりに外部を窺つてゐる樣子なのです。何うしたんだらうと――思ひましたが、そのうちに私も、眠さに負けてしまつたとみえます。眼が覺めた時は美しい朝で、祖母はもう床を出て、心配さうに部屋中を歩き廻つてゐました。

ゆうべ祖母は、確かにあのベギユル・ヌウの跫音を聞いたと言ふのです。その小鬼が一晩ぢう雨に紛れてこの家のまはりを迂路ついてゐた――祖母は、それを自分の死の報せであると取りました。

『しかし、』と思ひ切つて私は祖母に注意してみました。『しかし、ベギユル・ヌウなら、お葬式のほかに結婚の先ぶれもすると言ふぢやありませんか。きつと、近いうちに、私達のところへ結婚が來るのでせう。』

祖母は大聲に笑ひ出して、私の小さな希望を失望に變へてしまつたのです。

『馬鹿な！　私のやうなお婆さんに結婚がやつて來るなんて！　冗談もいゝ加減にするがいゝ。』

祖母は其後長く生きてゐました。そして、カルナクの村に、毎年幾組もの新夫婦をふやして行きました。が、私の結婚だけはたうとう彼女の頭へ來なかつたとみえます。私が結婚したのは彼女の死後、ひとりで巴里へ出て、餘程經つてからのことで

した。それでも、今でも佛蘭西の田園や漁村には、私自身の若かつた頃のやうな娘や、祖母と同じマッチ・メイカアや、村はづれの腰かけ石や、ベギユル・ヌウの鬼(ボウギ)などが揃つてゐて、古い樂しい日が續いてゐます。」

瑞西ウインタア・スポウツのいろ〳〵。

スキイング——ホテル所屬の斜面で美しい動作の習練にばかり熱中する人と、クロス・カントリイの遠走にのみ力を入れる型とある。兩方が或程度まで平行しなければ一人前のスキイヤアとは言はれない。

テレマアク——軟雪の上に片膝ついて、他足を外側から前へ持つて來てタアンする。

Ski-Joring——シキイ・ヨリングと讀む。スキイで立ち、馬に綱をつけて引つ張らせる。相當走らせるには、先づスキイの心得を必要とすること、いふまでもあるまい。

スラロム——むこうの困難な角度に立つてゐる旗を廻つて來るスキイ競走だ。一人づつ走つて、タイムで優劣がきまる。

スキイ・ジヤンピング——ジヤンピングには、スキイヤアは雪杖(スナツキ)を持たない。なめらか雪のトラックを辷つて來て、一線に小高く築いた踏切りへ達すると、スキイヤアはそのはずみに空(くう)へ飛ぶ。同時に兩手を圓く廻はして飛行を助けるのだ。下が急傾斜になつてゐるから、しぜん遠くへ屆く。記錄の計り方は、スキイの背部の落ちた地點から、踏切りまでを取ることになつてゐる。轉べば除外されるのだ。

スケイテング——瑞西のスケイティングには、大陸(コンチネンタル)式と國際(インタナショナル)式の二種類ある。前者は言ひ換へればイギリス風で、手も足も、身體全體が直線的に動いてスケイトしなければならない。インタナショナルの方は、足の使ひ方も自由だし、運動を助けるために身體を何う曲げてもいゝことになつてゐるから、始めての人には這入りやすい。曲(ファンシイ)スケイティングには、短かいスケイトがいゝとされてゐるが、氷ホッケイや競爭には長スケイトが用ひられてゐる。

その他、この氷ホッケイだの、カアリングだの、バビングだの、テイリングだの、ルウズイングだの、これらがまた幾つにも別れて、瑞西あたりのウインタア・スポウツは、かなりに複雜なゲエムになつてゐるが、そのなかでも最も勇敢で、したがつて危險の多いのが、俗に「骸骨(スケルトン)」と呼ばれるトボガン橇である。鋼鐵のスケルトンの上に板を渡して、走者はそのうへに頭を下に腹這ひになる。うしろに出てゐる靴の爪先きにスパイクがついてゐてそれで舵(かぢ)を取るのだ。時として肘(ひぢ)や膝にもプロテクタアを當てがひ、或る人は顔に厚いマスクを被るのもある。

滑路の兩側には雪の塀(へい)を造つて橇が外(そ)れないやうにしてあるが、往々にしてそこを越えてすつ飛ぶことが珍らしくない。サン・モリッツのとぼがんの記錄は、つひに一時間七十哩を突發してゐる。モリッツ名物のCRESTA・RUNといふのがこれである。

サン・モリッツのウインタア・スポウツは、じつに大仕掛けなものだ。たとへば、スキイ・ジャンピングの競技場などでも、他のレゾルトではスキイで見物に出かけて來た人が、雪の上に立つて取り卷いてゐるくらゐのものだが、サン・モリッツとなると、瑞西の國旗を立て並べてお祭りさはぎの裝飾をやる。ジャンプはまるでウインブルドンの中央テニス・コウトの觀がある。廣い座席が何重にも重なつて、一等は倫敦一流の劇場以上の切符代を取つてゐるくらゐだ。そこへ巨鳥のやうにジャンパアが落ちてくると、パテイの寫眞機が光る。運動記者の鉛筆がノウト・ブックを走り、メガフオンがその時々の結果を報告して號令のやうに轟く。

スケイトも同じだ。サン・モリッツのリンクあたりで、輕業のやうな目ざましいスケイテングをやつてゐるのを見ると、その大抵は專門家ばかりである。サン・モリッツはゲエムの馬もちがふ。頭部に色彩の美しい飾りをつけてゐて、橇もほかのよりは大きく立派に出來てゐる。

夜はダンスだ。どんなホテルでもオウケストラのないところはない。晝間男女の區別もわからないほど荒つぽい毛織物に包まれて雪と氷を生活してゐた紳士や淑女が、短時間のあひだに流行の禮裝に早變りして、ステイムと酒の香の溫い床(フロウア)に「觸(タッチ)れ」を與へながら、夜のあけるのを知らない。

例へばこのオテル・ボオ・リヴアジュのバワリイKIDSジャズ・バンド。

Was it a dream?
Say, was it a dream?

6

寒い國のくせにどうしても暖房の設備がよくないものだから瑞西のホテルは、來た當座はどうもあまりいゝ氣もちはしないらしい。もつともいぎりす人なんかがよく行くビイテンベルヒのレヂナ・パラスあたりには、彼等の隨喜する薪をたく爐が切つてあるけれど、そのほかの場所では、大がい痩せこけたステイム・パイプが部屋の隅に威張つてるだけだ。それもよく働らかなかつたり、或ひは蒸氣が上り過ぎて室内が温室のやうになつたり、ひどい目に會ふことが多い。スプルウゲンでは、ホテル

の一室毎に中央に大きなストウヴが据ゑてあつて、煙突が尾根を抜いてゐる。あんまり美的でないと同時に、これは塵埃を立てるので弱らせられる。それから、これは、どうしても大きなホテルへ行かなければ遣り切れない理由は、お風呂である。スポウツで汗をかいて來ても、お湯に這入れないとあつちや、殊に日本人は往生する。

瑞西のステイムではよく失敗する人がある。寝てしまへば要らないだらうといふので、すつかり閉めてしまふと、パイプの運行が停つて湯が冷めるもんだから、夜が更けるにつれて凍り出すやうなことになる。寝る前に窓でも開けておかうものなら寒さのためパイプが破裂すること請合ひだ。先年ルケルバルドでこのステイム・パイプがホテルの屋根を吹き飛ばした事がある。あとからナイアガラのやうに水が噴き出て、止宿者は一同大變な目に會つたと、ホテルのポウタアが話してゐるのを聞いた。これも考へてみると、外國人には間違ひ易く出來てゐるのである。何故かといふと、ステイムの廻轉面にある Auf は英語の Off に發音が似てるけれど、實はこいつはその反の On なのだ。そしてもう一つの Zu といふやつが Off を意味する。かういふことは、あちこち流行してゐると珍らしくない。伊太利語の Caldo が、發音や字形の類似を無視して、その反對の Hot に當るやうなものだ。

よく犢を食べさせられるのにもうんざりさせられる。じつさい瑞西では、どの牛も、牛にならない先に殺されてしまふであらうと思はれる程に、犢の肉を出す。が、特に女の人に有難いだらうと思はれるのは、チヨコレイトである。戰爭前は、もつと安かつたさうだが、この頃だつて、世界のどこよりも見事なのが廉價に賣られてゐる。飲料のチヨコレイトには、素晴らしいのがある。TEAの店も聖モリッツあたりでは隨分繁昌してゐるが、女給はお茶を持つて來るだけで、ペエストリなんかは自分で立つて行つて取つて來なければならない。これを知らない外國人などがよく魔誤ついてゐるのを見かけたものだ。

言葉は、主に佛蘭西語と獨逸語だ。伊太利語も、南のはうでは可成りに通用するらしい。訛つてゐる瑞西語をきくと、じつによく獨逸語に似てるけれど、字を見ると違ふ。ロマンシユといつた特有の言葉は、この頃ではほとんど使はれてゐないらしい。

しかし、まあ、何處へ行つてもさうであるやうに、都會の相當なホテルにゐる以上、英語だけで用が足りることは勿論だ。じつさい聞くところによると、瑞西のホテルの給仕人や、チエンバアメエドは、英語の勉强に交代で倫敦へ出て來るのだ。

うだ。

これは何も瑞西に限つたことはないが、方々歩いてゐて言語に困つた時は、そこはよくしたもので、思はない智慧が浮んで來る。たいがいのことが、人間同志の微妙な表情で、どうやら相互に理解がつくから妙だ。

この間に處して、旅行者のための文章本(フレイズ・ブック)といふものがある。が、これは餘計だ。僕等も一通り揃へて持ち歩いたが、ほとんど使つたことがないと言つてい丶位ゐだ。肝心なことが拔けてゐる。例へば「あなたは美しい聲を持つてゐます」ことの「きつと大歌劇に出てゐたことがおありでせう」ことの「自分には七つの鞄がある」——なんて、こんなのは愚の到りで、あの忙しい停車場の雜沓で、へんてこな外國語の本を開いて、驛夫相手にこんなことを言つたつてとても始まらない。それよりも耳でも摑んで引つ張つて來て、七つの鞄を見せながら、白眼みつけるはうが早い——食堂でミルクが欲しくても、靴下を洗濯に出さうと思つても、さういふ俗惡なことは、文章本のどの頁にもないのである。

ナタリイ・ケニンガムは前々から言ふ通り二つの愛稱を所有してゐた。ナニイとNANだ。で、母親のケニンガム夫人は、このふたつの名前をいろ／＼に使つて、それで娘を馴致しやうと心がけてゐた。言ふまでもなく、ケニンガムは倫敦から來てゐる家族である。

さて、僕は主人公のロジエル・エ・ギャレは漠然と結婚の相手を探しあぐんで、この瑞西山中のサン・モリッツまで辿り登つて來たのだと説明したやうに覺えてゐるが、この漠然といふところを、いま改めなければならないのだ。それは彼が、自分はナタリイ・ケニンガムに戀を感じてゐると、僕に打ち開けたからである。

ナタリイ・ケニンガムは、ベンジンのやうに火のつき易い性質だつた。彼女は片つぽうの眼で泣いて、ほかの眼で笑ふことが出來た。お茶を飲みながら食堂の眞ん中で靴下を直した。晩餐にはアフタアヌウンの上へ眞黄いろなジャンパアを引つかけて出席した。そして、それを笑ふ人と一しよに笑つた。食後は小刀をくわへて西班牙ダンスを踊つた。背は眞赤なPULL・OVERでスキイに出かけた。といふよりも、それは雪の上を轉る(ころが)ためだつた。ころぶ時には、必ず誰か男の上を撰んだ。それがロジエル・エ・ギャレだつたことが二三度つゞいて、そして彼をしてこの放奔な錯覺に陷らしめたのだつた。彼女のスキーは、誰も手入れをする者がないので、肉刺傷のやうに創だらけに乾割れがしてゐた。だから彼女の加はつた遠足スキーは、必

ず途中で何度も停滯して、彼女の所在を物色しなければならなかつた。さういふ時は、彼女の赤い服裝が雪のなかで大いに發見を早めた。すると彼女はいつもスキイが脱げて立つてゐた。それを履かせやうとして多くの男が卽座にＣｒｅｓｔａ・ｒｕｎを開始した。みんなが一ばん先に彼女の助力へ走らうと爭つたが、ロジエル・エ・ギヤレが勝つに決まつてゐた。それはけつして彼がスキイの名手だつたからではなかつた。つねに彼女のそばにゐて、彼女のスキイに事件が起るや否、誰よりも早く奉仕する手近かな地位を占めてゐるためだつた。かれはこの特權を他人に讓らうとはしなかつた。早朝からＮａｎの出入りをうかゞつてゐて、彼女がスキイの仕度をしてゐる時は、すつかり用意が出來てホテルの玄關に待つてゐる彼だつた。そのかれへ、彼女は時々薄つぺらな笑ひを與へてゐるだけにしか、私たちの眼には見えなかつた。それでもロジエル・エ・ギヤレは滿足以上の樣子だつた。雪解けがあつたりして、スポウツに出られない日がつゞくと、彼はもつと忙しかつた。ナニイのブリッヂの相手は希臘人にきまつてゐた。お茶のダンスには、彼女の火の玉みたいな斷髮が、彼の短衣の胸にへばり附いて、チヤアルストンした。彼はその、上から二つ目の釦鈕の横に殘つた白粉のあとを長いこと消さずにゐた。それを注意されて笑ふ時の彼が一ばん幸福さうだつた。夜は、人並より少し長い彼の手が、フロックの下に直ぐサスペンダアをしてゐる彼女の腰を抱へて「黑い底（ブラツク・ボトム）」を踏んだ。しかし、神よ王樣を助け給へ（ガツド・セーヴ・ザ・キング）が鳴り出す前にナタリイは逸早く逃げ出してゐた。それを追つかけて、ロジエル・エ・ギヤレはホテルぢうを歩いた。會ふ人ごとに、彼女を見かけなかつたかと訊くのが、彼は大好きだつた。併しその時はもう彼女は部屋に上つて、バス・ルウムで水を引いてゐた。その音は何處にゐても彼の耳に聞えて、鑑別出來るらしかつた。これで彼もその一日として、疲れた身體を階上の自室へ運び上げた。

7

ケニンガム夫人のウインタア・スポウツに對する觀念は、ＤＯＬＦとＢＡＤのサン・モリッツぢうに有名なほど、それは獨特のものだつた。彼女は白繻子の訪問服の上に木鼠の毛皮外套を着て、そしてスキイを履いた。帽子には、アネモネの縫とりがあつた。耳環は眞珠の母（マザア・オヴ・パアル）の心臟形だつた。彼女はこのいでたちでホテルの前の雪に降り立つのだ。やがて二三度雪の阪を步いたかと思ふと、立ちどまつて、鼻に白粉を叩いた。それが濟むとホテルへ歸つた。殘りの一日を彼女は客間の大椅子で過すのだつた。これがケニンガム夫人のウインタア・スポウツだつた。

冬の St. Moritz ——白い謝肉祭は要するに假面の長宴だ。そこへ羅馬法王の觸れ出したほんとの謝肉祭が迫つて來た。「The

Ice Carnival!

宵から朝まで、ホテルのスケイト・リンクで紐育渡りのバヴアリイKIDSがサクセフオンを哮らせ、酒樽型の大太鼓をころがし、それにフイドルが縋り、金屬性の合ひの手が加はり――ピアニストは洋袴を外して宙へ放る。

Was it a dream?
Say, was it a dream?
昨夜あなたは僕の腕のなかにあつた
僕の腕はまだその感觸でしびれてる
それなのに夢だなんて！

一曲終る。アンコウルの相手はしつこい。つゞいてまた直ぐに始まる。限りがない。

デイツケンス小説中の人物・ハムレツト・1929嬢・奴隷酷使者・支那人・REVUE廣告のサンドウヰツチ人形・ルヰ十六世・インデイアン・ラヂヤ・めくらの乞食・道化役・あらびや人・支那の大官――そのうちで、古タオルだけで扮裝した南洋の土人が一等に當選する。案山子は古い。カウボウイもおきまりだ。大がいの人は、倫敦から衣裳をとる。キングスウエイにデニスン製紙會社といふのがある。いろんな色で註文通りの紙衣裳を作つて呉れる。が、謝肉祭の扮裝舞踏に一ばん大事なのは、着物よりも顔のつくりだ。大ていこれだけは、トランクの底に用意していく。洗顔用タオル、赤いグリイス塗料、黒のライニング・ステツク、樂屋用ワセリン一壜、白粉。顔を黒くするにはコルクを燒いてつけるといゝ。サン・モリツツの樂屋でも、これだけ揃へて賣つてゐる。

假裝した人々が、氷の上に二重の輪を作る。內側は女ばかりで、外が男の列だ。女は外を向き、男の圓はそれに對して內面して立つ。樂手は全然テンポの違つた二つの奏樂をしなければならない。はじめの音樂で女は左へ廻る。それが濟むと、次の男が右へステツプする。そして、終つたところで向き合つた同志が、その一晩の踊りの相手ときまるのだ。

私達の前には、枕のやうな雪の丘がゆるい角度をもつて谷へ下りてゐた。そのところどころに雪を溶して焚火が燃えた。高山系の植物が、隊列を作つて黑い幹を現はしてゐた。まるで無數のハンケチを干したやうな枝の交叉は、綠火の反映で東洋提燈みたいだつた。切り拓かれたリンクの周圍に、BUFFETの食卓が並んだ。そこを扮裝のスポウツマンとスポウツウウマンとが、けたゝましく笑ひながら搖れ動いてゐた。どこにでも人を呼ぶ聲があつた。空は雪を宿して赤い水蒸氣だつた。山峽には馬橇の鈴が犇めいた。

Was it a dream?
Say, was it a dream?

ロジエル・エ・ギヤレは、この、相手の選擇ダンスで、何とかしてナタリイ・ケニンガムを掴まうと努力したが、これは、彼の望みが外れたはうが自然だつたと言はなければなるまい。ナニィは、多分二三日前ホテルへ來たらしい見たこともない男と組んでしまつて、ロジエル・エ・ギヤレには、他の女が當つた。が、それは、彼一流の交渉の才能で、自分の思ふとほりにＦＩＸされ得べき性質のものだつた。事實彼は、じぶんに當つた女をナンの相手に押しつけ、そして彼からナニィを横取ることによつて、この危難を征服した。彼女は、その火の玉のやうな斷髪を彼の短衣の胸へ預けて、片つぱうの眼で笑ひ、ほかの眼で泣きながらスケイトのジヤズを繼續した。彼は上から二つ目の釦の横に殘つた白粉の殘を、長いこと消さずにおくことにきめた。僕がそれを注意したら、彼は幸福さうに微笑んだ。人並みよりすこし長い彼の手が、女給の變裝の下にすぐサスペンダアをしてゐる彼女の腰をかゝへて「黑い底」を廻つた。しかし、神よ王様を助け給へが鳴り出す前に、ナタリイは逸早く逃け出してゐた。それを追つかけてロジエル・エ・ギヤレは森ぢうを追遁した。ケニンガム夫人は勿論、本人のナンもこの希臘人の上に自分がそんな大きな動搖を投げてゐるやうとは知らなかつた。彼女はたゞ、ベンヂンのやうに火のつき易い性質に過ぎなかつたのだ。ふたりは、一晩ぢう森から出て來なかつた。彼女の何氣ない言動のことごとくが、ロジエル・エ・ギヤレの眼で見ると全く別の内容をもつて響かざるを得なかつた。その晩、ロジエル・エ・ギヤレは、ナタリイ・ケニンガムに正式に結婚を申込んだ。それは彼女を驚かせるに充分だつた。

「あら、何故さうあなたは「大戰以前」なの？ 結婚ですつて？――いゝぢやありませんか、そんなこと。」

そしてロジエル・エ・ギヤレは、結婚と同じ結果を持つたことは、言ふまでもあるまい。

昨夜あなたは僕の腕のなかにあつた
僕の腕はまだその感觸でしびれてる
それなのに夢だなんて！
Say, was it a dream?
Was it a drea――m?

――といふロジエル・エ・ギヤレの話しなんですが、如何です、お氣に召しましたか。

ロジエル・エ・ギヤレとナタリは、その翌日朝早く、ケニンガム夫人を寢臺へ殘したまゝ、幸福と一しよに巴里へ逃亡してしまつた。しかし、これは、飽くまでも私達の考へる結婚ではないのだ。何故ならそれは、瑞西のウインタア・スポウツに無くてはならない「かたい雪」の都の近代戀愛なのだから。だからあのガラス玉のやうに妙にぎらぎらする嫉妬の要もあるまい

し、多くのシチユエイシヨンを手がけて「大戰後の新道德」に慣れた同志のあひだにのみ進展する勇壯な疾走である。そしてよりいゝことには、相互の理解の上で、いろんな戀愛技術のSTUNTが行はれるだらう。

冬の聖モリッツは、兩大陸の流行の大行列だ。

倫敦と巴里と紐育の精粹が、ウインタア・スポウツに名をかりて一時こゝに集注される。

大小の名を持つ人々・新聞の寫眞によつて公衆に顔を知られてゐる紳士と淑女・女優・競馬騎手・人氣作家・離婚常習者・商業貴族・生産のキヤプテン達・彼等の家族中のJAZZ・BOYSと・反叛年齢に達した娘たちの大集團・獨逸から出稼ぎに來てゐる首の赤い給仕人の群・舌と動作の滑かな大詐欺師の一隊――現世紀に逆巻く唯物歐羅巴の男女の人生探檢者が、各々の智能と衣裳と役割をもちよつて、この一冬のモリッツに雪の舞踏を踊りぬく――それは夜を日につぐ白い謝肉祭なのだ。

もちろんそこには、一年ぢうの給料を貯金したので着物を買つて來て、うまく名流の令孃に化け濟ましてゐるマニキユア・ガアルや、故國の自宅へ歸ると暗い寒いアパアトメントの階段を頂上まで這ひ上らなければならない、自選オツクスフオウド訛りの青年紳士やが、それ〲「大きな把握」を狙つて、このSETに交つて活躍してゐることは言ふまでもない。サン・モリッツは、僞と本物のカクテル・シエイカアなのだ。みんながお互に Make-beleive し合つて、その相手の夢を尊重する約束を實行してゐる催眠狀態――山と湖と毛絲の襟卷によつて完全に孤立させられてゐる別天地なのだ。おまけに、雪はすべてを平等化する。眼をつぶつて心描して下さい。雪の山と、雪の野と、雪の谷と、雪の空と、雪の町と、雪の女とを。そして、この切り離された小世界に發生する事件と醜聞と華美と笑聲と、壯麗と雜音とを――何といふ、それは adventurer と adventuress に都合のいゝ背景であらう!

そこを占めるものは、男も女も同じ服裝で傾斜を上る笑ひ聲であり、濡れて上氣した女の頬であり、革類と女の汗の乾くにほひであり、誰でも交友と・ダンスと・カクテル・パアテイと・スキイの遠出と・夜更けのホテルとであり――だから、男振り自慢の巴里の床屋は、外觀を急造して大ホテルへ乘り込み「美術家」と自己登錄してゐることであらうし、港の運送屋は貿易商と、ピアノ運搬人は音樂批評家と、安芝居の道具方は舞臺裝置家と、帽子の賣子孃は「頭部の專門家(スペシヤリスト)」と、自費出版の未亡人は詩人と、街路掃除夫は社會改良家と、踊り子は舞踊家と、郵便脚夫は官吏と、機關手は運輸業と、給仕は會社員と、賣笑婦は獨立生計と、めいめいその花文字のやうなホテルの宿帳の署名と一しよに、かういふ觸れ込みで押しまはつてゐるかも知れ

ないのだ——The White Carnival! St. Moritz!

私はあのロジェル・エ・ギャレンの本名は知らないのである。しかし、それでも私は、彼がオスロか何處か北方の首府に仕事と地位を持つてゐる希臘の若い海軍武官であつたことも、いつも小さな秤を携帶してゐて、それで注意深くフィリップ・モウリスの上等の刻煙草を計つて、自分で混ぜて、晩餐後のヴェランダで零下七度の外氣へゆつくりと蒼い煙を吹き出すことの習慣のあつたことも、例の大陸朝飯を極度に排斥して、BEEFEXと燒林檎と純白の食卓布に固執してゐたことも、趣味として部屋では深紅のガウンを着てゐたことも、讀んでゐたバルビウスの作品よりも、實を云ふと巴里版ルキ・キャヴォの輸入好色本のはうが好きらしかつたことも、すべての犬を恐がつて猫に對しても威勢を張つたことも、英吉利の總選擧を豫想して各政黨の詳細な得票を作つてゐたことも、その一々に關して食後から就寢迄の時間を消すに足る綿密な説明を用意してゐたことも、それから、これは度々言つたが、半東洋風の黑い頭髮をロジエル・エ・ギャレ會社の製品で水浴用護謨帽子のやうに固めてゐたことも——だが、外見を急造して、あのホテル・ボオ・リヴアジュへ乘り込んで來てゐた巴里の理髮師ではなかつたと、誰が保證し得る？

そして、あのナタリイ・ケニンガムは、一年中の給料を溜めてそれで着物を買つて來た、名家の令孃こと實は、倫敦の一マニキュア・ガアルではなかつたか——かういふ想像である。

物語りの結末から言つて、こゝはこの二人に、何うしてもさうあつて貰はなければうそだと僕は思ふんだが、君、君の考へはどうです？

私達も、間もなく白い謝肉祭を逃れて、安堵と一しよに英吉利海峡を渡つた。

Was it a dream?

Nay, was it a dream——?

倫敦には、アウモンズの花が咲いて、WEEK・ENDの自動車の流れが途切れもなく續いてゐる。

MR・ウィンストン・チャアチルは、お茶の税を撤廢して、その減收を、競馬賭金仲人(ブックメエカアス)の電話へ年四十磅の増税を課することによつて、補はうと言ふのだ。贊成と反對・贊成と反對。

選擧は近い。

BRIXTONの大通りは、政黨の宣傳貼紙で一杯である。

Socialism Means

Higher Prices More Strikes

Heavier Taxes Less Employment

VOTE FOR

CONSERVATIVE POLICY!

芥川龍之介の死

小宮豐隆

〔生きてゐた時分の芥川君と私とは、お互に呼び棄てにする樣な間柄ではなかつた。然し、芥川君が既に一箇の歴史的な存在になつて了つた今日、私は、敢て彼を呼び棄てにし得る自由を持つ事にしたいと思ふ。〕

芥川はなぜ死んだか。——芥川が死んだのは、芥川があまりに眞面目であつたためである、あまりに鋭敏なモラル・センスを持つてゐたゝめである、と私は思つてゐる。芥川は生理的に、生活力（ヴイタリテイ）の缺乏のために死んだのだと、考へてゐる人もある樣である。なるほどその通りかも知れない。然し、芥川のその生活力（ヴイタリテイ）を蝕んだものは、芥川の眞面目である、芥川のモラル・センスである。芥川がいくら生理的に羸弱であつたとしても、若し芥川が張三李四の樣に心理的に頑強であり得たならば、芥川は決して死なゝかつた筈である。

もつとも芥川は、道徳とか良心とかいふ言葉を、ひどく嫌つてゐた樣にも思はれる。芥川は、自分はいかなる良心をも持ち合はせてはゐない、あるのは唯神經だけであると、繰り返し言明してさへもゐる。然し是は芥川が、自分の良心の存

在を無視して了はなければゐられないほど、良心を重荷に感じてゐたといふ事を物語るものではあつても、決して芥川に良心がなかつたといふ事を物語るものではない。殊に芥川は、あるのは唯神經だけだと言つてゐる。芥川は、自分の中のいかなる良心の存在をも否定しようとしたけれども、自分に作用して自分を苦しめる神經の存在だけは、竟に否定する事がなかつた。然もその神經を染めてゐる最も顯著な色彩は「彼自身を恥ぢると共に彼等を恐れる心もち」――即ち罪の意識である。さうしてこの罪の意識こそは、芥川の神經を悸びえさせ、芥川の心の平和を奪ひ、芥川の生活力を消耗させ、最後に、芥川を滅ぼして了つたものなのである。

芥川は、一面に於て、典型的なロマンティシストであり、また典型的な藝術至上主義者であつた。この事は、人生を一行のボオドレエルにも若かないと言つたり、架空線から發する紫いろの火花を、命と取り換へてもつかまへたかつたと言つたり、殊に、もし死體(註。解剖に必要な)に缺乏すれば、俺だつたら何の惡意もなしに人殺しをするんだがと頭の中で考へたと言つたりしてゐる、芥川自身の言葉に就いて見ても明白である。芥川の死を藝術的なものとして考へてゐる人達は、恐らく芥川のこの一面に著眼するからの事であるに違ひない。然し私は、違つた意味では芥川の死を藝術的な死だと考へる事も出來るけれども、そのまゝの意味では、到底その見方に同ずる譯に行かない。なぜなら芥川は、この意味でのロマンティシズムや藝術至上主義を竟に貫ぬき通す事が出來なかつたからである。芥川は、もし死體に缺乏すれば、何の惡意もなしに、ほんとに人殺しをしたかも知れない。然し芥川はそのあとでは、その人殺しのために、必ず、自分が殺される以上に惱んだに違ひない。芥川は自分を藝術至上主義者ではないと言つてゐる。まつたくその通りである。ロマンティシストであり藝術至上主義者であつた芥川は、そのロマンティシズムや藝術至上主義を、結局のところ、言はば芥川の底を流れてゐた倫理主義といふ樣なものから、動搖させられ崩壞させられ粉碎されて了つたのである。

芥川は早くから、少くとも理論的にだけでも、人生そのものに對する興味を失つてゐた樣である。芥川にとつて人生は灰色のじめじめした單調で退屈な生活の連續であつた。然も、その落窕から彼を救つてくれたものは、彼の藝術である、もしくは藝術一般である。藝術は芥川にとつては、人生を超越したものであり、別乾坤を形づくるものであり、人生を蒸餾して得られた刺戟の強い香りの高いエキスであつた。芥川はこの人工の樂園に立て籠る事によつて、香りも色も光もない人生を見下ろしながら、その上に輕侮や反語の微笑を浴びせる事が出來たのである。「人生は二十九歲の彼にはもう少しも明るくはなかつた。が、ヴォルテエルはかう云ふ彼に人工の翼を供給した。彼はその人工の翼をひろげ、易やすと空へ舞ひ上つた。同時に又理知の光を浴びた人生の歡びや悲しみは彼の日の下に沈んで行つた」と芥川は書いてゐる。是は芥川がヴォルテエルを通して、理知の力によつて人生を或距離から眺める事を知つたといふ事を我々に報告するものであるには違ひないが、然も是は、直ちに移して、芥川の藝術と人生との關係を說明するものと見做す事の出來るものである。

人工の樂園が人生から游離してゐる限り、なんの問題も起りやうがない。然もその人工の樂園が人生から游離してゐる限り、其所の空氣は人々に多くの捨離を要求する。然し全然風流人にはなり切つて了へないほど多欲に生れついた芥川はさうして一面では十分にリアリストででもあつた芥川は、その人工の樂園に立て籠つて、多くのものを捨離する生活に、じつと堪へてゐる事が出來なかつた。芥川は、今まで顏を背ける樣にして來た人生に、再び接觸し始めなければならなかつた。といふ事は然し、此所で芥川のロマンティシズムや藝術至上主義が、芥川のリアリズムにその支配權を讓つたといふ事を意味しない。反對にそれは、さういふロマンティシズムや藝術至上主義がリアリズムと一緒になつて、芥川をして、人生そのものゝ中に生きた藝術を求めしめたといふ事を意味する。別な言ひ方をすれば、芥川は、人生そのものゝ中に踏み込んで、其所から、新たなよりリアルな人工の樂園を組み立てるに必要な、刺激の強い香りの高い、生きた材料を蒐集

しなければゐられなくなつたのである。

其所に問題の起り得る機縁が成就する。

人生そのものゝ中に刺激の強い香りの高い—藝術を求めるためには、人生そのものゝ中に人工の樂園を築いていつまでもその光輝を失はせないためには、所詮、人は徹底的なエゴイストになるか、それでなければ、徹底的なロマンティシストにならなければならない。人生そのものは常に藝術を提供し得るものではないとゝもに、一旦それを提供した以上は、それが藝術としての性質を持ち續けるか否かに論なく、いつまでもその代償を請求して止まない傾向を持つてゐるからである。然し芥川は、その代償を拒絶すべく、あまりに鋭敏な良心を持ちすぎた。然しその代償を支辨すべく、又あまりに多く藝術家でありすぎた。

坂田藤十郎は自分の藝術のために人の妻君を誘惑したと言はれる。ゴーンクールの書いたラ・フォースタンは自分の藝術のために、所夫の末期の苦悶を觀察したあとで、鏡に向つてその表出を研究する。ラ・フォースタンはそれを所夫から見つけられ即座に離縁されて了つたが、藤十郎はその翌日その女の所へ、芝居をするに就いて研究のためにあんな事をしたに過ぎない、どうか惡く思つてくれるなと、謝りに行つたのださうである。

ラ・フォースタンは自分の藝術のために自分の情合を忘れた。藤十郎は自分の藝術のために他人の情合をおもちやにする。自分の情合を忘れても、他人の情合をおもちやにしても、ともかく彼等は、さういふ風にしなければゐられないほど自分の藝術を愛してゐたのである。人間的な、もしくは倫理的な立場から言へば、彼等は正に化物の樣なものであるには違ひない。然し、藝術至上主義の立場に立てば、それほどまでに自分の藝術を信仰し熱愛する彼等の決然たる態度は、定

に羨やむべきものがあるとも言へる。彼等は徹底的なエゴイストであり、もしくは徹底的なロマンティシストである。例へば藤十郎の場合、相手の女が藤十郎の誘惑に乘つて、本當に藤十郎を戀したとしても、藤十郎は恐らくその戀に應じもしなかつたらうし、應じないとしても別に氣の毒とも濟まないとも思ひもしなかつたであらう。それが女にとつてどんな犧牲を意味するものであるかを知つたとしても、藤十郎はそれを、自分の藝術に捧げられる當然の犧牲に過ぎないとしか考へなかつたであらう。彼の良心は、かうして、いつでも明るく且つ晴れやかであつた。

然し芥川はさうは行かなかつた。

無論芥川は自分の藝術を熱愛してゐた。生活欲は少しもないと言明する時でさへ、制作欲だけは殘つてゐると附け加へるほど、芥川は自分の藝術を熱愛してゐた。然し芥川は、藤十郎の樣に、自分の藝術を宗教的に信じきる事が出來なかつた。同時に芥川は、多くの天才達の樣に、自分の才能を宗教的に信じきる事も出來なかつた。人生に對してスケプティックであつた芥川は、纔に藝術の上に生きてゐたけれども、然し根柢では、その自分の藝術に對しても、その自分の才能に對しても、亦スケプティックであつた。――芥川は「あらゆる善惡の彼岸に悠々と立つてゐるゲエテを見」て「絶望に近い羨ましさを感じた」と言つてゐる。さうして「しみ〲生活的官官に生れた」自分自身を「輕蔑せずにはゐられなかつた」と言つてゐる。芥川は、ラ・フォースタンの樣な場合を經驗するとしても、「心の痛みなしには、鏡に向つて表出を研究する事は出來ないに違ひなかつた。藤十郎の樣な場合を經驗するとしても、十字架を負ふ事なしには、その女の所へ謝まりに行く事は出來ないに違ひなかつた。

然も芥川にとつてフェータルな事は、それにも拘はらず芥川が、ラ・フォースタンの場合の樣な、もしくは藤十郎の場合の樣な場合の中に、進んで身を置かなければゐられない樣な、特別な、劇しい衝迫を、内に藏してゐたといふ事である。

芥川は聰明な理知の所有者であつた。從つて芥川には、自分の心の中のいろんな動きが、可也の程度までは、手にとる樣に見えてゐた筈である。同時に、それらの心が外に動き出て、凡そどういふ結果を生むものであるかといふ事も、可也はつきり分つてゐた筈である。同時にまた、その事が凡そ可能である限り、ある心の動きを、まだ芽でゐるうちにつかまへて思ひの儘に變形する事も出來た筈である。從つて、かういふ衝迫に對しても、その聰明な理知は、幾度か苦い經驗を嘗めさせられて、その善後にもしくはその防遏に、あらゆる手段を講じたに違ひないと想像される。然し「僕の意識してゐない部分は、——僕の魂のアフリカはどこまでも茫々と廣がつてゐる。僕はそれを恐れてゐるのだ。光の中には怪物は住まない。しかし無邊の闇の中には何かがまだ眠つてゐる」と芥川自身恐れてゐる樣に、それは、聰明な芥川の理知を以つてしても、竟にどうする事も出來ない——芥川の理知の支配力を超えた、ある知れざる力であるに外ならなかつた。然もそれは、善惡を超えた力であり、火山の樣に卒然として噴出し得る力であつた。

藤十郎の心理は寧ろ簡單である。それが知れざる力であるにしろ、知れたる意志であるにしろ、藤十郎は唯その命令を聽いて命令どほり實行しさへすればよかつた。然し芥川は、欲する欲しないに拘はらず、先づ知れざる力の命令に聽かなればならなかつた。然もそれは、多くの場合、芥川の中の倫理が、必ず是認しないものであつた。然し、一方で芥川の中の藝術家は、無條件には、その否認を肯定しなかつた。然も自分の藝術竝に藝術家としての自分の才能に對する究極のスケプティズムは、芥川の中の藝術家の主張を十分力強いものにする事が出來なかつた。芥川の中では、段々に倫理が、鐵の樣な嚴めしさをもつて、外のあらゆる心を支配し始める。然し、知れざる力は、その支配を嘲笑する樣に、いつのまにか、再び噴出を始めるのである。芥川は遲疑なく知れざる力のみに仕へる事も出來ない。無條件に倫理のみに仕へる事も

出來ない。断平として藝術のみに仕へる事も出來ない。どれにもそれ〳〵に仕へて、どれにもそれ〳〵に徹底する事が出來ないのである。彼はいつ死んでも悔いないやうに烈しい生活をするつもりだつた。が、不相變養父母や伯母に遠慮勝ちな生活をつゞけてゐた。それは彼の生活に明暗の兩面を造り出した」とあるのは、可也の程度にこの間の消息に觸れてゐるものである。

ニイチエは、たしか『ツァラツストラ』の中で蛇が口の中へ這ひ込んだ男の事を書いてゐる。ツァラツストラが大聲で喰ひ切れ、喰ひ切れ、と聲を掛ける。それに勵まされて男は、全身の力を自分の齒先に集めて、一氣にその蛇を喰ひ切つて了ふ。蛇を喰ひ切つてその男は、今まで一生の間に經驗した事もない様な、朗らかな笑ひを笑つたさうである。

芥川は、蛇を喰ひ切りさへすれば朗らかな笑ひが笑へるといふ事を、知つてゐた。知つてゐたればこそ芥川は、蛇を喰ひ切る努力を――思ひ切つて亂暴になり、思ひ切つて赤裸々になる努力を、幾度かその作品の上で試みてゐるのである。芥川は死ぬ一二年の間、餘所目には甕やけになつてゐるのではないかと怪しまれるほど、何かとり亂したものを書いた。『新生』の主人公を、老獪な僞善者だと言つたのもこの時分である。ストリンドベリを嘘つきと言つたのもこの時分である。芭蕉を大山師と言つたのもこの時分である。それのみではない。その死後遺稿として發表されたものゝ中には、不斷の芥川を知つてゐる者から言へば、芥川が決死の覺悟をしなければとてもこんな事は書かなかつたに違ひないと思はれる様なものが、隨所に續々と書き連ねられてゐる。是は芥川にとつては、絶望に近い、大飛躍である。芥川は、渾身の力を揮つて、その蛇を喰ひ切らうとしたのである。

然し芥川には蛇を喰ひ切る力がなかつた。丈の高い芭蕉は素晴らしい葉をまとつたまゝ、瘠せ土の上には[illegible]のやうに

細ぼそと根を露はしてゐた。それは又勿論傷き易い彼の自畫像にも違ひなかつた。しかしかう云ふ發見は彼を憂欝にするだけだつた。『もう遲い。しかしいざとなつた時には……』と言つてゐた芥川も、その「いざとなつた時」を違つた意味に用ひなければならない事を意識しないではゐられなかつた。

蛇を喰ひ切つた男は、それをするために、ツアラツストラの樣な、聲を掛けて力をつけてくれる人を持つ事が出來た。然し芥川には、そのツアラツストラがゐなかつた。その自敍傳小説の後半部に於いては、ほとんど同じ樣な心持の世界を持つてゐたストリンドベリは、——そのため死ぬ一二年特に芥川が愛讀もし影響も受けたらしく見えるストリンドベリは神を疑ひ神を否定しようとしたにも拘はらず、結局はその神に自分のツアラツストラを持つ事が出來た。是は恐らく、子供の時から浸み込んで、殆んど一つの本能の樣なものになつてゐる神が、ストリンドベリの中に動いてゐたためであらうと思はれる。然し芥川の中には、多くの現代の日本人と同じ樣に、さういふ本能の樣なものになつた神は、何所にも動いてはゐなかつた。然も後天的に何ものかを信じ得るためには、芥川の頭腦はあまりにリアリスティックでもあれば、又スケプティックでゝもあつた。殊に、息ぐるしく惱ましく、睡眠の不和をさへ人工的に用意しなければならなかつた時分の芥川は、惡魔の存在は信じ得ても神の存在は信じ得なかつた樣に見える。

芥川は死んだ。蛇を喰ひ切る力もなく、ツアラツストラを持つ事も出來ず、然も目に蛇をくはえてゐる事に堪えられないものは、結局、徐ろに自分を滅ぼしに來るものを待つか、自分で自分を滅ぼすか、途は唯二つしか持つてゐない。芥川は、自分で自分を滅ぼして了つた。然も芥川は自分で自分を滅ぼす事によつて、自分がいかに眞面目に人生を苦しんだかといふ事を證明した。芥川がいかに眞面目に人生を苦しんだかといふ事は、既に遺稿として發表された、彼の作品の幾つか

が鮮やかに證明してゐる。然し彼の死は、それらの作品による證明の上に、最後の最も鮮やかな證明をつけ加へたものである。假令作品の中を流れる芥川の眞面目と倫理感情とを認識する事を拒む者はあり得ても、芥川が明らかな意識下に自分で自分を滅ぼしたといふ事實を拒否する者はあり得ない。その意味で芥川の死は、芥川のそれまでに書いたどの作品よりももつと力強い作品である。

芥川は是まで、才人と言はれ、技巧家と言はれ、警句家と言はれ、藝術至上主義者と言はれ、その他いろ〳〵に言はれた。芥川はさういふいろいろのものでもあつたに違ひない。然し、それよりももつと大事な事は、芥川が恐ろしく眞面目であつた事である。『行人』の主人公は、「人間も氣狂にして見ないと本心がわからないのか」と言つた。芥川も死なゝければ或はその本心を人に分からせる事は出來なかつたかも知れない。然し芥川は、死んだのである。死んで本心を出したのである。死なずに本心を出した積りでゐる人よりも、是はどんなに立派な事だか分からない。

編輯者雜記

×

雜誌はスバラしく景氣がいゝ。恰もよし五百號だ。新秋九月の好季と共に一大氣勢を擧げようと思ふ。昔の中央公論は餘りに新人を容れる餘地がなかつた。これからの中央公論は「諸君の中央公論」にして新人の跳梁に任せるつもりだ。

×

論壇を汚さないやうにしてくれ給へ。

○

明治、大正、昭和の三代文化を通じて常に時代の主潮に棹し、言論界の權威として、華かな文藝の舞臺として誌界の覇王たる誇を持續し來つた本誌は來る九月號を以て實に創刊以來四十有餘年號を重ねる五百號に達する。此本邦誌界に於ける驚異的記錄を記念する一端として本誌は來る九月號の大部分を優秀なる讀者の作品を以て飾りたいと思ふ。此企ては一つには新人發見の意義を有つ。隱れたる新人出でよ。本誌は新人の出現を俟つこと久しい。別項の懸賞規定に從つて奮つて投稿せられたい。

○

本號は「現實世界の把握」號とした。動態世界の批判であり、把握である。現代世界の動きを直視せよ。而し世界に對する的確なる判斷の基礎を得よ。世界は刻々に推移する。

○

大内氏の論文を頂けたことは大なる喜びだつた。

氏が「英國總選擧の展望」を初め、「現實ロシアを語る」「アメリカニズムとルシアニズムの交流」其他支那朝鮮の問題等前記の意味に於いて注目すべき題目ばかりだ。

○

創作三篇の中、内田氏の「山高帽子」は近來の異色ある作品だ。此無氣味な作品の肌觸りは氏の獨自の持味であるが、一種の戰慄なしには讀み得ない。人間生活の奧底に潛む此無氣味な戰慄を描き出した藝術は全く驚異に價する。殊に作中芥川氏の出てくるところは頗る凄愴な感じだ。

中河氏の一篇は氏の近來の傑作だ。六月文壇の問題になるべき作だ。前田河氏の長篇は既に定評がある。

△

編輯後記は吾等編輯者の快よい慰安と新たなる決意との紐帶だ。之を書くために執るペンは云はん方ない輕快さを有つ。蹶起し動向し變貌し行く社會現實態に對する絕えざる關係と研究とを忽がせにせず、その核心を見極め、そのトピックを把握し、之を今日の問題たると共に明日の思索契機として生かさんとする、手前味噌ながら編輯のその苦心、連日連夜の健闘は一先づ形を採つて諸君の前に見えんとする校了の日、吾等はどんなに慰さめられる事か。疲勞は快よい安心として、少しは味噌も與太も並べたくなる。讀者も之を諒恕せられんことを。併し乍ら、諸君よ、我國雜誌興亡史に巍然と頭角を拔んで常に最高水準を示しつゝ、權威と榮譽を常に維持して來た本誌の、近來の拋物線的躍進のいよく自然的動向力を示しつゝある事は諸君も容認する處であらう。讚辭と鞭撻は吾等のまはりに渦卷いて居る。——が、諸君よ、吾等は是に安發とし滿ててはせぬ、吾等は、加速度的飛躍を示さんと熾烈たるものを藏して居る。刮目と期待を以て本誌に對して欲しい。吾等は必らずや諸君の手を握り、諸君の手と相攜へて行かう。

混沌たる時代相と晦澁なる現實態とを底流

する力は——。ま、紙幅は止さう。

唯、諸君、吾等の微意と確信の一端を諸君に御報告できる事を欣びとする。それは、既に御覽と思ふが、投稿募集だ。本誌も近く第五百號を迎へる、之を機として、更により親密に諸君と意・行を頒ちたい。自由にして奔放、清新にして重厚、新時代に息づき新時代を歩む諸君の一般投稿を切に待ち、欣んで迎へる。偖つて應募せられんことを。

規定は、暫定的な概論的なものに過ぎぬ。之に囚はれず、獨創性と新鮮味と、新形態と新内容、充分に腕と頭とを振つて下さる事を希望する。わが中央公論は時代の中央公論たると共に「諸君の中央公論」であるのだ。——

□

お蔭で本誌の發行部數は一月より二月、二月より三月といつた具合に月々増して行く。雜誌を編輯するものにとつてこれほどの悦びはない。いゝもは必ずやその光りを認められる。當然すぎるほど當然なことであるが嬉しいことだ。いよ／＼ます／＼よき雜誌を作ることに專心しなければならぬ。

この九月には本誌の創刊「五百號記念號」が發行される計畫になつてゐる。五百號といふ數は決して多きを誇り得る數ではない。しかし考へて見て下さい、明治といふ年號が新日本の曙を告げてからそも／＼何年を閲してゐるでせう、而も雜誌界にはその間幾多の盛衰浮沈があつた筈です。この、世の常なき荒波と闘つてこゝに創刊以來、明治、大正、昭和と經て、この九月五百號記念號を世に送るの榮譽を擔ふことは、本誌が世に媚びず權門に下らずさながら亭々として天を摩する松樹の操を持して我が國最高文化のリードに孜々としてこれ努め來たりしだけに感慨新たなるもののなきを得ないのであります。

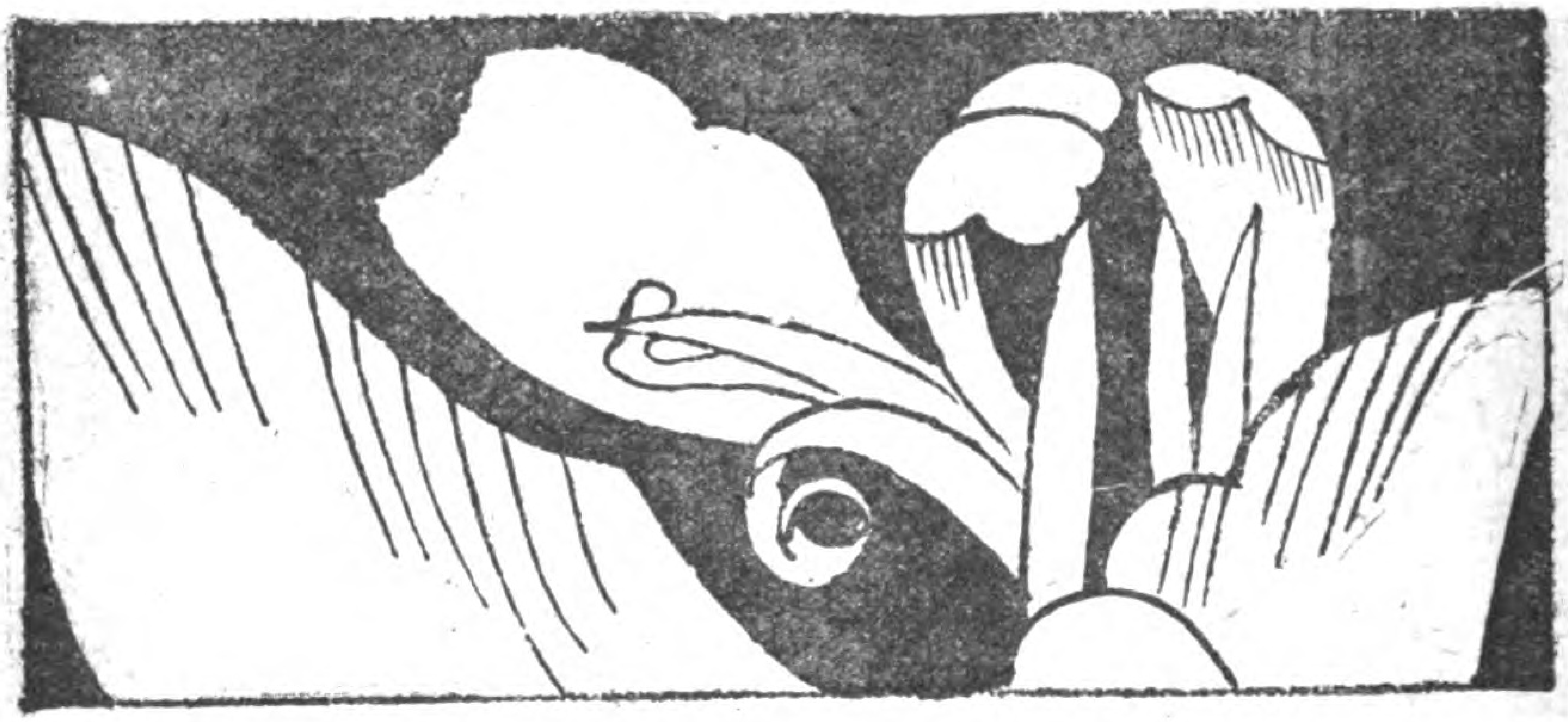
九月にはどんな雜誌が諸彦を樂しませるでせう、期待してお待ち下さい。計畫は多々あります、本號に發表した大懸賞原稿募集の企てもその一端の現れです、偖つて御投稿下さい。良き作品ならば如何なる種類のものでも掲載するに決して吝かではありません。幾篇でも採用します、この機會に讀者諸氏に解放した本誌の頁を自由なる舞臺として思ふまゝに筆をかして下さい。それこそ本誌の本懷とするところです。

本號も亦可成の自信を以て諸氏に見みゆることを誇り得るものです。大内兵衞氏の「イギリス總選擧の展望」は必ず讀んで頂きたい論文です。新居格氏の「日本に於けるアメリカニズムとルシアニズムの交錯」、新滿洲の本間氏のもの「東京新市長堀切善次郎論」、牧野氏の「我國の外資問題」、石井氏の「東京ガス裸身像」、清澤氏の「フーヴアとフオード」、小宮氏の「芥川龍之介論」と擧げれば限りがありません。長野氏の「蔣・馮を繞る支那時局」も日漁業問題の眞相を描いた「北洋の魚群は誰のものか」も時節柄見逃してはならない讀みものです。「現實ロシアを語る」の大竹博吉氏は日本有數のロシア通です。「午前零時の文明」は若い方々にお願ひしてその方面の興味ある描寫をしていたゞきました。中河氏の創作・内田氏の創作共に異色あるものです。

□

エクセントリックな表現・俊敏なる新時代的感覺・白線的飛躍に富む題材の驅使・絢爛にして奔逸なる筆觸を以て、一歳の間、諸君に見えてその才華を恣にせる讓次谷氏、茲に世界巡禮の旅を終へて、今歸期の途にある。——六月上旬彼は故國の土を踏むであらう。

才人谷氏、今後の活躍如何たるものかを示さんとする。期して已るべきもののあるは吾等の疑はぬところ！



赤い復讐

中河與一

一

夜が更けるに從つて、時計の針が午前零時の空つぽな袋を突きさして、この賑やかな港の街も漸く生氣を失つて行つた。

そして寒い北風の中で、幾何學的な家竝の列と、消えた廣告燈と、電車の軌道とが、默り込んだまゝ、その疲れきつた骨を冷たくさらしてゐた。

時として白い光の帶を振る自動車が現はれると——濁水のやうな空氣の中に、醉つぱらつた異國の水夫達の足どりを、一瞬間孑孒（ぼうふら）にして見せたりした。然し、それも忽ちにして消えると、自動車は逆（さかさま）になつたかと思はれる程の速力で、赤いテールランプの光をひきながら、すぐ街の底へ落ちて行つた。華やかな夕ぐれの歡樂を、

更けすぎた寝床に運ぶために違ひない。

と音を聞いた。タイヤのやうな固い響ではない。ギリ、ギリ、ギリギリ……

暫くしんとしてゐた。

ビオレ化粧品店の主人、万太郎は、寝室への階段をのぼらうとして、ふと足をとめた。自分の足音ではないらしい。澄してゐる耳に、今度はひとしきり戸に砂を吹きつける風の音が雑つてきた。

「ギリ、ギリ、ギリ、ギリ……」

彼は激しい動悸を感じた。然しうす暗い階段の途中で、ふとジャスミンの匂ひをかぎつけると、これはまた自働廣告人形のネヂがもどけてゐるのではあるまいか——と考へなほした。

「ギリ、ギリ、ギリ、ギリ……」

「ギリ、ギリ、ギリ……」

「ギリ、ギリ、ギリ……」

今度は間をおいて、長い間つゞいた。どうもネヂではないらしい。裏木戸の方である。そして最後にドンと何か戸にあたる音を聞いた。

彼はぬき足で、静かに階段を下りて行つた。たしか泥棒に違ひない……

「何か強い縄でもないかな」

沈着な彼はそんな事を考へた。

戸口のそばへ行くと、細い目錐の先きが、黒く蛇の舌のやうに、時々ちらちらと、家の中へのぞいてゐた。雨戸を切り抜かうとしてゐるに相違ない。

やがて鋸が半圓形を描くと、一瞬間、外から思ひきり強い壓力が、グッと注意深く加へられた。と同時に、その穴から忽ち白い、眞白い手がのぞいた。

白い手は主人の足の近くを暫く撫でてから、次第に錠前の方へのびていつた。

じつと立つたまま、漸く冷靜に見すましてゐた主人は、かけがねに手が屆かうとした時、飛びかかつていつて、痺れる程きつく白い手を掴んだ、と手袋だけがズルズルッとぬけやうとした。

彼は一層強く握りしめると、用意してゐた麻繩で、手のくるぶしを切れるほど激しくしばりあげた。

頑丈な――白い手は、手袋の中から主人の手を幾度となくひつかかうとした。

「こらッ、離しやがれ、承知しねえぞ」

外から鋭い笛のやうな哀願と威嚇の聲がした。然し主人は、麻繩が見えなくなるまで深く腕に喰ひ込んでゐるので安心して返事もしなかつた。そして荒々しく手をからみあげると、繩の兩端を、五寸釘の打つてある鐶に結へつけた。

「動いてみろ」

彼はさう思つた。

白い手袋は空の中を幾度となく眞劍に摑まうとしては、開いたり、すぼんだりしてゐた。が主人の強い力で縛られた手首は、だんだん血行がとまつていつて、次第に繩の中で紫色にかはりかけてゐた。

主人は大いそぎで、店員の寢てゐる部屋へ行くと、先づ彦と芳とをゆすつた。そして眠つてゐる店員を次ぎ次ぎに起した。

「おい、みんな起きてくれ。見張りをしてゐてくれないか。泥棒をつかまへたんだ。泥棒を」

若い店員達は、あはてて床の上に起きあがつたが、晝間の疲れで、暫く眠むさうに、フラフラしてゐた。

「おい、手をしばりつけてあるんだから」
六人の店員は、寒さが身にこたへると、背中をかがめて、裏口の方へ走るやうにして出て行つた。多少の恐ろしさと好奇心で。
殊に小さい芳は、自分の想像力による恐怖心で、齒の根が合はぬほどガタガタしながら、彥の後について出て行つた。
くくられた手は確かにダラリと手首から下へ向いて垂れさがつてゐた。が、それは垂れさがつてゐると云ふより、今は釣りあげられた魚のやうになつてゐた。
背の高い主人は、すぐ電話室へ馳け込むと、警察へ電話をかけた。
「とても大きい奴がひつかかりましたよ」
それから彼は、勝利者らしい餘裕をもつて、マントをかぶると、外へ出た。見屆けやうと思つてである。
店の戶を開けると、さすがに寒い二月の風が、銳い月の夜を吹きつけてゐた。
と何か異樣な胸をうつ叫び聲が聞えた。彼は忙いで裏へ廻つて行つた。と、其處には誰れもゐない。くくつてある可き筈の犯人の影さへが見えないではないか。何物の影も……
彼はふとすると、自分が幻覺の中にでもゐたのではあるまいかと考へた。何故と云つて、彼は餘りに妻を疑ひすぎてゐたからである。今夜も彼は、妻の夜の動靜を氣使ふために、一人階下の部室で、ストーブを燃やしてゐたのである。
と、居るべき筈の犯人の姿が、見えない――これにはさすがに放膽な彼も、一寸異樣な寒むけさを感じて、足がすくんだ。が思ひかへすと、平靜な氣持になつて、戶の近くへ行つてみた。と血が――おびただしい血が、腕の切り口からしたたり落ちてゐるではないか。
わづかな穴の口からもれる細い灯が、音をたてて、したたる血を、もつれた黒絲のやうに見せてゐた。血は戶をぬらし

コンクリートの地面を次第に廣くよごし、遂ひには遠くへ逃げて行つてしまつた人間の匂ひを點綴で示してゐた。

――何て男だ。自分と自分で、己れの腕を打ち切つて逃げるなんて――

「彥、芳、番をしてゐるのはいいが、犯人は腕だけだ」

二人は戶越しに主人のこの聲を聞くと、一層烈しい恐怖心に襲はれて、ぶるぶるッと肉體が慄へだした。今にもその腕が自分達の首にからまつてでもくるやうに。

芳は蒼ざめながら、彥の肩にしがみつくやうにした。

主人は無氣味な氣持に打たれると、もう一度電話室へ馳け込んだ。

二

「ね、おい、俺は腕まで切らす氣はなかつたんだよ。けど思ひきつた奴だな。あそこまでやられると、こつちの方が惡い事をしたやうな氣がするよ」

「だつて、自分勝手に切つたんですもの、仕方がないわ」

妻君が答へた。

「然し、あんなにして縛らなかつたら」

街の通りには、何事もなかつた翌日のやうに、人が雜沓しながら通りすぎてゐた。

「でも、仕方がないぢやありませんの。反對に這入られて、こつちがやられた日には、たまつたもんぢやありませんわ」

「お前は一寸も犯人に同情しないね」

「だつてあたりまへだわ、そんな惡い奴を惡く言ふのは」

「さうかね、けど少しお前は惡く云ひすぎるよ。お前は何か隱してゐやしないかい。本當は、あんまり惡く言ひたくないんぢやないのかい」

夫は妻の美しい顏の中にある形のいい唇を見つめながら云つた。

「まあ、また初まつた。よして頂戴よ。いくらなんだつて……」

妻君はツンとして、怒つたふりをすると、店の方へ出て行つた。

店には狐の毛皮で詩を綴つたやうな意氣な外套をきた毛唐の女が、剃刀をあてて頰を靑くした三人の男と、ひとかたまりに頭を集めてゐた。そして日本風の口紅を選擇しながら喋つてゐた。

「これ、どこか鳥居のやうな色をしてゐない、赤い」

大方汽船から上陸したばかりの客達にちがひない。

と、つづいて黄とエメラルドで染めわけた丸いベレーを冠つた靑年が這入つて來た。彼は毛唐と竝んで品物を選ぶ事に興味を感じたのに違ひない。

見てゐると、妻君は其の靑年の橫顏が次第に氣に入つて來た。

夫はまた店へやつて來た。

「だがね、おい、矢野警部の話では、犯人の手は非常にケシヤな、いろんな女の思ひ出を持つてゐさうな手だつたといふんだ。それから指紋によると、確かに初犯だといふ話なんだが……」

「でも、そんな事、わたしとは何の關係もないぢやありませんの」

妻君はうるささうに、さう答へながら、夫の方へ顏も向けないで、熱心に靑年の方を見つめてゐた。

「ぢやね、お前は犯人を探しだす事には興味がないのかい」

「そりやあつてよ。だけど私をそんなに責めたつて仕方がないぢやありませんの、私を責めたら犯人がつかまるとでもいふのならい丶けど……」

妻君は少し不氣嫌になつて云つた。

と主人は會話の方向をかへた。

「お前はさつきから何を見てゐるんだね、いつたい」

「店の方よ」

「店の方の何だね」

「若いお客よ」

妻君はふざけるやうに答へて笑つた。すると万太郎は何時ものやうに、妻君の正直さが氣に入つて一寸微笑せずにはゐられなかつた。

「とにかくね、犯人と關係させて私を詰問するのはよして頂戴」

その時、主人は店にたつてゐる青年のそばへ行つて、腕があるか無いかを、一ぺん檢査してみようといふ誘惑に襲はれた。然し青年は、相憎く兩手とも立派に持つてゐた。そればかりか、よく見ると、ピアノでも彈けさうな青年の長い指の先きには、綺麗なレッテルのやうに化粧した爪がはつてあつた。

主人は踵をかへして妻君と向き合ふと、急に自分の若い妻に限りもない魅力を感じだした。嫉妬した彼女には一層不思議な美しさが現はになつてゐた。

「おい、來ないか、こつちへ」

そして彼は、次の間へ這入ると、妻の襟足にぐッと手を廻はして、くるッと引き倒すやうに抱擁した。女の胸の甘い匂

ひがした。

「可愛いい奴、許してくれ、疑つたりして、けど、お前は本當に俺に嫉妬を起こさせるほど美しいんだ」

「よして頂戴よ。氣違ひのやうにおつしやるのは」

「…………」

「ほんとに、あれから毎日私をいぢめ通しなの御存じ」

そして彼女は彼の肩にあまへかかるやうにすがりついた。

妻の亞紀子は、万太郎にとつては若い後妻であつた。彼女は彼が經營してゐる香水工場の霧の中から連れて來られた。この多情な貧しい女工は、然し万太郎に初めて見出された時、卽座に喜んで彼の交渉に應じた。が多數の男工達と手を切つてくれ、といふ註文にだけは、容易に應じやうとしなかつた。つまり、彼女は戀愛に對して、何か一つの信念のやうなものを持つてゐたからであらう。

「ぢや首をきるよ、彼奴等の」

「どうぞ、お勝手に。けどそんな事なすつたら、私も逃げだして行くかも知れなくつてよ、あの男達と一緒に。そりや、あの人達と來たら、とても若くてはちきれさうなんですから」

彼女は思はせぶりに、彼等の逞ましい夜の力を追懐するやうに云つた。

万太郎は戰術を訂正しなければならなかつた。そして彼女を徐々に、馬でも慣らすやうな心持で、慣らしてみやうと考へた。そして長い間かかつて、兎に角、死んだ先妻の子である万太を里子に出す事を餌にして、彼女を家庭へひきとつてしまつた。

「美しい亞紀子、いつたいお前は何が好きなんだね、好きなものを云つてくれ」

「わしは、お前が一等好きだ。けど妙にお前の顔を見てゐると、わしは幸福と嫉妬とを感じだす」
沈着な主人は、妻の魅力に醉ひしれながら、彼女を兩手に抱きあげて、部屋の奧へ這入つて行つた。そこには雪の富士が動くやうにと作つた、廣い白天鵞絨の蒲團がボーテを匂はして横たはつてゐた。

三

一家の贅澤な生活の中に、手がかりのない、例の手のない男の幻が、時時不氣味に蘇つて來た。その爲めにか、万太郎は妻を征服してしまふと、狂氣のやうにその亂行を四方に發展させ、亞紀子は次第にブルヂョアの氣風に染んで、今では毎日、馬車に絶え間もない鞭をあてがつてゐた。
その間に、彼等の娘は次第に成長し、うなひ髮がおさげになり、皮膚が美しく滑らかな脂肪を浮かせだした。そして兩親の亂行に鋭い注意力を彼女が傾けだすと、又いつものやうに冬がやつて來た。
近くの海の色が次第に白らけて、烈しい波を立てだし、測候所の氣象塔が、日ごとのやうに暴風を豫告する灰色の大きい籠をぶらさげた。すると一つの曲藝團が何處からかやつて來て、見るまに埋立地に大仕掛けの小屋を張りだした。
街の辻々に、あツと次の瞬間に片唾をのむやうな、際どい輕業のポスターがベタベタと揭られた。サキスホンの音が、港に碇泊してゐる汽船の吐きだす煙にまじつて、時々流れて來る。
年增の伯爵夫人のやうに着飾つた亞紀子は、娘と今は番頭になつてゐる芳とを連れてテントの特別席に坐つてゐた。
一輪車に跨つた道化役者が、客の前へおどけた恰好をして現はれた。
海豹が長い鼻の上で地球儀を廻轉させた。
面をかぶつた男と女とが、そつと手つなぎをして綱渡りをした。

手のひらの白い黑ん坊が、見るまに太い鐵の棒をひんまげてしまつた。

ピストルが鳴つた。一匹の馬が興奮しながら火焰の輪を跳びくぐつては、幾匹ゐるとも知れぬ位、幾度となく輪の中から馬が跳び出して來た。

若い筋肉の立派な男が、大きい籠の內面をオートバイで廻ひながら下らうとして、數十尺の高い籠の頂點にのぼつた。人間が小さく見えた。二人の助手が、オートバイを支へて、出發の合圖を待つてゐた。

「おッ、あぶない！」

突然に娘は母親の手を握つて叫んだ。オートバイは小銃を激しく擊つやうな音をたてて、籠の內面を煙だらけにし、螺旋狀に危險な位置を保ちながら、凄まじい怪速力で走り下つてゐた。そして地面に近づかうとしてゐた。と突然、見るから美しい青年が現はれて、オートバイの下じきにならうとした。が彼は見事にも花びらのやうに肉體をひるがへすと、次の瞬間にはオートバイの後部の坐席にちやんと飛び乘つてゐた。それは明らかに肉體による技術の魅力であつた。

やがて籠の一部が開らかれると、籠の內側からオートバイは觀客の方へ走つて來た。あとから乘つた青年が、坐席の上で、身體をかたむけ、さかだちし、そして觀客に氣嫌のいいキスを投げて廻つた。

「まあ、ほんとにびつくりしたわ。私、しかれたかと思つたの」

「うまいのね、なかなか」

亞紀子は多情な口調で娘の驚きに答へた。然し、こんな會話は、恐らくこの灰色のテントの中の總ての女性が用意してゐたものに違ひない。

何かの嘲さがしたくなる程、彼の技術は敏捷であつた。そしてそれにもまして彼の容貌は魅力的であつた。

芳は暫くしてから親しい口調で云つた。

「お孃さん、僕がいいつていふものに間違ひはないでせう」

「ほんとうだわ」

「こんな素敵な離れわざ、今まで見た事がなくつてね、お母さま」

「本當に私も久しぶりに來てすばらしいものを見ましたよ」

「芳さんはどうして知つてゐたの」

「だつて大變な評判ですよ」

亞紀子も娘も、芳に誘はれた事をよかつたと思つた。

芳は尊敬と思慕の氣持ちで、美しく着飾つた二人のうしろに、ことにお孃さんの近くに坐り込みながら、しきりに幸福を感じてゐた。

極度に緊張した不安の後で、氣持のいい青年のゆるやかな速度の疾走と音樂とが入り混つて、觀客の感情を次第に華やなものにしてゐた。

「本當にうまい」

「素敵だわね」

「感心しましたわ」

觀客の視線はゆるやかに二人の青年に從いて廻つてゐた。

「いい男だわね」

「全く素敵な體格だわね」

「さすがにうまい」

「呼びものですわね、何といつたつて」

「ほんとにヒヤヒヤしたわ」

「二人ともいいのね」

「けどずつとあとから乘つた方がいいぢやない。顔も、身體も」

キスが幾度となく送られた。見物席ではいろんな會話が人人の口にのぼつてゐた。

亞紀子は横木に舞臺の方を見てゐたが、突然立ちあがつた。舞臺裏を訪問しようと思つたからである。

四

「お孃さま、お孃さまは毎日どちらでございますの」

「どちらだつていいぢやないの」

「あてておみせしませうか、曲藝でございませう」

「え、さうよ、私、すつかり氣に入つたの」

「あの曲藝師でございますか」

「馬鹿ね、婆や、人が笑つてよ、そんな事いふと。私、あんな冒險的な事がとても好きなのよ」

「でもお孃さま、あの男もなかなかよろしいぢやございませんか」

「さうね、一寸」

「やつぱし……」

「いやよ、お前、そんな事いつて」

娘は紫色の椅子に腰かけて、三面鏡に向つたまゝ、誇りかに喋りつづけてゐた。

娘をからかつてゐるのは、ビオレ商會の職工長の老婆であつた。彼女は時々工場主のうちへ手傳ひに來る事になつてゐた。

「ですから、一度逢つておやりなさいつて申しますのに」

「馬鹿、お前は何てことを云ふの、わたしにそんな事いつていいのかい」

「いや、毎日、わたしのうちへまゐりますもんですから」

「だから、どうしたといふのよ」

「ですから、およろしかつたら一度……」

「馬鹿、馬鹿いふもんぢやないわ。お前はほんとに馬鹿ね、年寄りの癖して」

「お嬢さま、ごめん下さい」

「ごめん下さいもあつたもんぢやないわ」

娘は痛快に老婆を叱りつけると、また一生懸命に鏡を見つめてゐた。鏡を見てゐると、誇らしい氣持が起つて來た。

彼女はイブニング・ドレスに厚い毛の外套を着て出て行つた。如何にも十七歳の娘らしかつた。

見物席には何時ものやうに、觀客がむつとするほど一杯つまつてゐた。

時々海の方から潮風が來ては、テントの屋根を羽ばたかせてゐる。彼女は長柄の眼鏡を手に持つて、舞臺の方を見てゐた。

若い曲藝師は何時もきまつて特別席に坐つてゐる彼女に氣付いてゐるらしく、彼女の方へ向いて愛嬌のいい挨拶をし

た。

彼女はそしらぬ顔をして、人間が小さく見える高い窓の頂點を見つめてゐた。と時々二階にある衣裳部屋で、鋭くやせて神經のでた少女が、着物をきかへたり汗をふいたりしてゐるのが眼についた。餘計なものだと、彼女はきたならしく感じた。

外へ出ると、雪がチラチラしてゐた。彼女は歸り途、自分の心が非常に浮き浮きしてゐるのを何處かに感じてゐた。手を胸に持つてゆくと、どうやら心臟のあたりでもあるらしい。彼女は暫く歩いてみやうと考へた。

「さう、寄つてみてやらうかしら、あいつのうちへ」

彼女は大膽にさう思ひつくと、雪の中に立つて、貝殼のやうなバニチイ・ミラーを一寸のぞいた。

そして嫌な匂ひの漂つてゐる不潔な支那街を横ぎつてから、手にさわるのもうすぎたない格子戸をあけた。

老婆がにこにこしながら出て來て、彼女を部屋の中へ案内した。

「いらつしやいまし、お孃樣」

娘は汚れた疊の上を、飛ぶやうにして爪先きで歩いた。疊が煮しめたやうな色になつて、ところどころに銅貨のやうな穴があいてゐた。

「あそこに坐つてゐるのがあの人です」

娘は障子の蔭からのぞくやうにして見た。と、若い曲藝師は縁側に坐つて、白く空間を刷りだしてゐる雪を眺めてゐた。

「聲をかけませうか」

すると、彼女は突然手を老婆の口の方へさしだした。

「さうね、よして頂戴、私、やつぱし歸ることにするわ」

そして娘は急に胸がドキドキしだすと、まつ青な顔になつて、玄關の方へ踵をかへさうとした。なんでもない積りで來たのに、自分ながら不思議な氣がしてたまらなかつた。

「せつかくおいでなさつたんですのに、ちやお二階へおあがりになりません。お孃さま」

さう云はれると、彼女は理性を失つた人のやうに、言はれる通りに二階へ上つて行つた。音をたてないやうにそつと爪先きだちで……

雪の爲めに雨戸をしめたのか、二階は人の顏がぼんやりするほど薄暗くなつてゐた。

と誰れかがあがつて來るけはひがした。彼女は又身體全體がふるへるのを感じた。すると彼女の身體は無言のままに、暗い部屋の中で、息がつまるほど抱きしめられた。つづいていきなり自分のからだの上に何かかぶさつて來る激しい重力に壓倒された。

五

彼女が青年に逢ふのは、いつも夜にきまつてゐた。月があつたり、星がなかつたりしたが、彼女にとつて、その夜がどんなに樂しかつたらう。

青年は優しい口調で云つた。

「お孃さん、私は貴方を、何時もあの明るい觀覧席で見つめます。けど、私はこの暗い部屋で貴方に逢ふのがどんなにうれしいでせう」

そして彼は、自分の近くへ來てゐる彼女の手をとつて自分の胸へ持つて行つた。

「うれしい」

彼女は夢でもみてゐるやうな氣持で云つた。

「暗いところでお逢ひする方がずつとうれしいわ」

彼女は、何かそんな習慣といふやうなものが、男女の間にあるものと考へてゐた。といふよりは、寧ろ暗いところに、二人の人間を一つにする赤いものが、隱れてゐるやうに思はれてならなかつた。すると男の呼吸があたたかく彼女の頰に感じられた。

「今度は、何處かのホテルでお逢ひしたいと思ひますが」

男の聲が、何か甘いものを含んだやうに耳の中に這入つて來た。

然し、彼女が一度、書間舞臺裏を尋ねた時、青年は彼女に非常に冷淡にしてゐる。それどころか、一語の挨拶をさへ苦い顏をしてろくろく返しもしなかつた。

摩耶子は青年が感情をかくしてゐる事を思ふと、少しなさけない氣がして、ツンとして睨みかへした。とその青年とすつかり同じやうに、これもまた素敵な壯年者が――青年の父親に違ひない。彼女の方へ近づいて來て云つた。

「お孃さんは、どちらからいらつしやいました」

「わたし、わたしはビオレ商店の雪本です」

「えツ、雪本さんですつて」

男は非常に驚いた顏をして、あとしざりした。彼女は男の動かない片腕に變な注意をかたむけた。

「雪本さんのお孃さんですか。それぢや、お宅のお母さんは私を知つてゐられる筈ですよ」

娘は意外な言葉に、どぎもを拔かれながら、呆然として尋ねた。

「どうしてなの」

「どうしてつて、お母さんにそつとお尋ねになつてみてごらんなさい」

男は笑ひながらさう云つた。

舞臺では盛んな拍手と歡聲とが、宛も彼女を嘲笑でもするやうにおこつてゐた。

それから間もなくのこと、彼女の母親――伯爵夫人のやうに飾つた亞紀子は、デパートメント・ストアから出やうとして、鋪道の上で昔の友達に出あつた。

「おや、文さんぢやないの」

「これはお見それしました。奥さん」

「どうしてまた、こんなところで」

「今どちらで」

「私は雪本つて……」

「それは知つてゐます。大變お盛んで」

そこで一寸言葉をきつてから

「それはさうと、いいお孃さんがあるぢやありませんか」

「どうして知つてゐるの。そんな事まで」

「實は先日、舞臺裏へ見えられたもんで。わたしは今ここで打つてゐる曲藝團の仲間つてところなんですよ」

彼女は文吉を連れて、ファウンテンのテラスへひき返した。

「お前さん、大變な景氣ぢやないの。わたしはそんな事とは知らずに、行つてみたけれど、大變なものね」
「そりや、どうもありがたうございます」
「それにあんたの一座は、とてもいい男ぞろひぢやないの」
「また、あれですか。昔に相かはらずで……」
「ほら、オートバイに飛び乘る男ね、いいぢやないの」
「ところが、あれなら私の娘なんですよ」
「娘さんだつて、娘さんがおありなの、あんたに。いや、でも私が今いつてゐるのは、あのオートバイに乘る方の男の事なのよ」
「いや、あれの事ですよ。あれがわつしの娘だつて云うんです」
「なんだつて玄さん。冗談もいい加減があつたもんよ」
「冗談なんか。はつはつはつ……」
「だつて」
「だつて奧さん。本當なんですから、男裝させてゐるんですから、娘に」
「まあ、何て念入りの冗談を云ふんでせう、お前さんは」
「けど、困りましたな。實際なんですから」
「あんたは、また嫉妬(やい)てるのかい。正直に言つたつていいぢやないの。あんたの嫉妬と來ちや、全く工場以來ね」
「いや奧さんにに澤山うらみがあるんです」
さう强く云つてから、玄吉は更に云つた。

「それは兎に角として、あれは實際わつしの娘なんです。わつしはもう女が嫌ひになつて、あれにや、子供の時から男の教育をして來たんです。けど、ほんとは、あれは女なんです。あいつはわつしの一人つ子なんですよ」

不思議な事のあればあるものと聞きながら、亞紀子は十幾年か前、自分の捨てたこの男が可愛さうになつて來た。

「ぢや本當なのね。あのオートバイに飛び乘る男よ」

「さうですとも。わつしの本當の娘なんですよ」

「なるほど、さう云へば、仕草に何となく女らしいところがあるのね。だけど……」

亞紀子は暫く默つてゐてから云つた。

「それはさうと、お前さん。その手はどうしたんだね、動かないの」

「こ、これですか。これは義手ですよ。あれから後、紡績へ出て、マングルに食はれてね」

彼はばつが惡さうに、義手を入れた腕を少しばかりあけて見せた。

「さう、そりや、でも大變だつたのね」

亞紀子は一寸心をかすめるものを感じた。

「わつしは未だに運動が止められんで、うだつがあがりませんよ」

「運動つて、社會主義かね」

女吉は大きくうなづいた。

「奥さん、けどこんな所で奥さんに逢はうとは思ひがけませんでしたよ」

「ぢや、そのうちに又逢はない。ゆつくり」

「ぢや、きつと」

「きつとね、ぢや、また」
亞紀子は昔の感情をとりもどしながら云つた。
「さようなら、奥さん」
男は片方の手をポケットの中へぶらさげたまゝ、肩を振りながら立ち去つた。
肩の長い、男らしい面影は今も昔も變りはないが、さう云へばお互ひに激しい變り方だと、亞紀子は思つた。若い自分の戀人であつた彼——然し自分に對して何となしに示すあの威だけだが氣に入らなかつた。
彼女は自動車に乘つてからも、ゆすぶられながら、其の事が長い間氣にかかつてならなかつた。若しかしたら階級的感情とでも云ふ奴かしら。それとも未だに昔の事を忘れかねて恨んでゐるのかしら……彼女は自分の昔をしみじみと思ひ返しながらゆられてゐた。

六

亞紀子は家に歸ると、手袋をぬぎながら、ストーブのある客間へ這入つて行つた。山梔で染めた赤いペルシャ絨氈が見事に廣がつてゐた。
「足のとどかぬ椅子は衛生に惡いんですつてね。お父さん」
「そりや、さうだらう。足が地につかんといふ奴だからな。はつはつはつ」
万太郎は娘と向きあつて氣樂さうに笑つてゐた。
「今日は珍らしい事を聞いて來ましたわ」
亞紀子が椅子にかけながら話し初めた。

「あの曲藝團の若い男ね。あれは女ですつて」

「なんだつて、女、あれが」

万太郎は久しぶりに生き生きした口調で妻に尋ねかへした。

「ええ、女ですつてよ。あの男が」

「さうぞ、あの青年が、でも……」

娘はおかしさうに否定の口調でさう云つた。

「女ださうですよ。人から聞いたんですが、子供の時から男裝させてゐたんださうですの。さう云へば何だか、腰なんか女のやうでもあるぢやありませんか」

「なるほど、こりや稀らしい話だ。久しぶりにいい話を聞き込んだ」

万太郎は眼鏡を一寸いぢつて、長い間の飽き飽きした戀愛のデザートの中に、まだ新らしい技巧の世界が、かすかに殘つてゐる事に氣付いた。

「けど、一寸不思議な話ね」

「いや、假裝といふ事は、戀愛には昔からつきものの大きい技巧の一つだよ。例へばプーシュキンの「田舍娘」やモウパッサンの「寢室の中」や、セクスピヤの……」

「もう結構、そんな事私にはどうでもいい事ですわ」

「いや、一寸思ひ出したから聞かせたまでだよ。あまり退屈だから」

「お父さま、私に聞かして頂戴よ」

それにしてもと、娘は夜の中に跳ね躍る男の姿を思ひ出して、肝がつぶれる位不思議でならなかつた。それでは闇の中

で、男がすり變つてゐたのであらうか。

「いや、それだけの事だがね」

と父親は輕く受流した。と亞紀子が話頭を轉じるやうに次の質問を試みた。

「あの騒動はどうなりまして、工場の」

「あいつらは、まるで鷄のやうに馬鹿だ。あんな淺はかな手段で俺達がひつくり返せるものか」

六尺に餘る主人は、肉體の過剩を、どうにもちてあましてゐるやうに云つた。

「お母さま、けど、今の藝人の話ね、本當でせうか」

突然娘が熱心に尋ね返した。

「本當だとも、お母さんは聞いたんですから、確かな人から」

「ぢや、あの曲藝團の人から」

母親は一寸當惑した風をして、靜かに首を振つた。

「町全體の噂だよ。それでなほ大變な人氣になつてゐるのよ」

「でも、御覧になつたわけぢやないんでせう、そんなところを」

「そりや、さうだけど」

「私、どうしてもそんなこと考へられませんわ。だつてあんなに頑丈で、あんなに元氣がよくつて、それにあんな荒つぽい事を平氣でしてゐるんですもの、毎日」

「けどお前だつて見たわけぢやあるまい」

さう云はれると、娘はグッと詰つたが、それでもハッキリと不安を拂ひのけて云つた。

「けど私、どうしたつて、女だとは思はれませんわ」

「いや、これはチヤンと見とどけるに限る。机上の空論では仕方がないよ」

万太郎は流石に權力のある實際家らしく、さう呟いて笑つた。

その日、娘はもう一度、曲藝團へ出かけて行つた。

「彼女はオートバイに乘らうとして砂の上に立つてゐる男を、充血するほど見つめてゐた。丸いといへば確かに彼の筋肉は、どうやら少し丸味をおんでゐる。そして腰が太い。それにしても自分の親しい忘れがたい人だと思ふと、今更らながら銀の刺繡を入れた彼の胸かざりのあるあたりが、なんとも美しく見えてならなかつた。

男はチラツと彼女の方へ向いて挨拶をするやうなふりをした。と小銃をうつ激しい音をたてて、オートバイが高い天井から渦を卷きながら下りだした。煙を吐き、もの凄い勢ひでつき進む、胸のふるへるやうな剛壯な演技である。一瞬間の後に、彼女の懐しい男は後の座席に飛び乘つた。

「恐ろしい！」

思はず彼女は、手で眼を掩ひながら叫んだ。彼に對する愛情の故に。

あんな曲藝が到底女に出來るものではない。あんな激しく敏捷な動作が。それにあの老婆だつて、うちの工場で働いてゐて、そんな不實な事を私にすすめられるものではない……

然し、彼女は混雜の中から外へ出ると、再びあの男の太い腰が氣になつた。そして何時か樂屋を訪ねた時、彼が自分に對して冷膽にしてゐた事などが不安に思ひ合せられた。

若しかしたら……

が職工長のうちへよると

「あれが男でなくてどうしませう。あんな立派な男つてありませんよ」
と老婆がしはがれた聲で說明した。
「けど、私、不思議な噂さを聞いたんだけど」
「それではお孃さんは、さうお思ひになるのでございますか」
「そんなわけでもないけれど」
「まあ、まあ、お孃さんのやうな、まだそんな事さへ知らないでいらつしやるのですか、あんなにたびたび逢つておいて」
老婆はへんな笑ひ聲をしながら、あきれたといふ顏をして答へた。
「私なんぞよりは、お孃さんの方がよく知つていらつしやる筈ぢやございませんか」
彼女はやつと安心すると、心の中で呟いた。
「さうだとも。あれが女である筈がない。自分は何て馬鹿な事を疑つてゐたものだらう。誰れが何と云つたつて、あの男については自分が一番よく知つてゐる筈だ。自分は彼の肉體のすみずみまで知つてゐるんだもの」
どこにどんなものがあつたかと、彼女は思ひ出してみて、思はず頰が熱くなつた。がそれだけに彼女は、彼こそ自分のものだと、心の中で強く彼を握りしめると、急に彼に逢つてみたい衝動に襲はれた。

七

人生には豪放な彼岸といふものがある。そこではどんな激しい惡德も、また美德に裏返つて現はれたりする。そして唯だ其處では強く生きる事のみが美しく思はれる。然し強さを知らぬ者は、そのつつましさの故に、遂ひに亡びるより仕方がない。

芳はこの家族の烈しい性格の中で、最も純粋に娘に愛情をかけてゐた。

彼は娘がおそくなると、何時も外へ出て、彼女の高い窓を見上げる。そして氣配のない暗い部屋に、襞の多い花模樣のカアテンが淋しくひかれてゐるのを眺める。

彼は其處に灯がともる事をどんなに望んでゐるだらう。灯がともつてゐさへすれば、彼女は少なくとも自分から遠くにゐるのではない。彼はさう思つて安心する。然し少しでも彼女が何處か遠くにゐるといふ事は、――彼には堪へきれない事であつた。

然も芳は、小さい小僧時代から番頭になつた今日まで、この家に於けるお孃さんとの間の長い親愛の情を思ふと、此頃になつて、にはかに冷膽にせられるのが、たまらなく淋しかつた。

その上、毎日のやうに曲藝團へ出かけてゆく彼女の後姿を見かけなければならないなんて。

彼は曲藝團の持つてゐるあらゆる缺點を心の中で數へる。そしてあんな浮薄なものに心を奪はれてゐるのは惡い事だ、と結論する。自分は親切な忠告者として默つてはゐられない。それにしても自分はどうしてあんな所へ初め彼女を連れて行つたらう。そして彼は自分がどんなに理想を心に描いて彼女を愛してゐるかを考へた。それを聞いたら彼女はきつと驚くに違ひない。

「さうだ。今日は是非云つてみやう。思つてゐる事をすつかり……何でもない事だ」

彼は長い間かかつて、何時もさう考へる。が娘の顏を見ると、十七歲の青年のやうに臆病になつてしまう。

「お孃さん、どうして、そんなに見向きもしないで行くんです。あんなに前には親切だつたのに」

「けど、親切といふものは、一人だけにしなければならないものかしら。それに私は、昔は何も知らない子供だつたんだもの」

彼はそんな風に自問自答してみる。そしてさういふ風に答へられる場合を考へると、恐ろしさに胸がふさがつた。

「いや、それだけではない。お前はあんまり脊が低くすぎる。私は本當は、お前を嫌ひになつたのよ」

彼は自分の脊の事を考へだすと、それが致命傷ででもあるやうに胸にこたへる。――さうだ。もつと別の事から彼女に話しかけなければならない。

「六圓七十錢」

一人の店員が來て、彼の方へ紙幣を突きだした。

「いくらだつて」

彼は無意識にレジスターをあけた。

「いくらだつて」

「六圓七十錢です」

彼は店員から紙幣を受取ると、釣錢を渡した。

――いや。そんな面倒な手數をしないで、俺はこの錢箱と一緒に、娘をかつさらつて出奔するわけにはゆかないだらうか……

彼は果物のやうに神聖な娘の身體を心に描いた。彼女の身體を思ふ存分に尊敬したい……

そして、時として狂暴な氣持に襲はれた。

然しこの空想は、彼の臆病な眞面目さによつて、すぐ萎れてしまつた。

彼は自分の眞面目さによつて、今日のあつた事を考へると、無暗みな眞似も出來ないと反省する。そして僅か一オンスの香水油を取る爲めに、五万個の薔薇の花と、幾千坪の土地を要するブルガリア・ローズの話を思ひ出した。

——さうだ。自分も心棒強く、この文化の無駄費ひとも思はれる、とてつもない贅澤品のやうに、少しづつ娘の愛情を摘みためなければならない……そしてケチな小說志望家のやうに娘のカスばかりに就いて考へだした。

「それにしても、俺はいつたいどうすればいいんだらう」

其の時、娘は自動車をとめて、快活さうに店の方から歸つて來た。

店先きには、女の客がゐて、スタンドの陰に鼻をつきだしながら、香水の瓶を嗅ぎ廻つてゐた。

「お孃樣、おかへりなさい」

彼女がレジスターの横を通つて、奥へ這入らうとした時、芳は腰をかけたまま、さう云つて挨拶した。

——よかつた——芳は心の中でしみじみさう思つた。

が、娘は返事もしないで、冷脆な身振りで奥へ這入つて行つてしまつた。絹の足がピンと張つて、彈力のある桃色の幻を殘した。

すると芳は、何時ものやうに少しばかりの喜びと失望とで、然し立ちあがると、彼女が閉め殘して行つた店と奥の間の戸を丁寧にしめてやつた。

何か匂ひのやうなものが殘つてゐるやうな氣がした。

「ロリガンの平瓶はない。あれの平つたい方がいいんだけど」

客が背後から店員に命じてゐた。

八

その夜ふけであつた。

娘が何かの用事で、物置きへ這入ると、天井から異樣なものが、彼女の髮の先きへぶらさがつて來た。白い足の裏が二つ、目の中にちらついた。

彼女はぞつとして、頭をのけぞると、烈しい恐怖心の爲めにころげるやうにして廊下へ逃げた。

「よ、よしだ。芳さんが物置きで首をつつてゐる」

「みんな行つて頂戴。よ、よしさんが首を吊つてゐる。物置きで」

店の者はみんなで狼狽て走りつけた。と番頭は綱にかかつたままブラブラしてゐた。店員達は恐ろしさうに、手もふれないで、聲ばかりをかけた。

「番頭さん、どうしたんです」

「何をしてゐるんです。一たい」

「何て馬鹿な眞似をするんです。番頭さん」

一人がやつと梁に梯子をかけてあがらうとすると、俄かに番頭が、頭の上から氣味の惡るい顏をしてゲラゲラと笑つた。

「おう、どうしたんだ」

その男はあはてて梯子からすべり落ちた。と同時に、皆が一度に逃げ出さうとした。すると今度は齒ぎれのいい聲で番頭が呼んだ。

「なんでもないんだよ、みんな。なんでもないんだよ」

そして芳は手につけてある紐をつたつて床の上へ飛び下りやうとした。

そこで皆は急に正氣にかへると、群り寄りながら番頭を落りだした。

「あんまりふざけちやいけませんぜ、番頭さん、こんなに寒いのに」

すると芳は涙ぐんで云つた。
「騒がせてすまなかつた。ぼ、ぼくは、死なうとしてゐたんぢやないんだよ」
「ぢや、どうしたんです、いつたい」
「主人に聞かれるとをかしいから、あつちへ行つてくれ、頼むから」
然し皆は動かうともしなかつた。そこで芳は生恥をかきながら、天井から金具の付いた綱を取りはづさうとした。
「なんです、そいつあ」
「いや何でもないんだ」
そして其れをふところの中へ捩ぢ込まうとした。
「そんなもの捨ててしまつたら、どうです。番頭さん」
芳は冷靜に皆から離れようとした。そしてもう一度皆に行つてくれと歎願した。
「何です、いつたい、それは」
「いいぢやないか、何んだつて」
芳は自分の事は自分に任しておいて貰ひたいと思つた。
「だけど、そんな事なすつちや」
そして立ち去るどころか、一人の男は芳の肩をつかまへた。
「いいんだよ。あつちへ行つてくれ。これはただの器械なんだよ。何んでもありやしないんだ」
芳はひた隠しに隠さうとした。すると一人の脊の低い男が叫んだ。
「わかつた。身長器だ。脊を高くする器械だ」

芳は恥づかしい思ひをして默つたまま皆を殘して立ち去つた。

皆の心には氣の毒なやうな、何か變な笑ひがこみあげて來てならなかつた。

「チエッ、身長器にさばつてるたのか、おどかしやがるな」

然し脊が高くなつて、あの冷臆になつたお孃さんの心をひきもどさうとする芳の切ない心情が、首つりにもまして、またなく哀切なものであつた事には、誰も氣付かなかつた。

「けどあんなに氣になるものかな、低いのが」

「何だ、馬鹿にしてるやがる」

「全くおどろかされちやつた　天井から笑はれた時にはヒヤとしたよ」

「脊ぐらゐ低かつたつて、いゝぢやないか、いけないのかな」

「いけない事があるんだらうよ」

「はつはつはつはつゝゝゝ」

「わつはつはつはゝゝゝゝゝ」

「でも首つりでなくつてよかつたよ」

「全くだ」

それから幾日かして、娘は例の老婆の二階で、石のやうに冷たい手——義手の男に自分の肉體が夜ごと荒々しく食ひ破られてるたのに氣付いた。

「おお、あの石のやうな手—

彼女は恐ろしさのあまり、頭が痺れるほどおびえながら、やつとの事で家へ歸つて來た。長い間用心深く隱されてゐた祕密を、突然示されたのに氣付いた。彼女は歩きながら幾度となく道の上で倒れやうとした。

——それにしても、あの不潔な勞働者の一家ほど恐ろしいものはない。總てはあの老婆の罠にかかつたのだ——

鋭い恐怖の爲めに、彼女の若い身體は、何時までも慄えるのが止まなかつた。そして赤いペランの手套を、ぬぐ氣力さへ無くなつてゐた。

九

義手の男が娘を翻弄してゐる時、父親の万太郎は男裝した曲藝師を、まんまと馬車の中に誘惑して得意さうに煙草を吹かしてゐた。

「ぢや、これだけ、これだけ君の爲めに積まう。僕は若い者のやうに、今更らしく廻りくどい戀愛の言葉は囁けない」

万太郎は更らに煙草に火を點じて、いらいらする衝動を隱しながら曲藝師の顏をみつめてゐた。

「なに、金ですつて、金でどうするといふんです。裸になつてみろつて、馬車の中で。裸になつてどうすると云ふんです。貴方のやうな人が、何時も私達を苦しめるんです。いや裸にもなりますが」

そして曲藝師は、万太郎の強い手の下から自分の女らしい手をぬきとると、マントをぬいだ。そして豐かな乳房が跳り出すかも知れぬ胸着のボタンを、一つづつ、ゆつくりとはづしだした。

馬車は窓をしめて、赤い天鵞絨のクッションをゆりながら、暗い海岸通りを走つてゐた。

今か今かと、やつきになつてゐる万太郎は、うちつける波浪の響きさへ耳にも這入らなかつた。

と、その時、曲藝師が腰のあたりをひねつて、ちらッと女を、かいま見せた刹那、この何處にも伏兵のゐよう筈のな

自分の馬車の中で、何處からか現はれた固い拳で万太郎は後頭部を強くつきあげられた。

「畜生奴、腹のあたりがちらつくだらう、いい女の、俺は貴樣達に復讐する爲めに、この町へやつて來たんだ」

そして一人の怪漢と一緒になると、曲藝師は毒毒しく叫んで姿を消してしまつた。

御者が寢ぼけた聲で尋ねた。

「旦那、どうしたんですか。誰れかころがり落ちましたかな」

「馬鹿、何を云つてゐるんだね。禮儀知らずめ、お客樣は遠ほに飛びおりて、お歸りになつたよ」

万太郎は頭をかかえたまま、やつとのことで起きあがりながら、唸るやうに云つた。

「さやうでございましたか。今夜は餘り御馳走になりましたので」

「馬鹿！」

「はい失禮いたしました」

港の中には赤い碇泊燈をともした汽船が幾艘となく浮んでゐた。

「もう歸るんだ。歸るんだ。うちへ。まつ直ぐに」

万太郎はプリプリしながら大きな聲で怒鳴つた。が、それでも頭の隅では、今見たばかしのものを忘れかねてゐた。矢張り女だつたな——万太郎はやるせない思ひを怒りの中に漂はしてゐた。

うちと云ふのは勿論、彼にとつては待合であつた。其處には彼が作つた深深とした大きい寢臺が待つてゐた。彼は亞紀子との間がお互ひに退屈しだして以來、自分のうちで夜を過す事は稀になつてゐた。

そのうちにピオレ商店の店員は、益々この一家の家風に染んでしまつた。店員といふ店員は、皆、露骨に女に對する慎みを破つてしまつた。そして肉體的な情痴の暴風に次第に卷き込まれた。

女中といふ女中は幾人おかれてもすぐ變つてゆく。變つてゆくうちに、彼女達は次第に彼等に都合よく淘汰せられてゆく。

彼等はよく同じ時間に忍び込んでは、まの悪い苦笑ひをしながら、つまらぬ雜談をしては歸つて來た。

「此頃、番頭は毎日藥を飲んでゐるね。土瓶で煎じて」

「いや、あれをあんまり匿すもんだから、こつそり見ると、全く驚いたよ。何が這入つてゐたと思ふ。君」

「黑燒か」

「そんなものならいいが一寸驚いたね」

「何だ」

「何んだつて骨が入つてゐるぢやないか。人間の骨が」

「まさか。けど人間のぢやあるまいよ」

「なに本當だよ。今度見てみろよ。ちやんと人間の骨が這入つてゐるからさ」

「番頭さんは、ほんとにお孃さんにほれてゐるんだね、可哀相に」

「一人思ひつて奴だね」

「さうだ」

「けど、あんな眞劍なのは見た事がない」

「それにしても骨の煎じ藥は何のまじなひになるのかい」

「お前のやうな奴は、そんな事、知らなくつたつていいよ」

彼等はこの一家の爛熟した頽廢の不思議な生活氣分の中で、勝手な空想を投げあつてゐた。

「けど、今日のお客、すばらしい買物をして行つたね、化粧品を百八十圓、あの古ぼけた焚香水の缶を三百圓、オモチヤを買ふやうにして買つて行つたよ」
「十年前からあつたと云ふ奴だらう」
然し、妻の亞紀子だけは、曲藝團が立ち去ると同時に、何か彼等との間に約束でもしたかのやうに、次第にその性格に嚴格なきびしさを示しだした。
そして何かしら、自分の今までの美貌を中心とした淫蕩な生活に對する反省のやうな氣持で、金錢に對する激しい執着を示しだした。
それでもあの女さんや、多くの男工達と交つてゐた少女時代の、みじめな、然し向ふみずの元氣のよかつた生活や、結婚當時、万太郎から受けた、むせぶやうな熱烈な愛情は時々思ひ出した。
「けど、私は生れかはつた。今までの夢のやうな生活は、ありや生活ではなかつた。もつと實際的にならなくちや」
そして主人万太郎の放蕩には一顧も與へないで、彼女はそんな事を呟いては、紙幣を熱心に數へだした。

十

工場の卓上電話が異樣なけたたましさで鳴つた。
「店の方が火事です。火の源因はわかりません。もう全體にひろがらうとしてゐます」
万太郎は受話器を投げだすと、殘業の職工達に命じた。
「おい、店の方の火事だ。仕事を中止して皆かけつけてくれ」
工場の中は激しい混亂に陷入つた。ベルトがはづされた。運轉してゐたエッチランナーがクリームの中で止つた。赤い

シフターが煙を吐くのをやめた。クリッピングが、チューブを喰へたままで止つた。職工達は出口に向つて一勢に殺到した。

万太郎は工場の監視を善良な數人に命ずると、自分は自動車に飛び乘つた。

街を折れると、遙かに火焰が晝のやうに高くのぼつてゐた。彼は首をだして、始終、焰の方へ眼をやつてゐた。

「おッ、危い！」

彼は一臺の自動車とすれ違ふ時に、急激な空氣の流れを感じて首をひつ込めた。

「早くやつてくれ、早く。規定なんて、かまはないから」

ものの燒ける、むせるやうな煙がきつく彼の鼻を襲つて來た。彼は自動車を飛びおりると、人波を押しわけ、興奮した消防自動車の間をくぐつて、海のやうにぬれた道を、家の方へ近づかうとした。

顏に熱い火が吹きつけられた。家は盛んな火焰の中で、幾度となく大きい音をたててはくづれ落ちてゐる。そしてくづれ落ちる度びに猛火の舌が、烈風にあふられて恐ろしい響を立ててゐる。

「旦那、旦那、お孃さんが見えないんです。お孃さんが」

顏をまつ黑にした消防夫が、一人の店員と連れだつて來て、彼に告げた。

「なに、娘がゐない、何處か外出してゐたんぢやないのかい」

「いや、今晩は早くから御部屋でやすんでゐられたといふんです」

「どうしたといふ事だ。それで寢室へ誰が這入つていつて探したのかい」

「もう這入れるどころぢやありません」

そのうちに、しどけないなりをした亞紀子や女中達が走つてくるのに逢つた。

「貴方、どうしたらいいんでせう。貴方、なんてひどい事になつたんでせう」

「火の原因は何だ」

女中達は身體をふるはせながら、うろうろしてゐた。

「いや、娘はきつと何處かにゐるよ、お前達が出られたのに、あれだけが出られない筈がないぢやないか」

職工達が三々五々、息を切つて到着した。ものの燃けてはじける音が、ホースから迸る水の音と一緒になつて響いた。

「店の者は皆何してゐる」

「消防の手傳ひをしてゐます」

ポンプの水が交錯する噴水のやうに赤い夜空を切つて白くあがつてゐた。火勢は水の爲めに消え衰へやうとしては、反つて風にあふられてまた燃えだした。

が火焰は次第に靜かになつてゆくらしく、火の柱が少しづつ低くなつた。そして白い煙がその邊をこめだした。

あたりが徐々に暗くなつてくると、消防夫の持つ提灯と懷中電燈の光が白く煙を照しだした。

それでも消防夫は、なほもホースをもつて、燒け落ちてしまつた家の中へ、隈なく水を注ぎ込んでゐた。

見物の人だかりが段段少なくなつていつた。もう明け方が近かつた。

「旦那、來て下さい。誰れかゐます。誰れか」

万太郞は昂奮してそつちへ走つて行つた。と後から皆がついて走つて來た。

ずぶ濡れになつた灰はまだ火のやうに熱かつた。と彼が向けた懷中電燈の光の中に、芳に抱きつかれた娘が、黑くなつたまま、燒けた蠶棚の網の上にゐた。摩耶子を抱いてゐる芳の腕には必死の愛情が流れてゐた。

亞紀子は急に聲をあげて泣きだした。

「今の今まで何處かにゐてくれるかと賴みにしてゐたのに」

「わかつた。さあ、あつちへ行つてくれ。みんな」

万太郎は不氣嫌な聲でさう叫んだ。

「なんて事だ、芳の奴。何て馬鹿だ」

消防夫は熱心に煙の中へ水を注いで廻つてゐた。

「這入らうとしたんですけれど、火の廻りが早くつて、とても」

一人の女中が泣きながら呟いてゐた。

「亜紀子、お前は金の事ばかりに氣をとられて、あれの事を忘れてゐたんだらう。お前はあれの敵だつたのだ」

亜紀子は返事をしないで、唯だ泣きつづけてばかりゐた。

「馬鹿、なんて馬鹿だ、馬鹿野郎奴が」

万太郎は誰れに云ふとなく、怒りつづけてゐたが、朝が明けて、火焔が全く收まつてしまうと、激怒の中に、急に一種の淋しさがこみあげて來るのを感じた。彼は事業家として一つの大きい痛手に就いて熱心に考へ初めてゐた。

然し、彼はやがて平生の感情を取りもどすと云つた。

「けど、燃えてゐる時には、案外元氣なもんだね、人間は、自分の家でも」

彼はそんな冗談を呟いてから、熱くなつてゐる金庫を外から叩いてみた。

十一

火事の原因に就いて、あらゆる探索が行はれた。

劣だらうといふ推定が行はれた。仇みを抱いてゐる職工の復讐だらうといふ臆測が行はれた。亞紀子の態度が疑はれた。そして最も辛辣な空想として万太郎の頭に祕かに浮んだものは――馬車の中で自分を打つた男かも知れないと云ふ事であつた。

然し其等の嫌疑は悉く水泡に歸してしまつた。そして彼の眼の中には、死んだ娘の亡靈が、何時までも悲しい思ひ出となつてちらついた。

が剛放な万太郎は、悲劇に面すれば面するほど、彼の事業熱を湧きあがらせる遊蕩の方法に就いて考へだしてゐた。――指が二十本あつても足りない花指輪の購入、スペインから取りよせたい綠色リボンを付けた世界的名犬。モンテカルロのゴルフ。倶樂部から招待したい外國の選手・・・

夏、あらゆる空想を逞ましく湧きあがらせる夏が漸く近づかうとしてゐた。

城のやうな外國船が、白い石鹼水の泡をたてながら靜かに入港しやうとしてゐる。

遠くの空には大きい雲の峯が、眩しく輝きだし、活潑な氣象旗が「西南の快晴」をヒラヒラと豫告してゐた。

万太郎は一過した情痴の暴風を思ひ返しながら、更らに新らしい事業と享樂とを、悲しみの涙で粘り合せながら――ギラギラする耆近い海を茫然と眺めてゐた。

（筆者記、これは長篇の一節として書かれました。然しこれ自身としてひと先づ完結します）

山高帽子

内田百間

私は厠から出て來て、書齋の机の前に坐つた。何も變つた事はないのに、何だか落ちつかなかつた。開け放つた窓の外に、夕方の近い曇つた空がかぶさつてゐた。大きな棗の枝に薄赤い實がなつてゐる。私はその實の數を數へながら、何となく頻りにそはそはした。今出て來た厠の中に、何人かがゐる樣な氣がした。何人かが私を待つてゐるらしくも思はれた。

家の中には私の外、誰もゐなかつた。みんな買物や使ひに出たきり、まだ歸つて來なかつた。近所の家から、何の物音も聞こえなかつた。日暮れが近いのに邊りは靜まり返つてゐて、ただ遠くの方で不揃ひに敲く法華の太鼓の音が聞こえる許りであつた。私は淋しい樣な、どこかが食ひ違つた樣な氣持で、頻りに厠の中を氣にした。

その時、窓の外の、庇を支へた柱を、家の猫が逆に爪を入れながら、がりがりと音をたてて下りて來た。さうして私の向つてゐる窓の敷居に飛び下りて、こちらを見た。私がぢつとその顔を見てゐると、猫は暫くそこに起つたまま、私を見返して、それから、何か解らないけれども、意味のあるらしい表情をして、さうしてふと目を外らすと、そのまま開け放してある入口の方に行つた。私はその後姿を見て、いやな氣持になつた。猫は短い尻尾を上げたり下ろしたりしながら、廊下を向うの方へ、のそのそと歩いて行つた。私は段段不安になつて、早くどうかしなければいけない樣な氣がし出した。猫はその廊下を突き當つて、左に曲がるらしい。曲がつた所に厠がある。

「一寸待て」と云ふ聲が、私の咽喉から出さうになつて、私は吃驚した。さうして、水を浴びた樣な氣がした。

すると、猫が起ち止まつて、後を向いた。私の方を見ながら、二三歩返つて來た。

「何だ」と云つた樣に思はれた。

「この野郎」と思ふと同時に　私は夢中で机の上の文鎭を取り上げた。すると猫はその途端に廊下の向うで一尺許り飛び上つた。

さうして、その儘一方の庭に下りて、何處かへ行つてしまつた。

私は文鎭を握つたまま起ち上がつた。猫の歩いた廊下を歩くのがいやだつた。

廊下の突當りまで行つて見ると、さつき出る時、閉めておいた筈の厠の外の戸が少し開いてゐる。

「おや」と思つた拍子に、ふと後を振り返つたら、塀を隔てた隣りの庇の上に猫がゐて、此方を見てゐた。私は急いで厠の中に這入つて見た。内側の戸はちやんと閉まつてゐた。さうしてその中の、閉め切つた窓の磨硝子の面に、恐ろしく脚の長い蚊蜻蛉が一匹、脚を曲げたり、羽根をぶつつけたりしながら、頻りに外に出たがつてゐた。私が片手で窓の硝子を開けると、蚊蜻蛉は、あわてた樣にその格子の間から飛んで行つた。

私は厠を出て、自分の部屋に歸つて來た。もう隣の庇に猫はゐなかつた。間もなく家の者が前後して歸つて來た。さうして、氣がついて見ると、近所の家からも色色の物音や人聲が聞こえてゐた。

夕食の膳についた時、猫はどこからか歸つて來て、穩やかな顔をして片隅に坐つてゐた。外には雨がざあざあと降つてゐた。

×

私は每朝學校に出かけて行くのが、段段億劫になつた。教授室に集まつて來る同僚の顔を見るのも面倒臭く、教室で見る學生の顔は一層うるさかつた。なるべく教室に出る時刻を遲らし、さうして時限の前にどんどん歸つてしまふ樣になつた。

道で擦れ違ふ人の顔も、電車の中で向う側の腰掛に竝んだ人の顔も、どれを見てもみんな醜くて、薄つぺらだつた。人ごみを逆に通り拔けると腹が立つた。だから道を通る時は、なるべく左側を守つて、人の後姿ばかり見て歩くやうにした。その癖さうして行くうちに、どうかしてその人を追ひ越す時は、きつと後を振り返つて、その顔を見なければ氣がすまなかつた。すると何人でも申し合はせたやうに、急に鋭い目を輝かして、私を見返した。

さうして家に歸ると、ぢつと自分の机の前に坐りつくして、夜になるとぢき寢てしまふ。大儀になれば、晝のうちからでも寢込んでしまふ。

もと支那人の合宿所だつたとか云ふ借家なので、間取りの工合が變だつた。二階は一間でそれが十二疊半だつた。緣側の敷居の眞中にある柱は板の覆ひで包んであり、疊は高低がそろはなくて波が打つてゐた。その座敷の北窓に近く寢床を敷いて、私は晝でも夜でも、暇さへあれば、ぐうぐう寢てゐた。さうして又寢床に這入りさへすれば、いくらでも寢られ

た。家の者から、この頃は恐ろしく大きな鼾をかくと云はれて、それを聞くたびにいやな氣持がするのだけれど、しかしその聲はいつ迄たつても、私の耳に聞こえるわけはなかつた。

どんなに早く寢ても、朝は起こされなければ目が覺めなかつた。さうして、いつも寢不足の氣持で學校に出かけた。

同僚の顏が段段きたなくなる樣に思はれた。偶然向かひ合せに坐つてゐる相手の顏をつくづく見てゐると、どう云ふわけでこんな顏なのだらうと思ひ、急に吹き出したくなる事が屢あつた。

「何です」と、或時相手の男がいやな顏をして云つた。

「さう聞かれると困るんだけれど」

私はそれだけ云つて、こみ上げて來る笑ひを制する事が出來なかつた。「君が小汚い顏をしてこつちを向いてゐるもんだから」

その年の若い教師は、少し顏を赤くして云つた。

「青地さんはこの頃少しどうかしてゐるんですよ。大丈夫ですか」

そこへ別の同僚が仲間入りをした。

「面白さうですね、何です」

「青地さんが僕の顏を見て、いきなり笑ひ出しちやつたんです」

「成程ねえ、可笑しな顏だ」

「どこが可笑しいんです」

「何處つて云ふ事もないが」私が說明した。「目でも鼻でもちやんと當り前の方に向いて納まつてゐるからさ」

若い教師は頭を抱へて外の席に逃げてしまつた。その後へ今のも一人の同僚が坐つて、私と向き合つた。

「貴方の顏は長い」と私が云つた。

「貴方の顏は廣い」相手は負けてゐなかつた。

「一月ぐらゐ前から見ると、倍ですよ」

私は自分の事を云はれたので、漸く笑ひが止まつた。同時にあぶくが潰れて苦い汁が出た樣な氣がした。

「寢てばかりゐるから太るんですよ」と眞面目になつて說明した。

「いやいや、それは太つたと云ふ顏ではありません。ふくれ上がつてゐるのです。はれてるんです。むくんでるんです」

私は思はず自分の顏を撫でた。

「さう、もう一息で、のつぺらぽうになる顏です」

相手はさう云つて、椅子の背に反り返つた。

その晚、私は顏の長い同僚に宛てて手紙を書いた。その文案を練る爲に、學校から歸つて丸半日を潰したのだつた。

「長長御無沙汰致しましたと申し度いところ長ら、今日ひるお目にかかつた計りでは、いくら光陰が矢の如く長れてもへんですね。長長しい前置きは止めて、用件に移りたいのですけれど、生憎なんにも用事が無いのです。止むなく窓の外を長めてゐると、まつくら長ラス戸の外に、へん長らの著物を著た若いをん長たつてゐるらしいのです。びつくりして起ち上がらうとすると、女は私の方に長し目をして、それきり消えました。私はふしぎ長つかりした氣持がしました。同時に二階の庇でいや長りがりと云ふ音が聞こえました。をん長のぞいたのは、家の猫のいたづらだつたのでせう。秋の夜長のつれづれに、何のつ長りもない事を申し上げました。末筆長ら奧樣によろしく」

私はこの手紙を書き終ると、自分で近所のポストまで出しに行つた。さうして、そこいらをぶらぶら歩き廻つて來た。出してしまつた後までも、その文章は繰り返し繰り返し頭の中に甦つて來て、歩きながらその妙味を味はふのが愉快だつ

た。

翌くる日は私の學校に出ない日だつた。その次の日に、教授室で手紙をやつた同僚にあつたら、

「あのお手紙には一本まゐりましたね。しかしそんなに長いですかねえ。自分では立派に均整が取れてるつもりなんだけれど」

「立派な藝術ですよ。だから……」

「解りました、解りました。だから ars longa だと云ふのでせう」

そんな事を云つて、面白さうに笑つた。

後になつて聞いたら、その同僚は、私の懇意なある先輩に向かつて、「青地さんは用心しないといけませんよ。どうもあの偏執するところが當り前ぢやありませんね」と云つたさうだ。

私は、さう云ふ事に素人の知つたかぶりを振り廻されるのは隨分迷惑だつた。さうして、何とも云はれない、いやな氣持がした。

×

十二月の初に細君の妹が死にかけた時、その病院の前の蕎麥屋の二階で、私と細君とが話しをした。ひとりでに聲が小さくなつて、ひそひそ話になつた。

「どうして、昨夜はあんな事を云つたのでせう」

「どんな事を云つた」

「聞いてゐらしたのではないんですか。お臺所の戸棚に餅の子があるから兄さんに上げて下さいつて」

「兄さんて己の事かい」
「さうらしいんですの、さう云つたきり又寢てしまつたから、よく解らないんですけれど、中野の兄の事ではないと思ひますわ。だけどうちに婿の子なんかあつたか知ら」
「有るぢやないか」
私がさう云つたら、細君が私の顏を見た。それよりも、私自身が云つた後で吃驚した。婿の子があるかないか知りもしないで、うつかりそんな事を云つてしまつた。
「どうしたんだらう」と云つて、私は苦笑ひをした。
「この二三日ろくろくお休みにならないから、きつと神經衰弱ですわ」
「ぼんやりしてるんだね。しかし本當にもういけないのだらうか」
「今日はお午過ぎから目に光澤がなくなつてゐます」
「見える事は見えるんだらうね」
「どうですか。私達を見てゐるやうにも思ふんですけれど、何だかよくわかりませんのね」
その時、急にチャブ臺の上の電氣がついた。しかし外にはまだ夕方の變に明かるい光が殘つて、屋根瓦の重ね目の陰を、一つ一つ墨で描いた樣に濃くしてゐた。
「それに、小鼻の形が變つて來たやうに思ふんですけれど」
細君は、片手でそろそろ丼を重ねてゐた。
「十九で死んでは可哀想だな」
「でも事によると、もう一度は持ち直すか知れないと云ふ氣もしますわ」

「何故」

「何故つて」

「駄目だよ」

私は眞蒼になつて細君の顔を見た。それと同時に、細君の「おれ」と云ふ聲が引く息で聞こえた。さうして丼が二つに破れてゐた。

「駄目だよ」と云つたのは、私ではなかつたのだ。

×

「それは君が云つたのさ。しかしそれにしても危いね。自分の考へてゐない事をいきなり云つたり、自分の云つた事が他人の聲に聞こえたりするのは。もうそろそろ本物だよ、君」

野口はさう云つて、恐ろしく指の長い兩手を、くねくねと變なふうに揉んだ。彼のまはりには、帶封をしたままの雜誌や、綴ぢ目の切れた畫帖などが亂雜に積まれて、その間にゴールデン・バットの函が五つも六つも散らかつてゐる。野口はその函から、手當り次第に卷莨を拔き出しては、又もとと違つたところへ投げ出して置くらしい。

「怖いねえ、用心したまへよ」

と野口が又云つた。本當に怖さうな顔をしてゐる。

「大丈夫だよ。どうも君にはこんな話は出來ない」

「だつて君、今の話なんぞは、既に怪異や神祕の領域を超えてゐるからね。君の奥さんだつてびつくりするだらうよ。その時の君の顔を想像した丈でも僕はいやだね

「しかしフラウもその聲を聞いたと云ふんだぜ」
「その聲と云ふのは君の聲なんだ」
「さうぢやないよ。第一僕の聲を聞いて吃驚する筈がない」
「奥さんが驚いたのは君の顔附きさ。しかしだね、萬一本當に君が云つたのでなかつたとしたら、一層怖くなるよ」
「だから恐れてゐるのさ」
「いやいや君の云ふ意味とは違ふのだ。もし本當に君の聲でなかつたとすれば、君には既に幻聽が現はれてゐるんだ。いよいよ本物だね、おどかしちやいけないよ」
野口はさう云ふと急に寒さうな顔をして、どう云ふ了見だか、机の向うにころがつてゐた麻姑の手を、一生懸命に手を伸ばして取り上げた。さうして無暗に振り廻はしてゐる。

×

五六年前に死んだ祖母が、夜明けに餅を燒いてくれる夢を見たら、朝起きてから胃が痛かつた。
それはつまり、寢てゐるうちに胃が痛んだので、そんな夢を見たのだらうと考へて見たけれど、さうでもないらしい。現にその前晩寢るまでは何事もなく、又後で胃の痛み出すやうな原因を思ひ出す事も出來なかつた。だから目がさめた後私はいつ迄もその夢にこだはり、なつかしい祖母がついそこに、襖の向うにでもゐるやうな氣がした。祖母はしきりに餅を裏返しながら、もつとお食べ、もつとお食べと云つて燒いてくれた。餅の焦ける香ばしい匂ひが、まだ鼻の奥に殘つてゐる様に思はれた。丁度年末の休み中だつたので、私は午過ぎまで愚圖愚圖した揚句、久し振りに祖母のお墓に行つて見ようと思ひ出した。寒いので洋服を著て、洋服には必ず山高帽子をかぶる事にしてゐたから、山高帽子を被り、洋杖をつい

て町外れの墓地へ行くうちに、今まで薄日の射してゐた空にすつかり重たさうな雲が覆ひかぶさつて、その雲の層の厚みが不揃なため、ところどころ赤味を帶びた陰が出來た。それが邊りの暗い雲に映えて、云ひやうもなく無氣味だつた。しかし、暫らく歩いてゐる内に、その赤雲も忽ち消えて、場末の往來は急に暗くなつて來た。さうして思ひ出した樣に吹く風に散らされたまばらな雨が、ぱらぱらと降り出した。私は墓地の入口まで行かないうちに、今日のお墓詣りは止めたくなつた。それは雨の爲ではなかつた。しかし、鬱陶しい天氣に致された所爲か、段段に祖母の思ひ出が新らしくなつて、いつの間にか瞼の裏に涙がたまつてゐた。私は急に氣をかへて、墓地の外廓を斜にそれる道をどんどん降りて行つた。さうしてその丘を背に負つた銀杏の森の中にある大きな料理屋の前に出てしまつた。

私は何の躊躇もなく、その中へ這入つて行つた。

前に友人と何度か來た時の顏なじみの女中が座敷に案内した。家の中には、もう燈が點いてゐた。

「入らつしやいまし、今日はお一人ですか」

私はその座敷に通ると、急に變な、はしやいだ氣持になつた。墓參を止めて、かう云ふ所に來た事が、その氣持をおほるらしい。

「いや、二人だ」

「お後から入らつしやるのですか」

「そこにゐるぢやないか」

「まあ氣味のわるい。いけませんよ、そんな御冗談仰しやつては」

私は口から出まかせの出鱈目が止められなかつた。

「ええと僕はこちらへ坐らう。その手套のやうなものを取りたまへ」

「まあいやだ、こちらは。どうかして入らつしやるんですか」
私は急に女中の方に顏を向けて云つた。
「心配するな、今日は少し鬱してゐるんだから、御馳走してくれたまへ」
女中は無氣味な顏をして、下りて行つた。
間もなく、今度はお神が火鉢とお茶を持つて來た。女中が何か云つたらしい。
「入らつしやいまし」
「今日は」
「何だか降り出しましたやうですのね」
「さうらしいですね」
「お濡れになりませんでしたの」
「いや僕の方には風が吹かなかつたから」
お神が「はてな」と云ふ顏をした。私にはさう思はれて、益面白さうだつた。
「お竹さんが氣味わるがつてるのですよ。何かおからかひになつたのでせう」
「ううん、冗談云つたのですよ。あの人は馬鹿だな、いい年をして。それでお神さんがいらしたのですか」
「いいえそんな馬鹿な、いつも入らして頂いてるのに、ぢやいつもの人達をお呼び致しませうね、どうぞ御ゆつくり」
さう云つて、お神は何でもない顏をして降りて行つた。
いつもの人達は、今まで私達の席に二三度侍つた藝妓二人と半玉一人だつた。
それから、女中がわざとにこにこした樣な顏で、お酒を持つて來た。

「小ゆかさんも小ゑんちやんもゐないのですよ。〆靜さんは今ぢき明きますから、間もなく伺ひますつて。こちらはそれでよろしいのでせう」
「こちらはそれでよろしいけれど」
「お連れの方の思惑ですか」
「默つてろよ、今折角」
「何ですの」
「又出て來たら、うるさくつて仕様がないぢやないか。いやだなあ。いいよ。よせよ」
「まあ氣味のわるい。本當に今日はどうかしてゐらつしやるのね」
それから一時間許りも酒を飲んで、いろんな物を食ひ散らした頃、漸く藝妓が來た。出てゐると云つた年下の方も一緒で、矢つ張りいつもの二人だつた。
「さて」と私が云つた。もう大分醉つてゐた。
「なに」と二人がきいた。
暫らくして、「變なのね、後を何も仰しやらないの」と年上の方の〆靜が云つた。
「いや今、あんまり靜かだから」
「それはこちらが何も仰しやらないからよ」
「さうぢやない、この家の外が靜かなのさ」
「本當ね、しんとしてゐるわね」
「しんと云ふ音が聞えるだらう」

「あら、そんな音は聞こえやしないわ。何も聞こえないから、しんとしてるのぢやないの」
「僕には聞こえるんだがなあ」
私はたて續けに二三杯酒を飲んだ。小ゆかと云ふ年下の方のが酌をしながら、私の顔をぢろぢろ見てゐる。
「何だかこちらは少しはお肥りになつた樣ね」
「ううんさうぢやない。顔が大きくなるのだ」
「どうしてですの」
「どうしてだか知らない」
「何だか今日は少し變なのね」と年上が口を出した。「下でお竹さんがさう云つてたわ」
「氣違ひなのか知ら」と小ゆかが面白さうに云つた。
「氣違ひと云へば、あたし氣違ひさんに呼ばれた事があるわ。お二人連でいらしたのよ。一人の方がさうらしいの、あたし知らないもんだから、その方の方へ御挨拶したのよ。そつぽ向いて、知らん顔してるぢやないの。それからいかがですつてお酌しようとしたら、ひよいと頸を縮めて、左手でチャブ臺の上に何だか英語の樣な字を書き出したの、それが高高指ぢやないの。その格好つてないのよ。あたし始めて、はてなと思つたわ」
「それからどうして」と小ゆかが乘り出した。
「お連れの方はただにやにやしてゐらつしやるのよ。後でその方がお下にいらした時、あの男は少し頭が勞れてるんだから、へんな事を云つても氣にしないでくれつて云ふんでせう。でも氣にするわねえ。一緒に端唄なんか歌つてくれつて、氣違ひさん中中うまいのよ、一生懸命歌つてるかと思ふと、不意に止めて、鴉がゐますねつて話しかけるんですもの」
「鴉がどうかしたの」

「ええほんとに鴉が飛んだの、お葺のお座敷なのよ、だからお庭にでもゐたらしいのね。その影がさしたら、もうそれで歌はお止めなの。あたし何だか氣をつかつて、つくづく勞れてしまつたわ」

「愉快だなあ」

私は小ゆかのお酌を受けながら、面白くなつて來たので、大きな聲を出した。

「あら又こちらは變によろこんぢやつたのね」と小ゆかが云つた。「おつむりが少し勞れていらつしやるらしいわ」

「おつむりは今朝から順序よく痛んでる」

「順序よくつて」

「順序よくぢやあない、じんじく痛いのさ。だから少しお酒でも飲んで見ようと思つて來たら、早速氣違ひの話だらう。しかし氣違ひさんのおなじみは乙だ。面白いね」

「ええ全くよ」〆壽は、私のやつた盃を受けながら、云つた。「それから後、まだ二三度も呼ばれましたわ、いつでもお二人なの、あぶないからでせうね。そのうちに段段馴れて來て、いろんな事を云ふんですの」

「どんな事を云ふのだい」

「どんな事つて、いろんな事を云ふんですけれど、そんな時はちつとも變つたところなんかありませんわ。あなたのおうちは、どちらの方角だなんて聞きますの。それから、どこかの大學の先生だつたらしいんですけれど、語學の先生で何を教へるんでせう」

「語學つて外國の言葉を教へるのさ」

「おおさうさう、そんな事云つてゐましたつけ、言葉は便利なもので、今私がお茶つて云つたら、あなたはそこで先づ右手を動かして、急須の蓋を取り、左手でどうとかして、又右手でお茶碗を取つて、それにお茶をついで、さうしてその右

手で以てそのお茶椀を私の前に出した。お茶つと云つた丈で、これだけの事が出來るとか何とか、そんな事を六づかしい言葉で云ふのでせう。そんな事云はれると、あたし一寸手を動かすのも氣ぶつせいで困つちまふわ」

「面白いねえ」

「それはいいんですけれどね、困つた事には何かと云ふと人をつねるのよ。今の歌は氣に入つたとか、あなたの樣な人を妻にしたいとか、そんな事を云ひますの。その度に、ぎゆつぎゆつと手でも膝でも、手あたり次第につねられるので、ひやひやしちやふわ。その方に限らず、氣違ひと云ふ程でなくつても、何となく變なお客樣つてちよいちよいあるものよ。そんな方はきつと人をつねりますのね」

「己も少少つねらうかな」

「全くよ、こちらも少しはつねりかねない方らしいわね。それからもう一つ、その方はいついらしても、山高シャッポなのよ。變なものねえ、お歸りの時の、その樣子つたら、矢つ張りどこか變な方は、あんなものを被りたがるらしいわね」

私は、急に顏がつめたくなるのを感じた。しかし、それは決して相手の云つた事を恐れたのではなかつた。ただ、私の根もない冗談の引込みがつかなくなつたに過ぎないのだ。私には、そんな事を氣にする理由は、勿論何もなかつた。

「己だつて山高帽子だぜ」

私は歸る時にわざわざ披露した。

「だつてこちらはお立派よ」と年下の方が取りなす樣に云つた。

×

私は昔から山高帽子が好きで、何處へ行くにも被り廻つた。

私の卒業後、最初に奉職した學校が陸軍の學校だつたので、服裝の點が特に八釜しく、その當時から山高帽子をかぶり始めたのだつた。

就任匆匆、主任が私に申し渡した。

「本校教官の制服はフロック・コートが原則でありますが、平常はモーニング・コート、或は地味な色であるならば背廣を著られても大目に見ます。しかし帽子、ネクタイ等萬事そのお心掛けを以て、不體裁にわたりませぬやう」

さうして、現に毎日フロック・コートを著て來る老教官が二三人はあつた。モーニング・コートの若い教官もゐた。窮屈な學校だなと思つたけれど、それから何年かゐるうちに、私にも漸くフロック・コートやモーニング・コートの味が解つて來た。背廣だとずぼんのお尻が拔けたら最後、それつきり著られなくなるけれど、フロック・コートやモーニング・コートなら、どんなに大きな穴があいてゐても、中からワイシャツの裾が食み出す程になつてゐても、その不體裁を曝す事なく、なほ嚴然たる威容を調へることが出來るのだつた。

同樣に、古くなつても平氣でかぶれるのは山高帽子であつた。それに、その學校では、講堂まで帽子をかぶつて行く規則なので、埃だらけの教壇の机の上に乘つけて惜し氣もなく、又そこに据ゑて眺めた形も、俗な中折型より山高帽子の方が、遙かに雅味があつた。

その當時から私は常に、背廣を著た時でも山高帽子をかぶるのが癖になつた。被り馴れて見ると、非常に氣持のいい帽子だつた。

それから又山高帽子なら山高帽子ときめて置かないと工合の惡い事もあつた。校門の出入に門衛の小使が一一起立して敬禮する。それに答へる時、幾日か山高帽子をかぶつた後、急に中折帽で行くと、うつかり鍔に手をかけて帽子を脫がうとする。手ごたへがなく、ぐにやぐにやとなるので、あわてて天邊の折り目を探さなければならない。さうかと思ふと、

又中折帽に馴れて、その折り目を摘むのが癖になると、今度は山高帽子をかぶつた時、丸い山に指が辷つて、うろたへてしまふ。

それで私は一切山高帽子にきめて、後には學校に限らず、どこに行くにも、凡そ洋服を著る限り、必ず山高帽子をかぶるやうになつた。

「それが抑も可笑しいのだよ」と野口が誰かに云つたと云ふ話を聞いた。「山高帽子と云ふ奴はあぶないよ。二重橋からどんどん這入つて行つて、お廻りさんの御厄介になる連中を見て見たまへ、みんなきまつて山高帽子を被つてるから」

その事を私に傳へた人が、笑ひながらこんな事を云つた。

「野口君は又無暗にそんな事を氣にする性質だからね、僕もまさかとは思つたけれど、しかし君にしても、さう云はれて見れば、あんまり安心の出來る人でもないんだから、實は少少心配してたのさ。まあそんな風でもなくて安心しましたよ」

「冗談ぢやない」と云つて、私は無理に笑つた。笑ふより外に、私は挨拶の仕方がなかつた。

×

その陸軍の學校に廣い中庭があつた。四邊を同じやうな二階建の兵舍と講堂とで取り卷かれた長方形の空地で、その狹い方の差し渡しでも、こちらの廊下から庭を隔てた向うの廊下を通る人の顔などはわからない位だつた。長い方の距離はその三倍くらゐもあつた。

數年前の一月のある朝、薄い雪が降り出して、人の踏まない道端や、風を受けた側の屋根だけが、見る見るうちに白くなつた。私は何かの都合で、その日は學校の裏門から這入つて行つた。裏門の方から私達の控室に行くには、その中庭を斜に渡るのが一番近道だつた。中庭には今降つたばかりの雪が美しく積もつて、まだ人の足跡もなかつた。ところどころ

に殘つてゐる枯草の株も隱れて見えなかつた。

私はその淺い雪をさくさくと踏んで、中庭を五六間も歩いたと思ふ時、不意に何とも知れない恐怖を感じて起ち止まつた。いきなり足がすくんで動けなくなつた。廣い海の眞中に一人浮かんだ樣な氣持だつた。顎に迫つて來る波が、目の高さにきらきらと光つてゐるやうに思はれた。

私は最早一歩も先に進む事が出來なかつた。進むどころではなく、ぢつとしてゐても倒れてしまひさうだつた。

私はあわてゝ後に引き返した。さうして、三角形の二邊にあたる廊下を廻り道して、自分の控室まで來た。胸の動悸はいつ迄も靜まらなかつた。

煖爐の傍で、その話をしてゐたら、佛蘭西語の教官の小林が云つた。

「私なんぞはいつだつてさうですよ。一人であの中庭を歩いた事はありませんね。それに今日は又特別ですよ。雪が積もつて目印がなくなつてゐるから、平生の廣さの何倍にも感じるのですよ。しかし、それにしても、今のお話では、君にも矢つ張り廣い所を恐れる傾向はあるらしいですね」

「僕はしかし今日のやうな氣持は始めてですよ」

「尤もそれも程度問題で、誰だつて廣い所は怖いに違ひないけれど」

「そんな馬鹿な」と傍の同僚が口を出した。「僕なんざどんな廣い所を歩いたつて平氣だ。廣いところが怖いなんて、聞いた事がない」

「それはまだ君がその經驗をしないからだ」と小林が云つた。「私なんざ練兵場を入口から見ただけでも、いやな氣持がする」

「どうも可笑しいな、廣い所なら誰だつて怖いけれどね」

「何それだつて、人によつて違ふだらう。要するに程度問題だよ」

春になつてから、その仲間の懇親會のあつた時、小林はべろべろに醉つ拂つた。今までにも、同僚同志で酒を飲んだ機會は何度もあつたけれど、その時のやうに小林の醉つたのを見た事はなかつた。

すると又鴨志田と云ふ老教官が、どうした機みか非常に醉つ拂つて、さうして頻りに小林を呼びたてた。

「ここにお出でよ、お出でつたら」と云ふ聲に、平生聞き馴れない、いやな響きがあつた。私もいい加減醉つてゐたので、はつきりしたいきさつはよく解らないけれど、それから小林と鴨志田の二人がぐにやぐにやになつて、縺れ合つたり、抱き合つたりしたらしい。しまひには、二人が顔や頸をけたけたと舐め合つてゐたのを見たやうな氣がした。

後でその時の有樣を思ひ出して見ても、何だかはつきりしないところがあつた。しかし、さう云ふ事實を見ただけは間違ひないらしかつた。それが何年たつても忘れられない惡夢のやうに私の記憶にこびりついて、同時に私の彼と共通するらしい廣所恐怖の不快な連想を促しつつ、いつまでも私をおどかして止まなかつた。

×

私は一人息子の所爲だと思ふのだけれど、どうも姪だとか從兄弟だとか、或はだれそれさんの片づいた先の緣續きだとか、凡そそんな話になると急にはその關係が解らない。

慶さんは、私の父が養子なので、その實家の兄の子だから、即ち私の從兄である。その慶さんが若い時、何でも二十歳にならない頃の話だと云ふのだが、急に色色の事を氣にして、考へ込むやうになつた。

「手がどうして動くのだらう。不思議だなあ」

一時は、慶さんの氣が觸れたと云ふ噂もあつたらしい。

しかし、それでどうなつたと云ふのでもない。間もなく直つてしまつて、今も達者でゐる。

私は後になつてその話をきいて、どこが變なのだか解らないと思つた。手が何故動くかと云ふ事も、考へ樣では不思議な話だ。又さう思つて見れば、人間の手ぐらゐ目まぐるしいものはない。朝から晩まで、動き通しにちらくら動いてゐる。おまけに尖が各五本の指に裂けて、その又一本づつが、めいめい勝手な風に曲がつたり、からまつたり、不思議な運動を續けてゐる。しかも大槪の場合、本人はそんな事に氣づかないから、手や指は本人の意識と無關係に、ぴくぴくはねたり、うねくね曲がつたりしてゐるのだ。不思議でもあり又無氣味でもある。

「君のやうな手を見ると、なほの事さう思ふ」と私はある時野口に云つた。野口はそれまで、中指と人指し指との間に卷莨をはさんでゐた右の手と、緩い拳を造つて、その上に顎をのせてゐた左手とを一寸見た。

「さうだよ、手は變だよ。僕はあんまり好きぢやない」と彼が云つた。

「いやなものだね」

「手は變だよ。しかしさうすると、君にはその從兄の系統があるのか知ら」

「だつて君、從兄はその後何ともありやしないよ。今はもう五十近いと思ふんだけれど。つまり若い時の神經衰弱だつたのさ」

「でも怖いねえ、本當に何ともないのかい」

「從兄は何ともないさ。しかし、だからその系統なんかに關係はない話なんだけれど、その從兄の二度目の細君は、立派な氣違ひになつて死んでしまつた」

野口は急に寒さうな顔をした。その癖彼は無暗にそんな話を聞きたがつた。

從兄の細君は、それ迄全然そんな徵候も見えなかつたのだが、或時近所の人から仕立物を賴まれて、それが約束の日を

過ぎてもまだ出來なかつたので、內氣なおとなしい人だつたから、そんな事を氣にしてゐたらしい、ある日その仕事を賴んだ人が訪ねて來たら、顏を一目見るなり悲鳴をあげて氣絕してしまつた。それからすつかり調子が狂つて、もとに直らないうちに死んでしまつた。

「その近所のをばさんの顏が、大きな狐の顏に見えたらしいのだ」

「いやだなあ、僕の顏が何かに見えやしないか。君の顏も、見てゐる內に、段段何かに變りさうだぜ」

野口は氣味わるさうな目を轉じて、自分の手を見てゐた。私の事を色色無氣味に解釋したり、今にも私の頭が狂ひ出すやうな忠告をしたりする癖に、野口自身は非常にさう云ふ事を恐れてゐた。さうして、どう云ふ根據だか知らないけれど、いつかは自分自身がさう云ふ事になるものときめてゐるらしかつた。或は、さう云ふ事を恐れながら待つてゐる樣にも見えた。同時に自分のその不安に比例して私をおどかしてゐる樣にも思はれた。

×

私が二三年前金錢上の事で非常な窮地に陷り、無斷で學校の講義を休んだ儘、二月ばかり中國地方をうろついてゐた當時、野口は私が再び歸つては來ないものと思つて、今に何處からか自殺の知らせを受けるだらうと、ひやひやしてゐたらしい。その實、私は割合に平氣で、方方知らない所を步き廻つてゐた。自分の本心を欺いてゐると云ふかすかな意識はあつたにしろ、兎に角自殺する程に思ひつめた事もなく、又自分の氣持にどこか食ひ違つたらしいところもあつて、當時の一切の事が、何となく他人事（ひとごと）のやうにばかり感じられてゐた。

しかし、その間にただ一度、ある夜伯耆の米子の町外れを步いてゐたら、眞暗な道の傍に不意に思ひもかけない浪の音を聞いた事があつた。丸で不案內の土地だつたので、現にその繁吹（しぶき）を浴びるまでは、漠然ながら反對の方角にあるもの

と考へてゐた海の音を、いきなり脚下に聞いた時の事を思ひ出す。事によれば、或は私自身の知らない定めがあつて、野口の心配してくれた事も、全くの杞憂ではなかつたかも知れない。しかし、兎に角私は無事に歸つて來た。

私の歸つた事をきいて、野口は非常によろこんでくれた。まだ會はない前にその言傳てを聞いて、私は彼の親切を今更の如くうれしく思つた。しかし、それと同時に、彼の私に對する警告は益物騒になつて來た。

「氣をつけたまへよ、君の顏は丸で變つてゐる。行方不明になつた前とは別人の樣だぜ。第一その太り方つてないよ」

私が、その間に痩せもしないで、反對に妙に太つて歸つたのは事實だつた。

それから後も、次第に肥えて來るのを私は息苦しさで感じた。特にこの秋以來、夜晝眠りつづける樣になつてからは、顏が無暗に大きくなるらしかつた。私は鏡に向つて、長く自分の顏を見るに堪へなかつた。

×

私はこの頃少し勞れたらしい。

今まで覺えのないやうな大きな欠伸が出る。ひとりでに咽喉の奥があがあがあと鳴つて、見苦しいと思つても止めるわけには行かない。そんな欠伸が出だしたら、三十から多い時は五十も、或はもつとも出るらしい。ある時燐寸の軸で數へてゐたら、しまひに數が足りなくなつてしまつた。そんな時は何をする事も考へる事も出來ない。ただ手をつかねて、欠伸の發作の止むのを待つてゐる。

それから、鼾の音が益大きくなるらしい。この頃は寢てゐる自分の耳に聞こえ出した。鼾が聞こえると云ふ筈はないと思ふのだけれど、しかし私は殆ど每夜自分の鼾を聞いて眠つてゐる。咽喉にひつかかるかすかな音も、にぶい調子の高低も、おぼろげながら耳の中に記憶がある。私は醒めてゐる時、自分の鼾の音と調子を真似る事が出來る。

さうして相變らずよく眠る。いくら寢ても寢足りない。夜晝暇さへあれば寢床の中にもぐり込む。さうして中途で目がさめると、枕許の水を飲んで又眠る。飲み下した冷たい水が、腹の中で暖かくなると同時に寢入つてしまふ。水に催眠の力があるのではないかとさへ思ふ。

だから私の寢床には、いつでも家の者が氣をつけて、お盆に水を載せて置いてくれる。その水が時時、私の飲まないうちになくなる事がある。夜中に目がさめて、いつもの通り水を飲まうとすると、寢る前には一ぱいあつたコップの中が、半分足らずになつてゐる事がある。始めの内は寢惚けて自分の飲んだのを忘れるのだらうと思つたけれど、段段さうではないらしくなつて來た。これから寢ようと思つて寢床に行つて見ると、枕許のコップに水がないから、家の者を呼んでさう云つたらさつき一ぱいに注いで置いたと云つた。さう云へば、コップの底がぬれてゐた。どう云ふわけなのだか解らなかつた。ある晩は、宵のうちから眠つてゐると、いきなり顏に水をかけられた樣な氣がして目がさめた。まだ下では家のものの話し聲が聞こえてゐた。私は夢ではないかと思つて、額を撫でて見たら、その手がぬれたので、驚いて半身起こして邊りを見廻したけれど、何の事もなかつた。

それから時時遠くの方で、宵とも夜半とも時刻を定めずに、何だかわからない聲が一聲づつ聞こえた。多くは北の方から來るらしいのだけれど、それは餘りはつきりしなかつた。その聲は、何の聲に似てゐるとも云はれなかつた。又餘り無氣味でもなかつた。ただ同じ聲を何度も聞くのが氣がかりだつた。

さうして眠つてゐる間は、何の面白味もない同じやうな夢を、繰り返し繰り返し見續けた。變によそよそしい顏をした見知らない男が二三人づつ出て來て、いつも私の顏をしげしげと見てゐる計りだつた。目がさめてから、夢のあとを追つて見ても、何の連想も判斷も浮かばなかつた。その男たちは時時顏が代るのか、いつも同じ仲間なのか、それもはつきりしなかつた

學校も段段休み勝ちになつた。しかし私は努めて出るやうにはした。

×

同僚はみんな何だか知らないけれども、云ひたい事を隱してゐる樣な顏をしてゐた。或は何かを申し合はせてゐるやうな風でもあつた。尤も、彼等がそんな顏をしてゐると云ふだけで、特に私にさう思はれたと云ふわけではない。だから私は誰にでも構はずに話しかけた。相手はいつも浮かぬ顏をしてゐた。

二月末になつて、二度目にぶり返して來た西班牙風の爲に斃れる人が澤山あつた。しかし私の學校の職員は、だれも死ななかつた。

「ここの人はみんな割合に達者ですね」とある教師が云つた。

「死ぬ程生きてる人がゐないからさ」と私が云つた。

その相手が聞き返した。

「それはどう云ふ意味ですか」

すると、その近くにゐた他の教師がそこへやつて來て、

「どうも朝の省線の混むのには閉口ですよ」

そんな事を云ひ出して、さつきの相手との話のつぎ穗をなくしてしまつた。それをどう云ふわけだと考へるのか私には退儀だつた。

ある時食堂がこんでゐたので、私の隣にゐる男に「君の腕は食ひさうだ」と云つたら、その男は返事をしなかつた。

私は不用意に出る冗談を控へようなどとは思はなかつた。しかし、學校に行つて同僚達に會ふのは段段億劫になつた。

た。

野口を訪ねて行つたら、女中が二階の書齋に案内して、今下で來客にあつてゐるから、暫らく待つてくれとの挨拶だつた。

床の間の前に竝んだ大きな本箱と本箱との間の壁際に、椅子が一脚置いてあつたので、私は洋服の膝をらくにする爲に、それに腰をかけてぼんやりしてゐた。

三月に入つたばかりなのに、急に世間が暖かつた。硝子戸の向うに低く見える西の空に霞の樣なものがかかつてゐた。

その内に、後から二人連れの訪客が通された。それから間もなく、若い婦人の客も一緒になつた。私はそれ等の人人に椅子の上から會釋して、もとの通りぼんやりしてゐた。

いつ迄たつても野口は顏を見せなかつた。暈のかかつた大きな太陽が、硝子戸の向うに傾いて行くのが見えた。誰も口を利かなかつた。不思議な事には、二人連れで來た男も、お互同志の間に何の話もしなかつた。私は餘り長い間椅子に掛けてゐたので、却て窮屈になり、今度は座布團の上に下りて、胡座になりたいと思つたけれど、無言の人人の中に、からだを動かすことも出來なかつた。

それから暫らくして、漸く野口が現はれた時、私はその顏を見てびつくりした。もともと痩せた顏が一層細くなり骨立つて、額にかぶつた髮の毛には色も光澤もなかつた。しかしそれよりも不思議な事には、どことなく顏の輪廓が二重になつてゐるやうな感じがした。

野口はいきなり入口の方にゐたお客に挨拶をした。さうして、「そら、大學の西島さんを知つてるでせう。あすこのお孃さんが家出してね、今それでお母さんが見えて、僕はどうも弱つちまつた」と云つた。

「そりやもう大分前の話しぢやないのですか。いつか新聞にありましたね」と一人の男が云つた。
「いや、それとは又別で、今度は姉さんの方なのだ。あすこは、みんな少し變なのだね」
「さうですか」
「こんな事を云つちや悪いか知れないけれど、今度のだつて、なんにも原因がわからないんだからね。ラヴや何かではないらしい」
「あなたの所によく來たのですか」
「姉さんの方は二三度來た事もあるんだけれど、それよりも、しよつちゆう僕の小説を讀んでゐたと云ふのでね、何だか責任がありさうで困る」
「そりや責任がありますよ」ともう一人の男が少し大袈裟に云つた。「あなたのものを讀んでれば、誰だつて少しは變な氣持になりますからね」
「そんな馬鹿な事があるものか。僕の書くものは實に健全だよ」
「ねえ君」と私が聲をかけた。
「あつ、びつくりした。おどかしちやいけないよ」と野口が云つた。本當にびつくりしたらしかつた。「失敬、失敬、君の事は忘れてゐた。しかしそんなところに君、眞黒い洋服でしやがんでゐられては、誰だつてびつくりするよ」
「しやがんでやしないよ。しかし君はどうかしたのぢやないの、隨分痩せたね」
「僕の事より、君は又實に大きな顔をしてるぢやないか、まあこつちへ出て來たまへ。御紹介しよう
私が椅子を下りて、座布團に坐らうとしてゐる内に、彼は云つた。
「この方は黎明社の原田君と森君だ。それから女流作家の香川さん、知つてるだらう君」

私が返事をしないうちに、彼は立て續けに云つた。

「この人は僕の友人で先輩で「瑪瑙」の著者の青地豐二郎君と云ふ氣違ひです」

「馬鹿云ふなよ」

「本當だよ君」彼は指の長い手を、私の方ににゆつと出して云つた。「本當だよ、その、顏に光澤の出來たところが證據だよ」

「これは顏の脂だ」

「違ふよ」野口は二人の客の方に向かつて云つた。「もし君等の云ふ如く僕の書いたものに多少でも變な傾向があるとしたら、それはこの人の間接の影響なのだ。御當人は案外平氣らしいのだけれど、お蔭で僕の方が怪しくなりさうだ」

「それは面白いですね。ああ云ふ傾向は傳染しますからね」

「面白かないよ君」

「先生にもその素質がおありなんでせう」と女の人が云つた。

「馬鹿云つちや困りますよ。僕は實に健全なのだけれど、この人が時時おどかすからいけないのだ」

野口は、重病人が病床から拔け出して來た樣な顏をしてゐながら、案外元氣で、寧ろはしやいでゐるらしくもあつた。

女の客は、何か自分の作物の事について簡單な依賴をして歸つて行つた。

二人の客は別に用事もなかつたらしく、取り止めのない話ばかりして、いつ迄も座を起たなかつた。尤も私にも格別の用事はなかつた。

「相變らず山高帽子をかぶつてるのだらう。あれは止めた方がいいね」

「止めるのはいやだ。君のやうな事を云ふ人があると、なほ更止められない」

「それそれ、それが變なのだよ。第一君があの帽子をかぶると怖いよ。ああ云ふものを見ると毒だね」
「君の顏だつて氣晴らしにはならない」
「少くとも君がおれをかぶる事は、李下の冠瓜田の履だ」
「それを承知の上で、わざわざ瓜田に履を納れる事もあるさ」
「すると目の前にごろごろ瓜がころがつてるから、矢つ張り盜みたくなるから危いよ。君の場合は正にそれだね」
野口はいつ迄たつても、そんな話ばかりした。私はしまひに受け答へに窮してしまつた。さうして同席の未知の人が、何と思ふだらうと云ふ懸念が、次第に私を不安にした。
「その後、幻聽は聞こえないかい」
野口はまだ止めなかつた。
「大丈夫だよ、幻聽なんか聞くものか」
「でもあの蕎麥屋の話は怖かつたよ。僕は一晩ちゆうおどかされた。何だか聞こえさうな氣がして仕樣がなかつた。ねえ君、この人はね」野口は二人の方に向かつて、氣味のわるい指で私を指さしながら云つた。「この人にはもう幻聽があるんだよ。怖いねえ。怖いだらう」
私は仕方がないから默つてゐた。
暗くなつてから、近所の古柳庵と云ふ料理屋に出かけて、四人で食事をした。野口は酒盃を措かなかつた。私は心配だから一二度注意して見たけれども、彼は一向平氣だつた。さうして無暗にべらべらと喋つた。いくら飲んでも、彼の血の氣のない顏は、もとの通り冷たさうだつた。

×

私は、野口の云つた幻聽の事が妙に氣になり出した。幻聽の恐ろしい事は、私も知つてゐた。しかし、野口がこの前そんな事を云ひ出した時は、又彼の例の癖が始まつたと思つたきりで、それ程氣にも止めなかつたのだけれど、今日また改めて彼からそれを云はれて見ると、その後の、寢床に聞こえる不思議な聲の事も思ひ出して、餘りいい氣持はしなかつた。さうして同時に、野口の何かかぶつた樣な一重の輪廓の顏が、私の目先を離れなくなつた。

その晩家に歸つてから、自分の部屋に坐り込んで、閉め切つた窓の戸をがたがたと動かして行く風の音を聞いてゐたら私は明日と云ふ日が得體の知れない化物のやうに思はれ出した。人が私の事を何と云ふのも構はないし、又自分としても、萬一さう云ふ懸念があれば、單に病覺のあるなしで、恐ろしい事をきめるわけにも行かなければ、又打ち消す事も出來ないのは知つてゐる。その用心も、同時に安心もしてはゐるつもりだけれど、それにしては人はうるさかつた。と云ふよりも人の云ふ事が氣になつた。又それを氣にする理由もあつた。寧ろ人が私をさう云ふ疑念で見る事の方が恐ろしかつた。これから後、私について色色な事を云ふ人が次第に殖えるとする。明日は又何人にあふか解らない。さうして明後日はどこかで、人が私の事を變なふうに話し合つてゐるだらう。さうして結局、私に拘はりのある人人がみんなそれを信ずるやうになれば、私は今日のこの儘の狀態でゐながら、人人から合點の行かない扱ひを受けなければならなくなるだらう。自分の事は人にかまつて貰はなくてもいい。しかし人は私に對してその口を愼むべきである。ある人が瘋癲病院を訪問する話を思ひ出した。その客が一人の患者に向かつて、「君はどうしてこんな所に這入つてゐるのです」ときいて見た。

「何、單なる意見の相違だよ」
「そんな事はないでせう」
「いやそれに違ひないのだ。己は世間の奴等がみんな氣違ひだと云ふのだ、世間の奴等はみんなで己をさうだと云ふのさ。しかし多勢には勝てんからね、萬事多數決だよ」
まあ人は何とでも思ふがいい、と私は氣をかへた。あんまりみんなでうるさく云ふやうだつたら、わざとそんな眞似をしてびくびくしてゐる連中をおどかしてやつてもいい。先づ差し當り、多數派の頭目は野口だから、彼を一つおどかしてやらう。自分でしよつちゆうそんな事ばかり氣にしてゐるのだから、いよいよ私が變な樣子で彼の前に現はれたら、野口はあの長い手をくねくね動かして、どんなに氣味をわるがるか知れないと思つたら、急に可笑しくて堪らなくなつた。

×

私が家の風呂に這入つた後で、細君は三つになる男の子を奥の座敷に寢かしつけておいて、近所の買物に出かけた。上の子供達は女中と一緒にどこかへ遊びに行つた儘、まだ歸つてゐなかつた。家ぢゆうに私と三つの男の子しかゐなかつた。さうして部屋部屋には電燈が明かるくついてゐた。
私は湯殿の中で、石鹸の置き場所がわからなくてまごついてゐた。不意にどこかで猫のうなる樣な聲が聞こえた。さうして段段に近づいて來る樣に思はれた。
私は湯槽の中に這入つて、首だけ出してその聲を聞いてゐた。猫の聲ではないらしかつた。子供が泣いてゐるのかも知れなかつた。
しかし子供の聲にしては、不思議な響きがあつた。矢つ張り猫の唸る聲の樣にも思はれた。

私は湯槽の中で、一生懸命にその聲を聽き濟ました。次第に私は無氣味になつて來た。矢つ張り子供の聲に違ひないらしかつた。しかし泣いでゐるのではなくて魘されてゐるのだつた。

おんな小さな子供が魘されるか知らと私は考へた。その聲はいつ迄も止まなかつた。

私は俄に不安になつて、急いで湯から上がらうとした。

その時、玄關の戸ががらがらと開いて、細君の歸つて來た足音が聞こえた。

すると、さつきから續いてゐた聲が、はたと止んでしまつた。

私はほつとした。しかし同時に、もう聞こえなくなつたさつきの聲が、一層恐ろしかつた樣に思はれ出した。

湯から上がつた私の顏を見て、細君は云つた。

「まあ怖い顏、どうかなすつたんですか」

私は默つてゐた。からだのどこかが、かすかに慄へてゐた。

「この子はこんなにずり出してしまつて、疊の上ですやすや寢てるんですよ」

子供を起こさないやうに、上からそつと布團をかけてゐた手を止めて、細君はもう一度私の顏を見た。

「まあ本當にあなた此頃はどうかしてゐらつしやるのね。誰かに診ていただかなくて大丈夫か知ら」

×

私は急に思ひついて、和服の着流しに山高帽子をかぶつて、野口の玄關に起つた。邊りはもう暗くなりかけてゐた。中

中取次が出て來なかつた。

私は帽子をぬいて彼の書齋に通る前に、なるべくこの儘の姿を野口に見せたかつた。取次が出たら、一應彼を玄關まで呼び出して貰ふつもりで待ち構へてゐた。

すると、いきなり正面の襖があいて、野口自身が現はれた。向うの部屋にともつてゐる電燈のあかりを後に受けて、影法師のやうにつつ起つた。

さうしてそれきり前にも來ないで、ぢつとしてゐると思ふと、急に引き返して奥に消えてしまつた。「一寸」と云つたらしかつた。しかしそれもよくは解らなかつた。

それから長い間私は玄關に起つてゐた。誰も出て來なかつた。もう一度案内を乞ふのも變だつた。何か野口に都合があつたに違ひない。或は私のこんな格好を見て、びつくりしたのかも知れなかつた。しかし、それにしても一寸顏を見せたきりで、何をしてゐるのだか見當がつかなかつた。

不意に私の後で聲がした。見知らない男が丁寧に御辭儀をしてゐる。

「私に御用なのですか」と私が尋ねた。

「はい、こちらの旦那様があなた様を御案内して來るやうにとの事で、手前は古柳庵の者で御座います」

「野口君は君のところに行つてるのですか」

「はい先程お見えになりまして、お待ち兼ねで御座います」

私は合點が行かなかつたけれど、兎に角その男の後について古柳庵へ行つた。

野口は待つてた様に私を迎へた。傍に、ついこの近所に家のある石井君がゐた。石井君は野口の友人で、私も二三度彼のところで會つた事がある。

「やあ失敬」と野口が穏やかな笑顔をして云つた。しかし彼の顔は、この前會つた時よりもまた痩せてゐた。口の澄りの様子がどことなく違つて、人相が變つてゐるやうに思はれた。

「さつきはどうしたんだい」と私は尋ねた。

「うん今日はね、石井君に會ひたいと思つてゐたんだ。君にも御馳走しようと思つたから、先廻りして待ち受けてたのさ」

「だつて、おれつきり居なくなつてしまつて、僕はどうしたんだか解らなくなつた。一體どこから出て來たんだい」

「そりや君一軒家に出口は二つも三つもあるさ。一寸この菓子を食つて見たまへ。うまいよ。」

彼は何となく要領のない事を云つた。さうして干菓子を一枚つまんでくれた。

それから三人で少し許り酒を飲んだ。

しかし未だいつもの半分も飲まない内に、野口は自分から切り上げて、すぐ御飯にしてしまつた。

その後で、いろいろ取り止めもない話をした。

夜中に夫が目をさまして、水が飲みたいと云ふのを、傍に寢てゐた細君がねむいので、うるさがり、いい加減におしらつて、そのまま寢かしてしまつた。暫らくたつてから、細君がふと目をさまして見ると、自分の横に寢てゐた夫が死んでゐた。びつくりして飛び起きようとしたら、丁度その時、窓の隙間から小さな鼠が一匹這入つて來て、自分達の寢てゐるベットに上がり、夫の顏を這つてその口の中に飛び込んでしまつた。すると死んでゐると思つた夫のからだに温りがさして、かすかに手足を動かした。さうして、その儘すやすやと眠りつづけた。

「水を飲みたいと云ふ魂が鼠になつて、臺所まで出て行つたのだ」と私が話した。

「面白い話だねえ。君が考へたのかい」と野口がきいた。

「さうぢやない、フリードリヒ・ランケの話なんだ。しかし僕達にもそんな事はありさうな氣持がする。鼠になつてるか

どうだか、それは自分には解らないけれど、四五年前僕は毎晩眠ると魂が外に出て、枕の横にぶら下がつたまま、中中もとに返つてくれないので、苦しいから目をさましたいと思つても、もとになる迄は起きることも出來ないのだ」
「何んだかそんな氣持のする事はありますね。神經衰弱なんですね」と石井君が云つた。
「それなり目をさましてしまつたら、どうなるのだらうと思ふと、恐ろしくなるんです。或は何か急な刺激で起こされでもしたら、きつと頭の調子が狂つて來るに違ひないと思ふのです」
「神經衰弱だよ」と野口が云つた。「それより君、今度の文樂の人形を觀たかい。面白いよ」
「いいや見ない。しかし、どこかで見た記憶はあるんだけれど。大阪か知ら。何だか、はつきりしないが、あの人形の顏は、どれを見ても、僕は餘りいい氣持がしない」
「さうだね、君にはさうかも知れないね。さう思つて見ると無氣味なところがあるよ」
何だか平生の調子とは違つてゐた。
石井君はいつもの無口で、ただにやにや笑つて許りゐる。しかしその石井君の寡默にも、何か知ら腑に落ちないものがあつた。
第一野口が私の事を、いつもの樣につけつけと云はないのが不思議だつた。さう云ふ事を急に遠慮して、差し控へるらしい彼の氣持が、私にはよく解らなかつた。
或は私の冗談がまともに利いて、彼は本氣に心配してゐるのかも知れなかつた。又私も始めのうちは朧氣ながらさう云ふ風に感じて、何となく申しわけない樣な、當惑した氣持にもなつた。その圖に乘つて、益彼をおどかすと云ふ樣な、そんな氣持は丸でなくなつてゐた。
しかし又必ずしもさうでもないらしい節節もあり、且彼の平生から考へて、さう云ふ風な野口でもなかつた。寧ろ、私

の不思議に思ふ原因は、何か知ら彼自身の内にありさうに思はれた。

しかし又考へて見ると、石井君の同席も不思議な氣持がしないでもない。或は事によると、野口は私の姿を一目見るなり、裏口から逃げ出して、急いで石井君を呼び出して、二人で私に會ふやうにしたのかも知れない。けれども、それも矢つ張り私の思ひ過ぎで、實際はただ野口の云つた通りなのかも知れなかつた。何れにしても、彼の調子がいつもと違つしゐる丈は確かだつた。さうして、それが何の爲だかは私には解らなかつた。

みんな別別の道に分かれて歸る途中、私は狹い露地を拔けた。すると何だか、片側の塀の上にのぞいた樹の枝から、千切れるやうに落ちたものがあると思つたら、暗い足許を一匹の猫が走り拔けた。

私はほろ醉の顔に、水をかぶつた樣な氣がした。

×

私が重い頭をかかへて、考へ込んでゐる時、野口が訪ねて來た。本屋の包み紙にくるんだ彼の新刊の著書をひろげて、私に硯と筆とを求めた。

扉に署名しながら、「君に差し上げる分がなくなつたから、自分の本を本屋で買つて來たのだ。惜しかつたよ」と野口が云つた。

私は彼の親切を感謝した。彼は何だかそはそはして落ちつかなかつた。

「ゆつくりすればいいぢやないの」と私が云つた。

「いやこれから齋藤の奧さんを見舞ふのだ。齋藤の事は知つてるだらう君」

「いや知らない」

「知らないのか。齋藤は氣の毒だよ。すつかり變なのだ。昨日病院に入れて來たんだけれどね、僕等だつて、いつああなるか知れない。全く他人事ぢやないと思つた」

「それは氣の毒だね、前からそんなところがあつたのか」

「さうでもなかつたんだけれど」野口は急に話頭を轉じた。

「君は僕が結婚する日に丁度やつて來た事があるね」

「さうさう、隨分面喰つてしまつた。君はだまつてゐるんだもの」

「一寸失敬つて、下から紋附を著て來たら、君は實に不思議な顏をしたよ」もう十年以上も昔だなあ」

私はこの頃碌碌學校にも出ない。それは何となく勞れて億劫な爲ばかりでなく、二三年前の家の問題が依然解決出來ないので、これから先どうなるか知れない不安と焦燥の爲でもあつた。

「今もその事を考へ込んでゐたのだ」と私がその話をしたら、

「君はもうあの時自殺して來るものと思つた。僕は全くさう思つたから、一人で心配してゐたんだ。君のその性格では、これから先、何年たつても君の煩ひは解けやしない。君は一生涯苦しむんだよ」

野口はさう云つて、それから私の顏を見て續けた。

「君には自殺する勇氣もないし」

「勇氣もなささうだが、どうせ死ぬにきまつてゐるんだから、はふつて置けばいい」

「僕は君を一ばんよく知つてるよ。君のお母さんや奧さんよりも、僕の方がよく知つてるよ。君の本當の氣持がわかるのは僕だけだよ。ああすればいいとか、あれだから駄目だとか、いろいろ君の事を傍から云つたつて、君にはさうは行かないのだ。しかし、もう行かう。ここいらに自動車屋はないか知ら」

私はふと瞼の裏に涙がにじむやうな氣がした。

「まだ外は寒いね」と私が云つた。

「ぢや左様なら」と云つて、野口は辷りのわるい門の戸を、がりがりと開けた。

×

野口は私の爲にある本屋に交渉して、千圓の金を用意してくれた。さうして一緒に行つて、自分の名前で受取つてくれた。

その後で彼を訪ねたら、パイプを啣へたまま、椅子に靠れて妙な顏をしてゐた。丸で眠つてゐる様だつた。頸も手もぐにやぐにやで、賴りがなささうだつた。

「どうしたんだい」と私は驚いて尋ねた。

彼は重たさうに瞼をあけて、私の顏を見た。しかし直ぐに又目をつぶつて、ふらふらしてゐる。

「眠り藥を飲み過ぎてね、まだよく覺めないんだよ」

暫らくして彼はさう云つた。言葉もべろべろだつた。「まだよく覺めない内に、起きたからだよ」

私は、この間古柳庵で私の話した事を思ひ出した。

「そんなのに起きて大丈夫か知ら」

「おなかが痛くて起きたんだよ」又暫らくしてから云つた。「しかし、こんな事はしよつちゆうだから平氣だ」

「そんな藥を飲んで、晝まで醉つ拂つてゐては毒だよ」

「毒だつて君、晝からお酒に醉つ拂つてる人だつてあらあ」

私は暫らくの間彼の前にゐた。私が何か云へば、退儀さうに瞼をあけ、又思ひ出した樣な應答はするけれど、默つてゐればそのまま、ぐつたりして、首を垂れてしまふ。

私は彼を眠らしてはいけないやうな、又起こしても惡いやうな氣がした。さうして、ぢつとその顏を見てゐる內に、私自身も段段瞼が重くなり、次第に首を垂れて眠り込む樣な氣持になつて來た。

歸る時に、途中で公衆電話をかける用事があつた。その料金の白銅貨を私は持つてゐなかつた。すると野口は急に起ち上がつて、變な足どりで梯子段を下り出した。私は、はらはらしながら、しかし手をかす事も出來ないので見てゐると、間もなく彼は片手に一ぱい銀貨や白銅を握つて歸つて來た。蟇口から摑み出す事が出來ないで、中味をそつくり手の平にうつして來たらしい。さうして起つたなりでその手を私の前に差し出すのだけれど、その間も彼はぢつと起つてゐる事が出來なかつた。ふらりふらりと前後左右に搖れて、その度に足を蹈み直した。彼の手の平には、十錢や五十錢の銀貨と混じつて、五錢の白銅貨が一つあつた。それを彼は摘み出さうとしてゐる。しかし彼の指先は、彼方此方に游いで、中中それに觸れなかつた。

×

私は野口の樣子が普通でないと思つた。

さうして非常に心配になつた。

しかし、彼がその二日後に自殺するとは思はなかつた。

睡眠藥を少しづつ過度に飲んで、その最後の日の準備をしてゐたのだとは思はなかつた。

×

その知らせを受けた時、私はいきなり自分の部屋に這入つて、後の襖を締め切つた。

「野口は自殺した」と私ははつきり考へようとした。

しかしそれは私には出來なかつた。

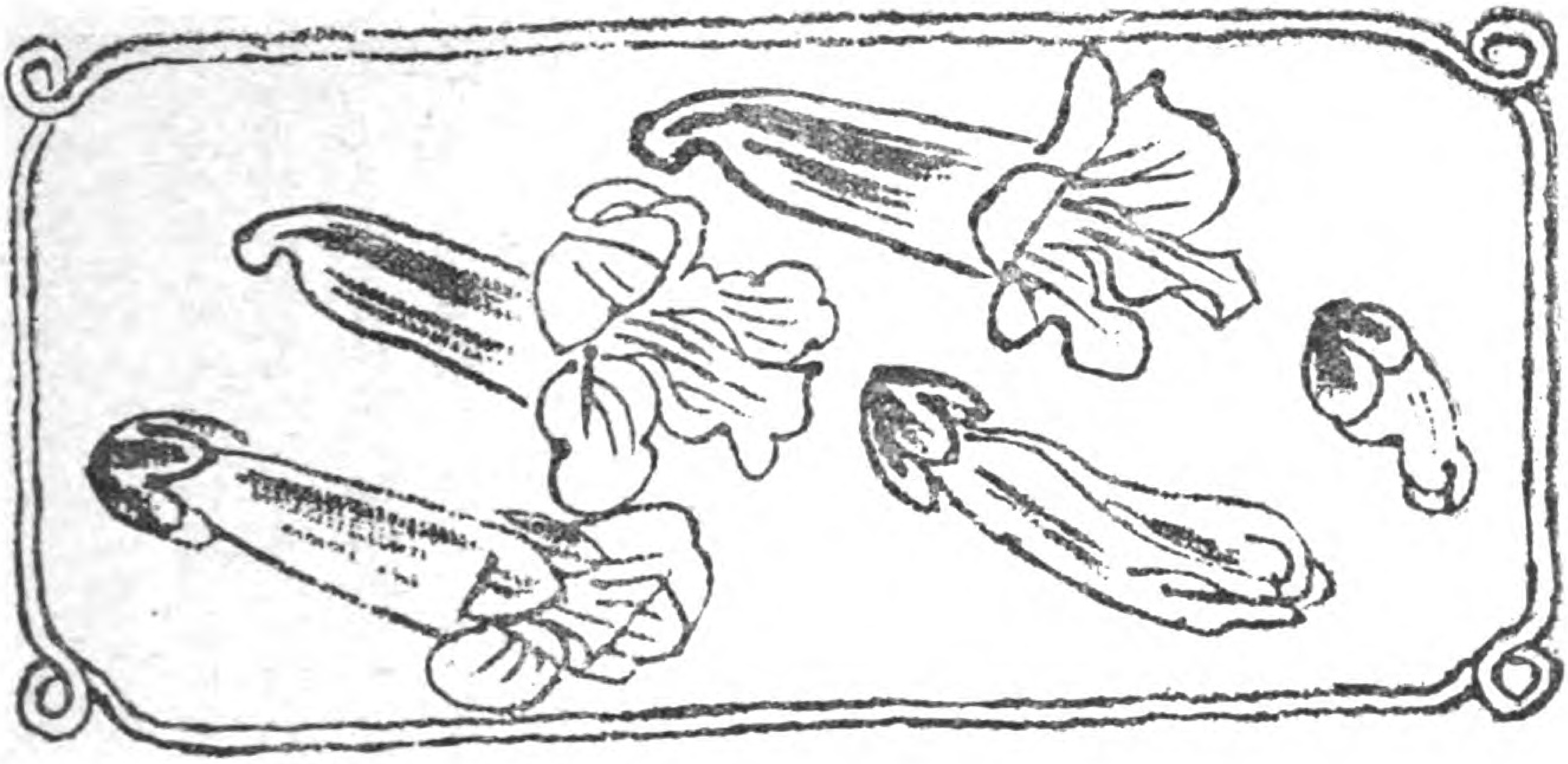
どうして自殺したのだらうとも思はなかつた。

ただ私の長い惡夢に、一層恐ろしい陰の加はつた事を、他人事(ひとごと)のやうに感じただけだつた。

×

何日か過ぎたある夜明けに、突然私は自分の聲にびつくりして目がさめた。何を云つたのだか解らなかつたけれど、恐ろしく大きな聲だつた。咽喉一ぱいに叫んだらしかつた。しかし別に悲鳴をあげるやうな夢を見てゐたのでもなかつた。寧ろ、ぼんやり頭のどこかに殘つてゐる後の氣持から云へば、何かに腹をたてて怒つたのかも知れなかつた。もう夜明けが近いらしかつたけれど、窓の色は眞暗だつた。さうして風の音もないしんしんとした闇の中に、季節外れの稻妻がぴかぴか光つてゐた。

私はずり出た肩に布團を引張つて眠らうとした。餘り布團を引きすぎたので、襟が下の肘を撫でて、丁度水に溺れかかつてゐるやうな氣持がした。



支那（長篇小説）

前田河廣一郎

十三

亞州酒店（ホテル・アジア）の三階の廣間には、西洋の芝居の應接間へ出て來るやうなソーファや椅子が、洗ひ立ての白布に覆はれて、教會の處女のやうにならんでゐた。

それら來客用の家具とちがつて、室の一と隅には、西と南に開いた窓の中間に、一脚の廻轉椅子が置かれてあつた。古るぼけた、生地そのまゝの、剝製の鸚鵡のやうに禿げた椅子である。入口をはいつてすぐ眼につく、ま向きのレニンの像と、この禿げちよろけた椅子とには、どこかしら共通するところがあつた。これは、革命同志ニコライ・スミルノフの廻轉椅子である。

めつたに外出することのないスミルノフは、毎日この椅子へかけて、非常に大きいパイプから煙草ばかり吸つてゐた。――だが、この一脚の廻轉椅子は、現在の廣東

と將來の支那革命に、わりに重大な役割をはたすやうな時機に、角度に、廻轉してゐたのである。

それにどつかと掛けてゐるスミルノフのヅボンの臀部は、はげしい椅子のブラッシュとの接觸の度合に應じて、今はどちらがヅボンか椅子であるかが、ちよつと判斷しにくいほど双方ともに、惡る光りに光つて來てゐた。と、いふことは直ちに、次の事實を證據立てゝるのである。——卽ち、この椅子の表面と、それを摩擦するヅボンの一部分とは、かなり長い間の接觸を續けて來たといふことである。もうすこし歷史的に說明すれば、ミハエル・マルコヴィッチ・ボローヂンが、孫中山から賴まれて、廣東政府の最高政治顧問として、この亞州酒店の三階を全部借り切つて以來、今からざつと二年前から、スミルノフはこの特定な椅子を愛用しはじめたのである。スミルノフとボローヂンとの間柄——それはごく簡單に云つてしまへば、同志といふ一語で掩はれた。どちらにせよ、この廻轉椅子にも、ニコライ・スミルノフにも、どこか普通とちがつて、狂がひじみたところがあるには相違なかつた。

ニコライ・エフ・スミルノフは、有史以前の恐龍類の一種である。角の三本生えたトリセラトプスといふ巨獸を聯想させるロシア人である。兩の眉毛が尖がつて眼の上に飛び出してゐて、ややだだつぴろい鼻の下の、ピンと撥ねあげた口髭とともに、異樣な赤い角を三本突き出してゐるやうに思はれたのみならず、襞の多い體軀に、胴が際立つて長かつたからである。勿論、その動作も、體軀に從つて銳敏な方ではなかつた。椅子は三度修繕され、ヅボンは二着も變つてゐるが、この兩者の間には、依然として同じ廻轉行動が伴にされて來た。——

スミルノフといふ名前は、電氣技師あがりの現在のロシア共產黨中央委員の一人にもあるが、廻轉椅子のスミルノフは自分でもそれが己れの本名であるかどうかさへはつきりしない、漠然としたニコライ・エフ・スミルノフなのである。

曾ての昔、イワン・イワノウヰッチ・ノヴオルスキーといふ名を持つてゐたこともあるし、モロトフといふ名で通つたこともあり、ウリツキー、ペトロフ、クラーク、ヴォロンスキー、その他半打以上の他人の旅行免狀で半生以上を暮らして

來た彼にとつては、或る時冗談らしくボローヂンがつけてくれた『ニコライ・エフ・スミルノフ』といふ姓名が、どうやらこの上動かない名前らしく思はれたので、笑つて採用したまゝに過ぎない。スミルノフが、ボローヂンに『拾はれ』たのは彼が『ビー・テー・クラーク』と名乘つてゐた時分であつた。

それは、北アメリカ、イリノエズ州シカゴ市に於てであつた。

『ビー・テー・クラーク。』

さう英語で名乘ると、夜學校の受付は噴き出した。

『本名は？クラークといふ柄でもないぢやありませんか！』

『……でも、工場ぢやそれで通つてるですよ。』

『ははア、クラークさん。で、御職業は？――』

ボローヂンの經營してゐた移民夜學校へ通ひ出した當時のスミルノフは、シカゴ市西マディソン街の大きい硝子工場で砂とソーダと石灰の、噓のやうな混交物から、鏡やショー・ウインドオになるガラスを、肺の力で吹きあけて生活してゐた。

『わつしや、あのスパイのガボン奴に騙まされた組でしてね、ヴアシリエウスキーの島で市街戰をおつぱじめた一人でさア。あの時は、モロトフで通つてゐましたよ。――一月九日さ、糞いまいましい九日さ！』

あとで、このガラス職工が、先生のボローヂンへかう打明けたので、あれはどうなつた、あの男は殺られたか――と話し合つて見ると、ボローヂンがリガでやつたことを、スミルノフは當時のペテルスバルグでやつてゐたことが判明して、この師弟の關係は、ずうつとあとまで續いた。ただ、ボローヂンとスミルノフのちがつた點は、前者はリガのパルテイツク車輛工場やクヅネツホーフの工場などの委員會を指導してゐたに反して、當時のモロトフは自然發生的な反逆勞働者に

過ぎなかつたことである。この生徒は、先生よりも三つ年齡が多かつた。

革命に從事してゐるロシア人にとつて、シカゴのガラス工場の與へた影響などといふものは、蚤のあとほどにも關係ないものにはちがひないが、スミルノフの壯年期に通過したこの經驗にたつた一つの尊い抵抗力が養はれた。それは熱暑に堪へるといふ修練である。だから、八四・〇五度といふやうな暑さに、デルタ地方の蒸風呂のやうな濕氣を加へて、うだやけた皮膚に、頭腦に、家屋に、兵舍に、鋪道に、集會場に、すべての存在が腐つて蒸し爛らされてしまひそうな廣東の氣候に、ガロン將軍の如きは一と堪りもなく逃げ出してしまふのに、スミルノフだけは、平氣で夏冬ぶつ通しのサック・コートを着て、じつと廻轉椅子の上で煙草を燻らしてゐることが出來たのである。

シカゴで別れた師弟は、もう一度ロンドンで出會ひ、更にレニングラードでいつしよになり、現在は支那まで同道して來ることになつた。そして、この十七八年間の歲月は、ボローヂンをしてますますボローヂンたらしめ、スミルノフをしてスミルノフらしい型に押遣つてしまつた。

スミルノフの體軀で、一番發達した部分は彼れの眼であつた。普通の度の弱い望遠鏡ぐらゐの視力を、その一双の鋭く澄んだ瞳は、優に誇り得たのである。彼は、この特定な場所に据えられた椅子から、廣東市に起るいろいろな現象を觀察した。その觀察の方法が又、いかにもスミルノフらしいのである。つまり、彼れの觀察の感覺的基準になつてゐるものはカール・マルクス以來の儼然とした階級觀念であつた。

女の子がラッケットを持つて通る。そのすぐ手前に、『革命尙未成功、我同志仍須努力』と支那字で書いた電柱がある。支那語はわからずとも、彼には、それが革命のモットオであることが知れてゐる。――ブルジョア！――と、彼はそのラッケットを形づけてしまふのである。學生が本を持つて行く。聖書でもない、教科書でもない、この教會では――見慣れた『三民主義』の解說である。――學生運動！――と、彼は記憶の底に、その本を疊み込んでしまふ。すべて、彼れの視

線の範圍にはいるものは、かういふ階級鬪爭の見地からだけ、その最も特長のある具體的な形態だけが抽象されるのである。だから、ボローヂンのやうな人間でも、スミルノフにとつては、その膝頭のすこしだぶついたヅボンと、彼れの口髯に隱れた、ものを云ふときすこし捻れかけんになる唇と、この二つだけが殘されてゐるのである。同じことが、支那人にも適用される。ときどきこの事務所へやつて來る、軍官學校の校長の蔣介石は、その軍帽の徽章と、瘠せた咽首で記憶された。瘠せた咽首には、屈伸性があつた。汪精衞は、彼れの眼玉と、支那語を發音するときの滑かな餘韻によつて、いやむしろ、その時の口腔にある舌の地位によつて記憶された。

かういふ觀察の方法は、絶對に正確な判斷を築きあげる上の重要な要素となつたかどうかは、誰によつても科學的なテストをほどこされてゐないのであつたが、尠くともそれは、多數の人間のあいだに居つて、群集といふものの複雜な構成要素を、極度まで單純化し、階級化して見ることには、かなり役立つたのである。さういふわけで、一つの事件が、またたく間に眼の前で起つて、澤山の人間が蠅のやうにその前後左右にむらがり立つたとしても、一と眼で、スミルノフには、それが、不穩な事件であるか、敵か味方か、プロレタリアートかブルジョアかが卽座に決定出來たのである。――一口で云つてしまへば、彼れの眼は、暴動に慣れた眼であつた。

ニコライ・スミルノフは、六月二十三日に廻轉椅子を西南の方へ向けて、熱心に煙草をふかしてゐた。その日はデモンストレーションがあるので、事務所には彼一人だけしかゐ合はせなかつたが、行列が長堤から沙面にさしかかつて、ほとんど最後の一隊になりかけた頃に、彼は、廻轉椅子を蹴倒しそうな勢ひで、椅子を放れると、窓から伸びあがつて沙基馬路の方へ碧い眼を睜つた。スミルノフでなくとも、誰しも同じことを行つたであらうほどに、その刹那の擴東は、ライフルや機關銃や大砲の音で、一時に爆破しそうに思はれたのであつた。しかし、彼れのその刹那の觀點は、普通の人のやうに大砲の煙や、その大砲の所在地にあつたのではない。――白鵞潭に泛んでゐる軍艦の國旗としきりに打ち出すその大砲の

照準がどんな角度に向つてゐるかを、彼は瞶めてゐたのだ。それから直ちに彼の視線は大砲の彈丸の命中すべき筈の州城區域に遯がれた。今から、七年前の十一月、ネヴ河から軍艦オロラがクレムリンの宮殿を標的として發砲したときには、その日のフランスの輕巡洋艦から發砲されたやうなものではなかつた。その時の大砲には實彈が籠つてゐた。今廣東の城内のどこにも、その子供の水彈きのやうに空を向けて打たれる大砲によつて起る火焔も爆破もなかつたのである。

スミルノフは、一と眼でそれをたしかめると、再び廻轉椅子へのつしと腰をおろして、くるりと一と廻轉しながら、

『威嚇だ！――威嚇だよ！』

と處女の群のやうにならんだ椅子の白い列へ語つて聽かせた。

事件の中心點とも思はれる沙基と沙面とには、あまり注意が拂はれなかつた。何となれば、そこは、市街の屋根の陰になつてゐるのみならず、ちようど、事件の起りそうに豫期されてゐた西橋の邊には質屋の倉庫が邪魔になつて眼の届かないのを知つてゐたから。――この廣東の質屋といふ封建的遺物は城のやうに高く、城のやうな銃眼をそなへた白塗りの墓のやうな建物で專ら濕氣と土匪の襲來を防ぐために都市線の上に聳えてゐるものだそうである。そこで、その陰の光景は、スミルノフの眉毛を煽るやうな銃火の響だけで、豐富な彼れの想像力に澤山であつたのである。

『同志スミルノフ、何か新しいことがあつたかね？――』

その晩、稍おそく歸へつて來たボローヂンが、やはり同じ廻轉椅子で、就寢前のパイプを啣へてゐた彼れに訊ねたときに彼れは、やはりかう簡單に答へるよりほかはなかつた。

『同志ボローヂン、威嚇です。……大砲は威嚇でしたよ！』

しかし、廿四日から五日へかけての窓の外は、さう簡單ではなかつた。

眼に入る限りの市街には、昨日の倍も青天白日旗が掲げられてあつた。明かに、多數市民の血を流した廣東は重苦しい

空に訴へて、悲劇の發祥地を示してゐるのであつた。フラッグ・ポストや綱に結ばれた旗の上には、黒いリボンがぶらさがつてゐた。それは、悲劇を起こした力に對する挑戰であつた。海外の資本主義に對する無抵抗の戰爭であつた、勇敢な戰意の公表であつた。

それと反對に、珠江から河南へかけて、いつもの騷々しい河港は、監獄の廊下のやうに鎭まりかへつてゐた。そこには連日の苦力の荷役の掛け聲もなかつた。ウインチのからからと鳴る響もしなかつた。艀船の舷を蟻のやうに歩るき廻はる仲仕の群も見えなかつた。廣東人の奇妙な頭の働きから造られた、あらゆる怪しげに長いグロテスクな船は、大嵐の一分間前のやうに影を潜めてしまつた。蒸汽の汽笛が鳴るではなく、のろのろした濁流を活氣づける白い煙があがるではなく、ジャンクもサンパンもフラワー・ボートも呑まれたやうに水面から姿を消してゐた。この靜けさには、戰術的な何ものかがあつた。それは、ストライキをはじめる前の、大工場の車輪の運轉の中止に近いものがあつた。

稅關の附近へかけての淋しさ！

そのうちに、スミルノフは一隻の軍艦の河南の突端を廻はつて來るのを見受けた。その艦旗は、思はずスミルノフの拳を握り締めさせるだけの理由を持つてゐた。曾て、何の理由もなしに、彼をハイド・パークで官憲が捕縛したときには、同じ公園のどこかに、この旗が澤山翻へつてゐたではなかつたか。軍艦は、二十二日に香港總督府で、一九二〇年規定の『義勇兵法令』を動かしたといふ噂から綜合しても、陸戰隊を補充して來たにちがひなかつた。約二時間の碇泊時間ののちに、軍艦はあはただしく香港の方へ引返へして行つた。最後の輪船が出發すると、その日一日、廣西の奥から泥砂を運んで來る、うす汚い珠江の水は、流れるまゝに、何の邪魔立てもなく海へ海へと落ちて行つた。急に、人間がその川床を攪き廻はすことをやめてしまつたこの水のほしいまゝな姿には、莊嚴なものがあつた。

翌る日は、サイレンも、汽笛も、クランクの音も、鎖も響かない廣東の市街は、内地から逃げ場もない海岸へ押出されて

もしたやうに、文明の半分を失つて明けた。その午後に、やはり英國汽船會社の旗を掲げた二艘の蒸輪船が、稍臆病らしい船脚で、白鷺潭へ近づくと、沙面の碼頭へ夥しい食糧品を吐き出しはじめた。すると、その向ふ側を、梧州邊から西非を下つて來たらしい、原始的な象形文字を船側に躍らせた支那船が、舞臺へかかつた俳優のやうな足取で通り拔けようとした。その咄嗟である。黄ろな二疋のブルドッグのやうな、英國旗を立てたカッター船が、どこからか水を蹴つて飛んで出て支那船の兩舷へぴたりと咬みついてしまつた。カッター船にどんな力があつたのか、人(ひと)の良さそうな支那船は、見るまにぐいぐいと沙面の方へ曳摺られて行つて――やがて、質屋の倉庫の蔭に、その檣だけを搖り動かしてゐた。これは、たしかに米か何かを、廣東の平碼館(なかがひ)へ輸送して來た民船にちがひない。

誰が、いつ支那人の商品を差押へるまでの宣戰を、英國と支那との間に布告したと云ふのか？　スミルノフは吃驚した。彼は、ガラスを吹くときのやうに頬を膨らまして、ふーッと息を吐いた。息を吐いた方に、レニンの肖像が彼れの顔を窺き込んでゐた。

『同志レエン、これは重大だ！』

そして、かう彼れが壁にむかつて報告したと同時に、そこの開け放たれた戸口から、かすかに煽風器のうなつてゐる次室の方で、誰かが英語で、

「組織(オルガニゼーション)――それ以外に戰策なし！」

と云ふのが聞えた。

聽き覺えのある聲だ。パイプへマッチをあてがつてゐる間、スミルノフの頭には、乾物(ひもの)の爬蟲類を聯想させる廣仲愷の印象的な顔が泛んで來た。

滑稽なことには、この小さな男は、よく大きいボルトフォリオを抱へてゐる癖があつた。

『あゝ、工人部長か――？』

十四

その腰仲慢が、暫らくすると、小さい人間の習慣として、急ぎ脚でスミルノフのところへ近づいて來た。

『やア、スミルノフさん、暫らくで！』

『あはア――如何ですか？』

相變らず大きい鞄を持つてゐる。

『君、廣東のパイロット、何か見えますか？』

『あれだ！』

スミルノフは、パイプの彎曲した柄で、先刻の檣を指さした。

『なんだ、あれは？……おりや、支那船ぢやないか？　けだもの！　――やつたな！』

工人部長は、手巾で汗を拭いた。

『いよいよ、經濟封鎖だね。』

これは、戸口の方へ廻轉椅子を向けたスミルノフ。

長いことその窓から方々を覗いてゐた客は、乾からびた顏に似合はぬ肉慾的な脣を開いて、

『なるほど、良く見えるね、この窓は！―』

と云つて、横手のソーファへ腰をおろしながら、鞄を大事さうに、揃せこけた膝の上へ立てかけた。

『これから、この廻轉椅子が忙がしくなるかも知れんて。』

スミルノフは河馬のやうに口を開けて笑つた。

そこへ、片手をポッケットへ突込んだボローヂンが、にやにやしながらはいつて來た。

『スミルノフ君は、扇風器を使はないのかね？』

かう云つて、彼はスヰッチを動かした。中央の圓卓の上で、澁い車輪の群が風を切りはじめた。ボローヂンは、長髪のうしろを風に靡かれながら、反對の方の椅子へ歩み寄つた。彼が椅子へ掛けるとほとんど同時に、窓の下の方から聞き慣れない鐘の音がした。

『なんだらう？』

三人は默つて、その音に耳を傾けた。スミルノフが口を切つた。

『沙面の寺院だらう。』

『ああ、さうだ。英國總領事の回答には、フランス人のバスクエといふ男が、彈丸を九發も浴びて死んだと書いてあつた。それだ。其の葬式でもやつてるにちがひありませんよ。』

熱しやすい廖仲愷は、鞄の胴を叩きながら云つた。

『支那側の五十二人に對して、そのムッシユウ・バスクエだけなら――申分なく彼等の口實を奪ひ去つたわけだね。』

『全く。――それに、英國人が四人、フランス人二名、日本人二名の負傷者もあると書いてあつた。負傷となると、こちらは百十七人からあるのですからな。畜生！』

ボロトヂンは腕を拱いて、蒼色の眼をじつと押しこくるやうに瞑ぢた。二人は、無言で、まだ續いてゐる寺院の鐘に耳を假した。

突然、二人の眼の前に、白い服のボローヂンが、身長が倍も伸びたやうに突立ちあがつた。

「やろう。――決戰だ！　あらゆる困難を排して！」

「聽いてくれますか、ボローヂン氏？」

廖仲愷も立ちあがつた。二人の握り合はされた拳の下に、煽風器が小さく廻はつた。

「一應は、北京を通じて交渉する。伍朝樞氏でよろしい。しかし、こちらは、こちら。――廖仲愷さん、しつかと準備して經濟戰だ！」

「よろしい、これからすぐ皆な集まります。私も二晩眠つてないんですが、漕ぎつけるまでは、幾晩でも眠らない！」

やがて重そうな鞄を抱へて出て行つた客人は、リフトに乘つたらしく、がちやんと機械の音がして、それがホテルの孔へ吸ひ込まれるとどこか階下に自動車の爆音が、ひつそりした四邊に張りつめた靜を破るやうに響いた。

ほんの偶然な機會からであつたが、パイプに詰まつた煙脂をしたたかに味はつたスミルノフが衝動的に唾を吐かうとして一つの窓から首をさし伸べたときに、彼れは、だらりと街路へ垂れた青天白日旗の陰に、六七間先へスタートした自動車を見受けたと同時に、二人の異樣な人物を、街の反對側に發見したのであつた。

その一人は、高價な白麻の支那服を着て、パナマ帽をまぶかにかぶつた首の太い紳士であつた。もう一人は、脂ぎつた臍までずつ裸になつて、サイドウオークをうろうろしてゐる。仕事にあぶれた自由勞働者風の男であつた。これらの社會的には何の關係もなさそうな二人が、妙な手眞似で今出て行つた自動車について暗號めいた通牒を取りかはしてゐたのである。

スミルノフは、ぐつと苦がい唾を嚥みこんで、首を引込めた。もう一度、舖道へ眼を遣つたときには、北と南へ別れたその二人は、かなりの距離を互の歩行の間に殘してゐた。

「不思議だな――同志ボローヂン、この廣東政府内に、何か暗闘でもあるのですかな？」

ボローヂンは、手にした雜誌から眼をあけて、質問者を見ないわけには行かなかつた。

『有り得る、又、有ると思ふが――』

『廖仲愷は、誰かに狙はれてゐるらしいね。』

『廖…黨員でないのに、恐らく、すこし頻繁にこの事務所を訪問し過ぎるのだらう。保定派と黄埔派とは、大部内訌を起こしてるそうだよ。それから…例の全然廓淸しきれない客軍の犬共も、どこか市内にうろついてゐるそうだからね。何か見たかね？』

『どうも、怪しい二人だつた。電話でさう云つて注意して遣りませう。』

ボローヂンは雜誌を捨てて戸口へ歩るいて行つた。

『さうだ、それがいいよ。我々は、今彼を失ふことは出來ない。――彼と、あと二人、この三人は孫逸仙の三分の一づつに該當するのだ。そのほかに、現在の支那では、指導者はない！』

『あとの二人とは――？』

『同志ニコライ・スミルノフ、忘れるな、われわれは常に民衆を見てゐることを！――あまりに深く個人だけを見過ぎると、われわれは骨相學者となるだけに終るだらうよ。』

『――でも、蔣介石は？』

『蔣介石が…いや、あの人は、軍人だ！』

かう答へたボローヂンは、はいつて來たと同樣に、ポッケットに片手を突込みながら、利鎌と槌とを組み合はせた紋章の下を、のそのそと廊下へ歩を運んだ。

あはただしい電話が、何處かで、ぢ、ぢ――と鳴つた。

十五

その晩、長堤（バンド）の戲院（しばゐごや）で民衆大會が催された。

霧のやうな季節の雨が、濃く闇の中から忍び降りて來て、熱病患者の呼吸のやうに下界を包んだ。その憂欝な雨の底には、數百年來、底の底から腐りきつてゐるやうな、珠江のどぶ泥の臭ひが長く尾を曳いた。人間の細胞の間に潜り入つては、肉と皮膚とを潤（うる）み爛らしてしまひさうな雨である。戲院のペンキ塗の壁には、拷問に掛けられる男の血のやうなものがたらたらと傳はつて、重い滴になつて群集の額の上に落ちた。溫室のやうな水蒸氣と熱に煠だりきつた圓柱は、觸ると溺死人の肌のやうにぬるぬるした。人いきれと濕氣に包まれた電燈は、どれもどれも幻覺のやうな二重三重の暈を着てゐた。演壇の上には、コップとフラスコが、汗をかいた。窒息的な煙草の煙が、扇と人間の動きに攪き亂されたところだけゆらゆらと動いて、澱んだ深みでは、人間をマッチ工場のやうに噎ばした。

群集は、その雨よりも執拗く殺到するのである。六時の開會といふのに、六時十分前までに、二階も三階も、特別花樓も、優等官廳も、ぎつしり詰まつてしまつた。六時には、その上入場者を詰め入れることが出來なくて、巡警と軍人とが表門を守つてゐた。闇の中に、夥しい群集が、内部の隙を狙ひながらわいわい騒ぎ立ててゐた。濁りきつた海の底のやうな場内には、四五人の卒倒者をさへ出した。それらが表へかつぎ出されるごとに、群集はなだれを打つて、入場しようと押悶めいた。巡警と群集の間に、甲高な口論がはじまる。口の達者でない巡警が敗けると、船底へ闖入する水のやうな勢ひで一塊りの人間がものをも云はずに場内へ飛び込んだ。通廊も壁側も、忽ち人間の顏で埋まつた。

廣東中の人間が、長い間唖になつてゐて、今夜はじめて口を開いたのである。熱さと發汗を忘れるためだけにも、彼等は聲がなくてはならなかつた。ごつごつした、調子の高い、荒らい言葉の波濤は、無數の扇や葵扇などによつて、聲の培

養池のやうに引搔き廻はされた。時刻が過ぎる。彼等は足踏みした。青年は口笛を鳴らした。西洋人流に拍手をするものもあつた。大聲で、空虛なビラだけの下がつてゐる舞臺へ、棍棒ヶ投げ込むやうに呶鳴り散らすのが、十も二十も重なり合つて、いまにも暴動が突發しそうに思へた。しかし、それらの喧騷の奧には、血の出るやうな眞劍さが流れてゐた。どうしても開會して貰はねば、憤死してしまひそうな激昂を、彼等はきはめて適當に容易な方法で合理化してゐたのである。

對外協會を代表して、役人の林森が司會者として、群集の掛聲に摑み出された。

彼は、しばらく聽衆を睨んで突立つてゐた。

一瞬間の沈默を挾んで、千人以上の人間と、一人の役人が、空中で相撲を挑み合ふやうに視線と視線とを絡らみ合はせた。同じ林森は、二十三日の午後、東廣場の同じ群集へむかつて決議案を朗讀した。しかし、その時の林森は、今夜のやうにやつれてはゐなかつた。それから、同じ群集は、今夜のやうに、頭上に火を燃やしてゐはしなかつた。林森は、自分のしよげかへつた氣持をよく知つてゐた。ただ、彼れは、それを群集の前にさらけ出したくないといふ彼れ自身の理由を持つてゐた。自分の聲量と辯舌を知りぬいてゐる當人が、それを知り過ぎてゐるために氣遲れのすることはままあるのである。彼れには、この大衆の中に、自分を冷靜に批判して見てゐる敵のあることがわかつてゐた。その敵といふのは、現在、彼れと國民革命に從事してゐる味方であるところの共產黨なのである！

「やれ、やれ！」

「やらなきァ俺がやるぞ！」

「しつかりしろ！」

明かに、司會者は、會に敗けてゐた。彼れはじりじりと、無數の複眼を持つた、手を振り足を動かして騷ぎ立てるこい

巨大な動物に奈落の底までも曳摺りこまれる勢ひで吸ひ寄せられてゐたのを自覺した。

林森は、絶望的に兩腕で宙を拂つた。

『諸君、兄弟——一分間の脱帽、默禱！』

鈴(ベル)のやうな叫び聲には、自分自身に對する怒りが籠もつてゐた。錐で突刺されたやうに、滿場は起立した。これだけの人間が、自分の一と聲で、一齊にかうも一致行動を取るのかと思ふと、小氣味よくもあり、恐ろしくもあつた。——林森は、鼻柱からぽたりと汗の流れたのを知つた。そして、完全に一分間の經過を腕時計のセコンドで知ると、自分では默禱も何もしない空虚な時間を、敵の武器を外らすやうに遣り過ごした。

彼は樂な氣持で雄辯を揮ひはじめた。

『……既に、諸君は百餘の各團體を、この悲痛な席場に網羅して居られる。しかし諸君の團體のすべてが、交々代表者を送られて、當夜の大會の趣旨に添はれることは事實上不可能なことでありまするところから、甚だ潜越ながら、ここに協會幹部に於きまして豫め代表的な各工會、各團體方面の辯士を人選いたしまして、その範圍で弔意を表したいと思ひます。——そこで、劈頭、鐵道工會の周振和君を御紹介いたします。』

すこし大袈裟な身振りで、彼が手を揮つて舞臺の奧を指さすと、支那式な中庭の書き割りの柱から、顴骨の秀でた、眉毛の逞ましい痩せた男が、茶色の作業服のままごつごつと歩み出て、ぺこりと頭を聽衆にむかつて下げた。

司會者は、壇の傍の椅子へ卻くと、內側のポッケットから骨の纖細な扇を取り出して、ぞろりと開いた。

『諸君、廣東市民諸君！　中華民國は、正に滅びんとしつつある！　われわれは、今夜のこの溽暑に一堂に會することとなつた。われわれの怒りは、滿堂の熱暑よりも烈々として燃えてゐるのだ。この戯院の壁と窓とは、屋外の霖雨によつて血汗のやうに潤ほつてゐる。これが、石叫び、地動くの比喩でなくて何であらう。憎むべき帝國主義者の犠牲となつたわ

れわれ百六十九名の同胞の血が、涙が、今諸君の頭上に降り灑いでゐるのだ。窓を排して戸外に咽び泣く雨の聲を聽け。これが、われわれの親愛なる兄弟百六十九名の沈痛な涙でなくて何であらう。天もわれらと共に泣く。……』

『簡單、簡單！』一つの聲が、そのたどたどしい修辭の行列を横ぎつた。

『泣くのは過ぎた！　鬪爭だ！』もう一つの聲が、鋭どい鋲のやうに、あとの瞬間の沈默に打ち込まれた。

『……この日、われらは何をなすべきか？』

辯士は菱形の顏面を赧らめて、突然大きく咽喉を膨らませた。

『實際、何をなすべきか？』一隅の方にゐる學生らしい白の背廣が野次つた。辯士は巧みに模倣された自分の聲音を聞いてもう一度顏をまつ赤にした。戲院は總體にどつと笑ひ崩れた。司會者は、苦がい顏をして、扇を急激に働かせた。

『そんな拙い演説をやめることだ！』

『異議なし！』

『引込め！　引込め！』

しかし辯士は、執拗に演壇を守つた。

『諸君、兄弟！　今夜、私は悲痛な氣持でこの演壇の頭席をけがした者である。私の此處へ立つた目的は、諸君と共に、沙面からあの地獄の手先である軍艦を逐拂ふためだ！　われわれの同胞の血のまだ乾かないうちに、日、英、佛、米の帝國主義を、廣東から——香港から——中華民國から逐拂ふためだ！　この提議を持つて諸君に臨んでゐる私を、諸君はこの演壇からどこへ引摺り降ろそうといふのか！　私の演説は拙からう！　私はこの演説をするために工會の事務を取りながら隨分考へたのだ。しかし、私は今、その時、廣東市民諸君の一般に萬遍なく行亙つたやうな演説をしようと思つたことが非常にまちがつてゐたことを發見した。諸君は、もうむだなことを云はなくとも、餘計な美辭麗句を使はなくとも、

私と同じ發憤の氣持にまで熱しきつてゐるのを私は發見する。これから云はうとすることは、私の言葉ではない。諸君の言葉を私が云ふのだ。默つて聽いてくれ！――』

この一聯の言葉で、はじめて滿場は靜かになつた。鐵工會代表は、片手に顏の汗を拂つた。

『この日、われらは何をなすべきか――問題はここである。私は、沙面事件を、中華民國對世界資本主義國の問題にしたい。私は、沙面事件を、單なる廣東市民の一部と、沙面外國領事館だけの問題には留めたくないのだ。既に、政府では、英國總領事及び北京外交團への報告書を出してゐると聞く。しかし、私は、その報告書を、最後の通牒に書き改めたいのである。諸君、支那は正に滅亡せんとしつつある。孫中山先生、四十ケ年間の建國の苦衷が、今や無慘無慘と外國の砲艦政策によつて泥土に委せんとしつつあるのではないか！　起て、奮起せよ、中國國民！　あらゆる武器を執つて、われらは外國人を本土から驅逐しようぢやないか！……その武器の問題だ。われわれは完全に武裝されてゐない、われわれの軍官學校は創立未だ日が淺い、われわれには歐洲大戰によつて磨き立てられた資本主義國の陸海軍の誇るやうな鋭利な武器も軍隊もない！（ノオ、ノオの聲）最も簡便にして、最も手近かな、最もわれわれの使ひ慣れた武器を諸君は知つて居られるか？　――ストライキだ！　經濟鬪爭だ！　これがわれわれの最新の武器だ、鋭利なる劍だ、磨き上げられた大砲だ、大きい砲彈だ！　すでに、香港總督府の非常法令の發動によつて、敵は廣東に對して食糧と燃料と交通機關の經濟封鎖を斷行してゐる。すでに、われわれの同胞も、この廿四日午後から香港廣東の海員、ボーイ、アマ、苦力、仲仕等はこれに應戰して罷業を開始してゐる。諸君よ、このストライキを援助せよ。諸君よ、このストライキを支那中に擴大せよ。諸君、このストライキに世界の弱小民族及び全無產階級の戰線を引込め！　香港が廣東に勝つか、敗けるかの經濟鬪爭ではない――外國の資本主義的侵略が勝つか、中華民國の無產階級が勝利を占めるのかの問題である！　私は提議する、支那四億の民よ、この際蹶ひ起つて、眞に世界の無產階級運動を、支那の廣東を發祥地として出發せしめよ！

「それには、組織が必要である。われわれの武器を最も有效に使ふための組織が必要である。私は、今夜各界百有餘の工人、農民、學生及び軍人團體の集合を好機として、廣東港罷業大會の組織建設を提案する。二十四日からの香港廣東聯合罷工委員會は、その活動の範圍も狹いし、各罷業團體間に聯絡が取れてゐない怨がある。もつともつと大多數の職業の罷業參加を奬勵するとともに、ここに個々の組合及び團體のそれらを併合して、一つの策戰の下に動員される一大罷業大會の建設が——最も今日の必要な案件であり、緊急事である。外國の砲艦を卻ける、帝國主義を打倒する、孫中山先生の建國の大業たる國民革命を成就する——これは偏へに支那四億の無產大衆の團結力によるものであらねばならない。何によつて團結する? 經濟鬪爭を通じて! ……これが、實に、凄慘なる最後を遂げた五十幾人のわれらの同胞の死に酬ゆる唯一の弔慰の發表である!」

話の後半で聽衆をすつかり湊つた辯士は、悠々と手を振つて降壇した。

拍手。司會者の紹介。續いて飛び出したのは、廣州總商會代表の陳大良といふ紳士であつた。太枠の眼鏡に眉根を寄せた、唇の肉慾的な男で、俄かに生長した筍のやうに脂肪肥りがしてゐた。彼は、開口一番、總商會らしい、香港と廣東の金融、產業關係を說き、ゼネラル・ストライキを起すことの不利な點を擧げて、よろしく國際聯盟や全世界の新聞通信關係への聲明の必要を說き、各國に廣東から慘案報告の報告委員を送るようにと希望を述べたのち、これは陳大良一個人の意見である、但し總商會としては、市民諸君の輿論の向ふところ、或ひは水火を俱にすることも辭せないであらうが——と附加へた。

この太枠の眼鏡には一向に拍手が擧がらなかつた。又、當人もそれをあらかじめ豫期してゐたやうに、自分の演說の效果などを考へぬ風で、さつさと無愛想に壇を下つた。

次には女醫を代表して鳳金淑といふ婦人が立つた。

白い洋服に黒の腕章を帶びた彼女は、人間の肉體を檢査するための特別な眼鏡のやうな、强度の近眼鏡を掛けて、金鎖の腕時計で縛りつけた方の手を盛んに振り廻はした。粤調とでも云ふべきほど、この中年の廣東婦人の話は、朗詠に近い口調であつた。

「打倒帝國主義！」

「收回沙面！」

「不分階級、聯合一氣、共同奮鬪！」

などといふ應分の刺戟を香料のやうに振りかけた彼女の詩歌調は、聽衆に金時計の所在を明かに知らせた上で濟んだ。

市黨部代表は、要職にありながら、或ひはそのためにか、非道く昂奮した人間が登壇して、さんざんに日本と英國の侵略主義を論難して、政府に訓請して一戰を期してでも廣東市は悔いないだらう……とまで挑戰的に出た。

「——現在我國民智已進步、非三十年前之可比、萬不可取仇外之手段！」

殆ど自動的なアナンサーの役割にしか過ぎない自分を、どうにかして、より以上の重要さにまで押立てようとして、林森が、また一齣りの訓話を挾んだ頃から、會場の空氣がすこしづつ不穩さを加へて行つた。

「次は、廣東建築工人研究社の徳元福……」

を紹介しかかるや、左端の壁際に佇んでゐた三四人の學生達が、計畫的に、レリー・シイステムで、一人が聽衆を押のければ他が進み、その人間が前を開くと、あとからもう一人が出るといふ風にして、辯士の登壇するまでに、三人のうちの一人が舞臺へ登つて、何ごとをか司會者と談判しはじめた。

司會者が所の尖端を強く振ると、その學生はパナマ帽を手に絞りながら、舞臺のずつと前方へ進み出て、聽衆一般にアッピールをしはじめた。

『諸君、われわれは、今夜沙面の憎むべき外敵に對する民衆大會を開いてゐるのです。だから、徒らに官選辯士の、あらかじめ下相談をしたやうな演説に慊らぬ私達は、民衆それ自身の聲として、この演壇の即時解散を必要とするのであります。われわれ廣東の民衆は、直接われわれの意見を交換したいのである。保守的な政府部内の或る人達だけの意志に束縛された報告と、弔詞と、美辭麗句とに不滿な人達は、私と同じやうに、この演壇を諸君のものとすることに贊成して下さい。そして贊成の意志を、諸君の御起立によつて、一般投票の採決方法としたいのであります。――贊成の方は、束縛されざる廣東市民の言論の自由を主張して、御起立を願ひます！』

司會者は、まつ赧になつて、その青年に摑みかかつた。あとについてゐた二人の學生は、演説者と林森との仲を隔てて腕を井桁のやうに組合はせながら、ぎんぎん呶鳴り散らした。パナマ帽を絞つた青年は、高く兩手を振り擧げた。

萬雷のやうな聽衆の叫びが彼れの擧手に應じた。戲院總體で、不思議に床が盛り上がりでもしたかのやうに、殆どすべての聽衆が起立した。

『やれ、やれ！』

『官製司會者を叩き出せ！』

『戲院占領だ！』

『デマゴークを逐拂へ！』

『戰爭だ！　戰爭、戰爭！』

優等官廳の前列に一團となつてゐた女學生や女事務員達が、金切聲で應援した。その四五名は、申合せたやうに赤い半巾(ハンカチーフ)を振つて舞臺の學生達を使嗾(そその)かした。

『滿場一致！――演壇公開の議は決定されたものと認めます！』

學生はもう一度パナマ帽を高く差し上げた。林森は、不本意に檻に押籠められた動物のやうに、白い齒を見せて何やら高聲で罵つた。それを振り返つて見た學生は、

『――が、しかし、私達は、徒らに對外協會司宰の當夜の民衆大會を攪亂しに來たのではないのです。そこで、司會者林森先生を尊敬する意志から、私は林森先生に現在の椅子を保留されることを希望いたします。それと同時に、この演壇の自由解放を主張された諸君の意志をも尊重しまして、すべてのこれからの決議は司會者などといふものを必要とせずに、歐米で採用しますレフエレンダムの制度、一般投票の方法を採用したいと思ひます。卽ち、あらゆる決議事項に對しては、諸君の御起立によつて採決の方法とすること。――如何ですか、それに御異議がありませんか？　なければ、先づ第一回の採決方法として御起立を願ひます。』

聽衆の大部分は、スキッチを切つた紡錘機のやうに、一齊に起立した。

それを鎭撫するやうに兩手を振り降ろした學生は、つかづかと演壇へ昇つて、演說をはじめた。

『私は、國立廣東大學の學生であつて、周振和と云ひます。しかし、私は、私の大學の校長であるところの鄒魯先生等の發企された孫文主義學會には絕對に反對するものである。この孫文主義學會は、名を革命の祖師孫中山先生に藉りて、その實、國民革命政府の主義に弓を引くところの反動的學閥である。――私は知つてゐる。現在の廣東には、孫中山先生が民國十一年十一月、ロシアの越飛（ヨツフエ）氏が上海へ來て會見した時、兩國の間に默諾があつて、翌年十一月ソヴィエット政府代表として鮑羅廷（ボロージン）氏が廣東政府の最高顧問になつて以來、共產黨の國民黨組織に加入するについて、二つの明確な對立を示すところの理論と運動とが表はされたことを！　その一派は、孫中山先生晚年の依囑であつた聯俄共容主義を弊履の如く捨てて、國民黨運動を、殆ど陳炯明時代にまで逆轉せしめようとする新軍閥運動の化身である。この一派を代表する人に、當夜の司會者である林森先生をはじめ、張繼先生、謝持、戴天仇、鄒魯などの大人があることを斷乎として茲に暴露する

これら國民黨の保守派は、口に孫中山先生を賞めちぎりながら、實は孫中山先生を裏切るところの組織の逆轉に從事してゐるのである。更に、この保守的學閥及び政治家達に共鳴して、昨年一月、國民黨改組に反對した馮自由、馬君武等の州カンの國民黨同志倶樂部なるものを北京に設け、陰に段祺瑞派の外國資本主義の犬と手を握つてゐる。かういふ反對派の暗流に抗して、私達、青年國民黨員は、陳獨秀、譚平山諸先生の範にならつて、あくまでも鮑羅廷(ボロージン)顧問を擁立するものである。私達は、今日の列國資本主義の侵略によつて無慘な狀態に置かれた支那を救ふものは世界最初の無産階級聯邦であるソヴィエット・ロシアと聯結して、無産階級的闘爭をもつて外敵にあたらなければ、到底その實を擧げることの不可能なるを知つてゐる。諸君は、民國十一年五月中國共産黨第二次大會に於て決議されたる十一ヶ條の標榜を忘れはしないだらう。それには、中國の政治經濟の現狀勢に鑑みて、歴史進化の過程に依り、暫らくブルジョァ民主主義派と聯絡して、支那に封建制度の殘有物である軍閥を撲滅し、先づ完全なブルジョァ・デモクラシィの獲得をするをもつて現在の一段階とするといふ精神に基いて擧げられた諸項目がある。私達は、その十一ヶ條を、極力支持するものである！　私達は、今回の沙面慘殺事件にまでその十一ヶ條の全部を活用せんとするものである。――どうしてそれを活用するか？　私は先刻からの諸代表によつて具陳された經濟闘爭も、國際的アッピールも、これらに徒らに反對するものではないが、これらの手段は、むしろこの緊急時に於て第二義的な抗爭の方法であると觀るものである。先づ私達は、劈頭、明確な支那と列國間の國際關係に基いたところの政治闘爭の意義を摑まねばならない。――どういふ風に？　一言にしてこれを掩へば、列國資本主義の侵略に對する無産階級××の闘爭方法として、弱小諸國民の提携を促がすことであり、直ちに×××××を採用して××の×××××政體に抗爭することであり、内には軍閥を打倒し、支那の經濟的自主權を奪還することである。即ち一路驀進、××の實行にあるのみである！　既にわれわれの絶好の機會が、沙面に於ける暴虐不道なる帝國主義者によつて開鎖された。この契機を摑へずして、われわれは他にどんな好日和を俟つつもりであらうか！　然らば滿場の諸君、

兄弟姉妹諸君よ、起て！　起つて直ちに支那無産階級大衆の威力を、彼等の前に示そうではないか！　彼等に砲弾と機關銃とあらば、われらに組織と團結の力があり、プロタリアートの烈々たる×××精神がある！　何を惧れ、何を狐疑して、諸君は充實した諸君自身の偉大なる鬪爭力を發揮することを躊躇するのであるか！　もし諸君のうち、一人でも私と行動を伴にするほど××的な鬪士があらば、今宵、沙面に向つてわれわれだけの血心救國運動を起こそう。もし諸君のうち、一人でも、私と行動を伴にする人がなかつたとしても、私は敢然と身を挺して、彼等沙面に巣喰ふ惡鬼羅刹の輩と鬪ふであらう！　私は、これだけの意志を諸君の前に標示して、この上言葉の綾を弄ばうとは思はない！　私達の示威行動は、直ちにこの戯院の門前から、沙基馬路に出發する――私の降壇から、支那の無産階級運動の第一歩が始まる。同志よ、勇敢なる廣東市民諸君よ、われわれは一死をもつて國家の急務に當らう！』

周振和は、次第に昂奮狀態にはいつて行く自分の氣持を、一瞬間、何か冷めたいものに觸れさせることによつて鎭靜しようとするやうに、フラスコの水を注いで渇ききつた喉音を立てながら呑み乾した。その間も、この意外な青年鬪士は、きはめて客觀的な眸で聽衆の動搖を、ガラスの糸底から見廻すことを忘れなかつた。

彼れの言說が、頗る突飛な手段で公衆の前に展開されたとすれば、その結末も亦群集の意表に出たものであつた。降壇と共に、彼れは自分のパナマ帽へ丸るめてしまつて置いた赤い布を颯と群集の前にひろげて、二三度高く打振つた。パナマ帽の謎がはじめて衆人に解けた。

『進め！』

ひらりと舞臺から土間へ飛び降りた彼れは、他の學生達にあとを追はれながら、目の前に誰一人ゐないやうに、ぐんぐん聽衆の間を肩で押し分けながら衝き進んだ。

聽衆の大半は、魅せられたやうに、この勇敢な青年のあとを眼で追ひかけた。そのうちの一人が立ち、二人が立はじめ

ると、そこに急激に栓を開かれた水路のやうな紋流がうづまき、押揉まれる泡のやうな個人個人が、重なり合つてどつとそのあとを追ひ駈けるのであつた。

大きい團扇を揮ひながら、劇場の表門では、どよめき落ちて來る群衆を煽り立てるやうに指揮してゐる一人の勞働者が居つた。

無數の靴音が、甃石の上にとどろいて、朱塗の門柱の前には、幻影の列のやうな白い着物が閃めいた。巡警も軍人も、どこへ影を潜めたか、後光のやうにぼんやり虹を畫いた電燈の下には、陰影(かげ)つぽい、昂奮した顏が、われもわれも遲れてはならぬやうに、息を喘ませて、薄明から闇へ闇へと消え去るのであつた。それらは、まるで、潮流に押流されて來る、魚の群が、自分の尾や鰭を働かす間もなく、ひたむきに前方へ浮き漂よつて行くやうにしか見えなかつた。

闇の中で、一發のピストルの音がした。

『前進！　前進！』

學生周振和は、汗みづくになりながら、膝頭へ力を罩めて駈けてゐた。彼れの左手には、まつ赤な布が飜へり、右手にはぎらぎらするピストルが翳されてゐた。

橋がある。電柱がある。電燈がきらめく。長い壁のうちに、明るいビルディングがぱつと照り返へる。榕樹の重たるく垂れた枝から雨の雫が群集の上に滴る。廣ろい長堤の通りが、果物のやうな電燈をならべて、彼等の跫音を反響する。周振和は、誰か行手に人間の姿が見えると、ピストルを空へ放つた。

ものの五丁ほども駈けたと思ふ頃、突然先方に二臺の自動車が行列を遮ぎつてゐるのが見受けられた。行列は、ちよつと足を停めた。

周振和は、最後の一發のピストルを珠江の方へ向けて放つた。

『警戒しろ、われわれの行列を遮ぎるものは、民衆の敵だぞ！』
ピストルの合圖はさう警告する風であつた。背後から、自動車を見つけた群衆は、異口同音に、わーッといふ鯨波をつくつた。
しかし、自動車は動かなかつた。
いきなり自動車の横まで突進して來た周振和は、怒つた顔をして、
『退け！　退け！　邪魔をするな！』
と、息を喘ませながら呶鳴つた。
その周振和の鼻先へ、細長い銃孔が機械のシャフトのやうに素速く伸びて、武裝した一人の軍人が、大聲で誰何した。
『首謀者は誰か――？』
周振和は、おめずにピストルを振り翳した。
『私だ！　貴樣達は何だ？』
『貴樣か、この不穩な群集を煽動する奴は？　さア、手を擧げろ！』
一人の士官が自動車の中から、白い手套を嵌めた手で、何かを兵卒の一人へ命じた。
『ほかに、この學生と連類の者はないか？　云はぬと打殺ろすぞ？』
『俺だ！』
『同志周振和君の仲間は俺達だ！』
周の友人達が二三人、周を庇ふやうにしてヘッド・ライトの前へ進み出た。
『あたしもさうよ！』

一人の女學生が、まだ息を喘ませながら、赤い手巾を握りしめた手を出した。

『よし、その首謀者三人を、直ちに捕縛しろ！　これらは、共産黨員にちがひない！』

自動車の奥から、かういふ命令がガラス扉をへだてて傳はつた。

三人の兵卒が、銃で學生達の脊骨を剔ぐりながら、聲高に命令した。

『歩めッ！』

群集は、犇々とこの二臺の自動車を取圍んだ。さわざわと互に問ひ質す低聲から、誰かが一と聲、

『奪還せよ！』

と叫ぶと、彼等は、大風に毆ぐりつけられた茂みのやうに、一樣に身をかがめて、自動車を目かけて突進した。この時三發の鐵砲が、長堤の闇に、鼓膜を剔ぐるやうな反響を立てた。

『呀ッ！』

何かが、非常な勢ひで群集の包圍の中から飛び揚がつた。二三の人間は、スタートを切つた自動車の下敷になつて悲鳴を擧げた。

『諸君、前進！　前進…！』

群集は、最後の一臺の自動車のガラス扉から、周振和が、悲痛な蒼ざめた顔を出して、赤い布を振りながらから喉を絞られかけたやうに叫ぶのを聞いた。

團扇を持つた勞働者が叫んだ。

『諸君、あの自動車を追ひ駈けよう！』

暗黑のうちに、暫らく、又、群集の呻吟と跫音とが續いた…。

會の半分以上を失つた戲院では、穩健派と目される林森は完全に司會者の權利を恢復して、幾度もコップの水を呑みながら、數人の辯士を紹介した。

『共產主義幼稚病！』

出る辯士も出る辯士も、悉く周振和の一群を批評した。最後にこの平和主義的な殘留組は、左のやうな重要決議案を、林森の音頭の下に可決した。

第一、通電全世界。

第二、請政府嚴重抗議並組織調査隊。

第三、電致北京政府、速宣佈取銷不平等條約。

第四、要求革命政府回沙面。

第五、撤退沙面之外艦。

第六、請革命政府要求撫恤與懲兇。

第七、公祭難者。祭時各店戶一律樹白旗。上書『打倒帝國主義』『國民革命萬歲』等標語。

第八、函電全國組織全國對外協會。

第九、請政府下令茶樓劇院停止歌曲、以示哀悼。

第十、公祭死難者之時、市民應作更大規模之示威運動。

第十一、組演講團。

第十二、派員赴各國、聯絡全世界被壓迫民族爲一致之抗爭。

第十三、請政府整備海陸軍。

第十四、組織學生軍、工人軍、農民軍、以爲外交後盾。

十六

その翌日、沙面の英國總領事館の副領事官邸では、三人の支那人の訪問者をひそかに奥まつた室内へ通した。

「周振和。」

「鄭洪伯。」

「商鎭。」

受付の支那人巡警が、かう傳へると、ハムマーストン氏は、朝餐の珈琲を啜つた口元をナプキンで拭ひながら、奥の書齋へ大股に歩いて行つた。

「御早よう、副領事閣下！」

周振和は、疲れた顔を椅子から擧げて一禮した。

ほかの二人の學生も、椅子から體を起こして、ハムマーストン氏の白靴を恭しく禮拜した。三人とも今日はすつかり學生服を脱ぎ捨てて、船から上がつたばかりの勞働者らしい身裝をしてゐた。

ハムマーストン氏は、思ひ切り碧い瞳をぐりぐりと動かして、その一人一人へ、咎めるやうに皮肉な笑ひを浴びせた。しまひに、彼は、斜めな日光が、開かれた窓から、三人の長い影を絨緞の上へ投げてゐるのを、珍らしそうに眺めながら、

「頗る上手な仕事だつたな！」

と、鼻の尖端でせせら笑つた。

周振和は、吃りながら辯解した。

「……御存知でもありませうが、群集は税關前まではたしかに殺到したのです。……ですが、政府の方で早く氣がつかうとは毛頭思はなかつたので……あれも、つまりは——私の考では、また機が熟してゐないからだとしか思はれませんので。

……御疑ひでしたら、この二人に御訊ねになつてもよろしふございますが……群集は、たしかに五百人以上も私のあとへついて參りましたので。……』

戸外からは、すがすがしい熱帶地の果物の日ぼてりのする香が漂つて來て、どこかで饒舌に小鳥の囀ずる聲がした。

ハムマーストン氏は、眼の前に手巾で汗を拭いてゐる三人の青年よりも、果物の方に氣をとられてゐるらしいく、ポッケットから大型の葉卷を一本取り出すと、大きい動物的な鼻口をひろげて、肺臓いつぱいに朝の空氣を吸ひ込んだ。珠江の方から、朝の靜寂を破つて、若い運動家の心臓の鼓動のやうなモーター・ボートの音がした。ハムマーストン氏は、白綾チヨッキのポッケットから葉卷の口切を取り出した。

悠然と煙草の口を切ると、彼は圓卓の上のマッチを擦つて、滿足氣に紫の煙を鋭く吐いた。

『――それが、全部かね？ 私は考へるのだが支那の革命運動もよからうが、そのまへに君達青年が恥といふものを知ることだよ。それが肝心だ。解つたかね？ おそらく、君達三人は、あの約束の後金を請求しに來たことだらうね？――しかし、グレート・ブリテーン、いかほど我が國の政治家が耄碌してゐたとて、失敗したスパイには後金は打たないよ！もし強いて請求するとならば、次ぎの室には一小隊の陸戰隊が居るから、彼等の戰鬪力をも打算に入れてから請求したら良からう……。』

『しかし……。』

『これはしたくは無いのだ。君達、失禮ながら、われわれにとつては稍重大な手先となつてくれた君達ではあるが、本來は卑しむべき商人ぢあないか、――國家を賣る乞食よりも輕蔑すべき賣國奴ではないか！ その失敗した賣國奴が、昨夜の今日、再び何の面目があつて私の前に顔を出したのか？――あの小鳥と、涼しい朝風と、この香りの良いマニラとがなかつたなら、君達三人は、ここへ出頭するまへに、私の顔の永遠に見られぬやうな境遇になつて居つたかもしれんよ。考へると、かういふことの失敗は實に恐しいものだ。私の方としても、この上秘密が洩れることはきらいだからね。――だが

幸ひに、君達には君達自身の失敗によつて、再び黨へも、廣東へも、通りすがりの車夫にさへも顏向けが出來ないやうな狀態になつてゐる。それが當方の寛大さを許す唯一つの原因だよ！　解つたかね？——解つたら、その川に君達の船があるうちに退散したらどうか？　それとも、おつと待つた、周振和君、そのポッケットへやたら片手を突つ込みたがる習慣を君は持つてゐるね。それは止めた方がいいだらう——見られる通り、君達の今這入つて來た入口には、忠實な、君達スパイよりも忠實な、支那人の巡警君がピストルを用意してこの部屋を警戒してゐるのだよ！　すべては、最後の幕になると、ピストル——といふことは、英國の芝居でも、支那の新しい芝居でも、結局同じさ。」

　周振和は、額の筋をふくらまして、自分の草履穿きの足下を瞶めた。ほかの二人も、手にしたきたならしい鳥打をぎゆつと握りしめながら、脹らんだ眼元に非常な力を籠めて副領事を下から見上げた。

「……金は殆んどありません……どうすればいいんですか？　このまま、私共三人は、この官邸の玄關で自殺でもするのですか？……大人、どうぞさう云はないで、もう一度どこか別な場所へ私達を使つて下さい！　全然私達が、かういふ事情のもとにあるといふことは、誰しも知つてはゐないと思ひます！」

　ハムマーストン氏は擽ぐられた時のやうに鼻先で嗤つた。その鼻口からは機關車の停泊した時のやうな煙が流れ出る。

「蟲のいい話だ！——あの五百弗を、お前がたは、この泥溝のやうな珠江へでも投り込んだといふのか！　われわれ英國人は、正面から反對する革命黨はさほど苦にならない。しかし、自分で提案を賣りに來て、その前金をせしめた上に、その失敗の代金まで拂ふほど慈善家ではないよ！　去れ！——去れと云つたら、即刻ここを去れ！」

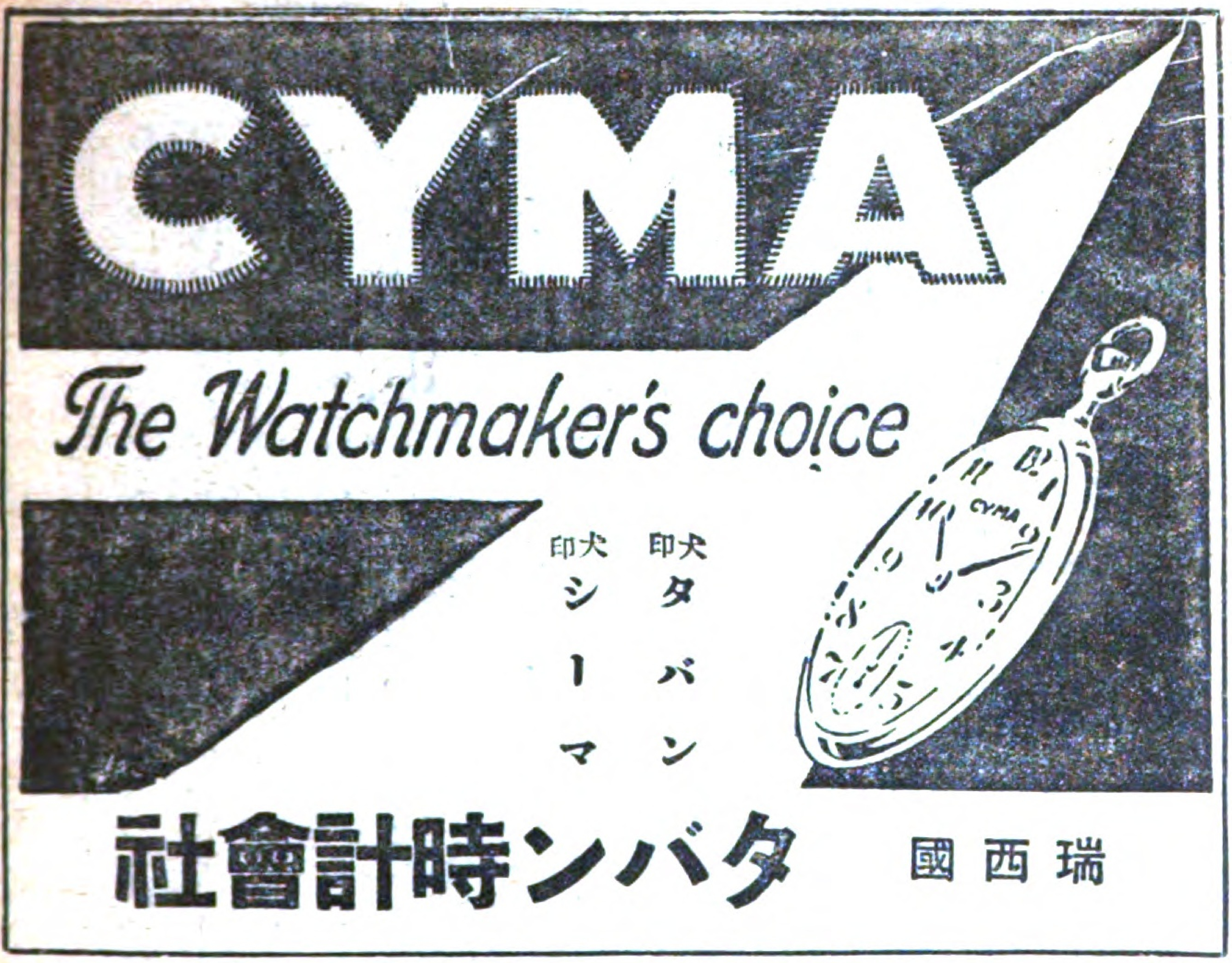
　いつの間にか、ハムマーストン氏の燻らしてゐた葉卷が、掌に隱れるほどの小型なピストルに代つてゐた。

　かうして、三人のスパイは、前後をピストルに護衞されながら、すごすごと副領事官邸を立ち去らねばならなかつた。

　彼等の去つたあとに、副領事ハムマーストン氏は、かう呟きながら、葉卷の葉の交つた唾を玄關先へ吐き捨てた。

「チンクの民衆運動も、これぢや仲々馬鹿にはならない。」

（つづく）



定價			
定價	一冊	六冊	十二冊
	八十錢	四圓八十錢	九圓六十錢
送料	參錢	送料共	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一册に付十六錢申受けます

△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和四年五月十八日印刷
昭和四年六月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　島中雄作

東京市牛込區榎町七番地
印刷人　竹内喜太郎

印刷所　日清印刷株式會社

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ内二〇六番
振替東京三四番
同長野三二〇五番

GHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.
Terms of Subscription : Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十二年一月廿九日第三種郵便物認可